

---

W・B・Arriance

栗ムコロッケ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

W・B・Arriance

### 【Nコード】

N6210G

### 【作者名】

栗ムコロツケ

### 【あらすじ】

ひよんなことから（？）賞金首となった魔導師と、それを追う正義の魔導師、裏社会の犯罪者たちのブラックファンタジー

10 / 11 R15指定と残酷描写あり設定を追加しました。

# 1 . l a u n c h a m o v e m e n t

——魔法——

それは

人々の生活をより豊かに、  
より快適なものとする

文明の礎。

そして、

その魔法を制御・管理、秩序あるモノとする者たちを

——魔導師—— という。

ムー大陸中部 観光国家マーフ 首都アートルー

白塗りの日干しレンガ造りの2、3階建ての家々が、まるで迷路の  
ように配置され、その路地は大人2、3人がかろうじて通れるほど  
の幅。

家と家の間には、無数のロープが張られ、洗濯物がアートルーのわ

ずかな空を覆い尽くし、そのすきまから射してくる陽光が、薄暗い路地をとどころ照らしている。

まっさらな家々の玄関の扉は青を基調とした、鮮やかな金の装飾が施され、味気ない町並みを彩っている。

「どけ!!」

アトリーの日常を切り裂く突然の怒号。

男が二人、窮屈な路地の人や物を押しのけ、駆けてゆく。

男たちの肩からは、大きく膨らんだ麻の袋が下がっていた。

—— launch a movement ( のろしをあ  
げろ ) ——

アトリー郊外。

ひとたび白い迷宮を抜けると、地平線まで砂漠が広がっている。

そこへ砂丘の陰にポツンと気球が一つ。

息を切らせた2人の男があわてて乗り込む。

「急げ!!」

「早く! 早くあがれ!!」

気球はふわりと宙を蹴った。

再び、アートルー市街地。

異国の風体の2人組が、何かを探すように、キョロキョロと歩いている。

ひとりはサラサラとした、背中まである金の髪に、とがった耳、黄緑の穏やかな目。

眉まである前髪は中央で分けられ、額から黒いバンダナをのぞかせている。

180ほどある筋肉の付いた体に、両刃の剣を背負い、程よく焼けた肌に、さわやかなスカイブルーのノースリーブチュニックがよく映え、ベージュのジーンズは足のたくましさを強調している。

そして、その体中には目新しい無数の細かい切り傷をつけていた。

もう一人はザンバラ切りのショート銀の髪に雪のような白い肌。160程度の小さな体に、ぶかぶかの膝まであるフード付きのコート、ダボダボのタンクトップ、ズボンにはカラスのように黒づくめ。コートについている先のとがったフードを目深にかぶり、その中から、とがった鼻と、血のように赤黒い釣り上った瞳をのぞかせている。

眉間にしわをよせ、腕組みをしながら、赤目は明らかにイラついていた。

「どこ行きやがった！」

それをあきれた様子で見ながら、金髪はうんざりしたように声をかけた。

「フィード！ 俺、君に聞かなきゃいけないことが山ほどあるんだ

けどー!!」

フィードと呼ばれた赤目は、金髪の問いかけにおかまになしにあたりをキョロキョロと見まわし、上空に何かを見つけると、ニヤリと不敵な笑みを浮かべた。

フィード「見る、エオル」

エオルと呼ばれた金髪は、フィードの視線の先に目をやった。

空には家々の高さより5、6メートル上をスイスイと泳いでいる気球。

#### 次の瞬間

フィードは超人的な跳躍力で、狭い路地の左右にそびえる建物の壁を左へ右へと蹴り、一瞬にして建物の屋上までたどり着くと、思い切りよく地面を蹴りあげた。

フィードの小柄な体はあっという間に、ふわりと気球の籠の中に消えていった。

#### ――数分前

気球は上空20メートル程度を少し強めの風に任せ、アトリー上空に差し掛かった。

ゼエゼエと息を切らし、2人の男は、持っていた麻袋を気球の中でひっくり返した。

中からは、高価そうな調度品や、不思議な形の道具やらが、ガラガラと飛び出した。

男たちはガラガラと笑うと、ようやく緊張の糸が解けたのか、会話



魔法技術が発達した現代。

人々は火を、水を、言語を、交通を、自在に手にすることができるようになった。

その背景には、魔法の力を体得し、それを世に還元する魔導師たちの活躍があった。

魔導師は、世界の根幹を担う、いわば、世界的な公務員。

世界に対して、絶大な権力を持ち、同時に世界からその言動を監視されるべき存在。

魔導師の犯罪など絶対にあってはならないもの――

現在から一日前。

パンゲア大陸　ヴァルハラ帝国北東部　グラブ・ダブ・ドリツプ魔導師協会管轄地区

――魔導師の総本山、魔導師協会が席を構える学術地区。

見渡す限り広大な森と山。

その中に開けた土地がぼつと点在する。

そのうちの一つに、木造の古めかしい洋館が数棟、整然と並んでいる土地がある。

魔導師養成学校――通称「アカデミー」

――つい昨日、俺とフィードは魔導師養成学校の卒業式を迎えた――  
アカデミー

式を終え、いつもにぎやかだった校舎は、祭りの後のようなさびげな静けさに満ちていた。

その中の教室の一室。

高さ3、4メートルはある上下スライド式の巨大な黒板。

黒板を囲み、棚田状に机が、仕切りを間に2つずつ、縦横5列ずつ並んでいる。

その窓際の席に一人、エオルは座っていた。

教室に明かりはつけていなかったが、正午過ぎの、やわらかな秋の陽光が、エオルをやさしく包んでいた。

しかし、エオルは頬杖をつき、厳しい顔をしていた。

机の上には、今日提出期限のはずの、白紙の進路申請書。

窓越しに聞こえてくる同期たちの別れを惜しむ声が、余計にエオルを焦らせた。

——ドアの開く音。

友人A「あー！　こんな所にいやがったか！　流水魔法学科首席どの！」

友人B「なーにしてんだ？」

同じ学科の2人の友人が「ようやく見つけた」、とエオルを囲むよう前と隣の席についた。

そしてエオルの手元の紙をのぞきこむ。

友人A「ん？　進（路）申（告）書？　まだ出してねーのかよ？」

友人B「決まってるのか？」

エオルは助けると言わんばかりに机に伏した。

エオル「そうなんだよ……」『トラップ対魔導師犯罪警察組織』とか、『セラム魔導師裁判所』とか……

いろいろインターンシップに行ってはみたものの……どーもしっくりこないんだよねえ……」

凍りつく友人二人。

エオル「？」

反応のない友人を見上げたたん

友人A「エオーーーーーーッ！！！！！！ お前エー

ーーーーーッ！！！！！！」

友人たちは突然怒り出した。

友人B「『トランプ』も『セイラム』も優秀学生しかインターンシップしてねーんだぞーっ！！」

一呼吸おき、ため息をつく、2人の友人はあきれたように席を立った。

友人A「さすがは首席様様だ！ 贅沢な悩みだねえ！」

その言葉に、さすがのエオルもムツとした。  
何か言い返そうとしたとき、

友人B「…俺、どっちも落ちた……」

がつくり肩を落とす友人。

その姿に、ウツと言いつ返そうとした言葉が詰まった。

そして、教室から去り際に悪友らしい別れの言葉。

「おまえなんか、一回進路で絶望を味わえー！」

悪態は付いても、白い歯をいっばいに手を振り、二人の友人は教室から姿を消した。

エオルはドアに向けて小さく手を振り返すと、また頬杖について難

しい顔を始めた。

秋の涼やかな風がエオルの頬をやさしくなでる。

エオル（——ん？ 風？）

窓なんか開けていたっけ？

エオルがすぐ横の窓を見上げようと顔をあげた瞬間

「よう！ ニート候補生！」

一人だと思っていた教室で、いきなり大声で声をかけられ、エオルは一瞬飛び上がった。

大きくハキハキしたいもののダミ声。

学科は違っただけ、なぜかいつも仲が良かった親友。

エオル「びび……びっくりした……おどかさないでよ！ フィード  
！！」

窓のへりに腰かけていたフィードは乱暴に机上の白紙を手にとると、ニヤニヤしながら小指を耳に突っ込んだ。

フィード「いや、今、紙がここにある時点でもうニートか」

エオル「……気配消して来るのやめてくれる？ いつもいつも！」

フィードは紙に目を落したまま言い返した。

フィード「この俺様んとこにアイサツすら来んヤツに何の配慮がいりやがる。」

エオルはハッとした。

こんないつものやりとりも、今日で終わりなのだ。

エオルは手をあごの前で組み、これまでの思い出にひたるように眼をとじ、語りだした。

エオル「そっぴや君とは、学科もゼミも違っただけ、」





魔法は魔導師が自らの体内から精製した「魔力」を対価として、悪魔から借りる力である。

悪魔の「力」は、この世界の元素「精霊」に働きかける。

それにより魔導師は、火や水、風などを自由に操り、文明の発展に貢献してきた。

同時に、この力は大変な危険を伴っている。

悪魔は気まぐれで、狡猾で、残酷で、自己中心的。

そして、人間よりはるかに高い知能をもっている。

それらは常に人の体に乗っ取り、人々が住む世界に害を及ぼそうとしている。

それを、魔導師という専門家が、魔力という対価と、特殊な訓練で得た力により、世界との均衡を図っている。

その魔導師が使う、魔導師による、魔導師のための専用道具——それが魔導師専用具である。

魔導師専用具は、特別な力をもった武器であったり、不思議な効果を持った薬や装飾品であったり、人と悪魔の均衡を保つ、という目的のもとに開発された、特殊な道具であり——

フィード「一般に出回らねえ分、余計に欲しがるバカどもがいやがる」

エオル「高値で売れるってワケね……でもさ、……コレ（密輸リスト）と俺たちの指名手配と……どういう関係が……？」

エオルはまさか、という顔でフィードを見た。

フィードは表情を変えずに淡々と答えた。

フィード「ソレとコレとは関係ないゾ」

後から小さく「まだ」と付け足したが、安堵するエオルの耳には届かなかった。

（というか、届かないように言った）

フィードは続けた。

フィード「犯人はこの町の議員だ」

エオル「この町の！？ だから昨日式が終わって、ソッコーでこの街に来たわけだ」

少しの沈黙。

エオル「で、なんで手配？ てかこの資料はいつたいどうやって手に入れたの？ しかも、なんで犯人なんて知ってるの！？」

イラッとして、フィードは舌打ちした。

フィード「チッ！ いちいち質問の多いやつだ」

エオル「当然の質問しかしてないよ！？」

エオル「第一、俺！ 社名が『W・B・A』ということしか聞いてないし！ 何の略なのこれ！？ それに指名手配……」

フィードはエオルの顔の前に人差し指を立て、ニヤリとした。

フィード「そのうちわかる。今は黙ってついてきやがれ」

アートルー市議会議員 タク二郎

密集したアートルー市街の端に寄り添うように建てられた館。周囲は高い塀に囲まれ、警備の人間が何人もうろついている。

そこで働く者たちの人数とその敷地の広大さは、タクニ議員の富と議会内での権力の強さを物語っていた。

その館の正門近くの路地——館の正門を見据えられるところ。強固な門と門番を見つめながら、エオルはため息をついた。エオル「グルツとまわって見たものの……警備はさすが議員邸って感じ。

どうする？ フィード。いつどこで取引があるかもわからないのに……そもそも、あそこに忍び込んでどうするつも、」  
フィード「俺様にまかせろ!!」

フィードは自信満々にズカズカと門に向かって歩いて行った。  
エオル(??) どうするつもりなんだろ? ”忍び込む”のに正門?)

当然、フィードのもとに門番が寄って来た。  
門番「おい! なんだお前! ここは観光するところではないぞ!」  
その様子を心配そうに見つめるエオル。

エオル(大丈夫かな……)  
次の瞬間

ドガーン!!

エオル(エーーーーー!?)  
突然の爆音。辺りは黒い煙につつまれた。

アトリーの乾いた風が煙を吹き、煙の隙間から、跡形もない正門と目をまわした門番、瓦礫と化した塀の上には服をはらうフィード。

フィードは早くしろと親指で(今は跡形もない)門の向こうを指した。

フィード「いくぞ」

敷地内に走り出す2人。

エオル「これ、なんかもう、こっちが犯罪の域に達してません!?

第一、魔法の私的使用は(魔導師)協会法に…」

フィード「お! あれきつと倉庫だぜ!」

遠くに見えるひとときわ高い建物を指し、フィードはそちらへ走る方向を切り替えた。

エオル「ちよつとおお!!!」

タクニ邸内は突然の轟音と、正門から立ちこめる黒煙でパニックに陥っていた。

書斎にいたタクニはイラついていた。

上等なスーツに包まれた大きな腹を揺らしながら、ポマードで塗り固められた髪を何度も撫で、部屋の端から端へ、行ったり来たりしていた。

タクニ「一体何が起きているのだ!!!」

強く机を叩いて、タクニの安否を確認しに来た使用人を怒鳴った。

使用人があわてて、声を上ずらせながら、報告した。

「…は! 侵入者が2名…爆発物を所持し、警備をかいくぐって倉庫の方角に向かっていている模様です。」

タクニ「倉庫だと!?!」

とたんにタクニの顔色が変わった。

タクニ(——まずい!!! あれを見られては!!!)

「とにかくそいつらを止める!!!」

「その必要はございません」

タクニの背後から、落ち着き払った声。

声の主はかぶっていたシルクハットをとり、タクニに恭しく頭をさげた。

「あそこには万が一の時の保険がかけてございます」

タクニ「フォビアリ！」

（――闇で違法取引のあっせんをして仲介料を取るブローカー……！）

フォビアリと呼ばれた燕尾服の男は、ゆっくりと下げていた頭をあげると、骨のようなまっ白い肌から黄色い歯をのぞかせた。

フォビアリ「死体が2つ転がるだけで、今夜の取引には影響ないかと」

疑いのまなざしで、タクニはフォビアリを見た。

タクニ「死体の処理は」

（それにしても不気味な男だ……）

再び、フォビアリは恭しくお辞儀した。

フォビアリ「当社はアフターフォローも万全でございますので」

シルクハットの下でフォビアリは黒い唇をにやりとつり上げた。

フォビアリ「ご安心を……」

タクニ邸内 倉庫前

5階建て分はある、周囲でもひとときのつばな建物。

そして重厚な鉄の扉。

こんなに巨大な扉、いったいどうやって開けるのだろうか？

そんな扉の前に、フィードとエオルは立っていた。

フィードは目を輝かせた。

フィード「でけー倉！」

エオルは背後を確認しながらフィードに問いかけた。

エオル「……追手が来ないね……じゃなくて！！これじゃこっちが犯罪者……」

ドガーン！！

フィードが何やら呪文を唱え、扉に向けて手をかざすと、爆発とともにベコベコになった鉄の扉が倉庫の奥に吹き飛んだ。

エオルは顔面蒼白になった。

エオル「何しちゃってんのー……！！？」

フィード「ホレ」

エオルに渡されたのは大きな麻袋。

エオル「？ 何コレ？」

エオルがフィードに目をやると、すでにフィードは倉庫の中に入り倉庫内に保管されているものをせっせとつめていた。

茫然と見つめるエオルに気づくとフィードは怒鳴った。

フィード「ボケつとすんな！！早くつめやがれ！！」

エオル（え？ え？ 何で？ さも当然のように??）

倉庫の中をよくよく見ると、薄暗くて分かりづらくはあるが、ずらりと並んだ棚にひとつひとつ丁寧に魔導師専用工具が並べられている。エオル「密売……の証拠品の押収……って思っていたんだよね……？」

フィード「ん？ 証拠品？」

フィードは何か考えるように中空を見つめた。  
フィード「まあ、そうっちゃそうだな」

その時だった。エオルは倉庫の奥の”何か”に気づいた。

エオル「フィード！ 後ろ！！」

フィードは反射的にエオルのいる位置——倉庫の入り口の手前に  
飛び込んだ。

一瞬遅れて

ドガッ

フィードが今までいた位置に巨大な岩のような”何か”が落ちてき  
た。

エオル「な……」

エオルは反射的に背中の中の剣に手をかけ、フィードは服に付いた土を  
払いながら、二人は目の前に倉庫の入り口をさえぎるように立つ、  
悪魔の形をした、倉庫の天井すれの巨大な石像を見上げた。

エオル「なんだ！？」

石像は大きな鼻の穴からフシューッと息を吐き、大きな瞳でフィ  
ードとエオルを見下した。

エオル「う……」

あまりの威圧感にたじろぐエオル。

フィード「……どーやら倉庫の守護者ガーディアンの石像獣ガーゴイルのようだな。手の込  
んだマネを……！」

コノヤロウとフィードは巨大なガーゴイルを睨みつけた。

エオル「とにかく！！」

エオルはあわてて走り出した。

エオル「逃げ……」

フィードは呪文を唱え、ガーゴイルに向け手をかざし、叫んだ。

フィード「グラン・デ小爆炎！！！」

たちまちフィードの手のひらから白い光弾が大砲の如く発射し、ガーゴイルの頭部に当たると爆発した。

しかし、煙の中からは傷一つないガーゴイルの顔。

フィード「ム……やはり小爆炎程度ではガーゴイルには無理か。めんどくせー」

エオル（フィードはこうなったら止まらない）

エオルは深いため息をつき、鞘から剣を引き抜いた。

エオル「……門や扉は壊せても、魔力の強いガーゴイルには厳しいワケか……もつと大きな爆炎魔法は？」

フィード「倉庫が吹っ飛ぶ」

エオル「なんて極端な……」

フィード「お前の水鉄砲じゃ、ウンともスンともいいそうもねえしな」

エオル「水でつぽ……！？ 流・水・魔・法！！！！ でも確かに水って石には相性よくないね……ってアレ？」

倉庫の入り口にそびえるガーゴイルに目をやる二人。

ガーゴイルはまるで本物の石像のように動きが止まってしまった。

エオル「？ 止まった？」

フィードはガーゴイルの足元を見た——倉庫の扉の内側ぎりぎり手前。

そしてエオルの尻を背後から押し出すように蹴りつけた。

エオル「うわっ!？」

エオルはつんのめりながら、なんとか転ばず持ちこたえた——倉庫の扉の内側で

エオル「フィード!!!いきなり何す」

ガン!!

ガーゴイルの巨大なこぶしがエオルの頭上に襲いかかった。

エオルはするどい反射神経で剣を盾にこらえる……が、あまりの重量に持ちこたえそうにない。

フィードがそれを見ながらぽんと手をたたいた。

フィード「そーだそーだ! 確か、ガーゴイルは”縄張り”に入ってきたやつを襲うんだった! コイツの縄張りはこの倉庫みたいだな」

エオルはブツブツと苦しそうな声で呪文を唱え、叫んだ。

エオル「イド・ローク爆水圧!!」

とたんに剣とガーゴイルの間から、強烈な勢いの水が吹き出し、その衝撃でガーゴイルは「ズン…」という鈍い音とともにあおむけにひっくり返った。

エオルはあわてて倉庫から出た。

そして第一声。

エオル「ちよっと————!!!!!! 人を何だと思ってるの! !!!!!」

フィードは黙って親指の先を唇の下にあて、少し考え込むと何事も

なかったかのようにエオルを見た。  
フィード「オイ、今のもう一回やれ」  
エオル「……そろそろ本当に怒るよ？」  
フィード「もう十分怒ってんじゃねーかよ」  
フィードはエオルを見、ニヤリとした。  
フィード「いい方法を思いついた」

アトリー市議会議員・タクニ——アトリー市内における有数の大富豪

その大富豪の邸宅は今や、門は跡形もなくけし飛ばされ、邸内からは煙がもくもくと立ち上がっている。

屋敷を遠巻きに見る大勢の野次馬の中に、目つきの違う男が二人。

泥棒A「まさに火事場」

泥棒B「ちよつくら稼がせてもらいますかねー！」

——タクニ邸 書斎

タクニ（商品は無事なのか！？）

倉庫からの数回にわたる轟音に、タクニは焦りと不安を感じていた。  
タクニ「フォビアリ！！ 本当に大丈夫なんだろうな！？」

書斎の窓から外を眺めていたフォビアリはシルクハットをかぶり、手袋をはめた。

フォビアリ「……様子がおかしいですね。どれ、見てまいりましょう。」

タクニ「待て！」

書斎を出る間際であつたフォビアリは呼び止めたタクニを振り返つ

た。

タクニ「私も行く」

タクニの不安はピークに達し、いてもたっても居られなかった。

エオル「……ねえ……わざわざ倉庫に入ってやる必要はない……？」

フィード「あのアングル」じゃうまく当たらん」

フィードは倉庫の奥で仰向けにひっくり返ったままのガーゴイルをあごで指した。

エオル「……フィードは……」

フィード「俺様はこの位置からじゃないと」

エオルはヤレヤレと大きなため息をつく、キツと倉庫の中を見据えた。

エオル「いくよ」

エオルはゆっくりと倉庫の中に足を踏み入れた。

とたんにガーゴイルはむくりと起き上がり、エオルめがけて拳を振り上げた。

ドガアン……！！

ガーゴイルの拳は倉庫の床をえぐった。そこにエオルの姿はなかった。

エオルは魔導師の超人的な跳躍力でガーゴイルの頭上に飛び、呪文を唱えながらガーゴイルに向け手をかざし、叫んだ。

エオル「爆水圧！！」  
イド・ローク

ガーゴイルは頭上から強力な水の圧力を受け、手足をついた。  
ガーゴイルの足先が床にめり込む。

やがて水が止み、ガーゴイルは自由になった腕を思い切り、頭上の  
エオルにのばした。

——多量の冷水をかぶり、  
——おもいきり体をのばす

フィードはこの瞬間を待つてましたとばかりに呪文を放った。

フィード「小爆炎！！」  
グラン・デ

閃光がガーゴイルの腹のど真ん中で爆発し、不意を突かれたガーゴ  
イルは倉庫の奥まで吹き飛んだ。

爆風にあおられたエオルは倉庫の天井を軽く蹴ると、ふわりとフィ  
ードの近くに着地した。

エオルの様子を見、フィードが怪訝そうな顔をした。

フィード「ん？ 何でお前そんなにびしょぬれなんだ？」

エオルは恨めしそうにフィードを見た。

エオル「あのねえ！ あんな距離で爆発なんてかまされたら、こっ  
ちまでやけどするでしょ！！」

爆発の瞬間、ガーゴイルの頭上にいたエオルはとつさに別の流水魔  
法で水のバリアをつくり、爆発の熱を受けないようにしていた。  
フィード「想定外の範囲外だったな」

エオル「あのねー！！」

オオオオオオ……！！

ガーゴイルが突然うめき声をあげ、その体はガラガラと崩れてゆく。  
エオル「熱疲労作戦！ うまくいったみたいだね！！」

熱疲労——冷たくなった石やガラスなどをいきなり高熱にさらすと、割れたり、崩れたりする現象。

エオル「まさか、石でできた生き物にまで通用するとは思わなかったなあ！」

やがてガーゴイルは、ただの瓦礫と化してしまった。

フィード「関心する暇があるなら、さっさと続きだ！」

エオル「え……」

倉庫に到着したタクニが目にしたのは、

水浸しの床

大きながれきの山

そしてスカスカの保管棚

タクニは呆然と両ひざをついた。

フォビアリはツカツカと倉庫に入ると濡れた床に触れ、奥の瓦礫を見た。

フォビアリ（わずかだが、ムラのある魔力……）

そうしてニヤリと黒い唇から黄色い歯をだし、どこへともなく語りかけた。

フォビアリ「君たち！ 若い魔導師だね」

倉庫の高い天井に、フォビアリの声だけが響いた。

タクニはフォビアリの余裕の持ちように腹をたて、つかみかかった。  
タクニ「フォビアリ！ 貴様！ 何を……！！」

「ご明答！」

タクニは突然天井から見知らぬ声が降り、ギクリとした。

タクニ「だ……誰だ！」

ガタン

倉庫の天井近く为天窓が開き、正午の陽光が薄暗い倉庫を照らした。  
逆光の中には、天窓のへりに腰かけた2人のシルエット。  
そしてその傍らには

タクニは頭が爆発せんばかりの剣幕で天窓の大きな袋のシルエットを指差した。

タクニ「貴様ら……！！ その大きな袋はなんだ……！！」

「おっさん目えいいな。

こりゃ、ここに放置してあつた魔導師専用具だ。

てめえらど素人が持つなんぞ、100万光年早エんだよ！」

「フィード…… 光年は年月じゃなくて距離……」

タクニ「な……」

フォビアリは子猫をなだめるような声で話しかけた。

フォビアリ「君たち、『対魔導師犯罪警察組織トランプ』の新人  
さんかな？ こんな勝手なことしたら……」

フォビアリの手元のステッキがわずかに動いた。

フォビアリ「叱られるんじゃあないのかな？」

フィード「おおっと待った!!」

フォビアリの不審な行動に気づいたフィードは右手をかざしてけん制した。

そしてシィと人差し指を口にあてた。

何やら外が騒がしい。

タクニの声が、何かを予期したためか上ずった。

タクニ「な、何だ!？」

フォビアリは倉庫の外に耳を傾けると、シルクハットをとり、天窓に向けて軽く会釈をした。

フォビアリ「私は犯罪組織『ブレーメン』のフォビアリと申します。以後、お見知りおきを」

エオル「は……犯罪組織!？」

エオルは初めて会う犯罪者の存在に驚異を感じた。

フィード「そうか」

フィードはニヤリと不敵な笑みを浮かべた。

フィード「俺様たちは……」

「いたぞ!」

倉庫の入り口には”共通の制服”を着た男たち。

その声に、入口に向け反応するエオルとタクニ。

エオルはその見覚えのある制服に反射的に顔面蒼白になった。

エオル「対魔導師犯罪警察組織トランプ」!!」

トランプの隊員たちが倉庫に入ってきた瞬間

ダンッ！！

フィードは思い切りよく、窓のへりを足で踏みつけた。

フィード「てめえら！　よく聞きやがれ！！」

その場の全員がフィードに顔を向けた。

フィード「今ここに！　魔導師犯罪組織『Wizard（魔導師）  
クンくらえ  
Buster・Arriance（同盟）』の発足を宣言する！！」

エオル「は……？」

エオルは一瞬自分の中の時間が止まった。

エオル「い、いま……なんて……！？」

フィードはフォビアリ——トランプの隊員たち——エオルに順に見  
ニヤリとすると「じゃあな！」とエオルの襟首とパンパンの麻袋を  
もって、天窓から外へ、カラスのように飛び去った。

トランプの隊員たちは一瞬どよめいたものの、すぐに取り直し、タ  
クニを囲み始めた。

タクニはとうとうとフォビアリのほうを振りかえった。

タクニ「フォビ……」

言いかけた声はむなく宙へ消えた。

タクニの視線の先はトランプの隊員たちの壁。

「アートルー市議会議員タクニ。魔道具密売法違反の容疑で拘束す  
る。アートルー議会にも了承済みだ。」

まるでタクニの横には誰もいなかったかのようであった。

タクニ「フォビアリ！ どこだフォビアリ！！」

トランプの隊員に両脇を抱えられながらも、タクニはそこにいたはずのパートナーを必死に探した。

「何を言ってるんだ？」

「共犯者がいたのか？」

「いや、こいつの周囲には”誰もいなかった”ぞ。」

「おおかた、魔道具の魔力にあてられたんだろ？」

「しかし」

「昨日、協会に声明文を送りつけてきただけでなく、まさか、我々の目の前で宣言までするとはな」

「追手はやつたんだろ？」

「ぬかりはない」

アートの白い家々をぴょんぴょんと飛び跳ねる黒カラス。

「……つと……」

……ちよつと……！

ちよつと……！！ フィード……！！」

エオルは自分の襟首をふん掴んでいるフィードの手を無理やり払った。

その勢いで、エオルはその建物に、フィードは隣の建物に、ズサリと砂煙を巻き上げて立ち止まった。

一瞬、息を整える。

少しの沈黙のあと、エオルは無理やり自分自身を落ち着かせるような声で口を開いた。

エオル「一体何考えてんだよ！ 犯罪組織って……！ しかもよりによって対魔導師犯罪警察組織（トランプ）の目の前で……！ もう冗談じゃ済まされないんだよ……！」

フィードは麻袋を再び肩にかけた。

フィード「話はあとだ。追手に追いつかれる」

まったく状況を話そうとしないフィードにエオルの抑えていた怒りが爆発した。

エオル「ちよつと……！ こっちは何も知らないまま、いきなりあんなこと宣言されて……！」

バシッ……！

乾いた音とともに、フィードの手元から麻袋が弾かれ、家々の隙間に落ちていった。

「イテ……」とフィードは手首を振り、エオルの背後を睨みつけた。

フィード「ホレ見る。追いつかれちゃったじゃねーか」

エオルが振り返ると、トランプの制服を来た男が4人。

エオル「ぎゃーっ……！」

エオルは慌ててフィードのいる建物に飛び移った。

トランプの追手たちはエオルがいた建物に飛び移ると、カチャカチャと武器を構え始めた。

同時にフィードも拳を構え、追手達を見据えたまま言った。

フィード「もうやるしかねーぞ」

フィードの後ろであたふたしていたエオルは頭をくしゃくしゃと掻きまわった。

エオル「あ………っ！ も………っ！ ……」

そして、しゅしゅと背中から剣を抜いた。

トランプの一人が口を開く。

トランプ・A「魔導師組織犯罪法の現行犯だ。”セイラム”に連行する」

セイラム、という言葉にエオルは背筋が凍った。

セイラムの名に臆さないフィードを見、トランプのもう一人が鼻で笑った。

トランプ・B「お前ら、セイラムってのがどんなところか、わかってねーな？」

――セイラム

罪を犯した魔導師に罰として呪いを執行する機関である。

セイラムで呪いを執行されることを「セイラムにかけられる」といい、セイラムにかけられた魔導師のほとんどはその呪いの重さから廃人となり、そうした魔導師たち専用の介護施設まである。

フィード「それがどーした。てめえら全員ぶっ倒して逃げりゃいいだけの話だろーが」

エオル「”だけの話”じゃない！！！！」

エオルは「何言ってるの！？」とフィードの肩を揺すった。

トランプ・A「やれやれ」

3人目4人目のトランプが呪文を唱え始めた。

トランプ・A「卒業したての新人ふぜいが、いきがんなよ！」

トランプの一人目と二人目が剣を手に飛びかかってきた。

エオル「うわ！」

エオルは持っていた剣で相手の剣を受け止めた。

ギリギリと刃物のこすれる音が響き、相手の剣が徐々にエオルに近づいてくる。

エオル（ま……まずい……競り負ける！！）

エオルはとつさに剣を払って後ろに飛び、間合いを取った——その瞬間

トランプ・C「かまいたち（ラス・イルト）！」

呪文を唱えていたトランプの一人がエオルに向け手をかざした。

エオル「ぐあつ……！！」

エオルの体の表面は鋭利な刃物で切り付けられたかのような傷が無数につき、そのまま建物の端にたたきつけられた。

トランプ・B「ほうら！ もう相方落ちた〜」

嬉々として、目の前で肩で息をするフィード見た。

フィード「ちきしょ、ハア、なんだ、こりや……」

フィードの体中の関節にネバネバした粘液がこびりついている。

呪文を唱えていたもう一人のトランプの魔法——

トランプ・D「レドン・ミスト重絡水、相手の動きを鈍らせる流水魔法だ」

フィードは額から汗を滴らせながら、笑みを浮かべた。

フィード「俺様の動きが鈍った割には、てめーの攻撃はあたんねーな」

トランプ・B「このやるー！」

繰り出された剣を、思い切り体を引っ張り、またもや間一髪ギリギリのところでフィードはそれを避けた。

トランプ・A「おっと！ チェックメイトだ」

フィードの背後にはエオルの相手をしていたトランプ隊員が剣をかざしている。

フィードは頭ではわかっていたが、魔法の効果で体がついてこない。

——避けられない。

ガキン・・・！！

ギリギリと金属がこすれる音。  
ぜえぜえと上下する肩。

細かい血の跡がついた金の髪。

エオルが間に入り、剣を受け止めていた。

エオルは渾身の力で相手を薙ぎ払った。

薙ぎ払われたトランプ隊員は思わず3、4歩後ろによるけた。

エオルは敵を見据えながら剣を構えなおし、口を開いた。

エオル「……ラス・イルト。まさか対モンスター用の風魔法を向けられるなんてね……」。

もう犯罪魔導師はモンスター扱いってことか<sup>おれら</sup>

フィードは顔をあげずに問う。

フィード「ならどうする」

エオルは血まみれの手で剣の柄をギリリと握りしめた。

エオル「さすがに状況も何もよくわかっていないのに、おとなしく捕まる気はないよ。」

あ・と・で！ どういうことか、ちゃんと説明してもらおうからね、フィード！」

フィードはニヤリと笑みを浮かべ、エオルを背に、構えた。

トランプ・A「あのとつさで、ラス・イルトから致命傷を避けたというのか！？」

—— いったいどうやって！？

トランプの4人は動揺を隠せないでいた。

エオル「今にわかるよ」

エオルはまっすぐトランプ隊員へ向かうと、剣を構え、走り出した。  
トランプ・Cが再び呪文を唱えた。

トランプ・C「ソニック・ブーム衝撃刃！」

魔法によっておこされた衝撃波を、エオルは迷いのない一閃——繰り出された衝撃波はそよ風となった。

トランプ・C（さっきと動きがかわった！！　それに、あの剣……まさか……）

トランプ・A「……まさか新人でそこまでレベルの高い魔法剣を使えるとはな……」

——魔法剣

魔法の効果を武器に移すことで、その魔法の凝縮したパワーを込めた攻撃を行うことができる技——

まずい！

4人の追手は焦りを感じ始めた。  
もともと、タクニ逮捕のためアトリーまで来て、たまたまこの“オイタ”が過ぎた新人に出くわし、とっさに捕まえに来たが、……相手の情報が少なすぎる。

トランプ・B「じゃあ、せめて、こっただけでも確保しないと！」  
フィードにトランプ隊員の剣が襲い掛かる。  
フィード「誰のこと言ってたんだ？」

ボゴウウ……！！

突然の轟音。同時にフィードの両手は炎につつまれた。  
フィードにまわりついていた粘液は一瞬にして煙となって消え失  
せた。

トランプ・B「なんだ!？」

見たことのない光景に、思わず後ずさる。

フィード「魔法”拳”!! ……俺様の卒業研究だ……!!」

そして、フィードは目の前のトランプ隊員に飛びかかった。

反射的にトランプ隊員は隣の建物に飛び移る。

炎につつまれたフィードの拳が、勢いあまって建物に触れた  
その瞬間  
――

ドガアアアン……!!

一瞬にして、建物の上半分は爆発とともに崩れ去った。

エオル「なんてことを!!」

フィードはトランプ隊員に聞こえないよう小声で語りかけた。

フィード「安心しろ、ここいらは空き家地帯だ」

エオル（もしかして……追手との交戦を予想して?）

トランプ・D「聞いたことがある。今年の新人で、魔法剣の要領で、  
自分の体に魔法を込める、危険な戦闘方法を開発し、協会からマ  
クされている危険人物がいると……!!」

フィード「チッ!はずしたか」

よっこらせ、とフィードは向き直る。

フィード「おらおら〜！ お前らが逃げ回るとどんどん町を破壊してっちゃうぞ〜！」

——ここは街中だ……

トランプの隊員たちはこれ以上被害を広げるわけにはいかなかった。  
トランプ・A「出直すぞ」

トランプの4人はタクニの屋敷の方面に戻っていった。

なにもないはずの空き家地帯での爆音、住民たちが何事かと集まってきた。

エオル「フィード、とりあえずこの場を離れよう」

フィード「あゝ！」

フィードがいきなり大声をあげたので、エオルは飛び上った。

エオル「な……なに……？」

フィード「せっかく奪った密輸品！ どこいきやがった!？」

エオル（うばった……!？）

フィードはどこへともなく駆け出した。

エオル「ちょっ……!! フィード！ そんなことよりも説明を……  
……ていうか、俺、傷だらけなんですけど!？」

「いやー！ まさか、空からお宝が降ってくるとはな！」

「屋敷もなんかパニックって入りやすかったしな！」

先刻、屋敷の騒ぎに乗じて盗みに入った火事場泥棒たちは、人気のないところへ逃げようと、空き家地帯に来ていたが、空から突然降ってきた『普通ではないお宝』に盛り上がった。

「しかもこれってアレだろ!？」

火事場泥棒たちは声をひそめた。

「例の議員が裏で荒稼ぎしてたって噂の……」

フィード「みつけたぞ……！ てめーらか！ このドロボーめ……！」

盗人二人は声のするほうを振りかえった。

何者かが鬼のような形相で自分たちめがけて走ってくる。

「まずい！ 屋敷の追手だ……！」

さらに、鬼の形相の追手は両手が燃え盛る炎に包まれている。

「しかも！ 魔導師よこしてきやがった……！ やべえ……！」

盗人たちは「殺される……！」と全速力で逃げ出した！

フィード「ムッ！ てめーらぁ……！ そいつをよこしやがれ……！」

エオル「フィード……！ 危ないから魔法拳は先にしまつて……！」

——こうして冒頭の展開になる。

アートリー郊外。

地平線の向こうまで砂の海が広がっている。

人目をさけるようにそそくさと町を出た。

もうアートリーの町も小指の爪ほどだ。

エオルはようやくこの時間がきた、と安堵のような、不安のような複雑な気持ちになった。

おそろおそろ、前を歩く、袋の中身を満足そうに眺めている黒づくめに話しかけた。

エオル「フィード」

フィードは袋の中身を眺めるのをやめ、前を向いたまま、立ち止まった。

エオル「一体、何のためにこんなことを？ 悪いけどこのまま君についていくことはできないよ」

フィードは遠くを眺めたまま返した。

フィード「なら、おとなしくセイラムにいくか？」

エオル「きちんと事情を話せば……」

——……事情？

フィードに訳も分からないまま連れまわされて、巻き込まれただけなんです。僕は悪くありません。すべて悪いのは……。

そう言っただけ許してもらったつもりなのか、俺は……友達をこのままにして……？

エオルは考えがまとまらず、押し黙ってしまった。

フィード「何のために……といったな？」

エオル「うん……」

エオルは息をのんだ。

フィード「それはまだ言えない。俺様はこのまま活動続ける」  
エオル「な……！」

あいかわらずというか、なんというか。  
昔からそうだ。

いつでもどこでもこいつは自己中。  
だが、いつもどこか憎めなかった。

なんだかんだいって、悪いことをするようなやつでもない。  
いつもいいかげんなふりをして、しっかり考えをもっている。

そんなやつだ。

何かはつきりとした理由があるはず。

それ以前に、なにより、友達だ。

その友達が、目の前で、これからは罪を犯していくと言っている。

エオル「なら俺は」

フィードはエオルを振り返った。

エオルもフィードの視線にこたえる。

エオル「君がこれ以上おかしなことをしないように、全力でとめていくよ」

フィードはニヤリとして、また歩き出した。

フィード「っしゃあ！！ W・B・アライランス！ 本格始動だ！！」

エオル「えっ……！？ ちょっ……それ、俺が君の仲間に入ったって言っていない！？ 違うからね！！ ていうか、理由はいつまで秘密なわけ！！」

フィードはくるりと振り返り、不敵な笑みを浮かべた。

フィード「 歴史が動くまで ”……” とでも言っておこうか。 」

何言っただコイツは……

エオルは一瞬あきたが、不思議なことに、疑いや疑念、怪しみといった感情は、湧いてこなかった。



## 1. launch a movement (後書き)

← 本家サイト

<http://usaginonegurade.choitoi.jpuku.com/>

解説などのページもありますので、よろしければ。

## 2・the rule for freedom

うす曇り。

霧のような雲が、砂の海の照り返しを和らげている。

ムー大陸中部 観光国家マーフ 首都アートルーより東に60km

見渡す限り一面砂、砂、砂。

その中にポツンと2つの人影。

一人はうなだれ、スカイブルーのノースリーブのシャツはすでに乾いている部分はなく、腰まである金の髪からは雪解けのように水が滴っている。

汗でずれるのか、背中に背負った剣を、歩きながら何度も背負い直している。

もう一人は、短い銀の髪をさらさらとなびかせ、砂漠のご真ん中だというのに、涼しい顔でヘタクソな鼻歌を歌いながら、軽やかな足取り。

膝まである真っ黒なロングコートを軽やかにたなびかせている。

「……………ねえ、フィード……………」

金髪が苦しそうに呼びかける。

フィードと呼ばれた銀髪は、くるりと後ろを振り返り、今にも溶けてしまいそうな相棒を見た。

フィード「なんだよエオル、情けねーな」

エオルと呼ばれた金髪は、恨めしそうにフィードを見た。

エオル「……………君のほうが見るからに絶対暑そうなのに、何でそんな元気なの……………」

フィードは意地悪な笑みを浮かべ、コートの中身を広げて見せた。  
ひんやりと涼しい風が、エオルの顔にかかる。

フィード「このコートは冷暖房完備なのだ」

エオル「なにそれー！ー！！！！ ちよっ！ 俺にも貸してー！！」

フィード「ざけんな！ 俺サマが暑いだろー！！」

エオル「俺はもう暑くて死にそうだよー！！」

360°、地平線の向こうまで砂の海。

徒歩での渡航は絶対不可能とされる

通称『across the null（何もない向こう）』

—— the rule for freedom（自由のおきて）——

「おら！ とつとと歩け！」

いらついた男の声。

十数頭のラクダの群れ。

ラクダ、といっても、こぶの部分は皿のように広がっている、長距離渡航用のラクダ”のような”生き物である。

その天盤状のこぶの上には、布で覆われたいくつのも四角い箱が積んである。

そのようなラクダが列をなし、一頭一頭、列が崩れないように縄で繋がれ、ゆつたりのつたり砂漠を歩いていた。

その列の最後尾にはひときわ大きなラクダがあり、そのひときわ大きい天盤の上には豪華なテントが建てられていた。

そのテントから聞こえてくる男のイラついた声に、先頭でラクダを操作していた者はびくりと慌て、ラクダたちをなんとか急かそうと

促した。

しかし、マイペースなラクダたちは言うことを聞かず、相変わらず自分たちのペースでのらりくらりと歩き続ける。

「ちよつと！ 動いてよ！」

先頭のラクダから降り、手綱を思い切り引つ張る。

だが、ラクダの列はびくともしない。

「動いてよ……お願い……」

テントから男が顔を出し、ラクダから降りてきた。

フィード「おい、水」

エオル「……もうないよ」

フィード「水筒のはな。お前の魔法はこういう時くれえしか役立たねーだろ」

エオル「……それ……人にものを頼む態度？」

フィード「なんで俺様ら、乗り物なしで砂漠越えとかしてんだよ」

エオル「……君、お尋ね者の自覚ある？ 乗り物なんて借りたら足がつくじゃない……」

フィード「あー……っ！ もー……っ！」

フィードは歩みを止め、横たわった。

ポフッとフィードのまわりに砂埃が巻き起こった。

フィード「ゲツフォツ！ ゴホ……！」

フィードは慌てて上体を起こした。

フィード「……」

フィードはムスリとしてアグラをかけた。

エオル（あ……一人で勝手にへそ曲げた。こりゃ、動かないな……）

エオルは短く溜息をつく、フィードの隣に立ち、呪文を唱えた。

エオル「フィル・ディク浄水盤……！」

とたんに、二人の目の前で、空中にグルグルと水が渦を巻き、それはやがて、円盤のように宙に浮いた水たまりを作った。

手のひらサイズの。

エオル「……」

フィード「……」

フィードに睨みつけられ、エオルは弁明した。

エオル「ここ……ちよつと水の精霊が少なすぎるよ……」

フィードはせきを切ったように手足をバタつかせ地団太踏み始めた。  
フィード「疲れたのだ乾いた汗かいた眠たい腹減ったー……」

「……」

エオル「俺はそれにプラスして焼けそうに暑いんだけどね……」

しばらくして、フィードも地団太に力尽き、辺りにどうしようもない沈黙が流れた。

エオル「……」

（やつぱり、行先ばれてでも乗り物借りるべきだったかも……  
…魔導師の身体能力ならなんとかなるかと思ったけど……

砂漠をなめてた……！！）

フィード「……」

突然、フィードはガバツと起き上がった。

エオル「あ……そっか、いつまでもこうしてるわけにもいかないしね……」

フィード「シッ！」

フィードは人差し指を口にあてた。

エオル「……？」

フィードの視線の先に目をやると、遠くにうつすら何かの列が見える。

『商隊だ！！』

二人は目を輝かせて、遠くにうつすら見えるだけの商隊めがけ、全速力で走りだした。

「暑い」

テントに風が通らなくなった。

「おい」

ひとつ前のラクダに乗せてある、布のかけられた四角い箱に話しかける。

しかし、反応はない。

男は脇にあったグラスを箱に投げつけた。

ガシャン

グラスは箱に当たり、砕けた。

その大きな音に、ラクダの列が動揺する。

男は先頭のラクダを操作する者を睨みつけた。

背の低い、フードを深々とかぶったラクダの操縦者はあわててラクダの列を正そうとする。

「……お前もこいつみたく『箱行き』になりたいのか！」

ラクダの操縦者は血の気が引いた。

男がさらに怒鳴りつけようとした瞬間

「おーい」

遠くからかすかに人の声。

声のした方角に目をやると、そこにはゴマ粒大の2つの人影。

（バカな……ここは砂漠のど真ん中だぞ！？　人がいるわけが……まさか！）

「おい！　列を止めろ！　魔物よけを巻いて、やり過ぎすぞ！」

フィード「お！　止まったぞ！　体力振り絞って叫んでみるもんだなあ！」

エオル「きみ……なんで叫ぶのに体力振り絞んなきゃいけなくなつたか、自覚ある？」

フィード「ちんたらすんなつ！　急ぐぞ！」

影がどんどんはつきりしてきた。どうやら人間のようである。

「なんだ、人間か」

「そのようですね」

「出せ」

「え！？　よろしいのですか？」

「この砂漠を生身でうろついてんだ。よほどわけありのバカか、隊が魔物事故にあったか……どのみち厄介だ。関わるな。」

フィード「ぬ！」

エオル「あ、あれ！？」

今まで止まってくれていたはずの商隊が再び進み始めた。

エオル「……よく考えたら、砂漠のど真ん中徒歩でうろついてるようなやつらなんて、怪しすぎるよね……現に俺達、お尋ね者だし」  
フィード「この俺様を素通りするなど許さん」

エオル「は!？」

フィードは歩みを進める商隊の方角に手をかざし、呪文を唱え始めた。

エオル「コラアアアーーーーー!!!!!!」

慌てて止めるエオル。

フィード「何すんだよ」

エオル「と、とにかく! お尋ね者だつてことは伏せて、自分たちの商隊が魔物に襲われて、命からがら逃げてきたつてことにして、助けてもらおう!」

フィード「……と、みせかけて、ハイジャックするワケだな」

エオル「ち・が・う!」

間

「おお! それはそれは! さぞ大変だったことでしょう!」

(チツ! この砂で……なんて足の速いやつらだ……ん?)

男はエオルの胸元に輝くバツチを見た。

「!!!! まさか……魔導師先生でいらっしやいましたか! そうとは知らず、とんだご無礼を……」

エオル「あ! ああ……いえそんな……お互い命がけの渡航ですし、警戒するのは仕方のないことです」

男は腰を低く、狭いところですが、とテントへ促した。

男は名をライエルといった。

商隊は再びゆっくりと動き始めた。

フィード「おー！ 快適快適！」

エオル「ちよっ！ フィード！ 寝っ転がらないの！ スペースとりすぎだよ！」

ライエル「ハハハ！ いいですよ。さぞお疲れのことでしょう」

エオル「……すみません……」

エオルは頬を赤らめた。

ライエル「しかし、魔導師先生がいらつしやる商隊が魔物にやられるなど……もしや”砂漠の悪魔”にやられましたかな？」

エオル「”砂漠の悪魔”……？ すみません、外国人なもので……有名な魔物なのでしょうか？」

ライエル「なんと！ 知らずに遭遇されたのに助かるとは……さすが魔導師先生だ！」

エオル（え……！？）

ライエル「ヤツはもう何年も前から賞金を賭けられているA5級……

……いや、確か最近S1級に格上げされた賞金首魔物ですよ。」

クリミナル・モンスター  
賞金首魔物

この世界には、町などの人が集まる場所から外れた場所に魔物と呼ばれる野生動物が生息している。

人間が一度町から出ると、たちまち魔物どもに自然界の弱肉強食の世界に引きずり込まれる。

人々も、それを災害や自然の摂理として受け入れ、対策し、共存してきた。

魔物もまた、自らの生命維持のため、時に視界に入った人間に襲いかかってくる「野生の動物」なのである。

しかし、その中で、凶暴さや、生まれ持った能力で、人間の世界にとりわけ害を及ぼす魔物が存在する。

それら駆除対象として、賞金を賭けられた魔物が賞金首魔物と呼ば

れる魔物である。

クリミナル・モンスター

賞金首魔物はレベルによってF・E・D・C・B・A・Sと格付けされ、さらにそれぞれ1から5級までレベル分けされている。

なお、A1級以上は通常の冒険者では太刀打ちできないレベルとされている。

エオル「エ……S1級！？ そんな魔物がいる砂漠を……失礼ですが、これだけの装備で渡っていらっしやるのですか？」

十数頭のラクダの列にはたくさんの積み荷のみ、護衛らしき者はなく、ラクダの操縦士とライエルだけ、砂漠でなくともかなり無謀な旅といえる。

ライエル「ああ！ そのご心配でしたら！ ヤツはこの砂漠の北側にしか出ないみたいなんですよ、それにこのルートの魔物は魔物よけでやり過ごせるレベルのものですから」

ライエルはテントの隅にあった袋を取り、大概の魔物が嫌う臭いを発する香草を丸めた「魔物よけ」を掌に転がして見せた。

フィード「……しょうきん……」

フィードがぼそりとつぶやいた。そのつぶやきに嫌な予感がし、エオルは小声で釘を刺した。

エオル「S・1級！ だからね！」

フィード「トランプのダイヤ軍（モンスター討伐専門）が出勤するランクはS3くらいかららしいぞ」

エオル「トランプと俺らじゃ総力が違うでしょ！」

エオルはフィードをじっと睨みつけた。

ライエル（……水と食料は町に着くまでギリギリだが、砂漠越えの用心棒と思えば……）

それにここで恩を売っておけば、魔導師連中とのパイプもできる！ この「親切」のおつりはでかすぎるぜ！

エオルはテントの隙間から見えるラクダの隊列を改めて眺めた。  
エオル（……それにしても、これだけの規模の商隊で護衛すらいな  
いなんて。おまけにライエルさんとラクダの操縦士2人だけって、  
もうちょつと危機感を持ったほうがいいような……）

「あの、この商隊は一体何を運んで……」

「親方！ 親方！」

外でラクダの操縦士が叫んでいる。

ライエル「なんだ！ 騒々しい！」

ライエルは勢いよくテントの幕を開けて外を見た。

ライエル「！！」

商隊を囲むように、ドーナツ型の流砂がぐるぐると流れている。砂  
の下で「何か」がうごめいているようだ。

フィードは眉根を寄せた。

フィード「なんだ？」

エオルは床に下ろしていた剣を背に掛けた。

エオル「……でかいね」

ライエルはペタンと尻をついた。

ライエル「な……な……」

ライエルはキツと2人の魔導師を睨みつけた。

ライエル「あんたら、奴を連れてきやがったな！！ なんてことし  
てくれたんだ！」

フィード「？ ああ！？」

エオルはピンときた。

エオル「え！？ まさかこいつが！？」

ライエルは外を指さした。

ライエル「この地面の”砂の川の前兆”！ 間違いない！ 砂漠の  
悪魔だ！ 食い残したあんたら追ってきたんだろ！？ エエ！？」

エオル（ううつ……変な嘘をついたばかりに変な疑いが……）

フィード「……魔物に襲われたとかいうのはウソだ」

ライエル「何！？」

エオル（げっ！ フィード！）

フィード「俺様たちはソイツに出くわしてもないし、この砂漠の北側は渡航前に注意を受けていたから通ってない」

エオル（え……？ 注意？ いつの間にそんな情報……）

乗り物なしを提案したのはエオルだったが、渡航ルートの指揮をとっていたのは紛れもなくフィードであった。

エオル（フィードのやつ……なんだかんだ言って……）

フィード「どっちかつつと、ためーらのほうに何かあんじゃねーの」

エオル「なんだかんだ言いすぎだー！ー！ー！」

ライエル「なんだと！？」

ライエルがフィードにくっつかろうとした途端、ラクダたちが動揺し、テントがグラグラと大きく揺れだした。

ライエルは再びテントの幕をあけ、声を張り上げた。

ライエル「おい！ ラクダを何とかしろ！」

ふと、ひとつ前のラクダに乗せている、先ほどグラスを投げつけた荷物が目に入った。その荷物からは赤い液体が滴り落ちていた。

ライエル（まさか！）

フィードがひょいとライエルの背後から、その視線の先に目をやる。  
フィード「ん？ 血……？」

エオル「えっ！ー！」

二人の魔導師はライエルに目を向けた。

ライエル「そうかそうか……」

ライエルはラクダの首を伝い、ひとつ前のラクダに飛び乗ると、その荷物を思い切り蹴とばした。

蹴飛ばされた荷物は、勢いよくラクダから落下し、その衝撃で荷物に掛けられていた布がめくれ上がった。

ライエル「てめえはどこまで足引つ張れば気が済むんだ！！ ああ  
っ！？」

転がった荷物の中身を見、エオルは驚愕した。

エオル「な……」

めくれた布からのぞいているのは大型犬用の鉄製の檻。その中には、  
フィード「女……？」

ボロボロの端切れにフェルトのようなぼさぼさの髪。17、18く  
らいの歳の、全身「洗われていない」ような真つ黒な女がぐったり  
としている。

檻はグルグルと渦巻く流砂の上に転がり、徐々に砂の中に飲み込ま  
れていく。

エオル「あんた何考えてんだ！！」

エオルはライエルに向って怒鳴りつけると、テントから飛び出し、  
檻のそばに着地した。

エオルは檻の開け口を探したが、すでに砂に埋まっていた。女はど  
こを見るでもなく、ぼーっとうつろな目で中空を見つめていた。

すでに胸から下は砂に飲み込まれ、女の口からは血があふれていた。

エオル（ケガ！？ 病気！？ とにかく、このままじゃマズイ……  
！！）

エオルは力いっぱい檻を引っ張りあげようと力を込めた。しかし、  
檻は流砂の吸引力にビクともしない。

砂は見る見るうちにエオルのすねあたりまでも飲み込んでいた。エ  
オルは檻の両端に両手をあて、呪文を唱えた。

エオル「爆水圧！！」  
イド・ローク

——タクニの屋敷でガーゴイルをなぎ倒した魔法。  
魔法は両手から出すと、威力が半分ずつのものが出る。

この至近距離からなら、半分の威力でも鉄製の檻くらいはへし  
曲げる——

しかし、エオルの両手からはスプレーのような細かい霧のような水  
が噴射し、檻との間に花火のように円を描いて跳ね返った。

エオル「う……」

（しまった……ここ、水の精霊が……）

ガンッ！

突然重たい音がした。衝撃で檻がグイと砂の中に押し込まれた。そ  
して、エオルの頭上がふと陰った。

フィード「な〜にチンタラやってんだ、バーカ」

器用に檻の格子の上に着地し、“あほか”という表情で、フィード  
がエオルを見下ろしていた。

エオル「フィード〜〜〜！ こっちのセリフだって！ 君の重みで  
余計埋まっていくスピードが……早くそこから降りて〜〜っ！！」

フィードは檻の上でしゃがみ込むと、呪文を唱え始めた。それに気  
づいたエオルは檻の格子のいくつかを腕で支えた。

フィード「低・小爆炎」  
ニアフ・グラン・デ

——魔法の頭に「ニアフ」という接頭語をつけると、その魔法の最  
少の力で魔法効果<sup>エフェクト</sup>を発生させることができる——

フィードは檻のいくつかの格子の両端を人差し指で素早く触れてい

った。すると、「バシュツ！」と乾いた音、小さな煙とともに、ガラガラと格子が外れた。

エオルは格子が檻の中に落ちないよう受け止めた。

「おら」

フィードが檻の中に手を差し伸べる。しかし、女の視線は変わらなかった。

それどころか、救出劇が始まってから今までぴくりともしなかった。まるで、遠い世界の物事をただ見ているだけかのように。

フィード「チツ！」

フィードは檻の端に両足を掛け、ブランと逆さづりに上半身を檻の中に入れた。もはや首まで埋まった女の後頭部に手を差し入れ、体を引き起こそうとする。

しかし、肩辺りまではするりと砂から出てくるが、そこから下は砂の圧力で、まるで何かに咬みつかれているかのようにびくともしない。

フィード「ぬっ！」

フィードは女を引き抜くために力を入れた。

ズズズ……

その分、檻が斜めに傾く。

エオル「うおっ！？」

エオルがあわてて倒れかけた檻を支えた。

フィード「しっかり支えとけよー！」

フィードは女の背中と脇の下に手を通し、力いっぱい持ち上げた。

フィード「ヌヌヌヌ……」

ゆっくりと、女の体が腰のあたりまで砂から出た。同時に、砂がフィードの顔まで迫ってくる。

フィード「おい！ 支えてろつつつてんだろ！」

エオル「ナナメるのはなんとかできるけど、下に埋まってくのはどうにもできないよ！」

すでにエオルも足の付け根まで砂に埋まっていた。

フィード「チツ！ 使えねーな」

フィードはコートの裏をこそそとあさり、手に取ったものをエオルにポイと投げた。

エオル「え…… 水筒！？」

フィード「非常用にとつといたやつだ。それでこないだのガーゴイルん時みたくして、女を守れ。今から（魔法を）ぶっ放すぞ」

エオル（ガーゴイルの時つて…… まさか、フィードの炎から自分を守るためにやったあれ！？）

「いくらなんでもこの至近距離じゃ……」

フィード「つべこべうつせー！ ……やるぞ！」

エオル「あわわ……」

二人はそれぞれ同時に呪文を唱え、同時に叫んだ。

エオル「低・爆水壁」  
ニアフ・タイダル・ボア  
グラン・デ

フィード「小爆炎！」

ズッアアアアアア……ン

轟音とともに高々と砂が舞い上がった。

驚いたラクダたちは慌てふためき、互いを列として繋ぐロープに引っ掛かったり、前後のラクダとぶつかったりして、ラクダの隊列はバラバラと倒れていった。

ライエル「ぐあっ！」

その衝撃でライエルはラクダから投げ出された。

流砂が止まった。

砂埃で悪くなつた視界が徐々に晴れていく。そこから現れた、爆発の起こつた場所は、巨大な楕円形をした砂のクレーターとなつていた。

そしてクレーターの中には、頭のでっぺんからつま先まで砂まみれのフィード、エオル、そして、エオルの腕の中でぐったりしている女。

フィード「ペツペツ！ ゲロ、砂が口と鼻に入った……」

エオル「うう……（魔法で濡れた体に）砂がひっついて気持ち悪い…… フィード！ 女の子は平気みたい！ 氣い失ってるっばいけど！」

フィード「エオル！」

フィードの視線の先は女の足元。

ぷつぷつと、横たわる女の手先からひざもとまでを、白い三角形のものが、円を描いて囲ってゆく。

エオル（なんだ！？）

エオルは地面を蹴りあげ、ジャンプしようとした。しかし、足が砂にとられ、バランスを失った。

エオル（やば……）

エオルはとっさに女の体をごろんと転がし、白い円から外した。間髪入れず、白い円はプツプツと盛り上がり、半分に合わさった。

ガチン！

そこには、まん丸の大人の頭ほどの瞳と、その瞳の向こうまで裂けた巨大な口の魚が、砂から顔をのぞかせていた。

魚はガチリと尖った白い歯をあげ、再びズブズブと砂の中へ頭をし

まっていった。

エオル「お……オイオイオイ……」

エオルの顔が青ざめた。

エオル「肉食砂魚<sup>レモラ</sup>……にしてはデカすぎない？」

——肉食砂魚<sup>レモラ</sup>

砂漠を泳ぐ、女性の手のひら程度のピラニアである。その硬いうろこは刃物を通さず、歯は鉄をも噛み砕く。肉食のため、人を襲うこともある。

フィード「突然変異ってヤツ？」

再び、商隊を囲むようにドーナツ型に砂が動き出した。

フィード「とりあえず、ラクダのあたりまで退くぞ」

エオル「うん！」

フィード「それはそうと」

フィードはエオルに抱えられた女を指した。

フィード「そいつの口に何かつめとけ！」

エオル（そっか！ レモラは血に反応するんだ）

エオルはジーンズのポケットからハンカチを取り出し、「ちよつとの間ごめんね」と血が溢れる女の口にそれをつめた。

エオルはそこでハタと気づき、前に行くフィードの小さい背中を見た。

エオル（あれ？ フィードのやつ、魔導師養成学校でモンスター学<sup>アカデミー</sup>

とか選択してたっけ？)

怯えて動きが取れないでいるラクダたち。ラクダの動揺でバラバラに落下した荷物。

エオル「ライエルさんは……」

フィード「なんか、あの辺でうずくまってるぞ」

フィードが顎で示した先には、一番大きなラクダの陰に、小さな小包を抱え、ライエルはうずくまっていた。

エオルはライエルの無事を確認し、ホッとした。そうして女を近く横たわっているラクダの上にそつと乗せ、流砂の方向に向きなおった。

フィード「さあーて！ どう料理してやろう！」

エオル「相手はS1級だよ！ 一筋縄じゃ……」

フィードはニヤリとした。

フィード「コイツがS1級なのは理由があんだよ」

エオル「普通のレモラより大きいんでしょ？」

フィード「そ！ それでいてコイツは、そのS1級じゃない」

エオルは眉をよせた。

エオル「どういうこと？」

フィード「ま、普通よりちょっとばかり成長しすぎたレモラを、普通に攻略すればいい」

エオルは疑いのまなざしをフィードに向けた。フィードは気にせず続けた。

フィード「つつーことで」

フィードはエオルの後ろに回った。

エオル「え？」

エオルは全然背中からものすごい力で押された。

フィード「お前オトリんなりやがれー！！」

エオル「ちよつとー！！ 何言ってるのー！！？」

フィード「……つーのは冗談で」

エオル「今、明らかに本気で押してたじゃないか……」

フィードは女のもとに歩いて行った。

エオル（え……！？ ちよつと、まさか……！）

「フィード……！」

フィードはやれやれとエオルを見た。

フィード「ちげーよアホ」

フィードは女の口の詰め物を「オラ、よこせ」と外した。

エオル「あ……そっか」

エオルは赤くなった。

フィード「いくぞ」

フィードはコートの内側から新たな水筒を取り出し、エオルに放った。

それをキャッチし、ふたをあけると、エオルは背中から剣を抜き、にやりとした。

エオル「いつでもどーぞ」

フィードは血に染まったハンカチを流砂の中に放り込んだ。

その瞬間、流砂が止まり、放り込まれたハンカチの周囲を囲むように、プツプツと白い歯が円形に並び始めた。

エオルが唱える呪文に反応し、水筒の水が剣に集まる。

ガチン！

白い円が半分に合わさり、”砂漠の悪魔”が頭を出した。

同時に

エオル「魔法剣・爆水圧！」  
イド・ロック

ズシャッ！

高々と、水滴と魚の頭が空を舞い、砂の中から、5、6メートルほどの巨大な魚体がプカリとあがった。

流砂は完全に止まった。

ずかずかと、フィードは”砂漠の悪魔”の胴体に近づいた。

フィード「おー！　なんだ、一匹だけか」

エオルが剣についた血液を振り払いながら怪訝そうにフィードの問いに反応した。

エオル「一匹だけ”って、何が？」

刃を通さぬはずの、まっすぐ一刀両断された強硬な鱗を指先でなぞり、視線を落したまま、フィードは答えた。

フィード「この砂漠の北部に、『砂の大河』つつわれるところがあるらしい」

エオル「砂の……『大河』？」

フィードは手の甲で、コンと魚体を叩いた。

フィード「これ級の突然変異レモラの”群れ”が、北部一帯をぐるぐる巡回してるらしい。

そんなときに起こる、今回みてーな流砂が、でかい川みて

ーになつてゐるから『砂の大河』」

エオル「へえ！（……なんで知つてゐるんだろ？）……その話からすると、もしかしてS1級の”砂漠の悪魔”って……」

フィード「そ！ その“群れ”の総称。クリミナルモンスターっつーよりも、この突然変異レモラの群れによるバイオハザードだな」

エオル「なるほどね〜！ そのうちの一匹が群れからはぐれて、たまたま血のおいをかぎつけて……ってとこだろうね！ 残念！

これじゃ賞金になんないね！」

フィードはエオルに向きなかつた。

フィード「寝言は寝て言え！」

エオル「え？」

フィードは魚体を指差した。

フィード「こんだけでけーレモラの鱗と歯なら売りもんになる。残さずとつとけよ！」

エオル「え〜〜！ 俺があ！？」

フィードはそそくさと麻袋を取り出した。

フィード「早く早く！」

エオル（うわ〜……すごい目エキラキラしてる……でも、よく考えたら）

自分たちの力でお金を稼ぐのって、これが初めてだ……

一面真っ白な空。

曇っていて、青い色ではないけれど、それでも、どんなに手を伸ばしても、届きそうもない。

空以外、何もない視界。次第に、自分がフワリと空に吸い込まれて

いくような不思議な感覚になってくる。

ラクダの上で、女は仰向けに、ぼーっとまっすぐを眺めていた。

「大丈夫かっ!？」

列の先頭でラクダを操縦していた男が、にゅっと覗き込んできた。

深々とかぶったフードから覗く醜い鱗。周囲の人間が恐れるそれを

女は見慣れていた。

「ラルル……ゴホッ!」

女は横向きになり、激しくせき込んだ。

ラルル「お……おい、ラプリー……」

ラプリー「ゴホッゴホゴホ……ケホッ……はあ……ふふ、あはは!」

ラプリーは笑いだした。

ラルル「ら……ラプリー?」

ラプリー「ラルル!」外”ってこんなに気持ちよかったんだ!」

ラルル「? と、とにかく手当てしよう!」

ラプリーから笑顔が消えた。

ラプリー「ラルル……私、もういいや」

ラプリーは空を見たまま疲れた笑顔を浮かべた。

ラルル「……ラプリー。あの人たちに助けてもらおう!」

ラプリー「無理よ」

ラルル「だって! あの人たち、魔導師だってよ!」

まるで世の中から背を向けるように、ラプリーの表情が陰しくなった。

ラプリー「温室でぬくぬく育てられて、社会に出てもチヤホヤされて……そもそも私たちの”客”って、そういう奴らなんだよ?

……なんで私たちは、そんな奴らに助けを請わなきゃ生きられないの……そんなの私はいや。だったらこのまま死んだほうが、よっぽど”自由”だわ」

ラルル「……ラプリー……」

『自由』——自分たちにとってはあまりに縁遠いものだと思ってい

たが、自分たちの手元に一つだけ「自由」があつたのだ。  
その唯一の「自由」を選ぼうとしているラプリーにラルはかける  
言葉が見つからなかった。

その時、後ろからだみ声が降ってきた。

フィード「ガキみてえな女だなあ」

声のほうに目をやると、先ほどの2人の魔導師がラプリーの乗っているラクダのそばに立っていた。ラプリーは睨みつけた。

ラプリー「ガキですって」

ムクリと起き上がるうとし、ラプリーは再び激しくせき込んだ。せきのたびに、細かく、赤いしぶきがラクダの背に飛び散った。

エオル「大丈夫!？」

エオルはラプリーを、フィードが見えるように抱え上げた。フィードはラクダの上に腰を落とし、ラプリーと目があつたのを確認すると口を開いた。

フィード「あのな、この世の中に”自由”なんてあるわけねえだろ」

ラプリー「は？」

フィード「人間、生まれおちて他人が一生懸命考えた名前もらつたら、そいつらや、未来にあうかも知れねー大事なやつらのために、生きられるとこまで生き抜かなきゃなんねー“義務”があんだよ」

エオル（あれ……？ この言葉……）

ラプリー「……そんなの……あんたらみたいに”地獄”をみたことないやつらの言い分よ！ わかつたように言わないで！」

エオル「……死ぬことは”自由”じゃない。生きるとは“自由”のルールだ、っていうこの人の”命の恩人”がこの人にあてた言葉だよ」

フィード「あー！ てめー！ せつかく俺様がいいこと言つたつぽかつたのに！」

エオル「そーゆーのは受け売りって言うの！ まあ、この子の言う

通りその言葉がどんな境遇のすべての人に当てはまるとは思わないけど、」

エオルはラプリーを見た。

エオル「……確かに、自分の“誇り”って、守るべき尊いものだと思うよ。でも、俺には君が意地を張っているようにしか見えないよ。」

一時の意地で、すべてを終わらせてしまふのは、とてももったいないことだと思うなあ」

ラプリー「……」

ラプリーは顔をしかめてそつぽを向いた。

フィード（イラッ）

「……んーなら、いっぺん死んじまえよ」

エオル「フィード！」

フィードは立ち上がろうとするエオルの頭を上から押さえつけた。

フィード「でもって、生まれ変わった気持ちで生きなおしてみろ！」

——生まれ変わる？　生きなおす？

ラプリーは大きく目を見開いた。

ライエル「勝手に”商品”に”自由”を与える夢を見せるなどというマネをされては困りますな、先生方」

ライエルがうずくまっていた場所から立ち上がり、フィードたちのほうへ、ゆっくりと近づいてきた。

ラプリー「ライエル……」

エオルはラプリーの体が硬くなるのを感じた。ライエルは思い切り

ラルの頬を殴りつけた。

エオル「な……」

ラルはラクダから吹き飛び、砂埃の中に倒れこんだ。ライエルは何事もなかったようにラプリーを見た。

ラプリーはライエルと目が合った瞬間、体が自分のものでなくなつたかのように動かなくなるのを感じた。

フィードがラクダの上からかがみこんでラプリーとの視線を遮るようにライエルの顔を覗き込んだ。

フィード「こいつらが商品って、お前何屋？」

ライエルはニヤリとして答えた。

ライエル「見世物小屋経営ですよ」

エオル「み……見世物小屋!？」

ライエル「そう身構えないでくださいよ。人々の好奇心という欲望を満たす、エンターテイメントです。こいつらはその魅力的な商品なんですよ」

エオル「商品って……普通の子じゃないですか!」

ライエル「それが普通じゃないんですよ。この大陸ではね」

ライエルはラプリーに視線を向けた。ラプリーは悔しそうに唇をかみしめ、視線をそらした。

次の瞬間、エオルは腕の中の少女の体に変形していくのを見た。体毛が生え、骨格が変わり、爪が伸び、長い尻尾が生え、ミルクテイーのような淡い茶色の猫に姿を変えた。

猫はだるそうにエオルの膝の上に横たわった。フィードは横たわる猫を覗き込み、眉根を寄せた。

フィード「なんだ。普通に”獣人”ってだけじゃねーかよ。それとも、茶色の猫の獣人ってのは珍しいとかか？」

ライエル「このムー大陸では、獣人の入国を規制している国がほとんどなんですよ」

フィードはぱかんとライエルを見上げた。

フィード「規制? なんて?」

エオル「……たぶん大陸全体に”獣人差別問題”が色濃く残ってるんだよ」

エオルは悔しそうに俯いた。フィードはきょとんとエオルを見た。

フィード「差別？」

エオル（え……！？ この人知らないの！？）

ライカンスロープ

「……昔から、”獣人病”の原因は獣人にあるってされてて、いろんな差別をされてきたんだよ。」

近年、獣人病の原因が徐々に解明されてきて、とりあえず獣人が原因ではないことはわかったんだけど……」

ライエル「人の心に長年植えつけられてきたものは、そう簡単には変えられないものなんですよ。原因ではないことが証明されて、すぐに入国規制を解いた国など、ほとんどなかった。」

近年、徐々に規制を解く国は増えてきたが、国内では相変わらず差別は根付いたまま。しかしですね。」

ライエルは唇の両端を釣り上げた。

ライエル「入国規制をかけている多くの国では、”それ”は、逆に珍しいものであり、”怖いもの見たさ”という、金を持て余している連中の欲望を満たす”商品”となりうるのです。」

獣人なら”人化”状態でしたら獣人とはバレませんからね」

フィードはフムと顎に手を当てた。

フィード「……なら、金払うから、コイツを俺様らに売れ」

エオル「フィード！ それは人身売買だよ！」

ライエルは笑った。

ライエル「それは違いますよ。魔導師先生。これは商品であって、もはや”人身”ではありません」

エオル「そういうのを人身売買っていうんですよ！」

エオルはライエルを睨みつけた。

エオル「国際犯罪ですよ」

ライエルはフフと笑うと、ラルを叩き起こし、商隊を立て直し始

めた。

エオルはその様子を眺めながら、膝の上で苦しそうに横たわる猫の頭を優しくなでた。

エオル「……フィード」

フィードは横たわるラクダの上で胡座をかきながらライエルを眺めていた。

エオル「これが”犯罪”だよ。自分の利益のために誰かを傷つけ、傷つけられた人は、普通なら必要のない感情を持たざるをえなくなる。その連鎖」

エオルはフィードの横顔を見た。

エオル「君は……君がやろうとしていることは、そういうことなんだよ！ それでも、このまま続けていくつもりなの？！ この……」

フィード「『W・B・アライランス』」

フィードはライエルを眺めたまま答えた。

エオル「……そう、それ」

ラクダが先頭から順に立ち上がり始めた。

フィードはエオルの膝の上の猫を肩に乗せると、乗っていたラクダからエオルとは逆へ下りた。

二人の間のラクダが立ち上がった。

フィード「……もしかしたら、もっと他にいい方法があったのかも知らないな。」

フィードは誰に、ともなくつぶやいた。

フィード「けどな」

フィードはやりと、エオルに視線を向けた。

フィード「犯罪<sup>ッレ</sup>によって、救われるものつてのも、あるんだぜ」

エオル「！！　なに言っただよ！　そんなのあるわけ……」

ライエルが小包を小脇に抱え、走ってやってきた。

ライエル「さあさあ魔導師先生方！　お待たせしました。どうぞテントの中へ！」

先刻の、自分が攻撃対象となっていた時とは打って変わったピリピリとした空気をライエルは感じ取った。

ライエルの「どうかなさいましたか」という言葉を背に、エオルは無言のまま、最後尾のラクダの上のテントに戻った。

ライエル「エオル先生、お怪我でもされたのですか」

フィードはくりつとライエルの方を向いた。

フィード「おい！　それよか、腹減った！」

商隊はゆっくりと進み始めた。

テントの外を眺めるエオル。ムシャムシャと食料をむさぼるフィード。小包を膝に乗せ、ただどうしたものかとあれこれ考えをめぐらすライエル。

フィードの、ものを食べ散らかす音のみ、テントに響いた。

しばらくして、ハタとフィードの手が止まった。ライエルは助かったとばかりにフィードを見た。

フィード「そういやお前、さっきから抱えてるそれ、なに？」

と、ライエルの膝の上の小包をあごで指した。

ライエル「これですか！　実は、特別なお客様にお売りしようと思

つていたものなんですよ」

ライエルはいそいそと包みにかけてある布をはいだ。興味津津に覗き込んだフィードの顔色が変わった。

白いハトの翼。体長50センチほどの豚の胴体。2本から4本と不揃いな指。胴体に頭部はなく、首があるはずの部分には人間の口。それは、小さな檻の中でギヤーギヤーと暴れまわっていた。

——道理で……こいつで魔物との遭遇率を下げてたのか——

フィード「オイ、てめー、コレ……」

ライエルの目が輝いた。

ライエル「さすが魔導師先生だ！説明せずとも”これ”が何か、お分かりになる」

エオルはフィードの神妙な声色に、反射的にフィードとライエルと、そしてライエルの膝の上のものを見た。

エオルはたちまち、ふざけるな、という怒りがこみ上げ、思わずライエルに殴りかかろうとした。しかし、その怒りは次の瞬間驚きに変わった。

フィードが、ライエルの胸ぐらをつかみ、睨みつけていたのだ。

ライエル「な、何をする！魔導師の一般人への暴力こそ国際犯罪だぞ！」

フィードはニヤリとした。

フィード「なら、お前のやってることは“暴力”じゃねーのか」

ライエル「何……」

フィード「”天使”まで商品にするなんて、この世への暴力以外の何でもねー！この世で生きること（じゆう）の最低のルール違反だ！」

——天使

死んだ生き物の魂を喰らい、新たな魂として妊婦に宿る、この世界の輪廻転生の齒車。

ライエル「ほほ……意外と生真面目ですね」

フィード「そーゆー次元じゃねーって、わかんねーのかよ！」

ライエル「わかっていますよ。天使一匹が新たな命ひとつ分ということでしょう？」

ライエルは口角を釣り上げた。

ライエル「しかし、私も商売ですから。この天使を逃がしたかったら、どうぞ私からお買い上げください」

エオルが立ち上がった。

ライエル「おっと！まさかこの商品も”犯罪だ”とわめきちらすおつもりですか？」

エオルは”何を言っているんだ”と顔をしかめた。

ライエル「天使を商売に使ってはいけない、などという法律など、少なくともこの国にはございませんよ」

エオル「……法律にする以前の話だからですよ」

ライエルはふざけたように両手を上げ、子どもをたしなめるような口調で続けた。

ライエル「あなたがたは私を殴れない。だが、この天使を逃がしたい。その猫と同じことですよ。……つまりどうするのが最も平和的で大人な解決法か、おわかりか？」

——なぜこんな人間がいるんだ！？

エオルはこの男に憤る以前に、なぜだが悔しく、恥ずかしく、そして悲しくなった。

フィード「いいこと教えてやるよ」

エオル「？」

ライエル「？」

フィードは不敵な笑みをうかべ、さらにライエルの胸ぐらを締め上げた。ライエルは苦しそうにうめいた。

フィード「最近話題の魔導師犯罪組織『W・B・アライランス』つてのは、俺様たちのことなんだぜ」

アートルーから東に約150キロ。地方都市、カーシー。国境付近の町であるため、自国と隣国の様々な交易品が売り買いされる、町の3割がバザールの町。

そのカーシーの町に、人目を避けるように一つの商隊が到着した。

フィード「おー！　なんか、久しぶりのシャバだな」

エオル「変なこと言わないでくれる」

フィードはテントから出していた顔を引っ込め、テントの隅に目をやった。

フィード「おい、これでお前、自由だぞ。　あとは病院行くなり、どっかに保護してもらうなり、好きにしろ」

人の姿に戻り、テントの柱にもたれかかっていたラプリーは大きなネコ目をさらに大きく見開いた。

ラプリー「え……」

エオル「少ないけど……再出発のお祝いで」

エオルはラプリーの前に数枚、紙幣を置いた。

ラプリー「ほ……ほんとにわたし……」

フィード「じゃ、俺様らはここで寄るところあつから」

エオル（どこ！？）

フィードはポケットに両手をつ込み、ひょいとテントを飛び降りた。エオルはやれやれ、と腰を上げた。

エオル「じゃあね」

ラプリー「まって！」

ラプリーはエオルの裾をつかんだ。

エオルはもう一度しゃがみ、ニコリとした。

エオル「ん？」

ラプリー「私ね、親に売られてここにいたの！」

エオルは気の毒そうな顔をした。

エオル「そう……」

ラプリー「でもね、うち、弟が病気で、家にはお金もなくて、私は売られることで、大切な家族を救うことができた」

エオル「救う……？」

ラプリー「エオルさん、残念なことだけど、この世界には犯罪によって……いえ、犯罪でしか救うことができない命もあるの。フィードさんも、そういうことを言いたかったんじゃないかな」

エオル「……」

——犯罪によって命を救う？

家や弟は救えても、自分の命はなくなりかけたじゃないか。それは本当に救いつていうのか？

……そりゃあ、もしかすると俺には見えていない何かが、フィードや彼女には見えているのかもしれないけど……

エオル「ごめん、やっぱり俺には理解できないけど、君やフィードをわかってることができる日が来るように、努めるよ」

エオルはありがとう、とラプリーに微笑み、テントを出た。

テントの中が、初めて静かになった。ラプリーは恐る恐る横目でテントの端を見た。

ライエルは顔をぶつくりと腫らし、猿ぐつわと縄でぐるぐる巻きにされ、ラプリーを睨みつけていた。

ラプリーは膝元に置いてある金をふん掴み、テントを飛び出した。その足で、ラクダの列の先頭に走った。

ラプリー「ラル！」

ラクダにまたがって呆けていたラルはラプリーを振り向いた。

ラプリー「ラル！ あなたも一緒に逃げましょう！」

ラル「……」

ラルはフードを目深にかぶり直し、袖をさすると、微笑んだ。

ラル「ぼくは行かない」

ラプリーは一瞬眉を寄せたが、すぐに微笑み返した。

ラプリー「そう」

ラル「それと、」

ラルは不安そうな顔をした。

ラル「あの人たちに、今回のことを必ず、商隊強盗として、届けられて頼まれた」

ラプリー「え！？ なんで!？」

ラル「さあ……」

ラプリー「……わかったわ。ニュースになっても、ラルがうつそついたなんて思わない！」

ラル「ありがとう、元気でね」

ラプリー「ラルも」

その日は、カーシーの町に死人が出ていないのに天使が出た、という目撃情報が絶えなかった。



### 3・a f a t a f u l e n c o u n t e r

雲ひとつない晴天

午前11時過ぎ

ムー大陸中部 観光国家マーフ 東部の町カーシー

さんさんと照りつける太陽。日干しレンガ造りの低い家々。

メインストリートはバザールと一体で、端が見えないほど店のテントが軒を連ねている。

今日も観光客や日用品を買いにきた住人で、町はごった返していた。

そんなメインストリートから1歩2歩と細かい路地に入ったその先に、ひっそりとその店はあった。

—— a f a t a f u l e n c o u n t e r (導かれた出会い) ——

「ここだ」

店の前には、

暑いのに全身黒づくめで、小さな体には不釣り合いな大きいコート  
のフードを目深にかぶった銀髪赤目と

さわやかなスカイブルーのノースリーブに、大剣を背負い、背中ま  
である美しい金髪と黄緑の瞳の長身

「ねえ、フィード、何なの？ ここ」

金髪がいぶかしげにフィードと呼びかけた銀髪を見やる。

目の前にはただの古めかしい扉。しかもやたらと落書きだのポスターを何枚も貼っては剥がされの跡だので埋め尽くされている。看板らしきものは、ない。

フィードは左手にバザールで買った大量のクレープを抱え、右手でせわしなく口に運んでいたが、金髪の問いかけに見向きもせず無表情で答えた。

「ハンターズ」の”裏ギルド”だ」

「え？」

一瞬、金髪は自分の耳を疑った。

「いくぞ、エオル」

——ハンターズギルド（通称：ハンターズ）

世界中の冒険者を管理・統制し、冒険者の安否確認、情報提供、仕事の斡旋などを行う、世界的な冒険者支援共同組合である。

その「裏」

つまり、「ハンターズの裏ギルド」とは、正式な冒険者でなく、お尋ね者や、不認可の冒険者などが情報共有をするための、裏社会のハンターズギルドである。

フィードは薄汚れた扉を「ガン！」と乱暴に蹴った。すると、扉の小さな物見窓から男が目を出し、フィードとエオルを凝視した。

「トムルニエ？」

フィードがすかさず答える。

「ミナスクルオタ」

男は物見窓をとじ、ガチャリと扉を開き、「入れ」と無愛想に促した。扉の先は下り階段。

フィードはむしゃむしゃとクレープをほおばりながら階段を降りて行った。何が何だかわからないエオルであつたが、慌ててフィードの後を追った。

エオル「さっきの……なに？」

フィード「さっきの……？ ああ、暗号のことか？ マーフの古い言葉で”山”と”川”って意味らしいぞ」

エオル「らしいぞって……」

エオルはフィードがなぜ裏ギルドの暗号について知っていたのか、恐ろしくて追求する気が起きなかった。

階段を下り終えると、陰気な酒場が広がっていた。フィードはツカツカとカウンターへ近づくと、皿を拭いていたガタイの良いスキンヘッドの男に話しかけた。

フィード「おい、取引頼まれてくれねーか」

男は黙ってフィードを見た。

フィード「チップは向こう持ちだ」

エオル（……んん？ ……取引？ チップ？）

「あの……こ、困ります」

女の困ったような声に、反射的にエオルは顔を向けた。

「おいおい、ねえちゃん、こんなところでお一人かい？」

あきらかに酔っぱらっている男に、女が絡まれている。

エオル「大変だ！助けなきゃ！」

エオルが仲介に入ろうとしたが、フィードはそれを制止した。フィード「やめとけ、ここで他人にかまうな。厄介事になる」

エオル「でもだからって……」

ドガシャアン！

よっぱらいに突き飛ばされた女はテーブルにぶつかり、料理や酒ごとテーブルをひっくり返した。

エオルは背中 of 剣に手をかけた――次の瞬間

グシャッ！！

よっぱらいの顔から、グシャリと潰れたクレープが滴った。よっぱらいはカウンター付近の銀髪に目をやった。フィードはよっぱらいを指差し、怒鳴った。

フィード「食いもん粗末にすんなー！ー！ー！！」

エオル「お前だー！ー！ー！！」

よっぱらいは顔のクレープを手で拭くと、思い切り床にたたきつけ、フィードに向かってきた。

「てめえみてえなひよろひよろのモヤシがよくも……」

ガシッ！

エオルはよっぱらいの手首を捻りあげた。

エオル「彼女に謝って、ここから出て行ってもらおうか」

よっぱらいは激しく抵抗しようとしたが、びくともしない。しかも、金髪の男の胸元に光るバツチを見、一瞬で酔いがさめた。

「ま、魔導師！！……せ、先生でございましたか！！」

よっぱらいはエオルから解放されると、慌てて女に謝罪し、逃げるように店を後にした。

その時、エオルは違和感を感じた。店の誰一人として、たった今の出来事がなかったかのようだ。

女がフィードとエオルの元にやってきた。

「あの！ 助かりました！ ありがとうございます！」

女は二人の魔導師にふかぶかと頭を下げた……が、エオルは女のその装いに目を疑った。

漆黒の艶やかな髪をあご下あたりの長さで切りそろえ、足もとまで伸びた長い袖、帯で締め上げる独特の巻き衣装、親指と他で分たれた靴下に、あわせて親指で分たれた藁のサンダル。

本や写真でしか目にしたことはなかったが、まさか……。エオルは周囲に聞かれぬよう声をひそめて尋ねた。

エオル「君……まさか、ジパング人？」

フィードがすかさず質問した。

フィード「お前、このヘルメット女と知り合いか？」

女「わたくしのこと、何か御存じなのですか？ よろしければ教えていただけませんか！」

フィード「……」

エオル「……」

二人は女を見つめた。

三人は適当に軽食を注文し、空いている席についた。

女「先ほどはご迷惑をおかけして大変申し訳ありませんでした」

女は深々と頭を下げた。つられてエオルも「いえ、そんなこと……」と頭を下げた。

女「わたくし、『染井よしの』と申します」

フィード「ソメー？」

エオル「ジパングの名前って確か名前が後だったんだよね？　だから……ヨシノさんだよ」

よしの「はい……それで、その……わたくし、何もわからないんです」

エオル「？」

フィード「？」

よしの「気がついたら……立っでいて……わかるのは”名前”と、”しなくてはいけないこと”だけなのです」

エオル（記憶喪失ってこと！？）

フィード「しなきゃなんねえことってなんだよ」

よしの「それは」

ガシャンッ！

カウンターのスキンヘッドの男が注文していた料理を乱暴にテーブルに乗せていった。料理を並べ終わると、テーブルに両手をつき、エオルに敵つい顔を近づけた。

「”そのバツチ”を付けてここにくるってことは、あんたら、この頃話題の『W・B・アライランス』さんだね」

エオル「話題！？」

エオルはかすかに胃の奥がムカムカした。男は仰々しくオーバーなリアクションをとってみせた。

「そりゃあ話題だとも！　天下の魔導師先生が、魔導師裁判所セイラムも恐れず、犯罪組織立ち上げたんですから」

男は再びエオルに顔をよせ、低い声で言った。

「だがな、裏社会では新米だ。ベイベーいいか、この店でのルールはただ一つ“無関心”だ。でなきゃ、長くねえぞ」

フィードが頭の後ろで手を組み、ニヤリとした。

フィード「てめーもな。このおせっかいジジイめ」

男はフィードをジロリと睨むと、無言のままカウンターへと戻って

いった。よしのは申し訳なさそうに俯いた。

フィードはその様子を見、一言「いいから続ける」と言い、ガツガツと料理を食べ始めた。よしのはエオルに目を向けた。

よしの「その前に……あの、先ほど、わたくしのことを”ジパング人”だと仰っていました、その”ジパング人”というのは……？」

エオルは困ったようにフィードを見た。フィードがその視線に気づいてか気づいていないか、好奇心あふれる視線をエオルに向けた。

フィード「そうそう、俺様もちょうど気になってたんだ。なんなんだ、そのジパングジムってのは」

エオルは呆れ果てた。

エオル「ジパングジムじゃなくて”ジパング人”！ てか……君よくアカデミー卒業できたね？」

フィード「試験は全部一夜漬けでパスしたからな。一晩寝たら、全部忘れる」

エオルは深く長いため息をついた。水を一口ふくむと、指を組み、テーブルに寄りかかった。

エオル「どこから話せばいいのか……とりあえず二人とも、『神使教』は……わかるよね？」

フィード「なんだそりゃ」

よしの「申し訳ありません。存じません」

エオル「ええーっ！？ そこからあ！？」

エオルは、今度は短いため息をつき、ゆっくり話し始めた。

エオル「『神使教』っていうのは、世界で最も普及している宗教だよ。どんな宗教かって言うと」

フィード「あーあーあー！ そんな注釈はどうでもいい」

エオル「違うつて！ ここが一番大事なところ！ ……てか、君、ほんとに知らないんだね……で！ どんな宗教かっていうと、簡単に言ってしまうば、

” 人の運命は受け入れる ”、” 自然回帰のスローライフ！

”、” 神のもたらすもの、すなわち自然をありのままに受け入れ、

共存する”、そんな宗教」

フィードは面倒くさそうだと言うように顔をしかめた。

フィード「そりゃあつまり……」

エオル「そ！ 悪魔の力を借りて、自然の力を操って豊かな生活を送る俺達魔導師とは、相反する思想を持っていて、魔法の恩恵にあずかっている人々と対立してる」

フィード「俺様たちを敵視してるわけだ」

エオル（……おれたち魔導師もね……）

エオルはよしのに視線を向けた。

エオル「ここまでは大丈夫かな？ よしのさん」

よしのはあまりわかっていなさそうに頷いた。エオルはそういえば、と話を少し切り替えた。

エオル「よく考えたら、よしのさん、魔法とか、魔導師とか……よくわからないってことだよな？」

よしのは申し訳なさそうにエオルとフィードを見た。

よしの「はい……お二方はその……マドウシなのですか？」

エオルはよしののあまりにかしこまった様子にクスクスと笑った。

エオル「そんなにかしこまらなくていいよ！ たとえば」

エオルは酒場の天井の明りを指した。

エオル「この明りも」

次に、エオルはカウンターを指した。

エオル「蛇口から安全な飲料水がでるのも、調理の火が簡単につくのも」

そして、エオルはフィードとよしのを交互に見た。

エオル「俺達のような、違う国の者同士に言葉の壁がないのも、みんな、魔法の力のおかげなんだよ」

よしのは不思議そうにまん丸の黒い瞳をエオルに向けた。

エオル「普通に生活していると当たり前すぎる、なかなかその恩恵に気づけないけどね」

エオルはにこやかだった顔を引き締めた。

エオル「……この便利が当たり前な生活の反面、俺達はこの大地を傷つけてもいるんだ」

よしの「大地を……傷つける？」

エオルは頷いた。

エオル「魔法の力っていうのは、人が悪魔からもらっている力なんだ。もらっているからには代わりに何かをあげなければいけない」

よしの「なにか……？」

エオル「一般的には、悪魔が欲しいのは人の体か魂」

よしの「た、魂！？ 魔法とはそんなに危ない力なのですか！？」

エオルは笑った。

エオル「いやいや、さすがにそのまま魂をあげたりしないよ。魔法を使う免許を持っているのが魔導師なんだけど、魔導師は人の体や魂に代わるものを悪魔にあげているんだよ。

それが、魔導師が体の中で作る”魔力”っていう対価。そして、その”魔力”を作る元となるのが大地の気”マナ”。つまり、神使教風に言えば、大地の魂を削って悪魔に渡しているんだ」

フィード「……個人で使う分には微々たるもんだけどな、世界中の人間の世話すんには莫大な量がかかるってこった」

フィードが爪楊枝をさしながら、付け足した。

エオル「そう……って、フィード！ 俺らの分のご飯は！？」

テーブルいっぱいに並べられた皿はきれいに空になっていた。

フィード「てめーがちゃんたら話してっからだろ。さっさと結論話しやがれ」

エオル「もー！ 君がわかってても、よしのさんはわからないことだらけなんだってば！！ ……ごめんね、よしのさん」

エオルは注文を取り直した。

よしの「……申し訳ありません……きつと世の中でみなさんは知っていて当然のお話ですのに……」

二人の魔導師はぎょつとした。よしのの目に今にもこぼれんばかりの涙がたまっていた。

エオル「いいいいいやいや！ 別によしのさんを責めてるとかじや……！ ねえフィード！」

フィード「まったくだ。被害妄想も大概にしとけよ」

エオル「妄想って…… フィードオー……！！！」

……クスリ……

二人は再びよしを見た。よしのは手で口を覆い、クスクスと笑っている。

フィード「ホレ見ろ、泣いちゃったじゃねーか」

エオル「笑ってるんだよ！」

よしの「クスクス…… はあ、笑ってしまってますみません。お二人のやりとりがあまりに面白くて……」

二人の魔導師は泣いたり笑ったりとクルクル表情の変わる女の子に訳が分からずきよとした。

よしの「すみません。わたくしは大丈夫です。ありがとうございます。エオル様、お話の続きをお願いしてもよろしいでしょうか？」

エオル「あ…… ああ、そうだね！ ごめんごめん！ 魔法が大地のエネルギーを使って人々の生活をよくしているってことはなんとなくわかってもらえたかな？」

よしの「はい。神使教……？が魔法……？と対立するのは、魔法が大地の力を使っているから……ということでしょうか？」  
エオル「まあ、だいたいはね！ もっと強めに言っと、神使教は魔法の必要のない、神使教徒のような自給自足のスローライフへの転換を”こちら側”の世界に要求していて、

こちら側、つまり”魔法圏”の人々——主に魔導師協会という魔導師を管理しているところは、今さらみんながこの便利な生活から抜け出すのは難しいって主張している。

……一応協会も魔法圏の人に『省マホ』とかうたってるけど……要するに、魔法圏と神使教は意見が真っ向から対立してる。

ここまでが基本」

フィード「で？」

エオル「長くなったけど、ここからが本題！ 神使教つてのは、全世界に広まっでいて、たくさんの方派があるらしいけど、それらの総本山が神使教国家『ジパング』！」

フィード「なるほど、魔導師の総本山が協会なら、”向こう”はそのジパングって国がそうなわけだ。」

エオルは強く頷くと、よしのを見た。

エオル「……ジパング人の特徴は黒髪に黒い瞳なんだ。

そして、よしのさん、君を見て俺が驚いた理由、それは、ジパングは魔法圏との対立を理由に、すべての国との国交を断つ”鎖国”という政策を実施している。

特に、ジパング国内ではジパング人の出国はご法度らしい。

だから、よしのさん、君は本来ならここにいるはずがないんだ」

フィードは「ん？」という顔をした。

フィード「ちよつと待て、魔導師にもジパング人はいるじゃねーか」

エオル「ああ……」あの2人……。あの2人は特別な事情があるらしいよ。それは置いておいて、」

フィードは「もうひとつ」と手を挙げエオルの言葉を遮った。

フィード「すべての国交を断つて、国外の神使教徒はどうすんだよ」

エオル「ああー……なんか、年に1回くらい巡礼の時期だけ国を開けるとかなんとか……」

フィードは何かを考えるように唇に親指を当て、黙り込んだ。

エオル「それより、よしのさん！」

エオルはよしのの異変に気がついた。

エオル「よしのさん……？」

——自分はこのにいるはずがないのにここにいる

よしのはどうしようもない不安で吐き気に襲われた。俯き、肩をこわばらせ、理解できない現実から守るように両手で頭を抱えた。エオルは席を立ち、よしのの横で膝をつく、よしのの両肩に力強く手を置いた。

エオル「よしのさん、君は記憶をなくしてしまったけど、2つだけ覚えていることがあるんだよね」

よしのは、エオルに答えようと、不安と戦いながら、震える声で答えた。

よしの「……名前と……しなくてはいけないこと……」

エオルは深く頷き、ゆっくり語りかけた。

エオル「その、『しなくてはいけないこと』に、よしのさんがここにいる理由が関係していると思うんだ」

エオルは優しく微笑んだ。

エオル「よければ、話して？」

フィードは黙って、エオルとよしのを見つめていた。

よしの「……」

よしのは浅い記憶を辿るように遠い眼をし、ゆっくり話し始めた。

よしの「……私のはじめの記憶は……」

一面に広がる砂

太陽の光

雲ひとつない青空

耳元でゴウゴウとなる風の音

まるでよしの自身もその景色の一つのように、ぼうつと、ただ立っていた。

しばらくして、太陽の暑さで、じんわりと汗が吹き出すのと同時に、徐々にと体の感覚が”戻ってきた”。

そうして、体の感覚が完全に戻ってきたところで、気がついたように、初めて周りを見渡した。

右も左も後も、すべて砂。視線を元の位置に戻すと、10歳くらいの少年が立っていた。

少年は自分のことを「チエシャ猫」と名乗り、この町の方角を指差した。

エオル「チエシャ猫？」

よしの「はい、このくらいの……」

よしのはしゃがんでいるエオルの頭の高さで手をひらひらとさせた。よしの「男の子でした。チエシャ猫さんはわたくしの名前と、これからすべきことを教えてくださいました。」

そして、自分の指さす方向に歩き続けると、この町があり、このお店の場所と、入り方を教えてくださいました。ここのお店にいる方を頼れと……」

エオルとフィードはよしのの話に不気味さときな臭さを感じた。よしのはうつむいた。

よしの「けれど、どの方もわたくしを見るなり、“ジパング人だ”と避けたり、怒鳴ったり……」

よしのはさすがのようにエオルを見た。

よしの「……わたくしは……あなた方を……信じてもしよいのでしょうか？」

言われた瞬間、エオルの脳裏に店主の言葉がよぎった。

—— ルールはただ一つ、「無関心」 ——

「信じていいのか」という問いかけが、《彼女の今後を、人生の一部を、心を、信頼を背負う》冷たい鉄のかたまりがのしかかったような感覚にさせる。

たった今出会ったばかりなのに、自分たちはお尋ね者なのに、こんなこと、容易に約束できるものではない。優しさや親切のつもりが、なんとも中途半端なおせっかいだったのだ。

エオルはよしのの視線に耐えきれず、目を逸らそうとした——その時

フィード「おう！ いいから、その『しなきゃなんねーこと』さっさと話せ！」

全くいつもの軽い調子。これはいつもの悪ふざけやいたずらでどうこうしていいものじゃない。エオルはフィードにくっついてかかった。

エオル「君ね……」

フィード「おめーに話しかけたんじゃないよ。よしの、おめーが俺様らを信じていいのかどうかってのは、俺様らがおめーを信じてても大丈夫かどうかってことだ。

んでもって、俺様らがおめーを信じられるかどうかは、おめーの、その『しなきゃなんねーこと』次第だ」

エオル（確かにそうだ……）

“こいつは何も考えてない”

フィードに対して、そう思った自分を、エオルは恥じた。同時に、同期であるフィードを頼もしく、そして眩しく感じた。

フィードの強く、そしてまっすぐ自分を見つめる瞳に、よしのはどこか安心感を感じた。この方なら、きっと信じてもいい。なぜか不思議とそう思えた。

よしの「……取り乱したりして、申し訳ありませんでした」  
よしのは笑ってみせた。

フィードはよし、と手を叩いた。

フィード「なら、とりあえず、宿行くか！　こんな人多いところで  
る話でもなさそうだしな」

エオル「え……でも、あつたばかりで宿連れてくつて……女の子的  
に……」

よしの「はい！　よろしくお願いいたします！」  
エオル「……」

コンコン！

調理中だった裏ギルドの店員は、カウンターをたたく音に顔を上げ  
た。その目の前には男が一人。

男は短めのつんつんとした頭頂部、えりあしが首元まである鳶色の  
髪に、灰色の、目つきの悪い釣り目、そして、顔の正面から見て右  
上から左下にかけて、大きな切り傷があり、屈託のない笑顔を向け  
ていた。

男「おっちゃん！　ちょっと聞きたいんだけど」

店員は、男が来ている独特のデザインの真っ赤な衣装と肌の色を見、  
すぐにどこの人間か理解した。

店員「<sup>イエローモンキー</sup> 桃花源”の人間がこんな所に珍しいな。観光地の道聞くな  
ら、ほかの店にしな」

男はわざとらしく慌てながら笑った。

男「違うつて！　あのさ、銀髪赤目で黒づくめの魔導師が何か持つ

てきたと思うんだけど、聞いてない？」

店員は男の胸元を見た。魔導師の着用義務であるバツヂは、ない。

男「なんだい、ここでは”無関心”がルールじゃないのかい？」

男はにつこりして、店員の目線に自分の笑顔を持ってきた。

店員「……」

店員は奥から大きな麻袋を持ってきて、ドサリ、と男の前に置いた。男「サンキュー？ んじゃあさ、後でそいつ、もっかいここ来ると思うんだけど、これ渡しといってくれる？」

男は布に包まれた長方形の包みを手渡した。これまでこうした闇の取引の仲介になったことは何度でもあった。

しかし、今回は別。直接魔導師が絡んでいるうえに、まったく別大陸の胡散臭い男が、わざわざこの大陸で取引に来ている。体の奥の本能的な直感が、関わるのはやばい、と警鐘を鳴らしている。

男は店員の様子を見、屈託なく笑った。

男「あ！ 大丈夫だって！ ちゃんとお礼！ ほい、これチップね」とチップを包みの上に乗せ、店員の手に包みごと握らせた。男はそのまま人懐っこい笑顔で「どーもね〜！」と大きく手を振り、麻袋を手に、店を去って行った。

裏ギルドから近くの適当に見つけた安宿。部屋を2つ取り、そのうちの一室に3人はいた。

エオルとよしのは部屋の備え付けの椅子に腰掛け、フィードはベッドにごろりと横になっていた。エオルはあきれた視線をフィードに向けた。

エオル「フィード！ 人の話を聞く態度じゃあないでしょう！」  
フィード「まあ、気にすんなって〜！ 俺様のことは空気とでも思っつけ！」

エオル（絶対店から移動したのはゴロゴロしたかったただけだ！）

よしの「あの、私は気にしませんので、どうぞお気遣いなく」

エオル「よしのさん……」

よしの「どうぞエオルさまも！」

エオル「……僕はいいです……それより本題！」

君は気づいたら砂漠のご真ん中に立っていて、”チエシヤ猫”と名乗る男の子に、自分の名前と、これから自分がしなきゃいけないことを言い渡された。まとめると、こんな感じだよね？」

よしのはゆっくりとうなずき、椅子から立ち上がった。

よしの「わたくしは”これ”をすべて集めて、完成させるよう、言われました」

すると、よしのの足元から風が巻き起こった。そして、よしのの胸あたりの高さに、よしのを囲むように、拳ほどの大きさの白い光の球体が4個現れ、やがて、光と風は収まった。

光を放っていた球体は、赤や青など、一つ一つ別々の色をしており、その中には太い黒字のマークが浮き上がっている。

フィードは体を起こした。

フィード「なんだこりゃ？ 魔導師専用道具……にしちゃあハデだな」

エオル「これは……まさか！」

よしの「エオル様！ 御存じなのですか！？」

よしのがエオルに近づこうとして、よしのの周囲に浮かんでいる球体の境界にエオルの髪の一部が触れた瞬間、

バチッ！

エオル「うわ！」

よしの「きゃ！」

境界に触れたエオルの髪は火花とともに、はじかれ、煙を上げた。

エオル「うわわわわわわ」

よしの「あわわわわわわ」

フィード「おー！ バリアになってんのか、それ。つか、何やってんだよ、おめーら」  
その時、よしのの周りの球体の1つが青く輝きだし、球体たちが横へ滑るように回転し、青く光る球体がよしのの正面にきた。

カッ！

青い球体はフラッシュし、青かった色は灰色の石になった。かわりに、よしのをぐるりと囲み、水でできた竜が鎌首をもたげ、エオルを睨みつけていた。

エオル「え……何！ 俺！？」

フィード「まさしく、蛇に睨まれたエオル」

エオル「それをいうなら、カエルでしょ！」

よしの「あなたは……」

水でできた竜はエオルに猛烈なスピードで体当たりしてきた。エオルは思わず体をこわばらせた。

しかし、竜はエオルの煙を出していた髪の手つぽをかすめ、再びよしのの周囲でとぐるを巻いた。エオルの髪から出ていた煙は消えた。そして竜はよしのに視線を落とした。

「あわれな……」

竜はつぶやくと、白く輝きだし、元の球体に収まっていった。球体は元の青い色を取り戻した。

しばしの沈黙。

よしのはぼかんとしていた。

エオル「なに……今の……」

フィード「ウハハ！ おもしれー！ おい、よしの！ あれなんだ？」

よしのは名前を呼ばれてハッとした。

よしの「あ……はい、なんでしょう」

フィード「……なにじゃねーよ。今の何なんだって聞いてんだよ！」  
よしのがうつむいたのを見、エオルは慌てた。

エオル「フィード！ 女の子に対して言い方ってもんがあるでしょう」

よしの「それが……わたくしにもさっぱり……」

エオル（あ……気にしてないのか……）

フィードは眉根を寄せた。

フィード「？ なんでお前、その球出せたんだよ？」

よしの「これは……」チエシャ猫さん”からお預かりしたもののなのです。これの残りの宝珠を集めるようにと頼まりました。……それ  
だけなんです……」

エオル「チエシャ猫さん……か」

フィード「そーいや、当のチエシャ猫はどこいったんだよ？」

よしのは困ったわと、頬に手をあてた。

よしの「それが……この町の方角を指差された時に、その方向に顔を向けているうちにいなくなられてしまっ……」

エオル「え……砂漠のど真ん中で!？」

なにかまずいことを言ってしまったかという顔で、よしのはこくりと頷いた。エオルは腕を組んだ。

エオル「……どう思う？」

フィード「面白いと思う」

エオル「違うでしょー！ー!? 本人こんなに不安そうにしてんのに!ー!」

よしの「あわわ……どうか喧嘩はおよしになって……」

エオル（うつ……）

「け、ケンカじゃないんだよ、これは……」

フィード「よしのー! コイツが俺様のこといじめるー!」

よしの「エオル様!」

エオル「ちがー!ーう!ー!」

フィードは真顔になった。

フィード「まあ、とりあえず、よしの、お前の把握していることはわかった」

よしのは身を引き締めた。

よしの「はい」

フィードはニヤリ、とこれから何か悪いことを始めるかのように笑った。

フィード「おもしろそうだから、つきあってやんよ」

よしのは一瞬手で口を覆い、気がついたように深々と頭を下げた。

よしの「ありがとうございます!!」

エオル（あれ？ W・B・アライランスの活動はもういいのかな？）

フィード「とりあえず、それ以外のお前の情報を集めるために……」

エオルはものすごく嫌な予感がした。

フィード「次の目的地はジパングにする」

エオル「何言っちゃってんのー！ー!?」

フィードはやれやれとため息をついた。

フィード「だから、次の目的地……」

エオル「それはわかった！ でも、魔導師の敵の真っ只中に行くなんて、あまりに無謀で非現実的だよ！」

フィード「そら、魔導師語ってジパング入りやあ、フクロにされるわな。ようは、魔導師だつてばれなきゃいい」

エオル「どうやってさ！」

フィード「どうって、バッチ外すだけ。」

フィードはコートの魔導師のバッチを付けているあたりをひらひらさせた。エオルは憤慨した。

エオル「なっ！ 魔導師のバッチの着用義務は絶対なんだよ！ な

んで絶対か、忘れてないよね!?

魔導師基本法第1条の1項! 魔導師は力を持っているからこそ公私にわたって社会的に監視される必要……」

フィードは笑いだした。

フィード「お尋ね者の俺様らには関係ねえ話だ。だいたい、プライベートでもクソ真面目にに着用義務守ってるやつなんざ、いやしねーよ」

エオルはあきれ果てた。

エオル「いや、みんなちゃんと守ってるよ……第一、ジパングって鎖国中じゃない! しかも、島国! どうやって行くつてのさ!」  
フィード「年一回巡礼の船が出てんだろ? とりあえず、その場所と時期を調べてから、どうするか考える」

エオル「そんな無計画な……」

フィード「旅なんてそんなもんだろ」

エオル「旅に出て数日で、何旅語っちゃってんの……」

よしの「あの……」

よしのは今にも泣きだしそうな、申し訳なさそうな様子で二人の魔導師を見た。

よしの「本当に申し訳ありません……わたくしのせいで……わたくし、やはりこれ以上ご迷惑は……」

エオルはよしのをまっすぐ見据えた。

エオル「よしのさんが自分を責める必要なんて、どこにもないんだよ! 第一、それで俺たちの議論がどうこうなるってわけでもないし、よしのさんがいい方向に向かうとも思えないな。」

不安なんだよね? 俺たちの力が必要なんでしょう? よ

しのさんが落ち込むことなんて何一つないよ」

フィード「そーそー! ”ちゃっちゃんと折れるよこの金髪豚野郎”  
とでも言っとけ」

エオル「……それは違うでしょ！ でもまあ」

エオルは軽く溜息をついた。

エオル「確かに、よしのさんの謎を追うには、そこかしかなさそうだね」

フィード「決まりだな」

フィードはベッドから立ち上がった。

フィード「じゃあ、そーゆーことで！ 俺様、ちょっと散歩がてら情報集めてくつから」

エオル「え？」

よしの「でしたらわたくしも……」

フィードはよしのを見た。

フィード「さっきおまえが絡まれてた店行くんだよ。あの辺はどうも反神使教の過激派の集まりみてえだし、またジパング人云々で騒ぎになったら面倒くせえだろ」

フィードはエオルにチラリと視線を送った。

フィード「それより、あの店のくせえ飯食ってベロが気持ちわりいから、うまい飯食いてえ」

よしのの目が輝いた。

よしの「はい！！ 承りました！！」

エオル（……あの店じゃなくても、魔法の恩恵にあずかっている人たちはみんな神使教をよく思っていない。

結局宿の外へ出たら同じ気がするんだけどなあ…… よしのさんが嫌な思いをせずに食事ができる良い方法があればいいんだけど……）

日が傾き、人々の影が伸びてきた。昼間、メインストリートに軒を連ねていた色とりどりのバザールは、屋台に様変わりし始め、ラン

ブがぼつぽつと灯り始めた。

昼間とはうって変わって、ひんやりとした風がメインストリートをそよそよと通り抜け、よしのの袖がふわりと舞った。よしのは、隣を歩くエオルを見上げた。

よしの「フィード様は、どのようなお食事を好まれるのでしょうか？」

エオルはハハ、と笑った。

エオル「あの人、肉さえあれば何でもいと思うよ。ただ、手持ちあんましないしなあ……安い店でパパッとすませちゃう感じにしよつか！　ちょうど屋台も出始めたし」

よしの「……」

エオルはハツとして、うつむくよしを見た。

エオル「あ……女の子ってあんまし屋台とか……アレだね」

よしのは顔を上げた。

よしの「エオルさま！　差し出がましいようですが、一つ、お願いを聞いていただけませんか？」

カーシーの町に月が昇り、メインストリートはランプの明かりと屋台の活気であふれていた。

エオル「ただーいまー！」

エオルが部屋に入ると、フィードがベッドの上でゴロゴロしていた。フィード「おせーぞ！　今日の飯決まったか？」

エオルはニコリとした。

エオル「まあ、その前に情報展開頼むよ。どーせ君、食べたなら眠くなるでしょ」

フィード「ちっ」

フィードは世界地図を広げた。

フィード「今どーこだ」

エオルは地図の左下の卵型の大陸の中央より少し上あたりに人差し指をつけ、顔を地図に近づけた。

エオル「マーフの……」

指がわずかに右へ動き、やがて止まった。

エオル「あつた！ カーシー！」

フィード「へー！ 今そこかあ」

エオル「……調べさせたのか……」

フィード「巡礼船は5か月後、ここからだと言ディアス国のフアリアス港から出るのが一番近いんだよ」

エオル「……それはつまり、この大陸からは巡礼船はでないと？」

フィード「おう」

エオル「……言ディアスのフアリアス港って……」

エオルは地図の左上の力ギ形の大陸の右下部分を指差した。

エオル「ここまで5か月か……余裕がないってわけでもないけど、かわいげのない距離だね……」

フィード「しかも、時間がたてば追手も厳しくなるだろうから、ルートも狭まってくるぜ」

エオル「せめて最短距離でこの大陸からは出た方がよさそうね。しかし船か……もれなく協会の監視つきだろうね。神使教徒ばかりの巡礼船はバッチ外すだけでどうにかできても、こればかりは……」

大陸間をつなぐ主要交通機関である船には、安全な運行のため、風魔法を使う魔導師が常駐している。

フィード「俺様に考えがある」

エオル「またどうせハイジャックとか言うんでしょ。そんなの、陸についた時点で待ち伏せされるに決まってるじゃない」

フィードは不敵な笑みを浮かべた。

フィード「俺様は公共交通で行くなんて一言も言ってるぞ」

エオル「……はい？」

ドアをノックする音。

よしの「失礼してもよろしいでしょうか」

エオル「あ、ああ！ 今開けるよ！」

エオルがドアを開けるとよしのがカートを押して入ってきた。

同時に、食欲をそそる香りが部屋を満たした。

フィード「……ん？」

よしの「これからお世話になるので、お礼の意味も含めて夕餉を作らせていただきました。お口に合えばよろしいのですが……」

カートから、美しく調理されたバザールの鮮やかな食材が、備え付けの味気ないテーブルを彩った。

エオル「ここの調理場借りたんだ。……魔導師のバツチって、こういうとき便利だね」

エオルはいたずらっぽく笑ってみせた。

3人は席につき、少し遅めの夕食を取り始めた。

エオル「ジパング風っていうのかな？ 食べたことない味付けだけど、とてもヘルシーで美味しいよ。ありがとう！ よしのさん」

よしの「よかった……光栄です。それで、これからどうされるのですか？」

エオルはフォークとナイフを置き、口をナプキンでぬぐった。

エオル「まだちょっと大まかなことしか決まってるんだけど、とりあえず、さっきの買い出しで旅の準備はだいたいできたから、明日は朝一で出発かな」

フィードが料理をかき込みながら付け加えた。

フィード「行先だが、とりあえず、方角的には北西な」

エオル「おおまかすぎだろ……しかも北西って言ったら“砂の大河”じゃない！ わざわざそんな危険な道通らなくても……理由は？」

フィードはスプーンを口にくわえ、テーブルの端に地図を出し、カーシーの町の北側を指差した。

フィード「“砂の大河”の西端……つまりこの町の北は”大砂瀑布”とかいうでかい砂の滝になってるらしい。大河を避けて北に出るには、その“段差”分余計な遠回りになるからな。

ライエルみたく、十分な交通手段があればいいが、足がつくからなるべく使いたくない。その流れで砂漠歩きで渡ってどんな目にあつたか、忘れてねーだろ」

エオル「確かに……危つくミイラになりかけたね……つまり、足がつかずに北に出るには、最短距離しかないってことか。まあ、よしのさんは俺達を守れば問題ないしね！ で、北を目指すってことは

……」

エオルは現在の大陸「ムー大陸」の北端を指した。

エオル「サラム国の海側の町に出るってのがとりあえずの目標ってわけだ」

フィード「ま、そーゆー計画。海側のどの町に出るかは状況次第で、とりあえず間近な目標としては、”砂の大河”の川岸に、モンスタ―ハンターたちのキャンプ地ができてるらしいから、そこな」

エオルは怪訝そうな顔をした。

エオル「……ハンターたちのキャンプ地？ 大丈夫？ さすがにその辺にはお尋ね者の顔が割れてそうだけど……」

フィードは耳に小指を突っ込んだ。

フィード「まあ、なんとかなるだろ。なんでも、ハンターたちが資金稼ぎのために一般人を対岸に渡すサービスしてるんだと。

あのでかいレモラの群れを一匹一匹なんとかするより、これを利用しねえ手はねえ。」

エオルは苦笑いした。

エオル「ハハ……賞金首魔物を倒すためにキャンプはつといて、資金稼ぎねえ……ミイラ取りがミイラってやつ？ ま、お金の無さは人のこと言えないか」

フィード「ん！」

フィードはポケットの中から長方形の包みを出し、エオルの前にドサリと置いた。

包みの中身を開け、エオルは驚いた。

エオル「さ……札束！？ この間のレモラの鱗……まだ売ってなかったと思っただけ……？」

フィードは悪びる様子もなく、爪楊枝をさしながら答えた。

フィード「タクニから奪った魔導師専用道具をあるスジに売った」

エオル「はい？」

フィード「……安心しろ、よきにはからってくれるはずだ」

エオル「し……信じられない……それでも魔導師！？」

フィードはだるそうに頬杖をついた。

フィード「大丈夫だっつってんだろー？ レモラの鱗とかは別大陸

のが高くつきそうだから、まだ売らない。当面の軍資金はソイツで

何とかする方向で」

エオル「……」

よしのが両手を合わせ、うれしそうな声をあげた。

よしの「まあ！ こんなにたくさんあったら、しばらくはご飯にも困りませんね！」

エオルは無理やり笑顔を作り、泣きそうな声で答えた。

エオル「ハハ……そうだね……」

夜が更けてゆく。

パンゲア大陸　ヴァルハラ帝国北東部　クラブ・タブ・トリップ魔  
導師協会管轄地区　魔導師協会総本部　――バベルの塔

広大な森の中にひょっこりと天まで届きそうな高い塔が突出している。

その最上階。

コンサートホールのような高い天井。鏡のように磨かれた床。

カッソカッソとヒールの音が、真夜中の静まり返った塔の上から下まで鳴り響き、進む方向の少し前の燭台が、自動的に灯をともしてゆく。

アカデミー

魔導師養成学校の教師、マリア・フラーレンは、パーマがかったブルンドの長く美しい髪から冷めた湯を滴らせ、湯ざめせぬよう肩からショールをかけ、しかし急いだため、ショールが必要ないほど体は火照っていた。

最上階の奥の部屋の重厚な扉が目に入ると、マリアは歩くスピードをさらに早め、思い切りドアを押しあけた。

鏡のようなタイル張りの床、豪華な彫刻が施されたはるか高い天井、塔の支柱がむき出しになっている壁のない見晴らしの良い窓、円形の塔の半分を占める、半円形のただっ広い集会ホール。

その窓際には、真赤な髪に色黒の肌、穏やかな笑みをたたえた50代くらいの男、2メートル以上はある犬の姿をした、体格のよい犬人間、そして、ロッキングチェアに揺られた、小さな老人。

マリアは眉根を寄せた。

マリア「ちよっと！ スペリアル・マスターはあんたたち二人だけ！？ ほかの連中何やってんのよ！ かわいい教え子の非常事態じゃない！」

マリアはプリプリしながら赤髪の男と犬男の間に歩を進め、赤髪の男の背に手をあてた。

マリア「ユディ、はつきりとした情報がないからまだ何とも言えないけど、現状について、心中察するわ。でも、あなたまで疑ったら、シャンドラはすべてを失ってしまう。気を確かに」

ユディと呼ばれた赤髪の男——ユディウス・ラークは微笑んだ。  
ユディウス「ありがとう、マリア」

「フン、あの問題児は絶対何かしらやらかすと思ったぜ」

犬男は鼻を鳴らし、嫌味っぽくマリアを見た。

マリア「ガルフ！ あなた、自分の仕事を間違えてるんじゃない？」

マリアも犬男——ガルフィン・フォーンを嫌味っぽく見返した。

マリア「警察は疑うのが仕事！ 私たち教師は、トランブ  
スペリアル・マスター信じるのが仕事！  
でしょう？」

ガルフィン「道を間違えないように指導するのも教師の仕事だがな」  
マリアは柳眉を逆立てた。

マリア「ユディを責めているわけ！？」

ガルフィン「教師のあるべき一般論を述べたまでだ。」

ユディウス「まあまあ、二人とも、お茶でも飲んで、落ち着きましよう」

ガルフィンは肩をすくめた。

ガルフィン「本人がこれだ。一般論述べたところで、どうってことない」

ユディウスは三人のスペリアル・マスターの前で静かにロッキングチェアに揺られる小さな老人に視線を向けた。

ユディウス「会長、お茶を入れなおしてきましょう。もう少し待ったら、誰か来るかもしれないですし」

老人は手のひらを向け、制止した。

会長「エオル・ラーセンの当時の担当のキリスは知っての通り出張中じゃ。シャンドラ・スウェフィードが学生時代深く関わりがあったのはお前たちくらいじゃろう。」

ほかのスペリアル・マスターたちも多忙じゃ、この会の結果のみ知らせばよからうて。まあ、マリアは納得せんじやろうがな  
マリアは頬を膨らませた。

マリア「当たり前です！……でもまあ、これ以上待つのは時間の無駄だというのはわかりました。協議を始めましょう」

老人はうなずいた。

アカデミー

会長「では、先日魔導師養成学校を卒業したシャンドラ・スウェフィード、エオル・ラーセン二名による魔導師犯罪組織『W・B・アライランス』について、魔導師協会並びに魔導師養成学校での見解と対策を決定する。」

ユディウスが拳手をした。

ユディウス「見解は必要だとしても、対策は必要ないでしょう。あの子たちはもう一人前ですし、善悪の判別ができないはずがない。

『トランプ』に、任せるべきだと、私は思います」

ガルフィン「な……それは待てユディウス！」

マリア「『トランプ』なんかに任せたら、有無を言わずに即行『セイラム』にしょつ引かれるだけよ！きちんと理由や原因を究明して、同じことが起こらないよう、対策方針を打ち立てるべきだわ！」

ユディウスは微笑んだ。

ユディウス「二度と起こさせないための見せしめがああ『セイラム』でしょう？ 対策というのは、それで充分だと僕は思います。」

あの子たちも、生徒たちも、卒業生も、こんなことをしたら当然『セイラム』にかけられるということをわかってますよ。

それ以上、我々が何かを働きかけるのは単なる甘やかしです。」

マリア「甘やかしてもいいじゃない！　かわいい教え子なのよ！  
切り離すべき部分はもちろんあるけど、やっぱり、そうでない部分  
つてのが、あると思う！」

ガルフィンが拳手した。

ガルフィン「……こいつの感情論に、まんま賛同する気はないが……  
…実は、ヤクトミが数日ゼミを休みたいと言い出してな。問い詰め  
たら、シャンドラを説得しに行きたいんだと。」

今回は前例がないケースの分、やはり生徒や卒業生たちへの影響も大きい気がする。マリア、お前のところの”シャンドラの仲良しグループ”のやつはどうだ？」

マリアは「その話に乗りたいたいとただけど……」とため息をついて、肘を組んだ。

マリア「あの子のはかれこれ2年も前に職についてるし、忙しくて協会のいざこざに構ってる暇ないですって！」

ガルフィン「……あのクソガキ……」

ユディウスはクスリと笑った。

ユディウス「まあまあ、アレスくんも事情があるんですし」

広間に、扉をノックする音が響いた。

「失礼します！　ガルフィン先生！」

ふわふわの白い髪、黄色い三白眼、高い鼻に太い眉、尻からふさふさのしつぽをたらした青年が、紙を握りしめて、慌てて入ってきた。  
マリア「あら、噂をすれば、ヤクトミちゃん」

ガルフィンは大きく裂けた口の端から牙をむき出した。

ガルフィン「ヤクトミ！　場をわきまえんか！」

ヤクトミ、と呼ばれた青年は、紙を握りしめた腕を大きく振り、息を切らして走ってきた。

ヤクトミ「すいません！　でも、大変なんです！　これ見てください……！」

ヤクトミは持ってきた紙をガルフィンに手渡すと、肩を大きく上下させ、その場に座り込んだ。ガルフィンはため息をつきながら、クシャクシャの紙を広げ、ユディウスとマリアは、ガルフィンの左右から紙を覗き込んだ。

紙を見た瞬間、ガルフィンは顔を背け、マリアは右手でこめかみを押さえるように眼を覆った。

ユディウス「……会長、W・B・アライランスから、新たな犯行声明が」

ヤクトミ（これだけはまずいぞシャンドラ！　テメエ、一体なにしていやがんだよ！！）

ユディウス「……ジパング人を人質として、拉致したと」  
ロッキングチェアの揺れが止まり、老人の顔が凍りついた。

短い沈黙の後、会長はゆっくりと口を開いた。

会長「……ヤクトミや」

ヤクトミは「はい！」と慌てて立ち上がり、姿勢を正した。

会長「これは『トランプ』にも伝わっておるかはわかるか？」

ヤクトミ「そこまでは……」

会長「そうか……ユディウスよ、その声明には、金品の要求でもあるのかの？」

ユディウス「いえ、今の内容がすべてですね」

会長「フム、ユディウス、マリア、お前さんたちはこの声明の範囲をお調べ。ガルフィン、ヤクトミにしばらく暇を与えてあげなさい」  
ヤクトミは会長をまっすぐ見た。

会長「ジパング以外でジパング人に会うなどということはないはずじゃ、狂言の可能性も十二分にあるが、たとえ狂言であっても、事が公になれば、神使教との宗教問題、ひいては神使教が国教である国々との国際問題に発展しかねん。

さらに、『トランプ』によって解決された事件は、魔導師協會の連盟国に詳細にわたって報告する義務が生じる。このままでは、神使教との摩擦はさけられなくなる。

ヤクトミよ。シャンドラはマーフ国のカーシーの町で商隊のハイジャックをしたというのが最新の情報じゃ。ガルフィンには『トランプ』に顔が割れているゆえ、大出を振ってシャンドラたちを探させるわけにはゆかぬ。

シャンドラを見つけ次第、ガルフィンに連絡しろ。お前たち二人がかりなら、楽に捕まえられるじやろう」

老人は窓の外を見た。

会長「何としても、『トランプ』より先に捕らえて、『内々に収められること』だけは内々に収めるのじゃ。他のスペリアル・マスターたちと協会関係者へは、わしから連絡する。以上じゃ」  
「ハイ！」

夜はさらに更け、また明日がやってくる。

#### 4・the place of truth

月が沈みきらない空。

遠くから太陽が顔を出し、地表の影を伸ばす。

まだ青い空気を吸い込むと、その冷たさに眠り眼が冴える。

ムー大陸 観光国家マーフ 東部の町カーシー

夜も明けぬ時間ながら、すでにバザールは活気づき、買い付けに訪れた人と店との賑やかなやり取りで、メインストリートは熱気を帯びていた。

その町はずれ。バザールの賑やかさを背に、2つの影。

一人は真っ黒なロングコートのフードを目深にかぶり、寝癖だらけの銀髪に、眠気ではほとんど開いていない真っ赤な瞳、心底だるそうにしゃがみ込み、鼻ちようちんを膨らませながら、カクカクと舟を漕いでいる。

もう一人は、あご下あたりで切りそろえられた吸い込まれるような漆黒の直毛に、独特の帯で締め上げる巻き衣装、ピンと伸ばした背筋、両手を前で重ね、町の方角を眺めていたが、ふと、隣でしゃがむ銀髪黒づくめの眠たそうな様子に気がついた。

「フィードさま、眠たそうですね」

フィードと呼ばれた銀髪は、ぼそぼそと覇気のない声で答えた。

フィード「よしの、テメエ……バザールも開いてねえような朝っぱらから、バタバタバタバ宿に雑巾がけとかしゃがって。うるさすぎて最悪の目覚めだったんだよ。」

よしのと呼ばれた黒髪の少女は困ったように笑った。

よしの「申し訳ありません。わたくし、てっきりフィードさまたちのお宅だとばかり……」

眼を開けきらないまま、フィードはよしののほうを見上げた。

フィード「“ジパング”って、宿とかねーのかよ」

よしのはきよとん、とフィードを見た。

フィード（ああ、そっか、コイツ記憶ねーんだ）

やっぱなんでもねー！とフィードは荷物を枕に寝転んだ。

フィード「あー……エオルのヤロー、何チンタラやってんだよ……

早くしねーとこのまま寝ちまうぞ」

よしの「見てまいりましょうか？」

その時、遠くから「おーい」と聞きなれた声が聞こえた。よしのはにつこりした。

よしの「いらつしやったようですよ」

よしのの視線の先には、剣を背負い、背中まである金髪に、黄緑のおだやかな瞳、さわやかなスカイブルーのシャツに、日よけのマントを着た長身の男が駆け寄ってきていた。

フィードはむくりと起き上がり、コノヤロウとぶすくれた。

フィード「おせーぞエオル！」

エオルはフィードとよしのに日よけのマントを渡しながら、ハハとすまなそうに笑った。

エオル「ごめんごめん！ 剣を鍛冶屋に出してただけど、時間がかっちゃって……」

フィードは眉根を寄せた。

フィード「そんなにガタが来てんのか？」

エオル「んー……魔法剣を多用しなければ、もうしばらくは何とかなると思うから、次の町くらいまではコイツに頑張ってもらっよ」

エオルはぼん、と背中 of 剣の柄に手をあてた。

フィード「ふーん。んじゃあ、まあ、出発すっか」

午前10時。晴天。カーシーの町のメインストリートは多くの人で  
ごった返していた。

その人ごみが、一部ぽっかり空いている。

その穴の中心には、白いふわふわの髪に、三白眼、高い鼻にふさふ  
さの白いしっぽ、フィードの同期にして、フィードの学生時代、同  
じ仲良しグループの1人だった——ヤクトミ・ヴルナス。

彼が歩くと、人があからさまに避けてゆく。それには根深い原因が  
あり、彼自身、その原因をよく理解していた。

人ごみの中で、子どもがヤクトミを指差した。

「ママ！ あのお兄ちゃん、尻尾生えてるよ！」

母親は子どもをヤクトミから隠すようにマントで覆った。

「シッ！ ダメ！ あれは獣人よ！ 病気をうつされるわ！」

ヤクトミはだるそうに溜息をついた。

ヤクトミ（まさか、こんなに”外の世界”が『獣人差別』が色濃  
いとはな……魔導師養成学校アカデミーの中にいると気付かないもんだなあ）

さらに町を歩くと、ヤクトミの目の端々に、ちらほらと見覚えのあ  
る制服が見えた。

ヤクトミ（対魔導師犯罪警察組織だ……シャンドラのヤツをさがし  
てんだろうなあ）

やがて、ヤクトミはある建物の前で歩みを止めた。

観光案内所。

ヤクトミ（とりあえず、あいつらが寄ってそうな店を虱潰しに当たるしかねえよな）

ヤクトミが入ると、所内のなごやかな雰囲気が一変した。

「獣人だ……」

「なんでこんなところに……」

ヤクトミはツカツカとカウンターに近づき、アカデミーの学生証を見せた。

ヤクトミ「魔導師です。お尋ねしたいことがあるのですが」

すると、所内の空気が安堵へと変わった。

「魔導師様だ」

「まこと利発そうでいらっしゃる」

ヤクトミ（フリー……）

「町の地図と、宿や、旅人が使いそうなショップの場所をリストにしておいていただけますか」

カウンター越しの所員は、了解しましたとカウンターの奥へ引つ込んだ。しばらくして、数枚の紙の束を持って戻ってきた。

所員「先ほど、”トランプ”の方が同じものを持っていられました  
が、部数足りませんでしたか？」

ヤクトミ「……そうですね、でも、あと一部足りなかったただけなんです、大丈夫です」

所員から紙を受け取ると、ヤクトミはそそくさと観光案内所を出た。  
ヤクトミ（ふー……”外”から見たら、学生も”トランプ”も同じ  
”魔導師”であって、区別とかはない感じだ……まあ、おかげで  
ややこしいことにはならずに済んだか……）

ヤクトミの脳裏に昨日の魔導師協会でのことが浮かんだ。

なぜ、ヤクトミがこの町にいるのか――

W・B・アライランスがジパング人を拉致したという犯行声明を受けはしたが、ジパング人とはジパング国外で会うこと自体考えられないため、狂言の可能性が高い。

しかし、魔導師の犯罪で、しかも、ジパング人を巻き込んだということが公になれば、宗教問題、ひいてはジパング国を中心とする神使教を国教とする国々と魔法圏の国々との間での国際問題に発展する恐れがある。

また、“トランプ”によって解決された魔導師犯罪事件は魔導師協会内だけでなく、魔導師協会連盟国（全世界の7割以上の国々）に詳細にわたって報告する義務が生じる。

国際混乱を最小限に抑えるために、“トランプ”より先にW・B・アライランスを捕まえ、ジパング人の拉致だけは”なかったことにしなければならぬ”。

それらをふまえ、“トランプ”の上層部と特に親しいスペリアル・マスター（アカデミーの教員）であるユディウス・ラークとマリア・フラレンに“トランプ”の動きを伺わせ、首謀のシャンドラ・スウェフィードが学生時代に仲の良かったヤクトミと、その師であるスペリアル・マスター、ガルフィン・フォーンにW・B・アライランス追跡を命じた。

そこで今朝、マジック・ワープを利用して、W・B・アライランスの最後の目撃情報があったマーフ国カーシー入りしたヤクトミは早速調査を開始した。

――という次第であった。

ヤクトミ(”トランプ”に顔が割れてるガルフィン先生には、W・B・アライランスを見つけ次第即連絡、”トランプ”に見つかる前に、2人でやつらを一網打尽……………これで俺も楽になる)

犯罪を犯した親友に対して、気を抜けば、怒り、悲しみ、疑問、たくさん、いろいろな感情がこみあげてくる。それに気づき、慌てて心の奥底にしまい込む。

W・B・アライランス発足声明から、今の今まで、ヤクトミの心の中は、ずっとその繰り返しだった。

ヤクトミ(…………俺は、アイツの友達とか、ライバルとか、…………そういうのの前に、これから魔導師になる人間だ…………！魔導師は個を殺し、世界に尽くすのが義務！…………悪く思っじゃあねえぞ、シャンドラ！)

この任務についてから、何度同じことを自分に言い聞かせただろうか。

聞きたいことはたくさんある。  
言いたいこともたくさんある。

しかし、かつての友は、もう自分がそんなことをできるような立場にはなくなった。

捕まえれば、刑に処すだけ。

自分とは別世界の人間。

ほんの少し前まで、  
たくさんバカやって、  
たくさん笑って、  
たくさんぶつかって、  
たくさん励ましあった。

すぐそばにいて、いつでも気軽に会える。  
それが当たり前。

そんな親友だったあいつは、もういない。

そのことが、

たまらなく悲しかった。

たまらなく悔しかった。

たまらなく腹立たしかった。

もう、どこにもぶつけられない感情。

それを昇華するには、自分の手で、アイツに引導を渡すしかない。

そんな思いで、ヤクトミは今、ここに立っていた。

午前間に、十数件、旅人が立ち寄りそうな場所を急ぎ足で回り、  
昼に休憩を挟み、再び情報収集。

日も徐々に傾き始めた頃、ヤクトミは路地裏でピタリと歩みを止めた。

ヤクトミ「……さっきから、後をつけてきているみたいですが、何かご用ですかね」

くるとヤクトミが後を振り向くと、ぼろ布のつぎはぎだらけの服を着た少年が立っていた。

少年「あんた、魔導師なのに、”制服着てない”な」

藪から棒な少年の第一声に、ヤクトミは当惑せず冷静に言葉を返した。

ヤクトミ「今、この町をうろついている”制服を着た魔導師”とは別の仕事なんですよ。それより、何かご用ですか？」

少年「別行動……」

少年は少し考え込み、思いついたようにヤクトミの腕を引っ張り、走り出した。

ヤクトミ「お、おい！ 何なんだよ！」

少年「いいから、ちよつと来て！」

少年はヤクトミをしつかりつかみ、細い路地をクネクネと進み、一軒の、今にも崩れそうな家屋の前に連れてきた。

少年が、家屋にヤクトミを連れ込もうとしたとき、扉の上に刻印された紋章を見、ヤクトミは足を止めた。

ヤクトミ「オイ……ここまさか」

少年は思い切りヤクトミを引っ張った。

少年「神使教の教会だよっ！」

少年はヤクトミを力いっぱい引っ張った拍子に足を滑らせ、転んだ少年の足が、ヤクトミの足を払った。

ヤクトミ「イテェ！」

足を払われたヤクトミは、勢いよく扉に顔をぶつけ、その衝撃で、ドアの蝶番が外れ、扉ごと家屋の中に倒れ込んだ。

ヤクトミ「……」

少年「あ！ テメー！ よくもおれん家壊したなー！」

ヤクトミ「お前ん家って……」

「おやおや、なにことかな？」

家の奥から、中年の男女が出てきた。

問

カンカンカン——金づちをたたく音が鳴り響く。カナヅチを握りしめ、ヤクトミはため息をついた。

ヤクトミ（あゝ畜生……なんで俺がこんな目に……）

中年の男はすまなそうに声をかけた。

中年男「すみませんねえ、若い方」

ヤクトミ「いえ、壊してしまったのは私ですから、修理するのは当然のことです。ところで、修理できたんですが、こんなもんですね？」

ヤクトミは扉を軽く開け閉めしてみせた。男はにっこりと笑顔を向けた。

中年男「十分ですよ、わざわざありがとうございます」

部屋の奥から、中年の女がお茶を持ってきた。

中年女「お疲れ様でした、よろしければどうぞ」

ヤクトミ「あ、すみません！ いただきます」

（……何やってんだろ、俺）

濁った茶色のお茶は、限りなく草の味がした。

ヤクトミ「ナチュラルな味ですね……」

中年女「このあたり、あまり草が生えてないので、とっても貴重なんですよ」

ヤクトミ「え、だってバザール……」

言いかけて、ヤクトミは言葉を引っ込めた。この質素というより貧相な家の様子、おそらく茶を買う余裕すらないのだろう。ヤクトミは頭をポリポリと掻き、別の質問に変えた。

ヤクトミ「俺のこと、怖くないんですか？」

ヤクトミは尻尾を振って見せた。男女は顔を見合せて、にっこりとした。

中年男「あなたが、本当に病気を持っているかなんて、わかりませんが、神使教では、病気も神からの授かりものなので、受け入れるのみですよ」

ヤクトミは渋い顔をした。

ヤクトミ（あー……そうか、それが”こいつら”のスタンスだったな）

「さいですか、……ところで俺、じゃない、私はなぜここに連れてこられたんでしょうね」

少年「町の人に、お前の口から証明してほしいんだよ」

女の背後から、少年がひよこつと顔を出した。

中年女「ハニア！」

中年の男女はきょとんと少年——ハニアを見た。

中年男「証明？ なんの？」

ハニアはヤクトミを訴えかけるような眼でみた。

ハニア「最初にこの町に来たのは俺達なんだ！」

ヤクトミ「？」

（俺”達”ってことは、こいつら家族か）

ハニア「うちは神使教の中で、水の神様を祭る分派なんだ！」

ヤクトミ（そっぴゃ、神使教ってのは多神教で、分派がたくさんあるらしいな）

ハニア「ちよつと前まで、この町は水がなくて、行商にこまめに売りに来てもらってたんだぜ！ しかも、ありえない値段で！ そんな町だから、貧乏で、今みたいに、栄えてなかったんだ！ あんなバザールだつてなかった！」

ヤクトミ「え……それ何年前の話？ お前、いくつだよ」

ハニア「栄え始めたのは4年前だよ、俺14！」

ヤクトミ「てことは、たった4年で枯れた町がここまで栄えたのか、当然のように口から出てきかけた“魔法技術のおかげだろ”という言葉はさすがに引つ込めた。

ハニア「俺達家族がこの町に来たのは5年前だ。水がないこの町に、

水が来るように祈りにきたんだ。ここはそのための教会」

ヤクトミ(「ここが」こいつら」の矛盾してるとこなんだよな……自然のありのままを受け入れるって言うついて、何かあったら、すぐ神に請う)

ハニア「父ちゃんがここに来て、祈るようになってから、町の人  
も教会と一緒に祈りに来るようになったんだぜ！……やつらが来るまでは」

ヤクトミ(……いやな予感……)

ハニアはヤクトミを指差した。

ハニア「お前ら魔導師のことだよ！」

父「こらっ！」

母「なんて言い方するんです！」

ヤクトミ「いえいえ、……なんとなく、そう言われそうだとは思ってましたから……魔導師がこの町に魔法技術を持ってきたから、祈りより魔法だつて、町の人たち離れてっちゃったんでしょ」

ハニアはうつむいた。

ハニア「……水が来るようにって祈って、……持ち込んだのが魔導師だろうがなんだろうが、実際に、この町に本当に水はきたんだ！  
それなのにこの町のやつら……」

ハニアは唇をかみしめ、絞り出すような声で続けた。

ハニア「信仰を忘れるどころか、神使教が魔導師と対立しているって理由で、俺達家族を……」

膝の上で固く握りしめた砂まみれの拳に、ぽたぽたと涙が落ちた。消えた言葉の先は、この家族の生活環境を見れば、想像がついた。同時に、ヤクトミはガツンと頭を殴られるような今までにない衝撃を受けた。

——神使教は魔導師に反抗する頭のおかしな集団だ——

神使教というだけで、決め付け、見下し、侮蔑の目で見ていたことに気づいた。

そしてそれは、獣人だから、と自分を見ていた大衆と、神使教だから、と彼らを見ていた自分とが、何ら変わらない同類である、ということでもあった。

今まで自分を見てきた大衆の気持と、神使教というだけでただ差別される神使教徒の生の声を初めて聞いたことは、ヤクトミがこれまで信じてきたものが、実は隔絶された情報の中で助長された間違いを含んでおり、必ずしもすべてが正しいわけではないという現実を叩きつけた。

ヤクトミ「……」

ヤクトミは言葉を捻り出すことすらできなかった。

沈黙を破ったのは母だった。

母「お父さん……」

父はゆっくりうなずくと、ハニアを見た。

父「お前の歳を考えて、今まで自粛していたが……」

ハニアは鼻をすすり、薄汚れた袖で目をこすると、顔をあげた。

ハニア「何？」

父「信仰とは何か、確かめ直すためにも、巡礼の旅に出よう」

——信仰とは何か——

ハニアはこれまで父から決して出てくるはずのないと思っていた言葉を父の口から聞き、驚いた。そしてそのまま確かめるように母を見た。

母は深くうなずいた。

この町での5年間で、”何か”を思っていたのは自分だけではなかった。

あの敬虔な父も母も、信仰の心が揺らぎ、折れそうになっていたのだ。

この町での現実を神に問うための旅——ハニアは迷いなく頷いた。

ヤクトミ(……えーつと……結局俺は何のために連れてこられたんだ……)

ハニアはヤクトミに顔を向けた。

ハニア「おい！ 魔導師！ 連れてきて悪かったな！ もう行つていいぞ」

父「こら！ だいたい、どうしてここに連れてきたのか、最後まできちんと説明もせずにお返しするとは何事です！」

ヤクトミ「いえいえ、話を聞いていてわかりましたよ。……要は、魔導師である俺の口から町の人に、”祈った結果の証明”をしてほしいってことだったんだよな」

ハニアは気恥ずかしそうに頷いた。ヤクトミは父と母を見た。

ヤクトミ「……新しいですね」

父「？」

ヤクトミ「神使教の”正当性”を魔導師に証明させるって発想」

ヤクトミは微笑んだ。

ヤクトミ「ハニアは、魔導師と神使教の対立って構図に風穴を開ける人間になるかもな」

父「……もしくは、それが神使教の元来あるべき精神なのかもしれない」

父はハニアの頭に大きな手を置いた。

母「さあさあ！ そうと決まれば、早速出かける準備を始めましょ

う！」

ヤクトミ「じゃあ、俺はこれで……」

ハニア「あっ！ ごめんな！」 制服着てる魔導師”とは別で仕事だったんだよな！」

ヤクトミ「そ！ じゃあ、旅気を付け……」

ハニア「今朝見た魔導師も制服着てなかったけど、同じ仕事か？」

——制服着てない魔導師……今朝！？

ヤクトミは慌ててハニアの両肩を掴んだ。

ヤクトミ「……どんなやつだった！？」

いままで冷静だった目の前のこの魔導師の慌てように驚きながらも、ハニアを記憶をたどった。

ハニア「えつと……金髪で髪が長くて、……耳がとがつて……」

ヤクトミ（エルフの魔導師！ マーフ国には配属されていないはず！ エオル・ラーセンだ！）

「……合流したいんだけど、どこに行ったかわかるか？」

ハニア「明け方、オレが水汲みに行ってた時に、町の北の方に走ってたけど、それ以上は……」

ヤクトミ「北か！ サンキュー！ それじゃ！」

早速、表に出ようとしたヤクトミは、再びハニアに腕を掴まれた。

ヤクトミ「え！？ まだなんかあんの！？」

ハニア「巡礼の順序はちょうど北の方角なんだ」

ヤクトミ（……まさか……）

ハニア「友達と合流するまででいいから、砂漠を護衛してくれ」

ヤクトミはこめかみを抑えた。

ヤクトミ「そうきたか……」

（この家の状況を考えると、大した装備もできないだろうしな……” 乗り掛かった船は最後まで責任持て” ってガルフィン先生の教えだし……）

そして頭をボリボリかきながら、ヤクトミは少しため息をついた。  
ヤクトミ「なるべく早く出たいです。必要そうなものは買いそろえておくので、バザールの北口で待ち合わせましょう」

父「え……しかし……」

ヤクトミ「私もさすがに手ぶらで砂漠は渡れないですし、ついです。すよ。それか」

ヤクトミはハニアを指差し、ウインクした。

ヤクトミ「ハニアくんの出世払いってことで」

ハニア「100万倍にして返してやるよ」

2人は互いを見合わせ、ニカリと笑った。

日も地平線に沈み、藍色とオレンジのグラデーションの中に、星がきらめき始めた頃――

フィードたちは、偶然見つけた風化しかけの大岩の影で、暖をとり始めていた。

エオル「今日だけで結構歩いたね……よしのさん、お疲れ様」

よしのは食事の後片付けをしつつ、申し訳なさそうに笑った。

よしの「いえ……お二人が歩くスピードを合わせてくださったので……」

エオル「あ、今片づけてるやつ、火にくべておいていいよ！ その

……疲れてるだろうし（本当は証拠隠滅だけど……）」

よしの「ああ！ 燃料代わりですね！」

よしのはヨイシヨと焚き火の中に食糧がくるまれていた包みの葉などを投げ入れた。

焚き火から、パチパチと心地よい音が鳴る。

……パチパチパチ……

エオルから、何か話しかけられているような気がするが、目の前でゆらゆらと揺れるあたたかなオレンジの光を眺めているうちに、よしのの臉は自然と重くなっていた。

エオル「……どうやら、よしのさんは寝付きの良いタイプみたいだね」

フィードは肩をすくめた。

フィード「みたいだな」

エオルは荷物の中から毛布を取り出し、荷物とともによしののもとへ持っていった。

エオル「よしのさん、これ、枕代わりと毛布」

よしの「あ……いえ！ 私は大丈夫です。2人がお使いくださいな」

エオル「遠慮しないでいいんだよ。俺たちのは俺たちであるから」

よしのは申し訳なさそうに毛布を受け取った。

よしの「ですが、エオルさまのお荷物を頭に敷くわけには……」

フィード「あ！ そーだ」

2人はフィードを見た。フィードはごそごとコートの内側をあさり、30センチほどの黒い球体を取り出すと、よしのに投げ渡した。フィード「じゃあ、これからそいつがおめーの荷物だ。枕でもなんでも好きにしな。」

よしのの腕の中には、楕円形のまん丸としたものから、パタパタと左右に揺れるタヌキのような尻尾、あるのかないのか分からないほどの足、三角の耳が生えた真っ黒な動物が、つぶらな瞳でよしのを見つめていた。

よしの「まあ！　かわいらしい！」

エオルは怪訝そうな顔で、よしのの腕の中の得体のしれない生き物を覗き込んだ。

エオル「なにこれ？　タヌキ……ではないし……豚……？」

よしの「耳が三角ですし、猫ですよ！」

黒い生物「みゃー」

よしの「ほら」

エオル「本当だ」

フィード「いや違う」

あれ？と2人はフィードを見た。

フィードは真顔で答えた。

フィード「非常食だ」

エオル「……何言ってるの？」

フィード「名前はクリスマスだ。しっかり食わせて、肉々しさをキープさせとけよ、よしの」

エオル「ちよつとー！　なんか割としっかりした名前まで……しかも嫌に人間味のある名前だし！」

よしのはクリスマスを抱きしめ、ボロボロと涙をこぼしている。

エオル「ほらー！　よしのさんショックで泣いてるし！」

よしの「……いえ……」

エオル「え？」

よしの「家畜は神様からの恩恵です。」

エオル（……そういえばこの人神使教……）

よしの「その大事な神様からの贈り物のお世話を、私のような新参者に任せていただけることがうれしくて……」

エオル「さいですか……」

「やれやれ、とエオルはもといいた位置であぐらをかいた。

エオルはこくりと頷いた。

アーティファクト

「エオル 古代兵器だよ」

エオルは頷いた。

エオル「そうだったけ？」

よしのは無意識にクリスを強く抱き締めた。

フィード「トランプの將軍クラスは全員もってたな。ただの飾りかと思ってたぜ」

「エオル……間違いなく、トランプの將軍クラスと当たったらアウトだね。」

よしの「……」トランプ」とは……？」

エオル「あ、そっか……えと、訳あって、俺たち、トランプってやつらに追われてるんだ。」

よしの「追われている？」

フィード「あー、それについて1つ」

エオル「なに？」

フィード「よしのは俺様たちの人質ってことにしたから」

エオル「……はい？」

フィード「一員”よか、”被害者”のが、もしも俺様たちが捕まった場合、よしのは無事だ」

エオル「……なるほど……」

(……もしかしたら、よしのさんは俺たちと一緒にじゃないほうが、いいんじゃないのかな……)

フィード「まあ、そんな”もしも”なんてありえないけどな」

エオル「どっからくんの、その自信……」

よしの「違いますよ！」

2人はよしのを見た。

よしの「お二人は私の恩人です！」

フィードは声をあげて笑った。

フィード「そりゃそーだ！　つか、話し戻すけど、よしののアーティファクトって機能的にはどんななんだ？」

よしの「機能？」

エオル「アーティファクトって、剣とか、弓とか、たいていが武器の形をしてて、それぞれ特殊な力を持つてるんだ。魔導師専用具って発想の原型なんだけど……」

フィード「んなウンチクどーでもいい。こないだ、青い球から変な出てきたよな」

エオル「変なのって……水竜みたいなのだね。しかも、それ自体

が意思を持っているようだ……」

フィード「どうやって出せたんだ？」

よしのはうつむいた。

よしの「それが……さっぱり……どういふものかさえ……あのときは”火を消さなきゃ”って思っただけで……ただ、これが『ヤサカニ』というものだということは伺っております」

フィード「ヤサカニ……なんかうまそうな名前だな」

エオル「んー……なんていうか、よしのさんのその思いに反応して自主的に発動した形だったよね？アーティファクトってどうやって動かすものなのかは分からないけど、もしかしたら、そういうものなのかもしれないね」

フィード「ふーん。だがまあ、確実なことがひとつわかった」

エオル「何？」

フィード「砂漠は、水筒がねーと役立たねーどつかの魔導師よか、よっぽど使えるってこと」

エオル「あのねえ！」

クリス「みゃー！」

フィードとエオルは、クリスの鳴くほうに振り向いた。よしが、座ったまま、寝息を立てていた。

フィード「……ねた」

オイ、とフィードはエオルに視線をやり、あごでよしのを指した。

エオル「ハイハイ」

エオルはよしのを寝かせ、毛布をかけた。

エオル「なんか、ちよっと思っただけど、」

フィード「なんだよ」

エオル「よしのさんって、記憶喪失の割に、マイペースだよな？」

フィード「病院行きレベルの記憶喪失よか、全然いいだろ」

エオル「そうじゃなくて、……料理の味付けのこととか、……その、

そもそも記憶の無くし方っていうか……」

フィード「不自然だな」

エオルはフィードにやっぱり、という視線を向けた。

フィード「だが、怪しいガキ云々の時点ですでに怪しいことはわかってんだし、どのみち、ジパングまで行きゃあ素性はハッキリするだろ」

エオル「……そうだね……！」

フィード「それよか、追手だ。そろそろなんかしら手を打ってくるだろうから、準備しとけよ」

エオル「……そうだね……」

3日後、午後。

一面砂だらけだった景色が、やがてゴツゴツとした黄土色の縦に長い岩の森となり、それを抜けると、視界が開け、再び砂だらけの景色となった。

砂の大河、河川敷・南、モンスターハンターキャンプ地。

エオル「うわあ！ 本当に砂が河みたいに流れてる！」

眼前には、遠くまで、砂が河のように緩やかな流れをたたえ、その流れに沿って、太陽の光を反射してキラキラと砂粒が輝いている。遥か対岸に霞みがかって岩がポツポツと見え、河の周囲がここまでの道のりと同じような岩の森に囲まれた地形をしているであろうことを想像させた。

視線を手前にもつてくると、砂にまみれたテントがいくつか立てられ、15、6人ほどの荒々しいモンスターハンターたちが、酒を片

手にワイワイとお祭り騒ぎをしていた。

フィード「魚釣り」さぼって、何やってんだかねえ」

エオル「思っても本人たちの前で言わないでよ！ 普通に何事もなく、向こう岸に渡してもらえばいいんだから！」

ハンターたちは、客の姿を発見すると、ニヤニヤしながら近づいた。ハンター「どーもどーも！ おにーさん、女の子2人もつれちゃつて、こんなとこに何しに来たのかな？」

フィード「ん？」

エオル「え？ 俺！？……女の子2人って……」

エオルは笑いをこらえながら隣のフィードを見た。

エオル「フィード……間違えられてる……」

フィードはなるほど、という顔を見ると、ニヤリと悪だくみの顔に変わった。そして近くにいたハンターの袖を指先でつまみ、目をキラとさせた。

フィード「あのおー私たちが向こう岸に渡りたいんですー！

でもおーお金あんましくってえー（裏声）」

エオル（アホだ……）

ハンター「えー！ じゃあ、安くしとつからさあ、今日はやめて、明日にしなよ！」

フィード「それがあーお酌の一つでもしたいとこなんですけどあーめっちゃ急ぎなんですよあー」

もう一人、別のハンターがフィードの華奢な肩を抱いた。

ハンター「そんなこと言わないでさ、実は、渡し守の営業は午前中までなんだよねー」

フィードとエオルはこのやり取りを通して、同時に同じことを思った。

——他に渡航客がいないと思ったら、こういうことが……——

エオルはよしのにハンターたちが寄ってこないよう肩を抱きよせ、軽く溜息をついた。

エオル「皆さん、俺やそいつがつけてるバッヂ、見覚えはないですか？」

胸元に輝く黄金のバッヂ、魔法の象徴である六芒星に8つの宝玉の紋――

ハンターたちはゲラゲラと笑いだした。

「おいおい、魔導師先生様だぜ〜！」

「ウケる〜サインくださいよ、サイン〜」

エオル（ダメだこりや……完全に酔っぱらってる）

「じゃあ、渡し守は結構なんで、交通手段だけ貸していただけませんか？」

ハンターたちはニヤニヤしながらエオルを見た。

ハンター「じゃあ、俺たちを倒して奪ってってくださいよ〜魔導師先生！」

エオル（ぐ……こいつら……魔導師だつてこと逆手にとって……）

魔導師は一般人への暴力は重罪

バキッ

ハンターの一人が、突然1メートルほど吹っ飛び、ああむけに倒れると、白目を向いて気絶した。

エオルは恐る恐るフィードに目をやった。

フィードはハンターたちを次々と殴り倒していた。

ハンター「うわっ！　なんだこいつ……ギャー！」

エオル「ギャー！」

エオルは慌ててフィードを止めようと押さえつけた。

エオル「なにしてんのっ！」

フィード「こいつらのお望み通りにしてやってんだよ！」

エオル「お望みでもダメー！！」

「動くな！」

フィードとエオルが声の方に目をやると、ハンターの一人が、よしのを羽交い絞めにして、首に刃物を当てていた。

エオル「しまった！」

フィード「おお！　これが本当の”人質”……」

いい加減にしろ！とエオルはフィードの頭を思い切り叩いた。

すかさず他のハンターたちが、フィードとエオルを取り押さえた。

エオル「くっ……」

フィード「チッ！」

よしの「えっ！？　フィード様！　エオル様！　お二人に何をなさるのですっ……！」

よしのはバタバタと暴れ出した。

フィード「あいつ……自分の状況、よくわかってねえな」

エオル「よしのさーん！　危ないから、大人しくしてて！」

よしのはキツとエオルを見た。

よしの「いいえっ！　今お助けいたしますわ！」

エオル「え……」

よしのの足元から風が渦を巻き、光とともに表れた4つの宝玉の結界が、よしのを押さえていたハンターを弾き飛ばした。

ハンター「な……！　こいつも魔導師か！」

エオル「お……」

フィード「でかした！」

すると、騒がしかったハンターたちが一瞬にして静まり、フィードたちから距離を取り始めた。

エオル「？」

ハンター「ジ……ジパング人で……魔導師……やばい！　トランプの將軍だ！」

その言葉を聞き、フィードがひらめいたように悪だくみの笑みを浮かべた。

フィード「そのとお……り！　この方を誰と心得るか……っ！」

エオル「いや、トランプの將軍って、別に一般の人は心得るような人ではないでしょ……」

ところが、ハンターたちはガタガタと震えだし、あからさまにおびえだした。

エオル「あれ……？」

よしの「？」

フィード「さてはお前ら、なんか法に触れるようなことしてんなー！」

ぎく……っ！

ハンターの一人がおずおずと答えた。

ハンター「い……いやいや……天下の將軍様にお会いできて光栄なだけですよ……」

エオル（嘘くさいな……）

フィード「まあいい、今回はプライベートでの観光だ。とりあえず向こう側に渡してくれりゃあ、お前らのことは今回は目をつぶってやる」

エオル（そんな勝手な……）

ハンターたちは慌てて準備を始めた。

その中、ハンターの一人が、よしのを取り囲むように宙に浮く宝玉を不思議そうに見つめた。

エオル「あ、よしのさん。それ、もうしまっても大丈夫だよ」

ハンター「あ、あの！ 將軍様！」

よしの（私のことですよね……？）

「はい、なんでございましょう？」

ハンター「それとよく似た球が、この先の滝のあたりで”よく目撃される”のですが……將軍様がその魔法で何かされているのですか？」

思わず、よしのはハンターの裾をつかんだ。

よしの「え！！ それは本当ですか！？」

ハンター「えっ！？」

エオルがハンターたちを急かしているフィードを手招きしながら、慌てて話に割って入った。

エオル「待つて待つて！ 球が”よく目撃される”って表現、おかしいでしょ！ 詳しく教えてもらえます？」

ハンター「は、はい……赤茶色に光る球が宙にフワフワ浮いているのをよく見かけるって話があるんです」

エオルは腕組みしてフィードを横目で見た。

エオル「どう思う？」

フィードはにやりとして両手を腰に当て、答えた。

フィード「行く価値はくないかもな。なあ！ よしの！」

よしのは胸の前で手を組み、深くうなずいた。

よしの「はい！」

フィード「よし！ 決まりだな！」

フィードは川渡しの準備をするハンターたちのもとに駆け寄った。  
よしの「？」

エオル「川渡しがいなくなっちゃったから、断りに行ってくれて  
るんだよ」

しばらくして、フィードはエオルとよしのを呼んだ。

エオル「なんだろう？」

よしの「ですね？」

エオルとよしのがフィードのもとへ行くと、フィードは自信満々に  
川に用意された舟を親指で指した。

フィード「よし！ 行くぞ！」

エオル「……えっと……なんの話？」

フィード「だから、滝に行くんだよ！」

エオル「ああ、なるほど！ ここから歩いて行くよりも、舟で近く  
までいったほうがいいよね！」

フィード「まあ、そーいうことだ。おら、とつとと乗れ！」

3人は舟にのりこんだ。舟は4人乗り程度の大きさだったが、荷物  
が少なかったため、なんとか乗れないこともないといった広さはあ  
った。

よしの「まあ！ 石のお舟！」

エオル「本当だ！ たぶん木製だと砂との摩擦ですぐダメになっ  
ちゃうんじゃないかな」

ハンター「その舟は差し上げます」

エオル「え！？」

ハンターたちは、そそくさと一行の乗る舟を河に出した。

エオル「ちょ、ちょっと！」

その時、よしのの膝の上にいたクリスが、ぴよんと岸へ跳び移った。  
よしの「あつ！ クリスちゃん！」

思わず舟から身を乗り出したよしのを、フィードが制止した。

フィード「動物には帰巢本能があるからな。飽きたら帰ってくんだ

ろ」

エオル「いやいやいや……」

よしの「なるほど！　そうですね！」

エオル「……（よしのさん……）」

舟はゆつくりと黄金色に輝く砂の流れに揺られていた。

エオル「なんか……景色変わらないから、距離の感覚がなくなってきたんだけど……」

エオルの言うとおり、河の周囲は大小様々な砂色の岩に囲まれ、遠くの景色が全く見えない。と言っても、その遠くの景色も砂しかないのだが。たまの景色の変化といっても、巨大レモラがまれに跳ねるくらいだ。

ジリジリと照りつける太陽。日よけのマントを頭から被っているが、マントにこもる熱気と、石造りの舟からの照り返しで、体中から汗が噴き出した。

エオル「よしのさん、水分補給しつかりね。フィードは……」

舟の約半分を占領して、ゴロンと横になり、日よけのマントをすっぽり被ってグーグー寝ていた。

エオル「……大丈夫そうね」

その頃、ハンターたちのキャンプ地では、ハンターたちがせつせとキャンプを撤収していた。

「おい、ちゃんとうまいこといって嘘教えたんだろぅな！」

「ああ！　あいつら、まんまと滝へ行つたよ！」

「あぶねえ！　あぶねえ！　まさか、この魔導師専用具が將軍様のものだったとはな」

ハンターの一人が、テントの中にあつた荷物の山から簡素な木箱を取り出し、中身を取り出した。

その手の中には、”土”という文字が浮かぶ手のひらサイズの茶色い宝玉――

別のハンターが宝玉を覗き込んだ。

魔導師専用具つてのは不思議だよなあ！ 念じるだけで、砂を思い通りの形にできるなんてな！ ここじゃあ、こいつにたっぷり稼がせてもらったぜ」

この不思議な球を河に向ってかざせば、たちどころに河の流れを止めたり、河を真つ二つに割ったり、河の流れを対岸に向けることができた。

「名残惜しいが、見つかったらやばいしな！ おまけに將軍様の魔導師専用具だし」

球を手にしていたハンターは宝玉を砂の大河に放り込んだ。

「証拠隠滅つと」

ハンターたちはゲラゲラ笑いながら、再び撤収の準備を始めた。

「すいませーん！ 向こう岸にわたりたいんですけどー！」

ラクダに乗った、日よけのマントを頭からすっぽりかぶった渡航者が4人。

「客か……」

ハンターたちのうちの一人が答えた。

「お客さん、すいませんが、たった今をもちまして閉店なんですよ」  
声をかけた客は少し黙ると、

「そうですか……ではこれだけお聞きしたいのですが、最近、黒づくめの銀髪赤目の魔導師とか、来てませんか？」

ハンターたちの作業の手が止まった。

「ええと、お知り合いで？」

もう一人の客がラクダから降り、飛び上った。

「ヤクトミ兄ちゃん！ やったじゃん！ ついに友達の足取り発見！」

「そうだな、ハニア」

ヤクトミはポンとハニアの頭にゴツゴツとした手を乗せ、マントのフードを取ってラクダから降り、ハンターたちに近づいた。

ヤクトミ「魔導師だ。そいつらを追ってる。ここに来たということは、そいつを向こう岸に渡したんだな？ ジパング人は一緒だったか？」

ハンターの一人がバツの悪そうにおずおずと答えた。

ハンター「えっと……向こう岸には渡しておりません。この先の大砂瀑布へ向かいました。ジパング人もいました。」

ヤクトミ「は？ 河を渡っていない？ なぜ？」

ハンター「さ……さあ……？」

ヤクトミは少し視線を落とし、考えると、ヤクトミの様子をうかがっていたハニア一家を呼んだ。

ヤクトミ「申し訳ないですが、護衛はここまです。このラクダは差上げます」

ハニア「……友達見つかるまでって約束だもんな、仕方ないよ」

ハニアの両親はラクダから降り、ヤクトミに頭をさげた。

ヤクトミは自分の首掛けをハニアに掛けた。その首掛けには鋭い牙が通されていた。

ヤクトミ「魔除けだ。大概のモンスターはこれを恐れて近づいてこない。旅、頑張れよ」

ヤクトミは再びハンターたちに向い、語気を強めた。

ヤクトミ「この家族だけでも、渡していただけませんかね？」

ハンター（し……仕方ない）

ハンターの一人が特殊な金属でできた矢に縄をくくり、対岸の大岩

に向けて放つと、矢はぶすりと岩に刺さった。

ハンターの中でも特に小柄な者がそのロープを伝い、対岸に着くと、ロープを適当な大きさの岩にくくりつけた。

次に石の舟を一艘出し、特に屈強なハンターが舟からロープを手繰りながら、まずハニアを、次に母、そして父の順に舟に乗せ、一人ずつ運んで行った。

途中、巨大レモラが飛びかかってきたが、岸边と舟上から応戦し、なんとか無事にハニア一家を対岸に送ることができた。

ヤクトミ（なるほど、確かにこりゃあハンターならではの方法だな）ヤクトミはハンターたちに多めに謝礼を渡し、ハニア一家のいる対岸に向って笑って見せ、軽く手を振ると、河に沿って、魔導師の超人的な跳躍力で岩の上をぴょんぴょんと走り出した。

その顔には、最早笑顔はなかった。

#### 4 . t h e   p l a c e   o f   t r u t h (後書き)

本家サイトもどうぞ↓  
http://usaginonegura  
dechoitopipuku.com

#### 4・X（前書き）

5月に本家サイトでupした第4話と第5話の中間部分の補足小話  
3話分。

4・1話 the lost promise ∴ 8年前の話

4・2話 each friend ∴ 4年前の話

4・3話 new each friend ∴ 現在の話

その人の苦しみを知るには、その人を知らないといけない。

ほんの一部分ではありますが、フィードとヤクトミがどういう人物  
像かお伝えできれば…

母 「お前がこれからゆく”世界”は、

お前を人として見てくれることはない。

そういう場所だ。

だが、ゆくゆく私の跡を継ぐには、それを知らなければ  
ならない。

私の息子であるなら、たとえどんな仕打ちを受けようと、  
負けてはならぬぞ」

ヤクトミ「はい！母上」

「なあ」

白いふわふわの髪少年は、しつこく自分の周辺をキープしている  
隣のヤツに問いかけた。

「あん？」

問いかけれ、銀髪は適当そうな返事をした。

10月――様々な年齢、種族の新生たちが、  
ここ、魔導師養成学校アカデミーのキャンパスを初々しい空気で包んでいた。

すれ違えば、必ず新生だとわかる。

なぜなら、獣人の教師がいるとまだ知らない新生たちは、  
決まって白い髪アカデミーの少年の尾を驚いたように見つめるからだ。

――なぜ、ここに獣人がいるのかと――

そして、決まってすぐ目を逸らす。

――関わらないようにと――

白髪「お前、俺のこと怖かねーのかよ」

銀髪「怖えよ。なんでかわかんねーけど。  
みんなそうだから、俺様もそうだ。」

白髪「…じゃあ来んなよ」

銀髪「俺様も次の講義コッチなんだよ」

キャンパスの石畳

冬の準備のために葉の色を赤や茶に染めた木々  
空は青く、小鳥は歌う。

白髪「…鳥はいいな」

白髪はぽつりとつぶやいた。

銀髪「なんで？」

白髪「鳥だ」ってみんなに思われてるから」

銀髪「…」

銀髪は白髪の首根っこをふんづかみ、

石畳の上をはずれ、

木立の中に分け入った。

白髪「なんだよ！？」

赤や茶のトンネルを抜けると、  
小さな小屋がひっそりと建っていた。

銀髪「見ろ、昨日見つけた。上級生の飼育小屋だ」

中にはフサフサとした毛だるまのような小さな鳥が、  
わらわらと餌をほおばっていた。

銀髪「こいつも鳥だ。でも飛べねえ、食用だ。」

白髪はよくわからないが胃の裏あたりがむかむかとした。

白髪「だから？」

銀髪「鳥つつつても、いろんな鳥がいるんだよ。

自由に空飛んでるやつとか、食べられるだけのやつとか。

それも全部”鳥”」

白髪「…だから？」

銀髪「…あれ？ちょっと違うか？」

銀髪は腕を組んで一瞬考え、再び白髪に向いた。

銀髪「なんか、最初”お前とおんなじやつ”見たとき、

あえて違いを認め合わないと”本当の理解”ってできないんだってオヤジが言ってた。

でもそれってすごく難しくって、

世界中や自分の中にも”テキ”がいっぱいなんだって。

だから、俺様、お前と仲良くしようと思う」

白髪「意味分かんねーよ。

難しくってテキがいっぱいなのに、

俺と仲良くすんのか？」

銀髪は不敵な笑みを浮かべた。

銀髪「だって、そのほうが、面白いじゃん。

面白いから、ここでの友達第1号はお前に決まり！」

白髪「他のやつにいじめられっぞ」

銀髪はフッフと含み笑いをした。

銀髪「テキは多けりや多いほど燃える！」

白髪「ばかなやつ」

白髪はうつむいた。

銀髪は「そういえば」と手を叩いた。

銀髪「お前、名前なんだっけ？」

ヤクトミ「…ヤクトミ…」

フィード「俺様はシャンドラだ」

フィード「俺様の目標は対魔導師犯罪警察組織の将軍になることだ  
！」<sup>トラップ</sup><sup>キング</sup>

ヤクトミ「俺と同じじゃねーかつ！

マネすんなよ」

フィード「なんだとー！

じゃあ、お互いライバルでもあるわけだな」

「どっちが先になれるか、競争しようぜ！」

フィード、ヤクトミ 10歳の秋――

フィード「あーめんどくせえ」

ヤクトミ「は？」

フィード「だって”コレ”、演習のたんびに書くんだろ？」

フィードはそう言って机の上の白い紙を顎で指した。

ヤクトミ「…お前、俺ら今日が初演習なんだぞ。

ハナからそんなんで、どーするよ。」

フィードは机に突っ伏した。

フィード「何書きやいーつつーんだよ」

ヤクトミ「オヤジさんいるつつてたじゃねーか。

オヤジさんに、…何か…メッセージとか…」

フィード「もう俺様のオヤジじゃねーんだよ。

ここ（アカデミー）入るのに反対しててさ、

入る代わりに縁切るつつわれて」

ヤクトミ「そのまま切ってきたのか」

フィード「切られてきたんだよ。」

ヤクトミ「…でも、それまではお前のオヤジだったんだろ？  
その事実が変わりようがねーし、いいんじゃない？」

ヤクトミは反対された理由は聞かなかった。  
聞かなくても、今書かされている”コレ”で理由はわかった。

——遺書である。

フィード「…それもそうだなー…。」  
フィードはだるそうにペンを握り、机に向かった。

アカデミー  
魔導師養成学校第18演習場。

深い森の中にぽつんと開けた広い土地。

フィード「なるほど。初めて魔法使うやつらにはもってこいのところだな」

ヤクトミ「…」

ヤクトミはしきりに後ろの5、6人の同期の集まりを気にしていた。  
フィード「何だよ」

ヤクトミ「や…」ここでも”やつら、何か企んでんじゃないかってさ…」

フィードは鼻で笑った。

フィード「キンチョーの初演習で、いくらなんでもそりゃありえねーだろ」

ヤクトミ「…そうだな」

パンパン！——静粛に、と手をたたく音。

「はいはい！これから”爆炎魔法実践基礎”の演習始めるぞー。」

間違つて来たやつ、遺書書き忘れたやつ、いないな？」  
参加者は静まった。

「よし、俺は今日の演習の担当のジャイヴ・タイラーだ  
マスター・ジャイヴ、またはジャイヴ先生、好きな方で呼べ。  
ただし、名前の方で呼んでくれよな。

その方がお互い親近感が湧く。大事なことだ。」

フィード「…よくしゃべるやつ」

フィードはジャイヴと目が合った。

ジャイヴ「ヤツ」じゃない。」ジャイヴ先生」、だろ？」

フィードは舌打ちして視線をそらした。

ジャイヴ「では、今から15分。体内に魔力をためる時間を作るから、よろしく！」

やり方わかんねーやつは基礎の基礎から出直しな。

15分後にまた来る」

そう一方的に言い放つと、

ジャイブの姿はスッと中空に消えた。

ジャイヴの指示に従い、

しばらく、生徒たちは各々瞑想し、魔力を体内にためていた。

ヤクトミも木陰に座り、そうしていたが、ふと、目の前がかげつた。

ヤクトミが上を見上げると、さきほど自分が気にしていた同期たちが  
囲うように立っていた。

「何でお前と同じ演習受けなきゃなんねーんだよ。

てめーはさっさと外されろ」

すると、パン！とヤクトミの胸に何かを張り付けた。

ヤクトミ「なっ！？何だよこの魔法陣……」  
サークル

そこには赤いインクで刷られた不思議な模様のステッカーが貼られていた。

「取り込んだ魔力を倍にする魔導師専用道具だと。

これでオーバーパニックでも起こしな」

——オーバーパニック

自らの容量以上の魔力をとりこみすぎて、失神などを起こす症状

ヤクトミ「ぐっ」

ヤクトミは急激に胸が苦しくなった。

少し離れた場所で、ポツンと瞑想にふけていたフィードは、友人のただならぬうめき声に、慌てて駆け付けた。

途中、同期の何人かとぶつかった。

フィード「いてっ！」

彼らは全員顔が真っ青で、ガタガタと震えていた。

「こ…こんなつもりじゃなかったんだ…」

フィード「は！？」

バキバキバキ…

突然、正面の木々が倒れ、鳥たちが一斉にはばたいた。

フィードは空を見上げた。

そこには巨大な白い狼が、牙をむいて見下ろしていた。

フィード「え…ヤクトミ…？」

ヤクトミは太い前足を振り下ろした。

「うわぁ！」

一瞬にして、その場にいた全員が、4、5メートルほど遠くの木ま  
で叩きつけられた。

フィードはよろりと起き上がった。

フィード「いつ…」

おい！ヤクトミ！何してんだよお前！」

獣化したヤクトミは耳まで裂けた巨大な口を少し開け、

大量のよだれをボタボタとおとし、

フィードと眼を合わせた。

その眼は——理性あるものの眼ではなかった。

フィードは、フツと内臓が浮くような、

自分を自分の脳みその少し上から眺めるような感覚に襲われた。

手に、足に、のどに、力が入らない。

ヤクトミがその巨大な口を大きく開けた瞬間——

強い光——目がくらみ、

激しい爆音——耳がキーンと聞こえない、

ぼやっと正面に見えるのは自分の右手。

まっすぐ、正面にかざされている。

その先には

うつぶせに転がっている人型のヤクトミ。

よかった、何が起こったか、わかんないけど、あいつ、元に戻ったんだ！

しかし、こぼれかけた安堵の笑みは凍りついた。

ヤクトミの体の下から、濁流のように流れ出る赤い液体。

フィードは反射的に駆け寄った。

慌ててヤクトミをあお向けると、  
胸のあたりが黒く焼け焦げ、その中心から絶え間なく血があふれている。

木の陰に隠れていた傷だらけの同期の一人が言った。

「うわ…あいつ、友達に向けて”カラ魔法”うちやがったよ」

その言葉に、

自分では全く何を言っているのか理解できなかったが、  
ボロボロと涙がこぼれ始めた。

フィードはわんわんと泣き叫んだ。

アカデミー  
魔導師養成学校 第8保健室

「いやー、相手が」あの「ヤクトミくんではよかったよ。」  
保険医が言った。

「獣人の頑丈な体に加えて、

彼は獣人の中でも特別な家系の生まれでね。

心臓が3つあるんだ。

残り2個が無事だから、死なないよ。

まあ、オーバーパニックの症状も特殊だったけどね。」

憔悴しきったフィード。

ただひたすら、

遺書を書いていたヤクトミの横顔が頭から離れなかった。

あれは、誰にあてたものだったのだろうか。

どんな思いで書いていたのか。

その人がこの事を知ったらなんて悲しむだろう。

次にフィードは自分の右腕を見た。

自分が死にたくないから、

だから」とつさに「出たのか。

ああ、自分はなんて醜く、汚い人間なんだ。

——俺様は 魔導師に向いていない …——

ふと、その右手にベッドから手が伸びた。

フィードはベッドの上の友人を見た。

ベッドの上の友人は息のかすれた、声とは言い難い声で、語りかけた。

ヤクトミ「ありがとな」

フィード「…なんで…」

ヤクトミ「何でって…俺、危うくみんなを傷つけちゃうところだったし。」

それを止めてくれてマジ助かった。

やっぱお前、親友だわ。」

フィード「違う、俺様は死にたくなかったんだ…だから…」

ヤクトミはペシリと手の甲でフィードの額を叩いた。

ヤクトミ「覚悟が足りん。だからそうなる」

フィード「…ガルフィンのマネかよ」

ヤクトミ「次からはちゃんと遺書かけよ。

あれは”魔法を扱う覚悟”を決めるためのもんだって俺は思ってる。

”こんなこと”で心折れるやつに

魔導師なんてつとまんなーよ。

今の気持ちに負けんなよ。

ふんばりどこってやつだぞ」

フィードはうつむいた。

口角は上がっているが、ぽたぽたと涙が落ちていた。

フィード「やっぱお前、親友だわ。」

フィード、ヤクトミ 14歳――

ハニア 「ねえ、ヤクトミ兄ちゃん」  
ヤクトミ「ん？」

ムー大陸 マーフ国 北部一帯を占める大砂漠 ” アクロスザナル”  
ヤクトミは北へ向かったと思しきW・B・アライランスを追うため、  
巡礼の護衛を兼ね、ハニア一家と一路北への最短ルートである  
砂の大河南岸のモンスターハンターキャンプ地を目指していた。

ラクダに揺られ、延々と続く砂ばかりの風景に飽きてきたハニアは、  
ヤクトミに、気になっていた疑問をぶつけた。

ハニア 「兄ちゃんのさ、そのお友達って、どんなやつ？」

ヤクトミはうつむいて少し黙り、ハニアに次のように切り返した。

ヤクトミ「ハニア、

お前の今までで一番の友達って、どんなヤツだった？」

ハニアは空を見上げ、少し考えた。

ハニア 「カーシーの前に住んでた町の教徒でさ、

よくうち（教会）に来てたから仲良くなったんだけど…

んー、どんなやつ…そうだなー…

いざ、どんなやつって聞かれると、パツと出てこないな

あ…ちよつと待って…」

ハニアは腕を組み、考え込んだ。

ヤクトミ「…」

ヤクトミは懸命に考え込むハニアの横顔を眺めた。

しばらくして、ハニアはヤクトミの方に振り返った。

ハニア 「たまにムカつくときもあるけど、

嫌いにはならない、

家族みたくいつも一緒にいるわけじゃないけど、

”友達”で当たり前：みたいな、

そんなやつ。…わかる？」

ヤクトミは笑って前を向いた。

ヤクトミ「わかるよ。

俺の友達もそんなやつだよ。

いるのが当たり前で、

何でも分かり合っていると”思ってた”。」

ハニアは眉根を寄せた。

ハニア 「”思ってた”？」

ヤクトミは自嘲気味な笑みを浮かべた。

ヤクトミ「でも、そう思ってたのは俺だけみたいだ。

今のアイツはよくわからない。」

ハニア 「嫌いになった？」

ヤクトミは首を縦にも横にも振らなかった。

ヤクトミ「けど俺、

どうしてもアイツを”信じる”ことをやめられないんだよ。

今のアイツはウソなんじゃないかって。

本当は俺に言えない大きな秘密を

一人で背負い込んでるんじゃないかって。」

ハニア 「それで会いに行くんだ。」

ヤクトミの表情が、一瞬だけ曇った。

ヤクトミ「ま、そーゆーこと。

…ちよつとしゃべりすぎたかな」

ヤクトミはそう言って苦笑いした。

ハニアはムスリとした。

ヤクトミ「…？何か怒ってんの？」

ハニア 「…俺、ヤクトミ兄ちゃんと、

もう友達のもりなんだけど。」

ヤクトミ」？

俺もそのつもりだけど？」

ハニアは唇を尖らせた。

ハニア 「じゃあ、

友達の俺にそんな大事な本音、

しゃべりすぎたみたいだな、

ヒミツを間違えてしゃべっちゃったみたいない言い方しない  
でよね！」

ヤクトミは笑った。

ヤクトミ「そっか、ごめん。

じゃあもうちょっと、話聞いてくれるか？」

ハニアは笑った。

ハニア 「当たり前じゃん。」

フィード、ヤクトミ 18歳――

## 5・Be leaded by luck

遠くで大量の砂が落ちる音がする。

晴天。パンゲア大陸中部 観光国家マーフ北東部 『砂の大河』  
サンサンと照りつける太陽の光を反射して、キラキラと金色に輝く砂が、大河の如く緩やかな流れをたたえている。

Be leaded by luck (運の導き)

その中をどんぶらこと舟が一艘。  
舟には2人の魔導師と1人の少女。

2人の魔導師のうちの一人は、舟の約半分のスペースを占領して  
気持ち良さそうに熟睡する、黒づくめの銀髪赤目 —— シヤンド  
ラ・スウェフィード

もう一人の魔導師は、背中まである美しい金髪に穏やかな黄緑色  
の瞳の長身の男 —— エオル・ラーセン

そして、あご下あたりで切りそろえられた緑の黒髪に、吸い込ま

れそんな漆黒の瞳、帯で締め上げる独特の巻き衣装の記憶喪失の少女―― 染井 よしの

3人は頭からすっぽりと日よけのマントをかぶり、カラツカラの暑さに耐えながら、ただただこの砂の河に身を任せていた。

エオル「……なんか、遠くで砂が落ちてるような音しない？」

よしの「ええ、微かではありますが、私も聞こえます」

エオル「そろそろ岸に寄せようか。あんまし近づきすぎて、落ちたりしたらシャレにならないしね」

よしのはクスリと笑い、隣で熟睡するフィードの肩を優しく叩いた。

よしの「フィード様、そろそろお目覚めください」

エオル「ぼちぼち岸に寄せるよー！」

ふと、オールに手をかけようとしたエオルの手が止まった。

エオル「……2人ともそのまま！」

よしの「え？」

エオル「つけられてる……右の岩陰……2人！」

寝ていたフィードが訊ねた。

フィード「……2人つてこたあ、対魔導師犯罪警察組織じゃねーな」

エオル「とにかく、反対の岸に寄せよう」

すると、フィードがすくりと立ち上がった。その勢いで、舟が左右に揺れた。

よしの「きゃー！」

エオル「ちよつと！ フィード!？」

フィード「こっちはこの狭い舟によしのがいる。相手が魔導師な

ら簡単には手は出せねーだろ！」

エオル「ちよつと！ それ読み甘……」

フィードは大きく息を吸い込んだ。

フィード「オラア！ コソコソしてねえで出てきやがれ！」

すると突然ズシンという音を立て、舟はよしのの辺りに傾いた。  
「言われたとおり、出てきたぞ」

よしのの後ろには、黒いローブに身を包んだ2メートル以上はある犬人間――

思わずエオル声は上ずった。

エオル「マスター・ガルフィン！？ しまった……」

――通常、魔導師は1人につき、光炎、爆炎、流水、氷雪、風、土、治癒、補助の8種の魔法のうち1種類しか体得できない。

アカデミーの教師”スペリアルマスター”は唯一すべての魔法を体得ことができる、魔導師たちの中でもワンランク上の魔導師である。

ガルフィンがよしのに手を伸ばした瞬間、フィードが思い切りよしのを引きよせ、よしのの頭に手を置いた。

ガルフィン「おいおい……女子はもう少し丁寧に扱え」

フィード「船から降りろ」

ガルフィン「人質保護して、お前らしよつ引いたらな」

一瞬、フィードは岩陰に目をやった。

フィード「……もう一人はヤクトミだな」

ガルフィン「だったらどうした」

フィードはニヤリと笑い、わざとらしい大声で答えた。

フィード「なら、やっかいなのはテメーだけだってこった！　ワ  
ン公！」

ヤクトミ「なんだとコラア！」

岸の岩陰から、白いフワフワの髪、同様にふさふさのしっぽを持  
った三白眼の青年が飛び出してきた。やれやれ、とガルフィンはこ  
めかみを押さえた。

ガルフィン「あのバカ……作戦が台無しじゃあないか……」

エオルは静かに剣を抜いた。

エオル「もうすぐ滝です。お互い陸に上がらないとまずいでしょ  
う。ひとまず舟を降りてください」

ガルフィンはハン、と鼻で笑った。

ガルフィン「教師にエモノ向けてビビりまくりのガキが、粹がっ  
たことをよくぬかすわ」

エオルは心の中を見透かされ、ギクリとした。ガルフィンの言う  
通り、エオルの剣先は微かに震えていた。

（俺は……ゼミは違えど、この人にはいくつかの授業で教わった  
……！　厳しさの陰に隠れたぶっきらぼうな優しさ……尊敬してた  
……まさか、この人に剣を向けることになるなんて、思ってもみ  
なかった――）

そのような考えをまんまと言い当てられ、エオルの集中が一瞬途  
切れたその瞬間、ガルフィンはエオルの剣先を素手でつかみ、呪文  
を唱え始めた。

エオル「いいっ！」

エオルは慌てて剣を戻そうとするが、ガルフィンの握力にびくと

もしない。

フィード「おい！ ワン公！ こいつがどうなっても……」

ガルフィン「鼻で笑った。」

ガルフィン「いいことを教えてやろう。捨て身の犯人だったら人質をいつ殺してもおかしくないからな、俺だって慎重になる。けどな、これからも生き抜こうってやつらが人質殺したら、それこそ逃げ場がなくなるだろう。お前らがそんなバカじゃないことは知っている。ハナから人質の頭に手エ当ててる時点で、怖くねえんだよ」とすると、ガルフィンは魔法を唱えた。

ガルフィン「ミ・ステイフ時空歩！」

たちまちにエオルの手のひらから剣が消え、岸から舟を追っていたヤクトミの手元に現れた。ヤクトミは勝ち誇ったようにフィードに向って剣をひらひらと振って見せた。

フィード「む……」

ガルフィンは両手を広げた。

ガルフィン「どうだ？ この舟ごと、セイラム魔導師裁判所まで飛ばすのも簡単だぞ？」

エオル「くっ……」

フィード「……」

よしの（せいらむ……？）

ガルフィン「お前らは所詮その程度だ。あきらめて素直に自首をしろ」

フィード（ん……？）

エオル「くそっ……こんな所で……」

ヤクトミ「先生！ もうじき滝です！」

フィード（できるんならさっさとセイラムなり協会なりに移動さ

せりやあいいのに……さてはこりゃあ”人質作戦”が効いてやがんだのか……?)

ガルフィン(最も望ましいシナリオは、こいつら自身で”我々の知らないところで”人質を解放し、自首することだ。でなけりや、いったん協会に連れて帰って、こいつらとジパング人の記憶操作をしなけりやなくなる。こいつらはともかく、ジパング人にまで記憶操作をかけなければならぬのは、仮に表沙汰になった場合、<sup>トラップ</sup>対魔導師犯罪警察組織より先にこいつらを捕まえる意味がないどころか、ますます事態は悪くなる。自然な流れでジパング人を解放するのが最もベスト!)

砂の落ちる音はあたりを包み、小さな舟の上と言えど、もう大きな声でなければ、すぐ正面の声も聞こえないくらいだった。

ヤクトミ「先生! 滝が近いつす! そろそろ……」

ガルフィン「自首をしろ」

フィード「いやだね」

フィードは思い切り舌を突き出し、そのまま膝をつき、よしのを伏せさせ、舟の縁を掴んだ。

ガルフィン「ん!?」

エオル「えっ!」

慌ててエオルもしゃがみこみ、舟の縁を両手で思い切り握りしめた。

エオルの様子を確認すると、フィードの右手が舟の後方の川の中に向けられた。

ガルフィン（まさか……！）

ヤクトミ（あのヤロ！）

ヤクトミは呪文を唱え始めた。

ヤクトミ「ニアフ・グラン・デ低・小爆炎！」

フィード「グラン・デ小爆炎！」

激しく空気を揺らす爆音と空高く巻き起こる砂しぶき。爆風にあおられた舟は、ロケットのような勢いで、真つ逆さまに滝の下へ落ちて行つた。

滝の近くの岸に、砂にまみれたガルフィンが上がってきた。ヤクトミは慌てて駆け寄つた。ガルフィンはゲホゲホと口に詰まつた砂を吐きだし、全身をブルブルと振るわせ砂を払つた。

ガルフィン「くそ！ あのガキ、相変わらずトチ狂つたマネしやる」

ヤクトミ「たぶん、勝算があつてやつたんじゃないスよ。あいつのやり方っていつも賭けなんス。でも、」

服にたまつた砂を払いながら、ガルフィンはため息をついた。

ガルフィン「その賭けに勝つ運を持っている、だろ？」

ヤクトミ「はい……」

ガルフィンの目の端に、チラリとヤクトミの手元が映つた。その手はカタカタと震えていた。ガルフィンはヤクトミの頭に手を置いた。

ガルフィン「すまん。お前に”直接手を出させる”はずじゃない

かったんだが……」

ヤクトミ「いいえ！……アイツの手、吹き飛ばそうとしましたが、結局間に合わなかった」

ガルフィン「……。いや、ヤツの右手に”当たった”のは確認できた。まだ追うぞ、行けるか？」

ヤクトミは手の震えを見せないように両手を固く握りしめた。

ヤクトミ「行きます！」

現在から数日前――

パンゲア大陸 ヴアルハラ帝国東部 グラブ・ダブ・ドリッブ

魔導師協会管轄地区 対魔導師犯罪警察組織「トランプ」本部

古めかしい石造りの洋館、重厚な扉の前には、炎のように真っ赤

な髪と大地のように黒い肌、穏やかな金色の瞳、黒いローブの50

前後の男――魔導師養成学校の教師 ユディウス・ラーケ

美しいブロンドのウェーブがかった髪に真珠のような白い肌、深

い森のようなグリーンの瞳の同じく黒いローブをまとった30後半

の女性――魔導師養成学校の教師 マリア・フラーレン

2人が扉を開け、本部のロビーに入ると、受付にいた3人の受付嬢たちが慌てて立ち上がった。

「マスター・ユディウス！ マスター・マリア！ 本日おいでになるご予約はなかったと存じますが……」

受付嬢の一人が慌てて予定表をパラパラとめくり、確認しながら尋ねた。

「本日はどのようなご用件でおいでになられたのでしょうか？」

まあまあ、とユディウスは受付嬢たちにイスに掛けるように促した。

ユディウス「今日は個人的な用事で来ただけですから、どうぞお気になさらずに」

マリアはアハハと手をひらひらさせた。

マリア「いつものことじゃない」

確かに、この2人のスペリアル・マスターだけは、やれ誰かをからかいに来ただの、やれうまい土産を買って来ただの、やれ会長のサプライズバースデーパーティーをするから協力しろだの、なんのこともない用事で、なんの前触れもなく突然やってくる。しかも、上層部に、アポイントなしで。

その度に受付嬢たちはこんな調子で慌てる羽目になるのだが、そんなことは全く気にも留めないのがこの2人である。

「では、これからアポをお取りします。本日はどなたに……」

「あら？ マスター・ユディウスとマスター・マリア？」

奥から、金髪をきれいに後ろにまとめ上げた落ち着いた雰囲気的美女が現れた。

マリア「あら！ リシュリユー！ ちょうどよかったわ！ ちょっと”あいつら”に会いにきたんだけどー？」

リシュリユーは困ったように笑いかけた。

リシュリユー「あいにく、本日対応可能でいるのは”ハートの将<sup>キ</sup>軍”と”副将<sup>エース</sup>軍”だけです」

マリアは内心ギクリとした。——まさか、W・B・アラ

イランスを捕まえに出払っているのか？

マリア「え？ ほかのやつらは？」

リシュリユー「ええと、”クラブ”は、”将<sup>キング</sup>軍”は”いつものこ

とく”音信不通の行方不明。”副將軍<sup>エース</sup>”はその分、倍の事務処理に追われていて、ここ数日缶詰です」

ユディウス「まあ、いつものことですね」

リシュリユー「”ダイヤ”は全軍エウトピア国に遠征中です」

マリア「え？ エウトピアって、”親”神使教国じゃない？」

リシュリユー「例の”人食い羊”のバイオハザードで、国が壊滅寸前なんです」

マリア「神に祈ってもどうしようもなくって魔導師に……ってわけねえ」

リシュリユー「”ハートの將軍<sup>キング</sup>”と”副將軍<sup>エース</sup>”だけはただいま通常の事務処理中です。”スピード”は……」

リシュリユーは視線をうつむかせた。

マリア「あいつらが1番面白いのに！ ……もしかして、W・B・アライランス問題で遠征とか？」

リシュリユーは残念そうに首を振った。

リシュリユー「その……”將軍<sup>キング</sup>”はバカンス中で……」

マリア「ハア！？ あいつ、今年何回目のバカンスよ！」

リシュリユー「”副將軍<sup>エース</sup>”はまだ出勤しておりません」

マリア「は？」

リシュリユー「昨日アヴァロン（ヴァルハラ帝国首都）に飲みに行くとしておりましてので、おそらく飲みすぎによる寝坊かと……」

……」  
呆れた、とため息をつきながら頭を掻き、マリアは隣のユディウスを見上げた。

マリア「ああもう！ どいつもこいつも！ なんでこれでトランプって成り立つてんのよ！」

ユディウス「まあまあ、ハートのキングに会えば十分でしょう。それに、彼女が一番話がわかると思いますし」

マリアはやれやれと腕組みをした。

マリア「それもそうね！ リシュリユー！ 通して頂戴！」

リシユリユーはニコリと笑った。

リシユリユー「ただいまアポをお取りしますね。ベンチにかけてお待ちいただけますか？」

マリア「ハイハイ」

ユディウスとマリアがロビーに配置されているベンチに腰掛けると、わらわらとトランプの隊員たちが集まってきた。それを見て、リシユリユーはクスリと笑った。

リシユリユー「相変わらずの人気者ね」

受付嬢の一人が申し訳なさそうにリシユリユーに声をかけた。

受付嬢「あの……リシユリユーさん、すみません……リシユリユーさんは”スピード”の秘書なのに……」

リシユリユーは笑った。

リシユリユー「いいえ、マスターたちはトランプみんなのお客さんよ。軍の垣根はないわ。それよりハートのキングに連絡をお願いね」

……ギイ……

ロビーの扉が開き、そこに立つ人物を目にしたとたん、場の空気は一瞬にして時が止まったように凍りつき、ユディウスとマリアの周りに集まっていた隊員たちは蜘蛛の子を散らすように持ち場へ戻っていった。

リシユリユー「<sup>エース</sup>副將軍”！”」

カランコロンと足を踏み出す度に音を立てる、板に親指とそれ以外の指を分つ紐をとりつけた独特の履物、黒髪の方主頭、ピアスだらけの耳、タトゥーで埋め尽くされた両腕、くわえたばこに漆黒の鋭い眼、2メートル近くある筋骨隆々とした大男が、だるそうにマリアを睨みつけた。

スピードのエース「おい、秘書。受付でサボリて、ええ度胸やな」

リシュリユー「……今、マスターたちの方をご覧になっていらっ  
しゃったようなので、私がなぜここにいくくらい、ご察しいただ  
けますよね？」

スピードのエース「とつと持ち場戻れ」

スピードのエースは我関せずと言うように首をゴキゴキと鳴らし  
ながら、ユディウスとマリアの前を素通りした。ユディウスにはマ  
リアからブチリと何かが切れる音が聞こえた。

マリア「ちよっとー！ トージローー！ 師匠のアタシを  
素通りするなんていい度胸ねー！」

リシュリユー「まあまあ」

リシュリユーは去りゆくスピードのエースに聞こえるようなわざ  
とらしい大声で続けた。

リシュリユー「では、ハートのキングのところへお通しいたしま  
すね」

スピードのエースの足が、ピタリと止まった。

スピードのエース「……何しに来てん。用件くらいは聞いたるわ」  
マリアは鼻で笑った。

マリア「相変わらず、犬猿の仲ね」

ニコリを微笑み、リシュリユーはマリアとユディウスを促した。  
リシュリユー「では、スピードの応接室にお通しいたしますね」

耳を覆われるような風音。打ち付ける砂粒。

砂の大河東端「大砂瀑布」、滝壺付近――

100メートル以上の落差を誇るその瀑布のふもとは、常に嵐の  
ような砂煙に覆われ、太陽の光すらほとんど通さない、大自然のヴ

エール。

その中を清浄な空気の繭が2つ。

ガルフィン「水中用の風魔法を地上で使うとはな……」

ヤクトミ「……」

滝壺に近づくにつれ、風と砂の勢いは一層猛烈になった。ガルフインは鼻をクンクンと動かした。

ガルフィン「……かすかに血のにおいが流れてくるな……滝壺のほうか」

ヤクトミ「……もし、滝壺に沈んでたら、この砂嵐では搜索が困難です」

ガルフィン「おまけに別の生き物のおいもするな」

ヤクトミ「魔物ですか！？　こんなところに？　……そうとうヤバそうな奴ですね……」

ガルフィン「条件が悪い……作戦変更だ。滝の上空から、滝壺周辺を監視しよう。爆炎魔法と流水魔法に、この砂煙の中、身を潜められるすべはない。1時間して出てこなければ、一度協会へ戻ろう」  
一瞬遅れてヤクトミは返事をした。

ヤクトミ「はい……」

ゴウゴウと吹きすさむ砂煙。

滝の砂煙とあいまって、昼だというのに、そこは夕闇のように薄暗かった。

——大砂瀑布　滝壺裏

きれいに円筒状にくりぬかれたような洞窟がずっと奥まで続いて

いた。その入口――

よしの「フィード様！ エオル様！ どうか目をお覚ましになって！」

よしのの目の前には、ごろりと横たわって、ピクリとも動かないフィードとエオル。

よしの「どうしましょう……どうしたら……」

手を地面につくと、何か生暖かい水のようなものに触った。しかし、暗くてよく見えない。

よしのは目をつぶり、胸の前で手を組み、集中した。よしのの周囲を風が渦巻き、この薄暗い洞窟の中でまばゆいばかりの光を發した。

――アーティファクト”ヤサカニ”！

やがて、まばゆさは収まり、ヤサカニは周囲の色を識別できる程度のほのかな光をたたえた。そうして目に入ったよしのの手元は真っ赤に染まっていた。

よしの（え……）

よしのは先ほど手をついたあたりを見回した。そこには赤く湿った砂。その赤の中心にはフィードの右手。

よしの「ケガ！？」

よしのは慌ててフィードの手元をみると、思わず口元を押さえた。

皮膚は焼け焦げ、流血し、手首あたりからは肉が裂け、骨がのぞいている。

フィード「う……げほっげほっ」

よしの「フィード様！」

フィードは突然激しくせき込み、うつぶせになって口からいくばくかの砂を吐くと、肘と膝をつき、ヨロリと体を起こした。その瞬間、突然襲った激しい痛みに一瞬顔をゆがめ、痛みのするところに目をやった。

フィード「あー、ちくしょー！ やられたー！」

フィードは悔しそうにゴロンと大の字になった。

フィード「あのやろーいつの間にあんな命中率……」

よしの「……フィード様……」

「ん？」とフィードは今気がついたようにすぐ横にへたり込むよしのを見上げた。

よしのは震える手で口元を覆ったまま、ボロボロと大粒の涙をこぼし、フィードを見つめていた。

フィード「あ？ 今度はなーにメソメソしてやがんだよ」

よしの「だって……大けがなさっ……」

言葉の先は嗚咽で消えた。フィードはむくりと体を起こし、ため息をつくと、左手でぼりぼりと頭をかいた。

フィード「……あのなー、こんくれーのケガ、魔導師の中じゃあ大ケガとか言わねーんだよ。それよか、あの役立たずどこ行った？」

フィードは近くで気を失っているエオルを見つけると、「おら、いつまで寝てんだよ」とエオルの背中を蹴りつけた。その衝撃でエオルもまた、ゲホゲホと激しくせき込み、口から砂を吐きだした。

よしの「エオル様！」

フィード「てめー！ まんまと剣取られやがって！ なあゝにが次の町までコイツに頑張ってもらうよ」だ！

フィードはエオルのモノマネをして見せた。

エオル「……あのねえ……マスター・ガルフィンをまんまと舟に呼び寄せたのはどっちだよ！ だいたい、何の考えもなしに滝に突っ込むなんて、死んだらどうしてくれるんだよ！ てか、むしろな

んで助かつたんだ……」

フィード「何とかなったんだから、いいじゃねーか！」

エオル「あのねえ！ 君はホント昔から……」

ふと、エオルはこの激しいやりとりの中で、フィードが利き手をぴくりとも動かしていないことに気づいた。そして、その利き手からはポタポタと血が滴っているのが見てとれた。

エオル「えっ！？ ちょっとフィード！ それ……」

指を差され、フィードは血の滴る手元に目をやった。

フィード「ああ、さっきヤクトミのやつにやられた」

エオル「何そんなあつさり！ 大けがじゃな、いつ！？」

ドスリという鈍い音とともに、フィードの拳がエオルの腹に入った。エオルはせき込んでうずくまった。

エオル「なにすんのさっ」

フィードは口の前で人差し指をたて、左腕をエオルの首に掛けた。フィード「よしののやつがバカみてえに心配しやがる。かすり傷ってことにしとけ」

エオル「かすり傷って……」

再びエオルはフィードの右手に目を落とした。その手は、激痛のあまり、あきらかに手が震えていた。そして、これほどの至近距離でなければわからないが、涼しげな表情のフィードの額からは、滝のように脂汗が噴き出していた。

エオル「……せめてそれなりの手当だけはさせてよ」

フィード「しよーがねーな」

エオルは辺りを見回した。

エオル「荷物は全部砂の底みたいだね」

エオルは自分の袖を破って止血をし、フィードの右手を左右に囲うように両手をかざして、呪文を唱え始めた。

エオル「水縛結界！<sup>シ・ウオード</sup>！」

フィード「え！？　おい！」

たちまち、フィードの右手から手首にかけて、薄い水の膜が張られた。

フィードは顔をしかめた。エオルはハハ、と力なく笑った。

エオル「ホントは相手を溺れさせる魔法だけど、水の精霊の少ないこの環境だとこうなる。ま、気休めってことで」

フィード「……てめー！　俺様がカナヅチだって知ってんだろがー！」

エオル「アハハ！　見た？　よしのさん！　今のフィードの超ビビリ顔ー！」

よしの（……何やらお2人で話してらっしゃったようですが、大丈夫みたいですな）

よしの「はい！」

よしのはにつこりとほほ笑んだ。

フィード「うっせー！　おら！　とつとと行くぞ！」

フィードはズカズカと洞窟の奥へと進んでいった。

エオル「え！？　そっち！？」

フィード「どうせ滝の外で奴ら待ち構えてんだろーし！　こつち進んで抜け穴だったならめっけもんだろー！」

エオル「それもそうか……　よしのさん！　ごめん！　光る球の件、さっきの人たち撒いてからね！」

よしの「はい！　それは構いません！　むしろ、できるだけ早く病院に……」

エオル「そだね……！　ありがとう！」

洞窟は上下左右にクネクネと長く続いており、いくつも分岐していた。その途中には、何かの骨が散乱していたり、異臭のする何かが山積みとなっていた。

そして、しばらく進んだ一行は、一つの結論に達した。

よしの「……なんだか、巢っばいですね」

エオル「巢っばいね」

フィード「巢っばいね」

しばしの沈黙。

エオル「……そろそろ、マスター・ガルフィンたちもあきらめて帰った頃じゃあないかな！ 戻ってみる？」

よしの「ですね！ 勝手に自宅にお邪魔してしまって、悪いです」

エオル「そういうことでもなくてね」

フィードはしばらく洞窟の奥を見ていたが、まあいいか、と元の道を戻り始めた。

大砂瀑布 滝壺 上空――

ガルフィンによる空中に浮かぶ魔法で滝周辺を一望できる位置から、ガルフィンとヤクトミは監視を続けていた。

ヤクトミ「そろそろ小一時間くらいじゃないっすか？」

ガルフィンはポケットから砂にまみれた時計を、砂を振り払いながら取り出した。

ガルフィン「そうだな……上がってこんか……」

砂煙上がる滝壺を、ヤクトミはもう一度目を凝らした。どうにも諦められない。だが、目に飛び込んだのは予想だにしないものだった。

ヤクトミ「……ん？ 先生！ あれ！」

ヤクトミは砂煙の中を指差した。何か、巨大な長い影が蛇のよう

にうねうねと蠢いていた。そしてそれはやがて、滝の方向へと消えていった。

ガルフィン「さっきの臭いの正体はあれか。ここいらに巣でもあるのかもな。時間だ。協会に戻るぞ。……後味は悪いがな」

ガルフィンはヤクトミの背中をポンと叩いた。ヤクトミは砂煙の中を見つめたままだった。

ヤクトミ「……はい」

——アイツはこんなところで終わるようなヤツじゃないんだ……

ヤクトミは後ろ髪ひかれながら、移動魔法でガルフィンとともにふわりと消えた。

洞窟の中に、かすかに生臭さが立ち込め始めた。

エオル「なんか、臭わない？」

よしの「そうですね……前方からでしょうか？」

フィード「どーやら、ご主人様のお帰りのようだぜ」

エオルはあたりを見回した。直径5、6メートルほどの筒状の空間。広さはそれなりにあるものの、一人は丸腰、一人は負傷。応戦するには魔法しかない。しかし、この程度の広さでは、強力な魔法は使えない。エオルは顔をしかめた。

エオル「……条件が悪いな」

フィード「奥へ進もう」

エオル「へ？」

よしの「奥……ですか？」

フィード「さっき、あれだけ奥に進んでも空気がこもって無かつ

た。たぶん、出口は滝んとこだけじゃない。……気がする」

エオル「たぶん」に”気がする”って……でもまあ、空気が淀んでなかったのは俺も思った！ 一か八か、行ってみよう！」

一行は再び洞窟の奥へと歩きだした。

よしの「……フィード様……本当に大丈夫ですか？」

フィード「あ？ なにか？」

よしの「……いえ……やっぱりなんでもありません」

フィード「……変な奴」

よしのは”目の前のフィード”と”事実”、どちらを信じたらよいのかわからず、ただ、みるみる赤く染まってゆくフィードの右手を見つめていた。

しばらくして、洞窟の奥へと進む一行は、先ほどの生臭さが背後からどんどん強くなってくるのを感じていた。

エオル「なんか、追いつかれそうじゃない？ ちょっと急ごうか」

よしの「そうですね」

歩を速めようといくつか進んで、違和感に気づく。エオルが「急ごう」と言えば、必ず返ってきそうな「えゝめんどくせえ」というだみ声。それが、ない。

エオルとよしのは嫌な予感に思わず後ろを振り返させられた。よしののヤサカニの淡い光が照らす範囲のギリギリの壁際。

力なく寄りかかり、顔を歪め、肩で息をするフィードの姿――

よしの「フィード様――！」

フィード「あぁっ！？」

よしのとエオルは慌てて駆け寄った。

よしの「少しお休みになりますか？」

フィード「ちょっと腹減っただけだ。先行け」  
エオル「どっちも無理！」

エオルはフィードの左手をぐいと引き寄せると、そのままフィードの前にかがみ、よっこらせと背負った。

エオル「時間ないんだから！ ほら！ 行くよ！」

フィードはただ黙ってエオルの背中にもたれ掛った。エオルはフィードの重みを背中に感じ、ゴクリと息をのんだ。

——フィードが静かなだけで、こんなに心細いなんて……

そういえば、ここまでの道のり、この旅でいつも何かを「決定」していたのはフィードだった。

俺はいつも、何しだすかわからないフィードの世話を焼いてると思ってたけど、本当は逆だったんだよな。

そんなことに今頃気づくなんて、バカだ、俺……。

進める足もむなしく、さらに生臭さは増していった。

エオルはよしのの手を引き、よしが走ることでできるペースで走りだした。

しばらく行くと、二手の分かれ道に行き当った。

エオル（どっちだ！？ どっちに行けば外なんだ！？ 片方か？ 両方か！？）

ズリ……ズリ……

後ろから、強烈な生臭さと共に、何かを引きずる音がする。  
エオル「くっ」

エオルは再びよしのの手を引き、左の道へと走り出した。

よしの「エオル様！」

エオル「なあに！？」

よしの「私、戦います！」

エオル「へっ！？」

エオルは驚いて足をとめ、よしのを見た。

よしのは胸に拳をあて、まっすぐエオルを見た。

よしの「私、戦います」

エオル「なっ何言ってるの！ 危ないよ！ ……それに女の子にそんなこと、させられない！」

よしの「ですが、フィード様はお怪我をなさってますし、エオル様は剣をとられてしまいました……私しかいないです。私、できます！」

エオル「うっ……」

よしのの強い瞳に、エオルは思わずたじろいだ。

——この状況……招いたのは俺か……俺が不甲斐ないばかりに……

エオル「……だ……第一、どうやって……」

よしのは自分の周囲に浮かぶ淡く光る宝珠をするりと撫で、微笑んだ。

よしの「この子たちと一緒に」

「けど使い方……」と言いかけたエオルの言葉は、よしのの固い決意のまなざしに、喉の奥へと押し込まれた。

その時だった。

肉の腐ったようなひどい臭気。鼓膜の奥を劈くような鳴き声。

エオルはよしのは後ろを見上げた。

よしののヤサカニが照らしだしたのは、紫色の血管がでこぼこと浮き出た土気色の皮膚、その皮膚は、いくつものギザギザとした波型の、ダンゴムシのような節が幾重にも重なっており、その節々の縁は固く茶色い爪のようなもので蠶のように囲まれており、体は洞窟の直径にぴったりと収まりほとんど頭部しか見えないが、頭部に目や耳はなく、その”顔”は人間の両腕を手首で合わせたような器官が飛び出し、指のような牙が絶え間なく波打っていた。

サンド・ワーム

エオル「さ……砂竜……」

よしの「ご存じなのですか？」

じりじりとわずかずつ後ずさりながら、エオルはニヤリと笑った。その頬を冷や汗が伝った。

エオル「砂漠地帯で伝説になっている、人食いミミズだよ……」

フィード「サンド・ワームだと!？」

エオルの背中であつたりしていたフィードが突然ガバリと飛び起きた。

エオル「わ! なに!？」

フィード「Aランクのクリミナル・モンスターだ! あの”ハナ

”みてーなどと持つてくと、金になる!」

意気揚々とフィードはエオルの背中から飛び降りた。しかし、その足はフラフラと力なく、そのままヘナヘナと座り込んでしまった。

エオル「フィード! 頼むから無理しないで!」

地団駄踏む子どもの様にフィードは喚いた。

フィード「だったらてめーら！ 何が何でもヤツの”ハナ”とつてこい！」

エオル「やれやれ……」

よしの「ハナ……ですか……無益な殺生はできませんが、何とかここから早く出られる分には尽力いたします」

エオルとよしのはサンド・ワームに向き直した。

……オオオ……

サンド・ワームの”節”が縮まり、その反動で”ハナ”を手繰るようにエオルめがけて突進した。

エオル「俺か！」

エオルはとつさにフィードとよしのを端に突き飛ばし、自らはそれとは逆方向に飛んだ。サンド・ワームの”ハナ”は空しく宙を掻いた。

フィード「ん？」

フンフンと、サンド・ワームはしきりにフィードの方向に”ハナ”を向け小刻みに動かしていた。フィードはニヤリと不敵な笑みを浮かべた。

フィード「血の臭いを嗅ぎ付けやがったな」

その時だった。フィードの視界が陰った。フィードが見上げると、サンド・ワームとの間によしのが立ちはだかっていた。

よしの「そうはいきません」

よしのは目の前に浮かぶ青い宝珠を掬うように手のひらを重ねた。よしの（お願いしています……どうか力を貸してください。私のためにお力を貸してくださいるお2人のために、私も力をお貸したい！）

すると、青い宝珠はわずかに輝きだした。

しかし、徐々に光は弱まり、やがて元のほのかな光に戻ってしまった。

エオル（発動できない！？ やっぱりまだ使い方が……！）

よしの（……お願い……！）

フィード（……ん？）

フィードは貧血で薄れそうな意識の中、弦楽器が奏でる音楽をかくさに聞いた。

フィード（なんだ……？）

すると、不思議なことに突然よしのの頭の中にある文字が浮かんだ。

よしの「……」ボウイサナ「……？」

突然、青い宝珠はよしのの呼び声に反応するかのように強く輝きだし、その光の中から、飛沫をあげて水の鱗で形作られた巨大な水龍が飛び出した。

よしの「きゃー！」

ボウイサナ —— ”爆流攻！”  
ばくりゅうこう ——

ボウイサナの口から滝のような大量の水が吐き出され、激しい飛沫の音とともにサンド・ワームは穴の奥へと押し戻されていった。

しずくがポタポタと落ちる音。

辺りは今まで皆無だった”湿気”と、天井から滴り落ちる水の音だけが残った。

ボウイサナはゆっくりとよしのを見降ろした。

ボウイサナ「おお……よしの……ようやく俺を思い出してくれたのか……」

ボウイサナは涙を流しながら、光とともに宝珠の中に消えていった。

よしの（え……思い出し……？）

エオル（どういうことだ？ よしのさんはあのアーティファクトは”預かったもの”だって……）

ドサリと何かが落ちる音。

音のした方に目を向けると、フィードがぐったりと倒れていた。

エオルの魔法によって傷口を保護していた水の膜は綿あめのように膨れ上がり、その中の右手が確認できないほど赤黒く染まっていた。

エオル「フィード！」

よしの「フィード様！」

エオルは慌ててフィードのもとへ駆け寄り、脈を確認した。

エオル「脈が弱い……早く医者に行かないとまずい！」

よしのは「そんな……」と口を両手で覆った。こんな砂漠のど真ん中の、しかも出口の見えない洞窟の中。

医者どころか町にすらつけるかどうか。

——もう、これ以上誰かの死で誰かが悲しむのはいや！——

そんな体験の記憶もないのに、なぜそんな思いが込み上げたのかさえわからないのに、よしのの口から反射的にある言葉が出た。

よしの「……」せんゆ「……」

すると、よしのの周りに浮かぶ4つの宝珠が光を放ち、クルクルとフラフラのようには回転すると、ライムのような柔らかい黄緑色の宝珠がよしのの正面でふわりと止まった。

黄緑の光はどんどん強まり、その光の中から淡くやさしい緑色の光をたたえた体毛の、つぶらな瞳の狒犬が飛び出した。狒犬は慰めるようによしのの涙を舐めると、フィードの右手の前にやってきた。

「ワンワン！」

狒犬はフィードの右手に向けてしきりに吠えた。

エオル「あ、魔法を解けて？」

エオルが慌てて魔法を解こうと手をかざした。ところが、エオルが魔法を解く前に”せんゆ”の最後の鳴き声に反応するかのように、綿あめのように膨らんだ水の膜は水風船を針で刺したようにはじけ飛んだ。

エオル「わ！」

辺りに細かい血と水のしぶきが飛び散った。エオルは茫然と狒犬を見つめた。

エオル（魔法を強制解除した！？　なんだこの変な犬！？）

次に、狒犬は傷口をペロペロとなめ始めた。そのなめた部分から、みるみるうちに傷口は元通りになっていった。

よしの「傷が……」

エオル「……治った……！」

フィードの右手は嘘のように傷一つなくなり、辺りの血溜まりだけがこれまでの負傷の事実を証明するかのように残った。

狒犬は再びよしのの方を向き、「ワン！」と元気よく鳴くと、光とともに宝珠の中へと消えていった。

エオル（魔法の強制解除に治癒魔法のような効果……いったい何なんだ！？）

よしのは何がか分からない、という顔をしていた。

エオル（多分聞いてもわからないよね……）

意識のないままのフィードを背負い、エオルはきょとんと黄緑色の宝珠を見つめているよしのはの肩に手を置いた。

エオル「とりあえず早く出よう！ あれでサンド・ワームも死んだわけじゃないだろうし。多分フィードも流れちゃった血まで元通りつてわけでもないだろうしね！」

よしのはエオルの言葉に反応するだけといった様子で、ぼんやりと頷いた。

窓からやわらかな日差しが差し込む穏やかな昼下がり。

さまざまな調度品が飾られた広い洋間の真ん中に、古めかしい木製のテーブルをはさんで、これまた古めかしい3人掛けのソファが向かい合って置かれている。

片方のソファにはお茶を美味しそうにするユディウスと、不機嫌そうに腕組み膝組みするマリア。

もう片方のソファには両腕を背もたれに掛け、長い両足を投げ出している座る横柄な態度の大男——対魔導師犯罪警察組織「トランプ」対魔導師犯罪第一軍”スピード”の副将軍、市松桃次郎<sup>エース いちまつとうじろう</sup>。

桃次郎の座るソファの後ろには、長い金髪をピタリと後ろにまとめ上げた美女——対魔導師犯罪第一軍”スピード”第一秘書官リシユリユー・ラプンツォッド

あからさまにイラついた様子で桃次郎は口を開いた。

桃次郎「秘書！ 目障りや、出てけ」

リシュリユー「しかし……」

ケラケラとマリアはわざとらしく笑ってみせた。

マリア「大丈夫よ！ リシュリユー！ どうもこの子、リシュリユーがいると気が散っちゃうんですって！ 朝一だから、集中欠けるみたいね！ ダサッ！」

桃次郎「あぁっ！？」

今にも殴りかからんという勢いで桃次郎はマリアを睨みつけた。

桃次郎とマリアの本当に火花が散りそうな睨み合いに、リシュリユーはいざとなったら止めに入らなければと出ていくに出ていけなかった。その時、ユディウスとパチリと目が合った。

「大丈夫だよ」とユディウスは微笑んだ。リシュリユーはその微笑みに安堵感を与えられ、一礼をして部屋を出た。

マリア「ちょっと！ 女の子に対して、ああいう言い方ないんじゃないのっ！？」

桃次郎「魔導師の女なんて女ちゃうやろ」

桃次郎は腕を少し曲げ、自分の力こぶをわざとらしく指差した。

マリアは憤慨して桃次郎を指さした。

マリア「キー……！ あんたほどじゃないわよ！ この筋肉ダルマ！」

桃次郎「あーやかまし……オレ二日酔いやねん……お前の超音波聞いていると、頭爆発しそうや。黙っとけ、ババア」

マリア「こ・の・ガキンチヨ……！」

青筋を立て、思わずマリアは立ち上がった。

桃次郎「歳やねんから、”あんまチヨロチヨロしてん”と、シワ増えんで」

マリア（……この子は本当……）

大きなため息をつき、髪を掻きあげながらマリアはソファについ

た。ユディウスは桃次郎に微笑みかけた。

ユディウス「どうやら、私たちが”何しに来たか”、察しがついているみたいだね」

桃次郎「いつもの土産やパーティーやとはワケちゃうわ。お前らに仕事の情報流す思てんのん？」

ガンと激しい音を立てて、桃次郎は「ふざけるな」とテーブルを蹴りあげた。ガタンガタンとテーブルの足が交互に浮いた。

桃次郎「なめんな、アホが」

ユディウスは穏やかに口を開いた。

ユディウス「確かに、君に聞くのは君たちトランプのことをなめていることになるね……でもこちらでも仕事でね」

ユディウスはテーブルの上で手を組み、そのままテーブルに寄りかかった。

ユディウス「W・B・アライランスの情報をくれないかい？ 今

回の件は生徒たちへの影響も計り知れないと思うんだ。魔導師養成アカデ学校内でもいろいろ対策しないとイケないんだよ」

間髪入れずに桃次郎は反論した。

桃次郎「それは単にお前らスペリアル・マスターの指導不足やんけ。まともに指導されとったら、ガッコ出て”やらかし”たらどないなるか、わかるやろ」

マリア（……この子もユディと同じ考えね……）

肘を組んでマリアはソファにもたれかかった。

マリア「今回の件はいろいろ初めてづくしなのよ。あの子たちが犯罪に至った理由が、恥ずかしながら全く思いつかないの。私たちのどういった部分が指導不足だったのか、確認する必要があるとは思わない？」

桃次郎はそのまま押し黙ってしまった。だがそれは、決してマリ

アの言葉に同意するところがあつたわけではなかった。彼の考えは全く別のところに向いていた。

桃次郎（……なんや嘘くさいな……）

ユディウスが話を切り出したあたりからの2人のリアクション——  
大事な話だから前のめる？

自分たちの非を認めざるを得ないからイラついたようにソファに  
もたれかかる？

普通の人間だったらあり得る話かもわからない。だが、しかし、  
この2人の人物像からすると、明らかに違和感。

外部の人間に対して大事な話であればある程、感情を殺し、大げ  
さなリアクションをとるのをやめる——

スペリアル・マスターというのは全体的にそんな人間ばかりだし、  
この2人に関してはそれが顕著。

桃次郎（……確かに、卒業してすぐ犯罪に走る魔導師なんぞ前例  
ないし、さすがのこいつらも動揺してんのかもわかれへんけど——）

—— オレのカンが嘘や言うてる ——

二人のスペリアルマスターは黙ったままのこの”食えない男”の  
次のリアクションをただ待った。

ユディウス（……何か考えてるみたいですね）

マリア（この子の頭の良さには気をつけないと……ちょっとした  
ことでもすぐに気づいて崩してくる……！）

桃次郎は突然フツツと笑いだした。

マリア「何？」

桃次郎「冗談や。建前上キレなあかんやろ？ 捜査情報ならなんぼでもやるわ」

ユディウス「えっ……！」

マリア「ハア！？ そりゃうれしいけど……」

桃次郎はニヤニヤしながら続けた。

桃次郎「今んとこ、マーフ国のカーシーちゅー町での目撃情報がラストや。せやからそこの情報収集と周辺の搜索止まりやねん。あとで秘書に資料よこさすさかい、確認しいや」

マリア「ええっ！？ ちよつと！ いきなり何なのよ！ そんなベラベラと大丈夫なワケ！？」

ユディウス（……この余裕……まさか……）

ユディウスは背中がざわざわとするのを感じた。”焦る”という、実に久しぶりの感情だった。

ユディウス「……少し前にケガしたって聞いたよ。大丈夫なのかい？」

桃次郎は「ああ」と手をひらひらと降った。

桃次郎「快調やで。”ダイヤ”の応援で魔物討伐行ってん。そんな時にしくつて手首骨折しててんけど」

ニヤリ笑みを浮かべ、桃次郎は足を組んだ。

桃次郎「こないだ、ようやつと完治してん」

マリアは自分の体から血の気が引くのを感じた。

マリア「……ちよつと……まさか……！」

桃次郎「リハビリがてら、オレがそいつら捕まえよ思てな」

ユディウスは息をのんだ。マリアはテーブルに手をついた。

マリア「ちよつとちよつと！ こないだ卒業したばかりの新人よ！ いくらなんでもあんたが、」

桃次郎「ガッコ出たら一人前や。俺たちが手加減するわけないや

るが」

マリア「てっ……手加減しないんなら、全部の事件あんたが出なさいよっ！」

退屈そうに桃次郎は欠伸した。

桃次郎「あほか。他のやつ育てへんやんけ」

ユディウス「マリア！ まあ、いいじゃないか。それならこの件は”早々に収束する”でしょう、君ほどの魔導師が出てくれるなら、大助かりだ、捕まえた暁には面会させておくれね」

マリア「……そうね」

ユディウスは穏やかな笑顔を桃次郎に向けた。

ユディウス「よろしく頼むよ、トウジロウ」

ゴキゴキと関節を鳴らし、桃次郎は背伸びをした。

桃次郎「用件すんだなら、とつとと帰れ」

リシュリユーからW・B・アライランスの捜査資料をもらい、トランプ本部を後にしたその帰路。

なんとなく重たい雰囲気の中、始めに口を開いたのはマリアだった。

マリア「……ちよつと……まずいわよ」

ユディウスはハハといつものように陽気に笑った。

ユディウス「ガルフはしっかりやってくれるよ」

マリアはキツとユディウスを睨みつけた。

マリア「そうじゃない！ だって、トランプは”あの”トウジロウをいきなり当ててくるつてのよ！ あの子たち……タダじゃ済まない……精神的にも……肉体的にも……！」

ユディウス「なぜまずいの？ 一般の隊員が担当するより、”早く捕まる”から、いいんじゃない？」

マリアは立ち止まった。合わせてユディウスも立ち止まった。

マリア「……本気で言っているの？ ユディ？」

ユディウス「もちろんだとも。君の悪い癖だ、マリア。生徒のためには一生懸命になりすぎる。トウジロウにまで心配されていたじゃない」

マリア「シワのくだりは余計だけど」

ユディウス「マリア、私も君もスペリアル・マスターだ。まさか、これだけのこと」でそれを忘れてしまったわけではないでしょう？」

マリア「当然よ。ただ……一つだけ聞かせて、ユディ？」

ユディウス「なんだい？」

マリア「スペリアル・マスターとしてではなく、ユディウス・ラークという人間一人としての意見を」

ユディウスは静かにゆっくり歩き出し、「恨めしく」空を見上げた。その空は、小鳥が舞い涼しい風がそよぐ、すがすがしい秋空だった。

## 5・X（前書き）

6月に本家サイトでupした第5話と第6話の中間部分の補足小話4話分。

5・1話 the way back ∴ 5話で、ユディウス先生とマリア先生がランプから帰ってくる途中の話

5・2話 a girl's talk ∴ 5話で、ユディウス先生たちとトウジロウの一悶着があった後の受付の話

5・3話 the "left a thing" ∴ 6話から登場する新キャラ、クラブのエースの人物補足的な話

5・4話 the man, his name is ∴ ∴ 6話から登場する新キャラ、スピードのキングの人物補足的な話

W・B・アライランスのライバルたちが続々登場。

どいつもこいつも曲者揃い。はたしてフィードとエオルは無事に追手を切り抜けることができるのか…。

5・i the way back (閑話)

マリア 「ねえ、ユディ。」

ちよっとおみやげでも買っついていかない？」

マリアの隣を歩いていたユディウスはニコリとした。

ユディウス「そうだね。」

会長と、ガルフと、やっくん（ヤクトミ）とゼミ生たちでいいかな？」

そう言って、

2人は城壁のように屈強な壁で囲われたクラブ・ダブ・ドリップ地区の入口にある

部外者向けの売店へと足を伸ばした。

部外者向けということもあり、

店にはやや観光地を意識した商品が置いてある。

マリア 「あははははは！

ちよっと、ユディ！見てよコレ！」

マリアはそう言って目の前の棚を指差した。

ユディウス「あ！タペストリーとちようちん、最新バージョンになってるね。」

マリア「会長にはこれでいっかー」

ユディウス「マリアのおかげで会長、今のところすべてのバージョンをコンプリートしてるね。」

2人はことあるごとに土産を買っていく。

マリア「もはやネタよね」

ユディウス「…わざとなんだ…」

マリア「あーちょっと！ユディー！見て見て！」

ユディウス「あ、協会認定饅頭。

残り2箱だ。売れているんだね。」

マリア「あいつら（ゼミ生）にはこれでいっかー。あなたのところも一緒にいいでしょ？」

ユディウス「うん。」

ところで、この店の菓子、これで4周目だよ。」

マリア 「種類が多いから、忘れた頃にまたやってくるのよ。ちようどいいわ」

ユディウス「…いい加減飽きてくると思うよ…」

マリア 「タペストリとかちようちんにはつかかまけてないで、菓<sup>こし</sup>子を充実させなさいよって感じ!」

ユディウス「ハハ」

マリア 「さて、最後はガルフとやっくん（ヤクトミ）にね。何がいいかしら？」

ユディウス「マリア! あつちに新製品コーナーができているよ」

マリア 「本当だ! 行ってみましょ!」

協会認定新製品「ペットフードシリーズ」誕生!

マリア 「…」

ユディウス「…」

マリア 「お菓子じゃなく、新分野に乗り出したか」

ユディウス「まあ、協会の外（世間）では空前のペットブームらしいですし。」

マリアは棚からドッグフードを取り上げた。

マリア 「ねえ…ガルフとやっくんのみやげ…」

ユディウス「また怒られますよ。」

マリア 「いいわね。じゃあネタってことで」

マリアはそそくさと買い物がこにつめた。

ユディウス「…（いつもケンカで）反応楽しんでるのか…」

マリア 「あー！買った買った！」

ユディウス「ガルフとやっくん、早く帰ってくるといいね」

マリアは苦笑した。

マリア 「素直にはそう思えないくせに。」

ユディウスは困ったように笑った。

ユディウス「そんなことはないよ。」

” スペリアル・マスターとして”ね」

マリア 「はいはい」

涼やかな秋の風と、  
やわらかな陽光、  
まるで、何事もなかった日常のような。

5・2 a girls talk (閑話)

パンゲア大陸 ヴアルハラ帝国東部 グラブ・ダブ・ドリップ 魔  
導師協会管轄地区  
対魔導師犯罪警察組織「トランプ」本部 受付――

A子「あー、怖かった…」

B美「だねー」。

リシュリユーさんもよくあんな人と渡り合ってけるよね…  
あ、ああ見えて女は殴らない主義、とかだったり？」

C 恵「なわけないでしょー？

昨日もアヴァロン（ヴァルハラ帝国首都）の娼婦から”殴られた”ってクレーム入ったし」

A 子「今月だけで3件目だよ。

風俗関係からのクレーム」

B 美「風俗って…つか、自分の立場わきまえてよって感じ」

C 恵「おまけにさ」

C 恵「今のスピードの將軍キングが来るまで、あの人が將軍キングだったじゃない？」

A 子「あー…あまりに厳しすぎて隊員激減したってんで協会とか総統ジョーカーから將軍キング下ろされたんでしょー？今のスピードの將軍キングとも確執あるらしいし」

B 美「え！？」あの”スピードの將軍キングと！？」

それ…よっぽど性格悪いねー。

キングかわいいそー」

C 恵「つーか、そんな2人の間でやりくりしてるリシュリユーさんが一番かわいいそーだよ。」

A 子「それから、ハートの將軍キングともめっちゃ仲悪いじゃん！？」

B 美「カグヤお姉様!!」

C 恵「何その呼び方!!」

B 美「あ…つい…」

C 恵「うらやましい!!」

A 子「あの方見てたらホント、男なんていらないうって思えちゃうよねー!」

B 美「もう…超カツコイイ…!!」

C 恵「ほら、治癒魔法学科って、ほとんど女ばかりでしょー? そらもー王子様の存在だったらしいよー?」

B 美「うらやましい!! 私もその世代に居たかったわ…」

A 子「ホント、どっかの副將軍<sup>エース</sup>とは大違いよねー!」

「失礼?」

低めの女性の声——その主を見、3人の受付嬢たちは飛び上った。

漆黒の聡明な瞳に、

同じく漆黒の、腰までで切りそろえられた絡まることを知らない美しいストレートヘア、

通った鼻筋に卵のようにつるんとした玉の肌の美女――

A B C 「ハハハハハートの將軍<sup>キング</sup>！  
おはようございます！」

ハート 「おはよう」

A 子 「ごようでいらっしゃいますか？」

ハート 「ああ。

マスター・ユディウスとマスター・マリアがいらっしゃったと聞いた。

今対応できるのは私くらいかと思ったのだが……」

C 恵 「あ……もちろんそのつもりだったのですが……」

B 美 「あとからスピードの副將軍<sup>エース</sup>がいらして、そのまま応対を……」

一瞬、誰にもわからない程度だが、ハートの將軍<sup>キング</sup>の眉がピクリと動いた。

ハート 「そうか、ならいい。

ありがとう」

カツカツと去りゆく凜とした背中――

C 恵 「身が引き締まるわ……」

A 子 「ご足労かけちゃったわね」

B 美 「お目にかかれてラッキーだったけど」

カツカツカツ…その足はよどみなくハートの執務室に向いていた。

しかし、足取りとは裏腹に、ハートの將軍キングの頭は全く別のことに向いていた。

——「スピードの副將軍エース」——

同じ館内で働いているはずだが、  
実に久し振りに聞いたそのフレーズ。

ここしばらく平凡で煩雑なデスクワークに追われていたその漆黒の  
眼は、  
激しい憎しみと、こみ上げる嫌悪感に満ちた

狩人の目だった——

対魔導師犯罪警察組織「トランプ」 諜報軍「クラブ」 執務室

將軍<sup>キング</sup>不在により、溜まりに溜まった雑務の山。

5日前から不夜城と化し、山を消しては積まれ、消しては積まれ。仮眠を取ってはまたデスクに向かう日々。

煉瓦色の肩までの髪に緑の瞳、そばかすやニキビだらけの肌、活発そうな明るい印象の女性

——クラブの副將軍<sup>エース</sup> リケ・ピスドローは放浪癖のある自分の上司と、自分の分、2倍の仕事に、ただただひたすら追われていた。

リケ「ハア……」

深く、短いため息をつき、眠気覚ましのコーヒーをすする。

明日、明後日は休日だったが、この分では今週も無理かなあ、などと考えていたその時、

コンコン——ノックの音

リケ 「どーぞー」

開いたドアから申し訳なさそうに顔を出したのは  
「スピード」の第一秘書官、リシュリユー・ラプンツォッドであつた。

自分の軍ではない子がなぜ？

リケはきよとんとした。

リケ 「どしたー？」

リシュリユー 「お忙しいところ、大変申し訳ありません。」

リシュリユーは深々と、本当に申し訳なさそうに頭を下げ、デスクの上に小箱を差し出した。

リケ 「なに？私に？」

リシュリユー 「マスター・マリアからです。

先日と先ほどこちら（トランプ本部）においでになつて……」

リケ 「あれ！？2回も！？じゃ、私対応しなくてよかった！？」

リケはハッとして背もたれに寄りかかった。

リケ 「あー…今ハートの將軍<sup>キング</sup>はここにいらっしやるんだつたよね。

じゃ、大丈夫か…。」

リシュリユー「かなりお疲れの様子です。少しお休みになられては…。」

リケは笑った。

リケ「いいよ、”これ”もうちの将軍<sup>キング</sup>がいらっしゃらないのも、いつものこと。

それより、ありがとね。」

コツンとデスクの上の小箱を人差し指でつつき、  
精一杯の笑顔のリシュリユーに向けた。

「それより」と区切られてしまつては、  
リシュリユーはこれ以上ここにいるわけにはいかなかった。

リシュリユーは精一杯の気遣いを込めたお辞儀をし、部屋を出た。

リケは再びデスクに向かった。

数時間が経ち、

あまり席を立たずに済むようチビチビとすすっていたコーヒーも飲み干してしまい、

ふと集中が切れたとき、先ほどの小箱が目に入った。

リケ「…マリアから？」

リケは小箱を開けた。



学生時代から苦楽を共にした親友への感謝の気持ちで、  
自然とリケの顔を、窓からのぞく白んだ夜空へ向けた。

リケ「サンキュー、マリー」

「…まんじゅう、賞味期限切れてるけど」

—— 5 . 4 t h e m a n , h i s n a m e i s :  
(閑話) ————

その男の通る道は風が通る道

パンゲア大陸 桃花源国 北西部 崑崙山 山中

男が一人、火をおこしていた。

火が付くと、男は持っていた大きな麻袋をひょいと火の中に放り込んだ。

ゆつくりと、麻袋は炭となり、灰となった。

やがて、火も消え、

灰は風と共に舞い散った。

男は口を開いた。

男「鈴々（リンリン）、今日、何日だった？」

男の肩に、ふわりと手のひらほどの丸い光が舞い降りた。

光の中には、翅が生えた、人差し指程の大きさの少女。

少女は男の肩に座り、足と腕を組んだ。

少女「”休暇明け初”日だよ！」

男は「アレ？」と苦笑いした。

男「…そうだった？」

少女は冷ややかな目で男を見た。

少女は組んだ膝に頬杖をついた。

少女「マジックワープ」使っても、完全に遅刻だねーこりゃ」

男「やつべえ！」

男は慌ててかけ出した。

彼を追うように、風もかけ出す。

少女「魔法、使っちゃえば？」

男「ダーメツ！」

魔法って自分一人のためには使っちゃいけないの！」

少女は口を尖らせた。

少女「…いいじゃん、ちよつとくらい」

男「俺がそんなだと、”示し”がつかないだろー？  
なんだよ、どした？」

男は自分の顔の横をふわふわと飛ぶ、むすつとした少女を横目で見た。

少女はうつむいた。

少女「…この山の精霊、みんなあなたのこと好きだから」

少女は恨めしそうに”風を見た”。

男は笑った。

男「別に精霊たち（こいつら）は悪さしないよ」

少女「そうじゃないって！

もうっ！」

少女は男の顔の前でピタリと止まった。

合わせて男も走るのを止めた。

少女は切なそうに、男の顔の右上から左下にわたる大きな傷跡を撫でた。

男のこげ茶色の髪を、風も撫ぜる。

灰色の瞳はキョトンと少女を見つめた。

男の純朴な瞳に、

少女は頬をふくらませ、

男にでこピンした。

男 「アハハ！小っさすぎて痛くねー」

男は声をあげて笑った。

男 「ほら、早く戻るぞ！

トランプ本部に」

その男の通る道は風が通る道。

彼は風。

行く先で、新たな風を吹き込む。

その名は——リー・シェン

対魔導師犯罪警察組織「トランプ」

対魔導師犯罪第1軍「スぺー

ド」 将軍——

## 6・the Chesher cat

対魔導師犯罪警察組織『トランプ』

発足当初、

極めて低確率な魔導師の犯罪のために

一時的に作られる対策委員会的な集まりであった。

しかし、

魔法文化の広まりに伴う、

魔導師の犯罪のアンダーグラウンドでの大規模化、巧妙化、

それによる世界への影響力に対する深刻化から軍として組織化され、

現在では魔物災害を含む災害救助専門の軍も増設され、

バイオハザード

“ジョーカー”と呼ばれる総統を筆頭に、

対魔導師犯罪第一軍 “スペード”

対魔導師犯罪第二軍 “ハート”

災害対策軍 “ダイヤ”

諜報軍 “クラブ”

の4つの軍からなる。

そして、4つの軍にはそれぞれ

“キング”と呼ばれる将軍と、

“エース”と呼ばれる副将軍があり、

それぞれの軍を統括している。

そのジョーカーと各軍のキングたちは、

月に一度定例会が行われるのだが…

ヴアルハラ帝国東部 グラブ・ダブ・ドリツプ魔導師協会管轄地区  
トランプ本部 総統執務室<sup>ジョーカー</sup>

窓際のデスクには、

数多くのバッヂや紋章がついた軍服、

短髪の白髪に日に焼けた黒い肌、

白い口髭を蓄えた年齢とは不相応なほど屈強なガタイの老人。

——ジョーカー——ゼレル・ビノク・スロトモン

そのデスクの正面には、

煉瓦色の肩までの髪に緑の瞳、

そばかすやニキビだらけの肌、

活発そうな明るい印象の女性

——クラブのエース——リケ・ピストロー

漆黒の瞳に黒髪の坊主頭、

ピアスだらけの耳、タトゥーだらけの腕、

2メートル近くある筋骨隆々とした大男

——スピードのエース——市松桃次郎<sup>いちまつとうじろう</sup>

そして、トウジロウと同様に漆黒の険しい瞳に、

同じく漆黒の腰までで切りそろえられた絡まることを知らない美しいストレートヘア、

通った鼻筋に卵のようにつるんとした玉の肌の美女

——ハートのキング いちまつかくや 市松芳也

ダイヤは全軍遠征で不在のため、  
今回の定例会はこの3軍代表で行われることとなった。

クラブのエース、リケは、  
放浪癖のあるキングが本日も不在のため、  
溜まった雑務に追われ、ただでさえ不調の胃が、さらに軋む思いだった。

リケ （よりによって…この2人…！？）

さ…最悪…”シェンさん”、何でいないんだよ…”

なぜか氷河期のように冷たく、

深海のように重い空気の中、

ジョーカーが口を開いた。

ジョーカー「トウジロウ！」

トウジロウ「…は？」

ジョーカー「リーシエルはどうした？」

トウジロウ「来えへん」

ジョーカー「いつまで休みなんだ？」

トウジロウ「さあな」

ジョーカー（…あんまし”こつち”に頭働いてねえな、こりゃ…）

カグヤは前を見据えたまま口を開いた。

カグヤ 「上司のスケジュールも把握できないとはな。

無能にも程がある」

トウジロウ「あぁっ!？」

トウジロウはいまにも殴りかからんという勢いでカグヤを睨みつけた。

リケ （カグヤさんっ！

それ、うち（クラブ）にも当てはまりますって…）

ジョーカー（はー…まったくこいつらは…）

「まあ、キング不在の場合はエースが代理で出るもんだからな。」

とりあえず定例会を始める。

リケ、今日の議事録をダイヤにも届けるよう総務に連絡頼む。」

リケ 「はい！」

ジョーカー「じゃあ、それぞれ報告を頼む。まずはクラブ！」

定例会は各軍が一月の活動内容を報告し、互いに情報共有を行う場である。

トランプは、

4軍が4軍ともすべての活動内容を把握し、互いに出せる資源は惜しみなく貸与しあうというスタンスである。

それぞれが一通り報告を終え、

ジョーカーが解散の合図を出そうとしたとき、

カグヤが待ったをかけた。

カグヤ 「…先日、

マスター・ユディウスとマスター・マリアがいらしたと聞いたが、

一体なんのためにいらしたのだ。」

トウジロウ「…」

ジョーカー（カグヤはお前に聞いてんだろうが…！…まったく…）

「まあ、またしょうもない用事だろうが…トウジロウ！どうなんだ？」

トウジロウ「今”話題”のW・B・アライランスの捜査資料よこせー言うて来はってん」

ジョーカー「ほう？で、どうしたんだ？」

トウジロウ「好きなだけやったわ」

カグヤ 「何だと！？貴様、何を考えて…」

トウジロウ「別にええやろ、どうせすぐ捕まえんねんから」

ジョーカー「新人だったって、魔導師の端くれだぞ？」

ずいぶん強気だな。

なんだ、お前が出るとでもいうわけじゃあるまいし」

トウジロウ「出るで？」

カグヤ 「何！」

ジョーカー「…オイオイ…」

魔導師の端くれだったって、…新人だぞ？」

トウジロウ「こないだケガ完治してん。

リハビリがてら、俺行つたる思てな」

トウジロウはニヤリとした。

トウジロウ「ま、目の前の問題すぐ片付くし。

あ！つーわけやから、

俺のアーティファクト使用許可出してーな」

カグヤはトウジロウを睨みつけた。

ジョーカー「そこまでおおごとじゃないだろ。

使用許可は出さん。出さなくても片は付くだろ？」

トウジロウ「…あいつら」そろっそろええ加減錆びてまうで。」

ジョーカー「お前の腕が錆びついていなきゃ、別にかまわんだろ」

トウジロウはクツと笑った。

トウジロウ「そらそうや」

バン！

突然、執務室のドアが勢いよく開いた。

「わりー！大遅刻！

もう始まつちやっただ！？」

頭のとっぺんだけツンツン頭の、首筋までのこげ茶の髪、灰色のくつきりした二重の釣り目、

そして、

顔の左上から右下にかけて大きな傷のある小柄な男が両手に大量の袋を抱えて、慌てて入ってきた。

リケ 「シェンさん！」

カグヤ 「……」

ジョーカー 「リーシエル！」

トウジロウ 「おー大将！」

もう終わったで？」

「マジで？わりーわりー」と人懐っこい笑顔で、

リーシエルと呼ばれた男——スピードのキング リー・シェンは紙袋から箱のようなものを取り出し、

ひとりひとりに手渡した。

シェン 「これ、土産ね！」

ジョーカー 「土産？なんだ、今回嫁さんとこ帰ってたんじゃないのか？」

シェン 「ああ、半分は帰ってて半分は旅行！あいつ、土産<sup>これ</sup>食いたいっつっててさ」

カグヤ 「……」

リケ 「へえ！どこのお土産なんですか？」

シェン 「ムー大陸は観光大国マーフ！」

——間——

ジョーカー 「おい————！！！！！」

シェン 「えっ？なにっ？」

トウジロウ 「大将……そこでスピード（うち）んとこんヤツら、見いひんやつた？」

シェン 「は？何かあったの？」  
―説明中―

シェン 「アハハ！そりゃあとんだすれ違いだなあ！」

カグヤ 「笑いごとか！」

シェン 「や、だって次モモが行ってくれんだったら、もう解決も同然だろ」

カグヤ 「…樂觀視しすぎだろ」

シェンはニツと不敵な笑みをカグヤに向けた。

シェン 「樂觀視じゃないよ、信頼さ」

ジョーカー「なら、お前もW・B逮捕にトウジロウが行くことは賛成なんだな？」

シェン 「はい、その方が早く片付くし、本人も久しぶりにやる気だし、いいことづくめだと思いますけど」

ジョーカーはヤレヤレという顔でカグヤに苦笑いした。

ジョーカー「とのことだ。

スペードの問題だし、スペードのキングがOK出したんだから、もう何も言えん」

カグヤ 「…では定例会は解散ということで」

カグヤは淡々と執務室を後にした。

トウジロウは閉じた執務室のドアを睨みつけた。

トウジロウ「ケツ！」

シェン 「モ―モツ！」

トウジロウ「わかつとるがな！」

ジョーカー（ヤレヤレ…）

「リーシエル！会の内容はあとでトウジロウに展開してもらえ！

今月の定例会は解散！

W・Bの件、頼んだぞ」

「はい！」

「はあ、はあ、」

自分の息遣い、

自分の服の衣擦れの音、

自分の手を引いてくれる、前を走る金髪の男の手のぬくもり。  
それら何一つ感じることなく、

ただただ自分自身の”まったく身に覚えのない行動”に、  
混乱していた頭は

現在の状況に全くついていっていなかった。

前を走る長い金髪の男——エオル・ラーセンは口を開いた。

エオル 「よしのさん！

大丈夫？」

エオルに手を引かれる

あご下で切りそろえられた黒髪の、独特の巻き衣装の少女——染井  
よしのは

自分の名前を呼ばれ、反射的に答えた。

よしの 「はい……」

エオル （生返事だなあ……）

「フィードは！

本当にもう大丈夫なの！？」

エオルの横でブスツとしながら走っている銀髪赤目の黒づくめ——  
シャンドラ・スウェフィードは

前を見据えたまま視線を合わせず答えた。

フィード「あゝあ！

どっかのクソどもが

く！」

“ヤツ”のハナ取ってくりゃあもつと元気になるのによ

“ヤツ”とは――

ひょんなことから犯罪者として追われる身となったフィードとエオルは

道中偶然出会った記憶喪失の少女染井よしのの記憶を取り戻すため  
一路北を目指していた。

その途中、

追手に襲撃され命からがら逃れた一行は、  
凶悪な人食いミミズ「サンド・ワーム」の巣に迷い込み、  
逃げている最中であつた。

エオル「ハイハイ、元気いっぱいみたいでよかったよかった。  
フィード「お！」

一行はずつと直径5、6メートルほどの洞窟を走っていたが、  
ここにきて突然視界が開け、  
ただっ広い空間に出た。

一行は足を止め、

そのただっ広い空間を見渡した。

天井まで20メートルくらいだろうか。

その倍以上の直径の円形に空間が広がっていた。

その壁面の一部に、

今まで通ってきたくらいの穴が開いていた。

エオル「あっちだ！」

穴の近くまで駆け寄って、

一行の足は止まった。

ひどい異臭。

黒い土のような塊の中には、  
ところどころ白いものが見え隠れしている。

エオル 「人骨だな…」

その穴は今までのように奥までは続いてはおらず、  
5メートルほどですぐ壁であつた。

フィードはゲラゲラと笑いだした。

フィード「あいつのウンコかよ！」

便所だ便所——！」

エオルは恨めしそうに横目でフィードを見た。

エオル 「キミ、そーゆーネタ好きだよね…」

よしの 「どうしましょう…行き止まりですね…」

エオルは頭を抱えた。

エオル 「あ…さっきの分かれ道、逆だったか…」

フィード「…風の精霊は元気みたいだぞ」

——魔導師はそれぞれ専門の魔法によつて、

その魔法を引き起こす「精霊」の状態が見えるようになる。

エオルの流水魔法では水の精霊、

フィードの爆炎魔法では火と風の精霊。

エオル 「水の精霊は全滅に等しいけど…」

じゃなくて、風の精霊が死んでないってことは…」

フィード「…どっかに外に空気通す抜け穴がありそうだな。」

エオル 「…戻るのが早いか、

空気穴探すのが早いか」

オオオオオオ…

遠くから洞窟に反響して、

不気味なうめき声のような鳴き声――

エオルは肩をすくめた。

エオル 「探した方が早そうだね。」

フィード！風の精霊、どこから入ってきてるか見えない？」

フィードはあたりをグルツと見まわした。

フィード「あー…ウンコのせいで（空気が汚れて精霊が）よく見えねー」

フィードは元来た穴を見てニヤリとした。

フィード「まあ、

ここでやつをお出迎えって手もあんぜ」

エオル 「ここで応戦か…」

まあ、フィード以外ならこの広さ、十分かな」

フィード「待てコラ！なぜ俺様が頭数に入っとらん！」

エオル 「あのね…」

こんなほぼ密閉空間で爆炎魔法なんて使ってみてよ！

一瞬で空気なくなってお陀仏だよ！」

フィード「なにーっ！？」

エオル 「いやいや…なにじゃなくて…」

やるなら魔法無しでやってね」

フィードは舌打ちした。

フィード「せっかく俺様の魔法拳を振るうチャンスが…」

エオル 「キミのっているか…」

まあもう少し研究が進んだら実用化されるだろうね」

フィード「あつ！特許取ってねえ！ビッグビジネスのチャンスが…」

エオル 「…魔導師の研究成果って特許取れないの知ってる？」

利益が発生するため。公務員がバイトできないようなもの。

よしの 「エオル様！」

「どうやらいらしたようです！」

フィード「だぁーかぁーらっ！」

俺様を頭数に入れるー！ー！ー！」

オオオオオオ…！

一行がやって来た穴の方に視線を向けると、

“ハナ”の上あたりからポタポタと黒い液体を垂らし、  
サンドワームが頭を覗かせていた。

エオル 「この部屋に入ってくる前に叩いちゃおう！」

魔法使うスペースがあるうちにね」

よしの 「はい！」

その瞬間、

エオルの横を走り過ぎる黒い影。

エオル 「え！？ちよつとフィード！？」

フィードはサンドワームの目の前でフワリと地を蹴ると、

そのまま高く上げた踵を、

サンドワームの脳天に振り下ろした。

ズガァン…！！

サンドワームの頭は地面に叩きつけられ、

辺りに黒い液体が飛び散った。

エオル 「…まったく…」

よしのさん！俺たちは魔法で後方支援に回ろう！」

よしの 「はい！」

よしのの周囲に浮くヤサカニが

よしのを中心としてクルクルと回転し、

正面に青い宝珠が回ってきた。

よしの（えつと…）

「ボウイサナ」！」

青い、「水」という文字が浮かぶ宝珠が輝きだし、  
光の中から全身が水でできた竜——”ボウイサナ”が現れた。

ボウイサナ——”爆流攻”！！——  
ばくりゅうこう

ボウイサナの口から

滝のように強烈な圧力の水が吐き出され、  
サンドワームの頭に命中した。

オオ…

サンドワームは苦しそうに頭を振り上げた。

その勢いで、穴の天井がガラガラと崩れ出した。

エオル「げっ！？」

フィード「いっ！？」

よしの「…！！」

ボウイサナは水を吐くことを止めた。

エオル（ヘタにダメージを与えると洞窟を崩しかねないな…）

「フィード！戻って！」

フィード「！」

エオル（よしのさんの竜のおかげで水の精霊が出てきた！）

エオルは呪文を唱え始めた。

フィード「これでケリつくな」

フィードのつぶやきを聞き、

よしのは思い立ったようにエオルの前に立ちはだかった。

エオル「！？」

よしの 「…殺してしまわないでください…お願いします…」  
フィード「ハア!？」

だつたらこのまま大人しく食われろつてのか!」

よしのは首を振った。

よしの 「…もともと悪いのは

おうちに勝手に上がり込んでしまった私たちです!  
なのに…」

フィード「殺しちゃうのは悪いってか?

俺様はヤツのメシになんのはごめんだ。」

よしの 「そ、それは…」

エオル 「よしのさん」

エオルはよしのの肩に手を置いて、  
ゆつたりとした口調で語りかけた。

エオル 「あいつは”クリミナル・モンスター” って言つて、  
人をたくさん食べてる悪い魔物なんだ。

食べられてしまった人の家族とか…

あいつのせいで悲しみを抱えている人がたくさん出てき  
ているんだよ。

これ以上そんな人を増やさないためにも、  
ここで倒した方がいい。」

よしの 「…」

エオル 「ま、アイツにとっては生きるために必要なことをしてい  
るだけで、

死んだら他の人たちが救われるつてのは  
悲しいことだけだ」

フィード「テメーが”生きるためには仕方ない”

それが魔法圏の人間の考え方だ。」

よしの (お互い生きるため…)

——どうしてこの世界はみんなが等しく幸せにはなれないのでしょ  
うか……—

フィード「ま、メシも調理前は生き物だしな。

っーか、てめー」

フィードはよしのを軽くでこピンした。  
フィード「ブレすぎ。」

家畜は神の贈り物だとか、

誰かのために戦うとか、

半端な覚悟で言うな」

よしの「……!!」

エオルはフィードの足を思い切り踏みつけた。

フィード「いつてえ！何すんだよ！」

うつむくよしのに、エオルは明るく声をかけた。

エオル「ま、”そーゆーの”は俺たちに任せとけばいいんだよ。

あとで祈ってあげようね。」

よしのは目をこすり、

顔を持ち上げると、笑ってみせた。

よしの「はい……!!」

フィード「ちっ！甘えなあ、てめーは」

エオル「辛いのはつかだと飽きるでしょ！

さてと、」

エオルはガレキに押しつぶされて身動きが取れなくなっているサン  
ドサームに向けて、

再び呪文を唱え始めた。

エオル「スフ・リエル・ロー流水槍……!!」

エオルの手元から、  
水が弓のように伸び、  
矢のような形の水が、  
水の弓にかけられた。

エオルは矢を握った手を離した。

バシュッ！

それは鈍い音とともにサンド・ワームの頭を貫通した。

つい今さっきまでであった、

サンド・ワームの荒々しい息遣いは消え失せた。

よしのは固く目をとじ、手を合わせた。

エオルとよしのがサンド・ワームのそばで祈りを終え、

エオルは後方で首をかしげているフィードに気づき、近寄った。  
そして改めてサンド・ワームの場所を見る。

エオル 「…あれ？」

フィード 「おい、そーいやあ…」

この広い空間から外へ続く出入り口は  
サンド・ワームの巨体と瓦礫でふさがれていた。

——で…出られない——

フィードはうだつとし始めた。

フィード 「ヤツがこの部屋に入って来よーが来めーが、

結局アウトじゃねーか！」

エオル 「つーか、むしろ魔法のスペース確保するより、

サンド・ワームも部屋に入れてタイミング計って出入り  
口確保するほうがよかったね…

あー！失敗したー！」

フィード「後先考えろよなー！」

エオル「その言葉、そっくりそのままお返しするよ。」

しばしの沈黙――

フィード「…やっぱり、俺様の魔法しなくなーか？

もともとこういう岩削る用の魔法だし」

爆炎魔法のもとの用途は掘削や古くなった大規模建造物の解体が主。

エオル「んー…危なすぎるよ…つつても、

結局俺もそのまんま落ちたし…

…バクチってあんまし好きじゃないんだけどなあ…」

フィード「知らず知らずに案外人生ってギャンブルだぜ？」

エオル「君の場合はね。まあでも、」

エオルは不敵な笑みを浮かべた。

エオル「”社員”は”社長”について行くしか道はないしね。W・

B・アライランスの社長さん？」

フィード「お前だけだったらいーけど、よしのもいるしな。

絶対なんとかしてやんよ」

よしの「きゃー！」

突然、サンド・ワームの頭上の瓦礫がガラガラと崩れ始めた。

フィード「げ！」

エオル「さつき暴れたときの崩落、

サンド・ワームの体の厚みで今まで支えられてたのか！

それが体の力が抜け始めた分…」

エオルは口の横に拡声器になるように手をあてた。

エオル「よしのさん！

どこまで崩れるかわかんないから、そこから離れて！」

しかし、崩落は収まらず、  
洞窟の壁はガラガラと崩れ始めた。

エオル 「うわ！

ちよつと、真面目にヤバイ！！

生き埋めになつちやうよ！」

フィード「…クリスは？」

エオルはフィードのあまりに突拍子もない言葉に一瞬ポカンとした。

エオル 「へ！？

さつき舟から降りちゃったじゃない！？」

フィード「はー…そうか…」

フィードは唇に親指を当て、

出入り口を見つめた。

——どこに

どの魔法を

どのくらいの強さで打てばいいのか——

エオル （難しいな…

これだけのもろい岩盤…

下手したらここが崩れ去る前に無理やりここを崩すこと

になる…）

ゴゴゴ…

よしのの頭上から、

巨大な岩が落下してきた。

エオル 「よしのさん！！」

よしの 「！！」

バチィ…！

よしのの周囲を取り巻くヤサカニの結界によって、

大岩は粉々に碎け散った。

エオル 「うわ…みんなでその（ヤサカニの）中に入ってたら

普通に無事助かりそうだね…」

よしの 「はっ！そうですわねっ！

どうぞお入りくださいっ！！」

エオル 「や…たぶん主以外は拒絶されると…」  
ガラガラガラ…

崩落はより一層激しさを増していった。

エオル 「フィード！

思った通りにやっちゃっていいよ！

少なくともよしのさんは無事で済むと思うっ！」

よしの 「ええっ！？そんなー！！」

フィード（よしのが無事なら賭けてもいいか…）

フィードは出入り口の方角にゆっくりと手のひらを向けた——その時  
ジャラン…

突然、

崩れゆく広間の中に

弦楽器の音が響いた。

フィード「！」

エオル 「えっ？」

よしの 「あっ」

音のしたほうに目を向け、

よしのは思わず両手で口元を押さえた。

ガラガラと崩れゆく外壁の、  
天井近くの岩の出っ張り——

一行の視線の先には、

異国の弦楽器を携え、

ふかぶかと顔を隠すようにマントを頭からかぶった

褐色の肌の10歳前後の幼い少年が座っていた。

フィード「いつからいたんだ？」

エオル「おい、坊や！迷子かい！危ないからこっちにおいで！」

よしの「…チエシヤ猫さん…」

エオル「え!？」

ジャラン!!

少年は弦を鳴らし、

一行の注目を集めると、

静かにある一点を指差した。

一行はその指が指し示す方向に目をやった。

フィード「…ヤツの便所じゃねーか」

エオル「…サンド・ワームの”アレ”になれってわけじゃあなさそうだけど…」

一体どういう…」

再び少年に視線を向けたが、

すでにそこに少年の姿はなかった。

エオル「消えた!？」

よしの「チエシヤ猫さん…」

フィード「何だよ意味わかんねーなっ！」

まったく、魔法ぶっ放そうとした途端に妙な邪魔しやがっ

…」

フィードは一瞬唇に親指を当てると、再びサンド・ワームの便所を見た。

フィード（まさか…？）

よしのは胸の前で固く手を組んだ。

よしの「チエシヤ猫さんは…」

私をお2人のところに導いてくださいました。

今度もきつと進むべき道を示してくださいましたはずですよ。」

エオル「…不安要素は山ほどあるけど…」

エオルはフィードの肩に軽く拳を突きつけた。

エオル「賭けるよ、俺は。君に」

フィード「…ま、それしか選択肢がねーしな」

エオルは苦笑した。

エオル「まあね」

フィード「…」

フィードはサンド・ワームの便所の前に立った。

フィード「こつちを壊すぞ」

フィードの小さくも力強い肩越しに、

エオルとよしのは力強くうなずいた。

崩落はさらに激しくなってきた。

フィードは目をつぶり、

静かに呪文を唱え始めた。

エオル（大気が震えてる…

大きい魔法だな）

「よしのさん、ちよつと離れよう。

あと、耳、塞いで」

よしの 「はい…！」

フィードは目を開き、便所に向けて手をかざした。

フィード「爆炎破！！」  
グレ・ネルド

よしのは突然耳を塞いでいる手越しに

鼓膜が破れるかというくらいの轟音と、

全身を強く前から後ろへ抑えつけられるような衝撃に襲われた。

自分が一体どうなったのか分からないまま、

やがて風が収まり、

よしのは思わずつぶった瞳をゆっくり開けた。

そこには、

真っ赤な夕日がよしのを照らしていた。

よしの 「あ…」

エオル 「よしのさん大丈夫？」

耳元で聞きなれた声、

そして、背中が妙に温かいことに気づく。

ふと、声の方に顔を向けると、

エオル 「痛て！」

よしの 「痛っ！？」

エオルの顎とよしのの頭がぶつかった。

よしの 「！？！？」

よくよく確認すると、

自分の下にエオルの体がある。

というのはよしのの視点で、

エオルの膝の上によしのがすっぽりと座イスに座るように収まって

いる、というのが正しい。

エオル（あ、もしかして何が起こったか、わかってない？）

「よしのさん小さいから、爆風で飛ばされちゃったんだよ」  
それをエオルが慌てて受け止めた、という次第だった。

よしのは慌てて飛び退いた。

よしの「きゃー！申し訳ありませんっ！！」

エオル「いや、俺は大丈夫だよ。

それより、いつの間にかヤサカニ消えちゃってたから、

よしのさんのほうが危なかったし。」

よしの「そういえば……」

よしのは試しにヤサカニを発動させた。

フワリ、と再び4つの宝玉が姿を現した。

エオル「壊れてはなさそうだね」

フィード「おいてめーら！

早くしねーとミンチになんぞ！」

爆発のあと、一瞬安定していた崩落。

しかし、再びパラパラと上から砂が落ち始めていた。

エオル「急ごう！よしのさん！」

エオルはよしのに手を差し出した。

よしの「は、はいっ！」

一行が脱出して間もなく、

大砂瀑布と砂の大河の間の一部が崩落した。

崩落の風を背中に受けながら、

エオル「どうやら、

“トイレ”が一番、岩盤が薄かったみたいだね。」

フィード「もし一発でぶち抜けなかったら、ウンコまみれだったけどな〜」

エオル「ウンコまみれで窒息死とか最悪だね」

よしの 「あの…」

フィードとエオルは同時によしを見た。

エオル 「あ！ごめん！

女の子いるのにこんなアホな話…」

よしの 「いえ…その…」

よしのはうつむいて目を合わせようとしなかった。

エオル 「？」

よしの 「て、手を…」

言われてエオルは思い出した。

エオル 「あつ！ごめん、忘れてた！」

エオルは繋いでいた手を離れた。

エオル 「ごめんね？」

よしの 「あつ！いえ…その、大丈夫です…」

エオル 「そーだ！

結局、今どの辺りか分からなくなっちゃったよ…

荷物も全部砂の底だ。

地図もなければコンパスもない。」

フィード「あ…」

チエシヤ猫また出てきて教えてくんねーかな」

エオル 「ちよつと！

…確かにおかしな点はたくさんあったけど、

今は情報を整理できる状況じゃないよ。」

フィード「わーってるよ」

「ミャー」

遠くから何か甲高い鳴き声。

よしの 「クリスちゃんですわ！」

よしのは駆け出した。

遠くに黒いまん丸の影が見える。

フィードは笑った。

フィード「あいつ、遠くから見るとゴマ粒みたいだなあ！」

エオル（あれ？そういえば）

「さつきクリスは？って言ってたけど、

あれ何だったの？」

フィードは笑うのをやめ、エオルを横目でチラリと見た。

フィード「…急に腹減ったんだよ」

エオル「おやつ感覚なの…」

よしの「エオル様！フィード様！大変です！クリスちゃんの様子が…！」

フィードとエオルが駆け寄ると、

クリスがプルプルと震えていた。

フィード「あ？何やってんだよ、お前」

フィードがつるしあげるようにクリスのしっぽをふんづかみ、  
ぶんぶんと上下に振った。

エオル「ちよっと！フィード！！可愛いそうだよ！」

ゲロ！

クリスの口から丸い何かが吐き出された。

フィード「ん？」

エオル「え？」

よしの「これは！」

そこには赤茶色の「土」という文字が浮かんでいる透明な宝玉――

よしの「もしかして…」

よしのがヤサカニを発動させると、

赤茶の宝玉は磁石のように

4つの宝玉の輪の中にふわりと吸い寄せられた。

よしの「…5つめ…」

フィード「おい、てめー、どこで見つけやがった。」

フィードはグルグルとクリスを振りまわし始めた。

エオル「フィードッ！やめなつて！」

偶然とはいえ、たぶん目的のものも手に入ったんだし！」

フィード「ちっ！おい、よしの。」

こいつの汚ねえ胃液ついてっから、あとで拭いとけよ！」

よしの「はい！」

よしのはクリスを抱きしめた。

よしの「ありがとう、クリスちゃん」

フィードは軽く溜息をついた。

フィード「太陽の方角から、だいたいの方角はわかる。

この砂漠一帯の地図も頭に入ってる。

とりあえず一番近くの町に寄って、体制立て直すぞ。」

エオル「一番近くの町？」

今日中につけるとこなの？」

フィード「ここから北西に40キロくらい」

エオルは溜息をつく、「よしのさん、ごめん」とよしのを肩に担ぎ上げた。

エオル「走れば魔導師の脚なら夜までには着けるでしょ、社長？」

エオルはニヤリと不敵な笑みをフィードに向けた。

フィード「社長を走らせるとか、人使いの荒い部下だぜ」

フィードもニヤリと不敵な笑みを浮かべ、

前をまつすぐ見据えた。

フィード「あと一息、よろしく頼むぜ、ヒラ社員ども」

日の傾きとともに、

地獄の暑さは地獄の寒さへと変わりつつあった。

ヴァルハラ帝国　Grab・ダブ・ドリツブ魔導師協会管轄地区  
魔導師協会本部――「バベルの塔」最上階広間

鏡のように磨きあげられた床には11人の黒いローブの影。

そのうちの一人、ほかの10人の前でロッキングチェアに揺れながら、

パイプをふかしている小さな老人

――魔導師協会会長　オード・メロワマルはローブのポケットから時計を取り出した。

会長　「時間じゃな」

ポツリとつぶやくと、

広間は冬の水底のような重い静けさをたたえた。

老人は自分の正面に立つ、10人の黒いローブの集団の中で、ひと際大きな犬男――ガルフィン・フォーンに目を向けた。

会長　「ではまずガルフィン、W・B・アライランス追跡の結果を」

ガルフィンは軽く頷き、ロッキングチェアの隣に立つと、その場に  
いる全員の視線を確認した。

ガルフィン「W・B・アライランスはムー大陸マーフ国東部の町力  
ーシーを北上し、

“あの”砂の大河に向かったのだが、

…なぜか大河を渡らず舟で河を下っていた。」

ブロンドのカールした長い髪にグリーンの瞳の女性――マリア・フ  
ラーレンは怪訝な顔をした。

マリア　「河を、”下った”？」

そこまで行っただのなら北上したかったんじゃないかった  
のかしら」

ガルフィン「わからん。

だが、河を下つているところで俺とヤクトミが追い付き、説得を試みた。」

「…ということは、

本当にジパング人が一緒だったのか？」

黒い髪を後ろに上げた不精ひげだらけの顎、こげ茶色の切れ長の瞳の男——ジャイブ・タイラーは

おいおい、とオーバーなりアクションをとって見せた。

ガルフィン「……ああ、驚いた。

黒髪黒目の黄色い肌に、”あの”独特の民族衣装まで

着ていやがった。」

ジャイブ「へえ！」

マリア「そんな…」

「それで？」

黒い肌に赤い髪の中年の男——ユディウス・ラークはガルフィンを見た。

ユディウス「彼らをセイラムにやることはできたのですか？」

ガルフィンはユディウスの何かを探るようにじっと瞳を見つめた。

ガルフィン「いや、結論から言うと、セイラムにやれなかった」

マリア「逃がしたってこと？なぜ？」

ガルフィン「俺から逃れるための苦肉の策だろうが…」

ガルフィンは言葉の先を言いづらそうに渋った。

マリア「何よ」

ガルフィン「滝へ突っ込んだ。

魔法を推進力にして、思い切り」

マリア「……！」

マリアは言葉を失った。

ジャイブ「…それは、お前の力をもつてしても助けられなかった

つてことだろ？

なら、ここにいる誰がそこにも同じだった。」

ガルフィン「言い訳はない。俺の責任だ。」

ユディウス「そんなことはないよ。」

ガルフ、ジャイブも言ったけど、君が正しいと思ってとった行動なら、誰もが納得している」

「確かに……ただ問題なのは、そのあとの行動ではないか？」

赤茶色の髪に一重の腫れぼったい瞼の青い瞳、

小さいおちよぼ口の人形のようにつるんとした顔の男——キリス・シュナウツァーは抑揚のない声で淡々と続けた。

キリス「お前は死体まで確認してきたのか？」

マリア「確認って……あんた、砂の大河の滝壺がどんな風か、知らないわけ！？」

ジャイブ「いや、どんなであれ、死体を確認できなきゃあ

本当に死んだのか確認は得られん。

それを含めて”責任”って言ってんだよなあ！ガルフ

イン！」

ガルフィン「ああ」

マリア「~~~~~！！」

ユディウス「マリア、何か納得いかない？」

マリアはキリスに視線を向けた。

マリア「結果として、

死んだかどうかの確認が得られないから失敗だったつてところは納得よ。

でもね、

物理的に確認不可能な場所に行つて確認して来いつて聞こえるのが納得いかない。

ガルフやヤクトミ・ヴルナスまで危険なところに飛び込んで命を落としたら元も子もないわ！

「だったら今回は”失敗”でも仕方なかったと私は思う！」

キリス 「仕方ないという言葉や好きではない」

マリア 「あのねえ、この世に白か黒かしかないと思ったら大間違いよ！」

キリス 「魔法を扱うという時点で我々はすでに”危険な場所”にいる。

一般人より危険を冒しているのが魔導師だし、それが魔導師の仕事だ。

「だいたい、

いちいち、やれ生徒のためだのなんだのと必要以上に危険に首突っ込んでいるやつセリフではない。

そもそもお前はスペリアルマスターの仕事を勘違いしている。

我々の仕事は優秀な魔導師を輩出することだけだ。お前は感情論に任せて本来の仕事から逸脱しすぎている。」

ジャイブ 「ちよいちよいちよい…お前も話が脱線…」

マリア 「優秀な魔導師ですって！？笑わせないでよ。市松桃次郎に追い打ちをかけたのはあなたよ！？よく

そんなこと…」

周囲がざわめき始めた。

「まずい…あの2人に市松桃次郎の話は…」

キリス 「それが感情論だと言っているのだ。

もしそれが自身の過去の”贖罪”のつもりなら、自己満足と周囲への迷惑以外の何物でもない」

マリア 「そんなじゃないわ。単なるポリシーよ」

「誰だよ…キリスに”あのこと”しゃべったの…」

キリスは皮肉っぽい笑みを浮かべた。

キリス 「第一」

再び周囲はキリスに注目した。

キリス 「新人の犯罪魔導師にかまけているヒマがあるなら、自分の夫のことをなんとかしたらどうだ」

——その話はダメだ！——

周囲が凍りついた。

マリア 「……！」

マリアが口を開きかけた瞬間——

会長 「元」夫だ。マリアとはもう何の関係もない。キリスよ、話を脱線させてくれるな。」

マリアは会長の仲裁の言葉が耳に入っていないかのように、普段からは考えられない冷酷な表情を見せた。

マリア 「あの人はもうSSS（トリプルS）級のクリミナル・モンスターになり下がってるわ。」

犯罪魔導師どころか、もう人ですらない。」

ガルフィン「マリア、もうよせ。」

ユディウス「もういいよ、マリア」

周囲がざわざわと再びざわめき始めた。

会長は少し息を吸うと、声を荒げた。

会長 「マリア！キリス！いい加減にせんか！ここは口喧嘩の場ではないぞ！」

場は一瞬にして静まった。

マリア 「……申し訳ありません」

キリス 「失礼しました。」

会長は2人を厳しいまなざしで睨みつけ、それから場を切り替えんと手を叩いた。

会長 「よし、では安否は未確認だがジパング人を連れていることは確認したということじゃな。」

ユディウス、マリア、ジパング人拉致の声明について、どこまで情報が回っているかはわかったかの」

ユディウス「ええ。関係各所に探りを入れましたが、

あの声明が出されたのは魔導師養成学校アカデミーだけですね。」

ガルフィン「アカデミーだけか…」

マリア「何を意図してかは分からないけどね。」

なので、一番懸念されていた対魔導師犯罪警察組織トラップにも、

情報は行っていないようでした。

ただ、ひとつ問題が。」

会長「問題？」

ユディウス「次回から、W・B・アライランス逮捕に市松桃次郎が出勤するそうです。」

周囲が三度ざわめいた。

ジャイヴ「オイオイ…こりゃへたすりゃ後がないぜ…」

会長は声のトーンを一つ落とした。

会長「なぜ、”そこ”までの騒ぎになっておるのかの…」

ジパング人の話が本当は行っているということとは考えられないのか？」

マリア「いえ、本人は先日のケガのリハビリがてらと言っていたので。」

また、”スペード”の捜査資料もわざわざ持たせてくれましたが、

ジパング人に関するものではありませんでした。」

キリス「”アレ”は普通にウソをつく。そのまま言うことを信用するのはどうかと思うが？」

マリア（あんた、担当教官だったくせに今までトウジロウの何を見てきたのよ…!）

マリアは出かかった言葉を必死で押し込んだ。

会長「…マリア」

マリア「はい」

会長「お前さんから見て、トウジロウの態度はどうだった？  
ウソやごまかしがありそうだったか？」

マリアは胸を張った。

マリア 「いいえ！」

あの子は確かにウソやごまかしはともうまいです。

頭がいい。

けれど、あの子は他人のためにしかそういうことはし

ません。

なぜなら自分に自信があるから。

なので、彼は本当にすべての情報をくれたと私が責任を持って断言します。

…先日のケガでついでに頭打って人格変わってなければね」

マリアはいたづらっぽく会長を見た。

会長は頷いた。

会長 「生徒一人ひとりに対する観察眼はマリアが一番たけておる。

お前さんの言葉、僕は信用しよう。

よって、

ジパング人拉致の声明はアカデミーだけにしか来ていないと判断しようと思う。

異論があれば、言いなさい。」

辺りは静まった。

会長 「では今後についてじゃが、

足取りはつかめなくなったが、万が一生存したと仮定し、

大砂瀑布から近い町を風漬しに情報があるかだけでも探そう。

それはガルフィン指揮のもと、ヤクトミに引き続き担当してもらおう。

情報が得られるかも運次第ではあるが、今できること

はそれくらいかのう。

あとは、引き続き対魔導師犯罪警察組織<sup>トラップ</sup>の監視をマリ  
アとユディウスにお願いしよう。

また状況が変わり次第、皆には集まってもらおう。以上  
じゃ。」

解散後、わらわらと塔を下っている途中――

ガルフィン「大丈夫か？」

マリア「あんたがよ」

ユディウス「どちらもです」

ユディウス、マリア、ガルフィンはいつものように3人並んで塔を  
下っていた。

わずかな沈黙の後、マリアは大きなため息をついた。

マリア「あたし、ちょっと今日は飲んでくるわ」

ガルフィン「女一人でか？寂しいやつだな」

マリア「あれ？知らないっけ？あたしの飲み仲間」

ガルフィン「知るか」

ユディウス「飲み仲間というか、グチられ係でしょう？」

マリア「のーみーなーかーまっ！！」

リケ・ピストローとか」

ガルフィン「トラップじゃねーか。酔った勢いで情報垂れ流すなよ」

マリア「は？あんたたちも来なさいよ」

ユディウスとガルフィンは互いに顔を見合わせ、同時に答えた。

「遠慮する」

バベルの塔を後にし、マリアと別れた後、

ユディウスとガルフィンはアカデミー職員宿舎に歩を進めていた。

ガルフィン「あいつは外からつつかれやすい過去を持ちすぎだ。」  
ユディウス「マリアのことですか？」

大丈夫ですよ。彼女は強い。」

ガルフィン「…弱みを見せんから逆に不安だ。」

なんだかんだいって、俺たちより2回りは若い。」

ユディウス「僕が彼女を強いと評価しているのは、そういった点を含めてですよ。」

弱みや悩み、ストレスのはけ口をキチンと持っている。

」

ガルフィン「お前、プライベートでも大変だな…」

ユディウス「？」

いいえ、彼女は僕と君に同じことしか吐かないよ。

僕らには言えないようなことは、今日みたいに外で発散してるみたい。

唯一君に言わなくて僕に言うのは君とケンカしたときのグチくらいさ。」

ガルフィンは肩をすくめた。

ガルフィン「ヤツに心配は無用のようだな」

ユディウス「ハハ、今頃かい？」

ユディウスと別れ、ガルフィンは自分の部屋に向かった。

すると、ドアの前に白い髪と白い尻尾を生やした青年

——ヤクトミ・ヴルナスがうずくまっていた。

ヤクトミはガルフィンの姿を見つけると、慌てて立ち上がった。

ヤクトミ「あの…すみません、その…待ちきれなくて。」

話し合い、どうなりました？」

ガルフィンはやれやれとため息をついた。

ガルフィン「その件は明日朝一に伝ええると言っただろうが。まったく、お前ってヤツは」

ガルフィン はヤクトミの頭にポンと大きな手の甲を置いた。  
ガルフィン 「生存の可能性を考慮して、搜索再開だ。

大砂瀑布付近の町で情報収集を、会長はお前に任せてくれたぞ。」

ヤクトミ 「!!」

ガルフィン 「ただ、今日はもう遅い。

明日の朝、計画を立ててから早速行ってもらうぞ。

ゼミの2時間前に俺の執務室に来い。」

ヤクトミ はガルフィンをまっすぐ見据えた。

ヤクトミ 「はい！ありがとうございます！」

ヤクトミを見送り、部屋のドアを開け、明かりをとると、

ガルフィン はベッドになだれ込んだ。

ガルフィン (ヤレヤレ…)

ふと、正面のガラス棚に目が行った。

ガルフィン (…)

バルコニーに出て、

ペタリと床に座り、

持ってきたグラスにウイスキーを注いだ。

今日は月がよく見える。

カラン、というわずかな音に、斜め下のバルコニーに目をやった。

ユディウスが同じく床に座り、グラスをこちらに掲げている。

ガルフィンはクツと吹き出すと、ユディウスに向けて、同じくグラスを掲げた。

今日は本当に月がよく見える。



## 6・1 good relationship between teachers

アカデミーの教師マリアに引っ張られて  
飲み屋に連れてかれたトランプの面々との  
ちよつとした小話。

マリア「いやー！よかったわ！呑みに行く時間がとれて！」

リケ「あんたが無理やり引っ張ってきたんでしょーがっ！」

パンゲア大陸 ヴアルハラ帝国 首都アヴァロン とある居酒屋の  
一角――

マリアはジョッキになみなみと注がれた酒をグイと一気に飲み干した。

マリア「つかー！ーっ！！」

ドカリとジョッキをテーブルに置くと、さっさと店員を捕まえて次の注文をはじめた。

リケ（あー…これはグチレベル”カオス”だわ…）

トウジロウ（オイ！カオスでなんやねん！）

シエン（なんかやな予感すんなー）

マリア「ちょっと！なにコソコソ話してんのよっ！」

トウジロウは立ち上がった。

トウジロウ「なんでアヴァロン（ここ）まで出てきて色気ないトコ

おらなあかんねん。

別の店行くわ」

リケ「なーっ！トウジロウさんっ！困りますっ！」

シェン「そうだぞっ！上司を置いて逃げんなモモッ！」

マリア「困るだの逃げるだの、なんなのよアンタたちはっ！」

マリアはトウジロウを睨みつけた。

マリア「おすわり」

トウジロウ（はー…こら逃げてもややこしなんな…）

トウジロウはため息について腰をおろした。

――間――

マリア「でさー！…って聞いてる？リケ！ちよっと！」

マリアは隣でテーブルに突っ伏しているリケの頭をベシベシと叩いた。

しかし、リケは起きる様子もない。

マリア「リークーン」

今度は向かいで口をあぐりと開け、椅子の背に頭を乗せて寝息を立てているシェンにピーナッツを投げつけた。

しかし、シェンも目を覚ます気配がない。

トウジロウ「やめとけ、疲れてて酒のまわり早なってんねん」

マリア「リケはいいとして、なんでリーくんまでー!？」

トウジロウはリケを顎で指しながら答えた。

トウジロウ「オレが將軍<sup>キング</sup>の仕事手エつけてへんかってん。そいつ（ピストロー）と違ってな」

マリア「ひどい子ねー。キング不在の時は副將軍<sup>エース</sup>が代理でやるんじゃないの」

トウジロウ「知るかいな」

トウジロウはテーブルに大きな足をのせ、だるそうにグラスをまわした。

トウジロウ「で？」

マリア「何？」

トウジロウはグラスに目を落したまま、しかし真面目な声色で続けた。

トウジロウ「ピストローはともかく、

オレまで呼ぶとか、

どーせシユナウツァー（キリス）のアホとまた何かあつてんやろ？」

マリアは笑った。

マリア「聡い子ね、やっぱりアンタは」

トウジロウ「…」

マリアが手をかけようとしたジヨッキを、トウジロウは器用に足先で遠ざけた。

マリア「何すんのよ、行儀の悪い子ね」

トウジロウ「酒に逃げたかて何もならへんで

マジメなグチはマジメに吐け。」

マリアは「ハァー」と長いため息をつき、椅子にもたれかかった。

マリア「あんたって子はホント…」

トウジロウはマリアを見た。

マリアもトウジロウを見た。

沈黙が続いた。

マリアは笑ってテーブルに寄りかかった。

マリア「あいつがさ、何でか私のヒミツ知っててさあ」

トウジロウ「あー、元旦那？」

マリア「……あと、私がスペリアル・マスターをやってる…理由じゃないけど理由みたいなもの」

トウジロウ「お前、ヒミツ多い女やなー」

マリア「女はだれしもいろんなヒミツを持ってるのよ」

トウジロウ「で、そのヒミツとやらつつかれたワケか」

マリア「そ…しかも会議中に！

あたしもカツとなっちゃってさー」

トウジロウ「そらカイチョーのカミナリ落ちたな」

マリア「そー！もー、いい年して口喧嘩して上からどやされて、超赤っ恥！ー」

トウジロウはゲラゲラと笑った。

トウジロウ「ガキか！」

マリア「うつさいなー！もーっ！」

マリアはチラリとトウジロウを見た。

マリア「…その私がスペリアルマスターになった理由って秘密、聞かないの？」

トウジロウ「別に興味ナイな。

”今” ソコソコ割と立派にスペリアルマスターやってんねんから、それでええやん」

理由なんて、と付け足し、トウジロウはグラスを一気に飲み干した。

マリアは目を瞑った。

——失敗を笑い飛ばして気にさせなくしてくれる。

——ヒミツだと言ったこと、あえて聞かずにいてくれる。

——アンタのそういう、なんとなくのやさしさに触れたかった。

——それがアンタを呼んだ理由よ。

マリアはフツとほほ笑んだ。

トウジロウ「？なんや気味悪い」

マリア「ダメな先生ね。教え子に甘えるなんて」

トウジロウは鼻で笑った。

トウジロウ「ガツコ出たら上も下もカンケーない社会人やで。

教え子がいつまでたってもガキや思てる方がよっぽど  
ダメなセンコーやな」

マリア「キー！

自分以外にダメな先生とか言われたらハラ立つわっ！」

トウジロウ「ほな、ダメオバハン」

マリア「なんですってー！！！」

眠らない都アヴァロンの夜は更けてゆく…

—— good relationship between  
teacher and student (閑話) ——

## 6・2 from the bottom (前書き)

協会の命によりW・B・アライランスを捜索中のヤクトミと、ある少女の小話。

## 6・2 from the bottom

大砂瀑布東部の村 カナ

人口300人程度の小さな集落

魔導師協会よりW・B・アライランス搜索の命を受け、  
ヤクトミは大砂瀑布東部の町から順に、  
風漬しに情報を探っていた。

ヤクトミ（砂の大河以北の町を、

ガルフィンゼミの中から俺含めて5人…

俺はここで3箇所目…

いずれも有力情報なし。

東はハズレだったか…）

などとボヤキを頭の中で反芻しながら、

半日ほどでこの村での搜索も終わった。

村を出ようと村のメインストリートに差し掛かった時、

村で唯一の雑貨屋の前に人だかりが出来ていることに気づいた。

ヤクトミ「？」

ヤクトミが覗くと、

そこにはナワで縛られ、

店主から殴られたり水をかけられたりしている  
少女が目に入った。

ヤクトミ「な！

何やってんですか！」

店主は助けてくれと言わんばかりの視線をヤクトミに向けた。

店主「こいつ、店から食い物盗ろうとしたんだよ。

被害者はこつちさ」

と、店主の手の中には小さなアメ玉。

ヤクトミは少女に目をやった。

ガリガリに痩せ細り、

まるで骸骨のようなその形相は、  
どこかうつろで、荒んでいた。

ヤクトミは店主に金を払い、少女を許すよう説得した。

やがて、人だかりは消え、ポツンとヤクトミと少女のみが残った。

ヤクトミはヤレヤレと少女を見た。

ヤクトミ「どんなことがあっても、

人から物を奪うなんてダメだぞ」

少女はヤクトミを睨みつけた。

少女「やっぱりお金なのね…」

ヤクトミ「？」

何？」

少女「なんでもかんでも、

この世の全てがよ！

人の命救うのも、

人が自由でいられるのも、

人が生きていくのも、

全部！全部お金次第！」

ヤクトミは少女の剣幕に押されながらも、  
なんとか口を開いた。

ヤクトミ「…悲しいこと言うなよ…」

少女は間髪入れず言い返した。

少女「本当のことよ。

もしそれが悲しいことって言うなら、

真実っていうのはすべて悲劇ね」

ヤクトミはアレコレ考え、  
言葉を選んだ。

ヤクトミ「それは…今がどん底だからさ、きつと。

ちゃんと働いて、生活の基盤を立てれば…」

少女「生活の基盤？」

私はイヤよ、金に縛られる生活なんて。  
だったらどん底でいい！

どん底とか、どん底が悲しいとか、  
アンタみたいなやつが一番ムカつく！」

ヤクトミ（な…

なんでここまで俺言われてるんだ…）

少女「…アンタ獣人？」

少女はヤクトミに尻尾が生えていることに気づいた。

ヤクトミ「…まあ」

少女はニコリと笑った。

少女「私もよ。猫の獣人なの。」

その言葉で、

ヤクトミは少女がなぜこのような生活に陥っているのか、  
理解した。

少女「あっ！これ！」

次に少女はヤクトミの胸ポケットから覗く学生証を見つけ、指差した。

ヤクトミ「ああ、俺魔導師の卵なんだ」

少女は目を輝かせた。

少女「あたしを身売りから解放してくれたのも、魔導師だよ！

シャンドラさんとエオルさんっていうんだけど…あんた知らない？」

ヤクトミ「え…」

ヤクトミは少女の肩を掴んだ。

ヤクトミ「どこで！？いつ！？」

少女「は…？あんた、知り合いなんだ？」

ヤクトミ「そうだけど…どこで会ったんだ？」

少女はなんなのよ、と言いながらも、答えた。

少女「砂漠のど真ん中。

カーシーまで一緒だったけど…」

ヤクトミは肩を落とした。

ヤクトミ（カーシー…アートルーからの移動中か…）

少女「ねえ！」

ヤクトミは顔を上げた。

少女「あの人たちと会うの！？」

私も会いたいんだけど、連れてって…！」

ヤクトミはため息をついた。

ヤクトミ「遊びに行くわけじゃ…。」

少女「あたしラプリー！よろしくね」

ヤクトミ「おい…ちょっと」

少女「そうと決まれば早く…」

ドサッ！

ラプリーは急に倒れた。

ヤクトミは慌ててラプリーを抱えた。

ヤクトミ「おい…！」

ラプリー「お…おなかが減って力が出ない…。」

ヤクトミ（低血糖…。そのくせテンションあげるから…）

ヤクトミはため息をつき、ガルフィンの言葉を思い出した。

” 乗り掛かった船は最後まで責任持て ”

ヤクトミは天を仰いで再びため息をついた。

— from the bottom (閑話) —

6・2 from the bottom (後書き)

Q ラプリって誰？

A 第二話で出てきた女の子です。

6・3・bitter sweet (前書き)

フィードとエオルの学生時代のちょっとした小話。

## 6・3・bitter sweet

フィード「まだかな」

ヤクトミ「お前なあ、知らねえぞ」

アカデミー  
魔導師養成学校第308教室

教室内は異様な興奮と期待感に包まれていた。

少し開いたドアの隙間から、  
外側のドアノブに、白く大きな手がかかる。

教室が一瞬にして静まった。

ギィ……

ばふっ！

もくもくと白い煙を立て、  
ドアを開けたこの授業の担当——ガルフィン・フォーンの頭に、  
黒板消しが落ちた。

「ギャハハハハハ」

教室内は一斉に爆笑の渦に包まれた。

ガルフィンが吠えた。

「首謀者はどこのどいつだ!!」

ガルフィンのいつもの怒鳴り声をスタートの合図に、  
教室中の生徒たちは一斉に  
蜘蛛の子を散らすように逃走した。

ガルフィンは指をボキボキと鳴らした。

ガルフィン「いい度胸だ。ガキどもめ」

——図書室

エオル「…騒がしいな…」

一人、授業の空き時間を利用して  
読書にふけていたエオルは  
外の異変に気づき、

思わず図書室のドアから顔を出し、外の様子をうかがった。

すると、

正面の階段に赤い瞳が2つ。

エオル「ねえ、一体何の騒ぎ…」

フィード「ちょうどいい！」

エオル「？」

フィードはエオルの手をぎゅっと握った。

フィード「あとは頼んだ！誰か知らねーけど！」

エオル「？？？」

フィードはそのまま窓から飛び去った。

エオルは窓からフィードの背中を怪訝そうに見つめた。

エオル（なんだったんだ？）

ガシッ！

突然、エオルは首根っこを掴まれた。

ガルフィン「お前か？」

エオル「！？！？」

エオルの手には、チョークの粉がべつとりと付いていた。

エオルはふと目を覚ました。

エオル（ずいぶん懐かしい夢だな…）

そもそもこんな記憶、よく残ってたな、  
などと思いつつ、

エオルは眠り眼をこすりながら、  
フィードと火の番を交替しようと  
むくりと起き上がった。

今思えば、

あれが最初の出会いだったのか…

なつかしい

当時は苦い思い出も

今となっては――

— b i t t e r   s w e e t （閑話） —

6・3・bitter sweet（後書き）

次はひさびさに本編。（来週末up予定）  
がつつりな文章量です。

## 7・a sacrifice of happiness) the first

ひさびさの本編。

後編は次週更新予定。

ファンタジーなのに、前後編なのに、バトルが一切出てこない。

これまでの話がプロローグとしたら、

この話からしばらくは「悪魔の薬編」といったところになります。  
いろいろ話が動き出します。

どうぞお付き合いください。

ムー大陸中部 マーフ国 北東部の街 キーテジ

マーフ国北部のほとんどを占める砂漠地帯”アクロスザナル”を抜け、

緑がまばらに出てくるとすぐの、砂漠と緑が共存する町。

カーシーの街ほど栄えてはないが、北部とアクロスザナルの間の要所として

昔から旅人に重宝されてきた宿場町――

とりあえず魔導師のバッヂをちらつかせて安心させ、無一文なのに上がり込んだ安宿。

安いだけあって狭い部屋に二段ベッドが隙間なく敷き詰められた、寝るためのだけの部屋が並ぶ

その一室の、

入口に近い一番端のベッドに三人は額を寄せ合っていた。

金髪長髪のエルフ――エオル・ラーセンが口を開いた。

エオル「えー…みなさん。

現在、我々が直面している深刻な問題が、

いったい何なのか、

ご理解いただいていますでしょうか」

銀髪赤目の黒づくめ――シャンドラ・スウェフィードと

黒髪黒目の記憶喪失の少女――染井よしのは

同時に答えた。

「お金がない」

— a sacrifice of happiness)  
the first part) (幸せの代償(前編)) —

エオル 「しかも、宿一泊しちゃったし…」

フィードは肩をすくめた。

フィード 「おいおい、なーに罪悪感にかられてやがる。

俺様たちやあ犯罪組織W・B・アライランス様だぜ。」

エオル 「だから？」

フィード 「踏み倒しやあいじゃねえか。」

エオルはフィードと視線を合わせるのを止めた。

エオル 「…だよね。今から稼げばいいんだもんね。」

「仕事を探しに行こう」と、

面倒くさがるフィードを引きずって、

一行は町に出た。

しかし、ここは宿場町、

募集しているバイトと言えば、仕出しや皿洗い、清掃など。

頭では背に腹は代えられないとは思っていても、

魔導師としてのプライドが邪魔をする。

丸一日歩きまわって部屋に戻り、エオルはうなだれた。

エオル 「あゝ…どうしよう…」

フィード「だから踏み倒」

エオル「さない！」

フィード「つか、腹減った」

エオル「お金ないつつてんでしょ…」

よしの「あの…」

2人の魔導師はよしのを見た。

エオルと目が合った瞬間、よしのは慌てたように目をそらした。

エオル（？）

よしのは静かに手に持っていたものをベッドの上に置いた。

フィード「ぬお！食い物！！」

エオルは早速手を出そうとするフィードの手をパチンと叩いた。

エオル「よしのさん…どうしたのこれ…」

よしのは意を決したように恐る恐るエオルと目を合わせた。

よしの「その…神使教徒だとおっしゃる方々からいただきました」

「

エオルは「あーなるほど」と腕を組んだ。

エオル「神使教が国教じゃない国の神使教徒からしたら、

ジパング人ってアイドルみたいなものなのかもね」

よしのは目を輝かせた。

よしの「それと！お仕事、見つけてきました！」

エオルとフィードは「えっ」という顔をした。

エオル（ジパング人雇ってくれるところなんて…）

フィード（あきらかに怪しい）

エオル「えー…とー…」

なんのお仕事なの？」

よしのは誇らしげに答えた。

よしの「お客様とおしゃべりをするだけでお金を頂けるそうです！

あと数時間したら早速行ってまいります。」

エオル（あと数時間って夜中じゃない…）

エオルは眉間を押さえた。

エオル「行かなくていいから…」

よしの「えっ？」

エオルは深く溜息をついた。

エオル「質に出すようなものもないし、

消費者金融に借りる… っていうのも」

フィードは顎に手をあてた。

フィード「ありだな」

エオル「なしだよ」

フィード「つたく、頭固えなあ！」

エオル「身分証明とか… いろいろアシがつきそうなのが必要そうでしょ？ そういうのって」

フィード「そういうもんなのか？」

エオル「たぶん…」

しばしの沈黙

フィード「… 裏ギルドに行けばツテはある」

エオル「そだね。俺らみたいなやつら用のハンターズギルドだしね。」

この規模の町だから、どこにはありそうなんだけど  
フィード「なら明日はそれ探した。」

なんとしてもここで装備をそろえねえと…」

フィードは部屋のカーテンを開け、親指で外を指した。

フィード「北に出られねえ」

窓の外に広がるのは、

雲の上まで聳え立つ切り立った絶壁のような岩山。

ムー大陸中北部の砂漠地帯とそのさらに北の森林地帯を分つ大連峰

” ヴィンディア連峰 ”

緑生い茂る北部側から見ると ” 乗り越えた先の虚無 ”、

オーバーザホロウ  
オーバーザスフレンド

殺伐とした砂漠広がる南側から見ると ” 乗り越えた先の楽園 ”

南北それぞれ別の呼び名を持つ連峰――

当初の計画でも、

ムー大陸中北部を南北に分断するこの連峰越えは必須であつたが、  
何分当初の計画は

“ 最短でこのムー大陸を抜けること ”

ここで金欠という理由で足止めを食らうなど、  
あつてはならない想定外の時間ロスであつた。

フィード「明日は朝一で動けるようにしとけよ」

エオルはあきれたようにニヤリとした。

エオル「君がね」

フィード「……」  
↑寝起きが悪い

月が高く上がった真夜中。

高い建物がないこの町の空は

星々がキラキラと瞬き、とても広い。

宿の屋根にゴロリと寝ころぶ黒づくめ。

フィード「おめーがどっか行つてたおかげで、

危うくミミズのウンコと生き埋めになるところだつたぜ」

フィードは誰もいない中空に語りかけた。

「生き残れないやつに俺の”協力”を得る資格はない」

——若い男の声

フィード「ちっ」

フィードは仰向けだった体を横に向けた。

「ま、結果オーライってやつだろ。

結局アーティファクトの宝珠もハンターどもが持っていたんだ。」

フィード「わかってたのか」

男は笑った。

ギィ…

フィードのすぐ横の窓が開き、よしのが顔を出した。

よしの「…フィード様、お風邪を召されますわ」

フィードは面倒臭そうに体を起こした。

フィード「お前こそ、

こんな時間まで起きてつと、明日起きねえぞ」

よしの「えっ…と、

クリスちゃんが見当たらなくて…」

クリス「ミャー」

フィードの陰からクリスがひょっこりと顔を出した。

フィード「あー、枕にしてた」

クリスはよしのに駆け寄った。

よしのはクリスを抱き上げると、

オドオドしながらフィードに軽く会釈をした。

よしの「おやすみなさいませ」

フィード「おー」

出窓はゆっくりと閉じられた。

フィード（…？）

よしのは宿の廊下に出ると、

足をとめ、クリスを腕から降ろし、

唇に人差し指を当て、「シー」というジェスチャーした。

よしの「エオル様には止められてしまいましたか…」

お2人の危機は私が救いたいです。

お2人がお休みになられたら、

あのバイトに行こうと思います。」

疲れ切った旅人たちの寝息が響き渡る簡易ベッドが敷き詰められた部屋。

フィードは屋根の上から戻り、

先ほど挙動不審だったよしのがベッドにいることを確認すると、自身も自らのベッドに入った。

まもなくフィードのいびきが聞こえだすと、

よしのはパチリとその漆黒の瞳を開いた。

そして、

気付かれぬよう、音をたてぬよう慎重に部屋を出た。

宿を出ると、

クリス「ミャー！」

クリスがよしのの肩に乗ってきた。

よしの「クリスちゃん！一緒に来てくださるの？」

クリス「ミャー！」

よしのはそつとクリスの頭を撫でた。

よしの「ありがとうね。」

では、参りましょうか」

町の北東のブロックの一つ、  
暗く小さい路地を一つ、また一つと入っていくと、  
不自然な場所にぼぼ壊れかけた街灯がチラチラと弱々しい火を灯していた。

よしのは立ち止まり、キョロキョロとあたりを見回した。

「おい」

よしのは振り向いた。

そこには、

ハンチング帽を目深にかぶり、

くたびれたコートに髭面の、小太りの男がパイプをふかせていた。

男 「あんたか」

よしの「はい！」

男 「ふーん」

男はよしのを足元から首元までジロジロとなめ回すように見つめた。

男 「ちつ。寸胴だな」

よしの「はっ!？」

男 「まあいいや、来な」

男は小道をいくつか入り、

やがて三方を白塗りの壁に囲まれた行き止まりで立ち止まった。

次に、男は壁際の一部へこんだ箇所を

2度、1度、3度と順に叩いた。

すると、

壁の向こう側から縄梯子が投げ込まれた。

男はよしのの方を振り返り、あごで梯子を指した。

よしの（登れということでしょうか？）

「…きゃあ！」

よしののきょんとした様子を見て、男は早くしろと言わんばかりによしのを肩に担ぎ上げ、梯子を登って行った。

途中、よしのの裾にしがみついているクリスに気づくと、邪魔だと叩き落とした。

男が壁を超え終えると、

するすると縄梯子は壁の向こうへ引つ張られていった。クリスは縄梯子の縄にしがみついた。

壁の向こう側——ハンターズ裏ギルド キーテジ支店

四方を廃屋の壁に囲まれた空き地に不揃いなソファやローテーブル、薄暗い陰気なランプが無造作に配置され、

荒々しい酔っぱらいどもがどんちゃん騒いでいる。

その奥のテーブル、

人が避けるようにポカンとあいた空間によしのは通された。

そこには、

フェルトのようなモジャモジャ髪に

モミアゲと一体となったボサボサの口髭を、

料理の油や汁でデロデロに汚しながら、

ガツガツと豪快にテーブルの皿を平らげている、力士のような大男。

大男はハンティング帽の男に気づくと、

手を止め、顔を上げた。

ハンティング帽の男は軽く会釈をした。

ハンチング「ギルティン氏、連れて参りましたよ。」

大男——ギルティンはハンチング帽の男の少し後ろに立つよしのを見た。

ハンチング「こんなのしか引つ掛かりませんでしたけど」

ギルティン「いや、人間なら何でもいい」

ハンチング「……？はあ……」

ハンチング帽の男はよしのの腕をふん掴み、

乱暴にギルティンの横に座らせた。

ハンチング「じゃ……お楽しみください」

ギルティンからチップを貰い、

ハンチング帽の男は酔っぱらいたちの中に消えていった。

ギルティンはよしのの肩に太い腕を回し、顔を近づけた。

ギルティン「おい、あんた、

女だから、美容とかダイエットとかに興味あんだろ」

この男の風体からは想像もつかない、突拍子のない質問に、よしのはきよんとした。

よしの「はあ……」

ギルティンは機嫌良さそうに「そうかそうか」と豪快に笑った。そして、

よしのの肩に回していた腕の先の大きな握りこぶしを指差した。

よしのはなんだろうとその握りこぶしを見た。

ゆっくりと開かれた手のひらには、

小さなラムネ菓子のようなものが三粒。

ギルティン「これをな、

お前と、他のお友達に一粒ずつやる。

必ず明日の真昼間、

人通りの多いところでお友達に渡せ。」

よしの（どうして三人だとわかったのでしょうか？）

よしのはおずおずとラムネ菓子を受け取った。

よしの 「これは…食べるもの…ですよね？」

ギルティンはガハハと大笑いした。

ギルティン「ああ！

これを食えばたちどころに満腹になって気分がよくなる。

言わば、まあ、ダイエットグッズみたいなもんだ」

よしの （満腹になる…）

よしのは、夕方フィードが「腹減った」と言っていたのを思い出した。

（というか、フィードの口癖だが）

よしのは満面の笑みでギルティンにお礼をした。

ギルティンは機嫌良さそうにガハハと笑った。

しばらくの間、

ギルティンはよしののお酌で時間を楽しみ、

空がだいぶ白んできた頃、

よしのに名刺を渡した。

ギルティン「俺は”ブレイメン”という会社のギルティンという者だ。

そのラムネ菓子はうちの次の商品の試作品でな。

もっと欲しくなったら、裏ギルドのカウンターにこの

名刺を出しな。

それか、後数日は滞在する予定だから、

俺から直接もらってもいいぞ」

よしの 「あ…お代金…」

ギルティンは再びガハハと笑った。

ギルティン「いらんいらん！

ただし、なるべく多くのお友達にそいつを広めてくれ

よな！」

ハンチング帽の男から給料をもらい、

縄梯子で塀を越えると、

静かな早朝の冷たい空気が肺にしみ込んだ。  
よしのは急に”日常”に戻った気がした。

クリス「ミャー」

どこからともなく、クリスがよしのの肩に乗ってきた。  
よしのはクリスの頭を優しく撫でた。

よしの「ギルティンさんはとても良い方でしたわ。

お金も食べるものもただけて。

やはりこのアルバイトに来て、よかったです。」

宿に戻り、よしのはベッドに倒れ込んだ。  
そしてそのまま、泥のように眠りこんだ。

フィード「よしの！ よーしーのっ！」

よしののベッドの縁に両肘をかけ、

フィードはよしのを起こそうと呼び掛けていた。

太陽はもうてっぺんに登りかけていた。

エオル「フィード！」

いいよ、ゆっくり寝かせてあげよう。」

エオルは「女の子のベッドを覗くんじゃない」とフィードの襟首を  
引っ張った。

エオル「きつと寝付けなかったんじゃないかな？ ここのベッド痛  
いし。それにいろんな人と相部屋だしね。」

フィード「どつかのオオカミに食われたら大変だしな」

エオル「そっくりそのまま君に返すよ、そのセリフ」

フィード「冗談はさておき、なんかコイツ、酒クセエぞ」

エオル「え……」

…と言って、まさか女の子の匂いを嗅ぎに行くわけにもいかず、  
エオルはよしのを起こすことにした。

――間――

エオル 「よしのさん…もしかして昨日、例のバイト行つたの？」

まだ重たい眠り眼をこすっていたよしのの右手がピタリと止まった。

よしのは目をパチクリとさせ、エオルを見た。

少なくとも怒っているようには見えなかったが、

何を思つてエオルが質問しているのかが分からず、

よしのは不安になった。

よしの 「…はい…」

エオルはよしのの両肩に手をかけた。

よしのは「怒られる」と目を閉じた。

エオル 「大丈夫！？何もされてない！？」

よしのは想定外の返答にきよんとした。

よしの 「はい…お酌をしたくらいです。」

エオルは長いため息をつきながら、へたり込んだ。

エオル 「よかった…」

フィード「てめーは心配すぎなんだよ。

こいつはこれでもアーティファクト持ちだぜ？」

エオル 「それはそうだけど…」

フィード「んなことより」

フィードは目を輝かせた。

フィード「いくらもらったんだ！？」

エオルはフィードの頭を「コラ」と叩いた。

ちょうどその時、

「清掃入ります」

けだるそうな声で、中年のやせ形の女がズカズカと部屋に入り、

まだ寝ている者もいる部屋をバタバタと埃を立てて掃除し始めた。

よしのは枕元から封筒を差し出した。

よしの「こちらがお金になります」

フィードがうれしそうに封筒の中身を確認始めた。

しかし、札束に触れた手はピタリと止まった。

その様子を見、よしのは慌てた。

よしの「足りませんか…?」

フィード「…いや…」

フィードは無言で封筒をエオルに渡した。

怪訝そうな顔をしていたエオルも同じく札束に触れると、

眉間にしわをよせ、よしのを見た。

エオル「よしのさん」

エオルは自分の胸元に輝く金色のバッヂをよしのに見せた。

エオル「このお金をくれた人、

こういうバッヂしていた?」

よしのは少しの間バッヂを見つめ、ハンチング帽の男を思い浮かべた。

つけてはいなかった気がする。

次にギルティンを思い浮かべた。

そういえば…

よしのはためらいながら首を縦に振った。

エオル「フィード、…このお札…」

フィードは自分の手先を目を落としたまま口を開いた。

フィード「ああ、禍々しいナマの魔力がべったりくっついていやがる。

おそらく”悪魔契約”に失敗して、どーかなっちまってるバカだな」

よしの「???」

エオルは再びよしを見た。

エオル 「よしのさん…本当に何もされていない？大丈夫？」

よしのは胸に手を当てて不安そうな顔をした。

よしの 「はい…」。

ただその方に”お土産”をいただきまして…」

エオル 「お土産？」

よしのは枕の下から小さな麻袋を取り出し、掌に中身を出した。

それは小さなラムネ菓子のようなものだった。

フィード「なんだこりゃ…おっと！」

ラムネ菓子が、よしのから取り上げた勢いあまってフィードの指先から転げ落ちた。

カツカツと音を立て、

ラムネ菓子は古めかしい床の上を転がった。

フィード「わリーわリー」

ラムネ菓子を拾おうと伸びたフィードの手を、

突然、ガシリと白い手が掴んだ。

フィード「あ？」

掃除婦が、

目を爛々とさせ、ラムネ菓子を凝視していた。

掃除婦 「あんたこれどこで手に入れたんだい？」

フィード「は？てめーこのラムネ菓子のこと知ってんのか？」

掃除婦 「あたしに売って」

フィード「あのな、」

掃除婦 「お願いだから！

いくらでも出すからさ…」

フィード「だから、これが何なのかをまず答えろっつの」

掃除婦はフィードの言葉を見無視し、

床の上のラムネ菓子を無理やり口に放り込んだ。

フィード「あー！このやる！」

エオル「フィード！」

いくら食べ物盗られたからって相手一般人だから！

…じゃなくて、その人様がおかしいよ」

フィードはイライラしながらラムネ菓子を拾うために落とした腰を上げた。

同時に、ラムネ菓子を飲み込んだ掃除婦は突然奇声をあげて卒倒した。

フィード「ハア！？」

掃除婦はしばらくの間アハハと笑い転げ、意味不明な言葉をぐだぐだと発し続けた。

フィード「！？！？！？」

エオル「たぶんこれ…<sup>ドラッグ</sup>魔薬つてやつじゃない！？」

フィード「は？なんだそりゃ？」

エオルは肩をすくめた。

エオル「現実ではありえない快楽をもたらす

人生の一瞬だけ個人的にハッピーになれる薬さ」

フィード「？なんだその妙な言い回し」

エオルは険しい顔で床に転がる女を見ていた。

エオル「なんでも副作用が心身ともかなりあって、

本人もまわりも”結果的に破滅に導く”シロモノらしいよ。

…話には聞いていたけど…」

エオルは掃除婦を見ていた顔をしかめた。

エオル「これほどだとは…よしのさん、これどこで…」

エオルがよしのに目を向けると、

よしのは掃除婦を見つめながらガタガタと震え、ポロポロと涙をこぼしていた。

エオル「よしのさん違う！

この人たぶん常習者だよ、重度のね。

よしのさんはこれが魔薬<sup>ドラッグ</sup>だなんて知らなかったんだ。悪くないよ…。

それよりこれ、どうしたのか話して？」

よしのは震える手を胸元で固く握りしめるように組み、記憶をたどるように視線を落とした。

よしの「昨日のお仕事でお酌をしたギルティンさんという方に頂いた物です。

一粒で空腹が満たされると…会社の商品の試作品だとおっしゃっていました。」

エオル「会社？」

よしのはギルティンからもらった名刺を取り出した。

エオル「ブレイメン製薬…”ブレイメン”？」

どこかで聞いたような…。」

掃除婦が白目をむき、ガタガタと痙攣し始めた。

エオル「！

なんかヤバそう…病院に連れて行こう！」

フィード「ダメだ。」

エオル「え…！」

フィードは腕組みした。

フィード「病院なんて行ったらアシがつくだろが！」

よしのはおもむろにベッドから降り、

掃除婦の前に膝をつくとかサカニを発動した。

よしの「”せんゆ”…お願いします。力を貸してください…」

すると、よしのの目の前に黄緑色の宝珠がスライドし、

まばゆい光を放ち始めた。

エオル（…）

次の瞬間、黄緑色に輝く狛犬が飛び出した。

狒犬は掃除婦に近づき、クンクンと匂いを嗅いだ。

そして「ワン」と一吠えすると、ピタリと掃除婦の痙攣がおさまった。

フィード「何こいつ!! すごい!!」

フィードは子どものようにはしゃいで「せんゆ」を見た。

しかし、「せんゆ」は悲しそうに「くうん…」と鳴くと、黄緑色の光とともに宝珠の中に消えていった。

よしの「…? 何か治せなかったようです。」

エオル「たぶん…脳の（委縮とか、）器質的な部分だろうね。

これは現代治療魔法でもどうしようもない」

フィード「器質的?」

エオル「ようは脳みそが縮んでなくなるってこと。

無くなった部分はどやっただって取り戻せないだろ?」

フィード「ふーん、そんなヤベー薬なのか。

何でそんなものに手えだすかねえ」

エオル「何物にも代えがたい一瞬のハッピーとやらのためじゃない?」

フィードは納得いかないという顔で頭をポリポリとかいた。

「うわっ!」

部屋の出入り口から男のうわずった声――

一行が振り向くと、男は後ずさった。

「あ、あんたら…なにしてんだっ!!」

エオル「へっ!?!」

――密室で

倒れる女を救助する様子もなくただ見降ろす――

エオル（あ…明らかに俺たち怪しい）

エオルは慌てた。

エオル「ちよっ…ご、誤解です…！」

エオルの剣幕（男から見たらそう感じる）に男は身の危険を感じ、思わず声を上げた。

「ひっ人殺し！」

エオル「ええええー！！！！！」

その不吉な叫び声に、

部屋の入口にわらわらと人が集まり出した。

エオル「ち、違うんです、あの…」

フィード「逃げるぞ」

「へっ？」と後ろを振り返ると、

フィードは魔導師の超人的な跳躍力で窓から向かいの建物の屋根に飛び移った。

エオル（えーっ！）

「ちよつと！フィード！」

エオルは慌ててよしのを抱え、フィードの後を追った。

建物の屋根を、2人の魔導師はぴょんぴょんと飛び移る――

エオル「フィード！」

逃げたら余計怪しいじゃない！」

フィード「だったら説明すんのか？」

女がああなっ<sup>ドラッグ</sup>た魔薬は俺様たちが持ってきたものですって」

エオル「うぐっ…」

エオルに担がれていたよしのはポロポロと泣き出した。

よしの「申し訳ありません…申し訳ありません…！！！」

エオル「よしのさ…」

フィード「ええい！てめーはいちいち泣くんじゃねえー！

ちったあふてぶてしさをもちやがれ！」

エオル「君はふてぶてしすぎでしょ…」

まあでも、よしのさんは責任感じ過ぎだよ！

悪いのはあんなの撒き散らしてるギルティンってやつさ

！」

エオルはフィードを見た。

エオル「で？どうする、社長」

フィードは前を見据えたまま吠えた。

フィード「決まってる！

よしのを泣かしたやつ、ぶっ飛ばす！」

――間――

エオル「ここか」

一行の前には白い大きな壁。

よしの「たしか、この壁がへこんでいるところを…」

壁に近づこうとしたよしのをフィードが止めた。

フィード「離れてろ」

フィードは壁に向け手のひらをかざし、呪文を唱え始めた。

フィード「グラン・デ小爆炎！」

ドガアアン…！！！！

爆風と黒煙とともに、白い壁は跡形もなく吹き飛び、

瓦礫と埃にまみれた酒場が姿を現した。

酒場には客はおらず、

カウンターには仕込中だったのか、鍋にお玉を突っ込んだまま、

ホコリまみれの店員が目をまん丸くしてこちらを見つめている。

フィードはカウンターにズカズカと近づいた。

そしてヒヨイとカウンターのの上に飛び乗ると、

店員の胸倉をふん掴み、顔を寄せた。

フィード「てめー、ギルティンとかいう男しらねーか」

エオルが慌ててフィードを制止した。

エオル「ちよっと！やめなつて！やりすぎ！フィード！」

店員「な、何なんだあんたたち！

ギルドを襲うなんて正気か！？」

フィード「正気？んなもん、とうの昔に捨ててきた！」

エオル「フィード！……すみません！

本当、ギルティンで人の居場所だけ教えていただけたら

……」

店員の、エオルに向けた視線は冷たかった。

店員「例えどんなことがあるうと、

そういったやりとりはギルドの者はできない！

我々は情報屋ではない。

ここでのルールを、お前たちは知らないのか？」

——ルールは一つ、”無関心”——

それは常識や法律が通用しない裏社会アンチルールにおいて、

自分の身を守るための唯一のルール。

エオルは首を横に振った。

エオル「……俺たちはそのルールを破れても、

この人にまで破らせるわけにはいかないよ。」

フィードは舌打ちした。

フィード「甘えよ、お前」

「えっ！？」

ギルドと外界を隔てていた壁があつた場所に男が一人。男は自分の声に反応して振り返つた一行と目が合つと、慌てて逃げ出した。

しかし、フィードの魔導師の超人的な身体能力で瞬時に追いつかれ、瞬く間に取り押さえられた。

エオル 「その人どう見ても一般人だよ！」

フィード 「パンピーがこんな真昼間にこんなところ来るかよ！」

フィードは男のポケットを物色し始めた。

エオル 「ええっ!？」

男のポケットから出てきたフィードの手には、

小さなラムネ菓子のようなものが詰まつた小瓶が握られていた。

エオル 「!!!」

よしの 「それは!!」

フィードは男の胸倉をつかみ、よしのを見た。

フィード 「おい、よしの！」

こいつがギルティンとかいうヤツか!？」

よしのは ”早く手荒なことはやめて” と顔を歪ませて首を素早く横に振つた。

フィードは掴んでいた男の胸倉をさらにねじり上げ、

男に見えるように取り上げた小瓶をシャリシャリと振つた。

フィード 「こいつをどこで手に入れやがつた。」

男は目を見開き、口をパクパクさせ、ただただガタガタと震えていた。

その様子を見て、エオルは男の胸倉を掴むフィードの腕を掴んだ。

エオル 「たぶんこの人、ここに届けるのを頼まれただけだよ……」

男はエオルに助けってくれとばかりにすがりついた。

男 「お、俺はこの小瓶をここの開店までに届けるように頼まれただけなんだ！」

金が必要で……それ以外本当に何も知らない!」

エオルは落ち着かせるように男の肩に手を置き、  
ゆっくりと語りかけた。

エオル 「あなたにこの小瓶を届けるように頼んだのはどんな人でしたか？」

男はオドオドと答えた。

男 「ハンチング帽子をかぶった…小太りの、中年の男…」  
よしの 「その方…！」

恐らく昨日私が仕事を頂いた方ですわっ…！」

エオル 「…あなたがそのハンチング帽の男に仕事をもらったのはいつですか？」

男 「け、今朝…」

エオル 「どのあたりで？」

男 「ここの3つ隣…19ブロック…道端で…」

エオル 「そのあと、その男はどこに行ったかは、わかりますか？」

男 「知らない…」

エオルは短いため息をついた。

エオル 「よしのさん、その男に会ったのはどこ？」

よしの 「えと…パン屋さんがあるあたり…」

エオル （アバウト…！！）

男 「この町のパン屋は2つしかない！」

そのうち一つが19ブロックにあるんだ」

エオルは顎に手をそえた。

エオル 「んー…そこへんが”よくうろついている場所”みたいだねえ…」

昨日今日と現れてるみたいだし…」

フィード「手がかりはそれしかねえってことか」

男は不安そうな顔でエオルに訴えた。

男 「あの…俺、そんなヤバイもの運んでたんですか！？」

俺、その人たちに命狙われたりとか…ないですよね！？」  
フィードは冷たく言い放った。

フィード「しらねーよ。」

てめーのケツはてめーで拭いやがれ」

エオル「フィード！君ね…」

フィード「エオル！」

フィードはエオルを睨みつけた。

エオル「！！」

フィード「てめえいい加減その甘さを捨てろ。」

全部を全部、てめえの力で救えると思うな！」

エオルはある単語が無意識に頭に浮かんだ。

——魔導師の万能感——

魔導師の最も注意すべき感情、それは

“ 驕り ”

である。

それは魔法を扱える上に常人離れた身体能力を持ち、  
かつ社会的に地位持つ者として、

その力を誤った方向に使う可能性が高い感情であるからだ。

それに対する警鐘の意味を込めた業界用語が

“ 魔導師の万能感 ” である。

エオル（…）ルールは一つ「無関心」…自分たちを守るための  
ルール…）

フィード「行くぞ」

エオルは唇をかみしめた。

一行は町の人間に見つからないように、

家々の間や屋根の上をコソコソと、

よしのの言うパン屋（19ブロック）に向かった。

道中、浮かない顔のエオルの様子に気づき、

フィードがため息をついた。

フィード「なんだ、あの男の行く末がそんなに心配か？

あいつは金が必要からって、自分からハンチング野郎の  
話に乗ったんだぞ？

理由がどうあれ、俺たちが手を差し伸べてやる必要はね  
え」

エオル（……）

「…そうんだけどさ…

なんていうか、自分では絶対あり得ないだろうって思っ  
てた”魔導師の万能感”ってやつが、

やっぱり自分の中にもあつたんだって思ったら、  
ちよつとへこんだだけ。」

フィードは笑った。

フィード「ばーか。

自分では有り得ねえとか思ってる時点で驕りだろ」

エオル「ハハ…本当だ」

フィード「…それと」

フィードは笑うのをやめ、口を尖らせた。

フィード「全部を全部助けらんねえつつたけど、  
全部助けねえってわけじゃねえからな」

エオル「あ、それラプリーのこと言ってる？

そうだよなー、じゃないと自分の言動矛盾するもんねー」  
フィード「うつせえ」

とある建物の屋根の上。

焼きたてのパンの良い香りが立ち込める。

眼下には「ピーター・ベーカリー」。

エオルは担いでいたよしのを降ろした。

エオル「よしのさん、あの店？」

よしのは胸の前で拳を握りしめた。

よしの「はい…ここのお店の近くでお会いしました。」

フィード「よし！」

フィードはよしのにこれから悪さをするぞという笑みを向けた。

「ハア…今日もスツちまったか」

気を紛らす煙草をふかし、

これからどこでどうヒマをつぶそうか…などと考えながら、  
湿気た面を見られまいと、

いつものハンチング帽を目深にかぶり、

男はついいつものパン屋があるブロックに足が向いた。

今朝、裏ギルドに”ブツ”を届けるように指示した男――

ソイツに成功の報告を貰わないと、

ギルティン氏から報酬は貰えない。

チクショウ、まだかよ、

もうパン買う金すら残ってねえ。

ハンチング「ん？」

パン屋の前に、見覚えのあるおかしな格好の女。

あいつは…

ハンチング帽の男は心の中でガッツポーズした。

そしていそいそと女に近づいた。

ハンチング「よう！ねーちゃん！」

女は流れるような黒髪を揺らし、

驚いたようにこちらを振り返った。

やはり、昨日ギルティン氏に紹介した女だ。

女 「あ…その節はどうも…」

女はふかぶかと頭をさげた。

ハンチング帽の男は、はやる気持を抑え、

さも何をしに女がここへ来たか見当もつかないという素振りで、  
ゆっくりと話しかけた。

ハンチング「どうしたんだい？こんなところで」

女 「あの…えと…」

女は口をもごもごさせ、しきりに辺りを気にしている。

ハンチング帽の男は無意識に口角が上がった。

ハンチング「ああ、もしかして、

ギルティン氏のラムネ菓子の追加注文かい？」

目の前のハンチング帽の男の口から出た単語に、

よしのはつい十数分前のエオルの言葉を思い出した。

エオルはとても申し訳なさそうに、心配そうに言った。

『ギルティン』

『ラムネ菓子』

このどちらかのキーワードを聞き出せたら…

よしのはハンチング帽の男の手を引き、路地裏に歩を進めた。

徐々に人気は失せてゆく。

ハンチング帽の男は嬉しそうに声のトーンを上げた。

ハンチング「おいおい！見かけによらず、ずいぶん積極的だなあ

それとも人通りのあるところで話じゃなかったかい

「？」

「お、よくわかってんじゃねーか」

人気の全くなかった日の光の届かない薄暗い路地裏に  
どこからか降ってきただみ声。

ハンチング「？」

よしのは足を止めた。

ガシッ

突然、後ろからハンチング帽の男の肩にゴツゴツとした筋肉質な腕  
が回された。

エオル「どーも」

ガシッ

今度は逆側から、黒い袖からのぞく白い腕が男の首に回された。  
フィード「えー、このたびは、

うちのよしのが世話になったみたいで」

男は眼だけ動かし、左右を盗み見た。

自分の両脇を固める2人、その共通点――

胸元に輝く見覚えのあるバツヂ。

男は自分の血の気が一度に冷めてゆくを感じた。

ハンチング「対犯罪魔導師警察組織の覆面捜査官か」  
トランプ

エオルはニヤリと笑みを浮かべた。

エオル「バツヂ見て」トランプ「が第一声に来るってことは、  
これ

”そういう”心当たりがあるみたいだね」

フィード「てめ、ちよっとツラ貸せ」

フィードは男の首根っこを掴むと、

乱暴に引つ張り上げ、路地裏の行き止まりまで連れて行き、壁際に押さえつけた。

フィード 「ギルティンという男を知っているな」

ハンチング 「知らねえ」

フィード 「よしの！」

よしのは胸の前で手を固く結んだ。

よしの 「はい。」

確かにこの方、”ギルティン氏のラムネ菓子”とおっ

しゃいましたわ！」

フィードはニヤリと見下すように男を見た。

フィード 「ほらよ」

男は少しの間苦虫を噛むような顔をしたが、

それは次にフツと自嘲気味の笑みへと変わった。

ハンチング 「ギルティン氏ならよく知ってんぜ。

知りたきや情報料よこしな」

フィードは邪悪な笑みを浮かべた。

フィード 「おい、本当にトランプは一般人に危害加えてねえと思  
つてんのか？」

ハンチング 「…おどしだろ？」

フィード 「試してみるか？」

ハンチング帽の男はこの町の裏社会で数々の修羅場をくぐり抜け、  
今日まで命をつないできた男だ。

その男が今、ただ一つハッキリと感じた。

——こいつはマジだ——

ハンチング帽の男は苦笑いしながら両手を上げた。

ハンチング 「わかった！…降参だ。何が知りたいんだっけ？」

フィード 「ギルティンのヤローの居場所に連れてけ」

一行は先ほどのように建物の屋上を移動しつつ、  
地上を歩くハンティング帽の男を監視しながら案内させた。

しかし、ハンティング帽の男が案内したのは、  
一行にとって、直近で最も身近な場所であつた。

フィード「ん？」

よしの 「ここって…！」

エオル 「…俺たちが泊つてた宿…！？」

一行は問題の宿のはす向かいの建物の屋上で、  
黙りこみ、全員が全員同じことを思った。

—— 入れない…！——

ハンティング帽の男が不思議そうにこちらを見上げている。

フィード（てめっ！こっち見んな見んな！！）

エオル （見つかつちゃうでしょー！）

よしの （ギルティンさん、同じところに宿泊されていたんですね）

エオル 「弱ったね…」

フィード 「ええい！作戦変更だ！」

問題の宿のはす向かいの建物の屋上——

ハンティング「ええっ！？ギルティン氏を連れて来いって！？」

フィード 「おー。町中でドンパチおっ始めるわけにも行かねえか

らな。

町はずれの指定の場所まで引つ張ってこい。」

エオル （よくそういう嘘に頭が働くなあ…）

ハンチング「し、しかし…客引きを私にさせていたくらいですよ！

どうやって連れて来いと…」

フィードは男を蹴とばした。

フィード 「んなもん、魔導師の上客がいるだのなんだの、いろいろあんだろーがっ！

テメーで考えやがれ！」

ハンチング「わ…わかりましたよ…」

ハンチング帽の男はそそくさと宿の中に入っていった。

エオル 「フィード…あんまし暴力は…」

フィード「いいじゃねえか。

リアルなランプ像を植え付けてやってんだよ」

エオルはため息をついた。

エオル 「じゃあ…指定の場所ってやつに行っておこうか…」

フィード「ばーか、ヤツが逃げる可能性だってあんじゃねーか。

このままヤツを屋根から監視する。」

エオル 「なんか…気乗りしない」

フィードは横目でチラリとエオルを見た。

空気がピリツと張り詰める。

フィード「何が不満だ」

エオルは目を閉じた。

エオル 「君のやり方が」

フィード「そりゃわかんだよ。」

だから、俺様のやり方の何が気に入らねえのかって聞いてんだ」

エオルはフィードをまっすぐ見据えた。

エオル「これじゃまるで、あのおじさんが俺たちの人質みたいじゃないか！

嘘ついて騙したり、監視したり、力にもの言わせて言うこと聞かせたり……」

フィードは鼻で笑った。

フィード「なんだ？

傷害の容疑掛けられて宿追われて、

ただでさえ、この町うるつく場所も時間も限られてるってのに、

これ以上てつとり早い方法あるかよ！？

おまけに結局まとまった金どころか山越えの準備すらまともに出来てねえ！

じゃあテメーは、これからやつらから金ふんだくろうって時にもいちいちキレルつもりか！？」

エオルはフィードの胸倉を掴んだ。

エオル「君、そんなつもりだったの！？」

よしのさん泣かせたヤツぶっ飛ばすって！それも嘘だったわけ！？」

フィードもエオルの胸倉を掴み返した。

フィード「何でそれが嘘になるんだよ！？」

ぶっ飛ばすついでに必要な物頂戴するだけだぞ！？

別に善人から金奪うわけじゃねーじゃねえか！

綺麗事ばっか並べても何も解決しねえ！現実を見ろ！」

よしの「お2人とも……」

よしのはポロポロと大粒の涙を流した。

よしの「どうか喧嘩はおやめになってください……」

2人はにらみ合ったまま、よしのの方を向くことはなかった。

エオル「ごめん、これからの方針の問題だから。」  
フィード「てめーはすっこんでろ、よしの」

よしの（どうしよう…どうしたら…私がよかれと思って始めたお仕事のせいでこんな…どうして…）

よしのはぎゅうとクリスを抱きしめた。

クリス「ミャー」

クリスがしきりに下に向けて鳴いている。

よしのははす向かいの宿の入り口にふと視線を向けた。

よしの「あ…」

ハンチング帽の男が宿から出てきているところだった。一人のよう  
だ。

よしの「お…お二方…」

フィードはエオルの腕を振り払った。

フィード「お出ましか。フン、一人だ。やっぱ逃げるつもりだな」

エオル「ちょっ…あの人になにするつもり!？」

場合によっては通すわけには行かないよ」

フィードはエオルを睨みつけた。

フィード「丸腰で何ほざいてやがる」

フィードはよしのを見た。

フィード「よしの、俺様はヤツのところに行く。

俺様とこいつ、ついて来たい方についてきな」

エオル「!?!?!」

よしの「え…」

さんさんと降り注ぐ太陽は、いつしか頂点から下り始めていた。  
山側からは湿気を帯びた風が吹いていた。



## 7・a sacrifice of happiness) the first

前後編の前編。

なんだかネタが世間とちょっとかぶってしまった気がしますが、  
これを書いたのは今年の6月くらいでした。

あいかわらずケンカばかりのこの2人。  
よしの、どうする!?

## 8・a sacrifice of happiness) the latter

「幸せの代償」後編。

答えはません。

ひっばります。

作中の医師のセリフを不快に感じた方がいらっしやったらごめんなさい。

あの医師はそう感じたっただけのセリフです。

俺の家は貧乏だった。

そのせいで、

腹が減っても、まともに飯すら食えず、

病気をしても、まともに薬すら買えなかった。

そのくせ、俺たちのクソ両親ときたら、

ガキのために限界以上に頑張りすぎ、

結果俺は早くに親を亡くすハメになった。

俺には妹がいる。

今の仕事のおかげで一日人並みに生活するくらいの金は得たつてのに、

病気がちのコイツのせいで、結果貧乏なままだ。

まあ、家の掃除や飯の支度くらいの能力はあるから、

薬買わずに死なれるより、生きててもらった方が楽だし、

仕方ないから養ってやっている。

けど、

働きもできねえゴクツブシが家に四六時中いるときたもんだ。

イライラするから飯食う時と寝るときしか家には帰らない。

それ以外は外ですつとギャンブルしてる。

いわゆる現実逃避ってやつだ。

いいだろ？このくらい。

俺が自分のために自分で稼いでる金なんだぜ？

だから、他の奴がどうなろうと俺の知ったこっちゃねえんだよ。

たとえば、  
そのせいで誰が薬漬けになってようが。

金づるであるギルティン氏がなくなってしまうては困る。

参ったなあ…

—— a sacrifice of happiness  
幸せの代償）（the latter part）（後編）——

「おい」

薄暗い路地裏、

声をかけられ、振り返るとそこには

銀髪の魔導師——シャンドラ・スウェフィードが立っていた。

フィード「ギルティンはどうした」

問いかけられたハンチング帽の男は嫌な予感がしつつも答えた。

ハンチング「いなかった」

案の定、フィードはハンチング帽の男の胸倉を掴んで壁に押し付けた。

ハンチング「本当だって！

なんでも昼ごろに事件があったとかで、かなりの騒ぎになったらしい。

ああいう生業の人だからさ…」

フィードはハンチング帽の男の胸倉から手を離した。

フィード「”芋づる”に大人しく生ってるワケにゃいかねってか」

フィードは空を見上げた。

建物と建物の隙間の狭い空、

太陽は見えないが、大分頂点を過ぎていることはわかった。

フィード「この町から逃亡するとしたらどのルートだ。」

ハンチング（…ギルティン氏はもういない。

ヘタな嘘ついてこの状態が長引いてもメリットはねえな。）

「あの人北へ行くつつつてたぜ。

人が多いところを狙ってあのラムネ菓子ばらまいてる

らしい。」

フィード「…」

ハンチング「嘘じゃねえ！

ギルティン氏がなくなった以上俺があんたに何かす

るメリットはねえだろ！」

フィードは親指を口にあてた。

フィード（…それもそうか…？）

「北でヤツが立ち寄りそうな規模の町は？」

ハンチング「この登山口からのルートなら、ナウム国のエリドゥつて町だ。」

きちんと登山ルート通ってけば、立て札がご丁寧に道

案内してくれるはずさ！

…もういいだろ？」

フィードはハンチング帽の男をまじまじと見た。

ハンチング「なんだよ…まだ何かあるってのか！？」

フィード「金がねえ」

ハンチング「…昼前にギャンブルでスツちまったよ。

これも嘘じゃねえ。」

フィードはため息をついてうつむいた。

ハンチング「じゃあ俺はここで…」

フィード「待て」

ハンチング「…!？」

エオル（はー…どうしたものか…）

さすがに何しでかすかわからないフィードと共によしのを行動させるわけにもいかず、

かといってフィードのあの勢いも止められず、

エオルはよしのと共にギルティンの居所を知っていそうな人物が他にいないか、手あたり次第当たっていた。

先ほどからよしのはずつとうつむいたまま口を開いていない。

エオルも特に声をかけようとも思えず、ただただ重苦しい沈黙が続いていたが、

このままでも仕方ないと気の進まない口を開いた。

エオル「よしのさん、疲れた？」

よしのはうつむいたまま答えた。

よしの「いいえ、大丈夫です。」

「…」

エオル「…フィード、探そっか？」

よしのはうつむいたまましばらく無反応だったが、

やがて微かに震えながら首を横に振った。

絶対縦に振ると思っていたエオルは、

よしのの予想外のリアクションに、無意識に、何故だが焦りを感じた。

よしのは口を開いた。

よしの「心からは、そう思いではございませんでしょう?。」

エオルはギクリとした。

そうだ、今はどんなに頑張っても気持ちが動きそうにない。けれど、なんとかせねばと、口実によしを使った。

先ほどの訳のわからない焦りの正体に、エオルは自分に嫌気がさした。

そして、深いため息とともにしゃがみ込み、わずかな沈黙ののち、うつむいたまま口を開いた。エオル「ごめん、まだ気持ちの整理ついてなくて、

確かにフィードの言うとおり、

いつまでもここに留まっている訳にはいかないのに、お金がないからどうしようもない。

でも、

どんな悪い人からだって、無理矢理奪うなんて……」

エオルはハッとして立ち上がり、よしのに無理矢理笑顔を作ってみた。

エオル「ごめんごめん！弱音なんて、らしくないねっ！」

よしのは静かに首を横に振り、微笑んだ。

よしの「その弱音も、エオル様らしさですわ。

人が困ることはしない、誰か困っていたら助けたい、

私の知るエオル様は、そういうお方です。」

エオルはきょとんとした。

エオル「あ……ありがと……」

よしの「私も落ち込んでしまって申し訳ありません。

エオル様お一人にいろいろ考えていただいてしまって……」

エオル「ええっ！？いや、そんな、」

よしの「どうしたらいいか、一つずつ考えてまいりましょう！……」

よしのの微笑みは先ほどの柔らかかなものとは打って変わって、とても力強いものだった。

よしの「まずは」

エオル「フィード探し！」

よしの「それはダメです。」

エオル「へっ!？」

よしの「まずはフィード様に納得していただける代替案を持っていなくては、

またお2人とも、喧嘩なさるでしょう?」

エオル「うつ…」

エオルはなぜか、

学生時代にイタズラがばれ、  
ガルフィン教師から首根っこを掴まれた記憶がよぎった。

(と言っても、フィードから被された濡れ衣だが)

エオル「ごもつともです…」

よしの「ギルティンさんの情報か、お金の工面かのどちらかになりますね」

エオルは顎に手をあてた。

エオル「どちらかと言えば、

お金の工面の方に天秤が傾くね…

…よしのさんには悪いけど」

よしのはにつこりした。

よしの「構いません。

お2人の喧嘩の火種はこの際忘れます。」

エオルは頭が上がらない気持ちになった。

エオル「スミマセン…」

よしの「その代わり、時間を作ることができたら…」

よしのはチラリとエオルの顔を伺った。

エオル「ん？」

よしの「あの女性をお見舞い…いえ、代わりにお花だけでもお渡ししたいです…」

エオルはニコリと笑顔を向けた。

エオル「うん！そうしよう！

できるだけ時間を作るように努めるよ！」

よしの「私もです」

エオルはハハと笑って訂正した。

エオル「時間を作るよう努め”よう”！」

しかし、方向性は決まったものの、  
具体案はなかなか出てこない。

エオル「…やっぱり…消費者金融か…」

質に入れるようなものも…バツグらいしか…

いや、どのみちアシつくな…」

よしのは漆黒の大きな瞳をまん丸とさせて、エオルを見た。

よしの「その、消費者金融やシチというのは何なのですか？」

エオルは苦笑した。

エオル「ああ、簡単にいえば、

消費者金融っていうのはお金をあとで何倍かにして返す代  
わりに、

一時的にお金を貸してくれるとこで、

質屋っていうのはモノを預ける代わりに、

その分のお金を貸してくれるとこ」

よしのはエオルの言葉を噛み締めるように小声で繰り返し、  
ポンと手を叩いた。

よしの「では、ヤサカニを質屋様に預けましょう!」

エオル「ああ!そっか!その手があっ

ってダメー!ー!ー!ー!ー!ー!ー!」

よしの「後でお借りした額をお返ししたらよいのでしょうか?

何もよろしくないことなどないかと…?」

エオルは慌てて付け足した。

エオル「いやっ!

質屋っていうのは預かった物を商品として一般に売るところでもあつてね…

買い戻す前に誰かが買っちゃうってこともあるんだよ!」

よしの「ではそうなら、

ヤサカニをお買い上げになった方から売っていただきまし

よう!」

エオル「いや、あのね…

世の中そんなに甘くは…」

よしの「とりあえず質屋様を探しましょう!」

エオルはよしの後ろでため息をついた。

エオル（やっぱバツチしかないな…

てか、よしのさんてこんな強引な人だっけ…）

ハンチング帽の男の家――

簡素なテーブルに肘をつき、

フィードはダルそうに溜息ばかり繰り返していた。

室内は生活感に溢れていたが、

あまり手入れが行き届いているようではなく、

ハッキリ言って、荒んでいる。

ハンティング帽の男は

妹が家事をしているが、

最近はずに伏せつていて、何もしないのだとぼやいていた。

しかし、妹の部屋だという扉の向こうからは、  
人の気配がない。

魔導師として、そういった察知能力は一般人より長けているフィードは、

妹の気配がない、

ハンティング帽の男は自分の依頼で出かけている、  
とあつて、台所で食べ物をいそいそとあさり始めた。  
けれど、調理済みの食べ物はいくつか見つかりはしたが、  
何日も放置してあるのか、どれも食べられたものではなかった。

結局ハンティング帽の男の帰りを待つことしかなく、  
ダルそうにテーブルに頬杖をつき、

空腹紛れにため息ばかりついているのだった。

しばらくして、玄関のドアが開いた。

ハンティング「お待たせしました！フィードの旦那！

受け取って来ましたぜ！」

ハンティング帽の男はテーブルにドサリと布にくるまれた直方体の塊  
をフィードの前に放り投げた。

フィードは布をはぎ取り、

中から飛び出した札束の枚数を数えだした。

ハンティング帽の男は「おお」と声を上げた。

ハンチング「そんなツテ」があるなら、

ハナからそうすりゃよかったのによ!」

フィード「さっき裏ギルドでちとやらかしてな。」

フィードはチップとして数枚ハンチング帽の男の前に差し出した。

ハンチング帽の男はそれを受け取り、苦笑した。

ハンチング「確かに、ひでえことになってたな。」

ハンチング帽の男は笑うのを止めた。

ハンチング「もういいだろ？」

とつと消えてくれよ。」

フィード「なんか食い物ねえ？」

ハンチング帽の男はさも迷惑だと言わんばかりの溜息をつき、妹の部屋の扉を蹴りつけた。

ハンチング「おい、客だぞ!

もてなさねえか!」

扉の向こうに反応は、ない。

フィードは札束に手を動かしながら、口を開いた。

フィード「そもそも気配がねえぞ、その部屋。」

ハンチング帽子の男は扉をしばらく凝視し、

次の瞬間、蹴破った。

ハンチング「リディア!」

部屋はもぬけの殻だった。

乱暴に脱ぎ捨てられた衣服や、

クシャクシャのベッド、

閉まったままのカーテン。

ハンティング「…!？」

フィード「…強盗か…？」

ハンティング帽の男は血相を変えて家を飛び出した。

フィードは舌打ちした。

フィード「食い物食い損ねたか。」

フィードは立ち去ろうと玄関まで行き、  
開けっぱなしのドアに手をかけ、

ハタと止まった。

ふと、エオルとよしのの顔が浮かんた。

フィードは再び舌打ちした。

「質屋？」

すきつ腹にしみる香ばしいパンの香りに、

あふれ出る涎を押しこみ、

自然と商品にうつる視線を無理やり正面に向け、

エオルとよしのは”ピーター・ベーカーリー（前編参照）”の看板娘  
（56）に

質屋の場所を訪ねていた。

気前のよさそうな大柄の看板娘は、

親切に町の地図を店の奥から持ってきて、

丁寧に行き方を説明してくれた。

礼を云い、ピーター・ベーカーリーを後にしたエオルは大きなため息  
をついた。

よしの「どうなさったのですか？」

エオル「だめだ…質屋に行けないよ、よしのさん。」

よしの「なぜです？」

エオル「この町の質屋…」

“あの宿”の真向かいだ。」

ここは砂漠越え山越え目的の旅人ひしめく宿場町。

どちらも平地に行くよりも倍の装備が必要であり、

見透かしたようにこの町の物価は平均より高めに設定されていた。

宿に集まる旅人達は、

普段の金額では十分な装備を揃えることなど、

到底無理であった。

エオル「つまり、そこで”あの”立地…」

よしのさん、質屋案はナシだ。」

よしのはエオルをうかがうように目だけで見上げた。

よしの「…試しに行くだけ行ってみませんか？

他に思いつく方法もございませんし…」

エオル「…」

エオルは固く目を閉じ、眉間にしわを寄せ、少しの間、天を仰いだ。

エオル「よし！行こう！」

先刻、フィードとケンカ別れした建物の屋根の上――

そこから見えるはす向かいのあの宿は、

午前の騒ぎとは打って変わって、

いつもの平穏を取り戻したかのように静けさを湛えていた。

エオル（…？やけに騒ぎのおさまりが早いな…）

「……質屋は、と」

ちょうど、自分たちがいる隣の建物のようなだ。

建物同士の隙間から、よしのは下を覗き込んだ。

よしの「エオル様、こちらに勝手口がございますわ」

エオルもよしのの隣から建物の間を覗き込んだ。

エオルの長い金髪が、ふと、よしのの手にかかった。

エオル「本当だ」

「よし」とエオルは隣にいるよしのに視線を向けた。  
が、よしのはいない。

エオル「？」

よしのはエオルの後ろで手のひらをパタパタと顔を仰いでいた。  
よしの「少し暑いですね」

エオル「や、少しどころかすごく暑いけど…」

ずっと外にいるもんね！

じゃあ、あの勝手口からお邪魔させてもらおうか！」

建物を降り、

薄暗い路地から勝手口に回りこみ、

ドアノブに手をかけた、

瞬間――

エオルは後ろから肩を叩かれた。

エオル「？」

振り返ると、

そこには見ず知らずの男――

だが、エオルはその男が身にまとう衣服に見覚えがあった。

エオルは血の気が引いた。

男は口を開いた。

「あんたら、今朝うちの宿の窓から逃げた輩だろ？」

ハンチング「頼むな！」

ハンチング帽の男は手あたり次第の友人知人に妹の居所を訪ね回り、搜索の手伝いを頼んでいた。

気のいい連中ばかりではないが、

何人かは手伝うと名乗り出てくれた。

これまで好き勝手に生きていたが、

こんなとき、

こんな自分に手を差し伸べてくれる仲間がいたことに、

ハンチング帽の男は

これまでの自分を悔やんだ。

名乗りを上げてくれる仲間に「頼む」と言って別れるたびに、

そのような思いがこみ上げ、

だが、それは一瞬のことで、

すぐさま妹の安否が確認できない不安で、

体中の臓器という臓器をギュツと握られる思いに駆られた。

しかし、

久々にこんなに動かした体と、年のせいもあり、

ハンチング帽の男はとうとう膝に手をついた。

「よう」

どこかで聞いただみ声。

ふと顔を上に向けると

ハンチング「…シャンドラ・スウェフィード…」

フィード「気が向いたから手伝ってやるよ」

ハンチング「なんだよ、

さっきまであんなに早くここを出たいとかわめき散らしてたじゃねーかよ」

フィードは笑った。

フィード「ちよいと事情が変わってな。

てめーを手伝わねえと、

大事な荷物が持ってけねえんだ。」

ハンチング「もうあんたにやられるもんはないぜ」

フィード「てめーとは関係ねえシロモノだから、安心しな。」

ハンチング「…よくわからねえが、だったら頼む…」

フィードは腕を組んだ。

フィード「で？その妹とやらを探すんだな？」

ハンチング「ああ…」

心当たりは手あたり次第探したんだが、  
どこも最近顔を出してねえらしい。」

ハンチング帽の男は話しながらも、

だくだくと心臓が脈打つたびに、後悔の念がこみあげて来るのを感じていた。

あいつはいつも必ず家にいて、

どんなに体調が悪くても、俺が帰れば「おかえり」と出迎えた。

外でメシ食って帰ったとき、

甲斐甲斐しく用意されていたテーブルのメシ、

あいつに人生縛られる気がしてイラついて、

ひっくり返したこともあった。

数え切れないほどたくさん酷いことをしたのに、  
それでもあいつは俺を兄として慕っていてくれたのに、  
あいつは、俺のたった一人の妹なのに、

なんだよ、なんで俺はあいつのことを、こんなに知らねえんだよ。

ハンチング「ちくしょう…あいつにもしものがあつたら俺…」  
フィードはやれやれとため息をついた。  
フィード「その”もし”は不毛だな。

クソの役にも立たねえ。

すっかりしろ、てめえは家族なんだろ」

フィードはハンチング帽の男のズボンのベルトをふん掴み、  
魔導師の超人的な跳躍力でたちまち近くの建物の上に飛び乗った。  
ハンチング「ぎゃー！！殺す気か！！」

フィード「上からのが見つけやすいだろ」  
ハンチング「そうか！あんた魔導師だったな！

なら空飛ぶ魔法とか…」

フィードは笑った。

フィード「あいにく、そっちは畑違いだな。  
ちなみに一ついいか？」

ハンチング「ああ？」

フィード「病院つてセンはねえのか？

病弱だつてんなら、出先で発作とか起こして運び込ま  
れたとか」

ハンチング「あいつは病弱だからこそ、行動範囲は狭いんだ。

ここいらしか出かけねえはず」

フィードは再びハンチング帽の男を男のベルト部分で持ち上げた。  
フィード「その”はず”ってのも不毛だな。

こういうときはあらゆる”もし”を考えるもんだぜ」

ハンチング「もし」も不毛じゃねえのかよ。」  
フィード「ばーか」  
フィードは建物の上をぴょんぴょんと駆けだした。

——質屋裏口前

エオル「えと…」

エオルとよしのは想定していた最悪の事態に固まっていた。

男「あの女の件なんだが…」

エオル（うづ…）

「ど、どうなりました？」

男は迷惑そうなため息をついた。

男「死んだよ」

よしの「え…」

男「今流行りの魔薬ドラッグの常習者だったらしくてな、

朦朧としたままお前ら追って窓から落ちて死んだ。

身元が分からなくて困ってる。

あんたら知ってんじゃないかと思ってさ。」

男は魔薬ドラッグの受け渡し云々よりも、

とにかくあの掃除婦を何とかしてほしいといった様子だった。

エオル「いや…」

男「知ってるみたいだな」

エオル「え…」

男の視線の先——エオルのすぐ隣を見ると、  
よしのがポロポロと涙をこぼしていた。

エオル（本当は違うけど…会いに行くべきだよな…）

「案内、お願いしてもよろしいですか？」

街中の病院を回り、3か所目の病院の前にフィードとハンチング帽の男は立っていた。

ハンチング「おい…やっぱり病院ってセンはないんじゃないか？」

フィード「まだ全部回ってねー」。

ここでラストなんだろ？」

ハンチング帽の男は時間の無駄だと苛立ちを見せた。

ハンチング「これだけ探してダメだったのに…」

しかもかなり離れたところだぜ？

ありえねえ」

フィードは冷静な口調で答えた。

フィード「そいつは”ありえねえ”ことを証明する根拠じゃねえな。

そっけなのは行ってみてから言いやがれ。」

フィードは勢いよく病院の扉を開け、

ズカズカと受付に歩を進めた。

ハンチング「リディアって女が運び込まれてないかい？」

受付の看護師は目をまん丸くさせて答えた。

看護師「いえ」

ハンチング帽の男は「ほらみろ」とフィードを睨んだ。

看護師「ですが」

ハンチング帽の男は「あれ？」と看護師に視線を戻した。

看護師「今日昼ごろ、

身元不明の女性が一名運び込まれました…

ご確認いただいても？」

エオル 「…まさか

あのおじさんの妹さんだったなんてね…」  
フィードはうつむいたまま腕を組み、黙っている。

遺体安置室前の廊下――

病院でばったり出くわしたフィード、エオル、よしのは3人並んで壁にもたれかかっていた。

エオル 「…どういう風の吹きまわし？

あのおじさんの人探しを手伝うなんて」

フィード「つせー…」

エオルはフィードを見た。

エオル 「なんだかんだ言って、

よしのさん並みに堪えてんじゃん。」

フィード「誰が」

エオルは数歩前に出て、振り返らずに続けた。

エオル 「…行こっか。

あのおじさんと妹さん、2人きりにしよう。」

フィードは顔を上げ、感情のない声で答えた。

フィード「そうだな」

エオルは泣きじゃくるよしのの肩に手を添え、病院を出た。  
フィードも、

安置室を閉ざしている扉を少しの間見つめ、  
そして、エオルに続いた。

ハンチング「お医者さまよ…」

ハンチング帽の男は扉のそばで手を前に重ねて立っていた医師に尋ねた。

ハンチング「こいつはなんでこんなことになっちまったんだい？」

それは、

“持病が原因で”という返答を期待してのものだった。  
何でもいい。

とにかく自分を責めたかった。

しかし、

医師からの返答はその予想に反するものだった。

医者「アルバイト先の宿の窓から落ちたらしい。」

ハンチング「…は？」

医者「なんでも、窓から逃げた魔導師を追おうとしたんだそうですねですよ」

ハンチング（バイト！？何のことだ！？

それより、窓から逃げた魔導師って…まさか！！）

ハンチング帽の男は安置室を飛び出した。

医者「ちょっと！まだ続きが…」

ハンチング帽の男は病院の廊下を右左と見まわした。  
ヤツらの姿はない。

ハンチング帽の男は病院を飛び出した。

ザアアア…

雨が降り出した。

一人残された医者は独り言のように呟いた。

医者

ドラッグ

「魔薬の興奮作用でおかしくなっていたみたいだが、

…ま、それ以前に持病にプラスしての流行りの魔薬だ。ドラッグ

いつ死んでもおかしくはなかった。

誰のせいでもない。

自業自得だよ、あなたの妹さんは。」

畜生！！

ちくしょう！！！！

チクショウ！！！！

なんで妹が死んで、

ヤツらはのうのうと生きていやがんだ！？

返せよ！あいつを！！

絶対許さねえ！！

地の果てまで追いつめて、

首だけになってもヤツらを地獄に送ってやる…！！

絶対許さねえ！

死んでも許さねえ！

この日を境に、  
ハンチング帽の男はキーテジの町から姿を消した。

フィード「天気はあいにくだが、

とりあえず、金も準備も万端だ。」

エオルは不審な目でフィードを見た。

エオル「…ちなみにあのお金はどこから…？」

フィード「別にどつかから奪った金とかじゃねえよ、安心しな。」

エオル「どこのお金なのか聞かないと安心できないよ。」

フィードはニヤリとからかうような笑みを浮かべた。

フィード「貯金。」

エオル「嘘くさっ！！

君、貯金とか絶対できないよね！？」

よしの「あの…」

2人の魔導師はよしのに顔を向けた。

フィード「準備できたか。」

エオル「似合うよ！」

よしのは

皮のブーツに

スリットの大きく開いたラベンダー色のワンピース、  
レギンスに茶色のケープという装いで、

気恥ずかしそうに立っていた。

エオル「あの格好はちよっと目立つからね。」

フィードは大きく息を吸い込んだ。

フィード「さて、行くか。」

一行の目の前には、

“ ヴィンディア連峰 オーバーザスプレnda 乗り越えた先の楽園 キーテジ登山口 ”

と書かれた看板と、

ゴツゴツとした岩肌の山道が広がっていた。

シェン「薬物汚染？」

リケ「ええ、ムー大陸南部を中心に魔薬が蔓延ドラッグしているみたいなんです。」

パンゲア大陸 ヴアルハラ帝国 グラブ・ダブ・ドリップ魔導師協会  
管轄地区

対魔導師犯罪警察組織トランプ本部 第一会議室――  
クラブ

諜報が新たな事件を持ってきたとあって、

各軍トップとジョーカーで臨時会議が開かれていた。

カグヤ「それは、どこかの国から捜査協力の要請があつての話か？」  
トランプは魔導師が関わる事件以外は基本的に依頼があつてから動くのだが、

リケはカグヤの問いかけに、渋い顔をした。

リケ「それが犯人が一般人のみならずなるはずなのですが…」

シェン「魔導師が関わってるのか！」

リケはさらに渋い顔をした。

リケ「ハッキリそうだと分かれば話は早いのですが…」

カグヤ「？」

シエン「？」

リケは2人の「どういうこと？」という視線を確認し、口を開いた。

リケ「自分は魔導師だ」と名乗って問題の魔薬ドラッグをばらまいている

”ギルティン”という男がいるのですが、

その男の在籍記録が魔導師養成学校アカデミーにはないんです。」

カグヤは乾いた笑みを吐き捨てた。

カグヤ「魔導師詐称か、重罪だな。」

シエン「どんなやつ？顔割れてんの？」

リケは静かに、ところどころ黒いしみがついた麻の巾着袋を取り出した。

カグヤ「…血？」

リケは「ええ」と短く答え、

巾着袋の中から半分砕けた水晶玉を取り出した。

シエン「メモリアリスタル」…だよな？」

メモリアリスタルとは映像保存用の魔導師専用道具。ダイヤモンド並みの強度がある。

半分砕けたメモリアリスタルは

横幅のある大柄の男の首から下を映し出した。

男はこちら（メモリアリスタル）に近づいて手を伸ばし

…そこで映像は途切れた。

リケ「うちの隊員が転送魔法で送ってくれました。」

転送魔法は捜査資料ほどの重要なものの転送は、普段行わない。

転送間違い等が起こりうる可能性が万に一つもあるからだ。

隊規を破ってまで送ってきた、そのことが示す事実は一っただけだった。

カグヤは淡々と口を開いた。

カグヤ「送ってきた者は？」

リケ「…我々諜報は普段1人から2人の少人数で仕事しますが、今回は巨大組織の冰山の一角という可能性も視野に入れ、5人編成で調査に送りこみました。けれど、

今日現在帰ってきた者は1人もいません。」

カグヤは舌打ちした。

カグヤ「クラブのキングは自分の部下がこのような目にあっているというのに、

一体どこをほつつき歩いているのだ。」

辺りは一瞬静まった。

シェン「ま、”あいつ”はランプの仕事のためにランプに入っただ訳じゃないからなあ。」

カグヤは吐き捨てた。

カグヤ「最低限の義務すら果たさぬ最低の男だよ。」

リケ「…外からもぼろくそ言われてるなあ…うちのキングは」

リケは苦笑した。

リケ「話の続き、いいですかね？」

リケは世界地図を広げた。

そして、地図の左下の卵型の大陸——ムー大陸の南部に赤いインクの羽ペンで円を描いた。

リケ「情報では、発祥は南部。」

次に、

リケはその赤い丸印から上に向けて矢印を描いた。

リケ「そこから徐々に北上して被害が拡大しています。」

現在確認できているのが、マーフ国の首都アートリーまでですね。」

シエンは先ほどのメモリアリスタルに目をやった。  
シエン「それは、

被害がそこまで？調査がそこまで？」

リケは冷静に返答した。

リケ「後者です。」

シエンは「ふーん」と両手を頭の後ろで組み、椅子の背もたれに寄りかかった。

カグヤは地図を眺めていた。

カグヤ「南部の薬物蔓延はいつごろからだ。」

リケ「半年前からと確認しています。」

カグヤは顎に手をあてた。

カグヤ「半年でムー大陸中北部か。」

「。」

シエン「何？」

カグヤはシエンとリケを交互に見、再び地図に目を落とした。

カグヤ「いや、もしこのまま海を越えてなお北上が続けば、

いずれはこのヴァルハラ帝国までやって来よう。

そうなれば他大陸への拡大も時間の問題。

最低限それまでには食い止めねばな。」

リケは眉根を寄せた。

リケ（？）

いつも攻めの姿勢のカグヤさんが珍しい？）

シエン「なんだよ？何か気になるんなら言いな？」

カグヤは黙っている。

シエン「確かに、最低限はそこって認識は俺もあってるよ。

けどさ、できることならなるべく被害は抑えたいじゃん。」

カグヤは再びシェンを見た。

カグヤ「…では、

あくまで”被害を最小限に抑える”という観点からの意見として聞いてもらいたいのだが、」

カグヤは地図のある一点を指差した。

カグヤ「今の時期、神使教徒の巡礼のコースだ。」

カグヤが指差したのは、

ムー大陸より北の大陸・パンゲア大陸の右下、

ファンディアス国のファリアス港

カグヤ「ここから年に一度、ジパング国へ巡礼専用の船が出る。

ちょうどあと4、5ヵ月くらいの時期だろう。」

リケ「それってまさか…」

シェンは立ち上がった。

シェン「ばらまいてるやつが本物だろうが偽物だろうが、

これが魔導師だと名乗ってるやつの犯行で、

もし巡礼のタイミングでファンディアス国に蔓延すれば…」

カグヤは頷いた。

カグヤ「神使教から、

魔導師による薬物テロとみなされても仕方なくなる。」

シェン「デッドラインの訂正だ。

ムー大陸北部に防衛線を張る。」

カグヤ「待て、第一軍は他にも気に掛けることが多いだろう。」

リケ「そうです！

W・B・アライランスにバッチ偽造、それに”ルガト討伐

”…！」

シェン「第二軍も同じことが言えるだろ？」

手一杯のはずだ。」

カグヤ「しかし…」

シェンは不敵な笑みを浮かべた。

シェン「いるだろ？一人。」

このクソ忙しい時に

けがのリハビリで久しぶりに仕事に出るとかぬかしてる怠け者が。」

カグヤはあからさまに不愉快な表情を浮かべた。

シェンは気にせず続けた。

シェン「リケ、クラブのキングとはどうあっても連絡つかないんだよな？」

リケ「はい…八方手を尽くしてはいますが…」

シェンはリケに改めて向きなおった。

シェン「リケ」

リケは頷いた。

リケ「本件の諜報活動は私が担当しましょう。」

カグヤはさきほどから黙って腕組みをしていたジョーカーに視線をむけた。

ジョーカー「本件を”エース出動レベル”に引き上げ、

リケにアーティファクト使用許可を出そう。

トウジロウへの許可は…本人の希望次第ということで

いいか？」

シェンは笑った。

シェン「OK」

カグヤが手を上げた。

ジョーカー「何だ？」

カグヤ「それは、”キング出動レベル”ではなく”エース出動レベル”に抑えるということか？」

シェンが大げさに笑った。

シェン「エース飛び越していきなりキング出動なんて、

そりゃあトランプの威厳に関わるじゃん？」

トランプの活動は魔導師協会加盟国（全世界の7割）への報告義務がある。

カグヤ 「…なればうちのエースでもよかるう。

わざわざヤツを出す必要はないだろう。」

シエンとジョーカーは同時に天井を見た。

シエン (…うーん)

ジョーカー (ヤレヤレ…)

リケ 「ハートのキング！どうか冷静に！

スペードのエースを選んだ条件は

エースの地位だから” だけではない” はずです！」

シエン (うお！)

ジョーカー (言にくいことを…)

カグヤ 「貴様、エースの分際でキングである私に口応えするの  
か。」

リケは眉を釣り上げた。

リケ 「もうこれ以上仲間を犠牲にしたくないんですよ！私は

！」

ジョーカーはリケを制止した。

ジョーカー 「なんとか” エース出動レベル” に抑えたい。

エースの中で、<sup>グランドセブン</sup>” 力” も ” 実績” もあるのは

お前と同じ ” 偉大なるの 7 人 ” であるトウジロウだ。

これ以上犠牲を出さないためにも

” ヤツの決定力 ” が外せん。」

カグヤは立ち上がり声を荒げた。

カグヤ 「大事なのは誇りではなく国際的な体面か！

他のエースの地位にある者への愚弄だ！」

ジョーカーはカグヤを睨みつけた。

ジョーカー 「ではお前は命より誇りを選べと、そう自分の部下に言  
うつもりか。

それはただの押し付けにすぎない。独裁ともとられか  
ねんぞ。」

カグヤ 「何だと……！」

シエンがへらへらと笑いながらテーブルに広げられた地図を片づけ始めた。

シエン 「まあまあ、ジョーカーもリケも、

お前が”いつかのモモ”みたくなっちまってるから、心配してんのさ。」

カグヤ 「……」

シエンはニヤリと意地悪な笑みをカグヤに向けた。

シエン 「いつまでも肩ひじ張ってつと、

“今度は”ハートのキングを引きずり降ろすぞ。」

カグヤ 「……」

カグヤはフツと笑った。

カグヤ 「それは勘弁願いたいものだ。」

そしてジョーカーとリケに向きなおった。

カグヤ 「すまなかった。」

キングにあるまじき言動を謝罪する。」

ジョーカーは笑った。

ジョーカー「構わん。」

ここには一般隊員はおらん。全くの内輪だ。

元気があつて大変よろしい。」

カグヤはシエンを見た。

シエンはニカツと満面の笑みを向けた。

ジョーカー「では、

リケは本件の諜報活動を、

ハートはこれまで通りの事件を担当、

スピードはエース出動レベルの事件として新たに本件

を加える、

でよいかね？」

シエン、カグヤ、リケは同時に答えた。

「了解！」

会議解散後の各執務室への帰路――

シェン「なんで渋ったんだよ？」

カグヤ「……なんの話だ。」

シェンは頭の後ろで手を組んだ。

シェン「巡礼の云々について。」

カグヤはシェンと目を合わせなかった。

カグヤ「……ジパング人だから、

とりわけ神使教徒を気にかけていると思われなかった。

」

シェンは天井を見上げた。

シェン「お前がだれより公平に仕事に臨んでることはみんなわかってるぞ。」

「つつても、ま、デリケートな問題だからね。」

カグヤ「……そういえばお前の奥方は……」

シェンは笑った。

シェン「俺と俺の嫁さんは関係ないよ。」

それに、魔法圏と神使教との問題も過敏すぎないつもり。」

カグヤは笑った。

カグヤ「まるで、

問題に少しでも関心があるような発言だな。」

シェンは大げさに笑った。

シェン「超関心あるって！」

……問題として挙げるべきってトコはね。

問題自体にあえて乗っかるうとは思わないよ。」

カグヤは瞳を伏せた。

カグヤ「それでよい、お前は。」

スパードとハートの建物の分かれ道――

シェン「じゃあ、ちよつくらモモに指示出して来るから、行くな。」  
カグヤ「ああ」

カグヤはしばらくシェンの背中を眺めていた。

「調子は如何かな？」

骨のように白い肌に真つ黒な唇から黄色い歯をのぞかせ、  
スーツ姿の男が、目の前の力士のような髭面の大男にゆつくりと語  
りかけた。

髭面の大男――ギルティンは満面の笑みを浮かべた。

ギルティン「よう！久し振りだな！フォビアリ！」

フォビアリは被っていたシルクハットを目深にかぶり直した。

フォビアリ「調子は如何かと聞いているのですが。」

ギルティンはガハハと唾を飛ばしながら豪快に笑った。

フォビアリは眉をひそめた。

ギルティン「まだ試作品だというのに、

あつちゅーまに広まりおったわい。」

フォビアリはギルティンの胸元を指差した。

フォビアリ「それは？」

フォビアリの指した先には5つの金色のバッヂが輝いていた。

ギルティン「ああ、アートルーとかいう大きな町の、

”犬つころ”が嗅ぎまわっているな。」

フォビアリ「確かに、

”私の案件”でランプが来ていましたが、あなたの  
ところにも…

感づかれるようなことをしたのでは？」

ギルティンは笑った。

ギルティン「ガハハ！よいよい！

あくまで俺の目的は魔導師を装って神使教にこいつの完成品をばらまいて、

魔導師と神使教の仲を悪くすることにあるからよ。」

フォビアリは口角を釣り上げた。

フォビアリ「…魔導師による薬物テロをトランプは止められなかった。

魔導師協会の失墜は免れない…という”おまけ”がついてくるわけですか。」

ギルティンは酒瓶をグイツをあおった。

ギルティン「ガハハ！

しかも仲間をやられて躍起になつとるはずだ！

こりやあ楽しみが一つ増えたつもんよ。

ところでフォビアリよ、お前さんはどうなんだ？

こないだどつかの大口つぶしたつてのは聞いたが。」

フォビアリは呆れた。

フォビアリ「あなたのいたアートルーの議員ですよ。

まあ、でも、そこそこ収穫はあった。」

ギルティン「収穫？」

フォビアリは人差し指でシルクハットのツバを押し上げた。

フォビアリ「活きのいい新人魔導師と会いましたね。」

ギルティンは至極興味なさそうだった。

ギルティン「なんだ、”パーヴアー”の案件か。

あいつの仕事は地味だからな。」

フォビアリ「いずれ近いうちにやってくる”カーニバル”には必要ですよ。」

「クツクツクツ」と不気味な笑みを浮かべ、フォビアリは闇に消えた。

ギルティンは天を仰いだ。  
ギルティン「カーニバルか、楽しみだ。」

パチパチと焚き火が音を立てている。

エオルとよしのの寝息に、フィードは思いがけず安心感を得た。  
フィードは一人で笑った。

フィード「本当、重てえ荷物だなあ。」

「おい。」

何もない中空から、若い男の声――

フィード「なんだよ、人がせっかく物思いにふけってんのに。」

「ギルティンとかいう男、これ以上追うな。」

フィードは口を尖らせた。

フィード「なんでだよ。」

「お前らではかなわない。」

フィード「なんだと？知ったような口……」

「この目を見た。」

よしのちゃんについていったからな。」

フィード「…やべえやつなのか。」

「あくまで忠告だ。

聞き入れるかどうかはお前次第さ。」

フィード「…」

フィードはおもむろに近くの小石をすやすやと気持ち良さそうに寝息を立てているエオルに投げつけた。

エオル「いて！」

フィード「交替だ。寝る。」

エオル「はいはい。」

むくりと起き上がったエオルはブランケットをフィードに投げ渡した。

フィードはごろりと横になると口を開いた。

フィード「ギルティンはもう追わない。」

エオルはきょとんと目を見開いた。

エオル「どうしたの。」

フィードはまっすぐ空を眺めたまま答えた。

フィード「あきた。」

エオル「君ねえ…」

エオルは深いため息をついた。

エオル「でも、よしのさんももういいって言ってたよ。

俺たちのケンカの火種は忘れるって。」

フィードは笑った。

フィード「サバサバした女だなあ。」

「…」

エオル「…」

パチパチと焚き火がはじける音が響いた。

フィード「悪かったな。やりすぎた。」

エオル「いいよ、それだけ俺たちのことを思ってたんだろ？」

フィード「……………だいいいな。」

エオルはヤレヤレと呆れた。

エオル「素直じゃないんだから。」

フィード「……」

見上げた夜空に清々しいほど瞬く星々が、  
まるで自分を責めているかのようで、  
フィードはそらすように目を閉じた。

## 8・a sacrifice of happiness (the latter)

ギルティンの登場で、なにやらトランプに動きが出てきました。  
大変なことにならなければよいのですが…。

ちなみにそのトランプのやつらが話題にしていた  
ファンディアス国ファリアス港の巡礼船は  
現在のフィードたちの目的地です（詳しくは第3話参照）

本編の更新は来月くらい。  
次から数話は小話です。

8 : i t h e m o s t m i s t a k e (前書き)

8話と9話の間の小話その1  
セクハラおやじの話

## 8・i the most mistake

よしの「困りましたわ」

エオル「どうしたの？」

よしの「クリスちゃんが見当たらなくて…」

エオル「また？」

どーせまたフィードが枕にしてるでしょ」

フィード「ん？どうした？」

よしの「クリスちゃんを御存じありませんか？」

フィード「ああ、さっきまで枕にしてたぞ」

エオル「ほらね」

フィードは「ほらよ」とよしのにクリスを投げ渡した。

よしの「よく枕にされてますね」

フィードは首をゴキゴキと鳴らした。

フィード「ああ…なんか高さがちょうどよくてな」

エオル（首あきらかに凝ってるけど…）

よしの「そうですか」

フィードが去ったあと、

よしのはクリスを撫でながら、  
ふと、あることに気づいた。

よしの「…」

あきらかに、

クリスの背中の毛が薄くなっている。

よしの「エオル様！」

エオル「はい？」

よしの「クリスちゃんに代わる枕を探しましょう！」

エオル「あいつ専用の枕ね…」

買うのは荷物になるからナシとして、  
今あるもので何とか…」

よしの「これを丸めたらいかがです？」

——野宿用のブランケット

エオル「2枚しかないからちょっと…」

よしの「ではこれ」

——フィードがどこからか持ってきた札束

エオル「それはちょっと…イヤかも」

よしの「でしたらこれなんて…」

——荷物がパンパンのバッグ

エオル「いよいよホントに首痛めそうだよ…」

フィード「何やってんだよお前ら」

エオル「本人に聞くのが一番いいんじゃない？」

よしの「そうですね！

フィード様！私たち、クリスちゃんに代わる枕を探しているのです」

フィード「クリスに代わる枕あ！？」

よしの「でもなかなか見つからなくて…」

フィード「…」

そうだな、とフィードはあたりをグルッと見まわし、  
よしのに視線を戻した。

フィード「じゃあこれでいいぞ」

フィードが指差したのはよしの。

よしの「？」

フィード「ひざまぐ」

言い切る前にすかさずエオルがフィードの頭を思いっきりひっ叩いた。

エオル「よしのさん本気にするでしょうが！」

フィードはふざけた口調で答えた。

フィード「おれさまもほんきだ。」

エオル「君に直接聞くのは一番の間違いだったよ……！」

|  
t  
h  
e  
m  
o  
s  
t  
m  
i  
s  
t  
a  
k  
e  
(閑話)  
|

8 : i t h e m o s t m i s t a k e (後書き)

次週は8・2話

あの凸凹コンビの話。

8・2・for the next stage (前書き)

フィードを探すヤクトミの旅の途中の出来事

## 8・2・for the next stage

「あ！あいつは！」

男の視線の先には、  
見覚えのある猫目に小柄の少女。

髪をバツサリ切って、  
身なりも見違えるほど”まとも”になっているが、  
間違えない、  
盗まれた俺の商品――

なんだなんだ？男と一緒にいやがんのか？  
獣人のくせに、けがらわしい。

床屋の前で、店から出てきたラプリーの頭を見、  
ヤクトミは目を丸くした。

ヤクトミ「そんな短くすんの？  
大丈夫かよ？」

ラプリー「ベリーショートって言うんだって。  
邪魔だったし、丁度いいわ。

それより悪いわね、髪から服から揃えてもらっちゃって。

「

ヤクトミ「…別に頼まれたやったわけじゃねーし、

「あんたが悪く思う必要なんかねえよ。」

ラプリーはあっけらかんと笑った。

ラプリー「思うわけないじゃん。あんたが勝手にやったんだから。」

今の”悪いわね”は、ありがとって意味よ。」

ヤクトミ「…あっそ…」

(…なんかこいつ…誰かを彷彿とさせるな…)

「ちょっとアンタ」

ヤクトミの目の前に、突然見知らぬ男が現れた。

ヤクトミ「？」

ラプリー「!!!」

「その女の彼氏さんかい？」

止めた方がいいよ、その女。」

ヤクトミ(なんだコイツ…)

「彼氏じゃないんすけど…」

ヤクトミはラプリーに視線を落とした。  
まっさきにくってかかりそうなやつが、やけに大人しいじゃないか。

視線の先のラプリーは  
今しがたとは打って変わり、  
顔はこわばり、呼吸が浅い。

ヤクトミは男に視線を戻した。

ヤクトミ「何か？」

男は笑った。

ライエル「私、ライエルという行商をしている者です。

そいつは私のところから”物を盗んで”逃げた輩でして  
ね…」

ラプリー（違…！！）

ラプリーは反論したかったが、声がでない。

ライエル「おまけにその女…

獣人なんですよ。」

ザワツ…！！

”獣人”という単語に街ゆく人々が反応した。

ライエルは口角を釣り上げた。

ライエル「おっと、つい周りにも聞こえてしまいましたか…  
これ以上そんなのと一緒にいたら、あなたも…」

ヤクトミ「俺も獣人ですけど？」

ヤクトミは尻尾をパタパタと振った。

さらに周囲がざわめいた。

ライエル「…!!」

ヤクトミ「ついでに言うと、」

ヤクトミは学生証を取り出した。

ヤクトミ「魔導師です。」

瞬間、周囲の空気が安堵へと変わった。

ライエルは顔を真っ青にして尻もちをついた。

ライエル「あ…あの…」

ヤクトミ「獣人への差別発言は聞かなかったことにします。

代わりに、もう二度とこの子の前に現れないでいただけますか。」

ライエル「ははははいいい!!!!」

ライエルは慌てて逃げ去った。

ヤクトミ「…」

ラプリー「…」

ヤクトミはラプリーを見た。

ヤクトミ「…別に何も言わなくてもいいから。」

ラプリーは不機嫌な顔をした。

ラプリー「魔導師なら、獣人でも見方は180°変わるのね。」

ヤクトミ（そこ！？

助けたとこじゃなくて！？

…まあ…頼まれたわけじゃないか…）

「そうだな。」

そんなもんだよ。」

ラプリーは手を握りしめてうつむいた。

ヤクトミはニヤリと笑った。

ヤクトミ「今はな。」

ラプリー「？」

ラプリーはヤクトミを見上げた。

ヤクトミ「魔導師になって、

トランプになって、

功績あげて、

獣人を世界に認めさせるのが、

俺の目標だし、役目だと思ってる。」

ラプリイはヤクトミを見つめ、目を離し、歩きだした。

ラプリイ「ずいぶん壮大な夢ね。

何百年先になることやら。」

ヤクトミは呆れた。

ヤクトミ（どこまでもかわいくねー女だな）

ラプリイはまっすぐ前を見据えた。

そっか、

お金じゃなくて、

自由になる方法、あった。

力だ。

ライエルの影にも、

お金にも、

負けない力、手に入れてやる！！

— for the next stage (閑話) —

8・2 for the next stage (後書き)

次回は8・1話のシリーズもの

8・3・b u t , i t・s t h e m i s t a k e (前書き)

8・1話のシリーズ。

どうしようもないアホ話。

8・3・b u t , i t ' s t h e m i s t a k e

フィード「すかー、んがー…」

パチン

鼻ちようちゃんが割れ、

フィードはふと目を覚ました。

むくりと起き上がり、何気なく枕にしていたクリスに目を落とした。

フィード「……………んん？」

フィードはむんずとクリスの尻尾をつかみ、目の前に持ち上げジロジロと見つめた。

なんか…毛のボリュームがなくなってるね？

フィード「…」

フィードはポンと手を叩いた。

フィード「首が痛えのはこのせいかな。」

なんとかしねーと俺様の安眠が、とフィードは荷物をあさった。

フィード「シャンプーすりゃあなんとかなんだろ。」

フィードはシャンプーを逆さにし、  
思い切り力を込めた。

ブシャーと音を上げ、滝のようにどろどろとしたシャンプーがクリスに振りかけられた。

クリスは「ミャー」と不快そうな声を上げた。

フィードはボキボキと指を鳴らした。

クリス「ミャッ!?（なぜ指を鳴らす!?）」

フィード「おら、ジツとしてやがれ。」

ガシガシガシガシガシ...

フィードは「毛よ、生えて来い!」と思い切り力を込めてクリスの背を泡立て始めた。

クリス「ミャー!!--（痛え!!--）」

フィードは手を止めた。

フィード「しまった。」

フィードはキョロキョロとあたりを見回した。

フィード（水がねえ…）

フィード「…まあいつか、こうすりゃ。」

クリス「ミヤ？（何が？）」

フィードはクリスの尻尾を持って思い切り振りまわした。

クリス「ミ<sup>ッ</sup>ヤアーーーー！！（ギャーーーー！！）」

泡はすべて吹き飛んだ。

フィードは再びクリスの背中を見つめた。

フィード「…（毛のボリウムが）戻ってねえーなあ。」

フィードは再び荷物をあさり出し、  
あるものを取り出した。

フィードの手の中には、  
のり。

クリス「ミヤ！？（何に使ったんだよ！！）」

フィードはクリスの尻尾をつかみ、グルグルとまわしてクリスの毛の生え具合を確認した。

フィード「ここがいいか。」

フィードはドカリとクリスを仰向けに押し付けた。

フィード「ジツとしてろよ。」

クリス「！？！？」

クリス「ミャアアアアアアアーーーーー！！！」

よしの「クリスちゃん！？」

フィード様！何してらっしゃるのです！？」

フィード「おー！よしの。」

なんかこいつの背中毛がハゲてきてつから、  
他のところから植毛してやろーと思っとな。」

フィードの手の中には大量の黒い毛。

クリスの腹にはポカンと一部地肌が覗くスポット。

よしの「ぎゃーーーー！！！！」

その日からしばらく、

フィードはよしのからクリスを貸してもらえなくなった。

フィード「…なぜだ…」

— b u t , i t ' s t h e m i s t a k e ( 閑話 )  
—

作者は動物虐待に断固反対です。

8・3・but・it's the mistake (後書き)

しつこいですが、作者は動物虐待には反対です。

次週は、11月の本編更新の前にこれまでのお話を整理。

8・4・明解！W・B・アライランス！（前書き）

11月の本編更新前に、これまでのお話のまとめ

## 8・4・明解！W・B・アライランス！

11月の本編更新の前に、話を整理しようという回。（今週はおはなしはないです、すみません）

あらすじ

### ■背景

魔法によって生活が豊かになった世界。

人々は火や水、言葉、交通などを魔法により自在に手にすることができた。

その魔法の恩恵と人々を繋ぐ、世界的公務員を魔導師という―

### ■はじまり

アカデミー

魔導師養成学校の流水魔法学科を主席で卒業したエルフ、エオル・

ラーセンは、

その余りある才能を活かす場を決めかねていた。（つまり進路が決められない）

希望の職につけなかった同期からは「贅沢者は進路で絶望を味わえ」とからかわれてしまう。

### ■きっかけ

そんな折り、

専攻する魔法の「学科」も、専門の武術を学ぶ「ゼミ」も全く違うが何となく仲が良かったシャンドラ・スウェフィードからの一言で、エオルの順風満帆だった人生は一変する。

「俺様と起業しないか？」

#### ■ のろしをあげる

翌日、マジックワープ（魔導師専用の瞬間移動できる交通機関）により、

ムー大陸 マーフ国 首都アートルーに降り立ったエオルはがく然とする。

何故か自分とシャンドラの指名手配書が。

そして、

たまたま出くわした魔導師犯罪専用の警察「トランプ」に、フィードは宣言した。

自分たちは魔導師による犯罪組織「ウィザード（魔導師）・バスター（クソくらえ）・アライランス（同盟）」だと。

#### ■ 最大の謎

追っ手から逃れ、

問いただすエオル。

だがフィードは「歴史が動くまで」という意味深な期限まで理由は秘密との一点張り。

後に引けなくなったエオルは渋々フィードについていくことに。

#### ■ 出会い

道中、

記憶喪失の少女、染井よしのと出会い、

彼女の故郷「ジパング」を目指すことになる。

しかしそれは魔導師協会にとって、都合の悪いものだった。

#### ■ キー背景

魔法の恩恵により豊かな生活を送られるようになった”魔法圏”の人々。

しかし、魔法は大地の気を消耗する両刃の剣でもあった。

大地の気の枯渇を憂い、

元の魔法に頼らず自然のあるがままに暮らそうとする宗教”神使教”は”魔法圏”の人々とは対局に位置する人々。意見がぶつかれば当然争いが起こる。

”魔法圏”と”神使教”は長年争い続けてきた。

#### ■ 対抗勢力その1

W・B・アライランスがジパング人を人質にとったという犯行声明を受けた魔導師協会。

トランプにこのまま逮捕を任せておけば、

魔法圏の国々への報告義務が生じ、

神使教との摩擦は避けられない。

何としても事を公にせずに解決したい。

そこでフィードと学生時代に関係の深い

ユディウス&マリア↓トランプの動向監視

ガルフィン&ヤクトミ↓W・B・アライランス捕縛&人質救出

という体制で対処に乗り出す。

#### ■ 対抗勢力その2

ムー大陸に蔓延する魔薬ドラッグが魔導師を名乗る犯人によって広められていることを掴んだ対魔導師犯罪警察組織「トランプ」。

このまま魔薬被害が広がり神使教の巡礼と重なれば神使教との摩擦が避けられないと捜査に乗り出す。

#### ■ 対抗勢力その3

薬物事件の主犯ギルティンと

フィードたちがアートルーの町で出会った犯罪者フォビアリは仲間だった。

「カーニバル」と称する彼ら「犯罪組織ブレイメン」の目的は…？

#### ■ そして

魔導師協会

トランプ

ブレイメン

3つの勢力からの攻撃を逃れ、

よしのを無事ジパングに送り届けることができるのか？

そして、W・B・アライランスの目的とは…？

現状

#### ■ W・B・アライランス

よしのの失われた記憶を取り戻す手がかりを求め、ジパングを目指す。

ただし神使教国家であるジパングは魔法圏との争いで鎖国中。

乗り込むには年に一度巡礼の為に開国する時しかチャンスはない。

そこで巡礼船が出航するパンゲア大陸はファンディアス国、ファリアス港を目指すことに。

またよしのを共犯者扱いされぬよう魔導師協会に対してよしのは人質と宣言。

魔導師協会とトランプからの追っ手から逃れつつ、

目下直近の目標として最短ルートでムー大陸を北に抜け、

ムー大陸の北に位置するパンゲア大陸入りを設定。

#### ■ 魔導師協会

魔導師協会会長と直属の機関、アカデミー魔導師養成学校の教師達によって

W・B・アライランス対策委員会を設置。

引き続きトランプがジパング人人質の件を認識しているかの監視と

W・B・アライランス搜索を継続中。

■ 対魔導師犯罪警察組織「トランプ」

薬物事件の被害がジパングへの巡礼に及ばないように、  
ムー大陸で薬物事件を食い止めることを目標。

薬物事件はギルティンという男が容疑者であることを掴むが、  
魔導師5人を相手に全員を手に掛けるほどの力を持つことから、  
事件を上から二番目「副将<sup>エース</sup>軍出動レベル」に引き上げ、  
W・B・アライランス対応だった市松桃次郎を担当に置き、捜査を  
開始する。

■ 謎の犯罪組織「ブレイメン」

触法する物品を取り扱う闇ブローカーのフォビアリ、危険な魔薬を  
タダでバラまくギルティン。

「生きのいい新人魔導師2人」

「それは”パーヴァー”の仕事」

「カーニバルのため」

何やら意味深な発言が見られるが、果たしてその目的は…？

登場人物

■ シャンドラ・スウェフィード

本作の主人公。

爆発や炎の魔法「爆炎魔法」の使い手。

武器は拳。

必殺技は卒業研究で編み出した「魔法拳」。だけど強力すぎてなかなか使う場がない。

何の罪もないエオルを無理やり引つ張り魔導師による犯罪組織「W・B・アライランス」の結成を、  
こともあるうにトランプの目の前で宣言。  
何のための組織なのかは「歴史が動くまで」秘密らしい。  
たまに夜になると現れる謎の若い男の声と何やら相談事をしている  
模様。

#### ■エオル・ラーセン

フィードの学生時代の数少ない友人の1人。

水の魔法「流水魔法」の使い手。

武器は両手剣。

流水魔法学科主席。

何も知らぬままフィードに騙されW・B・アライランスに身を落とすことになり、

しかも理由すら教えないフィードに不信感を抱きつつも、  
友人を見捨てられないとそのままついて行くことに。

ちなみにフィードの友人であるヤクトミとは「学内で見たことがある」程度でちゃんとした面識はない。

#### ■染井よしの

記憶喪失の謎の少女。

古代兵器・アーティファクトの一つ「ヤサカニ」の使い手。

エオル曰わくジパング人らしい。

謎の少年「チェシャ猫」の導きでフィードたちについて行くことに。  
クリスの世話係。

#### ■クリス

W・B・アライランスの非常食の黒猫。まん丸とした楕円形。

魔導師協会アカデミー&魔導師養成学校

■会長（オード・メロワマール）  
魔導師協会の会長。

魔導師たちのおじいちゃん的存在。  
それは時に厳しく、時に暖かく、彼らを見守り、道を指し示す太陽のような人。

■ユディウス・ラーク  
フィードの担当教官。

ほんわかした雰囲気だが沈着冷静で公私のけじめをしっかりと人。

マリアと共にトランプの動向を監視している。  
表面的にはフィードを普通の犯罪者扱いしているが、内心はどう思っているのか…。

■マリア・フラール  
我が道をゆく熱血教師。

アラフォーかつバツイチのおひとりさま。  
ユディウスとともにトランプの監視を担当中。  
過去にいろいろあるらしいが…。

■ガルフィン・フォーン  
マリアに負けず劣らずの熱血教師。  
だが本人はユディウスのように沈着冷静な教師のつもり。  
ゼミ生でフィードの親友であるヤクトミとともにW・B・アライラ  
ンスを搜索中。

■ヤクトミ・ウルナス  
フィードの親友。

フィードの犯罪行為が信じられず、心の片隅で心配している。

表面的には真面目な優等生だが心の中ではほとんど軽微な毒とツッコミを吐いている腹黒。

フィードと違いまだ学生であるため、身分証明は学生証。トランプに顔が割れているガルフィンの代わりにW・B・アライランス情報の聞き込み続ける。

対魔導師犯罪警察組織「トランプ」

キング… 将軍、エース… 副将軍の意

■ ジョーカー ゼレル・ビノク・スロトモン

トランプのご意見番。

独裁的な権限はなく、

あくまで若いキングたちのアドバイザー的な立ち位置。

シエンのことを「リーシエル」（あだな）と呼んでいる。

対魔導師犯罪第一軍「スピード」

■ スピードのキング リー・シエン

一見チャライアンちゃん風。

明朗快活、大胆不敵だが頭の回転が早く、沈着冷静。

人当たりがよく、みんなの人気者。

W・B・アライランス問題に特別な関心はない模様。

■ スピードのエース 市松桃次郎（トウジロウ）

一見しなくても見た目から性格から完全にヤ●ザな大男。

見た目も怖けりや中身も怖い。

一般隊員の恐怖の象徴。

少し前にケガをしたが完治。

そのリハビリにW・B・アライランス逮捕に意気込むが薬物事件が「エース出動レベル」に引き上げられ、

シエンがスピードに巻き取ったため、  
多分このままいくとW・B・アライランスの件は外れるのかな？

■第一秘書官リシュリユー・ラプンツオツド  
海のように広い心を持った母なる大地のような女性。  
トウジロウに臆することなく対等に話すことができる。

対魔導師犯罪第二軍「ハート」

■ハートのキング 市松芳也（カグヤ）  
一言で言えばクールビューティー。  
キャラクターは未知数。

トウジロウと何らかの因縁がありそうだが…？

諜報軍「クラブ」

■クラブのエース リケ・ピスドロー  
明るく元気潑刺なひまわりのような女性。

放浪癖のあるクラブのキングの分の山のような仕事を日夜こなす敏腕。

視野が広く他のキングやエースに比べ「普通」の感覚を持っているためジョーカーも頼りにしている。

薬物事件の諜報活動を担当。

謎

■よしのの記憶

気づいたら砂漠のど真ん中にいたよしの。  
わかるのは自分の名前と数珠型アーティファクト「ヤサカニ」の珠

を全て集めること。

彼女を導く謎の少年「チェシャ猫」とは何者なのか…

#### ■ G7（グランドセブン）

ユディウスとマリアが、トウジロウがW・B・アライランス逮捕に乗り出すことを恐れるのは何故なのか。

#### ■ トウジロウとカゲヤ

鎖国中であるはずの神使教国家「ジパンゲ」。

ジパンゲ人であるはずなのに魔導師としてトランプにいる2人。そして顕著な2人の仲の悪さ。

#### ■ マリアの過去

「過去の贖罪としてスペリアル・マスターをしている」

「夫はSSS級クリミナルモンスター」。

あの明るいマリア先生に一体何があったのだろうか？

#### ■ カーニバル

犯罪組織「ブレイメン」の目的？

その目的達成のためにフォビアリは不正な物品の流通を仲介し、ギルティンは危険な魔薬をばらまいている。

そして「いきの良い新人魔導師は”パーヴァー”の仕事」とは…？

#### ■ ユディウスの思い

かわいい教え子であるフィードに対してあくまで客観的なユディウス。彼の本心は…？

#### ■ アーティファクト

古代兵器。

一体何のためのものなのか？

ヤサカニ以外のアーティファクトは一体どんなものなのか？

■ 謎の声

フィードがたまに会話している謎の若い男の声。

何やらフィードにアドバイスをしているようだが…。

■ 大金

キーテジでフィードがハンチング帽の男に取ってこさせた。

どこのどういったお金なのか？

■ 謎の男

第一話で奪った魔導師専用道具をフィードから買った男（第三話）。

…あれ？この人、誰かに似ているような…？

■ クリス

なんか突然出てきたけど…なんか突然すぎない？

■ シエンの奥さん

神使教と関係あり？

■ W・B・アライランスの目的

何のために罪を重ねるのか？

「歴史が動くまで」とは…？！

さて

よしののため、一路ジパングを目指すW・B・アライランス。  
それを追うヤクトミとトランプ。

そして暗躍する犯罪組織ブレメン。

いくつかの謎が紐解かれる時、それはフィードの目的が明らかになる時。

太陽はまだ、地平線から顔を出さない。

8・4・明解！W・B・アライランス！（後書き）

次回はひさびさの本編更新。  
ちよっとバトルばっか。

9・the Sleeping Cherry Blossoms(前書き)

11月の本編。

## 9・the Sleeping Cherry Blossoms

真つ黒の雨雲に雷電が伝う

それは時に光の矢となり地面に突き刺さり

激しく打ちつける雨は岩肌をえぐるように止めどなく降り続いた。

エオル「あー、もう完全に視界ゼロだわ」

よしの「先ほどまで快晴でしたのに…」

フィード「ま、山の天気は変わりやすいっていうしな」

ヴィンディア連峰 オーバーサスブレンダ ” 乗り越えた先の楽園 ” キーテジ登山道 5

合目の岩場の洞穴

天候が変わる気配を察知し、とりあえず見つけた洞穴で待機していたら案の定――

エオル「学生時代の演習って意外と役に立つね」

フィード「山にジャングルに海のと真ん中、

ただ単に鍛える目的と思ってたから、余計な知識だと思っただけだな」

意外や意外、とポリポリと乾物をつまみながらフィードは外を見た。

エオル「ってフィード！今ご飯食べたらずきに無くなっちゃうでしょー！」

フィード「うっせー、腹が減っては戦は出来ぬっつーだろ。ヒマだし」

エオル「じゃあこれからの予定について整理しようか」

エオルは真新しい世界地図を広げ、

地図の左下の卵形の大陸の中北部、中央部に位置する国の北部を指した。

エオル「今はマーフ国北部ヴィンディア連峰の――あ、もうすぐ国境じゃない？」

フィード「山の中にも国境ってあるんだな――」

よしの「国境？」

エオルは笑った。

エオル「ジパングは島国だもんね。

国と国が陸でつながってるって感覚ないのかも。

国境ていうのは国と国との境目のことだよ。その境目を越えると隣の国になる」

よしの「国との境目……線か何かが引いてあるのですか？」

フィード「ワハハ！だと面白えなあ！」

やがて雨が止み、雲間から光が差し始めた。

エオル「どう？風の精霊は」

フィードは空を見上げた。

フィード「風の精霊共はイタヅラし終わって満足したってよ」

エオルは荷物をまとめ始めた。

エオル「行こう！」

—— the Sleeping Cherry Bloss  
ommes（眠れる桜） ——

シエン「薬物事件についてのタレ込み？」

リシュリユー「はい」

パンゲア大陸　ヴァルハラ帝国　クラブ・ダブ・ドリップ魔導師協会管轄地区

対犯罪魔導師警察組織「トランプ」本部　対魔導師犯罪第1軍「スペード」会議室――

古めかしい円卓にはスピードの将軍<sup>キング</sup>、リー・シェン  
スピードの副将軍<sup>エース</sup>、市松桃次郎  
スピード第一秘書官、リシュリユー・ラプンツオッド

リシュリユーはキングとエースを交互に見、口を開いた。  
リシュリユー「マーフ国のヴィンディア連峰の麓にキーテジという  
宿場町があるそうで。

そこで薬物によるショックで女性が一名なくなった  
そうなのですが、

その女性に薬物を渡した人物が…W・B・アライラ  
ンスによく似ていたと」

シェン　「…！それマジで！？」

トウジロウ　「ほーう」

リシュリユー「ただ、一つ。

W・B・アライランスは2人組ですが、  
情報によると、三人組だったそうです」

シェン　「未確認の仲間がいるってこともな…」

リシュリユー「その情報が本当に信頼できるものは、わかりませ  
んが…」

シェン　「確かに…だがマーフ国内での情報だからな、  
目撃情報がマーフ国のアートルーカーシーと来て  
るから、

おかしくはないな」

リシュリユーは困ったわと眉をひそめた。  
リシュリユー「ただ、情報の裏付けが…」  
シエンは頷いた。

シエン「ああ。諜報<sup>クラフ</sup>はもう手が回らない。」

「ちょっと！あんた何か言いなさいよっ！」

突然、部屋に可愛らしい少女の声が響いた。

トウジロウ「ああ？」

トウジロウの視線の先―シエンの肩の上には、手のひら程の背丈の羽の生えた少女

シエン「リンリン、お前いたのか」

リンリン「シエンってば、ひどーい！」

シエンは悪い悪いとからかうように笑った。

リンリン「じゃなくてえ！」

リンリンは両手を腰に当て、トウジロウの鼻先に飛んだ。

リンリン「何なのさっ！さっきから黙りこくっちゃって」

トウジロウ「単におとなしく話聞いてるだけやんけ」

リンリン「アンタも意見出さないよって言ってるの！」

シエンはまあまあ、とリンリンの羽をつまんで引き寄せた。

シエン「コイツはいつもガンガン喋ってるお前が、

今日はハナから黙ってて珍しいって心配してんのさ。

「

リンリン「心配なんかしてないっ！」

トウジロウ「意見なあ…」

トウジロウはテーブルに足を乗せ、軽くため息をついた。

トウジロウ「情報っつーよりウワサレベルの話やんけ。

こんなんマトモに議論してもしゃーないわ」

リンリン「じゃあ何っ！？」

リシュリユーが持ってきた情報ムゲにするつもりっ

！  
」

トウジロウ 「持ってきたのはラプンツォッドやのーで、情報提供者やで」

リンリン 「うっさーい！」

リンリンがトウジロウに飛びかかるうとする所を、  
シェンはリンリンの羽を再びつまんで抑えた。

シェンは不敵な笑みを浮かべた。

シェン 「で？」

トウジロウもニヤリと笑みを返した。

トウジロウ 「ホンマかどうかからんから、

とりあえず行ってみてーのでどや？」

シェンは笑いながらパチンと指を鳴らした。

シェン 「OK！ソイツでよろしく！

アーティファクトは――」

トウジロウ 「ゼレルのおっさんにW・B・アライランス関連は許可出さへん言われてんねん。

これまでの話鵜呑みにしてくっつけると、

メモリアリストルに映ってたっちゅーやつが

W・B・アライランスの3人目のメンバーゅー可能

性が高いやん。

ソイツさえ”気をつけ”れば、他は大したことない

わい  
」

リンリン 「そうやってなめてかかるといつか痛い目みるわよっ

！  
」

トウジロウはニヤニヤしながらわざとらしい口調で答えた。

トウジロウ 「生まれてこのかたナメてかかって未だに痛い目みたことないねんけど」

どないしたらええ？ムシっころ」

リンリンはシェンの手の中でバタバタと暴れ出した。

リンリン 「きーっ！だれがムシっころだよー！」

トウジロウ 「お前やお前」

シェン 「アハハ！かわいそうにな！」

リンリン 「言ってることと顔が合っていないっ！！」

リシュリユー 「みなさん」

シェン、トウジロウ、リンリンは同時にリシュリユーを見た。

リシュリユー 「まとめると、

エースのアーティファクト許可申請はなし、

部隊編成は一般8名、部隊長格2名計10名で特に

指名はなし、

交通経路はマジックワープに……」

トウジロウ 「あーもーええ、全部お前に任すわ」

トウジロウは「はよいけ」と手をヒラヒラさせた。

リシュリユーは小さくため息をつく「失礼します」と急ぎ足で立ち去った。

シェン 「あ」

トウジロウ 「なんや」

シェン 「リンリン、ちょっとリシュリユーまでお使い頼まれて」

リンリンは目を輝かせた。

リンリン 「シェンのお願いなら！」

シェンから小さく畳まれたメモ紙を受け取ると、

リンリンは意気揚揚透明の羽をパタパタと動かし猛烈なスピードで飛んで行った。

トウジロウ 「何やったん」

シェン 「秘密」

トウジロウは至極興味なさそうに「さよか」と適当な相づちを打つ

と、

椅子から立ち上がった。

シエン 「準備が整い次第、早速よろしく」

トウジロウ「あいよ」

ニヤリと不敵な笑みを浮かべ、一見やる気なさそうな相づち、だが、

その瞳には「ナメている」の「ナ」の字すら微塵も無かった。

コンッ

小石の落ちる僅かな音に、よしのは後ろを振り返った。

よしの「？」

岩しかない後ろを振り返るよしのにエオルが声をかけた。

エオル「どうかした？」

よしのは「なんでもない」と小さく手を振った。

よしの「小石が上から落つこちた音だったみたいです。」

エオル「小石…」

エオルは上を見上げた。

左右は高くそびえ立った天然の岩壁に阻まれ、屋外だというのに、空が狭い。

エオル（まったく…山の中だったのに、谷底にいるみたいだな…）

「フィード！上空に風ある？」

2人が立ち止まっているのも気にせず、

ズスズカと進んでいたフィードは2人の遙か遠くで面倒臭そうに上を見た。

すると四角い何かが空に浮かんでいた。  
それは徐々に大きさを増し、

ドサッ

フィード「うおっ！」

フィードは間一髪、空から落ちてきたそれをよけた。

それは大人が両腕を広げたくらいの木の板だった。

エオル「！！」

エオルは背中に背負った剣を抜いた。

よしの「か…看板？」

よしのが落下物に近づこうと2、3歩歩くと、急にヤサカニが発動した。

よしの「えっ？」

エオル「いてっ！」

近くにいたエオルは突然発動したヤサカニの結界に弾き飛ばされた。

よしの「あわわ！エオルさ…」

ドガァ！

よしのは自分の頭の少し上を鈍い音と共にフィードが舞うのを見た。

フィードはクルリと空中で背面に回ると、よしのの横に着地した。

同時によしのを挟んでフィードの対面に、何か大きな物体が激しく

転がる音がした。

フィード「上だ！」

フィードの声に、よしのは反射的に見上げた。

ギアアギアアと鳴き声を上げ、

それは人間の、

腕から先が巨大な翼、

下半身は猛禽類の姿をした”鳥”が

空に網を張ったように無数に旋回していた。

すぐ近くでギアアギアアというあの声がある。

その声の方に目をやると

よしの「エオル様！！」

エオルに二匹の”鳥”が群がっていた。

フィード「構うな、心配ねえ」

エオルはヤサカニに弾かれた衝撃で仰向けになったところを襲われていた。

しかし、器用に剣を持つのと逆の手を軸に何度かバック転をし、

”鳥”たちと距離をとると、

バツバツサと紙切れのように斬り倒した。

エオルは目線は上向けたまま、剣を握り直し、”鳥”たちに構えた。

エオル「ハーピーだ。」

よしの「え……」

フィード「注意書きの一つもなかったぞ。不親切な山だな」

エオル「もしかしてそれじゃない？」

フィード「あ？」

エオルは先ほどの落下物を指差した。

フィードは足でそれをひっくり返した。

小さな砂埃を上げ、それに書かれていたものは――

”この先危険。ハーピーの巣あり。回避ルートはこちら↓”

フィード「おいしい！！」

エオル「ハハ！まあまあフィード！

体動かすのにはいいハイキングコースじゃない」

フィードは吠えた。

フィード「なにがハイキングだ！時間がねんだよ！とつとと消えやがれ！」

フィードは呪文を唱えはじめた。

フィード「フロム・エ・ス火炎龍！！」

ゴオオオオ！！

フィードの手のひらから巨大な炎の柱が上空に向かって真っ直ぐ伸び、

ハーピーたちを焼き尽くした。

ボトボトと火だるまの塊が辺りに落ちた。

エオル「ここぞとばかりにこんな派手な魔法使ってー……」

フィードは満足そうに顎に手を当てた。

フィード「俺様の通り名にふさわしいやり方だな」

エオル「？」

フィードはコートのポケットから、クシャクシャ丸められた紙をエ

オルに投げつけた。

エオルは紙を広げた。

それはフィードの手配書だった。

エオル（なんか…この短期間に額が異常に上がってるんだけど）  
フィード「そこじゃねえ！」

フィードは見えて見えてと手配書の上の方を指差した。

エオル「…」通称・火葬屋フィード」

フィードは目を輝かせた。

フィード「な！かつこいいだろ」

エオル「しょうもなっ」

エオルは黙ってまだ燃えているフィードの炎に紙を投げ込んだ。  
フィード「なーっ！！てめっ！何しやがるっ！」

エオル「さあ、よしのさん！行こう！」

フィード「てめーっ！無視すんなっ！このやろっ！」

エオル「…」

エオルは視線をある一点に向けたまま、フィードをつついた。

フィード「んだよ！」

フィードはエオルの視線の先に目をやった。

よしのは無残な姿のハーピーたちに手を合わせていた。

エオルはフィードをじろりと見た。

フィードは「はぁー」とめんどくさそうなわざとらしいため息を  
つき、

よしのに近づくと、軽く小突いた。

フィード「おら、メソメソしてねえで、とっどと行くぞ」

よしの 「はい」

フィードはよしのを見て、少し驚いた。

一瞬誰だかわからなかった。

てつきり泣いていると思ったその瞳は強く、はつきりと前を見据えていた。

フィード「……」

よしの 「……？どうされました？ご出発……」

フィードはよしのにヘッドロックをかけた。

フィード「よしののくせに生意気だっ！泣かしてやるっ！」

よしの 「きゃー！」

エオルはヤレヤレとため息をついた。

エオル 「誰だっけ？急ぎだっつったのは？」

登山再開3時間経過――

ゴツゴツとした岩場は想像よりはるかに足場を悪いものにし、それは山に登るにつれ、岩場は巨石の群と化し、平地の一步を進むのに、岩一つ超えなければならぬほどであった。

しかし、

常人なら登山ルートと合わない道でも、魔導師であるフィードとエオルにとっては全く苦にならない”道”であった。

ピョンピョンとバッタのように次から次へと岩を飛び移り、むしろこれまでより登山の速度は倍になった。

そのような中、エオルに抱えられたよしのが口を開いた。

よしの 「あの…」

エオル 「ん？疲れた？」

よしの 「いえ、その、」

エオル 「なあに？」

よしのは意を決して思ったことを口に出した。

よしの 「山道ではないように思うのですが…」

エオル 「…」

エオルは立ち止まり、あたりを見回した。

地面すら見えぬ、巨石の海。

エオルはごく一般的な意見を言われて初めて気づいた。

難なく通れてしまうから、何も考えなかったが、

エオル 「フィード！」

エオルははるか先に行くフィードを呼び戻し、

近くが一番大きな岩によしのを下ろした。

フィード 「今度は何だよ」

エオル 「何も考えずに登ってたけどさ、登山ルート外れてない？」

フィードは辺りを見回した。

ボコボコと岩が乱立した、まともな人間は通れそうにない景色。

フィードは頭をポリポリとかいた。

フィード 「つかしーな。」

ハンチング野郎が看板に沿ってけば大丈夫とかつつてたのによ」

エオルはイヤな予感がした。

エオル 「もしかして、看板ってハーピーたちが荒らしちゃったん

じゃない？」

フィードは先ほど自分の脳天から降ってきたものを思い出した。  
フィード「確かに。ここまで来て一個もないっておかしいよな」

エオル「山の地図は」

フィードは胸をはった。

フィード「ねえ」

――間――

エオル「はい？」

フィード「看板あるつつてたからよ！。

だったら地図なんて余計だろ？節約だよ節約」

エオルはあきれ果てた。

エオル「君ね…あれだけハンティングのおじさんのこと信賴してな  
かったつてのに…」

よしの「お二人ともっ！いい加減にしてくださいましっ！」

2人の魔導師は驚いてよしのを見た。

よしのはにつこりとたんぽぽのような笑顔を向けた。

よしの「私理解しました。

お二人が喧嘩なさるとき、止めなければならぬのは私  
だと。」

エオル（うつ…）

フィード（ぐっ…）

よしのは続けた。

よしの「過ぎたことは反省として後に活かせばよいではありません

んかつ！

それより、今どうすべきかを考えましょう！」

エオル「ご…ごもつともです」

フィード「フン」

フィードはエオルの後ろから首に腕を回し、

よしのに背を向けた。

フィード「一体どうしちゃったんだよ、ヤツは」

エオル「眠れる獅子を目覚めさせちゃったみたいだよ、俺たちは」

フィード「ハア！？」

エオル「キーテジの町での俺たちの大ゲンカで、

自分なりに何とかしなきゃと思ったみたい」

フィードは一瞬キョトンとし、その顔はすぐにゆるんだ。

エオル「何笑ってんの」

フィード「いや」

フィードはエオルから腕を放した。

フィードはよしのの頭を軽くポンポンと撫でると、

「お前らここでちょっと待ってる」とどこかへ跳び去った。

よしの「？？？」

エオルはクスクスと笑った。

よしの「あの…フィード様…」

エオル「嬉しかったみたいだよ。」

よしの「私、怒ったのにですか？」

エオルは頷いた。

エオル「もつといっぱい構ってあげて。あいつ、構ってもらいたがりだから」

よしの「はあ…？」

エオルは下を指差した。

エオル「座ろっか」

鼻腔に広がる山の清々しい新鮮な風  
肺を、髪を、全身を清めてくれるような

風の音以外何もない、だが心地の良い静寂

ふと、いつも外に向いていた意識が自分の中に向く

よしのはうつむいた。

よしの「…ご迷惑ではありませんか？」

エオル「？」

よしの「私…」

エオル「最初はさ、」

よしのはエオルを見た。

エオル「本当は人助けのつもりだったんだ」

エオルはよしのを見た。

エオル「よしのさんのこと。でもさ、」

「よつ」と、エオルは手足を伸ばして大の字になった。

エオル「むしろいっぱい助けられてるのはこっちだった。」

よしのは慌てた。

よしの「そ、そんな！」

エオルは太陽に向かってにつこりと笑った。

エオル「今はもうよしのさんなしじゃW・B・アライランスは成り

立たないよ。

多分フィードのやつも同じこと思ってるよ」

エオルはよしのに笑顔を向けた。

エオル「よしのさんが俺たちについて来てくれるのと一緒にで、

よしのさんの目的は俺とフィードの目的！」

エオルは間をおいて苦笑した。

エオル「…あ。ちなみに俺もフィードも旅とか初めてで、

…こんなこと（遭難？）とか…、

頼りないけど、これからもよろし…」

エオルはギョツとして固まった。

よしのはポロポロと大粒の涙を零していた。

エオル（え？え？何で？！俺なんか悪いこと言ったわけ？）

「えと…よしのさ…」

ドガァン！

遠くで突然の爆音

エオル（あーもー…何してんだか）

よしのは鼻をすすった。

よしの「フィード様ですね」

エオル「うん…行かなきゃ…とりあえず、何か悪いことしたなら謝るよ、ごめんね」

よしのは首を何度も横に振った。

よしの「いいえ！こちらこそ申し訳ありません。嬉しくて…」

エオルは安堵した。

エオル「そっか」

よしのは笑った。

よしの「これからも、宜しくお願いいたします」

エオルも笑った。

エオル「こちらこそ」

エオルは立ち上がり、よしのに手を差し伸べた。

エオル「さあ、行こう！」

よしの「…あ！」

エオル「？」

ドカツ！

突然、フィードがエオルに激突し、2人は盛大に吹っ飛んだ。

よしの「あわわ…お二人とも」

エオル「いつて…」

フィードはガバリと起き上がった。

フィード「おい、やべえ！」

エオル「…」

よく見るとフィードは髪を乱し、服は破れ、傷だらけだった。

フィード「トランプだ。あっちの登山ルートに張ってやがった！」

エオル「…！」

よしの「フィード様！お怪我を…」

フィード「かすり傷だ。それよりここを離れるぞ！」

フィードはピュンピュンと、岩場を跳び去った。

エオルもよしのを担ぎ、フィードのあとを追った。

エオル「ちよつと、焦りすぎじゃない？」

フィード「一つ言い忘れてたことがある」

エオル「？」

フィード「奴らによしのが見つかったらやべえ」

よしの「?!」

エオル「ああ…確かジパング人を人質とかつて…」

フィード「それはアカデミーにしか声明を出してねえんだよ」

エオル「…へっ？」

フィード「トランプに出してるスパイからの情報によると」

エオル（スパイ…?!）

フィード「どうも、アカデミーの奴らはジパング人の件について、

トランプに隠蔽してるっぽい」

エオルは考えを巡らせた。

エオル「…もしかして、

神使教との摩擦を恐れてトランプには隠してる、

いや、隠そうとしている…？」

エオルは砂の大河でのアカデミーからの刺客を思い浮かべた。

エオル（マスター・ガルフィンがあくまで自首に拘った理由…

なんか、繋がってきたけど…）

フィード「ジパング人がいると分かりやあ、トランプからの追っ手が激しくなる。」

できればそれは避けたい」

エオルはフィードの背中を見つめた。

エオル（なんでトランプには声明を出さなかったんだろ？）

しかしそれは結局”なぜ犯罪魔導師でいなければならぬのか”に繋がる話、

フィードはまた答えないだろう。

それより今はこの状況を何とかするのが先だ。

エオルはとりあえず気持を切り替えた。

ゴゴゴ…

突然地なりが響き、頭上から岩山が倒れてきた。  
フィードはコートを脱ぎ、エオルに投げ渡すと、呪文を唱え始めた。  
エオルはフィードのコートをよしのにかぶせた。

フィード「グレ・ネルド爆炎破！！」

頭の割れるような轟音とともに、目の前の岩盤粉々に砕け散った。  
エオルは心臓が跳ねあがった。

エオル（土魔法…本格的に対策いれてきた…！）

ジリジリと、暑くもないのにイヤな汗が湧き出てくる。

エオルは剣を抜き、よしのを降ろした。

エオル「よしのさん、コートは被ったままで、絶対に奴らに姿を曝さないで」

よしの「は…はい…」

よしのは状況をうまく掴めなかったが、コートのフードを目深に被った。

ヒュウ♪と口笛の音が響いた。

「やるねえ！あれが噂の魔法拳ってやつか？」

男の声がこだまする。

”あの” 隊服に身を包んだ魔導師が1人、岩陰から出てきた。

「先輩！上に報告しないと！」

次に響いたのは女の声。

男が出てきた岩の2つ隣の岩陰から、慌てた様子で飛び出した。

男はニヤリと笑みを浮かべた。

「事後報告でいいだろ。」 報告入れる前に襲われた”とかいっておきやあさ」

（ジパング人なんか誰が手柄取らせるかよ）

男は剣を構えた。

「お前はあの”おとおんな”な！俺は、今年の主席様だ！」

「ちよっ！先輩！割り当て違……」

男はエオルに飛びかかった。

ガキン！

頭蓋骨に響く金属と金属がかち合う音

それはすぐにギリギリと、刃物が擦れる拮抗の音となった。

エオル「お久しぶりです、先輩」

男「テメエ……調子乗りすぎなんだよ！」

ギャン！

男はエオルの剣を押し払い、甘くなった脇腹を蹴り飛ばした。

エオルはズザァ！と砂煙を上げ大岩の上に倒れ込んだ。

エオル（今日はよく突き飛ばされる日だなあ……）

間髪入れずに男が剣を突き立て、降ってきた。

エオルは体を横に転がしそれをよけ、

そのまま腰を軸に体を水平に回すと、その足で男の足を振り払った。  
男が盛大に仰向けた所を、すかさずエオルの剣が襲いかかる。

ガキン！

再び剣と剣が拮抗する音。

エオルはにこりと笑みを向けた。

エオル「俺がいつ調子に乗りました？」

男は食いしばる歯の隙間から絞り出すように答えた。

男「学科主席の上にゼミでも剣はピカイチ、

マスター・キリスのお気に入りだったってのに、

マスターの期待を裏切りやがって！！

なんだ？自分は優秀だから裏社会でバカみてえに稼ごうっ

てか？」

男は再び足をエオルの腹部にぶち込んだ。

エオルはゲホゲホとむせながら後ろに飛んで距離を取った。

男はニヤリと笑った。

男「”魔導師の万能感”って知ってるか？」

エオルはムツとした。

フィード「おおー、盛大にやってら」

フィードはニヤニヤしながらエオルと男の戦いを眺めていた。

女「ちよつと！男女さん、あなたはこつち！」

フィードは面倒くさそうに女を見た。

女「1つ聞きたいんだけど、三人目のメンバーさんはどちらに？」

フィード「！！」

（なんでバレてやがんだ！？）

女はにこりと子どもを見るような笑みを向けた―だが目は笑っていない。

女「別行動かしら？それともどこかに隠れている？」

フィードは笑った。

フィード「知りてえなら吐かせてみな」

ヒュン！

風を切る音

バシィ！

フィードの足元で何かが弾けるような音

フィード「鞭…」

女は鞭をグイと引き寄せると、フィードに向けて、再び鞭を唸らせた。

フィードはひらりとそれを避け

しかし、

避けたはずの鞭はぐにやりと曲がると、方向を変え、バシリとフィードを弾き飛ばした。

フィードは地面についた手を軸にクルリと回って着地した。

ドロツとフィードの瞳と同じ色の液体が、フィードの側頭部から流れ出た。

フィードはニヤリと笑った。

フィード「風魔法剣か」

女もニヤリと笑った。

女 「アトリーの時とは違って、あんたら用に組んだ編成になつてんのさ…」

あたしはエオル・ラーセン相手のはずだったんだけどね」

フィードは肩をすくめた。

フィード「なるほどな」

フィードは地面を蹴った。

女 （！真つ正面！？）

女はすかさず鞭を振る。

フィードは避ける様子はない。

バシィ！

フィードは鞭を驚掴んだ。

女はワオと歓声を上げた。

女 「良い団体視力と反射神経してんじゃない」

フィードはグイと鞭を自分のほうへ引き寄せた。

すかさず女も踏ん張る。

女 「力くらべ？負けないよ！」

さすが、女であつても魔導師、自分と同じくらいの鍛え方だけあつて、ビクともしない。

フィード「力くらべか」

フィードはニヤリと笑った。

フィード「なら、こっちの力くらべはどうだ？」

女「！！」

フィードの手先から、鞭に伝わる風魔法の力が失われていく。

女「魔法分解！！」

魔法はそれぞれの属性の精霊が結合し塊となって引き起こされるもの。

呪文を逆に唱えることでその塊をほどこことを魔法分解といい、

この精霊の結合（精霊↓魔法）と

魔法の分解（魔法↓精霊）は

魔導師の基本

女「ちょっと！なんであんたが風魔法なんて知ってんのよ！」

フィードはニヤリと笑った。

フィード「風魔法使いの知り合いがいてな」

女は鼻で笑った。

女「面白い」

女は鞭の柄に力を込め、精霊の結合を始めた。

鞭に伝わる風魔法は分解されは結合され、

それは徐々に鞭の耐久性を弱め、

そして

ブチン！

鞭は激しい風とともに千切れ、

両端の魔導師たちは大きく後ろへ吹き飛んだ。

ゴオオ！

激しい突風はエオルたちにも直撃した。

エオル「うわっ！」

男「ちっ！何やってんだ、あいつは！」

ふと、男が仲間のほうに顔を向けるのを、エオルは見逃さなかった。

ガキン！

刃物が刃物を叩く音

エオルは男に飛びかかり、男はそれを寸で受け止めた。

男はそれでもしきりに仲間のほうを気にしている。

それに気づいたフィードはニヤリとした。

女は先ほどの鞭が切れた衝撃で頭を打ち、ピクリとも動かない。

男は声を張り上げた。

男「おい！アホ女！大丈夫か！」

女から返事はない。

フィードは呪文を唱えた。

フィード「グラン・デ小爆炎！」

フィードの手先から弾け飛んだ光弾は  
女の遙か上の岩山に当たり、爆発した。

エオル「えっ!?!」

男「!?!」

地なりとともに光弾が当たった箇所から大岩盤が落下してきた。

エオル「なっ!フィード!」

男「クッソ!」

男は渾身の力でエオルを振り払い、呪文を唱えた。

男「リ・プール斥力結界!!」

女の周囲の小石が女を中心に吹き飛んだ。

ガオオオオン…

間髪入れずに岩盤が女に直撃した。

男「くっ」

男は剣を捨て、両手を女に向けてかざした。

岩盤は数秒上下にフワフワと浮き、大きな音を立て女の横に倒れた。

男は女のもとに駆け寄った。

男「おい!」

女から反応はない。

男（頭打ったのか…？）

男は辺りを見回した。

奴らの姿はない。

男はため息をついた。

フィード達は岩の隙間を全速力で縫って走っていた。

エオル 「フィード！あんな卑劣なマネよくも…」

フィード 「こうして逃げられたんだから、いいじゃねーかよ！」

エオル 「やり方つてもものがあるでしょう！」

よしの 「エオル様…」

エオルに担がれていたよしのが口を開いた。

エオル 「ん？キツイ？」

よしの 「いえ、その…」

フィード様は恐らく…

”誰もケガをしない方法”をとられたのではないかと

エオル 「へっ？」

エオルはつい先ほどのことを思い返してみた。

——フィードが女を危険にさらし、

でもそれは男が絶対に助けるとふんでいたから、

その隙にその場から俺達は逃げる——

確かに、闘いをせずにはすんだけど…

エオル 「そんなにうまくいくもの？」

フィードは笑った。

フィード「隊章がスピードだった。

前のキングの時は仲間より犯人逮捕を優先していたらしいが、

今のキングは仲間を見捨てることをよしとしない。」

エオル 「あー…それ、トランプ志望者の間では有名だけど…  
何でフィードが知ってんの？」

フィード 「……ヤクトミのヤツがトランプ志望だからな……」

エオル 「ああ、そう…」

とにかく行動の意図は分かったよ。

ありがとう…って言ったらいいのかな」

フィード 「むしろ崇め奉っていいぞ」

エオル 「それはない」

よしの （クスクス…）

フィード 「しかし、何かドンピシャで出くわしたな……」

エオル 「キーテジでは結構派手に動いたからね……」

フィード は舌打ちした。

フィード 「さつさと山越えちまうぞ！」

エオル 「はいよ！」

男 「も…申し訳ありませんでした…」

スピード麻薬事件捜査隊の陣営――

頭に包帯を巻いた女と、彼女を担いで陣営へ帰った男は、

女の手当てもそこそこに、捜査隊のトップ――市松桃次郎を前に報告を始めた。

トウジロウは簡素な椅子にかけ、

ムー大陸北部の地図を広げたテーブルに足を投げ出し、

眉間にシワをよせ、

固く目を閉じていた。

男「奴らはキーテジ登山道に突然獣道から出てきて

…その、我々のうち1人を倒し…獣道に戻ったため、  
後を追ったのですが…」

トウジロウは大きく口を開け、  
至極興味ないと言わんばかりに欠伸した。

男（聞けよ！）

女がおずおずと口を開いた。

女「あの…」

トウジロウ「自分らもうええわ、ご苦労」

この男からは到底出てきそうもない言葉に、2人は目を丸くした。  
女「え…」

トウジロウはテーブルの上に置いてある酒をグラスに注ぎながら続けた。

トウジロウ「初めにやられたもう1人もまとめて、除隊や」

男は素つ頓狂な声をあげた。

男「な…いきなりすぎませんか！？いくらなんでも、」

トウジロウ「俺はお前らに何て言った？」

男はばつの悪そうに答えた。

男「…何があってもまずはエースへの報告

…けど！俺達はいきなり襲われて…」

トウジロウは鼻で笑った。

トウジロウ「報告する余裕あれへんかったいうことか？

自分らみたいのんを使われへんヤツ言っんや」

男も女も言い返せなかった。

トウジロウ「ついでに言ったるか？

新人魔導師にまんまとやられるドクソはうちにはいら  
へん」

男は声を荒げた。

男 「てめっ…ドクソって…」

言い方つてもんがあんだろうが！

この…”祖<sup>ジバン</sup>国の裏切り者さん”よ！”

辺りは凍りついた。

トウジロウはニヤニヤしながらグラスの酒を飲み干し、顎で出入り口を差した。

周囲の隊員たちが2人を気まずそうに抱えた。

男は大声をあげ、トウジロウに罵声を浴びせ続けた。

トウジロウはそれを面白そうに眺めていた。

その時――

「お疲れ様です。」

全隊員が聞き慣れた声

頭の包帯がとれかけた女が継るような声で名を呼んだ。

女 「リシュリユー 第一秘書官！」

リシュリユーは眉をひそめた。

リシュリユー「一体どうしたの？」

トウジロウは声のトーンを下げた。

トウジロウ 「何しに来てん」

リシュリユーはにこりと凛々しさをたたえた笑みを向けた。

リシュリユー「キングの命です。」

” 久々の任務で統率力がナマっているかもしれない

” ので補佐しろと”

トウジロウはニヤリと笑い、煙草に火をつけた。

トウジロウ 「信用あれへんなあ」

リシュリユーは淡々と返した。

リシュリユー「ではキングの信用に足る人物であって下さい。

で、何事です？」

トウジロウは煙草の灰を落としながら何事もないかの口調で答えた。  
トウジロウ「命令破ったアホ2人と、ついでに連帯責任でチーム  
組んでた残り1人、

まとめて除隊させてん」

リシュリユーは目を見開いた。

リシュリユー「除隊！？エース！！あなた…」

トウジロウはリシュリユーを射るように睨みつけた。

その目に射られた瞬間、リシュリユーは一瞬だが呼吸が出来なくな  
った。

リシュリユー「…三名の除隊につきましてはキングの決定を…」

トウジロウ「人事権はエースにも同等にあるはずやで。

隊規表紙から読み直せドアホ」

リシュリユー「…！！」

周囲から声が漏れた。

「リシュリユーさんは秘書官だぞ…何てこと…」

トウジロウはフーと煙を吹きだした。

トウジロウ「ま、あえてキング様々のご信用に足る人物として言

うなら」

トウジロウは中空を見つめ、台詞のように棒読んだ。

トウジロウ「やる気があんなんやったら、もう一度採用試験受け

直すんやな」

隊員たちに両脇を抱えられていた女は膝をついた。

男は吐き捨てるように言った。

男「なら次は”ハート”に入隊してやんよ」

瞬間

ヒュンと空を切る音とともに、灰皿が男の頭に直撃した。

その衝撃で灰皿は砕け、男は気を失った。

リシュリユー「エース！！」

トウジロウは満足そうに笑った。

トウジロウ 「仏の顔も三度までやで」

隊員たちは俺が俺がと

気を失った男と膝について放心している女を抱え、逃げるようにデントを出た。

リシュリユーは重苦しく溜め息をついた。

リシュリユー 「何をお考えなのです？」

トウジロウはテーブルに煙草を押し付け、そのままテーブルの上の地図を眺めた。

そして僅かな沈黙の後、顔をあげた。

トウジロウ 「おい、秘書。次の手エや。隊員に指示を出せ」

リシュリユーは眉を寄せた。

リシュリユー 「……はい」

ゴオオ…

雪混じりの風

完全にホワイトアウトした景色

山頂付近は極寒の銀世界であつた。

その中、平地と変わらない軽装で膝ほどまである雪をかき分けて進む一行――

エオル 「…なんで光炎魔法なんか使えるのさ」

光炎魔法”ヒ・スラ光炎壁”

体の表面に熱のバリアを張る魔法――

フィード「昔ヤクトミのやつとぶざけてな。」

エオル （それ…違反なんだけど…）

魔導師は一種類の魔法しか体得してはいけない。

フィードは爆炎魔法、エオルは流水魔法。

フィード「それより俺様の魔法で道作ったほうがよくねえか？この雪……」

エオル「ダーメツ！トランプに居場所教えるようなものでしょっ！」

フィードは口をとがらせた。

フィード「……性格も地味なら考え方も地味なヤツめ」

エオル「なんか言った！？」

2人の魔導師はハツと同時に同じことを思った。

”よしのに怒られる”と――

恐る恐るよしのの方を見ると

エオル「……あれ？よしのさん？」

そこによしのの姿はなかった。

エオル「……」

フィード「……」

――はぐれた！？――

一歩前すら白く塗りつぶされた視界  
互いの声を遮る風の音

2人の魔導師は、絶望的な顔を見合わせた。

そういえば、文中に出てきた「本格的な対策」とか、そのほかの解説的なものが本家サイトの各話の最後のページにあるので、

よろしければそちらもどうぞ。

なんとか追手をまいた矢先、

猛吹雪の中、よしのとはぐれてしまったフィードとエオル。

はてさて、どうなることやら。

次週からの9・x小話シリーズは

一行が出くわすにはまだ遠い、ニューフェイスの連載を予定。

9・1 黒い三月―still waiting―(前書き)

閑話9・xシリーズはこれまでとは趣向を変えて、自由気ままな文字数でのプチ連載。

フィードたちにはまだ遠い、新たなライバルのお話。

9・1・黒い三月―still waiting―

「この「世界で触れてはいけないことは2つ

一つはこの世で二匹だけ。SSS級のクリミナル・モンスター

「牙の暴君」オドント・ティラヌス」

「堕ちた魔導師」ルガト」

もう一つは殺し屋とは名ばかり

「殺人鬼」ベルセルク」

だが、こいつらにさえ出くわさなければ

裏社会はパラダイスだ。

「ウーさん」

ツバのない薄い布のキャップを目深に被り、

左に3つ、右に2つ、鼻にピアス、

ローライズのジーンズで気だるそうに中空を見つめるクマの刻まれた虚ろな瞳

―ロロ・ウーは覇気のない声で口を開いた。

ロロ「…どうした？」

「ここ最近ムー大陸のほうで魔導師を名乗る”同業者”が勢力拡大してるらしいですよ」

ロロはニヤリと笑った。

ロロ「へえ」

「なんでも”免罪符”とかいう名前で売り出してるとかで」

ロロ「免罪符か…そいつはいいな」

ロロは両肘をソファの背もたれにかけ、ふうと軽く息を吐いた。

ロロ「面白え」

誰であろうと、おれの”パラダイス”を汚すやつは許さねえ。

早く来いよ、” 同業者”。

このパンゲア大陸で歓迎してやるから。

ロロは再び虚ろな瞳を中空に戻した。

—— 黒い三日月 (still waiting) ——

9・1 黒い三日月―still waiting―(後書き)

”免罪符”とは物語にはまだでてきていませんが、ギルティンの”商品”のことです。

さて、ロロは一体どんな曲者なのか。

9・x シリーズは彼で行きます。

よければ彼の冒険にもお付き合いください。

9・2・黒い三日月―seedbed―(前書き)

黒い三日月第2話。

今回は彼らがどんな悪行を働いているのかチラッと紹介の話。

9・2・黒い三日月―seedbed―

ドラッグ  
”魔薬”――

それは人を快楽という名の破滅へ導き、  
人を養分として咲き誇る”華”だ。

ロロ・ウーは目の前に広げられた色とりどりの”ラムネ菓子”を、  
しゃがみ込んで満足そうに眺めていた。

人差し指をそのうちの一つに押し当て、  
スーと横に動かし、

「あー！ちよつと！ウーさん！」

部屋に入ってきたロロの取り巻きが、  
あわててロロに駆け寄った。

「せっかく種類ごとに分けてんのに！」

取り巻きの視線の先――ロロの指の先には  
色とりどりの”ラムネ菓子”を並べて作られた”華”の形。

ロロはうすら笑いを浮かべた。

パンゲア大陸の魔薬市場は  
一般の市場などとは比べ物にならない規模である。

種類や量によって、個人に月々数千万の収入をもたらす  
いわば、裏社会ドリーム。

中でも月々億を超える売り上げを叩きだすのが  
魔薬グループ”黒い三日月”――

そのリーダー、ロロ・ウーは  
パンゲア大陸の裏社会において、  
その名を知らぬ者はいない”イカレ野郎”として有名だった。

「た、頼む！命だけは――！」

自分たちを狙ってやってきた賞金稼ぎたちを振り返りにし、  
追い詰めた最後の一人。

ロロは口角を持ち上げた。

ロロ「……なら、”生ける屍”ならいいのか？」

ロロは命乞いをする男の顎をひつつかみ、  
持っていたラムネ菓子が詰まったビンの蓋を開けると、  
男の口にビンこと押し込んだ。

そうして男に”華”が咲く様を、  
数日かけて楽しむのだ。

無理やり”客”を作る、それが月億越えのやりかただった。

”華”が咲いてしまうと、

ロロの興味はとたんに冷める。

あとは、取り巻きどもが男の財産をしゃぶり取る。

次の”苗床”が見つかるまで、

ロロはただひたすらぼーっと中空を見つめ、  
日がな一日を過ごすのだ。

ヒマになると、彼は口癖のように、  
毎度同じことを言う。

ロロ「次はエルフの男がいいな……」

エオル「へっくし！」

フィード「てめっ！くしゃみはうつるんだぞ！」

エオル「…それはあくび」

フィード「盛大なくしゃみだな」

うるせーうるせーとフィードは迷惑そうに耳を塞いだ。

エオルは鼻をすすった。

エオル（なんか…たまーにこの”盛大なくしゃみ”って出るんだよな…）

何かのアレルギーかな…やだな…）

—— 黒い三日月（seedbed） ——

9・2・黒い三日月―seedbed―（後書き）

次回は口口的能力がチラッと垣間見える

バトルとは言えないけどちょっとにわかバトルな話。

9・3・黒い三日月―paradise―（前書き）

黒い三日月第3話

ロロという人物像が少し垣間見える回。

考え方としては

自分”たち”さえよければそれでいい。

9・3・黒い三月―paradise―

ガヤガヤ…ザワザワ…

楽しそうな笑い声が響き、

夜だというのに活気溢れる

ここは酒場。

その隅で、

一人酒を楽しんでいる帽子の男――ロロ・ウー

そこに派手な格好をした女が二人やってきた。

女「お兄さん、一人？」

ロロ「ああ…」

女「一緒にどう？」

女は持っていた酒瓶を振って見せた。

ロロ「…お好きに」

女たちはロロからグラスを奪うと、

入っていた酒を飲み干し、

持ってきた酒を注いでロロに返した。

女はニコリと笑った。

ロロはだるそうにグラスを手に取り、  
酒を一気に飲み干した。

女たちは黄色い歓声を上げた。

女「わあ！すごい！これ結構強いのよ！  
私たちならその半分で夢の中だわ！」

ロロ「…夢の中…」

ロロはニヤリと笑った。

ロロ「たしかに、”そんな薬”クセエ酒だ。」

女たちは立ち上がった。

女「あんた、”黒い三日月”の頭のロロ・ウーだね！」

ロロ「…賞金稼ぎか」

女「正解？」

ロロの手からグラスがこぼれおち、  
パリンと音を立てて碎けた。

女 「意識が遠のいてきたでしょ？  
即効性の睡眠薬だよ」

口口はニヤニヤしながらうつむき、椅子にもたれた。

女 「あつけないねえ！今頃あんたのアジトも仲間が奇襲中さ」

口口の口から笑みが消えた。

女 「薬で落ちたか…」

ガシャァン！

2人のうち、1人の女が突然ひっくり返った。

女 「え…」

口口は椅子から立ち上がり、  
残った女の顔の前に手をかざした。

ひっくり返った女は口から泡を出し、  
涙を流しながら意味不明な言葉を繰り返していた。

女 「な…」

口口「おれのモンに手エ出すなんて、イカれたやつらだなあ」

口口が去った後の店は、水を打ったように静かだった。

店主をつぶやいた。

店主「あの人」怒らすなんて、バカな賞金稼ぎだ。

魔導師ですら、かなうはずがねえってのに」

ロロがいた席の横には、女が2人、転がっていた。

「あ！ウーさん！お帰り！」

「遅いッスよ、ウーさん」

ロロ「なんだ、片付けちまいやがったか」

ロロ達に取り囲まれ、10人ほどの男たちがグルグル巻きにされていた。

「一応聞いときますけど、大丈夫でした？」

ロロ「ああ、おれんとは女が2人、

睡眠薬入りの酒飲ませてきやがった。」

周囲に笑い声が起こった。

「ハハハ、ウーさんに”薬”なんて効くはずないのに！」

「どうします？こいつら」

□□「全員男か…」

「ええ！」

□□はニヤリといつものうすら笑いを浮かべた。

□□「プリンター”に。

どいつに一番早く”華”が咲くか、  
賭けだ。」

「ギヤハハ！いいっすね〜！」

「じゃあ、早速”プリンター”に」

捕らわれた男たちはアジトの地下へと連れて行かれた。

□□はため息をついた。

「どうしました？」

□□「お前らケガねえな？」

「ハハ！あんな三流相手！」

「ウーさんの”アジト”<sup>パラダイス</sup>は何があっても守りますよ。」

□□は笑った。

ロロ「頼もしい」仲間たち<sup>パラダイス</sup>だ。  
おれは幸せ者だな」

—— 黒い三日月 (paradise) ——

### 9・3・黒い三日月―paradise―（後書き）

ロロというのは非常に矛盾した人物だと思って書いています。

こうかと思えばこう、みたいな。

たとえば黒い三日月第1話では彼のいう「パラダイス」は「裏社会」の意でした。

しかし、この第3話では「仲間」の意です。

これはロロにとってはどれも正解なんです。

自分の庭である「裏社会」も「アジト」も「仲間」もすべて同じ。

ただし気が向けば増えてゆくし減ってもゆく。

矛盾というか、一貫性がないというか、だけど奥底の奥底では何かスジっぽい何かが通っていたりいなかったり。

彼のことは誰も理解できないし共感もできない。

ただ、仲間からしたら頼りになり、いざという時に守ってくれる、そんなキャラクタとして受け取ってもらえたらそれでいいです。

9・4・黒い三日月—new ground—(前書き)

今いる町にあきた口口。

新天地を求めます。

さて、白羽の矢が立ったその町は…

9・4・黒い三日月―new ground―

□□「この街もそろそろ飽きたな…」

「あれ？あのバー気に入ってますでしたっけ」

□□「ああ…昨日までは」

取り巻きはニヤリと笑った。

「じゃあ、他の奴らにも声かけてきますんで、次どこ行きたいか、決めといてくださいよ！」

そう言って、取り巻きは部屋を出た。

□□「そうだなー…」

□□は顎に手を当て、中空を見つめながら考えを巡らせた。  
ふと、

この間取り巻きが言っていた、  
ムー大陸に蔓延している魔薬”免罪符”の話を思い出した。

□□（…あ、そうだった。”挨拶”してやんなきゃな…）

（免罪符…免罪…罪が許される…罪…改心…宗教…神使教…

？  
）

ロロは薄ら笑いを浮かべ、誰もいない部屋で呟いた。

ロロ「巡礼」

「ウーさん！仲間も荷物もまとめましたよ！どこ行くか決めました？」

ロロ「ああ」

「どこです？」

ロロ「ファンディアスのファリアス」

「港町っすか！いいっすね！」

ロロは立ち上がった。

アジトの広場に出ると、

取り巻きたちが荷物をまとめて集まっていた。

取り巻きは大きな筆と墨汁を差し出した。

ロロはそれを受け取ると取り巻きたちの周りに模様を書き始めた。

ぐるっと一周模様を繋げ終わると、

ロロもその輪の中に入った。

ロロ「パレルダンス身転如律令」

目を瞬いた次の瞬間、

眼下に港町を見下ろす岩山の上に立っていた。

すぐ後ろの岩肌には洞穴があり、

その中はこれまでいたアジトと全く同じ構造をしていた。

取り巻きたちはワイワイと荷物を自分たちの場所に戻し始めた。

取り巻きの一人が言った。

「この町でひと稼ぎ、させて貰いましょうかね」

ファンディアス国の港町ファリアス

パンゲア大陸、イーストエンド東海岸の交通の要所――

数ヶ月後には、

神使教徒たちがジパング国へ巡礼に訪れるための巡礼船が出る、

W・B・アライランスの目的地――

―― 黒い三日月 (new ground) ―――

#### 9・4・黒い三日月―new ground―（後書き）

ファンディアス国のファリアスはフィードたちがジパング国に行くための目的地です。

偶然か必然か、そのファリアスに新居を構えることとなった黒い三日月。

ただし、このファリアスも、裏社会があることは例外ではなく、磁石のS極とS極が反発するように、野生動物に縄張りがあるように、ただで居座らせてくれるわけは当然ないようで・・・

9・5・黒い三日月―c a l m―（前書き）

さてさて、ファリアスの港町に拠点を移した黒い三日月。  
ただ、黒い三日月ほどの強い権力が来たとなれば、  
同業者たちは黙っちゃいられません。

「ロロ・ウーがこの町にやってきただと？」

「はい…町はずれの山中にアジトを構えていると」

「いつの間に！」

「わかりません…」

「奴は桃花源国仕込みの怪しい術を使うらしいからな」

「なあに、心配いらんさ。」

「なあ！先生！」

部屋の隅で壁にもたれかかっていた男は

「先生」と呼びかけられても微動だにしなかった。

犯罪魔導師　ガイ・ザック

ガイは口の中で誰にも聞かれることなくつぶやいた。

「”背徳の道士”　ロロ・ウー…」

道士―それは桃花源国における神使教の僧兵である。

道士たちは”気”と呼ばれる生体エネルギーを使い、不思議な術”道術”を使う。

道士は徳を重んじ、道術は民の物であるという魔導師と同様のポリシーを持っている。

唯一、彼らが信じるのは魔法ではなく神であるということを除いては――

黒い三日月アジト――

「ウーさん！この町で始めにやることなんすけど」  
ファリアス

ロロは中空を見つめたまま答えた。

ロロ「バー開拓」

取り巻きはため息をついた。

「じゃなくて！

こんだけの立地だし、

同業者は絶対黙ってませんて！」

ロロ「…とりあえず、”一番”をつぶせば  
他も大人しくなるだろ」

取り巻きはニヤリと笑った。

「そう言うと思って調べてありますよ」

「チーム”緑の海原”

規模は40名強

ボスは”謀略蜘蛛”グスタフ・リンシー」

□□「”謀略蜘蛛”…

最近活動が派手なやつか」

「ええ、なんでも噂では魔導師がバックについたとか」

□□はうすら笑いを浮かべた。

□□「準備が出来たら、

さっそく挨拶に行くか」

「了解っ！

じゃあ仲間に声かけてきます！」

□□は目の前の紅茶をすすり、カップをソーサの上に置いた。

□□「”帽子屋”対”謀略蜘蛛”——」

ロロはニヤリと笑い、  
被っていた中折れ帽をカップの上にかぶせた。

ロロ「帽子を上からかぶせれば、すぐ苗床だ」

部屋に残り、ロロの紅茶のサーブをしていた取り巻きが、  
呆れたように言った。

「ウーさん。

通り名、”イカレ帽子屋”じゃなくて”背徳の道士”のままッス  
よ。

ギルドは変える気ないみたいッス」  
手配書は冒険者ギルドが発行する。

ロロ「俺が”イカレ帽子屋”だと思ってるから、  
それでいい」

「それじゃ誰も呼んでくれませんで…」

先ほど部屋をでた取り巻きが戻ってきた。

「準備できました！」

ロロ「…おっしゃー…行くかあ」

ロロはいつも通りの低く垂れこめたテンションのまま、  
だが、目は爛々と子どものように輝いていた。



## 9・5・黒い三日月―c a l m―（後書き）

今回はちょこつと抗争。

緑の海原vs黒い三日月。

どうでもいいけど、ロロの技を考えるのは面白いです。

字面とか読み方とか効果とか。

ただ、頭の中の映像を文章で表わすのってむずかしいですね。

バトるのは好きですが、あまり激しいのは出さないように気をつけてます。

楽しみだからこそあまりボンボンは出したくない。

ショートケーキのイチゴは最後まで残しておく、みたいな。

実際はクリーム食べた後だと酸っぱくて嫌なので一番最初に食べますけどね。

あ、どうでもいいか。

9・6・黒い三日月―orange―（前書き）

黒い三日月第6話。

なぐりこみの話。

## 9・6・黒い三日月―orange―

「頭！頭あ！」

夜も明け切らぬ闇の中、  
突然開いたドアから部下の慌てきつた大声。

魔薬チーム”緑の海原”の頭、”謀略蜘蛛”グスタフ・リンシーは  
ウンザリしながらまだ起ききらぬ体を起こした。

グスタフ「何事だ」

「”黒い三日月”が！奇襲をかけてきましたあ！」

グスタフ「…ガイを呼べ…！！」

「おらおらア！どうした！こんなもんかア！？」

まだ起ききつていない体は思うように動かず、

”緑の海原”のメンバーたちはバタバタと倒されていった。

アジトには火がかけられ、

あぶり出された丸腰の者たちを倒してゆく――黒い三日月のリーダー、ロロ・ウーは

薄ら笑いを浮かべながら取り巻きたちの活躍を紅茶をすすり、楽し

そうに眺めていた。

ロロ「…ん？」

サアアア

風の精霊がざわめく

ドガアアン！

「！」

突然、

爆発が起こりアジトの壁が焼き飛ばされた。

壁の奥から”緑の海原”の雇われ犯罪魔導師、ガイ・ザックが姿を現した。

ガイ「…爆炎魔法使い相手に火責めとはいいい度胸だな」

ロロはニヤリと笑った。

黒い三日月のメンバーたちの目の前には白く光る”穴”

ガイ「！？」

黒い三日月のメンバーたちは何事もなかったかのように戦い続けている。

ロロ「ルミナスターン反転如律令」

” 白い穴 ” から光弾が飛び出し、  
激しい爆発がガイの方角を直撃した。

白い穴はたちまち数枚の札となり、ヒラヒラと舞い落ちた。

ロロは笑った。

ガイ「これが道術か…なるほど魔法に酷似している」

ロロの頭上からガイは剣を振りかざした。

ガイの剣をロロは帽子を押さえながら軽々と避けた。

2人は間合いをとった。

ロロはニヤリと笑った。

ロロ「あれ…当たったと思ったのに」

ガイは剣をクルリと回した。

ガイ「こちらのセリフだ、気色の悪い術を使いおつて」

ロロは両腕を広げた。

ガイは構えた。

ガイ（何か来る…！）

ロロ「おれからすれば、魔法のほう気色悪いけどな。

悪魔の力なんか借りちゃって、精霊の流れを無理やり歪める。  
神使教がキレンのも無理ないな。」

ガイは剣の柄を握り直した。

ガイ「神使教徒のクセに他人ごとのようだな」

ロロは薄ら笑いを浮かべた。

ロロ「お前、神に逢ったことはあるか？」

ガイ「俺は魔導師だ。神など信じん」

ロロ「…そうか」

ロロは嬉しそうな笑みを浮かべた。

ロロ「信じない者は救われない。」

ガイ「……………?!」

ガイは中空を見つめたままあんぐりと口を開け構えていた腕を降ろした。

ア・マッド・ティーパーティー  
口口「極楽転心如律令」

口口は帽子をかぶり直し、いつもの薄ら笑いを浮かべた。

口口「かといって、  
信じる者も救われない」

「救われるのは」

「”パラダイス”で生き残ってるヤツだけだ」

「ウーさん！謀略蜘蛛！捕まえちゃいましたよー！」

報告に来た取り巻きは、  
口口の前で意味不明な言葉を繰り返し泡を吹きながら倒れているガ  
イを見つけた。

「あーあー、こいつ、もう苗床になんないじゃないすか！」

口口は笑った。

ロロ「このヘッドだけでも十分面白れえからいいじゃねえか。  
魔導師はつまらないリアリストばかりだ」

「んじゃあ、帰りましょうか」

ロロ「ああ」

即日、

チーム”黒い三日月”がファリアスの町の魔薬事情を牛耳ることとなった。

—— 黒い三日月 (orange) ——

## 9・6・黒い三日月―orange―（後書き）

グスタフは一体何のために（笑）

ロロの謎の能力「ア・マッド」。

10・xシリーズではもう少しロロの秘密について迫っていきます。

さてさて、26日は今年最後の更新。  
12月分の本編です。

## 10・white shout(前書き)

今年度最後の本編。

山越え中、仲間とはぐれてしまったよしの。  
どうする!?

## 10・white shout

よしの「フィード様ー！エオル様ー！」

吹きすさむ雪

一歩先の視界すらままならぬ雪山で

よしのは必死に目の前にわずかに霞んで見える2つの影を追っていた。

グインディア連峰”オーバーザスレンタ乗り越えた先の楽園” 8合目

灼熱の砂漠地帯だった下界とはうって変わって、

極寒の猛吹雪

膝まで埋まる積雪

寒さは寒さを通り越して肌を突き刺し

辺りは息をするのもやっとの猛烈な風の音以外、何も無い  
白い闇の世界ー

—— white shout（白い叫び） ——

突然、よしのが追っていた大小2つの影のうち大きい影がパタリと倒れた。

よしの（えっ！！）

「エオル様！！」

「あんたあ！大丈夫かあ！」

男の声がきこえた。

右方向からだ。

声のする方から、

ぼんやりと陰が濃くなり、

それはよしのの目の前でようやく弓を構えた男の形をくつきりと映し出した。

よしの（あの弓…まさか…エオル様！！）

男が何かを話しかけてくるのを振り切り、

よしのは雪をかき分け倒れた影に駆け寄った。

視界ほぼゼロの中、小さい影が大きい影を抱えて引きずっている。

よしの「フィード様！お手伝いしますわっ！」

よしのも大きいほうの影の大きな腕を担ぎ、

先ほどの男から逃れるように必死に雪をかき分けた。

やがて、大人の背丈ほどの高さの小さな洞穴にたどり着いた。

よしのは体に積もった雪にわき目もふらず、ヤサカニを発動した。

よしの「エオル様！傷を…」

ヤサカニの仄かな灯りで、よしのは初めて気づいた。

真っ白い毛むくじやらの、

ゴリラのような生物が二匹、

よしのを見つめていた。

よしの「…」

（追う影を間違えてしまったようです）

よしのは目の前の”間違えた影の正体”をまじまじと見つめた。  
大きい白ゴリラと小さい白ゴリラ、親子のようだ。

親のほうは、息が荒い。

その脇腹からは真っ赤な血が噴き出していた。

よしの「おケガを…！今、治しますね！」せんゆ”！」

ヤサカニがよしのを中心に横に回転し、

よしのの正面に黄緑色の宝珠が現れた。

黄緑色の宝珠は黄緑色に輝きだし

ガウウウ！

ヤサカニに驚いたのか、親ゴリラの平手打ちがよしのを襲った。  
よしの「！…」

バチイ！

親ゴリラはヤサカニの結界に弾かれ吹き飛んだ。

よしの「あっ！」

親ゴリラはぐったりしている。

「キー！」

子ゴリラがよしのに向かって走り出した。

よしのは慌ててヤサカニをしまった。

よしのの太股ほどの背丈の小さな毛むくじやは、ポカポカとよしのをたたき始めた。

しかし、

ポスポスとよしのの服を揺らすだけで、

よしのは全く痛くなかった。

よしの「ご、ごめんなさい……！こんなつもりでは……」

「ミュー！」

よしのの服の中から、クリスが飛び出した。

クリス「ミューミューミューミュー」

子ゴリラ「キー……？」

クリス「ミュー！」

よしのはポカンと二匹のやり取りを眺めていた。

少して、

クリスはよしのに向かい、「ミュー！」と短く鳴いた。

続いて子ゴリラがよしののスカートの裾をグイグイと引っ張った。

よしの「お母さん（↑よしのの妄想）の手当て、してもいいのですか……？」

子ゴリラはしきりに親ゴリラによしのを近づけようとしている。

よしのは固く目をつぶった。

よしの「ありがとございます！絶対、助けますから！」

よしのは親ゴリラのそばに膝をついた。

よしの「危ないから、離れていてください」

子ゴリラはよしのをグイグイと引つ張り続ける。  
よしの「どうしましょう…」

よしのはおもむろに子ゴリラを抱き上げた。  
よしの「お願いします。どうか、この子を拒絶しないで…」

フワリ、とヤサカニは優しい光を湛え、よしのと子ゴリラを囲うように発動した。

よしのはホツとした。  
しかし、安堵はすぐに引つ込め、”せんゆ”を呼び出した。  
せんゆは瞬く間に親ゴリラの傷を治した。  
よしの「ありがとう、せんゆ」

ヤサカニの仄かな光の中、  
よしのと子ゴリラは親ゴリラが目覚めるのを待った。

腕の中にスッポリと収まる子ゴリラは、  
不謹慎だが、愛らしい、  
よしのはそう思った。

しかし、それはほんの一瞬で。  
自分の胸に不安そうな顔をうずめる子ゴリラに  
よしのは自分を恥じた。  
そして、

子ゴリラの頭のでっぺんに頬を寄せた。

吹雪の音のみが洞窟に鳴り響いた。

一体どれだけ時間がたっただろう。

外はすでに真つ暗で、ヤサカニの仄かな灯りが余計に明るく感じた。

「ヴゥ…」

親ゴリラの指先がピクリと動いた。

よしの「！…」

よしのは自分に抱きついたままグッスリ眠っている子ゴリラを優しく揺り起こした。

子ゴリラは親が目を覚ましたことが嬉しいのか、ぴよんぴよんと飛び跳ねた。

親ゴリラがむくりと起き上がると子ゴリラは親ゴリラにしがみついた。

よしの（よかった…）

はた、と親ゴリラとよしのの目があった。

よしのはにつこりと微笑んでみた。

「ガウウウ！」

親ゴリラはうなり声とともによしのに襲いかかった。

しかし

「キー！」

親ゴリラの背中にしがみついていた子ゴリラは親ゴリラの肩までよじ登り、腕に飛びついた。

「ガウウ！」

親ゴリラは子ゴリラに吼えた。

よしのは慌てた。

自分のせいで、親子喧嘩が起きていると。

よしの「あわわ…どうか喧嘩はおよしになって…」

しかし、その喧嘩は突然収まり、二匹は洞窟から出て行った。

よしの（えっ！出ていかれてしまいました…）

少しして、二匹は再び洞窟に戻ってきた。

その両腕には、たくさん野菜が抱えられていた。

よしの（このような環境でも野菜って育つんですね…）

ゴリラたちはよしのの前にボトボトと野菜を落とした。

よしのはきょとんとした。

よしの「もしかして…くださるのですか？」

ゴリラたちはこちらをじっと見つめている。

よしのはにっこりと笑った。

よしの「ありがとうございます」

翌朝も吹雪は止まなかった。

よしの「さて、私そろそろおいとましますね」

よしのが立ち上がると、ゴリラたちも立ち上がり、外に出た。

よしの「…？」

ゴリラたちはずいずいと進み、ぴたりと止まるとよしのを振り返った。

よしの（…ついてこいとおっしゃっているのでしょうか…？）

ですが、きっとエオル様とフィード様に心配いただいていますでしょうし…）  
子ゴリラがパタパタとよしのの元へ駆け寄り、グイグイと引っ張った。

よしの「あ…ちょっと!」

フィード「よーしのー!」

エオル「よしのさーん!」

叫んでは吹雪にかき消される声を振り絞り、

フィードとエオルは昨日からよしのを探し続けていた。

フィード「クソ…」

フィードは疲れたとその場にへたり込んだ。

エオル「フィード」

なんだよ、とフィードはエオルを不機嫌そうに見た。

エオル「このままじゃあラチがあかないよね。」

フィードはしわがれた声で疲れたように返した。

フィード「まあ…薄々気づいてはいたが…そうだな」

エオル（…気づく暇もないくらい必死こいて探してたくせに…）

「やり方を変えよう!」

フィード「どんな?」

エオル「よしのさんに気づいてもらう」

フィード「…」

フィードはニヤリとエオルを見た。

フィード「なんだ？魔法は使っちゃダメだったのはどいつだよ？」

エオル「知らないの？」背に腹はかえられぬ”って、こういうときに使うんだよ」

フィードはフンと鼻を鳴らすと、天に向けて手をかざし、呪文を唱えた。

フィード「フロム・エ・ス火炎龍！」

ゴオオオオン…！

フィードの手のひらから、炎の柱が天に向かって伸びた。

それは、しばらくの間、辺りを夕日色に染めた。

しばらくして、辺りは再び白い闇に閉ざされた。

フィード「どうだ畜生！」

エオル「おつかれさん！10分後くらいにもう一度お願い」

フィード「…6発上げてダメなら”考え直す”からな」

エオル「…そうだね」

—2発目をあげて数分後

フィード「…何か聞こえねえ？」

エオルは耳をすませた。

微かだが、低い、何かが軋むような音——

エオル「なんだろ？」

それは徐々に、大きくハッキリと、  
フィードとエオルの頭の上から降ってくるようになった。

「グルルルル…」

フィード「…」

エオル「…」

2人の魔導師は恐る恐る後ろを見上げた。

そこには

白く長い体毛に覆われた3メートル近くあるゴリラのような生き物が  
仁王立ちして2人を見下ろしていた。

フィード「よしの！ちよつと見ないうちに随分毛深くなって…」

エオルはフィードの頭をひつ叩きながら剣を抜いた。

エオル「おばか！イエティだよ！

縄張り意識が強くて凶暴なんだ」

フィードはため息をついた。

フィード「縄張りねえ…」

いつかのミミズみたくどっかの誰かにブチブチ言われる

前に、

さつさと片付けるぞ！」

イエティは鋭い爪の生えた大きな手をフィードの頭の上に振りかざした。

フィード「ん？あれ？」

フィードの足は

雪にスッポリ埋まり、思い通りの動きをしない。

エオル 「フィード！何やってんの！！」

フィード「うお！」

無理矢理動かしたフィードの足はバランスを失い、ガクンと膝から上だけ真後ろにひっくり返った。

そのスレスレ

フィードの真横で白いしぶきをあげ、

フィードの鼻先をイエティの爪がかすった。

フィードの隣にはイエティの爪の形に雪がえぐれていた。

フィードは苦笑いした。

フィード「つぶねー…」

再びフィードを狙おうとするイエティにエオルが声をかけた。

エオル 「こつちだ！」

イエティの意識がエオルに向いた。

エオルは剣を構え、勢いよく…

ズボッ！

エオル 「…」

ズボッ！

エオル 「…」

駆け出しかけたその足は、ぎこちなく雪から抜け出しは雪の中に埋

まり

フィード「…なーにやってんだてめえは」

エオル「ちよっ！これ砂漠よりもヤバイよ！！」

イエティは格好の獲物と言わんばかりにエオルに襲いかかった。

エオル（そっか！

こいつはこんな雪ものでもない脚力があるのか…  
こつちも踏ん張りがきけば！！）

エオルは威嚇するように剣を大きく振った。

イエティは驚いて2、3歩後ろによろめいた。

エオル（ん？このイエティ、剣が危険なものだってことを知っている…？）

フィード「そいつ、人間と戦い慣れしてるぞ！」

フィードの視線の先―イエティの背中には、

白い毛が生えそろうていない無数の切り傷や火傷の痕があった。

エオル「！

旅人を襲っている…？」

エオルの脳裏に嫌なイメージが降ってわいた。

フィード「あいつは大丈夫だろ！アーティファクト持ちだぞ！」

エオルの様子に気が付き、

今は目の前のことだけ考えろ、とフィードが声を飛ばした。

その声にはよしのへの”信頼”があった。

エオル（いくらアーティファクト持ちだからって…

よしのさんは女の子だぞ！？

彼女は一人で大丈夫だって、絶対切り抜けられるって、  
どうしてそこまで言い切れるんだよ…）

エオルの手が止まった一瞬を、イエティは見逃さなかった。  
再び凶暴な爪がエオルを襲う。

フィード「グラン・デ小爆炎！」

ズガァン！

辺りに低い爆音が鳴り響いた。

イエティは白い背中から黒い煙をあげ、エオルのすぐ前にうつ伏せて倒れた。

エオル「……ども」

フィード「ったく、むしろ何でそこまでいらん心配できるのか、知りてえくらいだぜ」

エオルは少しムツとした。

エオル「なんでそう女の子を俺たちと同じ扱いするかね」

フィードは抑揚のない声であるセリフを棒読んだ。

フィード「女は案外男より強いものなのよ」

エオル「また受け売り？」

フィード「マリアのババアだな」

エオル（あー…君の女性の印象でそこマリアなのね…）

ヴゥヴゥ…

エオル「！」

イエティが苦しそうに立ち上がった。

フィード「ふん、真っ黒いパウダースノーにしてやんよ」

ブワッ！

吹雪が一層激しくなった。

フィード「いてててて！」

エオル 「雪が…」  
フィード「！」

ドガア！

イエティの平手打ちをモロに喰らい、  
フィードは雪しぶきをあげ数メートル先に吹き飛んだ。  
エオル （足場が悪いとはいえガードしたフィードをあんなに軽々と！？）

フィードは鼻血を拭いながらむくりと起き上がった。  
フィード「ったく、雪のくせに埋まるばっかで滑りやしねえ」  
フィードはつまらなそうに鼻をすすった。

エオル （…意味がわからない）

「そりゃパウダースノーだからね…」

……！」

エオルは剣をしまい、呪文を唱え始めた。

フィード「…！？」

イエティは危険なものがなくなったのを理解したのか、エオルに襲いかかった。

エオル 「フィル・ディク浄水盤！」

イエティの頭上に円盤状の水たまりが現れた。

エオル 「ウキド・リフ魔法分解！」

バシャァン！

イエティの周囲に水たまりが一気に落下した。

水はたちまちに凍結した。

「オオオン」

イエティの柔らかな体毛も見る見るうちにパリパリと固まった。

エオル（よし！足場が固まった！）

エオルは剣を抜いた。

フィード「ニアフ・フロム・エ・ス低火炎龍」

近くで見つけた適当な岩陰で、先ほどのイエティを丸焼きにし、  
2人の魔導師は一日ぶりの食事をとった。

エオル「ま、腹が減っては戦は出来ぬって言うしね」

フィード「ちったあ冷静になったみてえだな」

エオル「そりゃあね。」

…よしのさん、大丈夫かな…一人でお腹空かせてるんじゃない…」

フィード「今頃これと似たようなもん食ってるだろ」

エオル「君のイメージのよしのさん、たくましさすぎ！」

よしの「ここは…」

子ゴリラに引っ張られてやってきたのは、

雪に覆われた山あいの小さな集落だった。

親ゴリラはキヨロキヨロと当たりを警戒しながら、集落の端に雪を積み固めて作られた雪室に近づき、ゴソゴソとあさりだした。

よしの「あつ！ いけません！ これはこの村の方たちの…」

ゴリラが雪室から取り出した食べ物に、よしのは見覚えがあった。よしの（昨日いただいた食べ物…！）

「あつ！」

村人の声。

見つかった！

よしのは焦った。

一日ぶりに聞く人の声は、暖かいものではなく、恐ろしいものだった。

親ゴリラはよしのと子ゴリラを抱え、ドスドスと雪の中を逃げ去った。

村人は顔を青ざめさせ、呟いた。

「今の… 人間！？」

親ゴリラはよしのを抱えたまま、元の洞窟に戻り、すぐさま”取って”きた食べ物を広げた。

よしの「これはいけません！ 食べてはダメなものです！」

二匹のゴリラはよしのの言うことがまるでわかっておらず、無心に食べ続けた。

よしの「ああ… どうしたことでしょう…」

ゴリラたちから何度か食べ物を差し出された。

確かに空腹だったが、よしのは食べたいとは思えなかった。

よしのは（きつと、あの村の方々が生活のために大事に貯めていた食べ物でしょう…）

よしのはゴリラたちを見つめた。

よしのは（この方たちは、ずっと昔からあの村から食べ物を取っていた…？考えにくいです。

きつと”こうなった”理由があるはずです。）

よしのは洞窟の周辺を探索することにした。

ちょうど吹雪が止み、空からは日が差していた。

よしのは（この方たち、本当なら一体どういうものを食べていたのでしょうか）

辺り一面、雪と岩、植物一本すら生えていない銀世界。

よしのは（…雪は食べてもお腹いっぱいになりませんし…岩は硬くて食べられません…）

しばらく歩いていると、遠くに黒い影がピョコピョコと動いているのが目に入った。

よしのは（うさぎさんかしら…？）

元気一杯駆け回っていた影は、ガシャンという音とともに、突然倒れた。

よしのは（…！）

駆け寄ろうとしたよしのは足を止め、積もった雪の影に身を隠した。そつと覗くと、

男が2人、ウサギ（らしきもの）にゆっくりと近づき、必死で暴れるウサギの足を片手で持ち上げ、麻袋に包み、立ち去った。

よしのは（あ、狩りをしていらっしゃったんですね）

よしのは一瞬心臓が跳ねた。

よしの（狩り！？人間たちが…！？）

よしのは先ほどの村に雪室がたくさんあったことを思い出した。

よしの（…食べ物貯め…）

よしのはうつむいた。

——あの村の方々が、暮らすために山の食べ物を取って貯めていらつしやる…

でも、取りすぎてゴリラさんたちの食べ物が——

よしのが洞窟に戻ろうとしたとき、前方にオレンジ色の柱が天に向かって伸びているのが見えた。

しばらくして、そのオレンジ色の柱は消えた。

よしの（あ…！フィード様ですわ！）

よしのは急いで洞窟まで行くと「仲間がいるので失礼します」とゴリラの親子に声をかけ、雪原を駆け出した。

よしの（確か…あちらの方角…）

やがて再び日が陰り、ハラハラと雪が舞いだした。

それはたちまち、視界を白く塗りつぶす、あの猛吹雪と化した。

それは360°。東西南北右左どちらがどちらかの感覚すらを奪い去った。

しかし、よしのは構わず駆け抜けた。

するとやがて、ぼんやりとオレンジ色の点が蛇のように細長く並んでいるのが見えた。

よしの（明かり…！）

よしのは近くまで駆け寄り、足を止めた。

それは、松明を手にもるで戦場に行くかのような物々しい格好をしている人々の列であった。

よしの（私たちを襲ってきた”あの方たち”<sup>トラップ</sup>でしょうか！？）

列の中の一人が大声をあげた。

「いたぞ！」

よしのはドキリとした。

よしの（見つかってしまいました！）

しかし、その列はよしのは全く別の方向に走り出した。

よしの（…？）

それから少しして

「アアア」

低く、腹の底に響く叫び声。

よしのは反射的に声のするほうに走った。

フィールド「次で6発目だぜ」

エオル「…そだね」

安否すら確認出来ぬのに、

このまま6発目の火柱をあげても、

何もなかったら…

フィードは静かに手のひらを天に向け、呪文を唱えた。

やがて火柱が消え、

しばらくの間、

吹雪く音のみが辺りに響いた。

フィード「…行くぞ」

エオル「……ん」

膝まで積もる雪を蹴り分けて、よしのは松明の集まるところに急いだ。

松明の群の目の前には、2人の白い影。

よしのは血の気が引いた。

松明の群は弓や刃物を構え、

目の前の白いゴリラの親子に向かっていった。

先ほどまでふわふわだった親ゴリラの真つ白な体毛は血に濡れて、先ほどまで無邪気で可愛らしかった子ゴリラは親ゴリラの影で戦慄していた。

よしのは無意識に自分の知らないところで声を張り上げていた。

「ダメーーーーーっ！！！」

よしのは両腕を大きく広げて、松明の群の前に立ちはだかった。

群の1人が言った。

「あの子だよ！イエティに攫われた子は！」  
よしの「えっ」

「待ってるー！今助けるからなー！」

よしの「違…」

ドスリ

よしのの脇を弓矢がすり抜け、後ろから鈍く短い音がした。

よしのは反射的に振り返った。

よしのの脇をすり抜けた弓矢が、子ゴリラの額に深く突き刺さっているのが見えた。

子ゴリラは戦慄した表情のまま、ドサリと真後ろに倒れた。

よしのは頭が真っ白になった。

何が起こったか理解できず、ただただ茫然としていた。

「クーン」

親ゴリラがしきりに動かなくなった子ゴリラを立たせようと子ゴリラの体を持ち上げた。

しかし、何度立たせようとしても、  
子ゴリラの体は音もなく雪の上に転がるだけだった。

よしの「あ…あ…」

よしのは後ろに2、3歩よろめいた。

「やー！」

松明の群の何人かが、親ゴリラの背中に剣を突き立てた。

親ゴリラは静かに子ゴリラに覆い被さって倒れた。

よしのは膝から崩れ落ちた。

よしの「ゴリラさん…ゴリラさん…！」

ゴリラたちの元に這うように寄り添い、揺るために伸ばした手は、よしのにただ、起こった事実を伝えるのみだった。

「女の子は無事だ！」

「大丈夫だったかい？」

松明の群がよしのを囲んだ。

肩に触れる生暖かさを感じたとき、

よしのは自分の中にヘドロのような感情がこみ上げてくるのを感じた。

よしのは心が動かすままに、勢いよい立ち上がりヤサカニを発動した。

「うわあ！」

よしの「…！」

よしのの近くにいた何人かが、ヤサカニの結界に弾き飛ばされた。

雪に倒れ込む人々を見たとき、よしのの中のヘドロはたちまち引込んだ。

人々と目があった。

その目はつい今しがたのよしののそれとは全く逆のものだった。

「どうしたんだ？」

「魔導師なのか？」

「大丈夫かしら？」

「怪我をしたんじゃないだろうか？」

よしのは耐えきれず、無心に駆け出した。

顔にぶつかる痛みはずの雪も、

膝まである雪を渾身の力で蹴り分ける足も、

よしのにとっては全く別の世界の出来事のようにだった。

視界はただ白く、

ただただ、無心で、

この白い闇の世界を、

よしのは駆け抜け続けた。

ドン！

突然、何か暖かいものにぶつかり、

よしのは初めて前を見た。

そこには見慣れた赤色の瞳。

しかし、いつもは見慣れぬきょとした表情。

その表情はすぐにいつものからかうような顔に変わった。

フィード「よしのテーマー！どーこほつつき歩いてやがった！」  
いつもの冗談っぽいだみ声。

フィード「ったく、手間かけさせやがっ」

どん！

よしのは思い切りフィードの胸に飛びついた。

そして、自分でも信じられないほどの声を張り上げて思い切り泣いた。

フィードは慌てた。

フィード「なんだよ、迷子のガキじゃあるまいし」

フィードは呆れたように左手を自分の腰に当て、

だが不器用な手つきでポンポンとよしのの背中を叩いた。

パンゲア大陸　ヴァルハラ帝国　クラブ・ダブ・ドリップ　魔導師

協会管轄地区

対魔導師犯罪警察組織トランプ本部受付―

マリア「ハロー？」

3人の受付嬢はその声に弾かれるように立ち上がった。

目の前にはスペリアル・マスター、マリア・フラーレン

「マ、マスター・マリア！今日おいでになるご予約でしたか！？」

受付嬢たちは慌てて机上の予定表をめくった。

マリアはあっけらかんと笑った。

マリア「んーん！スピードが”エース出動レベル”の事件を担当になっただけ聞いてさあ。」

「ええ」

マリア「あいつ、ついこないだまでW・B・アライランス問題やる気マンマンだったから、

からかってやろうと思ってさ」

（ええーっ！！）

マリア「ってわけで、

スピードのエースに取り次いで頂戴」

受付嬢の一人が申し訳なさそうにマリアを見た。

「それが…すでにスピードのエースは遠征に出ておまして…」  
マリア「えーっ！そうなの…さすがエース出動レベルねえ…」

じゃあ…せっかくだから、ぜれっちに取り次いでよ」

（ぜれっち！？）

受付嬢たちは急いでジョーカーの予定を確認した。  
今の時間は丁度空いているようである。

「只今お取り次ぎいたしますね」

その時、スピードのキング、リー・シェンが受付にやってきた。

シェン「よー！ちよつと受付の外線貸し…」

マリアはおもちゃを見つけた！という顔をした。

シェンは顔を引き締めた。

シェン「マスター・マリア！いらっしやるならご連絡いただければ…」

マリアは笑った。

マリア「事前に連絡とか、堅っ苦しいでしょー？」

シェンも笑った。

シェン「いえ、そうでなく、

こちらでも仕事が詰まっていたら、ご対応が難しくなってしまうのではないですか。」

（い、言った！

誰もが言えなかったことを！サラッと！

しかもちゃっかりオブラートに包んで！）

マリアはきょとんとした。

マリア「言われてみればそれもそうね」

シェン「で、本日はどなたに？」

マリア「トージローよ。でももう出払っちゃったって聞いたわ」

シェン「ええ、まあ。

せっかくなのでお茶でも出しましょう。

ちょうどこの間のバカンスの土産があるんですよ。」

マリア「いいわね。お願い！」

（そういえばこの子とタイマンで話するの、初めてね！）

シェンは受付嬢たちに「マリアの応対は任せて」とウィンクし、マリアを奥へ案内した。

受付嬢たちは胸を撫で下ろした。

マリアは意地悪っぽい笑みを浮かべた。

マリア「外線って、奥さんどこ？」

シェンは嬉しそうに笑った。

シェン「ええ」

マリア（ちよつとは照れなさいよ！つまらないわね！）

シェン「さ、どうぞマスター」

シェンはスピードの応接室にマリアを通した。

――間――

マリアは出された紅茶をすすった。

マリア「お茶出し、リシュリユーじゃなかったわね？」

シェン「ええ、トウジロウの遠征で補佐に出しています。」

マリアは眉をひそめた。

マリア「それは……」問題”がまだ残ってるってこと？”

シェンは紅茶をすすって菓子をガサガサと開け始めた。

シェン「ま、出せるそこからメンバー捻りだしたんですけど、そのメンバーがメンバーで……」

マリアも菓子を開けた。

マリア「あんたが”キングになる前のメンバー”がいるってことね」

シェンは包みを開ける手を止めた。

シェン「そのくらい、彼らがトウジロウから負わされた心の傷は深いってことですよ。」

マリア「だからしょうがないって？」

シェンは笑った。

シェン「まさか！まだまだこれからですよ。」

ただ、人の気持ちを变えるのは時間がかかる」

マリア「トウジロウの気持ちと隊員のトウジロウへの気持ちってこと？」

シェン「何分、頑固な連中の集まりでしてね。」

マリアは「ふーん」と相槌を打ち、菓子をほおばった。

シェン（……）

マリア「ところで、W・B・アライランスの件なんだけど」

シェン「進展ナシですよ。」

カーシーの町から砂の大河まで来たという情報は”別件”でたまたま仕入れたんですが、

それからカケラも情報が掴めません」

マリア（…）

「別件？」

ああ、砂の大河で魔導師専用道具をハンターたちが不正使用してたつてやつ？

立件されたんだ？」

シエンは苦笑いした。

シエン「肝心のブツが出てきてないので何とも言えない状況ですよ」

マリア（…砂の大河からの足取りが途絶えた…

もし本当に大砂瀑布の滝壺に沈んだままだとすれば…嘘ではなさそうねえ）

マリアはシエンをじっと見つめた。

マリア（この子ってよくわからないのよね…）

シエンは笑った。

シエン「…？なんスか？」

マリア（…）

「…いいえ、何でもないわ。情報ありがとう。」

（進展なし…か）

シエン「そうだ、そのシャンドラ・スウェフィードとエオル・ライセンってどんな人物なんですか？」

マリア「あら？トランプのキング様が犯人たちがどんな子かって、興味があるの？」

シエンは不敵な笑みを浮かべた。

シエン「そりゃあ捕まえるにはまず敵を知らないとね！」

マリアはクスツと笑い、紅茶にミルクを注いでスプーンでかき回した。

マリア「エオルはね、素直でいい子よ。」

絵に描いたようにね。」

シェン「へえ！今時そんな優等生いるんですねえ」

マリアはスプーンを置き、意地悪そうな笑みを浮かべた。

マリア「いるわけないから理想っていうのよ。」

シェン「？」

マリア「仮面をはがしてやりたかったけどねー！

キリスのヤツがイタくお気に召しててね。

あんまし構わせてもらえなかったの。」

シェン「仮面つて…ホントに被ってるかなんて、わからないじゃないですか」

マリアはすました顔で紅茶をすすった。

マリア「黒いものがひとつもない人間なんていやしないわ。

むしろ黒いものを認めず隠し通そうとすると、絶対歪みが出てくる、

人間てのはそんなもんよ」

シェン（あー…そうやって割り切ったらこうなるのか…）

マリア「ん？なんか言った？」

シェン「いえ…というか、つまりエオル・ラーセンの”本質”についてあまり詳しくない？」

マリアは笑った。

マリア「一つだけ言えるのは、シャンドラの友達ってことよ」

シェン「はあ…」

マリア「あの子は人を見る目があるわ。

あの子の友達なんだから、悪い子じゃあないハズよ！」

シェン（…犯罪者の話のはずなんだけど…）

「シャンドラ・スウェフィードについてはお詳しいようですね」

マリアはにっこりした。

マリア「もちろん！」

マリアは持っていたカップをソーサの上に戻した。

マリア「ワガママだしイタズラばかりするし、

あの子の言動の10割は嘘か冗談ね」

シェン（…）「よい子」ではなさそうだなあ

マリア「でもね、」

マリア「根っこの根っこは優しい子」

シェンはマリアの悲しそうな笑みを見逃さなかった。

シェン「へえ、まるで悪いことなんてしなさそうな子に聞こえますね」

マリアは拳を握りしめた。

マリア「そうよ！全く信じられない！

絶対理由があるはずよ！」

シェン（…）

「…そうですか…」

マリアは口を尖らせた。

マリア「って言っても、あんたたちは有無も言わさず魔導師裁判所セイラムにかけるんでしょうねっ！」

シェンは微笑んだ。

シェン「マスター、あなたは魔導師裁判所セイラムに悪いイメージを持ちすぎですよ。」

悪いことをしてなければ呪いなんて執行しません。」

マリアはつまらなそうに足を組んだ。

マリア「さすがは正義のトランプ様々だわ！」

シェンは「クツ」と抑えるように笑った。

シェン（この人面白れーっ！）

「まあ、彼らがアカデミーの頃は人望の厚い人間だったってことは、わかりました。」

マリア「わかっていただけで、どーも」

マリアは「さて」と勢いよく膝に手を乗せた。

マリア「W・B・アライランスについての状況が聞けたし、そろそろおいとまするわ！」

シェンはにっこり笑った。

シェン「そうですか」

マリアを玄関まで見送り、

受付の外線で長電話し、

自身の執務室に戻ると、

シェンの肩にひらつと手のひらほどの光の玉が降ってきた。

リンリン「シェンってば嘘つきなんだ！」

シェン「あれ？お前との約束何かすっぱかしたっけ？」

リンリンはシェンの肩に腰掛け、足をバタバタとさせた。

リンリン「ちーがーうつ！」

さつきの女の人よっ！

W・B・アライランスの捜査に進展なくって、

あのボーズ頭トウジロウが全くの別件に入ったとか！」

シェンは笑った。

シェン「嘘は言ってないよ。

ただ確信のない情報出しても仕方ないと思ってね」

リンリンは膝の上に肘をつき、ニヤリと笑った。

リンリン「ほら、やっぱり嘘つきだ」

マリアは思い切り伸びをした。

マリア（んー！初めて2人きりで話したけど、なんか肩凝ったわー…）

ふと、もうすで見えなくなったトランプ本部を振り返った。

マリア（全然腹の内を見せられた気がしない。）

マリアは空を見上げた。

マリア（あの子から情報聞き出そうとしたのは失敗したわ。

次からはトウジロウも口裏合わせてくるかも…）

マリアは再びまっすぐ、帰路を歩み始めた。

マリア（こうなったらヤクトミ！あんたにかかってるわよ！）

ムー大陸 マーフ国 北部の町キーテジ

ヤクトミ「ヘックシ！」

ヤクトミは鼻を擦った。

ヤクトミ（誰か噂でもしてやがんのか？）

「ちよつとー」

ヤクトミは肩越しに聞こえてくる甲高い声にウンザリしながら目を向けた。

そこには、ミルクティー色のベリーショートのに

大きな猫目の小柄な少女が両手に腰を当てて立っていた。

物を盗んで人々に制裁を加えられていた猫の獣人の少女―ラプリイを助けたところがヤクトミの運の尽きだった。

ヤクトミ「今度は何だよ」

ラプリイ「ちゃんと手で口を抑えてよ！

病原菌撒き散らさないでよね！」

ヤクトミ「病原菌って…お前なあ…誰かが俺の噂」

ラプリイ「するわけない」

ヤクトミ（こいつ）

ラプリイは「あ！」と手をたたいた。

ラプリイ「もしかしたらフィードさんかエオルさんかなあ！」

ヤクトミ「今自分で俺の噂はねえって言ってたじゃねえかよ」

ラプリイ「うるさいなっ！」

両手を振り上げてヤクトミに飛びかかるうとしたラプリイは突然立ち止まったヤクトミの背に、思い切り鼻をぶつけた。

ラプリイ「痛〜！何なのよっ！」

ヤクトミ（あれは…確かクラブのエース！）

人ごみの中に、

レンガ色の髪にそばかすだらけのごくごくありふれた顔立ちだが、直ぐにわかる、

オーラが違う―クラブのエース、リケ・ピスドローだ！

ヤクトミ（なんだってこんなところに…？）

ラプリイ「ちよつと！何なのかつて聞いてんの！」

ボスリとヤクトミの尻に蹴りを食らわせたが、

ヤクトミの鍛え上げられた肉体はまるで鋼のように固く、  
逆にラプリイがすねを抱えて飛び跳ねた。

ヤクトミ（どうする…追うか！？）

ラプリイはヤクトミからの反応は諦めて、ヤクトミの視線の先に目を向けた。

ラプリイ「へえ！タイプなの？」

ヤクトミ「そういう目に見えるか」

ラプリイ「あ！ごめん、生まれつき”そういう”目なんだっけ？」

ヤクトミはヤレヤレとため息をついた。

ヤクトミ「あの人、トランプのお偉いさんだ。

…トランプくらいは知ってるよな？」

ラプリイ「悪い魔導師捕まえる人たちでしょ？そのくらい知ってるわよ！」

ヤクトミ「シャンドラたちはやつらに追われている」

ラプリイはフィードたちと別れた直後のことを思い出した。

ラプリイ「そういえば…私を見せ物屋から助けてくれたとき、

これを自分たちがやった事件としてトランプに通報してくれって」

—…は？

ヤクトミは思わずラプリイの腕を掴んだ。

ヤクトミ「ちよ、ちよつと！それどういことだ！？」

わざと？どの事件のことだよ！」

ラプリイは「痛いわね！」とヤクトミの手を振り払い、手首をさすりながら続けた。

ラプリー「多分”商隊強盗”って名目だったと思うけど、ホントは違うよ。」

その商隊で”商品”だった私と天使を助けてくれたんだよ。

ホントに捕まるべきなのは被害者ヅラして魔導師協会に賠償金求めてるライエルってやつよ」

ヤクトミ（商隊強盗…カーシーの町の！？）

ライエルって確かその事件の被害者の名前…）

「…なんで…わざわざそんな嘘…」

ラプリー「わからない。」

ヤクトミは顔を上げ、再びラプリーの手を引いた。

ヤクトミ「頼む！あそこにいる女の人にそれ、説明してやってくれ！」

ラプリー「だめよ！フィードさんたちがそうしてくれって言ったんだもん！」

トランプの人にホントのこと話したら、意味ないじゃない

いっ！」

ヤクトミはラプリーの手をそつと離れた。

ヤクトミ（クソッ…あいつ、ホント、何してんだよ！）

リケ「あれ…？君確かマスター・ガルフィンとこの子だよな？」

後ろから飛んできた聞き覚えのある声。

ヤクトミは心臓が飛び跳ねた。

ヤクトミは恐る恐る振り返った。

クラブのエース、リケ・ピストローだ。

本来なら普通に学校なのに、こんな所で何していると聞かれたら…

まずい、答えを用意しきれない。

リケ「アハハ！何で知ってるのって顔だね！」

君が優秀だつて話はいろんなところから聞けるから！

君、結構トランプの中じゃあ有名なだよ！」

ヤクトミはきよとした。

ヤクトミ「あ…ありがとうございます…」

リケはニヤリとした。

リケ「学校サボって彼女とデート？」

ヤクトミ「は！？」

まずい、この女のことだから「違うわよ」とかって暴れ出す…

ラプリーはにつこりと笑ってヤクトミの腕に絡みついた。

ヤクトミ（！？）

リケはからかうようにヤクトミを肘で小突いた。

リケ「スミに置けないわね！優等生！」

ヤクトミはリケの顔を見つめた。

…今、この人にラプリーが言ったことを話せば…シャンドラの罪は軽くなるんだろうか…

息をするのと一緒に、口から出してしまいたい―

ラプリー「…」

ラプリーはヤクトミの二の腕を爪を立てて思い切りつねりあげた。

ヤクトミ「い痛ってえー！！！」

ラプリー「オホホ！ごめんなさい！」

この人照れ屋で、からかわれるの苦手なんですう！」

リケはクスリと笑った。

リケ「それは失礼！」

それじゃ、私行くとこあるから！

「サボリもほどほどにね！」

リケがヒラヒラと手を振り、人ごみに消えていくのを、ラプリーは見えなくなるまで見つめていた。

ラプリー（…気持ちのいい人だな…）

ラプリーはファイとヤクトミの方に振り向き、思い切り背中をひっぱたいた。

ラプリー「あんたと違ってね！」

ヤクトミ（突然何ー！？）

「何がだよ！」

ラプリー「あれっ！？

さっきの人、トランプなんだよね？！」

ヤクトミ（しかも無視！！）

「…そうだけど」

ラプリーは目を輝かせた。

ラプリー「ね！」

フィードさんたちの情報、何か持ってるかも！！」

ヤクトミ「俺もそう思って、追うかどうか考えてたんだよ」

ラプリー「ハア！？

何で考える必要があんのよ！聞けば良いじゃんか！」

リケの後を追おうとするラプリーをヤクトミが慌てて止めた。

ヤクトミ「それはだめだ。」

ラプリー「何でよ！」

ヤクトミ「…俺の事情。シャンドラたちの行方を探していることを知られたらまずい」

ラプリー「はあっ！？」

ヤクトミ「第一トランプには捜査中の情報の守秘義務ってヤツがあ

るから、

どの道あの人は口開かないよ」

ラプリー（~~~~っ！！）

目の前に手がかりがあるっていうのに！！  
このまま何もできないの！？

ラプリーは何か方法はないかと唇を嚙んでうつむいた。

ヤクトミ「…見つからねーようにあの人を追う。」  
ラプリーは顔をあげた。

ヤクトミ「ただし、相手はプロだ。

お前、ちゃんと俺の言うこと聞いて、静かにしとけよ」

ラプリーは生唾を飲み込んだ。

ラプリー「…わかった」

恩人に会いたい。

ただそれだけ。

会ってどうするだとか、そんなこと、考えちゃいけないけど、

今は心の奥底から湧き上がる気持ちに従うまま、

そのためだったら、

なんだってやってやるんだから！

## 10・white shout（後書き）

今年最後の話がこんな暗くてすいません。

ただ、この白い闇での出来事が、よしのの心に何をもたらすか。

また、ヤクトミにも動きが出てきました。

今回はバトルやら名探偵リケやらいろいろ話が動き出します。

なお、本家サイトに冬休み限定部屋として変な絵がおいであるページとかがあるので、もし興味がありましたらば。

10・1・黒い三日月―Adagio―（前書き）

あけましておめでとうございます。

新年一発目は小話10・xシリーズ3部作その1。

口口の素性みたいのに少し触れるシリーズとなります。

（新年一発目ということもありいつもの小話より量は少なめです。  
すいません。。）

今回は普段の口口と仲間たちの様子、そして忍び寄る影についての  
お話――

いつになく真剣な面持ちで、口口は尋ねた。

口口「…どうしても行くのか」

問われた取り卷きは申し訳なさそうに答えた。

「ええ…すみません、ウーさん」

口口の声が低くなった。

口口「どうしても行くというなら、おれを倒して行け」

取り卷きは慌てた。

「何言ってるんですか、そんなこと、できるわけがないじゃないですか」

口口は顔をゆがめた。

口口「…なんだ、できねえなら、なんで…」

「すみません…どうしても行かなければならないんです」

取り卷きは口口に背を向けた。

「…あの…ほんと、すぐ戻るんで。  
ただの食糧の買い出しですから…」

ロロ「だめだ！一秒たりともおれの眼の届かないところに行くなんて  
！」

（はあー！？何言ってるの！？この人！！）

べつの取り巻きがロロを引っ張った。

「はいはい、ウーさん、あっちで新しい紅茶開けましたから！」

（ほら！今のうちに！）

（助かる！）

買い出しの取り巻きは全速力で走り去った。

ロロ「新しいって…アレか！やっぱおれの趣味をよくわかってんな  
あ！」

…っておい！どこに行く！？」

「すぐ戻ってきますからー！」

「  
…」

その様子を遠くから見つめる影――

「あれが口口・ウー…  
…探したぞ」

―― 黒い三日月 (Adagio) ―――

10・1・黒い三月―Adagio―（後書き）

ロロはいつもこうではありません。  
まったくの気分です。

ロロは取り巻きたちが大好きなのです。  
異様な大好きさが伝わればOKです。  
まったくきもい男です。

さて、そんなご機嫌なロロに近づく怪しげな影の正体は…  
次回は1/16更新予定です。

10・2 黒い三日月―accel― (前書き)

10・1で最後に出てきた怪しげな人物の目的は…

ヒラヒラ…ヒラヒラ…

白い折鶴は前後左右にフラつきながら、  
ヒラヒラと風に揺られ、  
やがてぱたりと地面に落ちた。

「ん？」

黒い三日月のアジト前  
落ち葉を掃いていた取り巻きは、  
この岩山にあるには明らかに不自然なそれに、  
気がついた。

「ウーさん、ちょっといいッスか？」

ソファに体をうずめ、  
ぼーっと中空を見つめていた口口は、そのまま口だけ開いた。

口口「…どうした」

「アジトの前でこんなもの見つけまして…」

取り巻きがチリトリに乗せていた白い折鶴を  
ロロの前に差し出した。

ロロは身を乗り出し、  
折鶴を見つめ、目を細めた。

ロロ「…心当たりがある。おれのだ、ありがとう」

「やっぱり！ちゃんとゴミは片づけてくださいよねー！」

そういうと掃除中だった取り巻きは再び掃除に戻っていった。

ロロはひょいと折鶴を持ち上げ、紙を広げた。

紙にはこう記してあった。

てんけんどう      ロロ・ウー  
転乾道      烏螺羅

「転」を返却いただきたく  
至急戻られたし

ロロ「…」

道術の元は術の母体となる漢字1字の言霊である。  
これは道士一人に1字ずつ与えられ、  
重複はない。

ロロの場合は「転」の字がそれであった。

(すべての術に「転」がつく。 9・3話、9・5話参照)

同じ字を複数に与えることは許されないため、  
道士は殉職や引退の際には”字”を管理する処へ  
返却しなければならぬ義務がある。

ロロはニヤリと笑った。

ロロ(ふざけんな、おれは殉職も引退もしてねえ。

ただ単に”お前ら”がおれを”道士として認めてねえ”って  
だけだろ。

いちいち付き合ってらんねえよ。)

これまでもこのような内容の手紙は幾度となく送られてきたが、  
アジトに張るロロの結界を破るものなど一つもなかった。

だが、今回は違った。

ロロ(…おれの結界を破るほどの術者

…リー・シェンか?)

□□はしばらく紙を見つめていたが、

□□（まあいっか）

手紙を灰皿に入れると、  
マッチに火をつけ、  
紙を燃やした。

「……紙を燃やしたな  
□□・ウー  
烏螺羅」

ピリッ

□□「！」

□□は突然立ち上がった。

□□の横に立ち、紅茶のサーブをしていた取り巻きは驚いた。

「び…びつくりさせないでくださいよ！」

ロロ「お前ら…今すぐ全員町に遊びに行ってきたな」

「…はあ？全員！？」

ロロ「全員」

「…は、はい…わかりました」

ロロにいつもの笑みがない。

取り巻きはロロのいつもと違った様子にビビリ、慌てて部屋を後にした。

ロロ（ヤロー結界に入りやがった。

よくもまあ人<sup>パラダイス</sup>んちに汚ねえ足突っ込んでくれたな…！）

ロロはずいぶん久しぶりに自分の中にふつつつとこみ上げる怒りを感じていた。

それはどこか嫌悪感にも似た感情だった。

## 10・2・黒い三日月―accel―（後書き）

次回は何やらバトルの予感。

いつもへらへらしている人が急に真面目になると  
ちょっと怖いですね。

どうでもいいけど、W・B・アライランスの「桃花源国」はこちら  
の世界でいうところの「中国」みたいなところになります。  
なので名前は漢字。

ただ、中国読みと日本読みの違いが困った。

シェンとかは漢字の意味から決めたので問題なかったのですが、  
ロ口は音で決めてしまったので、当てはまる漢字がない。

はじめはネットでしらべて「ロ口」「鷺路」だったのですが、  
正月帰省した際に辞書を見たら鷺も路も「ロ」と発音しないぽい。  
やばい、うそつくことになる。

で、その辞書使って調べなおしたらからかうじで

「ルオ」と読む字があることを発見。

それが「螺羅」。「ルオルオ」。苦しいですね。まあいいや。

でも、「螺羅」って日本語読みだと「ララ」です。

かわいらしいですね。

あ、ほんとにどうでもいい話になったや。

ちなみに「転乾道」というのは

「転」の字の言霊を与えられた「乾道」つまり男の道士  
って意味です。造語です。

次回は1/23に10・3話更新予定です。

10・3 黒い三日月―rit―（前書き）

黒い三日月第9話

口口の訪問者の正体は…

ゴゴゴ...

風もないのに窓がカタカタと震える。

——黒い三日月アジト

ロロはソファに身をうずめ、紅茶をすすっていた。

すると、密室にソヨソヨと風が流れた。

それは徐々に強くなり、カーテンを激しく揺らした。

ロロは構わず紅茶をすすっている。

やがて、ロロの頭上に黒い雲が巻き起こり、部屋に激しい雷雨をもたらした。

水かさはみるみるうちに増してゆき、

ロロ「ルミナスターン反転如律令」

ロロがつぶやくと、

フツと風も雲も雨も水も忽然と消え失せた。

ガチャリ、と部屋のドアが開いた。

「術返しとはやるな、” 転乾道”」

そこには小さな子どもが立っていた。

ロロは不敵な笑みを浮かべた。

ロロ「どちらさん？」

子どもは両手を顔の高さで互いの袖の中に入れ、” 形式的な” 礼をした。

ファ「わが名はソン・ファ。

ロロ・ウー、そなたの『転』の字を道士協会へ返却願いに参った。」

ロロ「願いに参った？」

ロロは鼻で笑った。

ロロ「奪いに来たの間違いだろう？」

ファは冷たい笑みを浮かべた。

ファ「貴様はもう道士ではない。

つまり『転』の字も貴様のものではない。  
然るべき処へ返すのがスジと思うが？」

□□「返してほしけりや奪ってみな、”視乾道”。」

ファはニヤリと不敵な笑みを浮かべた。

ファ「…わしを知っておるのか。」

□□も笑った。

□□「あんたの術にシゲキを受けて、作った術があるんだ。」

ファの顔から笑みが消えた。

ファ「残念だな。」

ぜひ見てみたかったが、次の任務も詰まっておつての。」

□□は高い位置からカップに紅茶を注いだ。

□□「なあ、あんた」

ボチャボチャと音を立てて、しぶきを飛ばしながら紅茶が乱暴に注がれていく。

□□「神に逢ったことはあるか？」

ファ「白桜姫様のことか？」

無礼者め。

一道士風情がお目通り願えることすらかなわぬお方だ。」

□□「それは失礼。」

ロロはうすら笑いを浮かべた。

ア・マッド・ティーパーティー  
ロロ「極楽転心如律令」

ファ「!？」

ファは一瞬視界が歪み、頭がふらついたが、すぐに持ち直した。

ファ（なんだ…？

…これは早々に手を打ったほうがよさそうだな…）

ファはソファに目をやった。

そこにロロの姿はなかった。

だが、ポットは浮いたまま、カップに紅茶を注ぎ続けている。

ファ（しまった、すでに術にかかっている！

警戒していたはずなのに、なぜ！？）

カップから紅茶が溢れ、

それはみるみるうちに部屋中にこぼれ出し、

ファの膝ほどの高さまで達した。

ファは筆と札を取り出し、

サラサラと札に呪文を書き出した。

ファ「視開現如律令！」

しかし、何も起こらない。

ファ（これで何も起こらぬということとは、

幻術ではない…

相手が見えなければわしの術は有効にならん…！）

ファは部屋のドアを開けた。

すると、正面から滝のように紅茶が”降ってきた”。

同時に部屋の縦横が反転し、

ファは窓に叩きつけられた。

窓ガラスが割れ、

外からさらに紅茶が流れ込んできた。

ファ「く…」

すると、今度はファの頭上から滝のような紅茶が流れ込んできた。

ファ「！？」

ファが上を見ると、

巨大な口口がうすら笑いを浮かべながら紅茶を”部屋に”注いでいた。

ファ「貴様！！」

□□「おれは三度の飯より紅茶が好きでね。」

部屋が、

巨大な□□の口に向い傾いてゆく。

ファ「やめろ…」

泡を吹いて横たわり、

「やめろやめろ」とつぶやき続けるファを

□□はソファに身をうずめ、紅茶の入ったカップをすすりながら見つめていた。

□□「あーあ、

せっかく掃除してくれたのに、

こんな”でかいゴミ”…

まーた叱られちまう。」

□□はつぶやき、乾いた笑みを浮かべた。

それから取り巻きたちが帰るまで、

□□は珍しく難しい顔をしながら考え事をしていた。



### 10・3・黒い三日月―rit―（後書き）

突然出てきた「白桜姫」<sup>はくおうぎ</sup>という単語。

今はなんのこっちゃと思って読み流してください。

11・xシリーズで明らかになります。

ちなみにどうでもいいけど

ファとかソファとか、なんかファが多い文章だな。

ますます謎の能力「ア・マッド」。

さらにロロには何か過去にヒミツがあるようで。。

といっても、人間だれしも過去の一つや二つあるもんで。

11・xシリーズはロロの過去編です。

ロロの過去はやっぱり我々が共感するのは難しそうです。  
でもずっと書きたかったネタの一つなので、

読んでも作者を見放さず、

W・B・アライランスをヒマなときに見守ってもらいたいです。

ちよつと語りますが、

W・B・アライランスの裏コンセプトが

我々の世界の社会や個人の問題をファンタジーの世界にもりこんだら？

というものです。（じゃあ表コンセプトは？）

みんなつらい過去や恥を乗り越え、日々を生きています。

とか偉そうなことを言って

それを伝えられるほどの文章が書けるようになればよいのですが。

ホントにつたない文章ですが、暇な時にお付き合いいただければ。

さて、なんか真面目になっでしまいました。

次週は第11話、今年初めての本編の更新です。

1/30更新予定です。

## 11・fact hunting(前書き)

今年の本編第1号。

山越え中のW・B・アライランス一行、

それを追うトウジロウたちとヤクトミたち、

それとは別でW・B・アライランスの情報を集めるリケ。

第11話 fact hunting ― 追い詰められた事実―  
始まり始まりー！

## 11・fact hunting

ムー大陸中北部 マーフ国  
北部の宿場町 キーテジ

背後にそびえ立つ大連峰ヴィンディアから流れてくる灰色の雲が、  
ジリジリと照りつけるマーフ国の太陽を和らげて、  
僅かに過ぎしやすくなった午後――

「あちゃー……こりゃひどい」  
対魔導師犯罪警察組織「トランプ」 諜報軍の クラフ 副将軍リケ・ピス  
ドローは思わず頭を掻いた。

fact hunting（追い詰められた事実）――

ムー大陸南部から発生し、被害が北上している薬物事件。  
その調査で掴んだ容疑者”ギルティン”の足取りを  
このキーテジの町まで掴み、更にその先に踏み込もうとした矢先だ  
った。  
情報を得ようと向かったハンターズの裏ギルドは無残なまでの瓦礫  
と、その粉塵まみれであった。

リケは瓦礫の端に手を添えた。

リケ（微かに魔力が残ってる…）

「何か用かい？」

背後から不機嫌そうな男の声。

リケは振り向いた。

そこにはバーテンダー姿の屈強な男が後ろ手に手を組み、リケを見下ろしていた。

リケはにこりと笑いかけた。

リケ「店長さんですかあ？」

男はリケの魔導師バッヂを目にし、更に不機嫌そうに睨みつけた。

男「そちらは魔導師先生かな？」

リケは嫌な予感がした。

「…なに、ここ…」

近くの建物の物陰からリケの様子を見つめている二つの影。

W・B・アライランスの情報を掴もうとリケの後をつけていたヤクトミとラプリーは、

平和なキーテジの街並みとは切り離されたかのような光景を目の当たりにし、息を飲んだ。

ラプリー「何かあったのかな…」

ヤクトミ(…)

(爆弾か爆炎魔法くらいでしか、

” あんなこと” ありえねえ

… まさか、ホントにシヤンドラ…!?)

リケ「うちの協会員が…それは大変申し訳ないことをしました…賠償はさせていただきます。

どういう者でしたか？」

男は苦々しい表情を浮かべた。

男「男2人に女1人の三人組だよ。」

リケ(三人組…けど、1人は女性か…)

男は続けた。

男「1人は金髪の長髪で…まあ、常識人っぽかったが…」

リケ「…金髪の長髪…」

男はそうそうと頷いた。

男「耳が尖っていたから、エルフだな、ありや」

リケ(…エオル・ラーセン…?)

「なるほど」

男「もう一人のほうが一番凶暴でな、

ここをこんなにしたのもそいつなんだが、

こいつがまた特徴的な格好しててな」

リケ「特徴的…」

男は思い出したくもないと両肘を抱えた。

男 「銀髪にウサギみてえな赤い目した黒づくめのやつさ。」

リケは息をのんだ。

リケ（銀髪赤目！！シャンドラ・スウェフィード！！

…けど…）

「…もう1人は…？」

男は記憶を辿るかのように顎に手を当て、中空を見つめた。

男 「黒い髪の女…それ以外はあんまし印象に残っていない。大人しそうな女だったぜ」

リケ（確かスピードに来たタレコミもW・B・アライランスは三人組と…）

三人目はギルティンと仮定して動いてしまったけど…

もしかして違う…？）

そして、決定的な言葉が男の口から吐かれた。

男 「そいつら、ギルティンとかいう男を探してて、」

リケ（え！？）

男 「どうもそいつとの間で、

ほら、

最近ここいらで流行ってる ドラッグ 魔薬、

それで何かトラブったみたいだよ」

リケ「トラブった？」

男 「詳しくはわからんが…

そいつら、この町の宿でもトラブル起こしてたみたいだぜ？」

リケ「…その宿の場所、ご存知だったりします？」

それと…」

リケが去ったのを確認し、ヤクトミとラプリーはそろそろと男の元へ近づいた。

ヤクトミ「あの…すいません。ちょっとお尋ねしたいのですが…」  
振り向いた男は少し目を見開くと、すぐさま仏頂面に戻った。

男「何か用か。」

ヤクトミ「…多分先ほどの女性と同じことを尋ねると思うんですが…  
…ここ、一体どうしたんです？」

男は本当に面倒くさいとそっぽを向きながら素っ気なく答えた。

男「頭のおかしい魔導師にやられたんだよ」

ヤクトミ（魔導師！？）

「それってどんな、」

男「それと」

男はヤクトミの言葉を遮った。

男「今の女からの伝言だ」

”仕事の邪魔したら、採用担当に言い付けるわよ”

ヤクトミ（そりゃねーぜ…）

トボトボと背中を丸め頭を抱えながら町を歩くヤクトミに、ラプリーのイラつきは頂点に達した。

ヤクトミ「うおっ!？」

ヤクトミは背中を思いつき蹴られ、そのまま前のめりにすっころ

んだ。

ヤクトミ「イッテェ…何すんだよ！」

ラプリー「うっさいわね！さっき蹴った時なんて、ビクともしなかったくせにつ！！」

ヤクトミ「ハア！？」

ラプリー「凹んでるその時間がもつたいない！」

ヤクトミ「や…人間落ち込むもんは仕方ねえだろ」

ラプリー「…」

ラプリーは突然うずくまった。

ヤクトミ「は！？」

ラプリー「足、痛…っうう」

――間――

医者 「つつただけですね」

ヤクトミはガックリとへたり込んだ。

ヤクトミ「ビビらすなよな…」

ラプリーは診察台の上でギヤイギヤイと騒いだ。

ラプリー「うっさいな！」つる”なんて生まれて初めてなんだからっ！

ビククリするでしょ！普通！」

医者は首を捻った。

医者 「それにしてもおかしいね。

獣人は筋肉の作りが僕らよりずっとしなやかだから、つるなんて凄く稀だと思っただけど」

ラプリイ「それは…」

ラプリイは少しの間視線を落としたかと思うと、キツとヤクトミを睨みつけた。

ラプリイ「コイツを力一杯蹴りつけてやらなきゃ気が済まなかったからよ！」

ヤクトミ「あんな…」

医者 「ご兄妹ですか？」

ヤクトミはキョトンとした。

ヤクトミ「は…？」

ラプリイは猫なで声で医者 of 袖を引っ張った。

ラプリイ「そうなんですう！お兄ちゃんが苛めるので助けてください  
あい」

ヤクトミ（ヤロー…）

医者は悲しそうに笑った。

医者 「家族が無病息災であることはとても幸せなことです。

どちらもいがみ合ってばかりでは、いざというときに後

悔しますよ」

ラプリイ「！??」

ヤクトミ「…？どういうことですか？」

医者 「職業柄ね…

先日も妹さんが亡くなった方がいましたね…

そうそう、そのご兄妹を引き合わせたのが旅の魔導師様  
でして」

ヤクトミ「魔導師？」

医者は頷いた。

医者 「ええ、

妹さんの身元が確認できずに困っていたところ、

エルフの魔導師様が知り合いかも知れないと確認しにいらして、」

ヤクトミ（エルフの魔導師…！？）

医者 「まるで自分の身内のよ、」

ヤクトミ「その…！」

ヤクトミがいきなり大声を出したので

医者は驚いたように目を見開き、ヤクトミの次の言葉を待った。

ヤクトミは生唾を飲み込んだ。

ヤクトミ「…銀髪赤目の魔導師も…一緒じゃなかったですか…？」

医者 「おや、お知り合いですかな？」

ラプリー「！！」

ヤクトミ（マジかよ…！）

医者 「お兄さんをここまで連れてきてくださったのが、

まさしくその銀髪赤目の魔導師様だったのですよ。

しかしあの方、あの色素は…」

ヤクトミ「…その魔導師たちはどちらに…？」

医者は肩をすくめた。

医者 「さあ…そこまでは…」

まあ、旅人としてこの町に来られたからには

たいてい砂漠越えか山越えかのどちらかになりますけどね」

ヤクトミ「どちらか…」

（砂漠から来たから、山を越えたか…

どうする…？）

この娘があんな山に耐えきれるとは…）

ラプリー「じゃあ決まりね！」

ヤクトミ「…は？」

ラプリー「山！」

何？あんた行きたくないんなら、あたし1人で行くからいいけど！」

ヤクトミはため息をついた。

ヤクトミ「お前わかってんの？」

表出て空見上げてみるよ」

ラプリー「見たわよさっき。」

でもね、あたしは行かなくちゃダメなの！」

ヤクトミ「行つて、…そもそも会つてどうすんだよ」

ラプリーはヤクトミを見据えたまま、大きく息を吸った。

ラプリー「わかんないっ！」

ヤクトミ「ハアッ!？」

ラプリー「けど会いたい！それじゃあダメなの!？」

ヤクトミはため息をついた。

ヤクトミ（…こりゃ何言つてもダメそうだな…）

リケ（さて、期待のルーキーくんは諦めてくれたかな？）

リケは顔を引き締めた。

リケ（マスター・ガルフィンのゼミ生、ヤクトミ・ヴルナス。

シャンドラ・スウェフィードが学生時代に仲がよかった…

お友達を連れ戻しにつて可能性もあるわね…）

リケは軽いため息をついた。

リケ「さて、参ったな」

リケは裏ギルドの店主に言われた”宿でのトラブル”について早速調べた。

トラブルの内容は以下であることが分かった。

「宿で勤務していた女性と薬物を取り合った末、薬物は女性の口に…」

リケ（W・B・アライランスは薬物を持っていた。つまりそれ以前にギルティンと接触があった。）

「しかし、その後女性の体調が悪化。たまたま出くわした宿泊客に見つかった。」

リケ（そして窓から逃げた。一緒にいた”黒髪の女性”を抱えて…）

リケは顎に手を添えた。

リケ（W・B・アライランスの三人目のメンバーは”黒髪の女性”

…ではギルティンとの関係は…？）

いろいろ考えを巡らせ、足を止めた先は先ほどの裏ギルド。

瓦礫を集めていた店主の男は迷惑そうに顔をしかめた。

男「今度はなんだ」

リケはにこりと笑った。

リケ「ギルティンという男を知っていますか？」

一瞬、店主の口の端がピクリと動いたのを、リケは見逃さなかった。男はリケと目を合わせなかった。

男 「もし知ってたとしても、我々には”話さないルール”がある」

「ルールは一つ」

リケ 「無関心”！」

リケは微笑んだ。

リケ 「でしょ？」

男はリケに視線を向けた。

「わかってんなら……」

リケ 「サ・イルース 真空間！」

男 「！？」

リケと男の周りの音が、一瞬にして全く無くなった。

リケは紙とペンを取り出し、サラサラと筆を走らせた。

”先ほどの質問を答えて。周りにも私にも、今は聞こえないから”

男はこのまま音を聞こえなくされては困るとしげしげ、

自分の声が聞こえないというのは不思議な感覚だったが、

知っていることをパクパクと”話した”。

リケ 「ウス・ウリアス 魔法分解」

リケと男の周りに音が戻った。

リケはにこりと笑い、謝礼を渡した。

リケ 「ありがとう」

裏ギルドを後にして表通りに出る一歩前の路地で、

リケは壁に寄りかかり腕を組み、片手を頬にあてた。

リケ（ギルティンは先日までの数日、

裏ギルドでいろいろな者に薬を渡していた。

渡し方は自分で直接というのと、町で雇った適当な男を使ったもの。

しかし、宿でW・B・アライランスが騒動を起こしたのと同じタイミングで町から姿を消した。

行き先はわからない…と。

読唇術には自信あるから間違いはないはずだけど、

いまいちギルティンとW・B・アライランスとの関係性がハッキリしない）

リケ「…2つは切り離して考えるべき…？」

パンゲア大陸　ヴァルハラ帝国　クラブ・ダブ・ドリップ魔導師協会管轄地区　対魔導師犯罪警察組織本部

対魔導師犯罪第一軍の　<sup>スベード</sup>　<sup>キング</sup>　将軍の執務室にノックの音が響いた。

窓辺に腰掛け、肉まんを頬張りながら書類に目を通していたシェンは口をもごもごさせながら答えた。

シェン「ふあいよ」

秘書「失礼します。クラブのエースがご報告があると」

シェン「んー！」

リケ「失礼します。」

シエンは書類から顔を上げた。

シエン「お疲れさん。」

リケは滅相もないと頭を下げた。

その拍子にリケの髪からサラサラと砂が落ちた。

リケ「あ！申し訳…」

シエンはゲラゲラと笑った。

シエン「んな急がなくても、シャワーくらい浴びたってバチ当たんねえって！」

リケ「いえ、またすぐに戻りますので…」

肉まん最後の一欠けらをシエンは口に放り込んだ。

シエン「中間報告ってことね」

シエンはリケを椅子に促した。

リケ「物的証拠はありません。あくまで聞き込みによる状況証拠です。」

シエン「OK、どうぞ」

リケは主観を抜いた、人々の話した内容のみをシエンに伝えた。

シエン「…んー、いまいちギルティンとW・B・アライランスの繋がりが見えないなア」

リケ「やはりそう思いになりますか」

シエンは腕に重ね付けしている皮や木などのバングルをクルクルと回した。

シエン「…」

リケ「…」

シエンは手を止め、笑い出した。

シエン「アハハ！

こりや <sup>ウチ</sup>スピードの”とりあえず行ってみる”作戦は失敗だなあ！」

リケ 「タレコミを信じてとりあえず行ってみるってやつですか？」  
シェン 「ハハ！そうそう！

まあ、いい感じにW・B・アライランスには出くわしたら  
しいし」

リケ 「捕まえたのですか！？」

シェンは足を組んで背もたれに肘を寄せた。

シェン 「や、まだ追ってる途中。

ほんとに三人なのかも不明」

リケ 「出くわしたのに三人なのかも不明なのですか？」

シェンは苦々しく笑って何度か頷いた。

リケはその表情で状況を理解した。

リケ （トウジロウさん、部下とうまくいつてないのか…）

「まあいずれにしろ”あなたをクッションに”せずとも部下  
と距離を縮められなければなりませんね」

シェンは笑った。

シェン 「とりあえずキーテジの人たちが知ってる内容はわかったよ。

問題はその先だな」

リケは頷いた。

リケ 「ギルティンとW・B・アライランスは切り離し、

捜査対象をギルティンに絞ります。

本当に関係があればいずれW・B・アライランスにも行き

つくでしょうし。」

シェン 「うん」

リケ 「これからの方針ですが、

キーテジに来たということはヴィンディア連峰越え目的と  
仮定し、

キーテジ登山道からのルートで行きつく、大きめの町を中

心に当たって行こうと考えています。」

シエンは足の間の椅子の縁に手を置いた。  
シエン「任せる。」

ただ、町だけでなく、通行量の多いところかにも気を配って  
おいて」

リケ「ええ、そのつもりでいます。  
ではそろそろ。」

リケは椅子から立ち上がった。

シエン「…一息ついてけよ？」

リケは笑った。

リケ「一刻を争いますから」

シエンは真面目な顔でリケを見た。

シエン「キツイこというけど、

体調管理も仕事のうちだぞ。

責任感てのはそれからいいんだよ」

リケはニヤリと笑った。

リケ「お若いですね。」

シエンはキョトンとした。

シエン「？」

リケ「理想論ですよ。現実はどうもいきません。

こうしている間にも薬物汚染は広がっていますし、

頑張ってくれてる部下たちの諜報活動の事務処理は溜まっ  
ていきます。

私だけ休むわけにも行かないでしょう？」

シエンはため息をついた。

シエン「それさ、自分何のために働いてんだとか、思わない？」

リケ 「お気遣いありがとうございます。

でもねスピードのキング、

それは仕事が好きで、

その好きな仕事を全力で一生懸命やってたら、  
行き着かない考えなんですよ。充実ってやつです。」

リケはニカツと笑って執務室を後にした。

シエン「んー…」

シエンはポリポリと頭をかいた。

シエン（間違ったことは言っていないと思うけど…

おれじゃリケに説得力ないな…）

シエンは閉じたドアを見つめた。

シエン「クラブのキング」様はどこで何やってんのかねえ」

ムー大陸北部 ヴィンディア連峰

猛吹雪も止み、

膝まであった雪もまばらになり、大岩の群れの9合目と森林広がる  
8合目の間――

エオルはふと後ろを見上げた。

重たい雲が頂上付近を隠している。

エオル 「完全に悪天候は抜けたっぽいね」

前を歩くフィードはニヤリと笑った。

フィード「後は下りだけだな」

エオル「…よしのさん、大丈夫？疲れてない？」

エオルの隣にいたよしのはにこりと笑った。

よしの「はい」

エオルとフィードは同時に同じことを思った。

（…この人意外に頑丈だ…）

気圧の変化や薄まった酸素などで

普通の人間なら体調を崩してもおかしくはないくらいの標高だが、よしのは変わらずピンピンしている。

フィード「まあいい」

フィードは自分の黒いコートをよしのの頭に放り投げた。

よしの「！」

エオル「ごめん、これだけ天候がいいと条件が悪すぎるんだ。」  
あたりは大岩がまばらとなり、8合目からの森林まではまだ距離がある。

エオル「追っ手に見つかりやすくなるからね」

よしのは口をキュツと真一文字に結んで頷くと、コートのフードを目深に被った。

『居ました！

…大分ポイントからはずれています、

エオル・ラーセンと…シャンドラ・スウェフィード！

それと、もう一人…黒い布を被っているので身なりはわかりません…』

風魔法での部下からの交信。

<sup>トランプ</sup>  
対魔導師犯罪警察組織

ランス捜査隊 陣営

<sup>スピード</sup>  
対魔導師犯罪第一軍 W・B・アライ

テント内でヴィンディア連峰キーテジ登山道の地図を広げた机の上に長い足を乗せ、

椅子にもたれかかっている交信相手の男——捜査隊隊長 スピード  
の <sup>エース</sup>副将軍 市松桃次郎

ターゲットを発見したということさえ分かれば

トウジロウにとっては他はどうでもよいことなのに、

いちいち詳細を伝えようとしてくる部下にイライラしながら、

トウジロウは口を開いた。

トウジロウ「どいつがどいつやるが別にええわい、

サッサとポイントに追い込めや」

（なんだよ、ジパング人のくせに）

『…了解』

交信は切れた。

トウジロウの後ろに立ち、やりとりを黙って聴いていた秘書官リシ

ユリユーは重い口を開いた。

リシュリユー「…エース」

トウジロウ「仕事に私情持ち込むなんぞ新人以下やで。

どいつもこいつも使われへん」

リシュリユー「エース！」

リシュリユーは声を荒げた。

トウジロウ「やつかまし…なんや！」

リシュリユー「お分かりですか?!今のチームの空気!

これじゃキングがランプにいらっしやる前と同じ

ではないですか」

トウジロウは全く悪びる様子もなく返した。

トウジロウ「言われらせーやなア」

リシュリユー「キングの意図を汲んでください!」

トウジロウ「意図もクソも、

エース出動レベルやからオレが出た、

必要やから部下もつけた、

それだけやろが」

リシュリユー「本当にそれだけでしたら、

私がわざわざここにいない必要もないでしょう!?!」

トウジロウはフーと煙を吹き出し、タバコをぽとりと落とすと、  
ゲタの歯でグリグリと火をもみ消した。

トウジロウ「原因はなんや?」

リシュリユー「えっ?」

トウジロウ「”この空気”になつとる原因や」

リシュリユー「…それは…」

トウジロウ「なんや、答えられんのかい」

リシュリユーは恨めしそうにトウジロウを睨みつけた。

トウジロウはニヤリと笑った。

トウジロウ 「同じ問いをな、<sup>キング</sup>大将にもしてん。二年前。」  
リシュリユー 「…存じております」

トウジロウ 「大将も答えられへんやったなあ」

リシュリユー 「…」

トウジロウ 「代わりに答えたるか？」

リシュリユー 「…エース」

トウジロウはニヤリと笑った。

トウジロウ 「俺がジパング人やからや」

リシュリユー 「エース！」

リシュリユー は悲しそうにトウジロウを見つめた。

リシュリユー 「あなたがなんとかしようと努力してきたことは存じております。

でも、その努力の方向が間違っているんです！

同じジパング人であっても、ハートのキングにはち

やんと…」

ガンッ！！！

トウジロウに蹴り上げられた机は一瞬宙に浮き、  
グワングワンとしばらく音を立てて左右に揺れた。

トウジロウ 「…次はあれへんで」

リシュリユー はかまわず続けた。

リシュリユー 「ハートのキングと比較したわけではありません。

あなたはご自分の生まれのせいにしすぎだと言いた  
だけです。」

トウジロウは怒鳴った。

トウジロウ「聞こえへんのか？ 黙れ言うてんねや！」

リシュリユーも再び声を荒げた。

リシュリユー「いいえっ！」

あなたのためにもスペードのためにも、  
黙るわけにはいきません！」

トウジロウは椅子から立ち上がった。

トウジロウ「…なら黙らすしかあれへんなあ」

リシュリユー「！！」

「全く、なんなんだよ、あのクソジパング人め！」

「本当、”結果が全て”って感じがやな感じだ！」

「ま、クビにされたくないから大人しく従うしかないけどさあ！」

山道を獣のようなスピードで走る3つの影。

岩の森から視界が開ける直前

「仕掛けるぞ！」

三つの影は別々に散った。

エオルとよしのの前を行くフィードは足を止めた。  
同時にエオルも足を止め、背中の剣に手を伸ばした。  
エオル「…来たね」  
フィードはニヤリと笑った。

「  
　　<sup>ラス・イルト</sup>  
かまいたち！」

よしの「きゃ！」

突然周囲の岩や地面が音を立てて抉れた。

エオル「よしのさん！」

よしの「だ、大丈夫です。」

驚いただけで…」

エオル（ほっ…）

フィードは辺りを見回した。

岩陰に隠れているのか、敵の姿は見えない。

フィードはニヤリと笑みを浮かべた。

フィード「暴れるぞ」

エオル「へっ!？」

ボゴウウウ…!!

低い轟音とともに肺に響くほど空気が震え、  
フィードの両手に炎が勢いよく燃え盛っていた。

フィードは邪悪な笑みを浮かべた。

―魔法拳・グラン・デ小爆炎―

フィードは高く飛ぶとそのまま近くの大岩に拳をねじ込んだ。

ガアアアン！

大岩は鼓膜が破けそうな破裂音とともに粉々に砕け散った。  
その陰から、トランプの制服の男が一人、白目を向いてドサリと後ろに倒れた。

「――！」

（あんな近くであんな爆音……そりゃあひっくり返りもするぜ……）

耳なりがキーンと止まず、

エオルが何か言っていたが、よしのは聞こえなかった。

エオル（ああもう！よしのさんも聞こえてない！

魔法は暴れるためのもんじゃないでしょ！）

ガキン！

エオルの背後から、巨大な斧が襲いかかった。

刃物のぶつかる空気の振動で敵が背後にいることに気付いたよしのは、

反射的に後ろを振り返りかけたが、  
あわててフードを握り締め、俯いた。

ギリギリと刃物と刃物が擦れる。

エオル　（あつぶなゝ！一瞬反応遅れた！耳が使えないせいじやんか！もー！）

斧を持ったトランプは「ガキン！」と音を立ててエオルの剣を振り払い、距離を取った。

斧のトランプ（こいつ…耳が使えないせいで一瞬反応が遅れたな…！だが…）

斧のトランプ（それは俺も同じか…！）

エオル　（それは向こうも同じ…！）

エオルは手がジーンと痺れたのを感じた。

エオル　（斧か…この剣だと厳しいなあ）

エオルはため息をつくとき、小さく「前言撤回」と呟いた。

斧のトランプ「は？」

サアアア…

空気中の水分が繋がり、水滴となり、エオルの剣に集まり始めた。

斧を持ったトランプの隊員は、もっていた斧を肩に担いだ。

斧のトランプ「魔法剣か」

エオルは剣を振りかざした。

ガァン！

男が間一髪よけた、その後ろの大岩が真っ二つにかち割れた。

斧を持ったトランプ隊員は笑った。

斧のトランプ「若い割に随分精度がいいな」

エオルは剣を構えなおした。

斧を持ったトランプ隊員は黒いコートを被ったよしのに目を向けた。

斧のトランプ（やつがギルティンか？）

大男と聞いてるが…随分小柄だな…)

エオルは斧を持つトランプ隊員に飛びかかった。

ガンガンガンガン！

まばたきする間もなく刃物と刃物が離れては交差する。

斧のトランプ「魔法剣も確かなら剣の腕も確か！

勿体ねえなあ！」

エオルは違和感を感じていた。

あの大岩は両断できて、なぜこの男の斧はビクともしない？

エオル (…あれ…?)

フィード「…？」

「よそ見は禁物！」

エオルと斧を持つトランプ隊員の戦いの様子を見ていたフィードは振り返った。

フィード「…」

声をかけたトランプ隊員は笑った。

「いい目だね。」

ヒュン

声をかけたトランプ隊員の手から放たれた円盤のようなものを、フィードは軽々とよけた。

フィード「遅え！」

その時

ドドドドドド！！

フィード「！？」

円盤の端から数本の光の槍が飛び出し、何本かがフィードをかすめた。

フィードはヨロリとわき腹を押さえた。

フィード「…！」

抑えた指の間から、真っ赤な血が流れだした。

円盤はクルクルと回転しながら、声をかけたトランプ隊員の手の中に収まった。

フィードは苦笑いした。

フィード「魔導師専用道具…じゃあねえな」

円盤のトランプ隊員は笑いながら指の上で円盤をクルクルと回していた。

円盤のトランプ「ご名答」

―アーティファクト『ヴィジャヤ』！――

円盤のトランプ「こいつは熱を操る。」

男は再び円盤を投げた。

フィードは呪文を唱え始めた。

ゴオオア！

円盤の通った地面から炎が吹き出した。

円盤はフィードの周りをぐるりと回ると、

その軌跡を追うように炎がフィードの周りに広がった。

フィード 「うあつぢ……！！」

円盤のトランプ「ハハハ！

炎が熱いなんて、初めてか？

”爆炎魔法学科の問題児”くん」

フィードは口元をシャツの端で抑えながら、ギロリと円盤のトランプ隊員をにらみつけた。

フィード（こりゃ初めに1人倒しといてよかったな）

円盤のトランプ隊員は「おっと」と声を上げると、

初めにフィードに倒されたトランプ隊員に向けて手をかざした。

円盤のトランプ「クアル・ウエル強制覚醒」

フィード「げ……！！」

倒れていたトランプ隊員はむくりと頭を抱え、体を起こした。

円盤のトランプ隊員は指でクルクルと円盤を回しながら、腰に手を当てた。

円盤のトランプ「前回お前らの相手した奴らの話から、

お前ら先制がお得意だったこと、わかってっから」

起き上がったトランプの隊員が後ろから付け加えた。

起きたトランプ「チームに治癒魔法のやつを配置した。

有り難く思いな！新人ごときにこんな構成豪華すぎだぜ」

フィードはニヤリと不敵な笑みを浮かべた。

フィード「本当有り難てえおもてなしだな！

オマケにアーティファクト持ちが…2人もか…！」

エオル「フィード！」

フィードを囲う炎が目の端に入り、

エオルは”危うく”後ろを振り返りかけた。

ガンッ！

エオルの頭上には斧の頭。

エオルは寸でのところで剣を盾に両手で押さえたが

エオル（競り負け…るっ！）

エオルはその時あることに気が付いた。

刃と刃が触れ合っている部分に、

魔法剣の力がなくなり、

エオルの剣が刃こぼれを起こしている。

エオル「…！」

斧のトランプ隊員はニヤリと笑った。

斧のトランプ「アーティファクト・『スラインドの斧』。

能力は”精霊の粉碎”——つまり？」

エオルは目を大きく見開いた。

エオル「…魔法の無効化！？」

ガキン！

エオルの胸から盛大に鮮血が舞った。

よしの 「エオル様！」

斧のトランプ「ハハハ！」

まさに”魔法を切り裂く斧”！

どうだ！優等生く……………ん？」

斧のトランプ隊員はふとエオルから視線を外した。

円盤のトランプ隊員も、起きたトランプ隊員も、ある一点を見つめた。

トウジロウ 「黙らすしかあれへんようやな」  
リシュリユー 「何を…！」

「はあい」

突然、風魔法による通信が作戦室に響いた。  
それは聞き慣れた声だった。

リシュリユー「キング！」

シエン 「調子はどう？」

トウジロウ 「…何や」

シエン 「機嫌わるっ！お前リシュリユービビらすなよな〜！」

トウジロウ 「…」

トウジロウは中空を睨みつけた。

シエンはおどけた。

シエン 「あ、今めっちゃ睨んでるっしょ！？」

アハハ〜とシエンの無邪気な笑い声が響いた。

トウジロウ 「…用件は？」

シエンは声のトーンを下げた。

シエン 「リケから新情報！

W・B・アライランスの三人目のメンバーについて、  
ギルティンである可能性が低くなった。」

リシュリユー 「！？」

トウジロウ 「…理由は？」

シエン 「目撃情報！

誰も彼も三人目は女の子だってさ」

トウジロウは思わずイスから立ち上がった。

トウジロウ 「女あ！？どんな？」

シエンは淡々と答えた。

シエン 「”黒い髪の変った格好”の女の子らしい」

トウジロウは苦い顔をした。

トウジロウ 「黒い髪なんてなんぼでもあるやんけ…変った格好  
つてのは？」

シエン 「民族衣装ばいけど、どこのものはわからないらしい」

トウジロウは煙草を箱から取り出しおもむろにくわえた。

トウジロウ 「…」

シエンは声のトーンを上げた。

シエン 「参考になったー？」

トウジロウ 「ならへん。」

シェン 「あそ」

トウジロウは煙草に火をつけた。

トウジロウ 「一つわかったことは、」

リシュリユー「……」

トウジロウ 「この”とりあえず作戦”は失敗やつたいうことやな。この部隊を”エース出動レベル”から下げて今動いてるやつらに任すわ。

ギルティンは別で追う」

シェンはため息をついた。

シェン 「まあ、せつかくだから一回戻って体制立て直そう。

ちなみにそれは、今の部隊の任務が終わってからな。隊長はお前なんだから、最後までやれよ」

トウジロウは小さく舌打ちした。

トウジロウ 「焦らなあかんやろ」

シェン 「リケが調べてる。

スピード（うち）は手がかり失ったんだ。

無駄に動くより、目の前の仕事をついでに片付けたほうが効率いいじゃん。」

トウジロウ 「はあ！？異議ありや！」

ほとんどトウジロウの言葉を遮るようにシェンは間髪入れずに返した。

シェン 「ダメ！認めない。

リシュリユー！よろしくね」

リシュリユー「はい……！」

通信は切られた。

トウジロウ 「……」

リシュリユー「さて、”キングの意図”を再確認したところで……」  
トウジロウ 「……自分らトランプの仕事を何や思てんねん、なあ！？」

大きく息を吸い、リシュリユーはトウジロウを真っ直ぐ見上げた。  
リシュリユー「全ては効率化のためですよ。」

ハッキリ言いますが、あなたと隊員たちの関係が  
枷になっているんです!」

トウジロウ「ぐ…」

リシュリユーは険しい表情で締めくくった。

リシュリユー「他に異議が?」

トウジロウは煙草を投げ捨てた。

トウジロウ「…さっさとつつかまえて、戻る」

斧のトランプ「な…」

円盤のトランプ「お、女…?」

隊員たちはポカンとよしのを見つめていた。

よしのは目を涙でいっぱいにして斧の男を睨みつけた。

——これは、白ゴリラさんたちのときの、あのヘドロのような気持ちとは違う——まだ、護れる!——

フィード（あんのアホ!）

起きたトランプ「ジパング人…?」

ドゴオン!

円盤のトランプ「!!」

フィードは魔法で自分の周囲の地面を吹き飛ばし、炎をかき消した。  
円盤のトランプ「やるね…!!」

フィードはよしのの元へ駆け出した。

ヒュン!

すかさず、円盤がフィードのこめかみを襲う。

フィードは自分の顔の横に、円盤に向け手のひらを滑り込ませた。

フィード      「ニアフ・グレ・ネルド  
低爆炎破」

ドガアン…!!

円盤は爆発で吹き飛び、カラカラと音を立てて地面に転がった。

次の瞬間、  
その爆発の煙の中から、起きたトランプ隊員がフィードに飛びかかった。

フィード      「!!」

ドカツ!

ズザアと音を立て、

フィードは馬乗りにも右手をひねりあげられ、取り押さえられてしまった。

フィード 「重てえな！畜生！どけよ！…！」

ギリッ…

起きたトランプ隊員はフィードの右手をひねりあげた。  
食いしばる歯の間から、フィードのうめき声が聞こえた。

…フォン！

よしのの周りに風が巻き起こった。

エオルは息をするのも精一杯という蚊の鳴くような声で口を開いた。

エオル 「よしのさ…」

よしの 「お守りします…！」

今度は、生半可な気持ちではありません…！」

よしのの周りに5つの宝珠が浮かび上がった。

斧のトランプ 「何だ…！？」

よしの 「ボウイサナ！」

ザザザザザ…

どこからともなく、しぶきが顔にかかる。

トランプの隊員たちはよしのの頭上を見上げた。

「な…」

しぶきとしぶきが集まり、それはやがて巨大な龍の形を作った。さらにしぶきが龍に集まり、龍はクジラの形となった。

ボウイサナ　――爆流攻！――

ゴオオアッ！

強烈な鉄砲水は一瞬のうちにトランプの隊員たちを飲み込んだ。

よしの　「せんゆ！！」

ボウイサナが青い宝珠に戻ると、黄緑色の宝珠が輝き出した。

黄緑色の光の中から小さな狛犬が飛び出し、エオルの傷をなめ始めた。

傷はみるみるうちにふさがった。

服を払いながらフィードは立ち上がった。

よしの　「フィード様も！」

フィード「いや、かすり傷だ。

それより、さつさとずらかるぞー！」

フィードが言い終わる前にエオルはよしのを担いでいた。

「痛え……」

「なんだったんだ」

「俺のアーティファクトでもどうにもならなかったぞ……」

トランプの隊員たちはびしょ濡れになりながら、むくりと起き上がった。

鉄砲水と一緒に、だいぶ山を下ってしまったらしい。

さっきまでいたところがかなり小さくなっていた。

そして、三人が三人同時に同じことを考えた。

——…このままではまずい——

「除隊になつてたまるかよ！」

三人はW・B・アライランスがいたところへ急いだ。

そこには真新しい血痕。

「エオル・ラーセンの血痕！これを追っていけば……！」

しかし、

不思議なことに、

あれだけの出血をしたというのに血だまり以外に血痕が残っていない。

「この短時間で手当てを……！？」

「まさか！あれだけの出血だぞ！

治癒魔法じゃなければ無理だ」

「グダグダ言ってもしかたない！とにかく探そう！」

その時――

ドガン！

遠くで爆発音。

血相を変えかけていた三人は肩をすくめた。

エオル 「フィード！

トランプのやつらに居場所教えるようなもんでしょー！

？」

フィード「うつせーな！

もうバレてんだから同じだろ！？」

「待てーっ！」

一行は先ほどとは別のトランプのチームと鉢合わせ、  
出会い頭にフィードが爆炎魔法を放ち、  
ひるんだ隙に逃げているところであった。

エオル 「…なんか…トランプの方々が徐々に集合なさってるよう  
な…」

空に飛びかかるような、ワーワーという男たちの声。

徐々にそれは増え、

そしてそれは後ろだけでなく、

横からも、

そして前から聞こえてきた。

エオル 「もうだーめーだー！」  
フィード 「おい！」

とりあえずあの山小屋に逃げ込むぞ！」

フィードの視線の先には小さな山小屋。

エオル 「何言ってるの！袋のネズミだよ！？」

フィード 「このまま行ってもな」

エオルは重苦しいため息をついた。

山小屋内――

エオルは突っ伏した。

エオル 「終わりだ…何もかも…」

よしのは小屋の隅に積み上げられた何かの詰まった麻袋の上に腰掛けた。

よしの 「…申し訳ありません…出過ぎた真似を…」

エオル 「いや、…まさかアーティファクトがあんなトンデモ兵器だとは思わなかったし

…正直助かったよ」

フィード 「まあ、いずれはバレるもんだろーしな」

エオル 「切り替え早っ！」

エオルは恨めしそうな視線を窓際で外の様子を窺うフィードに向けた。

フィード 「そんなもんだろ。」

いつまでもウジウジ立ち止まってても世の中に抜き去られるだけだぜ」

エオル 「すみませんね…っていつでも、どうすんのさ！

もう完全に取り囲まれてるよ！」

フィードはニヤリと笑った。

フィード 「ヤツらにとって、身元不明のよしのがいる限り、

少なくともこの小屋にデカイ魔法ぶち込むこたあねえ」

エオル 「うん」

フィード「後は…どう逃げるかだなあ」

エオル 「うん。」

それを今相談持ちかけたつもりだったんだけど」

フィード「籠城だな。食いもんあるし」

フィードの指の先には、よしのが腰掛けている麻袋。

よしのは慌てて立ち上がった。

エオルは麻袋の表示を覗き込んだ。

エオル 「小麦粉…多分山越えて荷物減らすために置いてったんだろうね…」

でも君、絶対「こんなもん食えるかつ！」って言うと思

うよ。」

フィード「んなこたねえ！

俺様はいざとなったら何でも食えるくらいハングリー精

神…」

エオル 「はいはい」

フィード「最後まで聞けー！」

エオルは俯いた。

エオル 「君とのこんなやり取りも…多分最後だよな」

フィード「はあ？」

エオル 「だってそうでしょ…窓の外見えてるよね？」

フィードは窓の外に目をやった。

エオル 「よしのさん、ごめん。」

君をジパングに送ってやれなくて」

よしの 「エオル様…」

よしのは立ち上がった。

よしの 「私、以前、

落ち込むのもエオル様らしさだと申し上げました。」

エオルは唐突なよしのの言葉にきょとした。

エオル 「え？うん…」

よしの 「でも、今は違いますわ！

それは落ち込みでもなんでもない、ただの諦めです！

諦めのその先に、何か得られるものがございますか！？

今のエオル様はエオル様らしくございません！！」

フィードは窓の外を見ながらニヤニヤした。

フィード 「すげー剣幕…」

よしのは我に返ったように慌てふためいた。

よしの 「…はっ！

ももも申し訳ございません！！」

エオルは笑った。

エオル 「なんか、よしのさんの言葉って、妙に説得力あるよね」

よしのは申し訳なさそうにうつむいた。

よしの 「あわわわ…ででで出過ぎたことを…」

エオルは声を上げて笑った。

エオル 「ハハハ！よしのさん、面白い！」

よしの 「ええっ！？」

フィードは2人のやり取りを楽しそうに眺めていた。

クリス 「ミヤ〜」

クリスはフィードの肩の上に乗り、窓の外を見た。

…カラン…コロン…

フィード 「おら、そろそろ本気で作戦立てっぞ！」

カラン…コロン…

エオル 「そうだね、やっぱり隊員の薄いところから強行突破かな…  
とりあえず暗くなるまで粘れたら…！」

カラン、コロン、

フィード「じゃあよしのにまた人質役やってもらって粘るか」

カラ、コロ

よしの 「なんなりと！」

エオル 「よし！決まり！」

ドカン！

エオル 「！？」

よしの 「きゃ！」

フィード「！！」

突然、小屋のドアが蹴破られた。

「何が決まったんや？」

黒髪の坊主頭に黒い瞳、  
ピアスだらけの耳にタトウで覆い尽くされた両腕、  
隊服に下駄を履いた筋骨隆々とした大男――

エオル 「あ……あ……」

エオルはその場にへたり込んだ。

フィード「なんだ、テメエ」

大男は呆れたように見下した。

エオル 「グ……グランドセブン……市松桃次郎……！！！」

よしの 「グラン……？」

エオルはトウジロウに視線を向けたまま答えた。

エオル 「……魔導師たちの師匠、スペリアル・マスターより強いと  
される、

”最強の七人の魔導師”のことだよ……」

フィードはわざとらしい声をあげた。

フィード「へえ〜！そうなんだ〜！」

エオル 「超有名人だよ……」

”最強の剣の使い手エド・アーサーの再来”、

”千年に一人の天才”……

それから……」

自分を無理やり落ち着けようと言葉を発するエオルの額は冷や汗が

滝のように流れていた。

トウジロウは煙草の煙をはいた。

トウジロウ（…ん？）

トウジロウはよしのを見た。

よしの （あら？この方、私と同じ…？）

黒い髪に黒い瞳、黄色い肌。

トウジロウはくわえていた煙草を落とした。

トウジロウ「はア！？自分ジパング人！？

こないなとこで何してんねん！？」

エオル 「！？」

（部下から報告受けてない！？）

フィード 「？」

（何だこいつ、知らねーのか？）

トウジロウは苦い顔をした。

トウジロウ（あかん…思わず驚いてもた。）

トウジロウは新しく煙草をくわえ、火をつけると、  
ふうと煙を吐いた。

トウジロウ（ま、とっつかまえばわかることやし、ええかア）

フィード 「落ち着くの早っ！」

トウジロウは煙草でフィードを指した。

トウジロウ「自分、さっきオレ知らへんみたいなことぬかしてただけ  
どな、オレ知ってんで？」

あー、どこで見たんやっただけ…」

フィードは「何言ってたんだ」という顔をした。

フィード 「そりゃあ今を騒がす犯罪組織…」

トウジロウ「そうや、トランプのインターンシップで見たな」

フィード「!!」

エオル「フィードがランプのインターンシップ？」

トウジロウはニヤリと笑った。

トウジロウ「オレを知らん言つたのんはウソやな。」

大方、そのヘタレ落ち着かすためにしゃべらそ思てんやろ」

エオルは鳩が豆鉄砲くらったような顔をした。

エオル「ヘタ……」

フィード「フン、部下に反発くらいまくってるくせに、一丁前なことほざいてんなあ」

トウジロウは煙草をくわえた。

トウジロウ「こーでも”人の心の機微には敏感やねんで?”」

エオル（嘘だ……）

フィード（絶対ウソだな）

エオルは立ち上がった。

フィード&トウジロウ「ヘタレが立った」

エオル「あのねえ……!」

エオルは静かに剣を抜いた。

エオル「さすがにキリスゼミの先輩にヘタレとまで言われたらね」

トウジロウは「ほう」とつぶやきながらニヤリと笑った。

フィードも構えた。

エオル「あなたはいくら強くても、唯一欠点がある。

それは有名すぎて情報が出すぎてることだ。」

トウジロウ「なあ、あの女がギルティンか？」

エオル（思いつきスルー……!）

フィード「……人質だ」

よしの（はっ!そうでした!人質人質……）

「た……助けてください……」

トウジロウ（人質い！？）

しかもジパング人…こらあかな）

トウジロウは笑った。

トウジロウ「ほな、人質救出は最優先やなア。

自分ら、下手に抵抗しても命保証できひんで？」

小屋の中が殺気で凍りついた。

ビリビリと、

肌が空気で千切れそうな、

少しでも動いたら内臓がひっくり返りそうな。

肺に吸い込む空気が、重い。

よしのはクリスを抱きかかえ、部屋の隅に身を寄せた。

「おいおい、うちのエースさんは無防備に小屋入ってっちゃったよ」

「俺達は小屋の周りで待機って…信用ねえよな」

「しかも、俺達退けたのは”あの女”だって、報告してないしな！」

「細かい報告はいらないつつったのはアイツだぜ！」

「ハハハ！せいぜい返り討ちにされて恥かけよ」

リシュリユー「どういうこと？」

後から降ってきた声に、  
山中でなぜかびしょぬれの三人は、  
心臓が飛び跳ねた。

山頂から重たい雲が流れて日差しを遮っては通しを繰り返している。  
風が出てきたようだった。

## 11・fact hunting(後書き)

本当に袋の鼠となつてしまつた一行。  
対するはスペードのエース・トウジロウ。

一行は無事にこの包囲網を抜けられるのか、それともついに捕まってしまうのか、

今回の本編は2月末か3月頭の土曜日に更新予定です〜！

来週2/6は11・1話更新

1 1・i 黒い三日月―転―（前書き）

1 1・xは黒い三日月のリーダー    ロロ・ウーの過去編。

その第1話「転」は転落の「転」

桃花源国　烏家<sup>ウ</sup>

元はヴァルハラ帝国領土拡大により国を追われた移民を先祖にもつ現在では優秀な道士を多く輩出する名家として、神使教を国教とする桃花源国において確固たる地位を築き上げた一族である。

ゆえに、そのブランド、プライドはすさまじい。

10年前　ロロ・ウー　13歳

道士となるべく寺院で修業を重ねること8年、

名家「烏家」の子息として修行開始前からの英才教育に加え、かねてより持ち合わせていた天賦の才も相まって、彼は当初から他より圧倒的に抜きんでていた。

ロロ自身、家の期待に応えられていることに満足していた。

家も寺院も、周囲は彼を天才として絶賛した。

…一部、修行として寝食を共にしていた同輩たちを除いては。

はじめは、当然同輩たちも  
家や寺院と見方は同じだった。

しかし、年月を重ね、思春期に入り、  
口口の”ある傾向”が同輩の目におかしく映り出す。

修行の間、乾玄学（男の修行僧の学校）坤玄学（女の修行僧の学校）  
とで

修行僧間の男女の関わりは一切断絶された。

しかし、年に一度の帰省の際や、行事の際に目に触れる女性の姿に  
少年たちは色めき立った。

ただひとり、口口以外は。

口口は全く女に興味を持てなかった。

元々彼の気質として、  
物に執着がなく、マイペースだが、  
家の期待に応え得る努力を惜しまない真面目さもあった。

反面、同輩とともにイタヅラをしたり騒いだりも同じだけ楽しんだ。  
女の修行僧たちも、優秀でユーモアもある口口に興味を持つ者が多  
かった。

女の興味が集中する口口への嫉妬か、  
女よりも自分たちという方が楽しそうな口口に、  
同輩たちは影で後ろ指を指した。

桃花源国の神使教ではご法度とされる  
ある”禁句”とともに。

口口は物にあまり執着しない性格だったため、  
その頃はさして気にしていなかった。

ただ義務として家の期待に応えるということさえこなしていればよいだろう。

そう思っていた。

そのまま驚異的なスピードで修業を終え、  
”転乾道（「転」の字を与えられた男の道士の意）”として仕事に  
就くことになる。

だが、ここでこの”後ろ指”に無頓着だったことが、  
彼の転落に拍車をかけることとなった。

11・1 黒い三日月―転―（後書き）

口口はなんと名家の坊ちゃまでした。

周りからはちやほやされ、

自分もちやほやされるべき人間だとわかっていた、  
絵にかいたような「完璧人間」だったわけですね。

友人たちの「後ろ指」とは、

坊ちゃんだった口口がどうして今の地位？となったのか、  
1話〜4話にかけて明らかにしてゆこうと思います。

口口の主観ではなく、客観的に話を進めていければと思います。

次週は2 / 13 11・2話を更新予定

11・2 黒い三日月―乾―（前書き）

乾は男の意

男らしさ

男の役割

ジェンダーアイデンティティ

ってなんだ？

W・B・Arrianceはファンタジー小説です。

11・2・黒い三日月―乾―

7年前　ロロ・ウー　16歳

道士となつて2年

その活躍は周囲の期待以上にめざましく

一族は早々に縁談を持ち込んだ。

相手は権力者の娘。

縁談はトントン拍子に進められ、

数か月でロロと娘は夫婦となった。

いわゆる政略結婚だった。

同じ時期、ロロの同輩たちもまた道士として巣立ち始めていた。

それは修業時代の同輩たちの間の、ロロに関する噂が  
今度は同僚達にも広まる原因となった。

夫婦生活が始まりしばらくして、  
娘はあることに気づいた。

ロロの女への扱いは、  
まるで教科書のように型通り、理想通りだった。

しかし、  
それは行動のみで、  
気持は全く伴っていないかった。

娘は口口に尋ねた。

「あなたから気持ちを感じられません。  
私のことを、本当に愛して下さっているのかしら」

口口はその女特有の面倒くさい質問に、  
心底面倒くさいと感じながらも、  
当然のように「是」と答えた。

しかしそれは”一族に有利となるモノ”として、という意味だった。  
女の坎は鋭く、  
娘はそれに気がついた。

うわべだけの夫婦の関係が冷え切ってほどなく、  
口口は寺院の上層部に召喚された。

「同僚たちから苦情が来ておる」

口口には心当たりがなかった。

”すべてを完璧にこなしている”

常日頃そう思っていたからだ。

「お前の同僚たちへの態度が、  
”友を超えたもの”に感じ、気持ちが悪いと」

ロロはきょとんとした。

ロロ「態度？」

上司は改めるようにコホンと咳払いをした。

「具体的には

身体への不必要な接触が多い、  
視線や言動が友との関係を超越したもののよう感じる」

ロロは誰からの苦情かすぐに見当がついた。

ロロにとって「唯一」と言っているほど、  
「完璧」を装わなくてもよかった、  
一番仲が良いと思っていた、  
ある同僚だ。

ロロは生まれて初めて「言葉を失った」という体験をした。

「つまり」

上司は押し黙るロロに侮蔑の目を向けながら続けた。

「男色の気があると」

桃花源国に広まる神使教の宗派の多くは  
同性愛を固く禁じていた。

生物の生きる目的「子孫の繁栄としており、  
それに反するという理由からだ。

言われてロロは気がついた。

同僚の苦情の意味を、  
妻の問いの意味を。

同時にロロは否定した。

一族に対して”完璧”である自分が、  
”そのような間違い”を犯すはずがない、  
これは単なる”言いがかり”だと。

話は即刻一族にも伝えられ、  
ロロは激しく非難された。

「男色などもつてのほか」  
「はやく子どもを作らないからだ」  
「同僚とは一切かわるな」  
「その同僚が悪い」

「嫁の一族に何といえは」

「家の恥」

「どうするつもりだ」

口口（おれが一体いつどんな”間違い”を犯した？）

”全く意図していないことを謂れのない理由でとがめられている。  
”

口口は自分の何が悪いのか、

どうして非難されているのか、

全く理解できなかった。

なぜなら

自分は”完璧”であり、”間違い”を犯すハズがない  
と考えていたからだ。

こうした

孤立無援の環境、

本心に耳を傾けぬまま”間違い”を否定し続ける自分、  
そして周囲への反抗心、

それは

本当の気持ちに気づけぬまま、  
口口自身を歪めていった。

口口は変わった。

現実逃避のように、ひたすら”ある研究”に没頭し、自分を蔑視する者に対してや気分によって、他人に暴力を振るうようになり、

事が自分の思い通りにならないと、ひどくヒステリックになった。

やがて、

妻から離縁され、

寺院から破門され、

一族から勘当された。

口口は一人になった。

孤独は、

誰にも正されることのない自分の歪みきつた心と日々向き合う時間を与えた。

誰にも正されることのないその時間は、

口口の歪みきつた思いを、ただただ増強させていった。

11・2・黒い三日月―乾―（後書き）

今思えば、

家で甘えられず、

子供らしくふるまうこともできず、

それができる唯一の場が友達や同僚たちだったのかもしれないね。

徐々に闇に落ちてゆく口口。

彼はどこへたどりつくのか…？

残り2話分かけて、追ってゆきたいと思います。

最後まで読むと、もしかしたら口口という人間の考え方が、  
ちよつとだけわかるかもしれない。

次回は2/20更新予定

11・3 黒い三日月―道―（前書き）

口口と過去編第3話

「道」はみち、人生、人が歩むべきもの。

シエン「あの”烏<sup>ウ</sup>家の長男が破門？”

<sup>アカデミ</sup>魔導師養成学校が夏期休暇期間に入り、  
リー・シエンは桃花源に帰省していた。

久々に会った友人たちとの飲み会の席で、  
会話の中に出てきたそのニュースはシエンに衝撃を与えた。

それだけ、道士界にとってロロ・ウーという天才への期待は大きかった。

シエン「なんで!？」

”同性愛者であるため”

友人の説明は噂レベルのものであったが、  
シエンの反骨精神に火をつけるには十分だった。

シエン「もったいねえ。何とかなんねえかな。」

とは言うものの、

シエンは道士どころか、  
神使教の敵である魔導師の学校に通っている身。

どう考えても

どうにもすることは不可能だった。

シェン「…虎の威を借りますか。」

” おれは道士をやめる理由なんざ何一つねえ ”

「転」の字を返却せず、

そのまま逃亡した口口に、

追手は日増しに激しくなっていた。

そうして、ついに廃屋に追い詰められ、

口口は絶体絶命の危機に瀕していた。

廃屋には口口の結界が張られており、

追手にそれを破れる者はいなかったが、

口口（このままだと…兵糧攻めだな…）

口口の体力は限界に近づいていた。

だが、その限界が訪れる前に、結界は破られることとなった。

口口（…！！）

廃屋の扉が開いた。

シェン「あんたが噂の口口・ウーだな？」

口口は身構えた。

シェンは笑った。

シェン「なあ、口口。神に逢ったことはあるか？」

口口（…？）

桃花源国 蓬萊地方 崑崙山山頂 蒼穹殿

この世で唯一、

天界ではなく地上に居を構える神、ハクオウキ白桜姫の住まう処。

口口の結界を軽々破り、

「神に逢ったことはあるか」と尋ねた男は、

世界で一番の”玉の輿”男、

ハクオウキ白桜姫の婚約者、リー・シェンだった。

神をたぶらかしたと世界中の非難の的である男に、

口口はその神の前に案内された。

大量の線香が焚かれた広間、

奥にはうす布の簾が掛かっており、

その向こう側には人影が見えた。

シェンは気を使う様子もなくズカズカと広間の奥に進み、  
簾の向こうに話しかけた。

シェン「ハクオウキ白桜姫！連れて来たぜ！」

ロロはシェンの何の気なしに発せられたその名前に、無意識に顔が引き締まった。

簾の端にいた女官が声を張り上げた。

女官「男！脱帽しろ！どなたの目前と心得るか！」

ロロ「…」

ロロは被っていたつば付き帽をさらに目深にかぶった。

女官「貴様…！」

「そのままで構いません。どうぞ楽に、ロロ」

低くしわがれた、だがどこか品のある声。

簾の奥に見える影からだった。

白桜姫「今日は体調がすぐれなくて、

こちらこそ悪いですが、このまま簾越しでいさせてください。  
」

ロロ「別に、その男に連れてこられただけです、

お気になさらず。」

ロロの態度も口調もそっけないものであった。

白桜姫「あら、あなた、ご説明をしていないの？」

シェンは頭をかいた。

シェン「忘れてた。」

えとな、お前を助けたいと思ってな。」

ロロの眉がピクリと動いた。

ロロ「…助ける?」

シェンは笑った。

シェン「ほら、俺神使教徒じゃないじゃん?」

ロロ（知らねー…）

シェン「でも白桜姫ハクオウキの言うことなら、

みんな大人しくなると思っ

て。」

ロロ「鼻で笑った。」

それからしばらくの間、沈黙が流れた。

ロロは簾の向こうからジロジロと視線を感じ、  
気分が悪かった。

白桜姫「ロロ・ウー」

ハクオウキ  
白桜姫の一言で長い沈黙は破られた。

ロロはようやくかとイライラしながら返事を返した。

ロロ「はい？」

女官は態度の悪いロロを睨みつけた。

白桜姫「これからあなたが選ぶ道を、私は肯定も否定もしません。」

その一言が放たれた瞬間、

ロロはあることを理解した。

シェン「ちよつ…おい！ハクオウキ白桜姫！」

ロロはにやりと笑い、脱帽して一礼した。

ロロ「お時間をいただき、ありがとうございます。」

そう言つてスタスタと広間を出た。

シェンは簾の奥に慌てて話しかけた。

シェン「何であんな突き放すようなこと言っただよ！」

白桜姫はクスリと笑った。ハクオウキ

白桜姫「ロロとあなたはそっくり。」

シエン「は？」

白桜姫「唯一違うのは、ロロは素直なところね。」

シエン「…なにそれ」

神は人を救わない。

かといって罰することもない。

ただ、そこに、絶対的に”存在するのみ”。

つまり、何が正しくて、何が間違っているか、それを決めるのは神じゃねえ。

おれだ。

おれはおれが正しいと思うおれの世界パラダイスを作る。

5年前    ロロ・ウー    18歳

以降、彼の姿を桃花源国で目にすることはなかった。

### 11・3・黒い三日月―道―（後書き）

さて、裏社会に身を投じた口口。

つーか、ここまでドラッグのドの字も出てこないですね。

この時点では口口はドラッグのドの字すら知りません。

そんな彼がどのようにして黒い三日月を結成していったのか。

次回第11・4話は2/27更新予定

ちなみにシェンの奥さんが判明しましたね。

この夫婦にもいろいろありそうです。

いちおうこの11・xシリーズには解説があります。

ここに載せようかどうか迷い中です。

…あつ！今月本編更新がない！！

すいません、本編は3/6更新予定です。

11・4・黒い三日月―楽―（前書き）

口口と過去編最終話

彼はおそらく目の前のうわべの幸せにとらわれて、  
本当の幸せをとりこぼすでしょうね。

でもとりこぼしたことにすら気付かない。  
そんなイメージ。

11・4・黒い三日月―楽―

バラダイス  
楽園

自分にとって、

何がそれに当たるのか、

裏社会に身を落してから日々自分に問いかける。

つまらない言いがかりをつけては何かとちょっかいをかけてくるチンピラども。

道術と体術を極めた道士である口口にとっては、  
蟻とかかわらない、どいつもこいつも全くの雑魚であった。

口口「蟻”潰しほど退屈なもんはねえなあ”

口口は退屈を極めていた。

見えない方向性、

同じことの繰り返しの日々。

口口（おれは一体何をしたいんだ？）

つかみどころのない焦燥感と

苦痛極まりない退屈、

それらは徐々に口口の目的意識とやる気を殺いでいった。

そんなある日だった。

いつものように”<sup>ドラッグ</sup>蟻”どもの巢潰しをしていたとき、

口口は初めて”<sup>ドラッグ</sup>魔薬”を目にした。

口口（こんなラムネ菓子に大金かけるなんざ、気がしれねえなあ）

そのように思いながら、

何の気なしに、

まだ息の合った”蟻”の一匹の口に、

そのラムネ菓子を無理やりねじ込んだ。

それからしばらくの間、

その”<sup>ドラッグ</sup>蟻”は

何かのタガが外れたように口口に<sup>ドラッグ</sup>魔薬を求めた。

そうして、やがて、

その”蟻”の周囲も、家族も、”蟻”自身も、破滅し、  
それでも”<sup>ドラッグ</sup>蟻”は<sup>ドラッグ</sup>魔薬を求め続け、死んだ。

口口はその間、どこからわいて出てくるのかわからない満足感に満たされた。

口口「…こりゃあいいや」

楽園建設の方向性が決まった。

それからの口口はすべてが順調だった。

桃花源時代に熱中していた”ある研究”も完成し、  
力づくで魔薬ドラッグの入手ルートを開拓した。

そんな力のある口口の元には、  
次々に人が集まった。

魔薬ドラッグ自体を欲しがる者や、  
金のために口口に近づく者、  
それぞれ目的は別々であつたが。

だが、  
誰も自分を否定しない、  
それどころか自分のやる悪事いへなす悪事いへすべてを肯定してくれた（よ  
うに口口は感じた）

仲間たちの作る空間は、  
口口にとって文字通り樂園となった。

魔薬ドラッグに溺れるヤツらを眺めて満足感を得、  
自分を否定しない仲間たちに囲まれ、幸福感を得た。

口口（おれが次になすべきことは一つだな）

この樂園を守ること

それがおれのすべてだ

## 11・4・黒い三日月―楽―（後書き）

←←以下本家サイトから転載の解説文

- - - - -

■ロロの「どこからわいてくるのかわからない満足感」について

ロロという一人の人間について、真面目な話をします。

もし読者の方に中高生の方がいらっしゃったら、ちょっと早い話かもしれませんが。

けど、人として大事なことなので、解説書いちゃいます。

（

ある説によると、

人間の根底にあるごくごく基本的な欲求として、

・食欲

・睡眠欲

・性欲

の3つがあるといわれています。

これは基本的に肯定されるべき欲求と思います。

このうちの一つ、性欲。

ロロの場合は、

同性愛者であるが、環境がそれを認めてくれなかったのに加えて、

自分自身も環境につられてそれを否定してしまっています。

人として、大事なことのなに。

人間の根底の欲求を抑圧しているわけですから、  
いつかのマリア先生も言っていました、  
人間、どこかにひずみが出てくるもんです。

ではロロにとってどこにひずみが生じたか。  
結論だけいうと、

抑圧された性欲が支配願望に変質してしまったんですね。

← 一方的に否定されて追い出された

← 何一つ自分の思い通りにならなかった

← 自分の欲求が満たされないストレス

← ロロ自身がストレスに気づいていないため（自分は同性愛者じゃない＋非難されるいわれはない）

ストレスを解消する術がない

← （ここで歪み）

他人を自分の思い通りにしたい

←

支配願望

といったイメージです。

その支配願望を満たしてくれたのが、  
ドラッグ  
魔薬だったんですね。

自分がしたかったことを魔薬<sup>ドラッグ</sup>がやってくれるんです。  
男たちを支配してくれるんです。

それが口口の満足感の正体です。

歪んでますね。

当然です。

人間が持つて然るべき欲求が  
他人に否定され、  
自分で否定し、  
抑え込み、

満たされないどころか表に出てこないのですから。

ただ、心のゆがみの方向性は人それぞれだと思います。

口口はたまたまこういう方向にはけ口を見出してしまった。  
ただそれだけです。

ついでに言うと、

口口は帽子が好きという設定ですが、

これは同性愛に対する羞恥心を無意識に隠すために帽子をかぶっているんです。

心の防衛反応です。

なので、

白桜姫にあの言葉をかけられるまでは帽子を目深にかぶって、

自分の心を守ろうとしていました。

あの言葉をかけられ、

白桜姫に対して心を守らなくていいことがわかった、  
それが脱帽につながるわけです。

ロロ自身はこれも気づいていません。まったくの無意識です。

なんか突然帽子をかぶると安心するなー、  
帽子が好きになったなー

とか、なんかそんな程度しか意識してないです。

なんかちよつと真面目に解説してしまいましたが、  
これが現在のロロ・ウーという人間のすべてです。

ロロの”ある研究”についてはまた後ほど明らかにします（本編になるかも？）。

ロロに睡眠薬が効かなかったのもそこで明らかになります。

ロロに限らずこの話の登場人物たちの性格は

もともとどういう性格で、どういう環境に置かれ、

どう今のものになったかを考えた上で登場人物としている人が多いです。

中にはロロのようにジェンダー・アイデンティティに何かしらの問題を抱える人も何人か出てきます。

日本ではなかなか触れにくい話ですが、

この話の裏コンセプトとして

私たちの世界の社会や個人の問題をファンタジーの世界に落としこんだら…？

というものがあります。  
なので、

ジェンダーな問題も問題にすべき大事な一つという位置づけです。  
もし「ファンタジーなのに!!」って気分を害されたらすみません。  
。

あ、なお作者は別に同性愛を否定しているわけではありません（娯  
楽として扱う気もさらさらありません）。

桃花源の風潮がそうなので、あしからず。

長くなりましたが、

こんな物語に直接関係ない駄文をここまで読んでいただき、  
ありがとうございます！

- - - - -  
- - - - -  
- - - - -

ちなみに口口のイメージ画なるものがあります。

[http://usaginonegurade.choitoppuku.com/menu/contents/wba/su  
bmain/114raku.html](http://usaginonegurade.choitoppuku.com/menu/contents/wba/su<br/>bmain/114raku.html)

この「KT」という部分をクリックしたら上と同じ解説文がある  
ので、

その一番下にいます。

あ、すいません、携帯からじゃみれないです（土下座）

どうでもいいですが、

こんなにパラダイスパラダイス言ってるなら

チーム名も黒い三日月とかじゃなくて「パラダイス」にすればよか

ったのにね（笑）

黒い三日月シリーズはあと2シリーズを予定しています。

1 2 ・ x シリーズ    ロロと少年編

1 3 ・ x シリーズ    ロロと女編

さて、次回はようやく本編更新です。

3 / 6 更新予定！

12・warmless cradle warmth(前書き)

今月の本編

最強の魔導師 トウジロウと対峙するW・B・アライランス一行。  
はたして無事に逃げられるのか!?

## 12・warmless cradle warmth

小屋中に満ちた殺気  
したたる冷や汗

ムー大陸 ナイム国南部 ヴィンディア連峰” オーバーザホロウ 乗り越えた先の絶望  
” 7 合目

木々生い茂る中にひっそりと佇んでいる山小屋  
その山小屋を囲う対魔導師犯罪警察組織の男たち――

トランプに追い詰められ、逃げ込んだ山小屋で  
フィードたちW・B・アライランスは袋の鼠となっていた。

そして、

その状況に追い討ちをかけるように  
山小屋にズカズカと入ってきたのは魔導師界最強の男――市松桃次郎

W・B・アライランスはこれまでで最大のピンチを迎えていた。

―― warmless cradle warmth（冷た  
いゆりかごのぬくもり）――

エオルは剣を握る手から脈動を感じていた。  
心臓が脈打つ度に体ごと飛び跳ねているようだった。

エオル 「フィード」

エオルは隣で共にトウジロウに向い構える相棒に声をかけた。

フィード「んだよ」

エオルはゴクリと喉を鳴らした。

エオル 「<sup>グランドセブン</sup>偉大なる7人の魔導師”イチマツ・トウジロウの武器は、  
」

フィード「さつき<sup>キリス</sup>両手剣専攻ゼミがどうのつつってたる。

要はお前と同じ両手剣…」

エオル 「の、…二刀流だ…!!」

フィードは素っ頓狂な声を上げた。

フィード「…ハア!？」

両手剣はその名の通り、

人が両手で持つ、破壊力重視の剣である。

重量があり、長さがある、または大きい剣のことを指す。

フィードはトウジロウの2メートル近くある筋骨隆々とした図体をじとつと見つめた。

フィード「どんだけ規格外…」

エオルはトウジロウの手元を見つめた。

エオル （両手剣の二刀流なんて離れ業を可能にするのが、

あの強靱な手首…！（リスト）

トウジロウはニヤリと笑った。

トウジロウ「人のことジロジロと…」

何企んどのんか知らんけど、安心しいや。

武器は使わへん」

エオル「…！」

フィード「なめやがって…！」

フィードはトウジロウの正面で勢いよく飛ぶと、  
体をぐるりと横に回転させ、

踵をトウジロウのこめかみめがけてブチ込んだ。

ガッ…

鈍い音を立てて踵が収まった先は、  
トウジロウの手のひら。

フィードは更に蹴り足の膝を曲げ、体を回し――

ガシ

しかし、フィードの動きはそこで止まった。

トウジロウは手のひらの中にあるフィードの踵を握ると、  
グルンとフィードを振り回し、

そのまま床にたたきつけた。

フィード「がはっ！」

よしの（フィード様！）

木製の床はフィードの背中通りに激しく割れ、  
フィードは床にめり込んだ。

フィードは激しく咳き込んだ。

トウジロウはさらに持ったままのフィードの足を引きずり――

エオル「させるか！」

エオルはトウジロウに向け剣を振った。

トウジロウは軽々とそれをよけ、  
その弧は音を立てて空を切った。

瞬間

ドガッ

トウジロウはエオルに向かいフィードを投げつけ、  
フィードとエオルは激しく激突した。

エオル「いいつづつ……」

フィード「……っでえ……」

トウジロウはズンズンとよしのに近寄り、

「おら」と手を差し伸べた。

よしのはカタカタと震えながら目を見開き、トウジロウを見つめた。

トウジロウ「名前は」

よしの「…染井…よしの…」

トウジロウ（…）

「…ちやう、本名や。」

ジパングに身元確認とつたるさかい」

よしの（…？）

「染井よしのです」

トウジロウ（このアマ！）

「ドアホ！確認とれへんやんけ！

本名乗れ言つてんねん！」

よしの（！？！？）

「わけわかんないこと」

「言つてんじゃねーよ、このハゲ！」

トウジロウが面倒くさそうに後ろを振り向くと  
フィードとエオルがフラフラしながら構えていた。

トウジロウ「…血イ流さなわからんらしいな」

パリッ

空気が変わった。

エオルは体の奥底の無意識が、  
ヤバイヤバイと警鐘を鳴らしているのがわかった。

エオル（…………）

剣の柄を握る手にジワリと嫌な汗が出る。

よしの「ま、待ってください…」

よしのはトウジロウの腕にしがみついた。

トウジロウ「ああ!？」

トウジロウはよしのをイラついたように見下ろした。

フィード「よそ見してんじゃねえよ!」

トウジロウ「!」

”フィードはパンチを繰り出してくる”

トウジロウはそれを受け止めようと、

フィードを見ずにガードの手を出したが、

寸でのところで後ろに飛んでそれをよけた。

”熱”がトウジロウの顔を掠めた。

フィード「チッ!」

ボゴウウ!

酸素を貪る音を立て、

フィードの手には真っ赤に燃え盛る炎。

トウジロウはニヤリと笑った。

トウジロウ「ウワサの”魔法拳”か」

トウジロウはくわえていたタバコを思い切り吸って短くし、床に捨

てると、  
新しいタバコを啜えた。

フィード（カチン！）

「余裕こいてんなよ！」  
フィードはトウジロウに殴りかかった。

トウジロウは軽々と避け、  
ついでに啜えていたタバコにフィードの炎をつけた。

トウジロウは煙を吐いた。

トウジロウ「なるほど、ライタにはええな。

いや、マッチか」

フィード「でけえ図体のくせしてちょこまかと…」

ブン！

ヒョイと体を折りたたんだトウジロウの頭のすぐ上を、  
エオルの剣が掠めた。

エオルの剣先は青く輝いている。

トウジロウは鼻で笑った。

トウジロウ「こっちは魔法剣か。

こっちのんが使えそうやな」

フィード（ブチッ！）

エオル「フィード！挑発されてるんだって！」  
フィードは笑った。

フィード「こんなおちよくられかたは初めてだぜ…！」

エオル（完全に頭に血が登ってるー！！）

トウジロウ「ハンッ！」

こないな程度で青筋立てとんのんかい。

自分ケツ何色やねん、なあ？」

フィード「うっせーんだよ！このハゲ野郎！」

フィードはトウジロウの顔面めがけて拳の炎をぶち込もうとした。

が、

トウジロウは軽々とそれを避け、

そのまま自分の拳をフィードの側頭部にぶち込んだ。

フィードは大きく吹っ飛び頭から壁に突っ込んだ。

エオル「フィード…！」

トウジロウ（…）

フィードは頭を抱え悶絶した。

トウジロウは啞えていたタバコをポイとフィードの額の上に投げ捨てた。

エオル「いつ！？」

フィード「ぶわちっ！」

フィードは慌てて飛び起き、

額をゴシゴシと擦った。

フィード「てんめ〜！」

トウジロウはフィードに背中を向け、エオルを見た。

トウジロウ「なんや、こんなもんか？今回の新人どもは」

エオルは無言で剣を構えた。

トウジロウはニヤリと笑った。

トウジロウ「目エだけはええねんけどな」

よしのは目の前のこの大男の、  
これまでの敵との明らかな違いを感じていた。

トウジロウが小屋に入ってからこれまで、  
武器を抜いたエオルはほぼ無視、  
フィードは攻撃が一つも当たらず、むしろカウンターばかり食らっている上に、完全におちよくられている。

これまでのトランプの隊員たちは、  
アーティファクト持ちでなければ武器をしてほぼ互角だった。

それをどうしたことが、  
アーティファクトどころか武器すら持ち合わせぬこの男に、  
完全に翻弄されているではないか。

よしの（いいえ、きっとお力が出せていないだけです！

狭い小屋である上に、周りが囲まれているから…）

「さすがよしのちゃん！

でもこれはそれ以前の問題だね」

——若い男の声

よしの「え？」

よしのはキヨロキヨロと辺りを見回した。  
しかし、声の主らしき姿はどこにもない。  
よしの「????」

クリス「ミャー！」

トウジロウ「ん？猫？」

トウジロウがよしのに目をやった瞬間、  
エオルは矢のごとく切りかった。

トウジロウはよしのの腕の中の猫に目をやったまま、  
軽々とエオルの連撃を避けた。

エオル（う…当たらない…！

的はこんなにデカイのに！）

トウジロウ（完つ全、教科書通りやな。  
キリス

ヤツのお気に入りにただあつて筋はええが、  
それまでや）

フィード「でやっ！」

トウジロウ「ん？」

フィードは後ろからトウジロウの背中にしがみつき、  
脇の下から手を通して腕を押さえた。

フィード「ふっふっふ。捉えたぞ」

エオル「ナイス！」

エオルはトウジロウに切りかかった。

トウジロウ「アホか」

トウジロウはくるりとエオルに背中を向けた。

エオル「げ」

フィード「どわぁ！」

エオルの剣はフィードの前髪に触れるか触れないかのところで止まり、

ほぼ同時にフィードも後ろへ飛び退いた。

そのタイミングで、

ドギヤツ！

フィードの鳩尾にトウジロウの足がめり込んだ——回し蹴り！

フィードは再び壁に叩きつけられた。

フィード「げほっ」

フィードの口から鮮血が滴り落ちた。

よしのは口を押さえた。

よしの（フィード様……！！）

フィードはよろりと立ち上がった。

エオル「フィード！」

フィードは煙草に火をつけた。

トウジロウ「今で肋骨イツたな。

呼吸がおかしいで？肺にでも刺さったんちゃう？」  
トウジロウはニヤリと笑った。

エオル「フィードッ!」

フィード「く…げほっ…口切っ…ただけだ」

エオルは唇を噛んだ。

エオル（明らかに苦しそうじゃなか…このお婆か!）

トウジロウ「降参しや。ほなら病院くらい連れてったるで」

エオルはフィードを見た。

明らかに病院に連れて行かなくやバイ——だが、その射るような赤い目は死んではいなかった。

エオルは剣を構えた。

トウジロウ「死にたいらしいな」

よしの「だめ——————!!」

ガスッ!

よしのがトウジロウの後ろ頭に殴りつけたのは、  
小屋の隅にあった10キロの小麦粉。

トウジロウは頭を擦りながらよしのを睨みつけた。  
トウジロウ「…って~~~~~!」

何すんねん、このクソアマア!」

しかし、振り返った先は白い煙。

トウジロウ「！」

殴った衝撃で袋から小麦粉が漏れ、それはもくもくと小屋中に広がった。

トウジロウ「…はっ！」

トウジロウの口の先には火のついた煙草

部屋中に広がった小麦粉の煙

慌ててタバコの先を握りつぶそうと手を伸ばしたが、

煙草の火はジジッと音をたて――

ドガアン…！！！！

山小屋は粉々に吹き飛んだ。

小屋の周りにいた隊員たちは思わず身を屈めた。

しかし、爆風の一つも来ない。

変わりにヒヤッとした空気が流れてきた。

「…？」

隊員たちは恐る恐る目を開けた。

顔の前にあつたのは巨大で分厚い氷の板。

——氷雪魔法” 氷縛結界”  
フロストフラワー

敵を氷付けにする魔法——

その氷付けの周りには蓮の花びらのように氷の板ができるのだが

（爆発の熱風でもびくともしないなんて…なんて魔力だ！）  
（つーか、あとちょっと小屋に近かったら俺たちまで氷付けじゃなかよ！）

リシュリユーはゆっくり目を開けた。

屋根のようにそびえる氷の板を通して太陽の光がキラキラと乱反射していた。

リシュリユー（フロストフラワー 氷縛結界の花びらでみんなを守った…  
この魔法にこんな使い方…）

リシュリユーはハッとした。

リシュリユー「トウジロウー！」

リシュリユーは蓮の花のように重なる氷の板をいくつかヒョイと乗

り越えた。

花の中央部は

巨大な氷の蕾を中心に小屋のがれきが散らばっていたり、氷に埋まったりしており、

爆発の衝撃の激しさが伺えた。

リシュリユーは血の気が引くのを感じた。

慌てて近くの瓦礫をどかした。

リシュリユー「トウジロウ！トウジロウッ！！！」

トウジロウ「やかましいわい、こっちや」

リシュリユーの後ろの瓦礫がガラガラと崩れた。

中から煤と傷だらけのトウジロウが不機嫌そうに現れた。

リシュリユーはホッとした。

リシュリユー「…エース…ご無事で…！」

トウジロウはゴホッと一度咳き込んで口から黒い煙を吐くと、蕾のてっぺんを見上げた。

トウジロウ「やられた」

トウジロウの視線の先——蕾のてっぺんには、白い煙とともにシューと音を立て、大きな穴が開いていた。

リシュリユー「！？」

エースの氷を！？」

トウジロウ「…戻る」

この男がこの場で言いそうにない発言に、リシュリユーは目を丸くした。

リシュリユー「え…!？」

まだ近くにいるかもしれないのですよ!？すぐに他の隊員を」

トウジロウ「あかん、追うな」

リシュリユー「!?!？」

トウジロウはヤレヤレと煙草に火をつけた。

トウジロウ「…こら”いくつか”報告せなあかんわ」

リシュリユー「…?」

数日ぶりに雲一つない晴天。

積もった新雪。

ザクザクと音を立て、男は数メートル前の少年を必死で追っていた。

「坊や!そんな格好でこんな雪山の中!危ないよって!」

飾りのついたマントを頭からスッポリと被った褐色の肌の少年は素足でサクサクと雪の中を進んで行く。

「坊や！お父さんかお母さんは？」

少年は無言のまま進んで行く。

やがて、少年は立ち止まり、地面を指差した。

男はゼーゼーと息を切らし、やっとこさ少年に追いつくと、少年の指の先に目をやった。

「！！」

一部だけすっぽりと雪が溶け、覗いた地面のその上に、3人の男女が倒れていた。

「これを教えようとしてくれたんだね……！」

語りかけた言葉は虚しく宙に消え、男の目の前に先ほどまでいたはずの少年の姿は、どこにも無かった。

パチパチと暖炉が弾ける音。

心地よい暖かさに

エオルはふと目を覚ました。

目の前は温もりある木の天井。

視線は自然とオレンジの光差す暖炉に向いた。

暖炉の前には火を眺めるよしのと、その膝の上で気持ちよさそうにゴロゴロと鳴くクリス。

エオル「…よしのさん、大丈夫…？」

よしのはパツとエオルのほうを振り返ると、  
今にも泣きそうな顔で駆け寄った。

よしの「私は怪我一つございません。

御加減はいかがでございますか」

エオル「平気。ここは？」

よしの「……少し山を登ったところの集落のようです。

ここの方に私たち、助けていただいたのですよ」

エオル「……？トランプから？」

よしのは困ったように目を伏せ、首を横に振った。

よしの「それが……ここよりさらに上で、雪の中に倒れていたそうで……」

エオル（…あいつの仕業か…）

「フィードは？」

よしのはエオルの隣を指した。

よしの「まだお目覚めになっておりません」

エオルはよしのととは逆を振り返った。

ぽっかりと口を開け、寝息をたてている銀髪。

エオルはむくりと起き上がり、おもむろにフィードの顔の前に手をかざした。

エオル「…ガス欠してる」

よしの「ガス欠…？」

エオル「うん。」

魔導師って体に魔力っていう魔法使うエネルギー溜めてるんだけど、

それを使い切った、もしくは使い切った上にさらに足りない分を代わりに生命エネルギー使った状態。

…こりや三日は目が覚めないな」

よしのはよくわからなかったが、エオルから「ものすごく疲れた状態」と補足され納得した。

よしの「…あ、お腹空きましたでしょう？」

少々お待ちくださいな」

よしのはパタパタと部屋を出た。

エオルは天を仰いだ。

——…剣すら抜かせることができなかった……——

エオルはしばらくの間固く目を瞑った。

そしてベッドから降りると窓の外を見た。

暗い。

夜のようだ。

窓から漏れる光が地面に積もる雪をオレンジ色に照らしていた。

エオル「……………何も、できなかった……」

ポツリと言葉が漏れた。

その蚊の鳴くような声は暖炉の立てるパチパチという音にかき消された。

… かのようには思えた。

「全くその通りだな」

—— 若い男の声

エオル「!？」

エオルは暖炉を振り返った。

暖炉の前には気持ちよさそうに丸まっているクリスマスしかない。

エオル「…？…誰だ？」

「この村には気をつけるよ。

シャンドラが目覚めますまで、よしのちゃんを危険な目にあわせるな」

エオル「…気をつける？何を!？ていうか、誰だよ!」

…

声はしなくなった。

エオル（…何なんだ!?!）

エオルはグッスリ眠るフィードを見た。

エオル（フィードが起きるまで…？）

エオルは考えても仕方ないとよしのを探すことにした。

丸太を組んで作られたログハウスのような家。

暖炉の部屋をでると明かりのない廊下が続いていた。

エオル（…）

廊下を進むと、ドアから漏れる光が見えた。

笑い声が聞こえる。

よしの「ありがとうございます」

よしのの声だ。

エオルはドアを開けた。

ドアの向こうは小さな台所とダイニングが広がっていた。

「おっ！

起きたって？」

テーブルに肘をつき、中年の猟師のような髭面の男は嬉しそうな笑顔を向けた。

「あんた、まだ無理しちゃダメよ」

台所によしのと共に立つ初老の恰幅の良い女性は  
心配そうに、子どもをあやすような声をかけた。

よしのが駆け寄ってきた。

よしの「お目覚めになったばかりなのに…どうかご無理はなさらないでください」

エオルは笑った。

エオル「大丈夫だよ。それより…」

エオルは「この人たちは？」というジェスチャーをしてみた。

よしの「テーブルにおかけになっていらっしゃる方が、」

男は屈託のない笑顔で手を振った。

パウーモ「パウーモだ」

よしの「私たちを助けてくださったそうです。」

パウーモは恥ずかしそうに頭をポリポリと掻いた。

パウーモ「よせやい」

よしのは初老の女性に目を向けた。

よしの「そしてこの方がミーワルさん」

ミーワルはにっこりと笑った。

ミーワル「ようこそ！ラシャ村へ！」

エオル（ここは村なのか）

「エオル・ラーセンです。いろいろお世話になってしまったみたいで」

ミーワル「いいえ！ここで会ったのも神のお導き！ゆっくりしてって頂戴！」

エオル「え」

エオルは目を丸くした。

パウーモ「ハハハ！隠さなくたっていいさ！

ジパング人様というんだ。言わなくたってわかるさ！」

エオルは嫌な予感がした。

エオル「…何をですか…？」

パウーモは笑った。

パウーモ「何をつて！あんた”も”神使教だろ！」

よしの「あ、いえ」

エオルは慌ててよしのの口を抑えた。

エオル「アハハハ…えと、お二人も…？」

パウーモ「俺たちだけじゃないさ」

エオル（…まさか…）

ミーワル「改めて、ようこそ！隠れ神使教徒の村へ！」

間

エオルは一気に血の気が引いた。

エオル（マジですかーーーー！！！！）

パウーモ「もう一人は？」

エオル「……」 ↑ 固まり中

よしの「あ、まだ……」

パウーモは足を投げ出した。

パウーモ「そっかー」

ミーワル「お腹空かないかい？」

口の中が無意識に唾液で溢れるかぐわしい香辛料の香り。

ミーワルはテーブルに

木製のスーパボウルになみなみと注がれたシチューを置いた。

ミーワルはエオルにつこりと笑顔を向けた。

エオル「あ……ありがとうございます」

シチューの暖かさが胃に染み渡った。

パウーモ「しつつかし、なんだってあんなところに倒れてたんだい？」

エオルはシチューを口に運びながら答えた。

エオル「それが、よくわからなくて」

パウーモはため息をつきながらテーブルに突っ伏した。

パウーモ「あんたもか」

エオル「……よしのさんも？」

エオルは横に座っていたよしのを見た。

よしのはうつむいた。

よしの「はい…」

エオル「…」

エオルは手を止めた。

エオル（よしのさんがイチマツ・トウジロウを小麦粉の袋で殴って、小麦粉が舞い上がって真っ白になって…それから…）

…記憶がない。

エオル（…あれ？本当にわからない…）

パウーモ「あの子どもも連れなのかい？

姿が見えなくなっただけ…」

エオルはパウーモを見、キョトンとした。

エオル「子ども？」

パウーモは頷いた。

パウーモ「黒い肌で…顔はマント被ってて見えなかったけど…」

よしの「…!!」

エオル（黒い肌、マントで見えない顔…それってまさか…）

——チエシヤ猫!?!——

パウーモ「登山道からかなり外れてたし、

普段この村の人間も用事なんてない所だったから、  
あの子いなかったらあんたら死んでたよ」

エオル「…!」

よしの（…また…助けていただきました…）

パウーモ「あの子は大丈夫なのかい？」

エオルは笑ってみせた。

エオル「ええ、放っておいていただいてかまいません」

パウーモ「？」

そう言うなら…」

ミーワル「そうだ！」

ミーワルは手をたたいた。

ミーワル「よかったら天使様に会っていかないかい？」

よしの「…天使様？」

あの、誰かが亡くなった時に飛んでくる…？」

エオルは砂漠でラプリーと共に助けた天使のことを思い出した。

パウーモは笑った。

パウーモ「その天使様のずっと上の階級の天使様さ！」

エオル「…天使、様の階級？」

パウーモとミーワルはきよとした。

ミーワル「なんだい、天使様の階級について触れない宗派なのかい？」

エオルはギクリとした。

エオル「えええ…ええ」

（”悪魔の階級”についてなら詳しいんですけど…）  
パウーモはヤレヤレと口を開いた。

生き物が死んだときに魂食べにやって来るのが一番下の”エンジェル”。

通常は魂を食べたエンジェルは胎児に入り、それが胎児の魂となる。

しかし、魂を食べる際、  
一つの魂を多くの天使が食べるため、  
魂を食べた天使と魂は1対1とはならない。

つまり、胎児の数と天使の数も同等にはならない。

胎児に宿れなかった天使はまた他の魂を食べる。

そうしていつまでも胎児に宿れず、

ただ魂を食べ続け肥大化した天使を、

魂を食べた数に準じてさらに階級を上位のものとしている。

エオル——パウーモさんの話を要約するとこんな感じが…

どこをどうしたら信仰の対象になるんだか…理解できない。

）

エオルはよしのを見た。

エオル（…よしのさんだったら理解できるんだろうなあ）

よしの「…」

（…魂を食べる…た、大変失礼ですが…）

（こ、怖い） ↑ドン引き

ミーワルは目を輝かせた。

ミーワル「ね！どうだい！？」

せつかくジパングからいらっしやったんだし、ね？」

よしの「…えつと…」

エオル（あ、困ってる）

「あのー…明日とかでもいいですか？

疲れが残ってて…」

ミーワルは笑った。

ミール「そうだよね！ごめんごめん！

じゃあ明日の夜に」

エオルは違和感を感じた。

天使は日光の下じゃないと活動できないという知識はあったからだ。

エオル「…どうして夜に？」

パウーモ「ほら、日中は活動してるだろ？

この村の教会を寢床にしててさ、夜に休みにやってくる

んだよ」

エオル（へえ！そういうものなんだ…ってあんまり興味はないんだけど…）

「そうですか、ではせっかくなのでぜひ」

夜も更け、村の明かりも消えた頃――

雪に月明かりが反射して、仄明るい。

外気を吸い込むと鼻の奥が痛い。

吐く息は白すぎて、視界を邪魔する。

小屋の裏庭に出たエオルは剣を抜き、静かに構えた。

風の音しかない。

目を閉じる。

瞼の奥には

山小屋の天井に届くんじやないかというあの威圧感

タバコの煙

黒い坊主頭

不敵な笑み

ブン！

エオルは頭の中を振り払うかのように剣を振った。

エオル「……」

だが、脳裏に焼き付いて離れないあの、——恐怖感

絶対的に力の及ばないあの、——無力感

エオルはしゃがみこんで俯いた。

エオル（ダメだ…完全に気持ち折れてる…のがわかる…）

こういうことを自分で気づいてしまうことほど、やっかいなものはない、とエオルは思った。

辺りに静寂が立ち込めた。

ザク…ザク…

エオル「？」

こんな、誰もが寝静まる真夜中に雪を踏む音。

しかも、一人や二人じゃない。

ふと、エオルは小屋の影から村の広場に目をやった。

村の人々が大勢出てきており、村の奥に集まっていった。

エオル（こんな時間に…？）

エオルは何の気なしに気づかれないうち後を追った。

人々が集まった先は村から少し外れた所にある他より大きめのログハウス。

そのてっぺんには十字架の飾り。

エオル（教会…ああ、礼拝ってやつか）

しんと、雪が降り始めた。

エオルは体を震わせた。

エオル（寒っ！）

そういえば、考え事をしながら外へ出たため、まともな上着すら着ていない。

エオル（戻ろ…）

「おお…天使様…」

「なんと神々しい」

「神使教に幸あれ」

教会の中は異様な熱気に包まれていた。

その奥の暗がりで、蠢く巨大な影。

影は口を開いた。

「村人以外の匂いがする」

ミーワルは嬉しそうに手を上げた。

ミーワル「うちに！うちに今ジパング人様と、おつきの人がいるんですよ」

影はミーワルを見た。

「食べたい」

ミーワル「え？」

「ジパング人と、付き人の魂、食べたい」

パウーモ「！！」

ミーワルは笑った。

翌日は少し吹雪いていた。

ミーワル「おはよう！よく眠れたかい？」

エオルは眠り眼を擦りながら眠たい体を起こした。

エオル「あ…はい」

エオルは隣のベッドを見た。

フィードは相変わらず大口を開けて寝ている。

ミーワルはニカツと笑顔を向けた。

ミーワル「朝ご飯できてるよ」

ダイニングにはテーブルに座るよしのと三人分の料理。

エオル「あれ？パワーモさんは？」

ミーワル「今日はおとなり」

エオル「？」

ミーワルは「あれ？」という顔をした。

ミーワル「あの僧侶でさ、ローテーションで村中の家に泊まりに行くのさ」

エオル（そ…そういう風習なんだ？）

「あ、ああ！僧侶だったんですね！パワーモさん」

ミーワル「もう一人の子はまだ起きないのかい？」

エオル「ええ、でももうじき目覚めますよ。  
すみません、お世話になってしまって」

ミーワルは笑った。

ミーワル「何言ってるんだい！神使教徒同士じゃないか！」

エオルとよしのは複雑そうな顔を見合わせた。

暖炉の部屋――

よしのはフィードの布団をかけ直した。

よしの「大分顔色もよろしくなって参りましたね」

エオルは荷物を漁りながら「うん」と簡単に相槌を打った。

エオル（何気にちゃっかり無事だ）

荷物から取り出したのは世界地図。

エオル「ちよつと、ここがどの辺りなのか聞いてくるね」

よしの（あ…そうでした…次どうするか、決めないといけませんよね…）

エオルが部屋を出ようとしたとき、

コンコン

窓を叩く音。

2人は窓を見た。

よしのは窓を開けた。

よしの「パワーモ様！どうされました？」

パワーモはヨイショと窓から部屋に入って来た。

パワーモはズカズカと部屋を進み、フィードの顔を覗きこんだ。

パワーモ「もう一人はー…まだ起きてないみたいね」

エオル「ど…どうされました？」

パワーモはひょうきんな顔を引き締めた。

パワーモ「あんたら、夜になる前に、

誰にも見つからないように村を出な」

よしの「！？」

エオル「…何か理由が…？」

パワーモ「…傾倒は人を盲目にする」

よしの「？」

エオル「？」

パワーモは暖炉の前に座り込んだ。

パワーモ「この村は、魔法圏から追われてきた人たちの集まりだ」

エオル「…」

パワーモ「この、食べ物もろくにない厳しい環境で”自分の信念しんいん”  
を通さざるをえない、

みんなそんな状況に心が折れかけてた」

パワーモは暖炉に目をやったまま続けた。

パワーモ「そんな時だ、天使様がやってきたのは」

エオル（ん…？）

パウーモ「村中が喜んだよ。

天はこんな状況でも信仰し続けた我々を見ていてくださった、ってね」

エオル「…天は見ていてくれたとか天使様とか、

もしかして一般的な神使教とは違います？」

パウーモは首を振った。

パウーモ「初めは、そう、全くの”ジパング正教”よりだったんだ」  
エオル（ジパング正教??）

「えーと…」

パウーモ「ん？」

ほら、”すべては神の思し召しだから受け入れる”ってやつさ」

エオル（ああ、俺が知ってる神使教のことか）

パウーモ「それが、

魔法圏からの迫害やこの厳しい環境から”パンゲア聖教

”にみんなの考えが変わっていった」

エオル（パ、パンゲア聖教??）

「ええーと」

パンゲア「いや、だから神は天から我々を見ていてくれて、

信仰を続ける者を救ってくださるって考え方の神使教。

パンゲア大陸の神使教徒たちの考え方がこれだ」

エオル（い…いろいろあるんだ）

パウーモ「宗派が変わっても、信仰心さえ変わらなければいい、そう思ってた」

よしの「？」

エオル「思っていた？」

パウーモは暖炉を向いたままだったが、  
パウーモ自身はすでに暖炉を見つめてはいなかった。

パウーモ「立派な建物が欲しい、

食べ物をたくさん貯めていて欲しい、

…誰々の魂を食べたい」

エオルは昨日見た村はずれの教会を思い出し、  
よしのは村中に点在する雪室を思い出した。

パウーモ「みんなは、

天使様の言うことを何でも叶えるようになっていった…

天使様に気に入られたくってね」

エオル「ちょ…今魂がどうとかって…」

パウーモは固く目を閉じた。

エオル「いくら気に入りたいからってそんな…！」

パウーモ「…悪気はないんだ、みんな。

根底にあるのは”救ってほしい”って、ただそれだけな  
んだよ」

エオル「…間違ってますよ…！」

パウーモは悲しそうに笑った。

パウーモ「何が正しくて何が間違いか、

それを決めるのは”文化”だよ。

あんたらの神使教と、この村の神使教は、”文化”が違  
う。

それだけだ」

”神使教”というものを、少しでも理解していれば、反論の一つでもできただろうに。

エオルにはこれ以上反論の余地はなかった。

よしのは胸の前で祈るように手を組んだ。

エオルはこれ以上の意見をあきらめた。

エオル「…それで、すぐここを出てけというのは…？」

パウーモは頷いた。

パウーモ「天使様があんたらの魂を食いたいと言っておった」

よしの（…！！）

エオルは苦い顔をした。

パウーモ「みんな天使様の言うことを聞くつもりだ！」

エオルはパウーモを探るように見つめた。

エオル「なぜそのような助言を？」

あなたもこの村の神使教徒でしょう？」

パウーモはニコリと笑った。

パウーモ「この村の”ではなくってさ、

俺は”神使教”の神使教徒なんだよ」

エオル「…言ってる意味がよく…」

パウーモは笑った。

パウーモ「ハハハ！まあそのうちわかるって！まだまだ敬虔さが足りないよ！」

エオル「…」

パワーモ「さ、早く支度を！」

コンコン——ドアをノックする音

エオル「！」

よしの「！」

ミーワル「ちよつといいかい？」

パワーモ「やつべー！ミーワルさんだ！

ちよつと俺、隠れるわ！」

言うとパワーモはヒョイと窓から飛び出した。

ミーワル「あれ！こんな寒いのに窓なんか開けちゃって！」

エオルは慌てて窓を閉め、苦笑いした。

エオル「冷たい空気吸い込めば、コイツも目覚ますかなと思って…」

エオルはフィードに目をやった。

ミーワルは笑った。

ミーワル「そうかい。」

ところで、昨日話した天使様の件なんだけど」

ギクリ

ミーワル「今晚でいいよね？」

エオルはとりあえず愛想笑いした。

エオル「今晚ですね、お願いします」

ミーワル「そうと決まれば！」

せつかくこの村に来たのも何かの縁！宴をしようって話  
になっててさ！」

エオル（……！

人が一カ所に集まる！抜け出すには好都合！

ミーワル「よしのちゃん、料理うまいから貸してくれないかい」  
エオル「え」

ミーワルはにつこりと笑った。

ミーワル「いいだろう？」

エオル「いや、それはちよっ……」

よしの「はい！ぜひ！」

エオル「！！？」

ミーワル「そうかい！じゃあ早速……」

よしの「その前に、身支度をしたいので後からお伺いしても構いませんか？

この服は大切なものなので」

よしのは自分のスカートの端をヒラヒラとさせた。

ミーワル「そうなのかい！じゃあ後で台所に来とくれよ」

ミーワルは部屋を出た。

エオル「よ……よしのさん……？」

よしのはエオルを見た。

よしの「私、あの方たちの目を覚まして差し上げたいです」

エオル「……どうやって？」

よしのは目をパチクリとさせた。

よしの「それは……ええと……」

エオルはため息をついた。

よしの「あう……す、すみません」

エオルはクスツと笑った。

エオル「あ、いや、今のはそういう嫌な意味じゃなくて」

よしの「？」

エオルはフィードを見た。

エオル「俺も、だんだんよしのさんのこと、わかってきた」

よしの「????」

エオル「本当に目を覚ませるかにはわからないけど、

よしのさんの考えに乗った！

どうしたらいいか、作戦立てよう」

よしのは気恥ずかしそうに笑った。

よしの「ありがとうございます」

よしの「文化の違いとおっしゃっておりますが、

もともとはそうじゃなかったと思います。

だって、あんなに良い方たちでいらっしやいますもの」

エオル「けどミーワルさんたちにとっては救いに等しい天使様のご意見だからねえ…」

ただ、腑に落ちないのは”天使”って存在の位置付けだ。

なんでそこまで傾倒するような存在なのか…

魔法圏だと、天使はただのライフサイクルの一歯車に過ぎ

ない」

よしの「天使の位置付け…」

パウーモ「それはねー」

エオルとよしのは飛び跳ねた。

よしの（いつの間に…）

エオル（バレた…！？）

窓はいつの間にか開いていた。

パウーモ「天使がいないと、新しい命は生まれない、

つまり命を司る神のような存在、

ようは無条件で奉るべき存在。ご理解いただけた？」

パワーモはにつこりと笑った。

エオル「は…はい…」

よしの「あの…」

パワーモはよしのを見た。

パワーモ「ジパング正教はもつと受け身だと思ってたけど、なんか魔法圏チックだな」

エオル（ギクリ）

「どどどどこが…」

パワーモ「いやさ、

問題があつて、それに対して”何かしよう”っとそこがそれっぽいなと思つて」

よしのはキョトンとした。

エオル「ええと、それはどうも」

パワーモ（…）

パワーモはクスリと笑った。

よしの「…」

パワーモ「で、どうしようつて？」

手伝えそうなら手伝つよ」

エオル「いいんですか？」

パワーモは口を尖らせた。

パワーモ「手伝えそうならつていったじゃん」

エオルは「ははっ」と笑った。

エオル「そうですね、」

一呼吸おいて、エオルは真顔になった。

エオル「天使って言葉を話すんですか？」  
パウーモ「？」

質問の意図は？」

エオル「言葉を話し、

死者を待たなくとも魂を手に入れる方法を思いついた。

天使に…失礼ですけどそこまで知能があるとは思えない」

パウーモは身を乗り出した。

パウーモ「つまり、あれだ。

天使を追い出せばみんな目を覚ますと？」

エオル「あ…まあ、結論を言えば」

パウーモは眉根をよせた。

パウーモ「歯切れが悪いね、何？」

エオル「俺、パンゲア大陸出身なんですけど、いるんですよ」

パンゲア「？」

よしの「？」

エオルは膝に寄りかかって手を組んだ。

エオル「化けて騙す魔物ってやつが」

パウーモ「…なるほど」

エオル「まあ、まずはその天使様を拝みにいかないと始まらないけど」

よしのはパウーモを見た。

よしの「…パウーモ様」

パウーモはニヤリと笑った。

パウーモ「それは手伝えそうだね」

エオル「あなた方の大切な天使様を疑ってるのに？」

パウーモは足を投げ出した。

パウーモ「あれは天使かどうかは正直わからない」

エオル「え……」

パウーモ「たださ、

俺はみんなと苦労してきてさ、なんて言うか、限界を感じちゃったんだよね」

よしの「限界？」

パウーモは天井を見つめた。

パウーモ「説法ゆめで心げんじつは救えるって」

「でも、だめだった……みんな絶望の淵に立たされた。けど、あの本物かどうかからない天使はどうだ？  
一目でみんなの折れかけた心に希望をもたらした」

エオル（……そっか……）

よしの「……」

パウーモ「でも、やっぱり違うよな、

人の魂奪ってまで、救われようなんて、違う」  
パウーモは固く目を閉じた。

村のみんなが天使の要望を叶える様を、ただ見ることしかできなかった自分を思い出した。

ふと、手のひらに暖かいものが乗せられた。

パウーモは目を開けた。

よしのがパウーモの手に優しく手を重ねていた。

よしのは複雑そうに微笑んだ。

よしの「人が何を差し置いても救われたいと思うのは、

人が生ける物である証拠。

間違っているなんてことはありませんよ」

パウーモ「……」

パウーモはよしのに向かい正座し、手を合わせて頭を下げた。

パウーモ「……有り難きお言葉……」

その声は震えていた。

エオルはよしのを見た。

エオル「……」

——この人、すごい……！——

よしの「そろそろミール様のところへ行かなくては」

エオルは微笑んだ。

エオル「よろしく」

パウーモ「お願いします」

部屋を出てドアを閉じ、

独りになると、

よしのはコッソリとドアに額を寄せた。

よしの（…）

あのトランプの男が放った言葉が頭から離れなかった。

” 本名名乗れ言つてんねん！ ”

よしの（私は…一体誰なの…？）

「よしのちゃん？どうかした？」

声のするほうに目をやると、

ミールが心配そうな顔つきで歩いて来ていた。

よしのはパンと両頬を叩いた。

ミール「ど…どうしたんだい？」

よしのは笑った。

よしの「部屋が暖かくて眠くなつたみたいです。大丈夫ですわ」

——そうです、今は目の前のことだけを…！

よしのはミールとともに台所に向かった。

ヴィンディア連峰” オーバーザスレンタ 乗り越えた先の希望” 一合目

ラプリー「ゼー…ちょ…ちよつと…」

ラプリーの数歩先に行くヤクトミは振り向いた。  
ヤクトミ「休憩すつか？」

ラプリーはムツとした。

ラプリー「べ、別にそんなんじゃないわよ！」

ラプリーはズカズカと早歩きでヤクトミを追い抜いた。

ヤクトミ（面倒くせーやつだな）

「…俺疲れたから休憩したいな」

そう発言するヤクトミは息一つ切らしてはいなかったが。

ラプリーの目が輝いた。

ラプリー「しょ、しょうがないわね！」

ラプリーは近くの岩に腰掛けた。

ヤクトミはラプリーに水筒を投げ渡し、自身も近くの岩に腰掛けた。  
ヤクトミ「そう焦んなよ、先は長いんだから。」

早くつくことより、ペース配分考えて進まないともたねえぞ」

ラプリーはそっぽを向いた。

ラプリー「わかってるわよ！そんなこと！」

ところで、こんな軽装でいいわけ！？（山の）上の方白

いけど!」

ヤクトミは笑った。

ヤクトミ「ああ、平気だよ。

俺、防寒用の魔法持つてるから」

ラプリー「あっそ! ならいいけど!」

ヤクトミ（本っ当にかわいくねえ!）

ラプリーは再び白くなっている山の上のほうを見た。

ラプリー「フィードさんとエオルさんも、あそこを越えたんだよね

…」

ヤクトミ「多分な」

ラプリー「何日くらい前に越えたんだろうね」

ヤクトミ「まあ2人とも魔導師だしな、

普通の人間の三分の一くらいで行けるだろ」

ラプリーはムツとした。

ラプリー「悪かったわね! 普通の人間で!

あんた1人だったら三分の一で行けたんでしょうけど!」

ヤクトミ「あ、いや…」

（ええ〜! そこそうとるの! ?

俺は一体どこまで気をつけて発言すりゃいいんだよ!）

ラプリー「でも」

ヤクトミはラプリーを見た。

ラプリー「どんなに足手まといだろうが、

フィードさんとエオルさんに会ったためなら、

あたしは死んでもあんたについていくんだから!」

ヤクトミはため息をついた。

ヤクトミ「あのなあ！」

マジで足手まといと思ってたら、とっくに置いて行ってるよ」

ラプリーは不安そうな顔をした。

ラプリー「…本当に…？」

ヤクトミ「たりめえだろ！」

シャンドラのダチは俺のダチだからな」

ラプリー「…私、あんたのお友達になつたつもりはないけど？」

ヤクトミ（おいーーーーー！！）

ラプリーは岩から降りた。

ラプリー「さ！」

あたしの不安が解消されたところで、さっさと行くわよ！」

そう言つとラプリーは軽快に山を登り始めた。

ヤクトミは盛大にため息をついた。

ヤクトミ「さて」

そして山の上を見た。

ヤクトミ（自然は魔物なんかの数百倍厄介だからな…

どうあのじゃじゃ馬の手綱握って危険を回避しながら進むか…）

ヤクトミはあれこれ考え事をしながらラプリーの後を追った。



## 12・warmless cradle warmth（後書き）

なぜトウジロウがよしのを偽名だと思ったのか、それは次回の本編（4月更新）で明らかになります。

なぜ爆発の中助かったのか、  
眼を覚まさぬフィード、

謎の存在”天使様”

トウジロウの言う”報告しなきゃならないこと”とは！？  
今回の本編は4/3更新予定

来週は12・xシリーズ「黒い三日月シリーズ」の「ロロと少年編」  
第1話です。

3/13更新予定。

ところで最近小説家になろう内で話題になっていますね。

R15とかR18とか、あてはまるのかどうかわからないわ。。。

## 12・i・黒い三日月―no reason―(前書き)

今回の・xシリーズは  
ドットエックス

黒い三日月シリーズ ロロと少年編

ある日の黒い三日月アジト。

何やら騒がしい様子…

「はーなーせーよっ!」

「わっ!こら、暴れるな!」

——黒い三日月アジト

部屋でソファに身をうずめ、  
ボーっと中空を見つめて過ごしていた口口は異変に気がついた。

口口「…なんか騒がしいな…」

口口の横に立って紅茶のサーブをしていた取り巻きは、  
口口の前のローテーブルにポットを置いた。

「見てきましようか」

口口は中空を見つめたまま答えた。

口口「いいや、

ヤバけりゃ誰かしら来るだろ」

その後もしばらく甲高い声と取り巻き達の野太い声の言い争いがア  
ジト内に響き続けた。

サーブの取り巻きはしびれを切らし、口口を見た。

ロロは何食わぬ顔で

たまに冷めた紅茶をすすっては  
ぼーっとするを繰り返していた。

騒ぎは一向に収まる気配がない。

「ウーさん…出た方がよいかと…」

ロロは紅茶を一口すすると、のそのそと立ち上がった。

騒ぎはアジトの出入り口近くだった。

大勢の取り巻きが何かを取り囲んでいる。

ロロ「どうした」

ロロの一声で取り巻きたちはすぐさま押し合いへしあい道を開けた。

開けられた道の先には

首根っこを取り巻きの一人に掴まれふてくされている7、8歳ほどの少年がいた。

少年は「あ」と声を上げた。

「ウーさん…すみません、このガキが…」

少年は取り巻きを振り払い、  
ロロの前で手をついた。

「コイツ…!!」

少年「ぼくを黒い三日月に入れてください!!」

取り巻きは少年を床に押さえつけた。

「ウーさん、すみません、すぐに追いだし…」

ロロ「いいよ、どうぞ」

取り巻きたちは一瞬時が止まった。

少年「やった!」

少年はガッツポーズした。

「何考えてるんスか!ウーさん!」

ロロ「え?今?今日のバーはどこにしようか…」

「ちーがーいーまーすっ!!」

何こんなガキ入れようとしてんですか!」

ロロはきよとんとした。

ロロ「入れようとしてんじゃねえ、  
入れたんだ、今。」

別の取り巻きが食ってかかった。

「だから、何でこんなガキなんか！」

ロロはもう騒ぎに興味がないと踵を返した。

ロロ「別に断る理由がねえ。」

俺たちの仕事はガキでもできる仕事だろ？」

取り巻きの一人がポツリと言った。

「…断る理由があればいいんスね？」

ロロは背を向けたまま

無言で手をヒラヒラと振り

部屋に戻った。

少年は仕事ができた。

言われたことは雑用だろうがきちんとこなした。

なにより魔薬<sup>ドラッグ</sup>の売買は手慣れたものだった。

少年は少なからず売上に貢献していた。

ある日、取り巻きの一人がロロに進言した。

「あいつ…<sup>ドラッグ</sup>魔薬のやりとりが妙に手慣れてますよ…  
他のチームのスパイかも…」

ロロは静かにうすら笑いを浮かべた。

ロロ「かも”は”理由”になんねえよ」

12・1・黒い三日月―no reason―(後書き)

さてさて、素人ではなさそうな少年。

ただ単に入りたかったのか、

それとも何か目的があって入って来たのか、  
はたしてこの話、どう「転」ぶか？

次回は3/20更新予定

12・2・黒い三日月―snitch―(前書き)

黒い三日月「ロロと少年編」第2話

「黒い三日月に入りたい」  
少年の目的とは…

「まいど！」

港町フアリアスの路地裏

1瓶のラムネ菓子と札束を交換し、  
少年は意気揚揚とその場を後にした。

ふと、

少年の目の前が翳った。

目の前には陰気な2人の男

「よう、景気はどうだい？」

――黒い三日月 アジト

アジトの廊下をのそのそと歩くロロ

ロロが通ると、

ガヤガヤと廊下で騒いでいた取り巻きたちは  
ピタリと静まり、壁に張り付く

ロロが去り、

再びわいわい騒ぎだしたが、

「またもロロが通りすぎ、静かに壁に張り付く」

「ロロは今、アジト内をウロウロしていた」

「あんなに動くウーさん初めて見た」

「バカ、道士なんだ、格闘技の達人のはずだぜ！…たぶん」

「機敏なウーさんとか…ぷっ」

「おい、また来たぞ！壁に寄れ！」

ところが、今度はロロは通り過ぎることなく、むしろ向かってくる

「え？」

「やべ！聞かれた！？」

「ロロ「おい」」

取り巻きたちは凍りついた

「ロロ「一人居ねえ」」

「…？一人？」

「ロロ「この間入った新入り」」

取り巻きたちは「ああ」と顔を見合わせた

「そういやここ数日見てないッスね」

「どっかでくたばったか？」

「ハハハ」

ロロ「死体でもなんでもいい、探してこい」

「え……」

ロロのその一言で、

黒い三日月のすべてのメンバーは  
少年探しに駆り出されることになった。

（あのガキ……！）

（見つけたらタダじゃおかねえ……！）

——ロロの部屋

紅茶のサーブをしていた取り巻きの一人が訊ねた。

「何だってあんなガキ……」

ロロはソファで足を組み、

ソワソワと落ち着きがない

「ウーさん、タバコ!」

取り巻きは慌ててロロの前にタバコを差し出し、  
マッチに火をつけた。

ロロはタバコをふかした。

ロロ「ガキじゃねえ、仲間だ

黙っておれのパラダイスからいなくなるのは許さねえ」

取り巻きはため息をついた

(出たよ…本っ当”パラダイスの住人”には事情無視して  
しつこいくらい固執するんだから…)

「ウーさん!」

別の取り巻きが慌ててドアを開けた

ロロは身を乗り出した

ロロ「見つけたか」

「ハイ!”紅夕暮”…!」

ロロ「くれないゆうぐれ?」

「ハイ！新鋭の魔薬チームらしく…

あのガキ、その一員だったんスよ！

マジでスパイだったんス！」

ロロは立ち上がった

「ウーさん」

ロロは指をゴキゴキと鳴らした

ロロ「おれのもん盗るなんざ、気の知れねえバカ共だ」

（…あれ…？）

ロロ「取り返す」

取り巻きたちは顔を見合わせた

（人の話聞いてましたーーーー！？）

12・2・黒い三日月―snitch―（後書き）

口口の仲間への異様な執着

これは口口の育ちにあるのかなと。

口口は生育環境や性格から若干アダルトチルドレン傾向があるのかな。

厳しい家庭で聞き分けのよい子どもを演じてきた、

子どもらしくない子どもだったんじゃないかなあ。

反面、子どもがそのまま大人になったようなイメージでも書いています。

家族に甘えられなかったからこそ

なんでも受け入れてくれる仲間に甘えている。

ただ、内面は子どもなので

自己中心性からの脱却ができていないんですね。

仲間たちは自分、自分は仲間たち。

なので、

仲間が自分の元からいなくなると、

見捨てられたと思うちゃう。

見捨てられたくないから、

仲間が去ることを許さない、許せない。

なんという自分勝手さw

口口の異様な執着はそんなところからきているのかなあとか  
考えながら書いています。

次回は口口の少年編最終話

3 / 27 更新予定！

12・3・黒い三月―peacemaking―(前書き)

ロロと少年編最終話

仲間たちの反対(?)を押し切り、少年を助けに行くロロ。  
少年の胸中は…。

12・3・黒い三日月―peace making―

「やつはそろそろ音をあげたか？」

「いいや…ちつとも。

強情なガキだぜ…」

男たちの視線の先には、  
ロープで吊るしあげられた少年。

ファンディアスの町一番の魔薬<sup>ドラッグ</sup>チーム”黒い三日月”を倒すため、  
スパイとして少年を送ったはずだった。

だが、どうしたことが、  
いつまでたっても戻って来やしない。

それどころか、

”黒い三日月”の売上に貢献している始末。

「裏切り者め…」

無理矢理魔薬<sup>ドラッグ</sup>チーム”紅夕暮”に連れ戻された少年は、  
”黒い三日月”の情報を一切割らなかつた。

「テメーがそこまでデカくなれたのは  
誰のおかげだと思ってやがる」

少年は孤児だった。

ドラッグ

魔薬チーム”紅夕暮”に拾われ、

売買のイロハを叩き込まれ、

チームの売り上げに貢献してきた。

恩はあった。

(…けど…)

黒い三日月には

ノルマはないし、

雑用の量もみんな平等、

さらには売上の分け前も、努力した分だけガキでも稼げた。

すべてが公平だった。

居心地がよい。

そして何より

『いいよ、どーぞ』

無条件で、何の迷いもなく、自分を受け入れてくれた――

たくさんの荒くれ者を従えるカリスマ性――

あの男の元で働きたい、

子どもながらに、そう思った。

(…もうダメかな…)

少年はうつむき、目を瞑った。

「頭ア！」

「頭」と呼ばれた赤髪の男、ゾクリムは  
ワイングラス片手に、札束を積み上げ悦に浸っていた。

ゾクリム「ガキがようやく口でも割ったか」

部下は息も絶え絶えに力いっぱい首を横に振った。

「黒い三日月」が「殴りこみです！！！」

ゾクリムの手からポトリと札束が滑り落ちた。

拷問部屋のドアが開いた。

ゾクリム「貴様、いい加減に手に入れた情報を吐け……！」

弱点の一つでも見つけたらう！？」

少年は俯いたままピクリとも動かなかった。

ドカッ！

ゾクリムは少年を思い切り殴った。

少年を吊るした縄は大きく揺れた。

少年はあまりの痛みに  
思わず大粒の涙がこぼれた。

ゾクリム「吐く気になったか？」

少年は泣きながら首を横に振った。

ゾクリム「クソガキが…！」

ドカツ！

ゾクリム「親のいねえテーマを拾ってやったのは！」

ドカツ！

ゾクリム「稼ぐ術を与えてやったのは！」

ドカツ！

ゾクリム「どこの誰様だ！」

パシッ！

ゾクリムの振りがざした手を、  
後ろからつかむ手。

ゾクリムの目はゆっくりと、  
自分をつかむその手の先をたどった。

手の主と目が合った。

瞬間、

ミシッ…ボキッ

ゾクリム「ギャア！」

ゾクリムの手首はへし折られた。

もだえ苦しむゾクリムを、  
その手は離さなかった。

ロロ「よくもおれのもんに手エ出してくれたな」

少年はボコボコになった顔をあげた。

少年「…ウーさん…!!」

ロロは笑った。

ロロ「ちょっと待ってな」

ゾクリム「ま、待て！

こいつはオレがお前の所に送り込んだスパイだぞ!!」

少年「!!……」

ロロは冷酷な目でゾクリムを見下ろした。

ロロ「何テメーのもんみてえな言い方してやがる」

ゾクリム「ひっ…！」

集まった”黒い三日月”のメンバーたちの中に、  
縄を解かれ、正座し、俯く少年。

少年「…スパイだったのは…本当です…」

メンバーたちから怒号が飛んだ。

「裏切り者！」

「殺そうぜ！」

少年はポロポロと泣き出した。

少年「…でも、

今は本当に”黒い三日月”に入りたいです…！！」

「ハア！？ふざけたこと言ってんじゃねえよ！」

「そうだそうだ！」

「ウーさん！」

ロロは目だけ、声を掛けてきた取り巻きに向けた。

「やっぱコイツ、助ける意味ありませんでしたね！  
とつとをやっちまいましたよ！」

□□はきよとんとした。

□□「え？何で？」

その場の全員が「何言っただ、この人は」という目を向けた。

□□は少年の前にしゃがみ込み、  
額をツンツンとつついた。

□□「なんで入ってねーことになっただよ。

おれは”どーぞ”って言ったじゃねーか」

「ウーさん！まだそんなこと！」

□□は立ち上がった。

□□「ハイ、黒い三日月での約束事その4」！  
バラタイス

取り巻きたちは反射的に復唱した。

「仲間同士での傷つけあい禁止いー！ー！」

□□は笑った。

□□「でしょ？」

「いや…だからこのガキは…」

□□はもつこのことに興味がないと踵を返した。

□□「お前らがコイツを傷つけるのは許さねえし、

”今後”、こいつがお前らを傷つけるのも許さねえ。

文句あるやついるか？」

取り巻きたちは顔を見合わせた。

「…ウーさんがそう言うなら…」

□□は「終わった終わった」と背伸びをした。

□□「はい、これで仲直り！」

少年はメンバーに促されるまで、

□□の背中を見つめ続けた。

——絶対、一生この人について行こう…！——

## 12・3・黒い三日月―peace making―（後書き）

なんだこのハッピーな感じは（笑）

ロロは一応「悪役」です。あしからず。

9・x ロロとパラダイス編（世界観？紹介）

10・x ロロと来訪者編（+αのロロのキャラづけ）

11・x ロロと過去編（ロロの人物像深み付け）

12・x ロロと少年編（仲間に対していい人っぽい話）  
ときたら…？

次回13・xシリーズは黒い三日月「ロロと女編」です。

この13・xシリーズでとりあえず黒い三日月の集中連載は終りの  
予定。

次の登場は本編か？

次週は本編13話更新。

4/3更新予定！

### 13・angelic another(前書き)

よしのの名前の秘密

なぜ一行は爆発から逃れられたのか

目覚めぬフィード

天使の正体

はてさて、どうなることやら…？

### 13・angelic another

ヴァルハラ帝国 グラブ・ダブ・ドリップ 魔導師協会管轄地区  
トランプ本部第一会議室――

木製の円卓には、

対魔導師犯罪第二軍の将軍<sup>キング</sup> ハート 市松芳也

諜報軍の副将軍<sup>エース</sup> クラフ リケ・ピスドロ―

総統<sup>ジョーカー</sup> ゼレル・ビノク・スロトモン

そして円卓の前に手を後ろで組み、真っ直ぐ前を見据えて立っているのは

対魔導師犯罪第一軍の将軍<sup>キング</sup> スヘッド リー・シエン

対魔導師犯罪第一軍の副将軍<sup>エース</sup> スペード 市松桃次郎

ジョーカーはゆっくり口を開いた。

ジョーカー「まさかお前が手ぶらで、オマケに傷だらけで帰ってくるとはな」

トウジロウはニヤリと笑った。

―― angelic another（天使のような）――

トウジロウ「同じセリフでうちのキングには爆笑されてもたわし  
シエンは思い出し笑いをこらえた。  
カグヤはシエンに冷たい視線を送った。

シェンは肩をすくめた。  
シェン「すみません」

ジョーカーは腕組みしながらため息をつき、背もたれに寄りかかった。

ジョーカー「トウジロウ…お前ともあるうものが」

カグヤ「どうせ油断でもしていたのだろう」

トウジロウの眉がピクリと動いた。

シェン「まあまあ！

過ぎたことをどうのこうのよりもさ、

これからどうするかを話そうぜ！

コイツもタダで帰って来たわけじゃないだろうし、な！」

シェンはトウジロウを見上げた。

トウジロウはカグヤを睨みつけるのを止め、ジョーカーを見た。

トウジロウ「二点報告、

一点目はW・B・アライランスの三人目のメンバーに

ついてや」

リケ「ギルティン？」

トウジロウ「いや、女やった」

リケ（やっぱり…）

トウジロウは場の全員を見渡して、一呼吸おいた。

トウジロウ「ジパング人のな」

一瞬、空気が固まった。

ジョーカー「…今、なんと？」

トウジロウ「W・B・アライランスの三人目はジパング人の女やっ  
てん」

カグヤは立ち上がった。

カグヤ「何を訳のわからんことを！」

トウジロウ「ハッ！回転遅いやツやの」

カグヤ「…何だと…！」

ジョーカー「まあまあ！」

シェン「ハイハイそこまでー！」

リケ「身元を確認する必要がありますね」

にらみ合っていたトウジロウとカグヤは同時にリケを見た。

ジョーカー（話が逸れた！）

シェン（ナイス！リケ！）

リケ「その女性に関して、何か情報は？」

トウジロウは「そうやなあ」と顎に手を添えた。

トウジロウ「おかつぱ、背えは160もない、スリーサイズは目視で…」

リケ「身元を確認するのに必要な情報をください！」

トウジロウ「…染井よしの”て名乗ってたで」

リケ「…染井よしの”さんね」

トウジロウ「偽名や」

その場の全員がトウジロウに視線を向けた。

カグヤ「なぜわかる？」

トウジロウは少しの間カグヤを見、口を開いた。

トウジロウ「ジパングの大衆演劇でな、” 染井よしの ” という登場人物が出る劇があんねん」

リケ「劇？」

トウジロウ「内容は、流れ者とその ” 染井よしの ” が結婚の約束するんだけど、

男は結局故郷が恋になって ” 染井よしの ” 捨てんねん」

リケ「悲恋劇ですね」

カグヤ「劇の登場人物と名前が同じことくらい…」

トウジロウ「転じて」

リケとカグヤは口を閉じた。

トウジロウ「恋に敗れて故郷を出た女が身元知られたときに使う名あやねん」

シエン「わざわざ ” 染井よしの ” って名乗って失恋中をアピールするの？」

トウジロウは笑った。

トウジロウ「他人はそれ以上 ” あえてふれないでおく ” という暗黙の了解があんねん」

リケ「名前がわからないと…困りましたね」

シエン「しつつかし、どうやってジパングの外に」

ジョーカー「巡礼船に紛れ込んで国外に出たか…」

トウジロウはポケットに手をつっ込んだ。

トウジロウ「ま、それしかないな」

リケ「待って！そのよしのさんは本当にグルなんですか？

魔導師とジパングの人ってそもそも接点がないはずですよね」

トウジロウは苦虫を噛んだような表情を浮かべた。

トウジロウ「初めはな、ヤツら”人質”や言うててん」  
ジヨーカー「初めは？」

トウジロウは無意識に後頭部をさすった。

トウジロウ「俺真後ろから殴られてん、そいつに」

ジヨーカーとシェンは同時に大爆笑した。

トウジロウは大爆笑する自分の上司を横目で見ながら「つまり」と  
事の顛末を整理した。

計画通りキーテジ登山道の”乗り越えた先の絶望”側の山小屋に追  
い込み、山小屋に突入した。

そこでジパング人の人質がいることを知り、人質救出を優先させる  
ことに。

ところがW・B・アライランスを追い詰めたところで

人質と思われていたジパング人に、

背後から小屋の隅に偶然置いてあった小麦粉の大袋で殴られる。

その衝撃で小屋に小麦粉が充満し、吸っていた煙草の火で粉塵爆発  
が発生。

爆発発生直前に爆発ごと犯人たちを氷付けにしようと魔法を使う。

顛末はこのような流れであった。

リケ「トウジロウさんの魔法から彼らが逃れた…！？」

ジヨーカーとシェンは笑いを止めた。

トウジロウ「それについては二点目の報告で話すわ。まずはそのジ  
パング人の件や。」

どうもそのジパング人、”アーティファクト”みたいな  
奇妙な武器を持ってるらしいてな」  
リ「らしい？」

トウジロウ「俺見てへんねん、部下が見たらしいねんけど」

ジョーカー「それを一人で小屋に突入したのか？いくらお前でも」  
シエンがタンマと手を挙げた。

シエン「あー、それなん…」

トウジロウ「俺の慢心が招いた失敗や。責任はとる」

ジョーカー「ほう？」

シエンはトウジロウの後頭部を思いつきりひっぱたいた。

シ「責任取んのは上司<sup>オレ</sup>の仕事！勝手に話進めんなっ！」

トウジロウは頭をさすった。

トウジロウ「あのな…俺には”大将の部下”の前に”グランドセブ  
ン”いうブランドがついてんねん。

どないな理由があつても絶対”失敗”を許したらあか  
ん」

シエン「人間なら失敗があつて当然だ。」

トウジロウ「大将、それは言い訳か気休めや。」

…ほんま自分の考えと違てたらすぐ噛みつく」

シエン「んなっ！？」

カグヤ「なればそのブランドを剥奪すればよかるう」

場の全員の視線がカグヤに集まった。

カグヤは冷淡な笑みを浮かべた。

カグヤ「責任をとるのдарう？」

グランドセブンの称号を返上し、”ただの部下”に成り下  
がればいいじゃないか」

トウジロウの口の端がピクリと動いた。

トウジロウ「ほざけ男女、何も呼ばれなくてグランドセブン呼ばれ  
とんのんとちゃうで？」

お前はどうか知らんけどな」

カグヤから笑みが消えた。

カグヤ「勝手に呼ぶのは周囲だが、返上は貴様個人でできるだろう？

呼ばれたくないのなら、さっさと返せ。

もともとは”グランドシックス”だったのだから、数が元に戻るだけだ」

ブチン

シェン（あ、ブチンて聞こえた）

ジョーカー（ブチンって言った）

リケ（もっっ！）

バン、とリケは机を叩いた。

リケ「話を進めましょう」

トウジロウは舌打ちし、カグヤはそっぽを向いた。

ジョーカー「何はともあれ」

ジョーカーは腕組みし、背もたれに寄りかかった。

ジョーカー「ジパング人の件は儂が預かるう」

カグヤ「（魔導師協会）連盟各国への公表はまだ行わないと？」

ジョーカーは短く首を横に振った。

ジョーカー「」よりによって”ジパング人と連むなど前例がないかな。

公表前に魔導師養成学校に一言伝えておこうと思う」

トウジロウはポケットに手をつ込み顎を上げた。

トウジロウ「俺の処分は」

ジョーカー「減給3ヶ月、その間エースの座を降りてもらう」

トウジロウ「！」

シェン「ちよつとちよつと！」

ジョーカーはシェンに手のひらを向けた。

ジョーカー「グランドセブンの称号返上は許可できんが、

しばらく”ただの部下に成り下がって”、”頭を冷やす”んだな」

カグヤは黙ってジョーカーを見た。

さらにジョーカーは「ただし」とつけた。

ジョーカー「それはギルティン逮捕の後だ。

それまでは責任をもってエースを続けなさい」

トウジロウはポケットから手を出し、真っ直ぐジョーカーを見つめた。

トウジロウ「…了解」

ジョーカーは「どうじゃ？」という顔をシェンに向けた。

シェン「んじゃあオレからも一つ」

トウジロウは嫌そうな顔をした。

トウジロウ「責任は俺が取るゝ言うてたやん」

シェンはイタズラっぽい笑みを向けた。

シェン「スピードからのバツはお前が解雇したあの三人の復職だ」

トウジロウ「ハア！？なんでそれが俺へのバツになんねん！」

シェン「面目が潰れる」

トウジロウは面倒くさそうにため息をついた。

トウジロウ「あいにく、そないうつすい面目は持ち合わせてへんわ」

シェンは笑った。

シェン「ま、”ただの部下の3ヶ月”で分かればいいさ」

トウジロウはつまらなさそうにそっぽを向いた。

ジョーカー「で？」

全員の視線がジョーカーに集まった。

ジョーカー「報告の二点目とはなんだ？」

トウジロウは顔を引き締めた。

トウジロウ「シャンドラ・スウェフィードについてやねんけど……」

ヴィンディア連峰キーテジ登山道はずれの隠れ里――

トウジロウたちトランプの追撃を”どういうわけか”逃れたW・B・アライランス一行

行き着いた先は魔法圏からの迫害を逃れてきた人々で作られた隠れ神使教徒の集落であった。

素性も知れぬ一行を暖かく迎えてくれたのは宿泊先の主ミールと集落付きの僧侶パウーモウーモ。

この集落の信仰の対象は教会に住まう天使。

魔法圏から追われ、信仰心を失いかけていた人々を元気づけた存在だが、その天使はエオルの知識にある天使とはあまりにかけ離れており、

まだ目覚めぬフィードを除いたエオルとよしの、そしてパウーモは調査を開始することとなった。

ミール家の廊下に響く足音に耳をすましながら、パウーモは呟いた。

パウーモ「こりやあご馳走だな」

エオル「そりやあ宴会ですし」

パウーモは窓を指した。

その先は外の物の輪郭がハッキリしない一面銀世界。

パウーモ「こんな環境だから、食料の確保が厳しくてね」

エオル「あ……」

パウーモは悔しそうにニヤリとした。

パウーモ「天使”様”にね、

雪室の作り方とか、罌の作り方とかをご教示いただいてここまでやってきたわけ」

エオルは黙ってパウーモの言葉を聞いていた。

パウーモ「てつきりみんなのために教えてくれるのかと思ったけど、違っただんなあ」

エオル「……まだわからないですよ」

パウーモは笑った。

日も高く登った頃、

パウーモはエオルを外に誘った。

パウーモ「教会を見に行こう、何か手がかりがあるかもしれない」  
エオルは無意識に剣を背負った。

集落の奥の一際大きなログハウス。

一歩中に入ると、

そこはエオルの知識にある”教会というもの”と何ら変わらない、

そして独特の荘厳な雰囲気包まれた空間が広がっていた。  
パウーモ「これだけのものを作るのに、みんなで苦労したんだよ」  
パウーモは大事そうに壁に手を触れた。

天使”様”の住処として、大きな教会を建設することになり、  
”それまでの疲弊”でバラバラになっていた人々の心が再び団結した。

みんなで励ましあい、協力しあい、年月を惜しまず注力した――  
パウーモ「…宝だ」  
ポツリと、パウーモは誰にも聞かれることなく呟いた。

エオルは教会の奥へと歩を進めた。

エオル（あ、本で見た教会と違い発見）  
祈りを捧げるための偶像が祭壇にない。

エオル（天使”様”が実際にいるからか）  
考えを巡らせながら、なんとなしに触れた祭壇にエオルは違和感を感じ、思わず手を離れた。

エオル（この感じ…どこかで）  
祭壇から後ずさるエオルにパウーモが声をかけた。  
パウーモ「どうした？」

エオル（…そうだ…思い出した…あの時より弱いけど、確かにそう  
だ…！）

エオルの頭から掘り起こされた記憶。  
キーテジの町で、よしのがギルティンからもらったと言っていた札束についていたもの。

何とも言いようのない”まがまがしい”魔力――

エオルは嫌な予感がした。

だが、その嫌な予感をさせている本能を、気持ちが悪かった。  
エオルの頭によぎったのは最強の名をほしいままにしている大先輩、  
市松桃次郎——と大先輩相手に全く歯が立たなかった自分。

エオルは生唾を飲み込んだ。

エオル（本来なら、俺の感が正しければ、こいつは魔導師が「絶対にかなわない」相手——

よしのさんやパウーモさんには悪いけど身を引くべき場面だ、そうなんだけど……）

エオル「……」

パウーモ「……」

パウーモはしばらくエオルの様子を眺めていた。  
それから祭壇を見た。

パウーモ「……逃げてもいいよ？」

協会内に響いたパウーモの声にエオルはハッとしてパウーモを見た。  
エオル「突然何を？」

パウーモは祭壇に目をやったままにつこりした。

パウーモ「なんとなく」

エオルも祭壇に目をやった

エオル「……今夜は楽しい宴ですよ」

パウーモ「そっか」

日も落ち村人たちが教会に集まり始めた。

エオルはミに尋ねた。

エオル「教会で宴を開くんですか？なんかバチ当たりな気が…」

ミールは豪快に笑った。

ミール「みんなが集まれるような所、ここしかないのさ。

外で宴なんかやってみな？酒が凍っちまうよ」

エオルも笑った。

エオル「なるほど」

ミール「銀髪のお友達はまだ目覚めないのかい？」

エオル「ええまあ、でも心配いりませんよ」

よしの「よっこいしょ」

村の女たちと宴の料理を作っていたよしのは教会に酒樽を運んでいた。

樽を斜めに傾けクルクルと回してゆく。

教会の前に来て、入り口との間に数段、階段があることに気づいた。

よしのは一段階段を登り、酒樽を引っ張り上げようとした。

よしの「んゝゝゝ」

一ミリ浮いた？

その時、後ろから太い腕が延びてきた。

エオル「貸して」

エオルは軽々と酒樽を肩に担ぐとスイスイ階段を登った。

よしの「あ…」

入り口の手前で酒樽を置くと、エオルはシィと口の前に人差し指を立てた。

そのまま教会の裏によしのを招いた。

エオル「なかなか時間取れなかったけど、天使様の正体がわかったよ」

よしのは深く息を吸い、胸の前で手を組んだ。

エオル「ただね、ソイツは魔導師でもどうやったってかなうはずもない相手なんだ」

よしの「？」

エオルはよしのを真っ直ぐ見つめたまま続けた。

エオル「魔法が一切効かない相手なんだ」

よしの「？？？」

エオル「一個だけ約束して？」

よしの「？？？は、はい！」

エオルはよしのの肩に手をかけた。

エオル「もしやバくなったら絶対逃げて。フィードはじきに起きるはずだから」

よしの「え……」

そう言つてそのまま教会の入り口に向かうエオルの背中をよしのは不思議そうに見つめた。

よ（エオル様……？）

宴会は大いに盛り上がった。

神使教の総本山ジパングの人間——よしのが参加していたためだ。

結果、神使教のウンチクを延々と語り合う宴となったのだが。

人々の楽しそうな表情に、

よしのはこの人々が天使の要求のために自分たちを手に掛けようとしているなど、到底思えなかった。

ふと、隅で宴の様子を眺めていたパウーモと目があつた。

パウーモは悲しそうに首を振った。

よしの「…」

よしのは俯いた。

その時だった。

突然あの盛り上がりが嘘のように静まり、全員が祭壇に目を向けた。  
よしの「!？」

パウーモ「いらしたか…」

エオル「…」

ろうそくや松明の炎が届かない暗がりから、ふわりと、2、3メートルほどの影が祭壇の上に舞い降りた。

よしのはその姿に口を覆った。

それはまだ目の塞がった、まん丸とした人間の胎児の姿をしていた。  
その背中には小さく干からびた白い羽根。

全く飛ぶ機能のない姿だが、不思議なことにふわりふわりと宙に浮かんでいる。

よしの（なに…これ…）

口も開いていないのに、教会にその巨大な胎児の声が響いた。

…魔導師がいるな…

人々はざわめいた。

エオルは祭壇の前に出た。

エオル「呼びました？」

言ってエオルはわざとらしくニヤリと笑った。

人々は立ち上がり、その視線はエオルに集中した。

天使は不気味に微笑んだ。

…こいつの魂が食いたい…

人々はそれぞれが隠し持っていた包丁や棍棒を手にしだした。

よしの「ちよっ…み、皆様…」

よしのは慌てた。

よ（エオル様…！）

エオル「…」

パウーモは宴会前のエオルとの会話を思い出していた。

パウーモ『で、どうするつもり？』

エオルはニヤリと笑った。

エオル『皆さんの誤解を解くのは簡単です。皆さんの前で天使の正体を暴いてやればいい。』

パウーモは眉根を寄せた。

パワーモ『誤解を解くの”は”？』

エオルは苦笑いした。

パワーモ（さて、）

パワーモはロザリオを取り出した。

エオルはパワーモのいるほうをチラリと見た。

エオル（パワーモさんも準備始めたな）

次に今にも飛びかからんとする村人たちを見た。

エオル（ハハハ…怖い怖い）

そしてエオルは天使を見た。

エオル（もし本当にこいつが天使なら）

エオルは呪文を唱えた。

ザザザザザ…

水がしぶきを上げて集まり、

教会の天井で渦を巻いた。

エオル「千針雨！<sup>ニド・スコ・ノレ</sup>」

ドドドドド！！

水が槍状に変化し、雨のように天使に向かって降り注いだ。

村人たちから悲鳴が上がった。

エオル（魔法ですぐ死ぬはず！）

激しく飛び散った水しぶきで、しばらく辺りは視界が白くふさがれた。

ガァン！

突然、教会に複数ある木製の窓が、祭壇側から順番に吹き飛び始めた。

凍てつく外気が暖かい教会に忍び込み、水煙はすぐさま消え失せた。その中から現れたものを見て、村人は歓声をあげた。

エオルはニヤリと笑った。

その頬を一筋の冷や汗が滑り落ちた。

そこには、何事もなかったように、悠然と浮かび続ける天使の姿があった。

エオル（無傷：つまり、天使どころか魔物ですらない）

天使はエオルの方へ体を向けた。

パウーモ「フローランブ光湧く泉！」

パウーモがジャラリとロザリオを鳴らすと、

天使の真下から光がポコポコと水泡のように溢れてきた。

天使「!!」

村人は更に歓声をあげた。

「パワーもの”法術”！」

「なんと神々しい」

「神秘的な光景だ」

しかし、その歓声は醜い断末魔に塗りつぶされた。

天使「ギャアアアア!!」

天使は早く光の泡から逃れようとバタバタともがきだした。

エオルは光の泡に剣をかざした。

エオル（使い方は違えど、これも精霊！魔法剣の原理を応用すれば  
……）

エオルの剣が輝きだし、刃からポコポコと光の泡が溢れ出した。

——魔法剣ならぬ…法術剣！（↑エオル命名）——

天使が苦しそうに地面から沸き起こる光の泡の群から顔を出したところを

すかさずエオルは切りかかった。

ガン！

鈍い音がし、天使がゴロリと地面に転がった。

剣を握る手がジンとしびれた。

エオル「！」

（斬れない！？）

天使は短い手足でのそりと起き上がった。

天使の額からどす黒い液体がボタボタと滴り落ちた。

そしてその落ちた先から、床が黒い煙を上げて溶けてゆく。

エオル「?!」

エオルは反射的に鼻と口をふさいだ。

黒い煙がエオルの剣先に触れた途端、

ジュワア!と激しい音を立て、みるみるうちに溶けていった。

エオルは慌てて祭壇から飛び退いた。

村人たちは困惑していた。

「て、天使様」

パウーモが声を張り上げた。

パウーモ「みんな!逃げろ!あれは悪魔の”瘴気”だ!」

エオルとよしのはその”瘴気”という単語にピンとこなかったが、村人の大多数が弾かれたように教会を飛び出した。

ミーワル「嘘だろ…天使様!!」

ミーワルはよろよろとよろめきながら祭壇に近づいた。

パウーモはミーワルの肩を掴んだ。

振り返ったミーワルにパウーモは静かに首を横に振った。

ミーワルはへたり込んだ。

パウーモ「ミーワル、危ないから出てなって」

天使の額から黒い液体が落ちる度、黒い煙はモクモクと広がっていった。

エオル「ちよつとちよつと！パワーモさん！何なんですか！」瘴気  
” って！！”

パワーモはロザリオを構えた。

パワーモ「” 悪魔” の血が外界に触れたときに猛毒のガスになる、  
そのガスが” 瘴気” 。”

パワーモはニヤリと笑った。

パワーモ「まあ、” 悪魔とお友達” だと、傷つけたらどうなるかな  
んてわかんないよね、魔導師くん」

エオル（ギクリ）

「えと……」

パワーモ「いいよ、よしの様と一緒にいるんだ、信用してるよ」

エオルは胸をなでおろした。

エオル（よしのさんがいて助かった……）

よしの「あの……” 悪魔” って何ですか……？」

パワーモ（ガーン）

「よしの様何で知ってないのー？！」

よしの（ガーン）

「ももも申し上げございません」

エオルはコホンと軽く咳払いした。

エオル「悪魔っていうのはね、魔導師の力の源であり、神様の敵な  
んだ」

パワーモはロザリオをジャラジャラと鳴らした。

パワーモ「バウンダリーケイジ” 聖なる子午線” 。”

光の柱が檻のように天井に向かって伸び、祭壇を囲った。

瘴気の広まりは檻までで留まった。

パワーモ「武器は効かないし、魔法も元は悪魔の力だから何の意味

もない、

普通魔導師には悪魔と戦う術がないんだよ。

有効なのは神使教の法術と、アーティファクトのみ」

エオル「パワーモさん手慣れてますね」

パワーモは苦笑いした。

パワーモ「そりゃあ一応は僧侶だかね、悪魔は何度か。」

エオル（すごい！）

パワーモは天使から目を逸らさず続けた。

パワーモ「けど…」

エオル「けど？」

ニヤリと笑うパワーモの額から一筋の汗が落ちた。

パワーモ「ここまでないと僧侶に正体を気づかせない悪魔…正直出くわしたことはない」

エオル「！」

…その通り…

教会内で天使の低い声が響いた。

エオル、パワーモ、よしのは天使に視線を向けた。

相変わらず悠然と浮かび続ける天使。

いつの間にか、その額の傷は消えていた。

…我は悪魔”ディセイブル”、貴様等このようなことをしてどうなるかわかっておるうな…

エオルはまだ光の泡が沸き立つ剣を構えた。

悪魔は不気味な笑みを浮かべた。

一瞬身をググツと身を縮めると塞がったままだった口をパカリと開けた。

よしのは本能的に体が動いた。

よしの「お二人とも！」

フワリとヤサカニの宝珠たちがよしの、エオル、パワーモを囲った。

次の瞬間――

オギヤアアアア

身の毛もよだつ、おぞましい産声が教会内に響き渡った。

同時にパワーモの光の檻が黒い霧となり消え失せ、

教会内の椅子や祭壇は爆風に煽られたかのようになぎ倒された。

よしのたちを囲うヤサカニの結界もビリビリと揺らいだ。

エオルは顔をしかめて耳をふさいだ。

エオル「何…これ」

パワーモも耳をふさぎ、顔をゆがめた。

パワーモ「魔導師くんが」何”はないだろ、君たちがいつも使ってるものだよ」

エオルは一瞬息が詰まった。

エオル（…魔法…！の、原型??！）

魔法は悪魔の力を借りて精霊に働きかけ、自然現象や化学反応を起こすもの。

悪魔は精霊に働きかけるためのエネルギーをマドウシに要求し、マドウシは要求に応じて魔力を渡す。

魔導師 悪魔 精霊

それがエオルがこれまで習ってきた魔法の構造だった。

エオル「…こんなめちゃくちゃな…」

パウーモ「なんだい、魔導師ってのはわからないで悪魔の力なんか使ってたのかい？」

エオル「…それは…」

産声が止んだ。

ディセイブル「…アーティファクトか…」

よしのとディセイブルの目が合った。

ディセイブルはニヤリと笑った。

ディセイブル「…使い手を殺せばただのガラクタ…」  
よしの「！」

エオルとパウーモはよしのの前に立ち、それぞれ剣とロザリオを構えた。

ズダァン…！

宙に浮かんでいたディセイブルは音を立てて着地した。  
獣のように手と膝をつき、再び口を開けた。

パウーモ「また鳴き声か！」

口の中に、何か蠢いている。

エオル「!？」

ドン！

突然、ディセイブルの口の中から蛸の足のような紫色の触手が放射状に飛び出した。

ドガガッ！

触手はたちまちエオルをなぎ払い、パワーモをつるし上げ、地面に叩きつけた。

よしの「エオル様！パワーモ様!!」

エオルは咳込みながらヨロヨロと立ち上がり、剣を構えた。

エオル「この…!!」

構えた剣の先からコポコポと湧き上がっていた光の泡が小さくなり、消えていった。

エオル「!!」

エオルはパワーモを見た。

パワーモはぐったりとして蠢く触手に引きずられている。

よしのはディセイブルを睨みつけた。

よしの「ボウイサナ!!」

ヤサカニの青い宝珠が輝きだし、光の中から水で形作られた龍が飛

び出した。

ボウイサナ——爆流攻！——

ドドドドド！！

龍の口から強烈な鉄砲水が吐き出された。

ディセイブルはそれを、人間ではありえない素早い反応で軽々とよけた。

そして、そのまま音もなくよしのの背後に回った。

よしの「あ……」

エオル「よしのさ……」

ガッ！

ディセイブル「！」

ボウイサナはディセイブルに噛みついた。

ディセイブル「貴様！！」

ボウイサナ——よしの、逃げろ……！——

ボウイサナの水の牙からみるみるうちに黒い液体が浸食してくる。

よしの「ボウイサナ！」

エオル「ン・ウオード水縛結界！」

巨大な水の塊がディセイブルを包むように球状になった。

ディセイブルはホルマリン漬けのようにふわふわと水の中に閉じ込められている。

ズウン…！

ボウイサナは横たわった。

よしの「ボウイサナ！」

よしのはボウイサナの顔に駆け寄った。

エオルも慌てて駆け寄った。

ボウイサナは息も絶え絶えに口を開いた。

ボウイサナ——恨むぞ小僧…よしのを危険な目に合わせおって…——

エオル「！！！」

エオルは何も言えなかった。

ポタポタ…ポタポタポタ…

悪魔を包んでいた水の塊が徐々にほどけてゆく。

エオル「！」

バシヤアン！

水の塊は跡形もなく飛び散り、悪魔は何事もなかったかのようにこちらを見た。

ディセイブル「よい湯浴みじやったわ」

エオルは剣を構えた。

ヤサカニの青い宝珠が輝き出した。

よしの「ボウイサナ！」

ボウイサナ——…少し休む…代わりに…”ホトカゲ”を呼べ——  
よしの「！？」

ボウイサナは青い光となって青い宝珠の中に消えていった。

よしの「ホ…ホトカゲ？」

よしのが呟く（というより、よくわからない単語を復唱しただけだが）と、

よしのの正面にあつた青い宝珠が横にスライドし、代わりに黒い宝珠が目の前にやってきた。

よしの「！？」

黒い宝珠は黒く光りだした。

エオルは剣を構えた。

ディセイブル「魔導師、お前の技は全て効かぬ」

エオルはわずかに後ろへ下がろうとした。

その時、カッンと何かが当たった。

ふと、目を足元に落とした瞬間——

ディセイブル「いい加減貴様の魂を食わせろ！」

ディセイブルは長らくおあずけさせられていた犬のようにエサに飛エオルびかった。

エオルは床にあったパウーモのロザリオをとつさに投げつけた。

バチィ！

火花が散り、ロザリオは弾かれたように再びエオルの足元に転がった。

ディセイブルの頬に微かな火傷が出来上がった。

ディセイブル「貴様」

ディセイブルは触手を口の中にした。

エオルは剣にロザリオを巻きつけた。

エオル（パウーモさんの法力が残ってるんだ…！）

エオルは再びディセイブルに剣を構えた。

ディセイブルはニヤリと笑った。

よしのはヤサカニの黒い宝珠から出てきたものをきょとんと見つめていた。

黒い光から小さなトカゲのようなものがポトリと落ちた。

途端によしの影がムクムクと盛り上がり、

よしのと瓜二つの、だがよしのは体や服の色が真逆の少女となった。

よしのと瓜二つの少女はにこりと笑った。

よしの「…あなたが…ホトカゲ…？」

よしのと瓜二つの少女——ホトカゲは頷いた。

よしの「…」

（ボウイサナはホトカゲを呼べとおっしゃった…私にそっくりなこの子がホトカゲ…）

もしかしてボウイサナが私に伝えたかったことって…！）

悪魔の体が自らの影に”溶けて”ゆく。

エオル「!!」

悪魔の姿が消えた。

エオルは当たりを見回した。

気配は全くない。

パウーモがむくりと起き上がった

エオル「パウーモさん！」

エオルは駆け寄った。

エオル「大丈夫ですか」

パウーモは後頭部をさすった。

パウーモ「えつとね、」

ガッ

エオル「!？」

突然、パウーモがエオルを張り倒し、首を締めてきた。

エオル「ゲホッ！」

パウーモはニヤリと笑った。

その口から出た声はパウーモのものではなかった。

パウーモ「…こいつはパウーモなのか」

エオル「!!」

エオルはパウーモの鳩尾に足をねじ込んだ。

パウーモは壁に激しく激突した。

パウーモ「痛っっ」

パワーモの声だ。

エオル「げ！！パワーモさん！！？」

だが起き上がったパワーモの体は全く生気が感じられない。

エオル（…”悪魔契約”に魔導師が失敗した場合だけだと思ってた…）

エオルはゴクリと喉を鳴らした。

エオル（これが…悪魔に”乗っ取られる”ってやつか…！）

パワーモは視線が定まらず、フラフラし、体に力が入っていない。

パワーモ「こいつは貴様らの仲間だろう？仲間を攻撃するのか？ホレ！」

パワーモはフラフラしたまま、まるでマリオネットのようにダランとした腕を広げた。

エオル「…！！」

よしのは真横に浮かぶ青い宝珠を優しく撫でた。

よしの「ボウイサナ…あなたはホトカゲを身代わりに逃げると仰りたかったんですね…」

よしのはホトカゲを見た。

よしの「ごめんなさい、私は、逃げるわけにはいかないのです」

ホトカゲ「…！！」

よしのはホトカゲの「なぜ？」という表情を見、にこりと微笑んだ。

よしの「まだ助かる命をお守りしたいのです」

ホトカゲ「…」

よしのは気恥ずかしそうに、イタズラっぽく微笑んだ。

よしの「それに…あなたヤサカニたちは、お力を貸してくださるのでしょ  
う？」

ホトカゲは微笑んだ。

——ああ、そうだよ、よしの。それが君だ。君は本当に……

よしのはホトカゲの笑みを確認し、エオルの方を向いた。  
ホトカゲはよしのの小さな背中を見つめた。

——昔のまま、かわらない……

よしの「エオル様！ パウーモ様！」

エオルはパウーモに剣を構え、パウーモは怯える様子もなくジリジリとエオルと間合いを詰めている。

エオルはパウーモから視線をそらさなかった。

エオル「よしのさん！ 逃げて！」

よしのは直感的に状況を理解した。

それほどまでに、パウーモの様子のおかしさは明白だった。

パウーモはよしのを見つめ、ニヤリと笑った。

パウーモはよしのめがけて走り出した。

すかさずエオルが剣を振りかざした。

ドン！

剣の柄は鈍い音を立て、パウーモの頸部にめり込んだ。

よしの「エオル様！」

エオル「大丈夫！ みねうち！」

崩れ落ちかけたパウーモの体は、ピタリと持ち直し、今度はエオル

に飛びかかった。

エオル「！」

よしの「パワーモ様！あなたはそれでも僧侶ですか！」

パワーモの体がピタリと止まった。

よしの「…神使教の僧侶でございましょう？」

パワーモは体を守るように頭を抱え、床をゴロゴロと転がった。

エオル「パワーモさん！」

パワーモは苦しそうに顔をしかめた。

パワーモ「よしの様…どうか俺と一緒に悪魔を…！」

エオル「…！」

よしの「それはいけません！」

エオルは静かに剣を構えた。

よしの「エオル様！止めて！」

よしのはエオルの前に立ちはだかった。

エオル「よしのさん…もうこれしか方法は…」

パワーモ「…ありがとう…よしの様…」

パワーモはよしのを羽交い締めにした。

エオル「！」

パワーモはニヤリと笑った。

ドカーン！

突然、飛んできた教会の扉がパワーモに激突し、パワーモは扉と共に吹き飛んだ。

「言つたるクソガキ！よしのちゃんを危険な目に遭わせるなんて」  
——若い男の声

エオル（…これは…暖炉の部屋で聞いた…！？）  
エオルは教会の出入り口を見た。

そこには肩にクリスを乗せたフィードの姿、  
だが当のフィードもパワーモと同じように様子がおかしい。  
体に全く力が入っておらず、むしろ――

エオル（う…浮いてるー！？そんな魔法も使えたの！？）  
だが、あの若い男の声は…明らかにフィードから聞こえてくる。

パワーモはヨロリと立ち上がった。

パワーモ「なんだ貴様は」

若い男の声は鼻で笑った。

若「よしのちゃん、大丈夫？」

エオル（ん？）

よしの（えっ？）

「は…はい…」

エオル「……………」

エオルとよしのは目を凝らした。

若い男の声はフィードから聞こえてくるものじゃない、フィードの肩の――

エオル「ク…クリス!？」

クリスはエオルを睨みつけた。

クリス「男が気安く呼ぶんじゃねえよ!耳が腐るだろ!つたく…」

エオル「ええー!ー!？」

(しかも何か性格悪い!ー!ー!ー!)

パウーモはよしのめがけて走り出した。

よしの「!」

クリス「おら、起きろ」

クリスはモチモチとした尻尾でフィードを思い切り殴った。  
ピタンといい音が響いた。

フィード「ぐー…」

フィードは気持ちよさそうに眠り、全く起きる気配がない。  
クリス「…」

スー…とフィードの体が水平に浮かんだ。  
そのまま矢のごとく凄まじいスピードで、頭からパウーモに激突した。

エオル&よしの(ええ――っ!?)

横たわるフィードとパウーモ。

よしのは慌ててフィードに駆け寄った。

よしの「フィード様!大丈夫ですか!？」

フィード「…い」

フィードは頭を抱えながらムクリと起き上がった。

フィード「つつてええ——っ！！！！」

よしのはフィードの声に驚き、キョトンと固まった。

エオル「フィ…フィード…！？」

フィードはキョロキョロと辺りを見回した。

フィード「ん？どこだここは？」

フィードは隣でキョトンとしたままのよしのに気づいた。

フィード「お前、何やってんだよ？」

エオルが声を上げた。

エオル「フィード！話は後！後ろ！」

フィードが後ろを振り向いた途端、パワーモがフィードの首を締めようと飛びかかった。

フィードはとつさにパワーモの右手をひねり上げ、取り押さえた。

エオル「おお！さすが”特殊格闘技ゼミ！”ユティウス」

フィードはダルそうにパワーモの上に乗し、大きく欠伸した。

フィード「何だよこのオッサン」

クリス「よしのちゃん！離れて！」

よしの「！」

よしのはパワーモから遠ざかるように数歩さがった。

フィード「は？つか、クリス！テメー何喋ってんだよ」

クリス「俺のよしのちゃんがピンチだったんだ！仕方ない」

フィード「だーれがテメーのよしのだっ！」

エオル（食いつくところコ…？）

クリス「お前が言っただろ！よしのちゃんは俺に任すって」

フィードはクリスを両手で握りしめた。

フィード「バカかテメーはっ！」

俺様はよしのにテメーの世話を任すつつたんだよ」

クリス「バカ！手エ離すな！」

ドカッ！！

パウーモはフィードを突き飛ばし、フィードから間合いを取った。

パウーモ「貴様！パウーモ（こいつ）は貴様の仲間だろ！！」

フィードは何言ってたんだと面倒くさそうな視線を向けた。

フィード「知らねえよ、そんなヤツ」

パウーモ「なっ……！！」

エオルは「ああもう！」と頭を抱えた。

エオル「フィード！俺とよしのさんはその人を助けたいんだ！」

フィードは訳が分からないという顔をエオルに向けた。

フィードの足元にいたクリスが続けた。

クリス「詳しいことは後で聞きな、あの男は悪魔に乗っ取られて  
いる」

フィードはパウーモを見、ニヤリと笑った。

フィード「じゃあアイツも”変身”すんのか？」

クリスは呆れたようにため息をついた。

クリス「バカを言え、そんな協力的な悪魔、俺くらいだぞ」

エオルは何がなんだかさっぱりだった。

クリスが人間の言葉を喋ったこと。

フィードがクリスに操られるかのように浮いていたこと。

武器も魔法も効かない悪魔を目の前にして、フィードがこんなに余裕であること。

いや、そのもつと前だ。

魔導師協会を敵にして

トランプに追われ

グランドセブンを相手にし、

そのどの場面でも、フィードは臆することなかった。

元々マトモな神経したヤツではないと思っていたが、この余裕、何か”確信があつた”から？

フィードはドカリと四股を踏み、ニヤリと邪悪な笑みを浮かべた。

フィード「イクセスブレイク  
”悪魔合体”」

フィードが呟くと、辺りの空気が震えクリスは白い煙となり、フィードを包み込んだ。

煙は雷光を発しながら激しく渦を巻き、

やがてバチン！と強く光ると、

空気の震えが収まり、煙の渦も遠心力で放り出されるように拡散した。

リケ「シャンドラ・スウェフィード？犯行の動機が何か判明したんですか？」

トウジロウは首を横に振った。

トウジロウ「見てん、俺。煙の中で」

ジョーカー「何をだ？」

白い煙から出てきたフィードの姿に、ディセイブルも、よしのも、エオルも、言葉を失った。

全身白い体毛で覆われ、頭にはクルリとねじれて前を向く巨大な角、黒く鋭く長い爪、白い毛から覗く赤い瞳――

トウジロウ「白い悪魔」

パウーモは膝から崩れ落ち、尻餅をついた。

パウーモ「し……し……」 白山羊の悪魔”……まさか……まさか……！」

フィードはフツと視界から消えた。

ディセイブル「……！！」

突然、ディセイブルの眼前が陰った。

目の前には白い毛から覗く赤い瞳。

赤い瞳はニヤリと笑った。

フィード「ワッ！」

フィードから発せられた魔力のこもった大声。

その大声に押し出されるように、ディセイブルはパウーモの体からスポンと抜け出した。

パウーモはドサリと力無く倒れた。

エオル「な…」

フィードはニヤリと笑った。

クリス「おい」

フィードの頭の中にクリスの声が響いた。

フィードは舌打ちした。

フィード「なんだよ」

クリス「時間がない、ヤサカニの”影宝珠”に追い込め」

エオル（な…何？独り言？？）

フィード「なーにが時間がないだ！変身したばっかしじゃなーか！

つか、なんだよその”影宝珠”って」

クリス「このまままた3日ぶっ倒れるか？

いいからさっさとあの”色違いのよしのちゃん”に悪魔を

”追い込め”」

フィードは再び舌打ちした。

ガタガタと震えるディセイブルとフィードの目があった。

ディセイブル「なぜ…あなた様がここに」

フィード「クリスの居場所を知られたからには、生かしちゃあおけ  
ねーなあ」

ディセイブル「ひっ！」

ディセイブルは逃げ出した。

ディセイブル（あの女だ！あの女にさえ乗り移れば！！）

急ぐディセイブルの真横から白い影。

フィード「遅え！」

フィードは極々軽く、ディセイブルの頬に拳を入れた。

ディセイブルは激しく吹っ飛び、ドカンと大きな音を立てて教会の壁にめり込んだ。

ディセイブル「く……」

ディセイブルの目の前には、白い髪、黒い肌の”あの女”――

ディセイブルは笑った。

ディセイブル（ツイてる！）

ディセイブルは黒い霧となり、その黒い霧はホトカゲを包み込んだ。

よしの「ホトカゲ！」

クリス「大丈夫」

よしのの肩には丸々とした黒い猫。

その先にはゼーゼーと息を切らし、倒れ込むフィード。

ディセイブル「ぐあ！」

突然、ディセイブルの苦しそうな声が響いた。

ホトカゲの背中が黒く波打っている。

ボコボコと音を立て、影の中から悪魔の手が一瞬出たかと思うと、スツと飲み込まれ、静かになった。

クリス「影宝珠・ホトカゲ」、能力は”なりすまし”と”身代わり”となって受けた状態異常を食らう”」

ヤサカニの黒い宝珠が輝き、ホトカゲは宝珠の中に戻っていった。

よしのはキョトンとした。

よしの「クリスちゃん……ご存知なんですか？」

クリスは尻尾をパタパタと振った。

クリス「昔ちよつとね、それよりほめてほめて」

ゴン！

耳障りな目覚まし時計を止めるように、フィードの拳がクリスの脳天に突き刺さった。

エオル「パワーモさん！」

エオルはパワーモに駆け寄った。

エオル（息ある！）

エオルは安堵した。

フィードは倒れ込んだまま口を開いた。

フィード「誰だよソイツ、っーかここ」

エオル「フィード」

エオルはフィードの言葉を遮った。

エオル「その前に説明してもらおうか？」

### 13・angelic another（後書き）

”白山羊の悪魔”と”白い悪魔”は同義語です。  
その意味するところは次回の本編で明らかに。

一行が爆発から逃れられたのは  
フィードがイクセスブレイク状態でエオルとよしのを抱えて逃げた  
ためです。

さて、このイクセスブレイクとは？

クリスの正体とは？

パウーモは無事なのか？

悲しいかな、ただでは済まさないのがW・B・アライランスです。

次回の本編は5月上旬更新。

次週から4話は黒い三日月「ロロと女編」

この話を書く前に、気付いたことがある。

ある日、帰宅してテレビをつけたらルパ・3世のエンディングが流  
れていた。

そこに映っていたのはぼくらの永遠のあこがれ「ふ・こちゃん」

あつ！そうか！

この物語には、色気が足りない！！

そう思って書き起こしたのが「ロロと女編」

…でもやっぱり裏世界の話なので

どうがんばってもいい話にはならないのがW・B・アライランス  
いや、ロロのせいかな。

次回は4/10更新予定！



13・i・黒い三日月―walking disaster―(前書き)

黒い三日月集中連載最終章    口口と女編    第1話

はじまりはじまり〜！

パンゲア大陸 ヴアルハラ帝国 東北部 グラブ・ダブ・ドリッブ  
魔導師協会管轄地区 トランプ本部

「ロロ・ウーがまた魔薬<sup>ドラッグ</sup>チームをつぶしたらしいですよ」

茶をすすりながら書類に目を通していたカグヤは  
書類に目を落したまま興味なさそうに口を開いた。

カグヤ「（賞金首）ランクA4ではどうしようもない。  
<sup>トランプ</sup>我々が手を出せるのはS1からだ」

「このままいくとS1に上がるのも時間の問題かと」

カグヤは書類に判を押し、次の書類に目を通し始めた。

カグヤ「よほどのことがなければ、それはないだろう」

「？なぜです」

カグヤはフーと溜息をついて顔をあげた。

カグヤ「おそらく道士協会がハンターズギルドに圧力をかけている。  
我々魔導師に処理させぬようS1未満に留めておけとな」

「…神使教のプライドってやつですか…  
犠牲はこれからも出続けますよ…」

カグヤは何も答えず、1口茶をすすると再び目を落した。

パンゲア大陸    ファンディアス国    港町ファリアス    黒い三日月ア  
ジト

その日のロロは珍しく自分で自然と目を覚ました。

ロロ（…縁起悪いな）

二度寝しようにも寝付けず、  
仕方なくのそのそと起き上がって洗面台で顔を洗った。

顔をあげ、洗面台の正面にかけられている鏡をみた瞬間、  
ロロは真っ青になった。

” 緑の海原 ”  
” 紅夕暮 ”

このファリアスの港町で飛びぬけて勢いのあった2つの魔薬チー<sup>ドラッグ</sup>ムが

”黒い三日月”につぶされた。

ファリアスの裏社会で、黒い三日月に楯突ける者はいなくなった。

同時に黒い三日月の権力目当てに

連日チーム入り希望者が列をなした。

その連日ともロロは一人ひとりに直接チーム入りを許可するあまり面接とはいえない面接（即答でOKを出すため）を行っていた。

しかし、ロロはその日はなぜか出てこなかった。

取り巻きの一人が言った。

「あの人まだ寝てんの？」

ロロを起こしに行った別の取り巻きが息を切らして駆け寄った。

「今日、ウーさんだめです」

「起きねーの？」

「いや、起きてはいるんですが、今日は部屋から出たくないと……」

「ハア！？なんで!？」

起こしに行った取り巻きは肩をすくめた。

「なんでも、今日は女難の相が出てるとかで、

今日は一切部屋から出ないと…」

「…ひきずってでも連れてきて」

そう言う取り巻きの後ろには面接待ちの男どもが列をなしていた。

ロロはしぶしぶ面接を開始した。

そうして現れた最後の一人。

「こんちわ！女じゃできない仕事ってわけでもないと思ってんだけど！」

プラチナブロンドの髪にブルーグレーの澄んだ瞳、美女だった。

ロロは眉根を寄せた。

ロロ「…あー、女は…」

「いやったあー！女だーーーー！！」

「しかも美人だー！！」

「ついにこの黒い三日月にも花が！！」

女を見るなりロロの後ろで取り巻きたちは歓声を上げた。

ロロは喜ぶ取り巻きたちを見、しぶしぶ女を許可した。

女はスナイドといった。

スナイドが入ってから、黒い三日月の売り上げはさらに上がった。

スナイド自身は魔薬<sup>ドラッグ</sup>の売買には関わらなかったが、家事でメンバーを支え、姉御肌で明朗快活な性格は魅力的で、取り巻きたちは”スナイドのために”と張り切った。

その様子を見、ロロは一言

ロロ「気に食わねえ」

取り巻きたちをとられた気がした。

しばらくして、ロロはスナイドから頻繁に視線を感じるようになった。

（ロロはあえて目を合わせなかったが ↑ 気に食わないから）

たまたま目が合うと、スナイドは決まってにっこりと笑った。

何もないのによく話しかけられるようになり、

少しのことでポンポンと触られるようになり、  
気がつけばほとんど常に横にいた。

ロロはイライラしていた。

そのイライラはスナイドのものというより、  
スナイドを通して、元妻や、掌を翻した女の道士たちへのものでは  
なかった。

そんなある晩、

ロロが部屋に戻ると、スナイドの姿があった。

スナイド「あ！ごめんごめん！

なんか紙くずがいたるところにいっぱいあったから、  
それ片づけてたらこんな時間になっちゃった！」

ロロ（紙くず…）

「捨てた？」

スナイドはにつこりと笑って答えた。

スナイド「うん！燃やした！」

ロロ「今回は別にいいけど、

あれは道士が術使うのに必要なんだ。  
次からはそのままにしないで」

ロロはそのまま、もう”紙くず”にもスナイドにも興味ないとソファに身をうずめた。

スナイド（怒らない…？

あたしのことを本当に信用し始めたのか？）

スナイドはにつこりと笑うと、上着を脱ぎ捨て、そのままロロの膝の上に腰かけ、ロロの首に腕をまわした。

ロロは面倒くさいと言わんばかりにあからさまに顔をしかめた。

スナイドは上目づかいにロロを見た。

スナイド「…気づいてるでしょ？」

ロロは溜息をついた。

あれがほしい、

これを買え、

あれがいい、

これはいや、

もっと私を愛せ、もっとわかるように愛せ、言葉でも、態度でも、

エサを与え続けなけりや吠え続ける、

女は獣だ。

ロロ（…もういいだろ）

スナイド「!!」

ロロはスナイドの顎をひつつかんだ。

ロロ（殺すか…）

そしてそのままグイと引き寄せ、口づけた。

——スリックリード  
魂転如律令——

スナイド「!？」

スナイドはロロを突き飛ばし、  
勢い余って後ろへ転げ落ちた。

そのまま右へ左へよろめきながら、  
乱暴にドアを開け、逃げるように部屋を出た。

スナイドの気配が消えたのを確認し、

ロロは洗面台に駆け寄り、激しくむせ込んだ。

その口からカラカラと音を立てて次々と出てくるのは、  
水と風の精霊、そして、氷の塊。

ロロ「ゲホッ、ゴホッ…ハア…あの女…何しやがった…!!」

スナイドは力がほとんど入らない体を引きずり、  
何とか自室に戻った。

そしてそのまま倒れ込んだ。

スナイド「ゼエ…ハア…あいつ…一体何しようとした…!？」

その時、桃花源に、  
美女に化け、ひっかけた男どもの生気を吸いつくす魔物がいたこと  
を思い出した。

スナイドはニヤリと笑った。

スナイド「…魔物かよ…!!」

まあいい、札は全部燃やした。」

スナイドはごろんと仰向けになった。

スナイド「どの道やつは時間の問題だ。

…本物の化け物でもない限りな」



13・1 黒い三日月―walking disaster―（後書き）

さて、いきなりロロが大ピンチです。

ロロは一体何をされたのか！？

スナイドの目的とは！？

一体何が起きたのかは以降の話であきらかに？

次回13・2話は4/17更新予定！

13・2・黒い三日月―hard smooth―(前書き)

黒い三日月「ロロと女編」第2話

ロロは一体何されたのか!?  
スナイドの正体は!?

はじまりはじまり〜!

13・2・黒い三月―hard smooth―

「なに？ウーさんもスナイドも調子が悪い？」

「ああ、

ウーさんは寒気がするから部屋に入るなだと。  
スナイドは体がだるいってさ」

「…昨日スナイド、ウーさんの部屋掃除するって言ってたな」

「…」

「…」

取り巻きたちはがつくり肩を落とした。

「ウーさん、手エ早すぎつすよ…」

「オレの希望の光が消えた――っ！」

「ウーさんが何だって？」

声のほうに目をやると、そこにはスナイド。

「あれ？調子悪いって…？」

スナイドは二カリと笑った。

「半日寝たら治ったよ。

それよりごめんね！これからお昼作るから！」

そういつてキッチンへ走るスナイドを、  
取り巻きたちは悲しげに見送った。

取り巻きたちの昼食を作り、  
そのうち一膳を盆に乗せ、スナイドは口口の部屋に向かった。

——そろそろチルドされてる頃よね！——

口口の部屋——

あまりの寒気にしばらく毛布にくるまっていたが、  
吐く息で毛布に霜が降り、

体の芯から発せられる冷気に耐えかね、

口口は昨晚からずっと熱いシャワーを浴び続けていた。

しかし、口口の体に当たった水滴は

次々と凍りつき、

カラコ口と音を立てて浴槽に転がり落ちた。

ロロ（だめだこりゃ…術者<sup>あのアマ</sup>ぶつ殺さねーと…）

ガタン！

何の遠慮もなしに浴室のドアが開いた。

ロロ「！」

扉を開けたスナイドはきょとんとしていた。

スナイド「あれ？まだ生きてる」

ロロはスナイドをにらみつけた。

ロロ「てめー…何しやがった」

スナイドは盆に乗せた料理をつまんだ。

スナイド「こっちのセリフだし！

立てるようになるのに半日かったよ、なんなの、アレ」

ロロ「先に質問したのはおれだ、答えろ」

スナイドはロロを見た。

スナイド「あ、黒髪短髪の全身イレズミ…」

ロロ「おい」

スナイド「あー！よく見たら並みの魔導師以上の鍛え方じゃん！？

普段あんだけ動いてないのに！！

それとも隠れて運動してるとか？」

ロロ「…おれと話す気なさそうだな」

スナイド「…耳もピアスジャラジャラだし…

似てないのは背と性格かあー」

ロロ「…ハア！？」

スナイドはポイと盆を投げ捨てた。

ガシャンと音を立てて料理が浴室に散らばった。

スナイドはニコリと口を開けた。

スナイド「そんだけ弱ってたら敵じゃないな。

このままハンターズにしょっ引いてあげる。」

ロロはニヤリと笑った。

ロロ「なんだ、賞金稼ハンターぎか」

スナイドは少しムツとした。

スナイド「不利なクセして何笑ってんのよ。

…ならついでにもう一つ教えてあげる」

スナイドは艶やかな唇に人差し指を当てた。

スナイド「元ランプの賞金稼ぎ<sup>ハンター</sup>”凍てつく小鳥” スナイド・ハロウィンってあたしのことだよ。」

賞金稼ぎ<sup>ハンター</sup>”凍てつく小鳥”

若くしてランプの中佐まで上り詰めた天才女魔導師。

ランプ時代のノウハウを生かし、お縄にかけた賞金首は数知れず、かなり名の知れた賞金稼ぎ<sup>ハンター</sup>である。

スナイド「あんたがこれまで殺ってきたシロート魔導師たちとはワケが違うよ。」

観念しな！」

ロロ「…あんた、神に逢ったことはあるか？」

スナイドは”何言ってるんだコイツ”と怪訝そうな顔を浮かべた。

長い髪をかきあげ、呼吸を置いてから、スナイドは答えた。

スナイド「あるよ」

ロロ「…！」

スナイドは満足げに穏やかな笑みをたたえた。

スナイド（…そう…あたしにとって、”あなた”は神に等しかったんだ）

ロロは舌打ちした。

スナイド「あ？何？

もしかして何かの術のトリガだったとか？

… ってそんなわけないか！

札は昨日全部燃やしたからね、アンタはもう術が使えない」

スナイドはアハハと腹を抱えて笑った。

スナイド「アンタほどじゃないけど、

ほかの黒い三日月のメンバーもチヨロチヨロ懸賞金かかってるからね、

アンタ始末したら次はあいつらだよ。

だからさっさと大人しく…」

ロロはシャワーを止めた。

たちまち、ロロの体から発せられる冷気で浴室が、そしてロロ自身も凍りつき始めた。

スナイド「あー、なるほど、アンタの氷漬けを持って行けって？」

ロロ「おれのもんに手エ出そうなんぞ、あきれた女だ。」

スナイドは腰に手を当てた。

スナイド「鼻水でつらら作りながら何言ってるのよ」

ロロはバリバリと体についた氷を落しながら浴室を出て服を着た。

スナイドはあきれた。

スナイド「何やってんのよ」

ロロ「一瞬でもパ<sup>おれのもの</sup>ラダイスだった情けだ。

丁重に地獄に送ってやる、  
表へ出な」

スナイド「アンタねえ…そんな状態で」

ロロ「トランプだか何だか知らねーが、

おれを殺れるのは豆腐の角くらいだぜ」

スナイドから「カチン」という音が聞こえたようだった。

スナイド「あたしは豆腐以下だって!？」

いい度胸じゃない、

その馬鹿さに免じて、あたし直々に地獄に送ってあげる  
よ」

13・2・黒い三月―hard smooth―(後書き)

スナイドの言う「あなた」とは？

次話が次々話あたりでふんわり出てきます。

次話はへろへろな口口対スナイド。

勝つのはどっち！？

敗者はどうなる！？

次回は4/24更新予定！

# 13・3・黒い三日月―晩安―（前書き）

黒い三日月「ロロと女編」第3話

へろへろなロロVS女賞金稼ぎスナイド

「勝負」という正々堂々したものではなく、  
たがいの首をかけた「殺し合い」です。

結果はほんの一瞬。

スナイドは賞金首”背徳の道士 ロロ・ウー”をとらえられるのか？

ロロは黒い三日月パラダイスを守ることができるのか？

13・3・黒い三日月―晩安―

人影の一つもない山奥の岩場。

灰色の重たい雲。

ツンと肌をさす冷たい空気。

スナイドは辺りを見回し、白い息を吐いた。

スナイド「いいトコじゃん」

話しかけた相手に反応はない。

スナイドは笑った。

スナイド「話す元気もなさそうね。」

スナイドの視線の先――ロロの吐く息は白くはなかった。

ガタガタと震え、両手をひざにつき、息も絶え絶え、  
だが、

その目は射殺さんばかりにスナイドに向いていた。

スナイド「冥土の土産に何したか教えてあげる。」

ロロ「…」

スナイドは人差し指を唇にあてた。

スナイド「グッドナイトキス”。

口の中で魔法にする直前の精霊をためといて、一気に吹き込む。

すると、相手の体内で魔法が引き起こされる。

あ！あたし冰雪魔法使いなの。」

スナイドはすこし間を開け、続けた。

スナイド「でも、吹き込む前に、アンタ自分から吸ったね。」

スナイドは「あれは何をしたの？」という視線を向けた。

ロロはニヤリと笑った。

ロロ「てめーにくれてやる冥土の土産はねえよ。」

スナイド「あつそ」

視界から、スナイドが消えた。

ロロは腰からカクンと体を曲げた。

直後、スナイドの細く長い脚が、放たれた矢のようにロロをかすめた。

口口は後ろを見上げた。

その先には蹴りを空振りしたスナイドの姿。

スナイド「甘いよ」

スナイドは空振りした勢いを利用して、くるりと体を宙で回すと、その勢いでそのまま踵を振り落とした。

ドカツ！！

口口の頭部めがけて落した踵は、口口の腕の上で止まった。

口口の腕はミシリと音を立てた。

口口はそのまま立ち上がった。

スナイド「うお、お」

スナイドの片足は口口の腕に乗ったまま。

口口はそのままスナイドと間合いを詰めた。

スナイドは後ろにバランスを崩しかけた。

スナイド「フン」

再び、スナイドが視界から消えた。

だが、今度は口口の腕の上にスナイドの足は乗ったまま。

ドスッ

次の瞬間、スナイドのもう片方の足が、真下から口口の顎に命中した。

後ろ宙返りの勢いにまかせた蹴りあげは、口口を大きく後ろに吹き飛ばした。

スナイドはくるりと回って、着地した。

スナイド（完全に入った。もう起き上がれないな）

口口は倒れたままピクリとも動かない。

スナイドは口口の元へ近寄った。

スナイド「…!？」

スナイドが口口の足元に差し掛かった瞬間、口口の両足がスナイドの足を挟み込み、スナイドはそのまま引き倒された。

スナイドはすかさず起き上がり、口口から間合いを取るため後ろに飛んだ。

だが、間合いを詰めるために飛んだ口口のほうが早かった。

ロロはスナイドの顔の前でにやりと笑った。

ロロ「ノロマ」

ロロの拳がミシリと音を立て、スナイドの腹部にめり込んだ。

スナイド「ガハッ!!」

スナイドはそのまま崩れ落ちた。

息が、できない。

ロロの拳は的確に急所に命中していた。

スナイド（この男…）

スナイドはロロをにらみつけた。

スナイド（油断した…

”グッドナイトキス” 受けて、こんなに動ける男、今までいやすなかったよ。

こいつがAクラスの賞金首なんてありえない!）

ロロはニヤリとスナイドを見下した。

ロロ「おれのパラダイスは誰にも壊させねえ」

ロロの狂った笑みを、スナイドはただ見つめた。

スナイド（大事なモンのために、  
精神が肉体を凌駕した。）

スナイドは「訂正」とつぶやいた。

スナイド「やっぱ、背エ以外は似てる」

ロロ「辞世の句はソイツでいいな」

スナイドは溜息をついた。

スナイド「あーあ」

雪が舞い始めた。

その日、トランプに衝撃が走った。

「スナイド元中佐がやられた！」

「Aクラスの賞金首だぜ！？」

ありえねえ！」

すぐさまキング、ジョーカーによるハイレベルミーティングが開催させた。

カグヤ「ハンターズがSクラスに引き上げるまで、待つてはいられない。」

リケ「確かに。あのスナイドさんが敵わないなんて、かなりの危険人物ですよ」

ジョーカー「トランプの案件対象とする声明を出しておこう。

本件はハートに任せてよいな？」

カグヤ「はい」

リシュリユー「トウジロウ！」

日も落ちかけ、

だが、煌々と明かりのついた本部を背に、  
財布一つでどこかに出かけようとするトウジロウを、  
リシュリユーは呼びとめた。

トウジロウは振り返らなかった。

リシュリユー「スナイドの件だけど……」

トウジロウ「アイツが自分で首突っ込んだ世界や。」

いつかこうなることくらい、アイツが一番わかつつたハズや」

リシュリユー「…飲みに行くの？付き合っわ」

トウジロウは背を向けたまま、手をヒラヒラと振った。

トウジロウ「一人で飲みたいねん」

リシュリユーは去りゆくトウジロウの背中を、見えなくなるまで見つめていた。

リシュリユー「…スナイド…どうかあなたが最後に思い浮かんだのが、

彼の姿ではありませんように…」

リシュリユーはポツリと「ごめんね」と付け足し、仕事に戻った。

数日後、ジョーカーが出したトランプの声明にせかされるように、ハンターズは情報の更新を行った。

——賞金首”イカれ帽子屋” ロロ・ウー ランク S1——

### 13・3・黒い三日月―晩安―（後書き）

さて、なんだか悲しい結末ですね。

ですが、ロロはあくまで「悪」であることの再認識ができる話がほしかった。

女でも容赦ない、

自分の仲間以外にはとことん冷酷、ロロはそんな人間です。

トウジロウとスナイドは関わり合いがあったようですね。

次回はそれについてのお話。

スナイドの過去話です。

ロロの過去話とは違った文体に挑戦してみました。

次回は4/29更新予定〜！

13・4・黒い三日月―夢到我―（前書き）

女賞金稼ぎスナイドの過去。

文体のイメージは洋楽女性歌手の歌詞の日本語訳。

ねえ。

初めてあなたに会ったのは、  
山中でのサバイバル演習の時だったね。

「スナイド、見て、あの人」

友達の視線の先、  
一際体格の良い黒髪黒目の男。

「ほら、例のジパング人の…」

スナイド「ああ、あれが」

「うちらより先輩のはずなのに、まだこの演習受けてるよ」

スナイド「単位落としたの？ダッサ」

当時から、言い寄って来る男はごまんといたけど、  
どいつもこいつもあたしより弱いし、女々しいし、

男になんて、ちつとも興味持てなかったんだよ。

周囲から天才と呼ばれ続けてきて、

…正直、周りは自分より下だって、見下してた。

キリス「本演習を担当するキリス・シュナウツァーだ。

できない者、貧弱な者は置いて行く。

どうしたら評価されるかは、事前講習で話したな。」

キリスはくじの入った箱を取り出した。

キリス「班分けをする」

…今でもはつきり覚えてる。あたしがくじを引いたのは最後から2番目だった。

スナイド（…ん？クジが一つ足んない）

スナイド「マスター、クジが…」

キリス「どうした、ジパング人、あとは貴様だけだぞ」

スナイド（えっ？）

マスター・キリスは空の小箱に、さも最後のクジが入っているかのように箱をゆすったんだ。

そしたらあなた、ニヤリとしてこう答えたね。

「他の全員決まっとんのんやったら、  
一人足りひんばんがクジの中身やん。  
それとも、ワザワザ取らなあかん理由でもあんの？」

あの時のキリスの顔、ホント今でも笑えちゃう。

「わースナイド！よかった！同じチームだ！  
…けど」

友人は迷惑そうな視線をある一点に向けた。

「あのジパング人も一緒とか、最悪…」

あの子、あなたにわざと聞こえるように言ってたけど…やっぱり聞こえてたよね。

あれは演習の最終日だった。

ポカやらかして、崖から落ちかけた時だった。

山籠り用の荷物をすべて落とし、なんとか崖に手をかけ、でも、疲労と恐怖で体がうまく動かなくて、もうだめかと思った。

班員たちはみんな、演習の講習会のキリスの言葉を思い出し、記録を優先して先へ行った。…当たり前だ。

けど、あなたは違ったね。

しびれてガクガク笑いだしたあたしの手を、しっかりと掴んでくれた。

スナイド「なにやってんだよ！

あたしに恩でも売りたいわけ！？」

…あなたのあの呆れた顔…。

「アホか！オレがやりたいからやっとなねん！」

良い意味でも悪い意味でもマイペース。

班員の中でも知識、技術、何をとってもピカイチだった。

普通にやってれば、すんなり通れるのにさ。

班員に追い付きかけた頃だった。

「…あー、そうや、お前、オレ助けたったから、オレの荷物持てや。」

上がりかけてたあなたの評価は急降下。

スナイド（…女に荷物持たせるとか、マジサイテー。）

ヘトヘトになりながら、その日の夕暮にようやくゴール。

結局班員には追いつけなくて、こちら二人ビリッケツだったっけ。

キリス「荷物はどうした、ジパング人」

スナイド（あれ？）

「ない」

キリス「貴様…」

演習のルールに、荷物も確実に持って帰るよう明示していたハズだが？」

確かにそうだった。

スナイド「待ってマスタ…」

「本番でも仲間より荷物を後生大事に持って帰れいうんか？  
オレは意味ないルールには従わへん」

もー、あの時のキリスのキレっぷりといったら。

でも、後から聞いた話だけど、  
キリスの授業のほとんど、  
「ジパング人だから」

っただけで、落されてたんだね。

スナイド「あたし、直談判してくるよ！許せない！」

「やめとけ」

あなたはこう続けたね。

「オレに文句ない実力さえあれば受かんねん。  
別に騒ぐことやない」

スナイド「……」

驚いた、あなたのモノの考え方。

その後もいくつか同じ講義受けて、  
だんだん仲良くなっていたね。

どの講義も優秀で、  
本当に、

生まれて初めて、

この人は天才だと思った。

自分が恥ずかしくなるくらい。

あなたはあたしを妹分だと思っていたみたいだけど、  
あたしは違ったよ。

何回告白したって、本命の彼女にはしてくれなかったよね。

何回か付き合ってくれたけど、  
そのたびに「やっぱちゃう」。

…何が違ったんだろ。

そのうち、本命の彼女ができちゃってさ、  
卒業して、トランプ入ったから、  
あたしも後を追ってトランプに入った。

あなたはキングになって、あたしは中佐まで上り詰めた。

あなたのもとで働けて、  
あたしは本当に幸せだった。

でもさ、本命の彼女が卒業するタイミングで結婚するって聞いてさ、

なんか、  
なんだか疲れちゃったんだよ。

地位も仕事も全部捨てて、  
今じゃただの賞金稼ぎ。

あの後、ちゃんと結婚したのかな？

キング下ろされちゃったって聞いたよ？

今までいろんな男に出会ったけど、  
やっぱりあなたが一番。

あたしにとっては神だった。

ねえ、現スペードのエースさん。

あなたの心の中に、少しでもあたしがいてくれたら、うれしいんだ

けど。

13・4・黒い三日月―夢到我―（後書き）

恋する乙女の気持ちってこんなかなと想像で書いています。

ちなみにトウジロウは正義の味方側トランプにいますが、  
べつに「いい人」でも「善人」でもありません。

美女に迫られれば悪い気はしないし、  
でも本気で来られるほどこっちは本気じゃないよ、みたいな。  
女性からみたら嫌な男で書けたらなと、  
男から見たら友達にはなりたくないけど共感できる部分がある  
みたいな男で書けたらなと思ってます。  
まあ、まだ遠いですが。。

さて、次回は5/8 本編第14話更新予定！

## 14・perilous arriance(前書き)

一か月ぶりの本編。

突然13話の続きからはじまります。

## 14・perilous arriance

エオル「どういふことか、話してもらおうか？」

悪魔との戦いを終え、静けさを取り戻した教会に、エオルの声が響いた。

息を切らし床に転がっていたフィードは、エオルの足元でぐったりとしている男を指差した。

フィード「それよりソイツ、なんとかしてやれよ」

パワーモは悪魔に取り付かれていたダメージが大きかったためか、意識を失ったままだった。

エオル「君ね…そうやってまた話を逸らす！また秘密にするつもり！？」

フィードは面倒くさいと言うように眉を寄せた。

フィード「つせーな、ちゃんと話してやつから。」

まずは状況整理して、俺様が眠りこけてた間の説明をしる」

エオル「…」

よしの「エオル様…まずはパワーモ様と村の皆様を…」

エオルはフィードから視線を外さず、軽くため息をついた。

エオル「…そうだね」

教会の中で起こった事実と、パワーモが倒れた現実とは、村人たちにショックを与えた。

「嘘だ…」

「よりによって悪魔に騙されていたなんて」

「なんと取り返しのつかないことを」

「これから何のために生きてゆけばいいんだ」

エオルたちはただその様子を見ていることしかできなかった。  
言葉が見当たらない。

憔悴しきった様子のミーワルがエオルのもとに寄ってきた。

ミーワル「…パワーモは大丈夫なのかい？」

エオルは顔をしかめた。

エオル「取り付かれ」のショック症状なので直に目を覚ますとは…  
念のためお医者さんに」

ミーワル「この村に医者はいないよ」

エオル「えっ…」

ミーワル「これも運命なのかもね」

ミーワルはクルリと踵を返した。

よしの（…）

フィード「なんだこの辛気くせえヤツらは」

エオル「あのね！恩人たちに向かって何てこと言つの！」

フィードはため息をついた。

フィード「腹減った」

エオル「それどころじゃないでしょ」

「で？」

エオルは横目でジロリとフィードを見た。

「こっちはこれまでのことを一通り話しましたけど？」

フィード「……」

フィードは一瞬チラリとエオルを見て、再び視線を元に戻した。

フィードは鼻から息を吸い、パカリと口を開けた。

「何やってんだ！」

突然の怒鳴り声。

フィードたちは声のする方に目を向けた。

声の主は村の男。

その視線の先にはミーワル。

ミーワルの手元には包丁。

その切っ先は真っ直ぐにミーワルの喉元を向いていた。

エオル「ミーワルさん……!？」

村の男は子どもをあやすような口調で語りかけた。

「バカな真似はよすんだ、ミーワル！」

ミーワル「私は……悪魔なんかには騙されて……取り返しのつかないことを……」

もう神使教徒でいる資格も……生きる資格すら、ありやしないよ……!」

”取り返しのつかないこと”

天使の言葉は神の言葉と信じ、あらゆることに手を染めた。  
その時は、なんの罪悪感もなかった。  
なぜなら神の言葉は正しいから。  
そうだと信じ、思い込んでいたから。

だが、違った。

神の言葉などではなかった。  
冷静に考えればわかったことなのに…。

ミールを怒鳴りつけた男は膝をつき、うなだれた。

辺りにすすり泣く声が聞こえだし  
それはすぐさま沢山の嗚咽に変わった。

フィード「…」

エオル（…これは…これが）

——絶望…！！——

よしの「…」

よしのは唇をかみ、拳を握りしめた。

よしの（…これは…私ではお救いできない）  
そして瞳を固く瞑った。

——皆様をお救いできるのは…あなた様しかおりませんわ——

「はいはいはい！」

パンパン！と手をたたく乾いた音が響いた。  
村人は音の先を注視した。

よしの（そうです、あなたです…！）

音の先——そこに立っていたのはパウーモだった。

パウーモはズカズカと村人たち集まりの真ん中に入って行った。  
勢いがよすぎて、へたり込む村人を何人が蹴ったり踏みつけたりぶつかって転けたりしていた。

エオルは苦笑した。

エオル（ちよつとちよつと！パウーモさん…）

パウーモ「みんなちよつと暗いよー？」

ミーワルはすぐさま反論した。

ミーワル「そりゃそうだよ！

私たちは取り返しのつかないことをしたんだ！

神使教徒でいるのも生きているのも、もう資格なんてないんだよ！」

パウーモは豪快に笑った。

パウーモ「その資格って、誰が決めるのよ？」

ミーワル「…？！か、神に決まってるじゃないよ」

パウーモは深く頷いた。

パウーモ「じゃあ俺たちからその資格を辞退する権限はないよ。

罰は神様が下してくださる」

辺りは静まった。

パウーモはにつこりと笑った。

パウーモ「病にかかるかもしれないし

事故にあうかもしれない、

はたまた罪悪感を感じながら生き続けろって言うかもね」

パウーモはすうつと息を吸った。

パウーモ「俺たちは甘んじてそれを受け入れよう」

村人たちから嗚咽も、すすり泣く声も、消えていた。

ミーワルの手から包丁が滑り落ちた。

ミーワル「私らバカだねえ…こんな近くに”救い”があつたのに」

パウーモ「まあ、バカつてのはいいもんさ、まだまだ学べる余地がある」

よしの（…？）

ミーワル（…あれ…？）

エオル（…！！）

その場にいた全員が、気がついた。

ミーワルと話しているはずのパウーモはミーワルの方を向いていない。

フィード「…」 持ってた”な」

ミーワルはパウーモの肩に触れた。

ミール「パワーモ…あんだ…目が…！」

パワーモは笑った。

パワーモ「これはみんなを、一瞬でも絶望に落としてしまった僧侶への…天罰だ」

ミール「…！！」

パワーモ「命は奪われなかった。

これからもみんなに教えを説け、そう言ってるんだって、神様は」

よしのは祈るように手を組み、固く目を閉じた。

泣かないように、泣かないように、  
そう思つて全身に力を入れたが、  
後から後からこみ上げる涙が、  
固くつむつた目から溢れ出した。

パワーモは上を向いた。

パワーモ「よしの様！」

よしの「……………！！！」

フィードはよしのを軽く肘で突つついた。

フィード「応えてやれ」

よしのは嗚咽で返事をする事ができなかった。

パワーモはにつこりと笑った。

パワーモ「目は見えなくなっちゃったけど、

今ハッキリ見えるよ、”希望”が」

——みんな、悪夢から目が覚めた。

その目を覚ましてくださったのは、

あなたがなんとかしようと言ってくださったからだ——

パウーモは大きく息をすった。

パウーモ「あなた様のおかげだ！！本当にありがとう！！！」

ミーワルは耳を塞いで苦笑いした。

ミーワル「デカいよ、声が」

よしの「……！！」

よしのはしゃくりあげながら思い切り鼻をすすった。  
そして大きく息を吸った。

よしの「ふあい！！」

よしのもパウーモに負けず劣らずの大声で答えた。

フィードは迷惑そうに小指を耳に突っ込んだ。

フィード「だーれが声のデカさも応えろっつったよ」

1日村でゆっくりし、

片付けの始まりだした教会を尻目に、

一行は村を出た。

キュッキュと新雪が足に空気を押し出され、  
三人分の足の形を作ってゆく。

エオル「…本当に神様の罰だったのかな」  
エオルはまだ呆けているような気のない声でポツリと漏らした。

フィード「アホか、たまたま悪魔に”持っていた”だけだろ」  
よしのは腫らした目をフィードに向けた。

よしの「”持っていた”か？」  
エオル「ああ、悪魔に”取り付かれ”た人は最終的に体も魂も全部  
乗っ取られるんだけど、

たまたま助かった人でも体の一部とか器官とか感覚をとら  
れちゃうんだよ、

それが”持っていた”ってやつ」

よしのは不安そうにフィードを見た。

よしの「フィード様も何か”持っていた”のですか…？」

エオルもフィードを見た。

フィードはズカズカと二人より速く歩を進めた。

エオル「ちよっと！フィード…」

フィード「別に体のどっかは取られちゃいねえよ」

よしのに抱えられていたクリスはパタパタと尻尾を振った。  
エオル「…クリス！」  
クリス「ミャー」

エオルはよしのからクリスを奪い取り、激しく揺さぶった。  
エオル「お前、フィードに何したんだよ！操ってんのか！！」

フィード「ちげー」  
エオルはフィードを見た。

フィード「俺様とソイツはたまたま”利害”が一致している」  
エオル「…その言葉もクリスの言葉かもしれない」

よしの「エ…エオル様…」

よしのはエオルの肩に手を添えた。

よしの「そこまで疑いにならなくても…」

エオルはまるで危険なものを持つようにクリスの首根っこを掴んだ。  
エオル「白山羊の悪魔”…そんなの一人しかいない…」

――トランプ本部 会議室

ジョーカー「白い悪魔だと…」

カグヤはガタリと椅子から立ち上がった。

カグヤ「まさか…」白山羊”…！？」

シェンは答えを伺うように隣に立つトウジロウを見上げた。  
トウジロウは苦々しい顔を浮かべた。

トウジロウ「ああ…見るのは初めてやけど、分かるわ」

——この世で唯一真つ白な悪魔  
悪魔の世界・魔界<sup>アビス</sup>の第一王子”ノツシュナイド”…！！

場の全員が呆気にとられた。

リケ「”ノツシュナイド”って…

”魔王階級<sup>サタンクラス</sup>”の大悪魔ですよ…！！

「なんたつてそんなところに」

ジョーカー「”ノツシュナイド”は9000年前から行方不明と聞いたことがある」

全員がジョーカーに視線を向けた。

ジョーカーは肩をすくめた。

ジョーカー「魔界に限らず、どこをうろついてもおかしい話は言えん」

カグヤは乱暴に椅子に腰掛け、頬杖をついた。

カグヤ「…」乗つとられて”魔導師犯罪組織か…筋は通らんでもない」

ジョーカーは中空を睨みつけた。

ジョーカー「危険だ、非常に…！！」

カグヤ「”キング出動レベル”…？」

ジョーカーはトウジロウを見た。

ジョーカー「アーティファクトを持っていたとして、イケそうだったか？」

トウジロウは”あの記憶”をたどった。

白い煙の中でうごめく白い、巨大な影。  
その影から一瞬だけ覗いた、巨大な、この世の物とは思えないまが  
まがしい瞳。

トウジロウは肩をすくめた。

トウジロウ「さあな、神使教で言うところの”神に挑む”レベルの話  
や」

リケはゴクリと喉を鳴らした。

リケ（”あの”トウジロウさんさえ戦意を…）

トウジロウはニヤリと勝ち気な笑みを浮かべた。

トウジロウ「おもしろい話やんけ」

カグヤはヤレヤレと吐き捨てた。

カグヤ「冒読者が」

リケ「戦闘狂」

シエン「試し切りマニア」

トウジロウ「お前ら…」

ジョーカーはゴホンと咳払いをした。

ジョーカー「”グランドセブン召集令”を発動する」

シエンは大袈裟に笑った。

シエン「ちよつとちよつと！」

もうトランプで何とかできるレベルじゃないってことかよ

！！」

ジョーカーは即答した。

ジョーカー「そう言っているつもりだが？」

シエンは自分の体から空気を抜くように深いため息をついた。

ジョーカー「体制を指示する」

シエンは肘を組んだ。

シエン「どうぞ」

ジョーカー「リケとトウジロウは体制が整うまでは引き続きギルティンを追え」

リケ「はい！」

トウジロウ「わかった」

ジョーカー「カグヤはスペードの指揮もと、潰せる案件は潰せ」

シエン（…ん？）

ジョーカー「僕は魔導師協会との調整にかかる」

ジョーカーはシエンを見た。

シエン「…ええと、残る仕事って」

トウジロウ＆リケ＆カグヤ「肝」だな」

ジョーカー「グランドセブン集めはお前だリーシエル」

シエンは思い切りうなだれた。

シエン「ええ〜！俺え！？」

なんだよ、その龍の首の球取ってこいみたいな…」

ジョーカーは視線を外した。

ジョーカー「そう言っているつもりだが？」

トウジロウ（押し付けた）

カグヤ（押し付けたな…）

リケ（押し付けた…）

ジョーカー「まあ、そのうち4人はすでにいるしの」

――魔導師協会 会長 オード・メロワマール

――トランプ ジョーカー ゼレル・ビノク・スロトモン

――トランプ ハートのキング 市松芳也

――トランプ スペードのエース 市松桃次郎

ジョーカーはニカツとわざとらしく笑った。

ジョーカー「あとたったの3人じゃ」

シェン「この場合はあと3人”も”っていうんだよ」

シェンは腰に両手をあて、盛大にため息をついた。

シェン「リョーカイ」

ジョーカーはパンと手を叩いた。

ジョーカー「じゃあ解散！」

カグヤ「シェン、早速だが引き継ぎを」

シェンは「あーハイハイ」と自分の執務室に戻りかけたが、ハタと止まった。

シェン（あれっ？）

同時に、トウジロウと共に対ギルティンについて話し合おうとしていたリケも、

こちらは危つく心臓が止まりかけた。

リケ（え…まさか…）

リケは恐る恐る進言した。

リケ「…あの…シェンさん不在の間のギルティンの件の管轄って」

トウジロウ「…」

カグヤ「…」

それは、

キングであるカグヤの下に、

エースであるトウジロウがつくことを意味していた。

シェンとリケは互いに顔を見合わせた。

「まじですか…？」

よしの「”ノツシュナイド”…？」

エオルは頷いた。

エオル「魔王の第一皇子にして、時期魔王の呼び声高い、最強の悪魔の1人だよ。」

9000年前から行方不明らしいけど？」

エオルは冷たくクリスを見下した。

クリス「男のクセに俺を見下ろすなっ！ハゲ上がるっ！」

エオル「ハゲ上がれよ！」

クリス「なにおう!？」

よしの「お二人ともっ！いい加減にしてくださいましっ！」

エオルは不服そうにクリスから目を逸らした。

クリスはよしのに飛びついた。

クリス「よしのちゅわゝ…んっ！!?」

よしのに飛びつきかけたクリスの尻尾をフィードが思い切り掴んだ。  
フィードはクリスの尻尾を持ち、グルグルと振り回した。

フィード「兎に角、俺様はコイツに操られてなんかねえし、コイツもそのつもりはねえ。

あくまで同盟だ」

エオルは腕を組んだ。

エオル「その一致している利害って？」

フィードはニヤリと笑った。

フィード「まあ、おいおい話す。」

エオルは不服だと言わんばかりにフィードを睨みつけた。

フィードは気にとめる様子もなく歩き出した。

エオル「じゃあ、あの”白山羊の姿”は…？」

フィード「…”悪魔契約”」

よしの「”悪魔契約”？」

エオルは息を飲んだ。

——悪魔契約とは悪魔と取引をして何らかの力を得ることを言い、  
三つの契約形態がある。

一つ目は”名義契約”

これは悪魔の名前を借りて精霊に働きかける、つまり魔法を使うための契約で、

魔導師達が通常魔法を使うために行う契約である。

対価は生命エネルギーまたは魔力であり、都度契約する単発的な契約形態となる。

通常は悪魔契約とはここまでであり、それより上の契約形態は非常に危険とされ、禁止されている。

二つ目が”身体契約”といい、全身または身体の一部を対価として悪魔の力を使う契約形態であり、

対価を差し出している間契約が持続する半永続的な形態である。

三つ目は”不死契約”

これは悪魔に魂を差し出し――

エオル「まさか……不死契約」とか言わないよね……」

フィードは鼻で笑った。

フィード「んな危ねえ橋渡るかよ」

エオル「……身体契約」……」

フィードはニヤリと笑った。

フィード「契約形態はな。

けど言っただろ？

俺様とコイツは同盟関係にある」

エオル「魔王の息子だよ……！？」

クリスはフィードに尻尾を掴まれ、逆さにぶら下げられたまま口を開いた。

クリス「俺はよしのちゃんさえいればいいから、抜けたきゃ抜ける」

クリスは極めつけにペツと唾を吐いた。

エオル（カッチーン）

「絶つつつ対、抜けない！！！」

エオルはクリスを指差した。

エオル「何企んでいるのか知らないけど！

お前の好きにはさせないからな！！」

よしの「あわわわ……」

火花を散らすエオルとクリス。

フィードは気にとめる様子もなく続けた。

フィード「で、その”身体契約”で手に入れたのが”イクセスブレイク悪魔合体”」

エオル「”イクセスブレイク悪魔合体”？」

フィード「悪魔を体に取り込んで、一時的に悪魔の力を手に入れる」

エオルは言葉を失った。

よしの「悪魔を…取り込む？」

フィードはガハハと笑った。

フィード「つまるところ合体変身だ！カッコイいだろ！」

エオル「バカっ！！！」

突然のエオルの怒鳴り声によしのは固まった。

エオル「そんな…そんな危ないこと…死んだりしたら…！」

フィードはニヤリと笑った。

フィード「俺様は死なねえ。

ついでに言うトランプや協会から逃げんのに、こいつクリス  
は必要だ」

エオル「そんなことまでして…本当にこのW・B・アライランスつ  
て何の意味があるの…」

フィードはよしのにクリスを投げ渡し、背伸びをしながら歩を進めた。

フィード「言つたる。秘密だ、”歴史が動くまで”な」

エオル「…」

よしのは心配そうにエオルを見上げた。

エオルはよしのの視線に気がつき、神妙だった顔をニコリと笑顔にした。

エオル「大丈夫だよ、ケンカじゃないから」

そう言い、フィードの背中に視線を向けた。

エオル「ほっとくと何しでかすかわからないから、

俺たちがキチンとセーブしてやらなきゃね」

よしのもフィードの背中を見、顔を引き締めた。

よしの「はい…！」

そのまま三人は順調に山道を進んだ。

エオルとフィードはあえてよしのに振らなかった。

トウジロウのあの言葉。

”だから本名乗れ言つてんねん！”

エオル（一番混乱してるのはよしのさんのはずだ…）  
フィード（ったく、無理しやがって）  
だが、フィードの悪魔契約の話と違い、  
ここで議論をしてもどうしようもない話だ。

クリスは欠伸した。

クリス（まったく…どいつもこいつも）

——嘘つきの集まりだな——

よしの「クリスちゃん」

クリス「なんだい？よしのちゃん」

よしの「ヤサカニのことをご存知なのですか」

教会で悪魔退治をした時、確かに言っていた——”昔ちよつとね”

クリスは尻尾をパタパタと振った。

クリス「うん、昔何回か神共と戦争したことがあってね」

エオル（何万年前の話！？）

クリス「その時に使われてるのを見たんだ」

よしのは語気が落ちた。

よしの「…戦争に使われていたのですか…」

クリス「アーティファクトってのは戦争のために創らせたもんだからねえ。でも」

クリスはよしのを見上げた。

クリス「今の持ち主がこんな素敵なレディなら、ヤサカニは幸せモノだよ」

よしの「…クリスマスちゃん」  
よしのはニコリと笑った。  
よしの「ありがとう」

——ヤサカニこの子達がいるならば今は……——

クリス「じゃあお礼にチューしてチュー？」  
よしのは立ち止まった。

よしのの目の前には指をボキボキと鳴らし、クリスマスを見下ろしている2人の魔導師。

よしの「…ええと……」

ラブリー「何よこの吹雪い——っ!!」  
ヴィンディア連峰 オーバーザスレンタ 乗り越えた先の希望 9 合目

視界ほぼゼロの猛吹雪の中、ヤクトミとラブリーは雪を蹴り分け進んでいた。

ヤクトミは盛大にため息をついた。  
ヤクトミ「元気なヤツだ……」

ラブリー「何——っ? 聞こえない——!」

この激しい風の中でも、ラブリーの甲高い声はハッキリと聞き取れた。

ヤクトミはコンパスを取り出した。  
ヤクトミ（方角は間違いない）

コンパスから視線を上げ、ヤクトミは気づいた。  
吹雪で白く塗りつぶされた視界。  
ラプリーの姿が見えない。

ヤクトミ（げ！！マジかよ！？）  
ヤクトミは駆け出した。

ヤクトミ「おーい！！勝手にうるちよろすんな！！どこだよー！！」  
吹雪く風の音の端で、微かに聞こえる——金切り声  
ヤクトミはとっさに声のした方角へ、走る向きを切り替えた。

ラプリーはその場にへたり込んだ。  
動かそうとしても、足に、いや、そもそも腰に力が入らない。

ラプリーの目の前には真っ白な毛で覆われた巨大なゴリラ。  
ゴリラは鋭利な黒い鉤爪を振り上げた。

ラプリー（生きなきゃ…生きなきゃ！！）  
ラプリーは辛うじて動く両腕で這い、ゴリラから距離を取ろうとした。  
た。

ゴリラは鉤爪を振り下ろした。

グラン・デ  
「小爆炎」

ドガンー！！

吹きすさむ雪の中、腹の底に響く爆音。

ラプリー「…！」

ラプリーは振り返った。

もくもくと黒い煙を上げる白ゴリラ。

白ゴリラは横に視線を向けた。

ラプリーもその視線の先に目を向けた。

ザクザクと音を立て、息を切らしたヤクトミが駆け寄ってきた。

ヤクトミは足を止め、ゴリラに向けて構えた。

ヤクトミ「ケガは！？」

ラプリー「な…い」

ヤクトミは小さくため息をついた。

ヤクトミ（イエティか…初めて見た）

爆炎魔法はその一つ一つが非常に殺傷能力の高い魔法である。

爆炎魔法使いたちの中で、物の強度や魔物の強さを測る基準が、

爆炎魔法の中で最小の威力である「小爆炎<sup>グラン・デ</sup>」が有効であるかないかである。

ヤクトミ（当たりはしたけど、あんまし効いてはない感じた）

イエティ「ガアア！！」

イエティはヤクトミに大きな腕を振り下ろした。

しかし、その前にヤクトミはイエティの懐に入り、顎に向けて掌を突き上げた。

イエティは大きく吹き飛んだ。

ヤクトミは手をヒラヒラと振った。

ヤクトミ（痛って…！！俺は凍った物殴ったのかよっ！！）

イエティはむくりと起きあがった。

ヤクトミはブツブツと呪文を唱え始めた。

ヤクトミ「コイツで終わりだ」

ブロム・エ・ス

― 火炎龍！―

辺りは少しの間、オレンジ色の光を放った。

やがてそのオレンジ色が消え、

ヤクトミはラプリーの元へ歩み寄った。

ヤクトミ「目エ離して悪かった」

差し伸べられた手を、ラプリーはしばらく呆けたように見つめていた。

ヤクトミ「？なんだ？やっぱどっかケガ…」

ラプリーの目からボロボロと大粒の涙がこぼれ出した。

ヤクトミはギクリとした。

ヤクトミ（ええ？！今度は何！？俺何か言った！？）

ラプリーは大声を上げて泣き出した。

ラプリー「うええゝゝん！！怖かったあゝゝゝゝ！！！」

ヤクトミは顔に手を当てて盛大にため息をついた。

ヤクトミ（なんだ…ビビった…）

ラプリーの涙は安心感の裏腹、悔し涙でもあった。

力が欲しいと願いつつ、

だが願うばかりでどうしたらよいかわからず、

今回もまた、ヤクトミがいなければ助からなかった。

” 自分は何もできない ”

ラプリーは堪らなく悔しかった。

ヤクトミは眉根をよせた。

ヤクトミ「なんだ、そんなことで泣いてんのかよ」

ラプリーはヤクトミを睨みつけた。

ラプリー「何よ！」

ヤクトミは立ち上がった。

ヤクトミ「モンスターなんて専門家が退治するようなもんだぜ」

ラプリー「…」

ラプリーはそっぽを向いて唇を噛み締め、涙を拭った。

ヤクトミ「俺も似たような時期があった」

ヤクトミは懐かしい思い出を辿るように目を細めた。

ヤクトミ「ライバルにいつもどうしてもかなわなくてな、

負けては毎日泣いてたよ」

ラプリーはキョトンとした。

ラプリー「魔導師って泣くの？」

ヤクトミ「お前な…魔導師をなんだと思ってんだ…」

ヤクトミは再び手を差し伸べた。

ラプリーは手を差し出した。

ヤクトミはその手を掴むとヒョイと引き上げた。

ヤクトミ「まあ、あれだ、経験者からのアドバイス」

ラプリーは雪を払った。

ラプリー「なによ」

ヤクトミ「背伸びしたって、届いた気になるだけだぜ」

ラプリー「じゃあどうしろってのよ」

ヤクトミは歩き出した。

ヤクトミ「強くなんのに、近道なんてないってこと！経験あるのみ！」

ラプリーは頬を膨らませた。

ラプリー「…死ぬかと思った最悪な経験だわ」

ヤクトミ「正気で」生きてりゃ無駄な経験なんてねえよ。

少なくとも俺はそう思ってる」

”正気で”という前置きに、ラプリーはトゲトゲしさを感じた。

ラプリー「？」

ヤクトミ（…）

シャンドラ「お前が今していることは、無駄なことじゃないって、本気で思ってたってんのか…？」

ラプリー「前向きなやつを考えることだわ」

ヤクトミは笑った。

ヤクトミ「一個いいこと教えてやるよ」

ラプリー「なに？」

ヤクトミ「魔導師の強さの秘密」

ラプリーは目を輝かせた。

ラプリー「なにになに？！」

ヤクトミ「後ろ向きになったら負け」

ラプリーはムカツとした。

ラプリー「悪かったわね!!」

ヤクトミは声を上げて笑った。

ラプリー「キー!!」

ヤクトミはピタリとラプリーの鼻先に人差し指を向けた。

ヤクトミ「負け」と言われてムカツとしたやつは、素質アリだ」

ラプリーはポカポカとヤを殴った。

ラプリー「いーみーわーかーんーなーいつ!!」

ヤクトミ「いいんだよ、わかんないほうが。」

この意味がわかったら強くなっただってこと」

ラプリー「どうしたら強くなんのかを教えなさいよっ」

ヤクトミ「自分で考えろ」

ラプリー「キー!!」

パンゲア大陸 ヴアルハラ帝国 グラブ・ダブ・ドリップ魔導師協

会管轄地区

魔導師協会本部「バベルの塔」最上階大広間

窓際のロッキングチェアが静かに一定のリズムを刻んでいる。

ドアが開く音――

ガルフィン「会長、ヤクトミから報告が入りました」

ロッキングチェアのリズムは変わらなかった。

ガルフィン「マーフ国北部のキーテジという町でW・B・アライランスの目撃情報を手にしたそうです」

会長「生きておったか…」

ガルフィン「…はい」

会長は「それで？」と話の続きを促した。

ガルフィン「そのキーテジという町は”アクロスザナル”と”ヴィンディア連峰”の登山道との中継地点らしく…」

会長「連峰越えか…」

ガルフィン「ええ」

会長は持っていたパイプをふかした。

会長「向こうはジパング人少女の足がある、直ぐに追いつけるじゃろう」

ガルフィン「…それが…ヤクトミ一人ならそうだったのでしょうか…」

会長はガルフィンに顔を向けた。

ガルフィン「なんでも道中助けた獣人の少女を連れているようで…」

会長「獣人の少女？」

ガルフィン「虐待を受けていたところを助けたらしく」

会長は顎に手を回した。

会長「獣人差別の色濃い地域じゃからのう…で、放っておけないと？」

ガルフィン「ははは、お前の教育の賜物だな、ガルフィン！」

ガルフィン「からかわないでくれ」という視線を向けた。

会長「だが、事は一刻を争う、少女は一旦こちらで保護しよう」

ガルフィンは頷いた。

ガルフィン「手配します。ナウム国のエリドゥの町で落ち合う予定

です」

次の瞬間

広間の扉が勢いよく開き、息を切らしたマリアとユディウスが入ってきた。

マリア「会長！大変！」

ロッキングチェアのリズムが止まった。

会長「何事じゃ」

ユディウス「ランプがジパング人の存在を確認しました」

ガルフィン「！！」

会長は目を瞑った。

会長（目立たぬようスペリアルマスターを使わなんだは失敗じゃったか……）

会長は目を開けた。

会長「すまぬ、僕のミスじゃ」

マリアは首を横に振った。

マリア「向こうはプロですから」

ユディウス「切り替えて国際対応に移りましょう」

マリアはガルフィンを見上げた。

マリア「てなわけでやっくんの回収よろしく！」

ガルフィン「…丁度次の町で落ち合う予定だ」

ガルフィンを見上げるマリアの心境は複雑だった。

ガルフィンは親友を必死で追うヤクトミの担当教官。

ユディウスはこの騒動の張本人であるフィードの担当教官。

マリア（2人とも、私の何百倍も辛いはず、私がフォローに回らなきゃね）

しばらく黙っていたマリアを見、ユディウスとガルフィンと同時に口を開いた。

ガルフィン「余計なことはしないでいいぞ」

ユディウス「余計なことはしないでいいですからね」

マリアは目をパチクリさせた。

マリア「あら？」

会長は再びロッキングチェアを揺らした。

会長「スペリアルマスターたちを召集じゃ、それと、ランプのジョーカーを呼べ」

ユディウス「ジョーカーを？」

会長は頷いた。

会長「国際対応のため」には詳しい情報を入手することと、

”互いの意識合わせ”が必要じゃからの」

ユディウスは肩をすくめた。

ユディウス「なるほど」

ガルフィン「なら他のスペリアルマスター召集はその”意識合わせ

”後のほうが良さそうですね」

ユディウス「マリア、ジョーカーを呼んできて」

マリアはニコリと笑った。

マリア「OK」

ガルフィン「俺はスペリアルマスターたちのスケジュール調整をしておこう」

ユディウス「頼むよガルフ。」

私は国際対応の事前準備をするよ」

会長「…」

その様子を見ていた会長はにっこりと笑った。

会長（…もう一つ、ジョーカーとの話題が増えたのう）

エオル「あ」

エオルは立ち止まり、後ろを振り返った。

よしの「どうされました？」

フィード「なんだよ？」

エオル「多分…もう国境越えてる」

フィードは「ハア？」という顔をした。

よしの「え——っ！」

フィードはよしのを見た。

よしの「線が全然わかりませんでした…」

フィード「は？線？」

エオル「ほら、よしのさん国境を知らないって話あったじゃん。

確か…山越えてる途中」

フィード「あー…そっぴやあつたな、そんな話」

よしの「残念です…」

クリスは尻尾をパタパタと振った。

クリス「大丈夫だよ、よしのちゃん。

国境なんてこれからいくつでも越えるんだから」

よしのは目をパチクリさせた。

よしの「そうなのですか!!」

エオル（そうだ…ジパングへの道のりはまだまだ遠い…トランプの追撃を凌いでいけるんだろうか…）

エオルはフィードを見た。

エオル（クリスの力を使えば、実力以上の敵からも逃げられる。

けど、それまでだ。

”あの状態”で敵と戦えるまでフィードの体は持たない）

エオルは天を仰いだ。

——何とかしなきゃ——

## 14・perilous arriance（後書き）

1年でようやく国ひとつ超えました。

長すぎる、フィードたちの足が許す限り、  
もう少しスピードアップしようと思います。

さて、次回からは小話4連続。

・1話 これまでのおさらい。

・2話 ハートのエース初登場。「A」シリーズとして連載予定。  
エーペリオド

・3話 スピードとクラブのエースのお話。「N・B・Chase」  
エヌビーチエイズ  
シリーズとして連載予定。

・4話 スピードのキングのお話。「トリックビートtrick beat」シリーズとして連載予定。

を予定しています。

次回は14・1話。5/15更新予定！

14・i・明解!W・B・アライランス!2(前書き)

だいぶ長くなってきたのでひとまずおさらい。

## 14・1・明解！W・B・アライランス！2

さて、ようやく国新しい国に入った一行  
ここでちょっとこれまでのおさらい

これまでのおはなし

### ■ 1～3話 はじまり

マーフ国の首都アトリー。

たまたま出くわしたトランプに

魔導師犯罪組織”W・B・アライランス（魔導師クソ食らえ同盟）  
”結成を宣言。

何も知らずにただフィードについて来たエオルも当然追われる身  
に。

追っ手から逃げるため、アトリーの東北部に広がる大沙漠アク  
ロスザナルを一路東へ。

砂漠越えの途中で見せ物小屋の商品だった獣人の少女ラプリイを  
助ける。

アトリーより東の町カーシーでラプリイと別れたフィードとエ  
オルは記憶喪失の少女染井よしのと出会う。

いろいろ秘密がありそうなよしのに興味を抱いたフィードは彼女  
を故郷ジパング国に連れて行くことにする。

しかし、ジパング国は長年魔法の恩恵で生活している”魔法圏”  
に異を唱え敵対する宗教”神使教”の総本山。

そのジパングの民であるよしのと犯罪魔導師であるフィードとエオルが共にいることは

魔法圏と神使教の対立を深める大事であつた。

フィードからジパング人を人質にとつたという犯行声明を受け取つた魔導師協会は

ジパング人人質の事実をもみ消すため、

トランプとは別でW・B・アライランスを追うことに。

#### ■ 4～6話 追う者と逃がす者

ジパングへ向け北を目指す一行はカーシーの町を北に抜け、再びアクロスザナルに入る。

そのアクロスザナル北部一帯を流れる流砂の大河”砂の大河”で協会の追つ手でありフィードの旧友ヤクトミと、その担当教官ガルフインの追撃に合う。

窮地にたたたされるが、

フィードの一か八かの大博打で”砂の大河”の西端”大砂瀑布”の滝壺に突つ込む。

一行が目覚めると、滝の裏側の洞窟に流れ着いていたが、そこは凶悪な魔物の巣であつた。

なんとか魔物を倒したが洞窟の中に閉じ込められ、一行は再び窮地に立たされる。

そんな一行を助けたのは謎の少年”チェシャ猫”であつた。

#### ■ 7～9話 悪魔の薬

洞窟を抜けたどり着いたのは”アクロスザナル”と”ヴィンディア連峰”の中継地の宿場町キーテジ。

一行はそこに蔓延していた”魔薬”で住民とトラブルを起こしてしまう。

また”魔薬”事件を捜査していたトランプは

首謀者ギルティンによつて隊員が犠牲となつたことから  
事件の担当にトウジロウを据え置く。

しかしギルティンに関する有力な手がかりはなく、  
キーテジの町で得た情報から、

ギルティンとW・B・アライランスに関わり合いがあるとし、  
W・B・アライランスを追うことに。

#### ■ 9-11話 ヴインディア連峰越え

ヴィンディア連峰を越えていたW・B・アライランス一行は  
待ちかまえていたトランプと出くわし、一戦交える。

何とか逃げ切つたものの、

下山途中で再びトランプ出くわし山小屋に追い詰められ、  
トウジロウと交戦する

#### ■ 9-14話 ラシャ村

エオルが目を覚ますと、

そこはヴィンディア連峰にひっそりと暮らす隠れ神使教徒の村だ  
つた。

村人たちが崇める”天使様”に命を狙われることとなつたエオル  
とよしのは

村人たちの目を覚まさせるため天使の正体を暴くことに。

しかし暴いた天使の正体は魔法の力の源である”悪魔”だった。

その悪魔を撃破したのはよしののアーティファクト”ヤサカニ”  
の新能力と

悪魔であるクリスの力を得ておぞましい姿に変身したフィードで  
あつた。

フィードのような悪魔の力の借り方は、

非常に危険なものとしてタブーとされている。

フィードはクリスとは利害一致しているから大丈夫と言うが、  
一度使えば3日は寝込むほどのものである。

対トウジロウ戦、対悪魔戦ともに何もできなかったエオルは  
フィードに危険な力を使わせないよう何とかしなければと思うの  
だった。

#### 登場人物

##### ■ W・B・アライランス

協会やランプの追撃を振り切り、マーフ国を北に抜け、ナイム  
国へと入る。

よしのの故郷ジパングに行くため、  
年に一度の巡礼船を目指しパンゲア大陸東部の国、ファンディア  
スはファリアス港を目的地とする。

##### 【シャンドラ・スウェフィード（フィード）】

W・B・アライランス結成の張本人。

結成の理由は「歴史が動くまで」秘密」

性格は型破りで非常識かつ自己中。

大悪魔ノツシュナイド（クリス）と悪魔契約を交わし、

絶大な力を得るが、

すぐ疲れるので長時間は使えない。

破壊力満点の”爆炎魔法”の使い手。

##### 【エオル・ラーセン】

フィードに騙されてW・B・アライランスの一員として指名手配  
となったエルフの青年。

マジメで常識的、優しい性格。

トウジロウに大敗し、  
悪魔退治でも役に立たず、  
オマケにフィードが危険な力を使っていることを知り、  
何とかしなければと思い始める今日この頃。

### 【染井よしの】

記憶喪失のジパング人少女。  
おっとりとしているが芯はしっかりしている。

謎の少年”チェシャ猫”の導きによりフィードたちと出会う。  
強力なアーティファクト”ヤサカニ”のパーツを集めるのが使命  
だが、

もともと手元にあるパーツすら、まだ能力が謎のまま。  
現在判明しているのは以下

・ボウイサナ 強力な水鉄砲”爆流攻”を武器とする水龍。

水分が多いところでは場合によっては鯨の姿になる。

・せんゆ ライムグリーンに輝く狛犬。

傷を癒やしたり魔法を強制解除したりできる。

初めはフィードとエオルに対して遠慮がちだったが、  
徐々に積極的になってきた。

### 【クリス（ノツシュナイド）】

W・B・アライランスの非常食の黒猫…とされていたが実はフィードと契約を交わす大悪魔。

魔王の息子で9000年間行方不明だった。  
なぜフィードとつるんでいるのか。

これまで出てきていた”謎の若い男の声”はクリスである。  
また女の子が大好きで、

よしのに対しては尻尾をパタパタさせてかわいこぶるが、  
エオルやフィードに対しては冷たい上に性格が悪い。

## ■トランプ

一時はW・B・アライランスを追い詰めたが逃げられる。

その際トウジロウが見た”白い悪魔”、

白い悪魔はこの世でただ一匹、大悪魔ノツシュナイドしかない。

一連のW・B・アライランスの騒動は

フィードがノツシュナイドに乗っ取られて引き起こしているものと仮説を立て

トランプの戦力では対処できないと判断。

そのため、最強の7人の魔導師”グランドセブン”を召集すること。

ただ、

溜まっている業務や、

神使教と摩擦発生の可能性があるギルティンの魔薬事件、

またグランドセブン召集に当たって魔導師協会への展開など

同時にこなさなければならぬ仕事は山積み

ジョーカー…総帥

キング…将軍

エース…副将軍

【ジョーカー　ゼレル・ビノク・スロトモン】

トランプのご意見番。

たまに厳しく、

だが普段は若いキングやエースたちとなるべく同じ目線にたって相談にのるようにしている。

たまに指示を出したり指揮をとったりする。

ただ、実際ジョーカーには指示を出したり指揮をとったりする権限はなく（＝独裁を防ぐため）

キングたちが従うのは彼への信頼からくるものである。

魔導師協会にW・B・アライランスとノツシュナイドの件の展開と協力要請のため、

協会長と話し合いの場を持つ予定。

【スペードのキング リ・シェン】

大胆不敵で明朗快活、若さ溢れる人気者。

グランドセブン召集の命につく。

妖精”リンリン”と常に行動を共にしている。

【スペードのエース 市松桃次郎（トウジロウ）】

おっかない上に容赦を知らない天才魔導師。

ギルティン事件捜査担当。

カグヤと何らかの因縁がある模様。

【ハートのキング 市松芳也（カグヤ）】

トウジロウと因縁のある王子様気質のクールビューティー。

グランドセブン召集のため留守にするシェンの代わりに

スペードの抱える案件も担当することに。

しかしそれはトウジロウがカグヤの下につくことを意味していた。

【クラブのエース リケ・ピストロー】

冷静沈着で”まともさ”をかねそろえたお姉さんの存在。

ギルティン事件の諜報活動担当。

マリアと同期。

【リシュリユー・ラプンツォット】

スペードの第一秘書官。

冷静でしっかり者。

大きな案件が積み重なり、軍の垣根を超えた体制となったトランプ。長期遠征中のダイヤ軍や行方不明のクラブのキング、トウジロウとカグヤの因縁などまだまだ明かされていない部分が多い。

#### ■グランドセブン

対ノツシュナイド戦のため集める必要がある”最強の7人の魔導師”。

とはいうものの既に半分以上はトランプ・魔導師協会におり、シエンは残り3人を集めればよい。

なお既に集まっているグランドセブンは以下

- ・魔導師協会会長 オード・メロワマール
- ・ジョーカー ゼレル・ビノク・スロトモン
- ・ハートのキング 市松芳也
- ・スペードのエース 市松桃次郎

#### ■魔導師協会

魔導師を管理する機関。

国際的に大きな影響力をもつ。

直属の機関には魔導師養成学校もある。

#### 【会長 オード・メロワマール】

魔導師たちの長。

これまでは神使教との摩擦を避けるため、トランプとは別でW・B・アライランスを搜索していた。トランプによしものの存在を確認された今、国際対応に向け、ジョーカーと会談を行う。

【ユディウス・ラーク】

フィードの学生時代の担当教官。  
トランプによしのの存在を確認された事を受け、  
国際対応の準備に取りかかる。

【マリア・フラーレン】

バツイチアラフォー熱血教師  
本件の張本人フィードと、フィードを止めようと追っていたヤクトミ、

それぞれの担当教官であるユディウスとガルフィンを気にかけている。

【ガルフィン・フォーン】

ヤクトミの担当教官。  
犬の姿をした獣人。  
不器用なりにヤクトミを心配している。

【ヤクトミ・ヴルナス】

ガルフィンのゼミ生。  
フィードの幼馴染。  
犯罪魔導師となったフィードに引導を渡すべく、  
フィードを追う。

【ラプリー】

ヤクトミにくっついてW・B・アライランスを追いかける獣人の少女。

もとは見世物小屋にいたが、  
アクロスザナル渡航中にフィードとエオルに助けられる。  
性格はかなりキツめ。

■ 犯罪組織ブレイメン

どういつ目的の組織なのか、すべてが謎。

【ギルティン】

魔導師でないのに魔導師を名乗り、  
「魔薬」 免罪符”をバラまく謎の男。  
ムー大陸を北上中？

【フォビアリ】

謎の闇ブローカー。  
何やらギルティンとは知り合い同士の様子。

■ 黒い三日月

新鋭の魔薬チーム。  
ファンディアス国はファリアス港を拠点としている。

【烏螺羅】  
ロロ・ウー

黒い三日月のリーダー。  
普段はのんびり屋でぼーっとしているが、  
その仕事っプリは冷酷で残忍。  
桃花源国の神使教の僧兵「道士」であり、  
不思議な術を使う。

キーワード

【歴史が動くまで】

W・B・アライランス結成の目的がわかる時。  
それがいつなのか、どういつきっかけで起こるのか、  
すべてがなぞ。

【チエシャ猫】

一行を導くなぞの少年。

【アーティファクト】

大昔、神と悪魔が戦争した際に使われた兵器。  
個々が特殊な能力をもつ。

トランプがW・B・アライランス対策として使用許可を出し始め、  
戦いは

・ 体術

・ 魔法

・ アーティファクト（の特殊能力）  
と複雑さを増す。

【神使教】

大地のエネルギーを消費する魔法での豊かな生活（＝魔法圏）に  
異を唱え、

自然回帰のスローライフを提唱する宗教。

魔導師たちと敵対する。

【悪魔】

エネルギーをもらう代わりに魔導師たちに魔法を提供する。

魔法が効かない、物理攻撃も効かない。

神使教の法術か、アーティファクト、または同じ悪魔同士でのみ、

倒すことができる。

### 【巡礼船】

年に一度、巡礼のため、鎖国中であるジパングが信者に入国を許可する。その際島国であるジパングに入国するための船。ファンディアス国のファリアス港から出航する。

魔薬事件、グランドセブン、トランプ、魔導師協会

「悪魔の薬編」の役者は揃いました。

W・B・アライランスはジパングにたどり着くことはできるのか？  
そして張り巡っている伏線たちは？！

## 14・1・明解！W・B・アライランス！2（後書き）

本家サイトに地図付きで載せています。

もし興味がありますれば←←

[http://usaginonegrade.choitoppuku.com/menu/contents/wba/su  
bmain/14-1-meikai-2.html](http://usaginonegrade.choitoppuku.com/menu/contents/wba/su<br/>bmain/14-1-meikai-2.html)

次回は14・2話 ハートのエースのお話。

5/22更新予定！

## 14・2・A・Ready!―(前書き)

14・2話は「A・(エーピリオド)」シリーズ第1話。

W・B・アライランスの”ノッシュナイド”問題で体制を大きく変えることを

余儀なくされたトランプ。

ただでさえ忙しいのに!

山を越える前にまた山が来た!

越えても越えても下りがない!

スピードの抱えている捜査中の事件(案件)を引き継ぐことになったハートは…。

## 14・2・A・Ready!

対魔導師犯罪警察組織「トランプ」

隊員の平均年齢は30代。

非常に若い。

なぜなら魔導師の仕事の中で、  
死と隣り合わせの最も危険な仕事であり、  
結婚や親の介護等を機に、  
より安全な仕事へと転職してゆくのが一般的だからだ。

トランプ本部 対魔導師犯罪第二軍の副将軍執務室。  
ハート エース

ライトブラウンの癖っ毛、  
黒ぶち眼鏡からのぞくブラウンの瞳

ハートのエース ウランド・ヴァン・ウィンクルは  
デスクの引き出しから封筒を取り出すと、  
制服のポケットに丁寧にしまった。

同時にドアをノックする音が執務室に響いた。

「エース、キングが呼びです。」

ハートの将軍<sup>キング</sup>執務室。

ウランド「…呼びですか」

独特のボソボソとした低い声。

カグヤは待ちかねたと言わんばかりにウランドを見据えた。

ウランドはいやな予感がした。

ウランド「…ご用件の前にちょっと話いいですかね」

カグヤは背もたれに寄り掛かった。

カグヤ「よかるう」

ウランドはそつとカグヤのデスクに封筒を差し出した。

その封筒にはある単語が書かれていた。

——辞表——

ウランドはつい先日、学生時代からの恋人と婚約したばかりであっ

た。

ウランド「…すみませんけど、辞め」

カグヤ「今は無理だ。許可できん」

カグヤは間髪開けずにピシヤリと言い放った。

これで何度目だろう。

辞表を出そうとするたび、タイミング悪く案件がどさどさと舞い込んでくる。

ウランドは頭をポリポリと書きながら封筒をしまった。

カグヤ「…毎度すまん。

だが、お前の力が必要なのだ。」

ウランド「…ま、エース選定や引き継ぎにも時間や稼働はかかりますしね…」

とは言いつつ、彼女の怒り顔が目に見え浮かぶ。

帰宅は遅いし休みも不定期、以前より彼女からは別の仕事に変えるよう耳にタコができるほど言われてきた。

帰りにケーキでも買って、機嫌でもとるか。

ケーキ屋があいている時間に帰れるだろうか。

ウランドがアレコレ考えていると、ドアをノックする音が響いた。

「失礼しまーっす！

おお！なんかキレイだな！この執務室！」

スピード  
対魔導師犯罪第一軍のキング リー・シェン

落ち着いた雰囲気だった執務室が一気に騒がしくなった。

ウランド「…？」

カグヤ「実は、W・B・アライランスの件で、

悪魔”ノツシュナイド”が絡んでいる可能性が出てきてな」

ウランド「…キツイことさらいと言いますね」

カグヤは「事実だ、仕方ない」と一言付け足し、続けた。

カグヤ「”グラントセブン”召集の任にスピードのキングがつくこととなった。」

ウランドはシェンを見た。

ウランド「…ご愁傷様です」

シェンは肩をすくめた。

シェン「キツイこと言うね。事実だけど。」

ウランドは溜息をついた。

ウランド「つまり、スピードの案件をウチが引き継ぐということですか」

カグヤ「そういうことだ。

そのためにスピードのキングにお越しいただいた。  
これから行うのはその引き継ぎだ。

A 会議室で行う。」

カグヤの声は、

普段聞きなれたウランドにしかわからないほど、  
ごくごくわずかだが、震えていた。

シェンはデスクに手をかけた。

シェン「そんなかしこまなくなつていいよ、

ここでちゃちゃつと概要説明して、

あとは資料見てくれたら。

わかんないことがあつたら聞いてくれりゃ答えるし。」

カグヤは表情を変えなかった。

カグヤ「…そうか」

シエンからの各案件の説明の最中、  
ウランドは外を見たり、椅子の背もたれや机のへりに寄り掛かったり、足を組んだり、  
とにかく態度が、上司たちの前であるにもかからわず”失礼”であった。

そう、この男、まったくといって落ち着きがないのである。

今でこそ2人のキングはなれたものだが、  
当初はジョーカーや、他のキングからかなり注意されており、  
結局いつまでたっても治らないため、  
周囲はあきらめた始末。

だが落ち着きはないが、話はきちんと聞いている。

それが態度として表れないのが問題なだけ。

いや、それが問題なのだが。

シエンからの説明が終わり、

シエンはカグヤの前に数枚の書類を差し出した。

案件移譲書——案件の引き継ぎの際にジョーカーへ提出するもの——  
書類にはすでにシエンのサインがあった。

シエン「あとはお前がサインしてくれたら提出はこっちでやってく

から。」

カグヤは「ああ」と相槌を打つと、  
万年筆を取り出し、書類に手をかけた。

その時、

シエンはカグヤの手からスルリと万年筆を取り上げ、  
クルリと上下の向きを変えると  
再びカグヤの指の隙間に戻した。

シエン「ペン逆。

だいぶ疲れてんな。ちゃんと休みとってんのか？」

シエンはコツンと手の甲をカグヤの頭に当てた。

ウランドはカグヤの顔が真っ赤になるのがわかった。

それは、ペンの向きを正されたためではないことも。

ウランドはデスクに手をかけ、書類をチラリとのぞき込み、シエンを見た。

ウランド「…スピードのキング、

書類が一部足りてないようですが」

シエンは「あれ？」と頬を掻くと、デスクの上の書類を確認した。

シエン「あー！ホントだ！ごめん！すぐ取ってくる！」

シエンは「お疲れなのはオレのほうだな」と屈託なく笑った。

ウランドはシェンを呼びとめた。

ウランド「受け取りに一緒にします。」

書類はこちらで提出しときますから」

シェンは「サンキュー」とニカリと笑った。

シェンとウランドが退室し、一人残されたカグヤは盛大に溜息をつき、顔を覆った。

カグヤ（…ば、ばれてないよな…）

スピードのキングの執務室まで行き、  
移譲書を受け取り、

その去り際、

ウランドはシェンを振り返った。

シェン「ん？オレまた何かやらかした？」

ウランド「…ええ」

シェンは「え！何々！？」と慌ててウランドに駆け寄った。

ウランドは表情を変えず、淡々と言い放った。

ウランド「あなたの優しさは人を傷つける。

もう少し周りを見たほうがいいと思いますよ。」

シェン「????」

シェンはきょんとしていた。

ウランド「…あとはご自分でお考えを」

ウランドはそのまま執務室を後にした。

移譲書をピラピラと波打たせ、  
ある一つのこと考えを巡らせながら、ハートのキングの執務室に  
歩を進めた。

ウランド「さて、どの案件から潰そうか」

## 14・2・A・Ready!―(後書き)

ハートのエース初登場です。

このシリーズは彼を主人公として連載していこうと思います。  
トランプの抱える事件を解決してゆく話の予定です。

さて、次回は5/29 14・3話です。

今度は「N・B・chase」エヌビーチェイスシリーズ第1話。  
スピードとクラブのエースのお話です。

今日のお話と時間軸がつながっています。

# 14・3・N・B・Chase―Steady―(前書き)

N・B・Chase(エヌビーチェイス)第1話。

クラブのエースリケと

スピードのエース トウジロウが

犯罪者ギルティンを追う話。

## 14・3・N・B・Chase―Steady―

ハートのエース 執務室

デスクには ハートのエース ウランド・ヴァン・ウィンクル

その目の前に立つのは

クラブのエース リケ・ピストロー

スペードのエース イチマツ・トウジロウ

ウランドは独特の低くボソボソした声で話を切り出した。

ウランド「…ハートのキングからの伝言です。」

トウジロウはデスクを叩いた。

トウジロウ「ちょお待てや」

ウランドは顔色一つ変えずにトウジロウを見た。

ウランド「…なんでしょう?」

トウジロウ「なんで当のキングが直接来えへんねん!

オレらはエースやぞ!」

そう、まさに今、ウランドが言いかけていたのは、カグヤから2人のエースに向けての指示だった。

ウランド「…キングはお忙しい」

トウジロウ「なめくさつとる」

トウジロウは吐き捨てた。

リケは溜息をついた。

ウランド「…話の続きですが、

リケさんをリーダーとして、

トウジロウと2人編成のチームで諜報および犯人確保をお願いします」

トウジロウがすぐさま反論した。

トウジロウ「なーんーやーとー！ー！

なんでオレが諜報とか地つつつ味いゝゝゝなことせなあかんねん！

つか、部下つけへんやと！？」

ウランドの胸ぐらをつかむトウジロウをリケが抑えた。

リケ「ええーと、ウランド、その心は？」

ウランドは胸ぐらを掴まれたまま無表情で答えた。

ウランド「…その他の隊員たちは中将クラスをリーダーとし、各案件にあたらせます」

トウジロウはウランドから手を離れた。

トウジロウ「数で攻めるてか？

それでなんとかなっとつたら、こない案件溜まってへんわ」

ウランド「…通常は」

リケはウランドに怪訝そうな表情を向けた。

リケ「…通常は？」

ウランド「…これより、ハートは超特別態勢を敷きます」

トウジロウ「超特別？なんやそれ」

ウランドは淡々と答えた。

ウランド「…全案件を”エース出動レベル”とし、一般隊員は全員諜報に回します」

トウジロウ「…ハアあつ!？」

リケ「ぜ…全案件!? 可能なの!? そんなことが!？」

通常、トランプが犯人逮捕をするためには

犯人のいる国に対してさまざまな手続きが必要となり、その手続きの複雑かつ煩雑さが案件を長引かせている一因でもあった。

しかし、”エース出動レベル”は”超緊急的なレベルの事件”であるという観点から、

すべてを事後手続き可能な特権的案件に切り替わり、国家に対する強制力が発生する。

ウランド「…その超特別態勢だって旨を各国に周知したんで、

…まあ、強制力はウチにあるはずなんで、問題ないでしょう。」

なにかマズければエースの役職<sup>クビ</sup>を差し出すまでです。」

リケ（自分のクビかけて、全案件を自分で受け持つ…）

リケはトウジロウを見た。

リケ「…ハートの”超特別態勢”に対する覚悟が見えました。

これ以上はもういいですよね。」

トウジロウはポケットに手をつ込んだ。

トウジロウ「ま、リーダー様がそう言いはるなら。  
けど、一言いわせてえな」

ウランド「…なに」

トウジロウはニヤリと笑った。

トウジロウ「そっちのがおもしろそうやんけ」

ウランドもまたニヤリと笑った。

ウランド「どっちが早く終わるか、賭けようか」

トウジロウ「そらおもしろいな」

リケは溜息をついた。

リケ「困ってる人や傷ついている人がいるコトなのよ！

それで遊ぶんじゃないの！」

2人はニヤニヤしたまま「はいはい」と答えた。

リケは「こりゃあだめだ」と額に手を当てた。

リケ「では、トウジロウさん。

明朝マルキュウマルマルにナウム国のエリドウの町のハンタ

ーズで落ち合いましょう。

そこで聞き込みしていくつか当りをつけてから二手に分かります。

連絡は魔導師専用道具で。

アーティファクトも忘れず持ってきてくださいね！」

トウジロウはだるそうにあくびした。

トウジロウ「はいよ」

トウジロウの様子を確認すると、  
リケは忙しい忙しいと急いだ様子で執務室を出た。

ウランドは頬杖をついた。

ウランド「…おい」

トウジロウは頭を掻いた。

トウジロウ「わかつとるがな。

いったんオレの執務室戻らなあかねん」

ウランドは椅子にもたれかかって溜息をついた。

ウランド「…印鑑ぐらいもつとけよ」

トウジロウは呆れたように溜息をついた。

トウジロウ「お前に言われたないわ」

リケが急いで自分の部屋に戻ると、デスクにいつの間にか積まれていた書類の山が目に見え込んできた。

リケ（…明日の朝までに片づけないと）

リケはデスクについた。

しばらくしてノックの音が響いた。

リケ（またか…）

「どーぞ」

扉から出てきたのはトウジロウ。

リケ「？何か不明点でも？」

トウジロウはズカズカと歩を進め、

窓際にあつた卓と椅子を持ってくると、

リケのデスクの正面でそれを置き、椅子にドカリと腰を落とした。

そして書類の山から適当にこっそりと取り、自分の前の卓に置いた。

リケ「え？え？」

トウジロウ「ペン2本ある？」

リケ「え…ええ」

トウジロウ「エースはエースでも、クラブ以外のあかんやつは頼むわ」

それだけ言つと、トウジロウは書類に向かいだした。

リケは少しの間きよとんとトウジロウを見つめていたが、一言だけつぶやくと、再び書類に向かった。

リケ「…ありがとう」

トウジロウ「惚れられても困んで？」

リケ「ないから安心して」

…まったくもー…でもこれで、

今日中には終われるな。

## 14・3・N・B・Chase―Steady―（後書き）

ようやく捜査が開始できそうです。

はたしてリケは問題児トウジロウの手綱を取ることができるのか？  
問題児トウジロウはリケと協力してギルティンを追いつめることができるのか？

次回は14・4話「trick beat」、スピードのキングのお話。

6 / 5 更新予定

## 14・4・trick beat Go!―(前書き)

14・4話はtrick beatシリーズ第1話

スピードのエースのお話です。

最強の7人の魔導師「グランドセブン」召集の命についたシエンは  
…。

## 14・4・trick beat—Go!—

——スピードのキング執務室

「大将」

窓のへりに腰をかけ、

あんまんを頬張っていたシェンはドアに目をやった。

視線の先にはスピードのエース トウジロウ。

トウジロウ「クラブから貰ってきたで、他の”グランドセブン”の情  
報」

トウジロウは数枚の紙をヒラヒラとゆすった。

シェンはいやな予感がした。

シェン「…なに、枚数そんだけ？」

トウジロウは紙をシェンに渡した。

トウジロウ「おまけに3人中1人分の情報しかない」

シェンはパラパラと紙をめくった。

シェン「…まじですか」

トウジロウ「協会とウチ、合わせてそんだけやねん。しゃーない」

シェン「あんまんの最後の一口を放り込むと紙をトウジロウに返した。

シェン「もう覚えた。処分しといて、ソレ」

シェンはデスクに向かった。

シェン「案件の引き継ぎは終わったし、アーティファクトも持った。あとやり残したことはないよな？」

トウジロウはライターの火を紙につけた。

トウジロウ「忘れモンはあるんとちゃう？」

シェンは苦笑した。

シェン「別に忘れちゃいないよ。」

シェンは辺りを見回した。

シェン「リンリン！ぼちぼち出るぞー！」

返事はない。

シェン「あれ？」

トウジロウ「部屋の隅でくたばっとなっちゃっ？」

シェン「虫じゃねーんだから…」

シェンは小走りで執務室を出た。

——スピード秘書室

リシュリユー「え？リンリンちゃんですか？」

シェン「そ！見てねえ？」

リシュリユーはきょとんとシェンを見つめた。

リシュリユー「いらっしやいましたよ、つい先ほど」

シェン「え？お前に何か用があつたのか？」

リシュリユーはほほ笑んだ。

リシュリユー「本部からのキングの任務のサポートについて、  
打ち合わせました」

シェンはきょとんとした。

リシュリユー「なにかあつたときにすぐにサポートに入れるよう、  
ハートのキングとも調整を行いました。  
ご安心して出発ください。」

シェン「ど…どうも」

リシュリユーは「そういえば」と手をたたいた。

リシュリユー「クラブのエースの元へ行くとおっしゃっていましたよ」

——クラブのエース執務室

リケ「リンリンさん？今しがた来ましたよ」

シェンは肩を落とした。

シェン「過去形ですか…」

リケはクスリと笑った。

リケ「スペードのキング不在の際のスペードのエースへの対策を教えてくださいました。」

シェンは苦笑いした。

シェン「なんだそりゃ」

リケ「リンリンさん、ハートのエースの所に行くと聞いていました」

よ。」

——ハートのエース執務室

ウランド「リンリン？ああ、今さっき来ましたけど」

シェンは長い溜息をついてウランドの机にもたれかかった。

ウランド（この間あなたに吐いた”暴言”について、説教くらいしましたよ）

シェンはウランドを見た。

シェン「あいつと何話した？」

ウランドは窓の外を見た。

ウランド「ハートのキングの居場所を聞かれました」

シェンは「ん？」と目を大きく見開いた。

シェン「なに？カグヤ今どっか行ってるの？」

ウランドは笑った。

ウランド「いいえ、今日は珍しく執務室にいらっしやいますよ」

コンコン——ハートのキングの執務室にノックの音が響いた。

シエンはドアを開けた。

シエン「カーグヤー！リンリン見なかつ…」

「だめえー！ー！」

執務室に顔を出した瞬間「ダメ」という大声に、シエンはドアを開けた体勢で固まった。

シエンの視線の先にはデスクに座っているカグヤと、その顔の前でパタパタと翅をはばたかせ両手を腰に当てているリンリンの姿。

シエン「な…何がダメなんだよ」

リンリンはビシッとシエンを指差した。

リンリン「これから女同士の話し合いをしようとしてんのー！

シエンは男の子なんだから入っちゃダメでしょー！」

シエンはハイハイとリンリンの翅をつまみあげた。

リンリンはバタバタと暴れた。

リンリン「ちょっとー！」

シェンは苦笑いした。

シェン「忙しいのに悪かったな、カグヤ。」

カグヤはシェンをまじまじと見つめていた。

シェン「…いや…もう出発か？」

シェンはニカリと屈託のない笑みを向けた。

シェン「そ！この”忘れ物”が見つかったから、もう出るよ」

シェンは「じゃあな」と手を振ってカグヤに背を向けた。

カグヤ「ま、まで…」

カグヤは椅子から立ち上がった。

シェン「？」

カグヤ「…気をつけてな…」

シェンは白い歯を見せ「おう！」とにぎり拳を見せた。

リンリンはカグヤを指差した。

リンリン「シェンはあたしのものなんだからねー！」

シェン「はいはい」

シェンはハートの執務室を出た。

静かになった執務室で、カグヤはドサリと椅子に腰を落とした。

カグヤ（…よかった…行く前に会えて…）

シェン「さてと」

シェンはリンリンを見た。

リンリン「あたしもいろいろやり残しがあつたのー！  
でもこれでスッキリした！」

シェンは「クツクツ」と笑いをこらえた。

シェン「しょうもな」

リンリン「なんだよー！」

シェンは小さい溜息をついた。

シェン「出発すんぞ」

リンリンはにっこりと笑った。

リンリン「OK！行こっ！」



# 14・4・trick beat Go!―(後書き)

さて、いざ出発です。

グランドセブンの残りの3人

シェンは集めることができるのか!?

次回は第15話。

本編です。

6/12更新予定!

## 15・last refuge(前書き)

本編第15話。

ヴィンディア連峰を下山した一行は…。

## 15・last refuge

ムー大陸北部ナイム国エリドゥ

オーバーザホロウ

緑豊かなヴィンディア連峰” 乗り越えた先の絶望” を背後にたたえる富ある者達の別荘地――

エオル「うわー、本当豪邸ばかりだねー！」

よしの「そうですね」

フィード「うわー、本当力もばつかなー！」

よしの「フィード様、あれは鳩かと」

エオルはフィードをひつ叩いた

エオル「よしのさん、構わなくていいから」

よしの「????」

クリス「都会の女の子の匂いだー！」

クリスはよしのの腕の中から飛び降りると、町の中に消えていったよしの「クリスちゃん！迷子になってしまいます」

エオル「……」 ↑ あえて何も言いたくない

フィード「ほっとけ、あんなブサ猫、誰も捕って食ったりしねーだろ。それよりメシ――！！」

ラシャ村以来、久しぶりの人の手による料理だった

エオル「料理に味があるって幸せだ」

フィード「モンスターの丸焼きも飽きたしな」

よしの「もしよろしければこちらで香辛料を買いませんか？」

二人の魔導師はよしのを見た

フィード（…そういえば）

エオル（よしのさん料理上手だった…）

つまり、調味料や調理道具があれば、野宿でもまともな食事がとれるということだった

——気づかなかった——！！！！——

フィード「おい、俺様宿とつとくから」

エオル「ハイハイ、ゴロゴロしときなさい。」

よしのさん、早速買い出しに行こう！」

よしの「はい！」

よしのは嬉しそうに微笑んだ

薄曇りの、落ちかけの柔らかな日の光が、じんわりと二つの影を映し出している

エオル「なんか、久しぶりにまったりした時間だね」

夕飯支度の親子連れや恋人たちが緩やかな川のように流れてゆくよしの（…）

——このまま何もかも忘れて、この時間が続けばよいのに……——

だが、本当にそれでよいのかと問われると、そうもいかないわけでよしのはクスリと笑った

よしの（なんて、ちょっと試ってみただけです）

エオル「どうしたの？」

よしのは首を振った

よしの「なんでもないです」

「わゝ可愛い猫〜！」

「プニプニ〜！」

仕込みの始まった夜の街の路地裏

これから仕事に出かけるいい匂いの女性たちに囲まれ、クリスマスはご満悦だった

「どこから来たのかなあ？」

クリスマス「ミヤー！（余所から来たんじゃない、帰って来たのさ！君の元へ！）」

「あ、懐いた」

「いいな〜私にも触らせて〜」

「あの…」

幸せの時間を断ち切る、どこか気の弱そうな声

「準備、もう始まっています…」

小さな少女だった

「あら〜！ボヌールちゃん！知らせに来てくれたの〜？可愛い〜！」

女たちは今度は少女を撫でだした

ボヌールと呼ばれた少女は顔を真っ赤にしてモジモジとしていた

クリスマス「ミヤー」

クリスはボヌールを見上げ、尻尾をパタパタと振った

「あら、ボヌールちゃんに懐いたよ、ボヌールちゃんのが好きなんじゃないかな」

ボヌールは少しの間クリスを見つめ、恐る恐る抱き上げた  
抱き上げたクリスはとても温かった

ボヌール「……」

様子を見ていた女たちの一人がボヌールに囁いた

「気に入っちゃった？」

ボヌールは黙って頷いた

クリス「ミャー」

ボヌールはクリスを抱いたままクルリと踵を返した

## 宿の一室

一行はこれからの渡航計画を立て、明日にも出発しようと決めたのだが、

フィード「あんのクソ猫、どこほつき歩いてやがんだ——！！」

エオルは地図の広げられたテーブルに肘をつき、ため息をついた

エオル「いつか動物の帰巢本能がどーとか言ってたの、誰だっけ？」

フィード「ありや砂漠のド真ん中だからな。だが今回は違う」

よしの「今回は違う……とおっしゃいますと？」

フィードはカーテンの隙間から外を見た

窓から覗く派手な夜の街の明かりはまるでそこだけ昼間のようだった

フィード「誘惑が多すぎる」

エオル「……置いて行きませんか？」

ボヌールが向かった先は豪邸だった  
クリス（別荘か！お嬢様なんだねー）

ボヌールが玄関に上がると、使用人の1人が駆け寄ってきた  
「お帰りなさいませ。お店の準備は始まりましたか」

ボヌール「うん、お店の準備始めてくださいって言ってきたよ

ママとパパは？」

使用人はにこりと笑った

「お仕事をしております、お忙しいようです」

使用人はボヌールの腕に抱かれている黒猫に目を落とした

「あら、猫を拾われたのですか？」

ボヌールはコクリと頷くとそのまま玄関正面の螺旋階段を駆け上った  
二階の廊下をしばらく進み、奥の部屋に入るとボヌールはそっとクリスを置いた

クリスはボヌールを見上げ、パタパタと尻尾を振った

ボヌールはクリスの背中恐る恐る撫でた

クリス「ミャー」

使用人は豪華な装飾が施された書斎の扉をノックした

中から返事はない

「旦那様、奥様、ボヌール様が先ほどお店から帰宅されました」

使用人は少しの間扉を見上げた

「お店の準備は滞りなく……」

「猫を拾われたらしく……」

中から笑い声が聞こえる

「……ペットにつきましてはご家族で話し合われてくださいね！」

笑い声が絶えることはなかった

「……」

（ここの仕事はもうダメだな）

――翌朝

カーテンから漏れる朝日

キングサイズのふかふかなベッド

ボヌールの枕元に丸まっていたクリスは目を覚ました

クリス（朝か…）

クリスはキョロキョロと辺りを見回した。

クリス（ここいいな、ベッド高級だし、待遇いいし、このままこのペットになろうか…）

その時、クリスの頭によしの顔が浮かび上がった

クリス（よしのちゃんとボヌールちゃん、2人の女の子の間で揺れる、なんて罪深い俺…）

クリス「ぶっ」

寝返りをうつたボヌールの腕が、クリスの脳天に直撃した

ボヌールは目を覚ました

手に何か暖かいものが乗っている

ボヌール「？」

いつの間にか投げ出した腕を見ると、その下にはクリス

クリス「ミ…ミヤー（お、おはよう）」

ボヌールはほっとしたように微笑んだ

それからボヌールは顔を洗い、服を着て、クリスを抱き上げると部屋を出た

クリス（もう自分で支度出来るんだね〜！）

広い屋敷を右へ左へと進み着いた先は長いテーブルに白いクロスがかけられたダイニング

テーブルの上には鼻腔を擽る豪華な朝食——3人分

ボヌールはテーブルに腰掛けた

ボヌールの膝の上にはクリス

使用人の1人が慌てた

「お嬢様、猫は床に」

ボヌールは黙って俯きクリスを抱きしめた

（珍しい……お嬢様が言うこと聞かないなんて）

ボヌールは俯いたまま口を開いた

ボヌール「ママとパパは？」

使用人は困ったと眉根を寄せた

「遅れていらつしやいます。冷めないうちに先におあがりください」

ボヌール「……」

ボヌールはスプーンを持った

クリスが見上げたその顔は、どこかふてくされてるようにも見えた

その日は雲一つない晴天だった

ボヌールはクリスとともに草花溢れる庭で、駆け回り、夕食前に疲れて眠ってしまった

ボヌールの枕元でクリスはゴロゴロと喉を鳴らした

クリス（平和つてのは退屈で仕方ないけど、女の子がいるとそれだけでバラ色になるな）

クリスは窓の外を見た

クリス（……ただ、この屋敷、”臭う”なあ……

……ん？）

オレンジ色の空は上から紺色を引き下げて来ていた

クリス（……満月——！）

時はさかのぼり、同日正午過ぎ

宿の一室

フィード「あーのーくーそーねーこー!」

よしの「私探して参ります」

フィード「まあ待て」

フィードは街の地図が乗ったパンフレットを取り出した

よしの「あ、お昼の時に取ってらっしゃった…」

エオルはテーブルで頬杖をつきながら、テーブルに置かれたパンフレットに目だけ落とした

エオル「タリスマン？」

フィード「おー」

よしの「？」

フィードはコートの内側から紐のついた、先の尖った水晶のようなものを取り出した

よしの「何ですか？」

フィード「んー？まあ、見てな」

フィードは紐の端をつまみ上げ、水晶をぶら下げた

そのままパンフレットの地図の上にかざした

水晶は斜めに揺れた

フィードはその揺れた先に水晶が来るように手を移動した

真下の地図は飲み屋街

水晶はまだ僅かに斜めに揺れている

フィード「ん？飲み屋街から外れるな」

フィードは水晶の揺れる先に手を移動させた

今度は水晶はクルクルと回りだした

フィード「ここだ」

エオル「…豪邸じゃない」

よしの「??」

フィードはよしのの目の前に水晶をぶら下げた

よしのは反射的に両手を出した

フィードはポトリと水晶を落とした

フィード「こいつはタリスマンつつー魔導師専用道具だな。

念じた失せモン探せる便利道具だ」

よしのは地図に目を落とした

よしの「ではこのタリスマンがクルクル回っていたところにクリスちゃんがいらっしゃると？」

フィード「おー」

よしのはエオルを見た

エオル「ほら、さっきお昼食べる所探してたときに通り過ぎた大きなお屋敷」

よしのは「ああ」と手をたたいた

フィードはニヤリと笑みを浮かべた

フィード「久しぶりに犯罪組織”W・B・アライアンス”の活動をするかな」

エオルは横目でフィードを睨みつけた

エオル「クリスの救出活動って意味に捉えていいんだよね？」

フィード「まあものついでにな」

エオル「何のついでだった？」

日も沈み、家々に明かりが灯り始めた頃、一行は目的の屋敷をぐるっと一周し、どうするか額をつきあわせていた

エオル「本当にいるのかな？まずそれを確認しないと」

フィード「よし、じゃああの無駄にデケエ門ぶっ飛ば」

エオル「さないでどう確認しよっかね？」

フィードはエオルを睨みつけた

エオルは全く気にもとめずに続けた  
エオル「直接聞きに行くのが一番手っ取り早いし、そうしょっか」  
フィードはパチンと指を鳴らした  
フィード「なるほど！屋敷のヤツらを引きつけてる隙に」  
エオル「な・ん・に・も・し・な・い！」

日も落ち、夜の帳がかかり始めた頃

クリスはふと目を覚ました

クリス（…何かいるな）

耳を澄ますと微かに聞こえてくる足音

クリス（…）

あれだけあった人間共の気配が、ない

クリスはそばで深い眠りにについているボヌールに目をやった  
ボヌールは気持ちよさそうに寝息をたてている

足音が部屋の前で止まった

ドアノブがゆっくりと回った

リンゴーン

鐘の音

クリス（呼び鈴か？）

足音は立ち去った

クリスは様子を見ようと窓の縁に飛び乗り、外を見た  
男女が並んで門に向かっている  
服装からして、使用人でないことは明らかだった

「どちら様でしょうか」

門から出てきたのは30代後半程の男女だった

エオルは警戒されないよう笑顔を作った

エオル「まん丸とした黒猫を探しているのですが、こちらに迷い込んだと聞きました…ご存知ありませんか？」

男女は顔を見合わせた

男は残念そうに首を横に振った

「残念ながら」

エオル「そうですか…」

よしのは男女から見えない位置でフィードの袖を引っ張った

フィード「あん？」

よしの「あそこ…」

よしのの視線の先——屋敷の二階の窓から見える黒くて丸いシルエ  
ット

フィード「あ——っ！あんのやろ…」

エオルはウルサイとフィードの口を慌ててふさいだ

男女は一瞬顔を合わせて、笑った

女が笑いかけた

「旅人さん？よければディナーをご一緒しませんか？旅の話が聞きたいわ」

エオル「あ、いえ、俺たちは…」

フィード「おっしゃー！！豪華なメシ——！！」

フィードは飛び跳ねた

エオル「こら！フィード！迷惑だろー！？」

よしのは男女にニツコリと笑顔を向けた

よしの「ぜひお願いしますわ」

エオル（よしのさんまで——?!）

屋敷の中は閑散としていた

これだけ広い屋敷なら、使用人の二人や三人いても良いだろうに、人の気配はまったくなかった

長い廊下をしばらく歩き、やがて豪華な長テーブルの広がる広いダイニングへと通された

「すぐに料理をお持ちしますね」

そう言つて女はダイニングを出た

よしの「あの…」

一行が席につき、よしのは男をみた

男はニツコリと微笑んだ

よしの「お手洗いをお借りしても？」

「どうぞ、ちょうど突き当たりを少し行つたところですのでご自由に」

よしのは部屋を出た

館の中はチラチラと揺れるろうそくの灯りで、夜だというのに足元までハッキリ見える

よしのはキョロキョロと周囲を確認しながら、慎重に二階へあがった

二階は一階よりろうそくの数が少なく、ほの暗い

よしの（どのあたりでしょうか）

「クリスちゃん…」（↑極めて小声）

ギシ…

よしのは後ろを振り返った

階段の入り口に人影が差し掛かっていた

よしの（あわわわ）

よしのは慌てて近くの部屋に入り込んだ

ギシ…ギシ…

足音が部屋に近づいて来る

よしの（…どうか通り過ぎてくれますように…）

しかし、祈りは虚しく、足音は部屋の前で止まった

ドアノブが回る

よしの「！！」

フィード「おい、オッサン、メシまだ？」

エオル「こらフィード！…すみません…」

エオルは申し訳なさそうに男を見た

男はクスリと笑うとテーブルにもたれかかった

「旅人さん、旅をしているからにはこれからもいろいろな場所を回

るのでしょうか」

エオル「え、ええ……」

（普通の旅って言うには物凄く抵抗あるけど……）

「一つお願いをしてもいいですか」

エオル「お願い？」

フィード「タダで？」

エオルはフィードの後頭部をひつ叩いた

「もちろん御礼は弾みます」

エオルは慌てた

エオル「いいえ、どうか本気になさらず」

男は立ち上がると部屋の奥の戸棚から手のひら程の大きさのまん丸とした麻袋を取り出した

麻袋には何かがパンパンに詰まっているようだった

男は麻袋をフィードとエオルの前に差し出した

エオル「これは……？」

フィードは袋を開け、中をのぞき込んだ

男はニコリと笑った

「”免罪符”というものです」

エオル「メンザイフ？」

エオルも麻袋の中をのぞき込んだ

「飲めばこの世のすべての罪から許される、素晴らしいものです」

男はフィードとエオルの様子を見、一呼吸置いて続けた

「これだけ素晴らしいものを多くの人と共有しないのは、それこそ

がまさに罪です。

あなた方にはこれを旅先で現実<sup>つみ</sup>に苦しむ方に配っていただきたい」

フィードはニヤリと笑った

フィード「魔薬」か」

男はニコリと笑い返した

「免罪符」です」

ピリツと、空気が張り詰めた

ドアノブが回った

キイと音を立て、ドアがゆっくりと開いた

キッチンに行ったはずの女

部屋をぐるりと見回し、窓が開いているのを発見すると、静かに窓を閉め、部屋を出た

その部屋のクローゼットの中――

「シィ…まだドアの前にいる」

ドアが開けられる瞬間、何者かがよしのをクローゼットの中に引き込んだ

よしのは先ほどからその”何者か”にずっと口を押さえられているその”何者か”の声に、よしのは聞き覚えがあった

”何者か”は、静かにクローゼットを開け、よしのを優しく離れた  
よしのはゆっくりと自分の後ろを見上げた  
そこには、金髪の、目鼻立ちの整った、絵に描いたように美しい男

よしの（ん？）

金髪男「…どうも」

男は苦笑いしながらよしのの様子を窺った  
よく見ると、その男は素っ裸だった

よしの「ギャ…」

悲鳴を上げかけたよしのの口を、男は慌てて塞いだ

男は口の前で人差し指を立てた  
よしのは何度も首を縦に振った

男はゆっくりよしのを離れた

金髪男「良い子だね、もう少しそのまま」

男はクローゼットの服を漁りだした

クローゼットの中は小さい女の子用の服しかない

金髪男「参ったな…」

男は暖かそうな、小さい毛皮のコートを取り出すと、部屋のベッド  
に向かった

金髪男「ちよいと拝借」

ベッドでぐっすり眠っている少女

その少女がきている毛布を自分に巻きつけ、変わりに毛皮のコート  
を少女にかけた

よしの「あ、の…」

男は人差し指をよしのの口に当てた  
そしてそのまま顔を近づけると囁いた  
金髪男「この家に関わってはいけない、

銀髪とエルフは僕が回収しとくから、よしのちゃんは先に  
宿に戻っていて？」

よしのは呆け顔のまま尋ねた  
よしの「あなたもしかして…」

今夜は満月

フィード「なーにが」綿財布だ、アホ臭エ」  
エオル「フィード…」免罪符」ね…ですけど、コイツの言うとおり  
です。

我々は”魔薬”で不幸になった人を見た！  
人に不幸をもたらすそれを世にバラまくことこそが罪だ」

男は穏やかに微笑んだ  
「ではその”不幸の薬”を使わずして既に”不幸”な人々はどうし

たらしい？

不幸なまま、

幸せな者たちに負けたまま、

逃げ場もなく、

追い詰められ、

死んでゆけというのかね？」

エオル「！？死んでゆけなんて…そこまでは」

バン

フィードは机を叩いた

フィード「ああ、その通りだ」

エオル「ハア！？」

フィード「不幸なまま、幸せなヤツらに負けたまま、逃げ場もなく、  
追い詰められたままでいやがれ、

這い上がれねえヤツらはな。

世の中平等なんて、甘えんだよ」

男はため息をついた

「あなたはわかっていない、”不幸”である苦しみを」

フィード「薬に逃げたら不幸から幸せに変わるのか？現実が」

「不幸な現実はかわらない、だからこそ、幸せへ逃げるのだ」

エオルは眉根を寄せた

エオル「”一時の”幸せね、だったら魔薬じゃなくてもいい」

男は背もたれに寄りかかった

「逆に魔薬でもいい」

エオル「いい訳がないじゃないですか！」

「なぜ？だったら代わりにギャンブルや買い物に逃げるのかい？」

エオル「…少なくとも、薬よりは救いがあります。まだ取り返しがつく」

男は肩をすくめた

「意見が合わないようだね、残念だ」

燭台のろうそくの明かりが揺らめいた

その揺らめきに合わせ、フィードとエオルの影も揺らめいた

しかし、男の影は不自然に動かない

それどころか、徐々に伸び、やがて天井まで達した

その影を眺め、エオルは苦笑いした

エオル「あれ…このものすごく嫌な予感…デジャヴ？」

フィードは立ち上がった

フィード「嫌な予感ってのは大概当たるもんだぜ」

エオルはウンザリと溜め息をつき、立ち上がると剣を引き抜いた

2人は影と間合いをとるようにゆっくりと後ずさり、やがて壁にぶつかった

影から、赤く光る目が覗いている

「お前らの口にぶち込んでやる、そうすりゃ魔薬そいつの良さがわかるだろうよ。

悪魔のオレにはわからんがな」

フィード「面白え！やれるもんならやってみな！ただし俺様はグルメだぜ」

エオル「おばか！てか…」

エオルは小声で囁いた

エオル「どうすんの！パワーモさんみたいな僧侶はいないし、」

フィード「あ、しまった！」

フィードは何かを探すようにポンポンと服を叩いた

フィード「クリスのバカがいやがらねえ」

エオル「今更ーーーーっ！！」

フィードはコートのポケットをゴソゴソとあさると液体の入った小さな小瓶を取り出した

フィード「こんなこともあるつかと」

エオル「何？」

エオルは小瓶のラベルに見覚えがあった

魔導師が悪魔と魔法使用の契約を交わす際、

悪魔が暴れ出した場合の悪魔忌避のための魔導師専用道具——”<sup>ユニ</sup>聖獣の血清”！！

フィードは小瓶のコルクを抜いた

たちまち小瓶の中身はキラキラとした光の粒子となって部屋を舞いだした

「臭い臭い！」

影がグニャグニャと揺らめいた

エオル「なるほど、こりゃあいいや」

エオルは剣を構え、呪文を唱え始めた

空気中を漂っていた水蒸気とともに、光の粒が固まり、水となり、剣に集まった

——魔法剣……！——

フィード「いよっし！」

見ると、フィードはドアに手をかけている

エオル「は……！？」

フィード「ちよっくらクリスのバカを探して来るから、それまでソイツの相手をしてろ」

エオル「はあああ……っ！？」

フィードは「ファイト？」とジェスチャーし、そそくさと部屋を出て行った

エオル「なにがファイト？だ——！！！」

フィード「さてと」

二階へと続く螺旋階段のある玄関ホールにさしかかった時だった

フィードの視界にはホールでぼうつと立ち尽くす女  
フィード「おいおい、キッチンでお料理中じゃねえのかよ」

その口から出た声は、女のものではなかった  
「俺から逃げられると思うなよ」

フィード「ん？」

女の影が揺らめき、壁いつぱいに伸びた  
影から赤い目が覗いている

「さすがにもう、あの”臭い”液体は持っていないかろう」  
フィード「…！？お前、さっきのやつか？」

女はゲラゲラと野太い声を上げて笑った

「その通り、俺は体を2つに分けられるんだ」

フィード「…どんな体の構造だよ…」

フィードはふうと息を吐いた。

フィード「…魔法拳！」

フィードの両手から炎が吹き出した

「魔導師か…お前の魂はうまそうだ」

フィード「そいつはまずいな、てめえが腹壊さなねえよう病院送り  
にしてやんよ」

「ばかめ」

女がフィードに向かって駆け寄った

その動きに気はない

フィード「フン」

フィードは構えた

ところが、

ガシッ

どこからともなく現れたメイド姿の数人の使用人たちがフィードの両手両足をがっしりと掴んだ  
いずれもその目に生気がない

フィード「？」

（なんでこいつらまで乗っ取られたみたくなってんだ？）

考えている間にも女はフィードまであとわずかという距離までせま  
つていた

フィード「あーもー、面倒くせえ！」

フィードは力づくで使用人たちを振り払い、床に向けて拳をぶちこ  
んだ

ドカァン！

大きな爆音とともに木片が飛び散り  
煙が辺りに立ち込めた

フワリ

フィードは魔導師の超人的な跳躍力で二階の踊場に飛び乗ろうとした

「撒いたつもりか？」

フィード「！！」

フィードのすぐ横には生気のない女

飛んでいる高さはすでに一般人の能力を遥かに超越している

女の足はメキメキと音を立てていた

フィード「おいおい……」

女の手が、フィードに向けて振りかざされた

ガシャァン！！

突然、フィードの頭に豪華な花瓶が飛んできた

フィードは失速し、粉々になった花瓶とともに床に落ちた

フィード「痛い……！」

フィードは頭からダラダラと血を垂らしながら階段二階の踊場に目をやった

そこにはよしのと、

金髪碧眼の毛布を体にまとった男

男はフィードを指差した

金髪男「女性に手を上げるなんぞ言語道断……！」

フィードは立ち上がって指を差し返した

フィード「アホか……っ！！手を上げられてんのは俺様のほうだ……！！」

男はため息をついた

金髪男「女性が手を上げてきたら男はやり返していいのか？」

女性が何たるかをもっと考えろ、だからお前はモテないんだ」

フィード「お・ま・え・は……！死にかけるところだったん」

青年「死ね！女性のために！」

「それはいい心がけね」

——先ほどの女の声

だが女の姿はない

よしの「！」

よしののヤサカニがよしのの意思と関係無く起動した

男はニコリと笑い、どこへともなく語りかけた

金髪男「支持していただけて光栄だよ、お姫様」

言うとなんは半歩後ろへ下がった

ズダン！

間髪入れず、男の目の前に女が降ってきた

女は男に飛びかかった

金髪男「おっと」

男はダンスのように優しく女の腕を握り、腰を引き寄せた

女「ぎ…」

女はバタバタと暴れた

だが、この体勢では力が上手く入らない

男は微笑んだ

金髪男「さつさとこの女性から出る、かわりにあそこの銀髪に乗り移っていいから」

フィードはぴょんぴょんと飛び上がった

フィード「ふざけんなあ！」

よしの「はっ！」

よしのは自分の目の前に浮かぶ黒い宝珠に目をやった

よしの「ホ、ホトカゲ！！」

黒い宝珠が輝きだし、光の中から小さな黒い蜥蜴がポトリと落ちた

蜥蜴は二階の踊場から飛び降り、フィードの影までたどり着くと、スウと影の中に消えた

フィード「？」

次の瞬間、フィードの影がムクムクと膨らみ、

それはやがて黒い髪、黒い肌、青い瞳のフィードと瓜二つの”モノ”に形を変えた

フィード「なんだてめえ」

ドン！

空気が揺れた

男の腕の中で女の力が抜けていった

金髪男「そっちいったぞ！」

黒い影のようなモノが目にもとまらぬ速さで壁を伝い、フィードの足元…をぐり抜け、館の奥に消えていった

フィード「…あれ？」

フィードは足の間から後ろを覗き込んだ

男はため息をついた

金髪男「逃がすなよ」

フィード「今のは俺様じゃねーだろ！？」

てか、なんだこの”黒い俺様”は！」

フィードは隣で鏡のように自分と全く同じジェスチャーをしているモノを指差した

男は階段を一段降りるとよしのに手を差し出した

よしの「…？」

よしのは差し出された手に自分の手を乗せた

金髪男「階段、気をつけて」

フィード「無うー視いーかあー！！」

よしのが慌てて付け足した

よしの「その子は”ホトカゲ”と言って、ヤサカニの一つです」

金髪男「教会で悪魔に出くわしたとき、色違いのよしのちゃんに追い込んだろ」

フィードは再び隣の黒い自分をしげしげと見つめ、ニヤリと笑った  
フィード「あれと同じやつか、面白え！」

よしの「教会のとき…」

階段を降りきり、よしのは男を見上げた

よしの「あなた…クリスマスちゃん？」

男はよしのの手を握った

クリス「そうだよ…！よしのちゃん、君のことを想いすぎて人間の姿になったんだ」

よしの「ええっ！？」

フィード「ウソに決まってるんだろ」

よしの「ええっ！？」

よしのはフィードを見た

フィードはため息をついた

フィード「面倒臭えからあとでエオルのヤツとまとめて説明してる」

クリス「おい」

フィードは面倒くさそうにクリスを見た

クリスはフィードを指差した

クリス「お前のコートかせ、毛布じゃ動きづらい」

フィードはチラリとよしのを見、ものすごく嫌そうな盛大なため息をついて、着ていたコートを投げ渡した

クリスはしげしげとコートを見つめた

クリス「ハア…こんなダサイコートに袖を通すハメになるなんて…」  
フィード「じゃあ着んな」

クリスは呆れた視線をフィードに向けた

クリス「だからお前はモテないんだ」

フィード「おい、よしの、このアホ放つといて、エオルのヤツを探すぞ」

よしの「…！はい！」

フィードの元へ駆け寄ろうとするよしのをクリスの腕が遮った

よしの「？」

クリス「よしのちゃん、ちょっと下がって」

フィード「は…」

ドガアアン…！！

突然、屋敷の壁が破壊され、フィードはその衝撃に巻き込まれ、瓦礫とともに吹き飛んだ

よしの「フィード様！…とエオル様！？」

見ると、フィードの横に傷だらけのエオル

フィード「エオル！てめー、勝手に人様の家壊してんじゃねーよ！」

エオルは頭を抑え、左右に振った

エオル「痛てて…君に言われたくないよ…」

そういうとエオルは立ち上がり、壊れた壁の方向に剣を構えた

エオル「あいつ急に強くなった」

その視線の先には、

出迎えてくれた男女の頭がついた二本の長い首をもたげ、

さきほどの使用人たちを含めた無数の人間の顔の模様が入った渦巻

き型の殻を背負った、

この屋敷の高い天井まである巨大な軟体生物

カラン…

エオルは剣を落とした

エオル「き…」

よしの「き？」

エオルは頭を抱え、軟体生物に背を向けた

エオル「気持ち悪いーーーー！！」

よしの「えっ！」

フィードはヤレヤレとため息をつきながら逃げよつとするエオルの襟首を掴んだ

フィード「こいつ、ダメなんだよ」

よしの「ダメ？」

フィード「虫とか爬虫類とか幽霊とか」

間

口を開いたのはクリスだった

クリス「よしのちゃん、ああいう男はやめときなね」

よしの「ただ大丈夫ですよ、エオル様！よく見たら可愛いカタツムリさんです」

エオルは部屋の隅で壁に向かいしやがみ込み、頭を抱えている。

エオル「カタツムリキモイーーーーー！！」

フィード「お前そんな状態でよく今の時間までもったな」

エオルは涙目でフィードを見た

エオル「さっきまではあんな形じゃなかったんだよ！それが急に……」  
クリス「半身が本体に戻ったか」

フィードは自分の足の間を通り過ぎた黒い影を思い出した

そして笑いながらエオルを見た

フィード「悪い」

エオル「何したのーーーーー！」

”カタツムリ”から伸びる顔が口を開いた

「お前ら……俺を悪魔”エスカーダ”と知っての攻撃だろうな」

エオル「！！」

フィード「！」

悪魔”エスカーダ”

フィードとエオルは聞き覚えがあった

エオルは剣を下ろした

よしの「エ…エオル様…？」

エオルは本当に間違いないか、確認するようにゆっくりと、かたむりに話しかけた

エオル「エスカーダ」…魔導師に治癒魔法の一つを提供してる、あの悪魔”エスカーダ”？」

エスカーダはニヤリと笑った

エスカーダ「その通り。俺の邪魔をすれば、魔導師への名義契約を金輪際拒否するぞ」

エオルは息をのんだ

フィードはチラリとエオルを見た

フィード「あいつ、何”提供”してんだっけ」

エオルはマズいという視線をフィードに向け、小声で答えた

エオル「治癒魔法”救急絆創<sup>エイール</sup>”！かすり傷とか小さなケガを直す魔法」

フィードはボキボキと指を鳴らした

フィード「じゃあ要らねーな」

エオルはフィードを引つ叩いた

エオル「何言ってるの！かすり傷で強大な治癒魔法使わなきゃいけなくなるでしょ！」

フィード「別にいいじゃねえか？サービスしてやりゃあ」

エオルは剣を鞘にしまった

開いた口から発せられた声は低かった

エオル「魔導師にあるまじき言動だよ、フィード」

フィード「あ？」

エオル「治癒魔法はケガ人の自己治癒能力を超倍速させるだけの魔法だ、

強大な治癒魔法を使うことの負担は魔導師じゃない、ケガ

人にある！

だから倍速スピードの違う魔法の大小が治癒魔法には重要なんだよ！」

フィードは鼻で笑った

フィード「アホか、かすり傷くらい自然に治しやがれ！何でもかんでも魔法に頼ってんじゃねえよ！」

エオル「…キミ、本当に魔導師？」

フィードはニヤリと笑った

フィード「ならエオル、てめーは人間にあるまじき言動だな」

エオル「…！」

フィードはエスカーダに向かい、構えた

フィード「たかが魔導師の魔法一つのために、

何百人に魔薬を配ろうとしてるバカを見過ごせてか！

？」

エオル「…！」

エオルは苦笑した

エオル「君、そんなに熱かったわけ？」

フィードは鼻血をすすった

フィード「豪華なメシが出なかったから、イラついてんだよ！」

フィードはよしののほうを指差すと、地面を蹴った

エオルはよしのの元へ駆け寄った

その時、よしのの隣に立つ金髪碧眼の青年と目が合った

よしのは、一瞬自分に向けられていたエオル笑顔が凍りつくのを見た

フィード「行くぞ！バカクリス！」

クリスは呆れたとため息をついた

クリス「それが人にものを頼む態度か！」

クリスの体は忽ち白い霧となって消えた

エオル「よしのさん、大丈夫？」

——いつもの笑顔

よしの（…気のせいでしょうか？）

「…はい！」

フィード「イクセスブレイク悪魔合体！！」

一瞬、フィードの体は電光の走る白い煙に包まれ、  
バチンと大きな音を立て強烈な閃光を発した  
同時に白い煙が晴れ、

エスカーダ「貴様…その姿は…」

まがまがしい魔力  
空に浮かぶ雲のように真っ白の長い体毛  
ぐるりと一回転して前を向く巨大な角  
血のように赤黒い瞳

エスカーダ「し…白山羊の悪魔…ノ…ノツシュナイド様！？」

フィードはニヤリと笑った

フィード「残念だったな、ただの魔導師じゃなくて」

エスカーダの体に浮かぶ人間の顔が一斉にザワザワとざわめきだした  
フィード「？」

少しして、ざわめきが静まった

エスカダ「…名義契約の拒否はしない、その代わり俺をここから逃がせ」

フィード「逃がさねえつつってんだろ」

フィードが言い放った瞬間

エスカダの体が縦に割れ、水のように飛び散った

飛び散った中から、一行を出迎えた男女や、使用人たちがぐったりとした姿で現れた

飛び散ったエスカダの体は床に染み込み黒くなった

その”シミ”はゴキブリのような速さで床を這い、玄関へと向かった

フィード「だからあ！」

シミの真上が陰った

空中で拳を構えるフィード

フィードは拳をシミ目掛けて振り落とした

フィード「逃がさねえつつってんだろが！」

ドゴォン…！！

床は大きくえぐれ、フィードの拳の先にはビチビチと跳ねる鯉ほどの大きさの黒いヒルのような物体

それは空気に反応するように黒い霧となつて掻き消えた

フィードの頭の中で、クリスの声が響いた

クリス「まだだ！後ろ！」

しかし、フィードは動かなかった

フィードの体が白い霧に包まれ、中から人間の姿のフィードと、黒い猫の姿のクリスが現れた

フィードはゼエゼエと息を切らしていた

フィード「っ…疲れた…もうムリ…」

クリスはフィードの顔面にモチモチとした尻尾をベチベチと何度も振り落とした

クリス「んな場合じゃねーだろ！取り逃がすぞ」

そのやり取りの間に、黒いシミは玄関ドアにさしかかった

ガツン！

玄関にさしかかった黒いシミに突き立てられた剣——エオルだった  
剣からはキラキラと光る水滴がついていた

エオル「ユニコーンの血清”付きだよ”」

黒いシミは音もなく掻き消えた

よしのは少しの間祈るように手を組み、堅く目を閉じると、ホトカゲに視線を向けた

よしの「ホトカゲ…お戻りください」

ホトカゲは何度か玄関に目をやりヤサカニの黒い宝珠に戻っていった

クリス「…結局逃がしたな」

フィード「！？」

エオル「！」

クリスは玄関を見つめた  
フィードは溜息をついた  
フィード「…どうやら体を”2つ”に分けられるってのは嘘だった  
ようだな」

エオルが剣を突き立てる前、フィードがもう動けないと倒れ込んだ  
後、

その一瞬の間に、ゴキブリ程の大きさの黒いシミが玄関の扉の間を  
すり抜けていった。

鯉ほどの大きさの黒いシミは、オトリだった。

エオル「…実際は3つ、或いはそれ以上だったってことか」

フィード「クリスためー！気づいてたんなら、なーんで教えやがら  
ねえ！」

クリスはため息をついた

クリス「教えたところで、どの道お前動けなかっただろ」

フィード「…居場所バレたらマズいんじゃないのかよ」

クリスはニヤリと笑った

クリス「安心しろ、少なくとも、よしのちゃんだけは守ってやる」

エオル「何の話？てか、さっきのクリスの人間の姿は？」

エオルは疑いの眼差しをフィードとクリスに向けた

フィードは真上を指差した

フィード「満月の夜だけ、呪いが解けて猫の姿から解放される」

エオルはキョトンとした

エオル「呪い…？てか、あ、悪魔なのに呪いにかかってんの？」

フィードは自慢げにニヤリと笑った

フィード「俺様特製のな」

エオル（はい？）

クリスは面倒くさそうに補足した

クリス「かけられてやったんだよ、そのチンケな”俺様特製”の呪

いに」

フィード「チンケとはなんだー！」

エオルはクリスをまじまじと見た

エオル「かけられてやった…？」

クリスはわざと不快感を与えるようなため息をついて嫌々口を開いた  
クリス「俺は9000年前に家出してな、それ以来ずっと搜索されてんだよ、悪魔共に」

エオル「…搜索…」

オヤジ

クリス「ま、どーせ魔王が引退したいから後を継げとか、なんかそんなんだろ」

フィード「なんかすげー話だな」

クリス「迷惑な話だよ」

エオル「ちょ、ちよつと待って！

…てことはさ、居場所がバレたら俺たちつて悪魔たちに追われるってことじゃ」

フィードとクリスは同時にエオルを見て同時に答えた

フィード& amp ;クリス「まあ、そういうことだ」

間

エオル「め…迷惑………！！！！！」

クリス「なんだとコラ！」

エオルはクリスを指差した

エオル「だってそうじゃない！

俺たちは只でさえ魔導師協会やトランプに追われてヒーコラ言ってるのに、

その上悪魔たちにまで追われるだあ！？冗談じゃない！！」

クリスはヤレヤレとため息をついた

クリス「だから、強え魔導師とか悪魔に襲われたら、今みたいに力

を貸してやってんだろ」

エオルはフィードを見た

エオル「何、”利害一致”ってそういうこと!？」

フィードは鼻をほじりながらふてぶてしく答えた

フィード「そういうことだ」

エオルは頭を抱えた

エオル「ホントにさ、何がしたいわけ？」

フィードは呆れたようにため息をついた

フィード「だから、そのうちわかるつつてんだろ？」

エオル「目標や目的がないと、こんな闇雲で先が見えない状況じゃ頑張れないよ」

フィードは顎に手を当てた

フィード「それもそうか、わかった、じゃあとりあえずジパングに着くまでは頑張れ」

エオルはため息をついた

エオル「だーかーら…」

フィードはエオルを見据えた

フィード「ここで目的を明かせば、よしのの記憶”なんて”探す余

裕なくなっちまうぞ」

エオルは一瞬息を飲んだ

エオル「…なにそれ、脅し!？」

フィード「それも半分真面目も半分」

エオル「…」

フィード「…」

エオルは腹の底を探るようにフィードを見た

フィードもまた、探られるものなどないという自信を持った視線を返した

よしの「あの…」

2人の魔導師は同時によしを見た

よしの「…もし…ご迷惑でしたら…」

エオルはギクリとした

エオル「ち、違う違う違う!全然そんなこと」

フィード「お前の記憶探しはW・B・アライランスにとって必要だ」

エオルとよしのはフィードを見た

よしの「…ですが…先ほど…」

——よしのの記憶なんて探してる余裕はない——

フィード「余裕はない、だからこそ必要だ

悪いが利用させてもらうぞ」

エオルはフィードの胸ぐらを掴んだ

エオル「キミね…!!」

よしの「エオル様」

エオルはよしのを見た

よしのは組んだ手を鼻先に当てて、固く目を閉じている

よしの「私、安心しました」

エオル「…？」

よしのはニコリと笑った

よしの「私、やはり心配だったんです、

本当はご迷惑ではと」

フィード「…」

よしの「ですが…本当に必要とされている、

それは私にとって大変安心できるものです」

エオル「フィードはキミを”利用する”って言ってるんだよ!？」

よしのはニコリと笑った

よしの「理由はどうあれです」

フィードはエオルを見た

フィード「ほらな」

エオル「ほらじゃないよ!!俺はキミに対して不信感しかないよ!」

クリスはエオルの顔の前に飛びバリツと顔のド真ん中を引っ掻いた  
エオル「痛い!」

クリス「グダグダうつせー野郎だ

文句たれてないで大人しくしてろ、どの道お前はもう逃げ  
らんねーからな」

エオル「…!!」

フィード「…ま、大人しくセイラムにかけられるか、ここで足掻く  
か、好きにしな」

フィードはそのまま外に出た

よしのはエオルをまっすぐ見つめた

よしの「エオル様、私は、フィード様を信じます」

エオル「なんで…」

よしのは微笑んだ

よしの「悪い方でないことを、存じ上げておりますもの」

そう言うのと、よしのは出迎えた男女や使用人たちの介抱へ向かった

エオル（確かにそうだ… そうなんだけどさ…）

悪い奴じゃないって知ってる、わかってるけど、

それと信頼するというのはどうにも別モノのようだ

キーテジでの喧嘩の時のように、頭ではわかっていても気持ちがついていかない

かと言つて、セイラムにかけられるのも、嫌だった

エオル（… はあ…）

クリス「ボヌールちゃん、起きて」

ぐっすり眠っていたボヌールは重たい瞼をこすりながら体を起こした

クリス「ボヌールちゃんの両親は魔薬に手を染めてしまった

そして心が弱ったところを悪魔につけいられたんだ」

何か黒猫が喋っている

だが、睡魔は手をゆるめなかった

ボヌールは再び眠りについた

クリスはポツリとつぶやいた

クリス「目が覚めたら、

これまで君を守ってくれていた家庭<sup>せかい</sup>は跡形もなく崩れ去っている

君は自分で、どうするか決め、行動に移していかなければ  
ならないよ」

クリスは踵を返した。

これから少女の身に起こる絶望に、  
クリスは心踊るようだった

この感情は、人間どもにはわからないんだろうな

憤慨された記憶しかねーや

しかしまあ、長らく人間の世界にいと忘れてるけど、こんな時思  
い出すよ

俺もつくづく、悪魔なんだなあってことをさ

クリス「…にしても、エスカーダのやつ、魔薬なんて配って、何し  
ようとしてんだ？」

## 15・last refuge（後書き）

普通のパターンだったらお母さんとフィードが戦つてるところあたりで

ボヌールを出すべきかなあと思いましたが…

ボヌールはこの後、悪魔に”持って行かれた”両親を介護しながら周囲の助けを得、

将来、事業のさらなる拡大を実現する実業家となります。

まあそれはまた別のお話…。

さて、次回は15・1話N・B・Chase第2話です。  
6/20更新予定！

15・1・N・B・Chase in the morning (前書き)

ギルティンを追うリケとトウジロウ。

たった2人でどう進めていこう？

二人の作戦会議のお話。

ムー大陸中北部 ナイム国南部の街・エリドゥ  
緑豊かなヴィンディア連峰の麓に広がる別荘地

早朝の朝靄

小鳥のさえずりのこだま  
ひんやりとした湿った空気  
連峰から香る緑の匂い

中央に広がる静まり返った繁華街の、少し小道に入った一見廃屋の  
ような建物

その二階に広がるのは陰気な酒場  
殆ど客はなく、店も閉店間際

酒場の入り口をくぐり、真っ直ぐカウンターに向かって来たのは煉  
瓦色の髪に緑の瞳の女  
ここは犯罪者たちが集う”ハンターズ冒険者ギルド”の裏ギルド、女一人で来  
るようなところではない

女はカウンター越しに、自身の胸元に光る金色のバッヂを指差した  
店主は女に顔を近づけ、周囲に気づかれぬよう小声で話しかけた  
店主「トランプが何の用だ」

煉瓦色の髪の子——リケ・ピスドローもまた、小声で答えた  
リケ「情報提供をお願い、緊急なの」  
店主はふてぶてしくため息をついた

リケ「ギルティンという男を追ってる」

店主はタバコに火をつけた

店主「なんだい、ついに」免罪符”もお縄の対象かい」

リケは身を乗り出した

リケ「免罪符”？」

午前9：00すぎ

繁華街に面した冒険者ギルド

ハンターズ

こちらの酒場は活気があり、これから出発する冒険者たちで溢れかえっていた

リケはテーブルにサラダとハムエッグをつまみながら懐中時計を眺めていた

しばらくして、ふとテーブルが陰った

リケは影の主を見上げた

「ナマひとつ」

二メートル近くある黒髪黒目の大男——市松桃次郎

リケはため息をついた

リケ「朝一の、オマケに仕事前ですよ」

トウジロウはニヤリと笑った

トウジロウ「酒場来て呑まんでどないすんねん」

リケは頬杖をついた

リケ「待ち合わせ場所が悪かったかしら」

トウジロウは店員からジョッキに並々と注がれたビールを受け取った  
トウジロウ「何言うてんねん、最っ高の待ち合わせ場所やがな」

トウジロウはジョッキを一気に空にすると、椅子の背に肘をかけた  
トウジロウ「で？ボク諜報とか初めてやねんけど」

リケ「今朝調べて来ました」

トウジロウはパチパチと手を叩いた

トウジロウ「おゝ優秀やゝん」

リケはニコリと笑った

リケ「おかげさまで昨日仕事が早く終わったからね」

トウジロウ「…」

トランプにおいて、

普段諜報軍クラブと他の3つの軍は共に仕事をする事がない

それはクラブが仕入れてきた情報をもとに、他の軍が捜査を行う、  
というのがトランプのスタンスだからだ

当然、トウジロウとリケも副將軍エクスとしての雑務以外で共に仕事を  
するのは初めてであった

そして、ここまでの一連の会話で、トウジロウは思った

トウジロウ（からかうのやめとこ）

リケ「まずハンターズと裏ギルドで出回っている情報ですが、差分  
があるようです」

トウジロウ「差分？」

リケは頷いた

リケ「簡単に言えば、

ハンターズでは、あくまで”こういう魔薬が出回っているらしいから気をつける”っていうレベル、

裏ギルドでは”何処どこで誰々が”」

トウジロウ「より具体的な情報は裏ギルドいうわけか」

リケ「ええ、ただ…」

トウジロウ「何やねん」

リケは小声で話したいとトウジロウに顔を近づけた

トウジロウもまたリケに耳を近づけた

リケ「裏ギルドって大概店の場所を隠しているし、暗号とか…特別な入店方法があつて」

トウジロウは背もたれに寄りかかった

トウジロウ「簡単や、そこいらのチンピラとっつかまえて聞き出したらええだけの話やわ。」

どうせクラブもそうおまえらやろ」

リケもまた背もたれに寄りかかった

リケ「話が早い」

トウジロウはニヤリと笑った

トウジロウ「そら事務処理もかさむわ」

リケ「そういうこと！だから、手荒なマネはほどほどに」

トウジロウは肩をすくめた

トウジロウ「むつかしいこと言いはるな」

リケは手を組みテーブルに寄りかかった

リケ「で、ここの裏ギルドで得た情報がギルティンの扱っている商品について」

トウジロウ「あん？魔薬やろ」

リケ「”免罪符”」

トウジロウの眉がピクリと動いた

リケ「一口飲めばこれまでの罪を免れ、天国へ行ける、楽園への切符…そう謳っているらしい」

トウジロウはタバコに火をつけた

トウジロウ「ほざいとる」

リケ「多いのよ、世の中には。藁にもすがりたい人たちが」

トウジロウはタバコをくわえながらニヤリと笑った

トウジロウ「ほな、キーワードは”免罪符”やな」

リケは地図を広げ、ナйм国の北部を差した

リケ「つい先日がマーフ国のキーテジだったから、（その北に位置する）ナйм国は超えてはないと思うんだけど」

トウジロウは頬杖について地図を覗き込んだ

ナйм国はマーフ国の北に位置してはいるものの、国土は北東方向に広がっている

トウジロウ「真っ直ぐ突っ切ってたらジャラル国に入るか入らんかくらいにはなってるで」

リケはナйм国の北に目を落とした

トウジロウはニヤリと笑った

トウジロウ「オレならそうすんなあ」

リケ（確かに…ギルティンの目的が本当に魔導師を語つての神使教への薬物テロだとすれば、

巡礼のために世界中の神使教徒が集まるファンディアス国…つまり北に、一刻も早く進みたいはず）

トウジロウはため息をついた

トウジロウ「かといってほんまに真っ直ぐ突っ切るかはホシ次第やけどな」

リケ「そうですね、我々も2人だけですし、ではこころみましょう！」

リケはナイム国を指差した

リケ「ここから北の国々の北端の街で”免罪符”が出回っていないか確認していきます、

そして”免罪符”の噂が途切れたラインで張り込みます」

”免罪符”の噂が途切れたラインつまりまだギルティンの息がかかっていない位置を特定する。

そこからギルティンがムー大陸の西部に行くか、東部に行くか、はたまた中央部に行くかの判断材料とし、

追い詰めてゆく、

それがリケの作戦であつた

リケ「どうかしら？」

トウジロウはうなだれた

トウジロウ「面倒くさ…」

リケ「諜報って地道なの」

トウジロウ「ジミチやのうてジミやがな」

リケ「文句がなければこれで行きます、

では大ざっぱにムー大陸の右半分が私で左半分がトウジロウさん、いいですね？」

トウジロウはタバコを灰皿に押し付けた

トウジロウ「しゃーない、文句なしや。その作戦乗ったる」

リケ「では出発しましょうか」

## 15・1・N・B・Chase in the morning (後書き)

なんて大雑把な作戦だろう(笑)

ただ、二人とも魔導師です。

それがこの大雑把な作戦でも可能にする根拠。

2人ははたしてギルティンを追いつめることができるのでしょうか！？

次回は15・2話N・B・Chase第3話。

2手にわかれたうちのトウジロウのお話。

…ところで”魔薬”はR15に入るのだろうか…？

テロ容疑者ギルティンを追いつめるため、  
魔薬”免罪符”の噂を追うトウジロウ。  
情報を得るためたどり着いたのは…

15・2・N・B・Chase―In the afternoon!―

ジャラル国北部の街エバル

滑車の音が昼夜問わず鳴り響く炭鉱の街――

出稼ぎに来たよそ者は来れど、

旅人などほとんど立ち寄ることもないエバル。

ただでさえよそ者が目立つこの街で、その男はとかく目立った。

ジャラジャラと耳につけられた様々なピアス、

まくった袖の下から覗くタトゥーだらけの腕、

筋骨隆々としているうえに、背丈は2メートル近く、

そして何より、

黒い髪に黒い瞳。

すれ違う者たちはざわめいた。

「ジパング人……！」

「神使教徒だ！」

「ジパングにはサムライっつー凶暴で野蛮な僧兵がいるらしいぞ！」

男――イチマツ・トウジロウは退屈だと言わんばかりに大あくびした。

適当にひつつかまえたチンピラに、

この街に”裏ギルド”がないかどうか、捜させているところであった。

トウジロウ（ヒマや…）

ヒマを持て余し、入った酒場にはことあるごとに「ジパング人だから」と追い返された。

トウジロウ（バッヂつけとったら何や違たかもなあ）

トウジロウは他の魔導師の目がない時、魔導師のバッヂを外していた（↑違反）

トウジロウ（重苦しいて肩凝るわ…どいつもこいつもようこんなにつけられるなあ）

トウジロウは煙草をくわえて火を付けた。

街中に煙る土埃。

それに遮られくすんだ日の光。

浮かべた煙草の煙と鳴り響く滑車の音。

暑くもなければ寒くもない、

気だるい午後。

トウジロウは辺りを見回した。

トウジロウ（娼婦のねーちゃんとかおれへんかな）

「お兄さん、ヒマならあたしと遊んでかない？」

背後から甲高い幼い声。

トウジロウは振り返った。

だが視界には誰もいない。

「ちよつと！お兄さん！下！もつと下！」

1 2、3の少女だった。

トウジロウはため息をついて再び歩きだした。

少女「ちよつと！お兄さん！今明らかに娼婦探してたでしょ！」

トウジロウ「他のお兄さんと鬼ごっこでもして遊んでもらい」

少女「ガキ扱いしないでよ！あたしこれでもベテランなんだから」

トウジロウ「そら将来が楽しみやな」

少女はトウジロウのゴツゴツとした太い腕を両手で掴んだ。

少女「お願いだよ！1人でも多く稼がなきゃなんだ！」

トウジロウは通常ならこの手を振り解いて無視を決め込むところだったが、何分ヒマだ。

少女の会話に乗ることにした。

トウジロウ「ほく入り用か」

少女「お父さん炭鉱夫だったんだけど体調崩しちゃって…」

お母さんも病気がちだし、妹や弟の世話で忙しいし…」

トウジロウはフーと鼻から煙を吐いた。

トウジロウ「25点やな、つまらん」

少女「作り話じゃない！本当に…」

トウジロウ「作り話やないにしてもや」

少女は思わず手を離れた。

トウジロウ「お前みたいのは世の中ゴマンとおんねん。

それに同情したるアホなんぞ

ヒマな金持ちか世の中知らんすぎる蛙だけやで、甘い  
わ」

少女はキョトンとしてトウジロウを指差した。

少女「ヒマな金持ち」

トウジロウ「ちゃうわボケ、分かったら他当たれ」

少女は舌打ちした。

少女「ケチハゲジジイ」

トウジロウ「なんやと！」

少女は駆け足で路地裏に消えていった。

それから小一時間、

トウジロウは日当たりのよい店舗の壁際にしゃがみこみ、  
煙草の吸い殻の山を作っていた。

もうじき山が崩れるか、というときに、  
ようやくチンピラどもが現れた。

トウジロウはチンピラどもをボカボカと殴った。  
チンピラ「何するんスカ！っ！」

トウジロウ「俺をいつまで待たせてんねん役立たずども」  
チンピラ（怖え〜！）

「こ…こちらです」

トウジロウ「お！あったか！」

チンピラどもはトウジロウに背を向け、ニヤリと笑った。

15・2・N・B・C h a s e | I n t h e a f t e r n o o n ! |

(後

よい子のみんなは知らない人についていっちゃんいけませんよ！

さてさて、その知らない人たちについていっちゃんあったトウジロウは

…？

次回15・3話は7/3更新予定！

15・3・N・B・Chase―In the evening―(前書き)

チンピラたちに案内されてトウジロウがたどり着いた先は…？

ジャラル国北部炭鉱の街エバル

真横にかかるオレンジの夕日が男たちの影をより長く伸ばしている。

簡素な住宅街の狭い路地を抜け、現れたのは  
見るからに陰気な、普通の人間ではまず近寄らないであろう酒場。

外壁は張り紙や落書きだらけ、周辺は吸い殻やゴミくず、嘔吐物ばかり、中には乾いた血痕も見受けられる。

チンピラどもに案内されて店の前についたトウジロウは、  
タバコをふかしながら店の看板を見上げた。

トウジロウ「アンレストラウンジ不穏な休憩所”？けつたいな名前やの〜」

チンピラどもはトウジロウを酒場の中へ案内した。

酒場の中はまだ夕暮れだというのに酔っ払った荒くれどもがどんち  
やんと騒ぎ、

割れた酒瓶が床一面に転がり、  
部屋は一面醜悪な臭いが立ちこめていた。

トウジロウはニヤリと笑った。

トウジロウ「なんや、雰囲気ええトコやん」

部屋の隅にはゴロリと横たわる何人かの女性。

トウジロウ（…）

トウジロウはさらに奥の部屋に通された。

奥の部屋には、何か粉類が詰め込まれた袋が山のようにつまれ、その山にはひとりの男が身を埋めていた。

その男は恰幅の良い、如何にも荒くれどもをまとめ上げているといった雰囲気を持った大男だった。

大男はトウジロウを睨みつけた。

トウジロウ「ああ!？」

大男「なんだその坊主頭」

トウジロウをつれてきたチンピラどもはニヤニヤと笑いながら答えた。

「こいつ、この町に裏ギルドがないか探してるらしいんすよ」

大男はニヤリと笑った。

大男「ほー、ワケありか」

トウジロウの頭の前からつま先まで見回し、男はポンとトウジロウの肩を叩いた。

大男「ワケありでもいい仕事があんぜ」

トウジロウ「ちゃうわボケ、俺は仕事探しに来てんやのうて、」

大男は踵を返した。

大男「じゃあ用済みだな」

トウジロウ「ハア？」

瞬時に、トウジロウの周りを大勢のチンピラが囲った。

トウジロウ「裏ギルドは仕事の斡旋しかせーへんの？聞いた話と随分ちやうなア」

チンピラどもは声を上げて爆笑した。

「お前、まだここが裏ギルドだと思ってんのかよ！」  
「鈍すぎだろ！ダッセエ！ウケる！」

ブチン

と音が聞こえた気がした。

トウジロウはくわえていたタバコをポトリと落とし、足でグリグリともみ消した。

トウジロウ「こないピュアなお人好しダメして、自分らタダで済むと思うなよ？」

「ギャハハ！ピュアなお人好しっておま、」

チンピラの顔面にトウジロウの拳がめり込んだ。

ズガァン

殴られたチンピラの体は簡素な木製の壁を軽々と突き破った。

トウジロウはニヤニヤと笑い、ボキボキと指を鳴らした。  
バッタバタとチンピラどもが沈められてゆく様に大男は思わず尻餅をついた。

そうして自分が最後の一人になった時、

大男は恐怖で思った通りに声が出せないことに気づいた。

大男「ま、待ってくれ…謝る！」

トウジロウはニヤニヤしながら大男へ近づいてゆく。

大男「もも目的はなんだ！」

トウジロウ「ようやっと聞く気なつたか、せやけどな」

大男の真ん前でトウジロウは歩みを止めた。

トウジロウ「その前に一発殴らせろや！」

大男「ひいひい！」

大男は目を瞑った。

「やめて!!」

拳を振りかざしたトウジロウと身構える大男の間に飛び出したのは一人の少女。

トウジロウ「あ？自分、さっきの…」

街中で出会った娼婦の少女であった。



15・3・N・B・Chase―In the evening―（後書き）

さてさて、あきらかに子どもが出入りするような場所ではないこの場所に、

なぜあの少女がいるのか？

次回15・4話は7/11更新予定です。

15・4・N・B・Chase | In the twilight |

(前書)

親玉を追いつめたトウジロウ。  
その前に立ちはだかったのは…。

ジャラル国北部の街エバル

アンレストラウンジ

荒くれ共が集まる酒場”不穏な休憩所”

街のチンピラにエバルの街の”裏ギルド”として案内されたトウジロウであつたが、

そこは”裏ギルド”ではなくワケ有りの人間に仕事を斡旋するという怪しい男達の溜まり場であつた。

騙されたことを知つたトウジロウは男たちをタコ殴り、ボスと思しき男のもとへ歩み寄る。

トウジロウの拳が振りかざされた瞬間、

トウジロウの前に立ちはだかつたのは、町で追い払つた娼婦を自称する少女であつた。

トウジロウ「おいおい、ここはガキが出入りするとこやないやろ」

少女「ここは！女もガキも関係ない！！」

トウジロウは煙草をくわえ、火をつけた。

少女「この人は…あたしに仕事をくれたんだ！！」

トウジロウは鼻で笑つた。

トウジロウ「もろた仕事が生売りやて？」

少女「そつだよ！」

トウジロウ「娼婦やんのにソイツから許可があるんかい」

少女「そつだよ！街の治安維持とか何かで、

本当はやっちゃダメなの！

でもこの人の許可があれば…」

トウジロウ「ソイツは誰に許可取つてんねん」

少女「え…」

トウジロウはニヤリと笑った。

トウジロウ「お前、一個仕事こなす毎に、

ソイツから金とられとんちゃう？」

少女の声が小さくなった。

少女「斡旋料とこの所属料…」

トウジロウは声を上げて笑った。

トウジロウ「ボられとんやん！

他でそないな制度ないとこなんぞゴマンとあんで！」

少女は目が泳いでいる。

少女「だ…だって、お金がいるんだもん、

薬代や生活費…他の町に移住するお金なんかない…」

トウジロウ「そらソイツから余計な金とられとるからな。

ソイツもソイツでお前みたいな金ヅルおらなったら稼  
ぎが減る、

せやからお前にはギリギリの金しか渡せへんようにし

とる、それだけや」

少女「嘘だ！」

トウジロウ「かもな」

そう言うとき少女の後ろで丸まっている男を指差した。

トウジロウ「今からソイツに聞いたるわ」

指を差された男は突然笑い出した。

トウジロウ「あん？」

男「勝った」

トウジロウはクルリと体を返し、後ろへ飛んだ。

ズガン！

瞬間、鋭く先の尖った氷塊がトウジロウの顔の前を横切り、壁に深く突き刺さった。

トウジロウはニヤリと笑った。

トウジロウ「最近魔法を顔に向けて打ったらあかんで習わへんのかい」

トウジロウの視線の先——出入り口でトウジロウに向けて手をかざしている男。

サングラスで顔を隠し背中に槍を背負ったその男に、トウジロウは見覚えがあった。

槍の男は少女の横でへたり込む大男に声をかけた。

槍の男「ボスさん平気かい？」

大男は立ち上がった。

大男「ガハハハ！見たか！こっちは魔導師先生　がついているんだぞ！」

槍の男「観念しな」

トウジロウは煙草をふかした。

トウジロウ「身の程知らずいうんはこのことやな」

槍の男は槍を構えた。

切っ先が氷でみるみる大きくなってゆく。

トウジロウ「来いや」

氷の切っ先から目にもとまらぬスピードの突きが繰り出された。

トウジロウは軽々それをよけ、次の瞬間には槍の男の目の前にトウジロウの膝があった。

鈍い音を立て、槍の男は後ろに吹き飛んだ。

槍の男の口から、ボロボロと歯が落ちた。

槍の男「貴様……!!」

たちまち部屋が冷気に満ち、突風が吹き荒れた。

少女「きゃ！」

トウジロウは新しい煙草に火をつけた。

槍の男「爆風雪……!!」  
フ・リザ・ルド

トウジロウは「ふう」と煙を吐いた。

トウジロウ「精霊分解」  
オズ・ラジ・ルーフ

トウジロウの言葉に反応し冷気と風は何事もなかったようになくなった。

槍の男「な…魔導師…!？」

トウジロウ「こないなクソ狭いところで”爆風雪”なんぞ使うなや」

槍の男「ジパング人…」

トウジロウ「さっきからアホばっか…自分どいつに教わってん」

槍の男「…の、男!!」

槍の男の顔から一気に血の気が引いた。

トウジロウ「お、そうや、これつけてへんかったな」

トウジロウはポケットから魔導師バッヂを取り出し、胸元につけた。  
トウジロウ「俺、自分見覚えあんなんだけど……なんやつけ？犯罪魔導師の」

槍の男は慌てて逃げ出した。

……が、トウジロウの足が一足早かった。

ガン！

トウジロウの足が乱暴に扉を閉めた。

トウジロウ「もののついでや、俺直々に逮捕したるわ」

槍の男は力なくへたり込んだ。

大男「ま、魔導師先生！？」

トウジロウ「そうや、自己紹介してへんかったわ」

トウジロウは着ていた黒いＴシャツの、まくっていた袖を下ろした。  
下ろした袖から覗く竜と剣の紋――

大男「ト……トランプ……！！の、ジパング人の……男……！！」

大男は再び尻餅をついた。

大男「スピードのエース……！！」

トウジロウ「観念しいや」

少女は訳も分からずただ男たちのやりとりを眺めていた。



15・4・N・B・C h a s e | I n t h e t w i l i g h t |

(後書

…あれ？水戸。門？

次回は15・5話、7/19更新予定！  
大男がとらえられ、少女は…

15・5・N・B・Chase―In the night!―（前書き）

魔薬”免罪符”捜査中、たまたま犯罪魔導師に出くわしたトウジロウ。

犯罪者の引き渡しのため、

エバルの町の自警団や、トランプのハート軍がやってきました。

ウランド「…お前、自分の仕事しろよな」

トウジロウ「しゃあないやんけ、

たまたまでも出くわしてもうたら、

そら見過ごしたらあかんやろ」

ジャラル国北部の街エバル

トウジロウが”裏ギルド”だと案内された先は

ワケありのならず者を炭鉱の労働者として派遣したり、

娼婦として斡旋したりした派遣料、斡旋料で荒稼ぎを行っていた悪

徳職業紹介所であつた。

それだけであれば対魔導師犯罪警察組織が手の出す範疇ではなかつ

たが、

雇っていた用心棒が犯罪魔導師であつたことがその紹介所の運の尽きであつた。

エバルの自警団に連行されてゆくボスであつた大男。

少女の目の前を通り過ぎたとき、少女は大男にすがりついた。

少女「ねえ!!これからどうしたらいいんだよ!!あたしの仕事は!?!どうなっちゃうの!!!」

大男は少女を突き飛ばした。

大男「うるせええ！俺が知るかよ！！」

大男は自警団に取り押さえられた。

大男「畜生め！！」

少女はよたよたと数歩後ずさるとトウジロウの元へ歩み寄った。

少女「ねえ…どうしてくれんのさ…ねえ！！」

少女はトウジロウのシャツの裾を思いっきり引っ張った。

ゴン

少女は頭のとっぺんを押さえしやがみこんだ。

トウジロウ「シャツが伸びるわアホンダラ！」

ウランドはポツリと呟いた。

ウランド「…相変わらず最低なヤツだな」

トウジロウ「やかましいわボケ」

トウジロウはしやがみこむ少女を見下ろした。

トウジロウ「自分で考えろや、”誰かが助けてくれる”いう甘っちょろいヤツはどこ行ってもダメや」

少女は泣き出した。

ゴン

トウジロウの後頭部にウランドの拳が響いた。

トウジロウ「何すんねんゴリアツ!!」

ウランドは少女の前でよっこらせとしゃがんだ。

ウランド「…家族がいるなら帰りなよ、

君1人が苦しんで解決することじゃない。

君はもう少し、家族に甘えてもいいんじゃないかな」

トウジロウは不味いものを食べたように顔をしかめ舌を出した。

トウジロウ「ゲロ甘やわ」

ウランド「…お前の根性論は耳が腐る」

トウジロウは指をバキバキと鳴らした。

トウジロウ「聞こえへんかったわ」

ウランド「…本人の耳が腐ってるなら仕方ないか」

トウジロウ「いてもうたるゝ!!」

ウランド「トウジロウ!」

トウジロウ「なんや!」

ウランド「…お前の唯一の欠点は弱者を理解できないとこだな」

トウジロウ「必要ない」

ウランド「…1人進んで、誰も追いつけなくて、後ろを振り返った  
ら誰もいない、

だからキングを降ろされたんだろう?

お前は”あれ”から何も学ばなかったのか?」

トウジロウ「何があかんのか、未だにわかれへんわ。一つだけ言えることは」

ウランドはため息をついた。

トウジロウはニヤリと笑った。

トウジロウ「俺はジパング人、お前らは生まれも育ちも魔法圏、それだけや」

ウランドは部下に呼ばれ、そちらに向かった。  
その去り際、ボソリと一言。

ウランド「…お前、手先だけは器用なのにな」

トウジロウは少女と2人になった。

ふと見下ろすと少女は涙の引いた目でトウジロウを見つめていた。  
トウジロウ「…生きるには強なるしかない、

親も兄弟も友人も、守りたいならもっと強なるしかない、  
い、

俺はそうして来てん、

どうするかは全部自分で決めなあかんし、

それは全部自分の責任や、

…俺は生きるいうことはそういうことや思てる」

少女は目の前のこの男のこれまでの人生を想像した。

きつと耐え難い苦痛や困難を、

強くなることで乗り越えて来たのだろう、

だからこんなことが言えるのだと。

少女「…どうしたらそうなれるの？」

トウジロウはタバコに火をつけた。

トウジロウ「自分みたいな凡人は、10年で100年分の苦勞を  
するんやな」

少女「…」

トウジロウは自嘲気味に笑った。  
トウジロウ「俺は1000年分やったけど」

ウランド「…これからどうするんだ？」

トウジロウは面倒だと盛大なため息をついた。

トウジロウ「裏ギルドが見つかれへんかったから、別の街に移動や」

ウランド「…ふーん、まあ頑張れよ」  
↑興味なさげ

トウジロウ「自分なんで聞いてん！！」

ウランド「…まあ一応把握くらいはしておかないとな、仕事だ仕事」

トウジロウは鼻で笑った。

トウジロウ「冷たいわあ」

ウランドは呆れ気味にため息をついた。

ウランド「…なんでお前らの心配までしなきゃなんないんだよ」

トウジロウ「ハッ！そらそうや」

それから2人は拳をガツンと合わせると、それぞれの仕事へと戻った。

トウジロウ「リー<sup>リケ</sup>ダーはんはさぞかし順調なんやろなあ」

## 15・5・N・B・Chase―In the night!―（後書き）

キングを下されるうんぬんの話はこれまでの話にもチラホラでてきました、

今回もその断片でウランドから説教されたトウジロウ。

「ジパング人だから」「魔法圈だから」

なにやら根は深そうですね。

詳細はそのうち、トウジロウの過去編をやるときに。。

次回は久しぶりの本編第16話の更新です。

7/24更新予定！

## 16・stray from the path(前書き)

ひさびさの本編更新。

さて、何やら不穏なタイトルですが、

一体だが、どのように「stray from the path  
h(道を踏み外す)」なのでしょう？

「わー！すごい！お屋敷ばっかり！」

ミルクティー色のベリーショートに黄緑色の瞳、猫の尻尾を生やした少女——ラプリイは辺りを物珍しそうに見回した。

「おい、あんましウロチヨロすんじゃないよ」

ラプリイの後ろから両手をポケットに突っ込んで、白髪金目に狼の尻尾を生やした青年——ヤクトミ・ヴルナスは面倒くさそうに注意した。

ラプリイは顔を赤くした。

ラプリイ「べ、別にはしゃいでる訳じゃないんだから！」

ヤクトミ（十二分にはしゃいでんじゃねえか）

ラプリイはそっぽを向いた。

ラプリイ「ふんだ、都会人のアンタには田舎者の気持ちなんてわかんないんでしょーけどっ」

ヤクトミ（なんでそうなんだよ…）

ヤクトミは重いため息をついた。

ムー大陸中部 ナイム国 南部の街エリドゥ。  
緑あふれるヴィンディア連峰”オーバーザホロウ乗り越えた先の絶望”の麓にある別  
荘地――

ラプリー「ここにフィードさん達、いるかなあ」

ヤクトミ「さあな」

ヤクトミは何かを探すようにキョロキョロしていた。

ラプリーは笑った。

ラプリー「なあに、やっぱりあんたも物珍しいわけ？」

ヤクトミ「どつかの田舎者と一緒にすんな」

ラプリー「キー！」

この街で、ガルフィンと合流するはずだった、だが連絡はまだない。  
山超え中に連絡をとった際に、シャンドラにすることだから一度  
戻るように言われた。  
嫌な予感がした。

ヤクトミはこれまであえて聞こうとしなかったことを、ラプリーに  
聞いた。

ヤクトミ「…なあ」

ラプリー「なによ」

ヤクトミ「………シャーン…フィードにあった時、アイツ様子どうだ  
った？」

ラプリーはキョトンとした。

なにを今更、と思ったからだ。

だが、ヤクトミのいつになく神妙な面持ちに、ラプリーはいつもの  
ように突っかかるのをやめた。

ラプリー「どんな様子って…病気とかはなさそうだったし、  
なんていうか、元気いっぱいエネルギーシユな人だったよ」

ヤクトミは「やはり聞かなければよかった」と後悔した。

初対面のはずのラプリーにまで言われるくらい、”いつも通り”。  
やっていることは、共にトランプを目指そうと誓い、競い合っていた頃から到底考えられない反社会的行為。

ラプリーの回答はただ単にヤクトミの「なぜ？」という思いを一層深めるだけのものでしかなかった。

ラプリー「何よ、それが普段の様子とは違っつて？」

ヤクトミは首を横に振り、静かにため息を付くと、何処を見るときでもなく、ただ遠くを見つめた。

ヤクトミ「それが俺の知っているシャンドラ・スウェフィードだよ」

ラプリーはヤクトミを見上げた。

ラプリー「…事情があるんだよ、悪い人には見えなかったもん」

ヤクトミは笑った。

ヤクトミ「そっか」

ラプリーは直感的にわかった。

ヤクトミのその笑みは、偽りだと。

ラプリーは見せ物屋でフィードたちに助けられたときのことを思い出した。

「どうせこいつらもほかの金持ち共と同じ」だと、  
本当に何の下心なく助けてくれているなんて、なかなか思えず、突  
っぱねたっけ。

ラプリーはポツリと呟いた。

ラプリー「人を信じるってすごくエネルギー使うよね」

ヤクトミ「？」

ラプリー「だとしたら、信じ続けるって、すごくしんどいことなの  
かも」

ヤクトミは少しの間ラプリーの言葉を反芻した。

ラプリーの言わんとすることが汲み取れなく、かつ自分の中で何か  
に引っかかったためだ。

これまで、信じるだの信じ続けるだの、全く意識したことがなかつ  
た。

信頼が当たり前のものであったから。

だが、今、その当たり前であるはずのものが、辛い。

それはなぜか？

ヤクトミは立ち止まり、口を覆った。

ヤクトミ（なぜなら、…俺はまだシャンドラを信じ”たい”から、

けど、アイツのやることなすことが、それをさせてく  
れない）

ヤクトミの心の奥底で引っかかった感情——それは”裏切られた”  
という気持ちからくる悲しさであった。

ヤクトミは固く目を瞑った。

ヤクトミ（バカなことを考えんな！…俺は、）

ラプリー「ちよつと！どうしたのよ」

ラプリーの甲高い声がヤクトミの耳に入ったのはラプリーが4度目に声をかけた時だった。

それまでラプリーに袖を引っ張られていたことにすら気づかなかった。

ヤクトミ「ん、ああ、悪い」

わずかな沈黙。

ヤクトミ「そういや、この街でちよつと人と待ち合わせなんだ、

今日はここで泊まりな。」

ラプリーはニヤリと笑った。

ラプリー「待ち合わせ？」

ヤクトミはヤレヤレとため息をついた。

ヤクトミ「男だよ、アカデミ魔導師養成学校の先生。」

ラプリーはつまらなさそうに小石を蹴った。

ラプリー「つまんないの！」

ヤクトミ「いいからとつと宿探しちまうぞ！」

ラプリー「へい」

適当な宿を探し、ヤクトミは待ち合わせ相手と連絡を取るため宿に

留まり、ラプリイは暇だからと尻尾を隠して街に出た。

1人で街を歩くのは久しぶりな気がした。

そういえば、買い出しや、散髪の時も、

いつもヤクトミがそばにいて、周囲の目から守ってくれていたっけ。

隠した尻尾が窮屈だった。

ラプリイ（…そっぴや、アイツは堂々と出してたな）

ヤクトミが尻尾を隠しているところなんて、むしろ滑稽だ。

ラプリイ（でも、それが出来るのは、アイツが魔導師だからよ）

ラプリイは俯いた。

ラプリイ（…”そのために”魔導師になったって言ってたよな…）

ヤクトミはまだ魔導師ではなく、学生。

ラプリイ（アイツは自分で道を切り開いた。じゃあ、私は…？）

しばらくブラブラと歩いていると、人だかりが目に入った。

よく見ると、大きな屋敷の門の前で二人の保安官と数人のハデな格好の女性たちと一人の少女。

ラプリイ（モメ事かな？）

ラプリイの野次馬心に火がついた。

人の顔がハッキリわかる距離になると、少女が泣きじゃくっているのがわかった。

少女の格好はこの屋敷の娘だということがすぐにわかるものであつ

た。

大方、大事なお宝でも盗人に盗られたのだろう。

ラプリーはいい気味だと思った。

ラプリー（あたしみたいな身分の人たちをボロ雑巾みたく扱って、踏み台にして、蹴落として、手に入れた金でしょう？）

金持ちには檻の外側から笑われた記憶しかなかった。

金持ちの金は他人の人生の犠牲の上にあるんでしょう？

腐るほど持っているんでしょう？

だったらいいじゃない、ちよつとくらい、分けてくれたって。

世の中には貧乏で困ってる人がどれだけいると思ってんのよ。

人だかりを通り過ぎる際、会話の端で「猫が」という言葉が耳に入った。

人だかりとの距離が開いたところでラプリーは盛大に笑った。

ラプリー「猫とか！」

猫は自由気ままな生き物よ。

どこかに散歩に出ているだけかもしれないじゃない。

それとも、“いなくなった”が“盗られた”とイコールになるような飼い方だったわけ？

飼い殺しよ、そんなの。

もし本当に盗られたっていうなら、あたしはその泥棒に拍手を贈るわ。

ラプリーの歩みが止まった。

ラプリー「…泥棒…？」

「すまん、待たせたな」

宿の一階に併設されているレストラン。

ヤクトミの座るテーブルの前に現れたのは体格のいい犬男。

ヤクトミの担当教官であり、犬の獣人であるマスター・ガルフィン。

ヤクトミがイスから立ち上がろうとすると、ガルフィンは手のひらに向けて制止し、自身もイスに腰掛けた。

ガルフィン「いくつか伝えなければならぬことがある。」

ヤクトミは背筋を伸ばして両手を膝に置き、拳を握った。

ヤクトミ「はい」

ガルフィンはヤクトミの視線を確認し、口を開いた。

ガルフィン「トランプがジパング人人質の件を認識した」

「これより協会は国際対応に周り、W・B・アライアンズ搜索からは手を引く」

ヤクトミは固く目を閉じ、黙ってガルフィンの言葉に耳を傾けていた。

ガルフィン「…そういえば、件の獣人の女子はどうした」  
ヤクトミ「え？」

ガルフィンは話題を変えた。

ヤクトミがあまりにだんまりだったためだ。

恐らく言葉が出てこないのだろう。

こういう時は、頭の回る話題で言葉を出やすくしてやるに限る。

ヤクトミはガルフィンと目を合わせなかった。

ヤクトミ「街をブラブラしてるはずですよ、腹空かしたら戻つてく  
ると思います」

ガルフィンは店員から出されたコーヒーを一口啜った。

ガルフィン「腹空かしたら戻るって、どんな扱いをしているんだ…」

ヤクトミ「…ソイツ、シャンドラとエオル・ラーセンを追ってるん  
ですよ」

思いがけぬヤクトミの言葉に、ガルフィンの手が一瞬止まった。

ガルフィン「接点があるのか?！」

ヤクトミは自分の手元を見つめていた。

ヤクトミ「見せ物小屋にいたらしいんですよ、

アクロスザナルで移動中にそこから助け出されたって言  
ってました」

ガルフィン「…」

ヤクトミ「先生」

ガルフィン「ん」

ヤクトミ「…アイツ、本当に変わってしまったんでしょうか」

ガルフィン「テーブルに寄りかかった。

ガルフィン「お前は、シャンドラを信じたんだな」

ヤクトミ「…わかりません」

ガルフィン「お前が向けている信頼を、シャンドラは今、W・B・アライランスとして裏切っている」

ヤクトミ「…」

ガルフィン「…と思っている」

ヤクトミは苦笑した。

ヤクトミ「そうですね」

ガルフィン「不安はわかる。

ユディウス先生も、俺も、みんなそうだからな。

答えをもっているのはシャンドラだけだ」

ヤクトミはガルフィンの顔を見た。

ガルフィン「だが、…まあ、これはマリア先生の受け売りだが、

信じるやつがいなくなったら、シャンドラは孤独になっ  
てしまう」

ヤクトミは笑った。

ヤクトミ「信じるったって現に、」

ガルフィン「今ヤツがやっていることを否定するのは無理な話だ。」

ガルフィンはピシャリと言いつつ放った。

ヤクトミは突き放されたように感じた。

アイツは本当はいいやつなんだ、

犯罪なんて犯すようなやつじゃない、

そう信じたかった、

だが、心がつらい。

それはアイツがやっていることを、本当は違うんだと自分の中で否定しているから。

ヤクトミは黙ってガルフィンの次の言葉を待った。

ガルフィン「信じるというのはそういうことじゃないんじゃないか？」

ヤクトミ「…？」

ガルフィンはコーヒーを啜って背もたれに肘をかけた。

ガルフィン「俺の友人に、セイラムにかけられたバカがいてな」  
ヤクトミ「えっ！？」

ガルフィンはどこをともなく中空を見つめた。

ガルフィン「呪いはかけられたが、今しっかりと地に足つけてまっとうな人生を送ってるよ」

ヤクトミ「…！」

ガルフィンはフツツと笑った。

ガルフィン「ソイツが今そうしてられるのも、

ソイツの可能性を信じてソイツが一人で立てるまで諦めないヤツがいたからだ。」

ヤクトミ「…それが先生？」

ガルフィン「は笑った。」

ガルフィン「俺じゃあない。」

まあ、俺もソイツに乗せられて立ち直るまで見守った  
クチではあるが…なあ、ヤクトミ、

ヤクトミ「はい」

ガルフィン「お前はどする？」

ヤクトミ「…」

ヤクトミは背筋を伸ばし、体の空気を入れ替えるように息を吸った。

ヤクトミ「俺は、その人みたいに氣い長くありません」

ガルフィン「ほう」

ヤクトミ「会って、問いただして、ついでに一発ぶん殴って、目エ  
覚まさせますよ！」

「先生！」

ヤクトミは立ち上がり、両手を膝につき、深々と頭を下げた。

ヤクトミ「留年しても罰則くらってもいい、シャンドラを探させて  
ください、この通りです！」

ヤクトミは頭の先で、ガルフィンが腕を組んだのがわかった。

ヤクトミ「無理なら…俺、魔導師になるの諦めても、」

ガルフィン「男なら」

ヤクトミは顔をあげた。

ガルフィン「二兎でも三兎でも、目標を追え。

お前は若い、それができる。

…年寄りには、そんな若者を応援してやるだけだ、納得行くまでやれ、ヤクトミ」

ただし、とガルフィンは付け加えた。

ガルフィン「その間のゼミ課題や授業の単位は容赦しないからな」

ヤクトミはニヤリと笑った。

ヤクトミ「臨むところです」

ガルフィンはヤクトミを席に着くよう促した。

ガルフィン「ところで獣人の女子の件だが」

ヤクトミ「ああ、シャンドラとエオル・ラーセンに用事があるらしいので、このまま連れて行きます」

さらりと言つてのけるヤクトミにガルフィンは呆れた。

ガルフィン「…協会で一時的に預かるうという話が出ている」

ヤクトミにはその話が突拍子のないことに聞こえた。

ヤクトミ「預かる？重要参考人とか、そういうのですか？」

ガルフィンはため息をついた。

ガルフィン「バカタレ。協会は一般人をトランプのような野蛮な扱い方はせん。」

ヤクトミは苦笑した。

ヤクトミ（あのー…俺目指してんのトランプなんスけど）

ガルフィン「お前の足を遅める原因だろうし、ここいらは獣人差別の色濃い地域だ、オマケに女の子だしな」

ヤクトミは声を上げて笑った。

ヤクトミ「女の子？なんていいもんじゃないスよ、アイツは」

ガルフィンは眉間を押さえた。

ヤクトミ（こいつ…女子に対する思考回路はシャンドラと大差ないな…）

…ヤツに比べたら少しは大人だと思ったのに…）

ヤクトミ「？どうかしました？」

ガルフィン「どうもせん、だが、”女の子だからな”」

ヤクトミ「???」

ガルフィン「…協会経由で家に帰してやろうとも考えている」

ヤクトミ「あゝなるほど！

ならどうしたいかアイツに決めさせますよ、

言うことかせようとするとトコトン反発してくるヤツ

なんで」

「ちよつと！」

突然響いた甲高い声。

ヤクトミは反射的に声の方に顔を向けた。

ヤクトミの真後ろには両手を腰に当ててこちらを睨みつけているラプリー。

ラプリー「探したじゃないの！」

ヤクトミ「はあ？だから人と会うつつたる。」

ラプリー「あんたのその白髪目立つと思ったけど、

そこらへんのおじーちゃんと間違えまくったじゃない！」  
ヤクトミ「そりゃどーも。あ、先生、コイツです。」

ガルフィン「は席を立ち、ラプリーに右手を差し出した。

ガルフィン「魔導師養成学校で教師をしているガルフィンだ」

ラプリーはガルフィンを見つめたまま、呆然としている。

ヤクトミが肘でラプリーをつついた。

ヤクトミ「ほら、握手！」

ラプリーは呆けたままガルフィンと握手した。

ガルフィン（…）

ガルフィンはニコリと笑い、ギュツと握り返した。

ラプリー「…あたし…半獣人モードで街中にいる獣人、初めて見た」

ヤクトミ「おいこら、失礼だろ…」

ガルフィンはワハハと笑って席につくように促した。

ガルフィン「構わん、珍しいだろう、

ヤクトミのような温室育ちじゃない証拠だ、厳しい環

境を生きてきたんだな」

ラプリー「…！！」

ヤクトミ「…温室育ちって…」

ヤクトミはガルフィンをじっと見つめた。

ガルフィン「ハハハ、俺も変わらん。

外の世界に比べたら、理解のある協会の中はぬるま湯だ。

だがなヤクトミ、

重要なのはその温室やらぬるま湯やらにぬくぬくと浸かりきらないことだ。

俺がいつも口を酸っぱくして言っているだろう?」

ヤクトミ「世の中を見て体験して学べ」ですね、もう耳にタコできくくらい聞いてますよ」

ラプリーは座ってからもずっとガルフィンを見つめていた。

ガルフィンがこちらを見た。

ガルフィン「注文は決まったか?」

ラプリー「あ、えと、紅茶…」

ガルフィンは店員を呼び止め注文を取った。

ガルフィン「さて、ラプリーさんだったか」

ラプリーはそういえば名乗り忘れた、と顔をしかめた。

ガルフィン「構わん、君のことはヤクトミからいろいろ聞いたところだ。」

ラプリーはヤクトミを睨みつけた。

ヤクトミ「別に変なこと言ってるねえよ。」

店員が紅茶ラプリーの前に置き、ラプリーが一口啜ってから、ガルフィンは口を開いた。

ガルフィン「シャンドラとエオルを追っているんだってな、会って何をしようと思っているんだ?」

ラプリーは紅茶に角砂糖とミルクを入れた。

紅茶はたちまちラプリーの髪と同じ色になった。

ラプリー「わかんないけど…多分、お礼が言いたい気がする」

ガルフィン「礼?」

ラプリー「助けてもらったから」

ガルフィン「そうか…ところで、魔導師協会では君を家族の元に帰そうという話が持ち上がっている、どうだ?」

ラプリーは目を見開いた。

弟は無事なんだろうか、父は、母は、お金に困って、苦しんではないだろうか。

ラプリー（…お金…）

ガルフィンの言葉で忽ちに湧いて出た望郷の思いは、一瞬にして掻き消えた。

ラプリー（…今のあたしが戻っても、食いぶちが増えるだけだ…）

それどころか、今度はまた別のところに売り飛ばされるだけかもしれない。

ラプリー（やっぱり、”今は”ダメ）

ラプリーはガルフィンを見た。

ラプリー「いいです、私はまだ帰るわけにはいきません」  
ガルフィン「まだ」？」

次にラプリーはヤクトミを見た。

ラプリー「あたし、やりたいことできたから」

ヤクトミ「ハア？」

ラプリー「あたしはそのやりたいこと目指しながら、フィードさんとエオルさんを追っわ、あんたとは別で」

ラプリーの唐突な発言に、ヤクトミは思わず身を乗り出した。  
ヤクトミ「おいおいおい…大丈夫かよ?！」

「つか、そのやりたいことって何!？」

ラプリーは紅茶を啜った。

ラプリー「なんであんにに教えなきゃなんないのよ、内緒！」

ヤクトミ（ふ…不安だ…）

ラプリーは再びガルフィンを見た。

ラプリー「そういうことだから」

ガルフィン「君…猫の獣人か？」

ラプリーはきよとした。

ラプリー「そうだけど」

ガルフィンはクスリと笑いながらコーヒーを啜った。

ガルフィン（勝ち気で気まぐれ、猫の獣人の特徴そのまんまだな）

「君の思った通りにしなさい。ただし、危険な橋は渡らないように。」

ヤクトミはため息をつき、頭をポリポリと掻いた。

ヤクトミ（ヤレヤレ…ガルフィン先生がそう言うなら、まあいっか）

「まあ頑張れよ」

ラプリーはヤクトミに手のひらを差し出した。

それは明らかに握手を求めている手ではなかった。

ヤクトミ「…」

ラプリー「女の子がこれから一人旅始めようってのよ！

餓別の一つでもくれたっていいじゃない！」

ヤクトミ（はい？）

「ちよつと待て、何で俺が…」

ガルフィン「…」 ↑ 笑いを堪えている。

ヤクトミ「先生！全然笑うとこじゃないから！」

ラプリー「大人に助けを請うな——っ！」

こうしてラプリーはヤクトミから護身用の短剣と次の街まで程度の食料と旅の道具一式を手に入れた。

体制を整えるため一度協会へ戻ることにしたヤクトミと別れ、

ラプリーは随分久しぶりに1人になった、気がした。

ヤクトミと出会ってから、実際さほど日数は経過していなかったが、心にポカンと穴が空いたようだった。

ラプリー（フンだ、あんなヤツでも居ないとちょっと寂しいものね。）

ラプリーは歩き出した。

自分の足音が大きく聞こえた。

ナイル国南西部 ポホヨラ街道

フィード「腹減った〜」

フィードは道端の草を咥った。

エオル「フィード！それ雑草だから！」

フィード「いいや、これはウィンナー…ウィンナーだ…」

エオルは慌ててフィードの手の中の草を払いのけた。

エオル「空腹で幻覚見えるってどんだけ！？1食抜いただけじゃん」  
よしのは困ったわと頬に手を当てた。

よしの「フィード様…いつもは5食ですし」

エオル「食べ過ぎなんだよ…」

エオルははた、とよしのの腕の中で気持ちよさそうに喉をゴロゴロと鳴らすクリスを見た。

エオル「…フィードの腹減りが早いのもって…お前がフィードの魔力喰ってるからじゃないの？」

クリスは平然と答えた。

クリス「当たり前だ、俺は魔王級の大悪魔だぞ！  
サタンクラス

魔法提供してるだけみたいな単発の契約じゃねーんだ、俺がそいつと契約してる間はキツチリ頂くよ」

エオル「んなっ…!!」

クリス「でも、ソイツが幻覚見てんのとそれとは関係ねー」

エオルは顔をしかめた。

エオル「ハア!？」

クリスは欠伸した。

クリス「ソイツさっき毒キノコ食ってたぞ」

エオル「フィードオオ…!!」

フィード「肉——っ!!」

クリス「ん？」

フィードはよしのからクリスを奪い取ると、クリスの尻尾にガブリ

と噛み付いた。

クリス「ギャー!!」

よしの「ややややめてくださいましっ！フィード様っ！」

エオルはため息をついた。

エオル「もー！まだ次の街まで距離があるってのに…よしのさん！せんゆ！」

よしの「あわわわ…せ、せんゆっ！」

よしのの足元から風が渦巻き、

胸の高さに数個の手のひらサイズの宝玉が、

よしのを取り囲むようにユラリと現れた。

そしてそれは横へ回転し、黄緑色の「癒」とかかれた宝玉がよしのの正面に来た。

宝玉は黄緑色の光を放った。

光の中から現れたのは黄緑色に輝く狛犬。

狛犬はフィードに向けてキャンキャンと吠えた。

フィード「うっ」

フィードはクリスを離し、草むらへ駆け出した。

エオル「なに!？」

フィード「下痢ったあああゝゝ!!」

エオル（…あほだ）

——数分後——

草むらからげっそりとしたフィードが戻ってきた。

よしの「お加減はいかがですか？」

フィード「…体力を使い果たした…動けねえ…」

フィードはその場にへたり込んだ。  
エオルは眉間を押さえた。

「こらっ！！」

遠くから男の怒号が聞こえる。

見ると進行方向から箒を振りかざして駆け寄ってくる老人。

老人「貴様らゝここは野グソ禁止だゝ！！」  
エオル&よしの（ええ——っ！？）

老人はエオルに箒を突き出した。

老人「今すぐ回収せんか！！」

エオルはそつと箒を老人に向けて寄せた。

エオル（えゝと…）

「え、栄養になるからいいんじゃないですか？」

老人「魔物のな！！」

老人はエオルから箒を受け取らなかった。

老人「全く、旅人が生ゴミやらなんやらを捨ててゆくから、

それ目当てで魔物が寄ってきて、地元民が通りづらくなつて  
るんじゃ！」

エオル「うわ…ご、ごめんなさい…」

フィード「グダグダうつせえじいさんだな」

エオルは血の気が引いた。

エオル「フィードオオ！！」

フィード「別にここいらは人間様だけのモンじゃねーだろーが」

エオル&老人「屁理屈だ——っ！！」

フィードは耳をほじりながら欠伸した。

フィード「別に腹空かしてたり、ちょっかいだしたりしなけりや何  
もしてこねーだろ、

それともなんだ、

（それとは関係なく襲ってくる）クリミナルモンスター  
でもいるってのか？だったら退治してやんよ」

老人はわなわなと体を震わせた。

老人「なんじゃこの不届き者は！！」

エオル「すいません！こいつもとどこういうやつで、悪気は、  
フィード「しょうがねえな」

フィードは草むらに手をかざし、ブツブツと呪文を唱えだした。

フィード「<sup>グラン・デ</sup>小爆炎！！」

ドガアン…！！

フィードが手をかざした先の草むらは土を巻き上げ吹き飛んだ。

老人「ぎゃー！！草むらがああ！！」

フィードはカラカラと笑った。

フィード「野焼きだ野焼き！！」

ゴスッ！！

エオルの拳がフィードの脳天にめり込んだ。

老人「何てことをするんじや〜!!」

エオル「すみませんすみませんすみません!」

フィード「おいジジイ」

フィードは腕を組んだ。

フィード「これ以上俺様に野グソされなくなったら、こっから一番近い便所に案内しろ!」

エオル（この人なんでこんな偉そうなの!?!）

老人「野グソで脅すとはなんと凶悪な!?!」

よしの「おじいさん、ごめんなさい。」

”お手洗いを貸してください”と申し上げただけなのです。」

老人&エオル「え?ああ〜!」

フィード「なぜよしのの言葉は納得する!?!」

老人はエオルから箒を取り上げた。

老人「近くにレストランがある、案内してやるわい」

エオル「本当ですか?!?!」

よしの「感謝します。」

フィード「よし、なんか偉そうなのは気に喰わんが、さっさと案内しろ」

再びエオルのゲンコツがフィードの脳天に降ってきたのは言うまでもない。

しばらく進むと道が二手に分かれ片方には看板が立てられていた。

エオル「MILD CAT HOUSE」?聞いたことある!リピーター続出の超人気老舗!ここだったんだ!」

老人は扉を開けた。

「いらっしゃいませ!」

奥から爽やかな声。

真つ白なコックの服を纏った短髪の若い男。

コック「おーじーさん、お客さん連れてきてくれたの？」

老人「客というか…まあ、招かねざる客じゃな」

フィード「便所どこだ？」

コックは一瞬キョトンとし、それからクスリと笑うとフィードを案内した。

エオル「…せっかくだし、ここでお昼とろっか」

よしのは微笑んだ。

エオル「おじいさん」

店から出ようとしていた老人は足を止めた。

エオル「お詫びとお礼にご馳走させてください。」

老人は首を横に振った。

老人「ワシはこのメシは食わん」

エオル「？」

老人は嬉しそうに笑った。

老人「実はヤツの最初の客が儂でな、その時のメシが不味いのなんの」

エオル「人気店なのに！そんな時もあつたんですね！」

老人は頷いた。

老人「その時にあの若造コックに言つてやつたんじゃ」

” 人に出せるくらい美味しいメシ作れるようになったらまた食つてやる ”

エオル（ハハハ…きつついなあ）

老人は背中越しに手をひらひらと振った。

老人「人は集まっているがの、儂に言わせりやまだまだじゃわい」

老人は店を出た。

よしのは小首を傾げた。

よしの「召し上がっていないのにどうして」まだまだ」だとわかるのでしょうか？」

エオルはクスリと笑って閉じたドアを見つめた。

エオル「さあねえ」

順番が来るのを待ち、ようやく席に着くことができた。

しかし、フィードが戻ってこない。

エオル「そんなにヤバイ毒キノコだったの？アイツどんなの食った？」

よしのは膝の上で気持ちよさそうに丸まるクリスを見た。

クリス「藍色で黄色いボーダーの、幻覚見えるやつ」

エオル「…」ジョイフルマツシユルム」！？」

クリス「人間はそう言うのか」

エオルは頭を抱えた。

エオル「授業で散々やった、」絶対食べちゃダメな野草」の一つだよ…も〜！」

よしの「よ…様子を見て参ります！」

エオル「いいよ、よしのさんのおかげで下痢で済んだし、自業自得！放っておいて、俺たちはおいしいご飯でも食べてよう！」

よしの（大丈夫でしょうか…）

店内は非常に賑わっていた。

老若男女人種問わず、色々な人々が席を埋めていた。

エオルをクスリと笑った。

エオル「料理でここまで色々な人々が集まる空間にできるなんて、スゴいなあ。」

ウェイターが慌ててやって来た。

ウェイター「遅くなってすみません！」

エオル「いえいえ、スゴい盛況っぷりじゃあないですか！」

ウェイターはニカリと笑った。

ウェイター「うちはリピーター率99%ですから！」

エオルの笑顔が引きつった。

エオル（はい？）

「…えと、何が皆さんをそこまで引きつけるんでしょうね？」

ウェイターはニカリと笑ったまま答えた。

ウェイター「食べたらわかりますよ！」

料理を注文し、ウェイターが去った後、エオルはポツリと呟いた。

エオル「…変な意味じゃなきゃいいけど」

よしの「？」

エオルには最早、周囲の歓談が異様なものにしか感じられなかった。

ザー…

フィード（フウ！快調快調！）

トイレから出て、ハタと立ち止まった。

左右を見る。

フィード（どっちから来たっけか？）

鼻を掠める香ばしい香り。

フィード「食いものの匂い！！」

匂いを辿って廊下を進むと、目の前に広がったのはコック達の戦場であった。

フィードのすぐそばのテーブルには出来上がった様々な料理。

フィードの目が光った。

料理にそろっと手を伸ばす。

「いけないいけない！」

フィードは手を引つ込めた。

「大事な仕上げを忘れていた。」

先ほどフィードをトイレに案内したコックだった。

そのコックはソルトケースを、それぞれの料理に一振りずつ振っていった。

ソルトケースからは白い粉がパラパラと出ていた。

フィード（…？さとう？）

「お客様」

フィードは背後から肩を叩かれた。

フィード「あゝん？」

いくつかの料理を腕に乗せたウェイター。

「お席はあちらになります。ご案内いたしますよ。」

エオル「あ、戻ってきた。」

よしの「フィード様！！お加減はいかがですか！？」

フィードはカラカラと笑った。

フィード「快調！」

フィードがドカリと席につくと、ウェイターはエオルとよしのに料理を差し出した。

エオル「ん？」

よしの「??」

フィード「…！」

差し出された料理は完全に冷めきっていた。

ウェイターはフィードに笑顔を向けた。

ウェイター「当店はリピーター率99%のレストランでございます。

お客様も是非注文いかがですか？」

フィードはエオルとよしのの目の前に置かれた料理を指差した。

フィード「冷めてんじゃねーか。」

ウェイターは笑顔のままだった。

ウェイター「大丈夫ですよ、一口召し上がって頂ければ。」

エオル「？」

よしの「？」

フィード「…」

ザワザワ…ガヤガヤ

周囲の歓談は変わらず続く。

フィード（最近が最近だから神経質になりすぎかもしれないなあ）

「仕上げに料理の種類に関係なく振りかけてた白い粉はなんだ？」

エオル「粉？」

ウェイター「当店の秘伝の調味料ですよ。配合は企業秘密です。」

フィード「リピーター率99%ってなんだ？有り得ねえだろ、そんなん。」

ウェイター「召し上がっていただければわかりますから。」

チリンチリン…

入り口の鐘が鳴った。

先ほどの老人が入ってきた。

老人「いかにいかに、箸を忘れた。…ん？」

フィード「こんな得体の知れねえモン食えるか!!」

フィードはウェイターにつかみかかった。

「得体の知れない物？」

「なんだと」

「あいつ…ここの料理を貶しやがった」

客たちが一斉に立ち上がった。

フィード「はあん」

エオル「99%ってそういうこと」

「はいはい！」

手をパンパンと叩きながら、先ほどの青年コックが奥から現れた。  
ウェイター「店長…」

店長と呼ばれたそのコックはフィードの前に歩み寄ると、両手を腰に当ててニコリと笑った。

コック「クレームなら承りますよ、どうなさったんです？」

フィードはテーブルの料理を指差した。

フィード「冷めてるし、変な粉がかかってる」

店長は困ったように首を傾げた。

店長「そこがウチのウリなんですよ」

フィードは周囲を見渡した。

フィード「随分凶暴な客共だな」

店長「皆さんここの料理を好きでいてくださる」

フィード「ケチつけるヤツはあやって排他か？」

そりゃありピーター率99%にもなるわな。」

店長「ええと…料理に対する”ご指摘”でよろしいんですね」

フィード「そうだな…どちらかと言えば、」

フィードはニヤリと笑った。

フィード「”秘伝の調味料”に対する”ご指摘”だ。」

店長の笑みが僅かに引きつった。

店長「…どちらでそんな話を」

フィード「たまたま見えちゃったんだよ。」

店長はニコリと笑った。

店長「他のお客様のご迷惑になりますし、奥へご案内いたします。」

フィードたちが店の奥へ連れて行かれると、客は皆、何事もなかったかのように食事を続けた。

老人「…!？」

店長「さて、」

店の奥の休憩室。

そこは簡素なテーブルと数脚の椅子があるだけのこじんまりとした部屋だった。

店長はテーブルの上に件のソルトケースを置いた。

店長「こちらがご指摘いただいた”秘伝の調味料”ですが…」

フィードはソルトケースを手にとった。

店長「何か不審な点でも？」

フィードはよしの腕の中に目をやった。

フィード「クリス、お前ちよつとこれ食ってみろ」

クリスはぷいとそっぽを向いた。

フィードは頭をポリポリと掻いた。

店長はクスツと笑った。

店長「あーあ、そっぽ向かれちゃいましたね」

フィードは店長に向けてソルトケースを差し出した。

フィード「お前、ちよつとこれ食ってみろ」

店長「エ…」

ソルトケースをチラリと見る。

店長「…僕はもう飽きるくらい味を知っていますので…」

フィード「それは、こいつを振りかける前の料理の話か？」

店長「いえ」

フィード「じゃあ別に今ここでこいつを食っても問題ねえじゃないか」

店長は笑った。

店長「僕が今ここでそれを食べて、何かわかるんですか？

味に問題あるようでしたらお客様の舌で確かめ」

ガン！

フィードはソルトケースを勢いよくテーブルに叩きつけた。

フィード「俺様は超~~~~~潔癖症でなあ」

エオル（さっきまで野グソだのなんだの言ってなかった？！）

フィードはニヤニヤしながら顎を上げ、店長を見下ろした。

フィード「毒味させてからじゃなきゃメシなんぞ食べねえんだよ！  
だがしかし、」

クルリと踵を返し、エオルとよしのの肩に手をかけ、フィードは続けた。

フィード「俺様の大事な毒見係にこんな明らかに得体の知らねえモン  
食わせられっか？」

エオル（大事じゃないから毒見係なんてあるんでしょー！！）

店長は何も言わず、ただ唇を噛んだ。

ガチャリ…

「どういうことじゃ？」

ドアが開き先ほどの老人がゆらりと現れた。

店長「な…なんだよじいさん、盗み聞きかよ」

老人「それはなんじゃ」

店長「ただの調味料だよ」

老人「なぜ客の言うとおり口につけん」

店長「いや、だから」

バシィ！

老人は箒で店長の頭を思い切り引つ叩いた。

フィードはヒュウ♪と口笛を鳴らした。

老人「自分が口をつけられんものを、客に出したのか!!」

店長「…いいじゃない、美味しいって、みんな言うんだから」

老人は箒を構えた。

老人「あの調味料はなんじゃ!!!」

店長「魔薬だよ」

老人の手から箒が滑り落ちた。

老人「な…」

老人は店長の胸倉を掴んだ。

老人「なぜじゃ!!なぜ…」

店長「しょうがねえだろ!!」

店長は声を荒げた。

店長「…俺の腕じゃあ、店たたむしかないんだよ…」

老人「何を…」

店長はその場にうずくまった。

店長「俺じゃ、あんたの店の味を作れない…」

フィードたちは老人を見た。

店長「あんたから店貰って、客はドンドン離れて行っちゃったんだよ…誰も俺の平凡な料理食いにこんなとこまで…」

——このヘンピな場所に店を構えて、だが客の途絶えない、この目の前の男の料理にあこがれた。

——自分もこの男のように腕だけで人を集められるコックになりたいと。

老人「当たり前じゃ！」

店長「…」

老人「離れて行った客は、俺の客じゃ！」

……お前はお前の味で客を作ればいい…俺はそう思っておったんじゃ…」

店長「…」

フィード「??話が見え」

エオルはフィードの口を塞いだ。

エオル「水差さないの！」

老人「魔薬なぞ…一体どうやって手に入れたんじゃ…」

店長は目に涙をため、答えた。

店長「旅人の客からもらった…」

——これを使えばみんな俺の料理を好きになる。

——…好きなのは俺の料理じゃなくこの魔薬…。

店長「わかってたんだ、自分の料理で引き止められないと意味がな

い…

…でも…また客が離れていくのが怖かった…」

老人「…大バカ者が…!!」

フィード「バカなのはじーさんだろ」

エオル「フィ、フィード!？」

老人「なに…」

フィードはふんぞり返った。

フィード「要は超有名店の看板を背負いきれねえヘタレを後がまに選んぢまつたんだろ？」

老人「こやつはヘタレではない!」

店長「…」

フィード「離れて行った客がじーさんの客なら、この店もじーさんの店だ、

そんなに大事な看板なら墓に一緒に持っていけ」

エオル「フィード…大事なものだからこそ、残しておきたいんだと思うよ」

フィードは店長を指差した。

フィード「だが、残しておける器がなかった。」

店長「…もう終わりだ…客に…なんと言えは…」

フィード「一個方法があるぞ」

エオル「…？」

店長「？」

老人「？」

フィード「ただし…」

店長「…いいのか…じいさん…」

老人「お前の店じゃ、お前が決めていいんじゃない」

店長はすうと深呼吸した。

フィード「おらおらあー！！」

ホールに響くだみ声。

客たちは声のほうに目を向けた。

フィード「俺様たちは！」

エオル「だ…W・B・アライランス！！」

フィード「この店に爆弾をしかけた！」

ホールがざわめいた。

よしのは息を吸った。

よしの「死にたくなけりや、とつと逃げ」…てください!」

「だ…W・B・アライランス!？」

「犯罪魔導師の!！」

フィード「ふふふ、俺様たちは魔導師だから、爆発でも死なねーが  
エオル（死ぬよ普通に!）」

フィード「…ハツタリじゃねえぞ？」

客たちは堰を切ったように我先にと出口に詰めかけた。

フィード「ハツハツハ!」良い眺めだなあ!！」

エオルは小声で呟いた。

エオル「ハツタリじゃん」

フィードはニヤリと笑った。

フィード「爆弾を仕掛けたってのはな」

――店の外

店長「みなさん、大丈夫ですか!？」

「店長さん!」W・B・アライランスが!！」

店の中からフィードたちが姿を現した。

フィード「おやおや…皆さんお揃いのようで?」

客の一人が指差した。

「何考えてんだ!！」

フィード「こう考えてんだ!！」

フィードはクルリと背を向け、手をかざした。

かざした先は店――  
「ニアフ・グレ・ネルド  
フィード」「低爆炎破！！」

ドガアアアン！！

店は跡形もなく、無数の火の粉が舞った。  
フィード「この俺様にマズいメシ食わせた罰だ！！」  
そういうとW・B・アライランスは立ち去った。

「な……なんとひどい……」

「て……店長……」

店長は客たちに向かい、地面に両手をついた。  
「！？」

――『こんな過去の栄光で腐った店、ぶっ壊してやる。』

――『クスリ漬けの客共は来る場所がなくなる、そうすりゃ自分がおかしいことにも気づくだろうよ』

――『そうしてお前はお前の店を好きなトコに出せばいい』

――『ただし、』

――『お前は、じいさんを裏切った罪と、客を裏切った罪をキチンと償えよ』

店長の告白に、客たちの顔色が変わる。  
客たちに囲まれ、だが額を地面につけ続ける店長を、老人はただただ見つめていた。  
その目には、大粒の涙がたまっていた。

「ようやく見つけたぜ」

ハンティング帽を目深にかぶり、無精ひげで顔半分を黒と白の斑にした、小太りの中年男。

ハンティング帽の男が声をかけた先には、  
ボサボサとしたフェルトのような髪にジャモジャとした髭面、  
力士のような大男——魔薬” 免罪符” 事件主犯 ギルティン

ギルティンは首を傾げた。  
ギルティン「はて？俺はお前とどこかで会ったか？」  
ハンティング帽の男は笑った。

ハンチング「覚えがないならまあいいや、なあ、アンタを手伝わせ  
てくれよ」

ギルティンはガハハと笑った。

ギルティン「唐突だな、なんだお前。」

ハンチング帽子の男はニヤリと笑った。

ハンチング「恨みがあるんだ、魔導師に。」

## 16・stray from the path（後書き）

セイラム、半獣人モードなど専門単語がでてきますが、簡単に説明すれば

セイラム…魔導師専門の裁判所。

刑罰のかわりに呪いが執行される、おそろしいところ。

半獣人モード…獣人は「人」「半獣」「獣」の3種類に姿を変えられる。

2話のラプリーでいうところの

少女の姿が「人」モード

猫の姿が「獣」モード

半獣人モードはその中間。服を着て二足歩行な獣

みたいな。

…とまあ、本家サイトでないとわからない単語はこのくらいかなあ？

さて、ラプリーの選んだ道とは？

ヤクトミはフィードに会えるのか？

ついに姿を現したハンチングの男。

ハンチングの男が赴いたのは魔薬事件主犯ギルティン。

フィードたちの通る道はことごとく魔薬に汚染されています。

その早さたるや人間のものではない??

ギルティンを追うトランプ。

W・B・アライランスを追う魔導師協会。

偶然か必然か行く先々で魔薬事件に出くわすW・B・アライランス一行。

ギルティンと同じ魔薬業者である口口はまだ参戦せず。

”悪魔の薬編”の行きつく先は…。

さて、去年に引き続き今年も夏休みをいただきます。

次回更新はだいぶ飛んで10/2に第17話更新予定！  
みなさん、よい夏休みを！

17・take to feeding(前書き)

本編17話。

少女マンガを読んだせいか、なんか展開が乙女(笑)

## 17・take to feeding

パンゲア大陸　ヴァルハラ帝国  
グラブ・ダブ・ドリツブ魔導師協会管轄地区　魔導師協会本部”バ  
ベルの塔”最上階広間

高い天井、  
鏡のように磨きあげられた床、  
開放的な大きい窓。

その窓から見える  
穏やかな秋空、  
小鳥が戯れ、  
涼しいそよ風が遊び、  
柔らかな陽光が注ぐ。

ロッキングチェアに揺られながらパイプを吹かせていたその老人の  
心中は、  
そのような秋の空とは対照的なものであった。

ノックの音が響く。

ギィと大きな扉が開き、マリアの低く落ち着いた声が響いた。  
マリア「お連れしました」

その直後、マリアの背後から豪快な笑い声が響いた。  
「なぐにが”お連れした”じゃ！つい今の今までぜんぜんそんな  
扱いしてなかったヤツが！」

マリアは口を尖らせた。

マリア「んもう！切り替えよ切り替え！大事でしょ！」

「100年早いわ！」

そう言うと、

笑い声の主トランプの総統ゼレ<sup>ジョーカー</sup>ルはロッキングチェアに歩を進めた。

同時にロッキングチェアに揺られていた老人、魔導師協会会長オードも立ち上がった。

2人は互いに握手を交わし、会長は近くに用意された豪華な椅子に総統を促した。

— take to feeding (まかれた餌) —

総統「いやあ、実に久しいの」

会長「最近忙しそうじゃあないか」

総統「まあな。…して、わしを呼び出した理由は？」

会長はパイプをふかせた。

会長「ひとつ相談があつてのう」

会長の穏やかでない瞳に、総統は盛大にため息をついて背もたれに体を預けた。

総統「協会からの”相談”はどれも黒いことばかりじゃ」

会長は笑った。

会長「世の中白ばかりじゃあ無かろうて」

総統「たまには青や緑にしてほしいわい」

扉が再び開き、マリアが紅茶を運んできた。

紅茶を2人の間のテーブルに置くと、マリアはそのまま広間を出た。

会長「…カグヤとトウジロウは元気でやっておるか」

総統はズズと音を立てて紅茶をすすった。

総統「相変わらずじゃよ、

まあ、シェンの力もあつて個別ではだいぶ落ち着いてきてはおるがのう…

……」

総統は「それで？」という視線を投げかけた。

会長は再びパイプをふかせた。

会長「…察しはついておろう？」

総統もまた再び紅茶をすすった。今度は音を立てなかった。

総統「W・B・アライランスのジパング人の件か。」

会長はパイプの火を灰皿に落とした。

会長「深刻な国際問題じゃ、各国とよく話をせねばならん」

総統「そうすればよいだろう」

会長「…最悪戦争にもなりかねんぞ」

総統「ではなんじゃ、

真実を隠蔽し、丸くおさまるよう報告をするのか？

明るみに出ればそれこそ（魔導師協会）連盟国との信頼問題だ」

会長「明るみに出ないようにするのがトランプの仕事では？」

総統は頬を掻いた。

総統「耳が痛いのが」

しばしの沈黙。

総統「スペリアル・マスターたちの意見はまとまっておるのか」

会長は紅茶を啜った。

会長「順番が逆じゃのう、

まずトランプと”意識を合わせ”、

それから決定項をスペリアル・マスターたちに伝える」

総統は盛大にため息をついてヤレヤレというジェスチャーをとった。

総統「そんな上意下達は古いと思わんか？」

会長「若い者に責任を押し付けると？そんな無責任な年寄りにはなりたくないのう」

会長は片方の眉を上げ、ジロリと総統を見た。

総統「若い若いと、甘やかしては育つもんも育たん、

”若い者”の前に一人前の”魔導師”じゃ、

責任を共有せずどうする。」

会長「…トランプはここ最近”その方針”を取り入れて”このザマではないか。

結果が出なければ無意味だ」

総統は笑いながら紅茶を口に含んだ。

総統「わしら年寄りがずっと先導できればよいが、

残念だがわしらにも時間の限りがあるう？

わしらがすべきは若い者に”伝える”こと、最近そう思うておる」

会長「…変わったのう」

総統「年を取れば誰しも変わるわい」

再びしばしの沈黙。

その間、会長は窓の外を舞う鳥達を見つめていた。

会長「マリア」

自分と総統の2人きりのその広間で、会長はマリアを呼んだ。  
するとガチャリと扉が少し開き、気まずい顔をしたマリアが顔を覗かせた。

総統はニヤリと笑った。

総統「立ち聞きとは行儀の悪い」

マリアはふんぞり返った。

マリア「あら、私だけではなくってよ」

扉がさらに開いた。そこにはユディウスとガルフィン、そしてヤクトミ。

マリアはプププと含み笑いでガルフィンを見た。  
マリア「盗み聞きだつてよ」

ガルフィンはヤレヤレとため息をついた。  
ガルフィン「俺はヤクトミと報告に来ただけだ」

その二人の間を神妙な面もちのユディウスが通り、  
ツカツカと会長の元へ歩みよった。

ユディウス「会長、立ち聞きは大変失礼しました。

ですが私は総統に賛成です。

どうかお一人ですべて抱え込まないでください」

総統は会長を見ながら肩をすくめた。

会長はゆっくりと紅茶を啜った。

会長「…ちょうどお前たちのことを考えていたところじゃ」  
ユディウス「我々を？」

マリア、ガルフィン、ヤクトミも会長の元に歩を進めた。  
会長「年甲斐もなく、このかつてない事態に熱くなりすぎておった  
ようじゃな」

ニカツと笑うそのいたずらっぽい笑みに、一同は自然と安堵の笑みがこぼれた。

## ムー大陸 ナイム国 とある街

夜も更け街全体が寝静まった中を、音もなく蠢く黒い影。  
街でそこそこの地位にある屋敷の高い塀を軽々とよじ登り、スルリ  
と屋敷の中へ消えた。

しばらくして、再び塀の上に現れたその黒い影は  
塀から降りて着地する際、僅かにチャリンと金属がぶつかる音を立  
てた。

「見つけた」

ぐるりと声のほうへ振り返った影は軽やかなステップで後ろへ二歩、  
三歩と下がると宵風のように駆け出した。

音もなく街を駆け抜けるその影は、静かなままの背後を振り返った。

「待ってってば！」

すぐ斜め後ろには先ほどの声の主。

暗くてハッキリと姿は見えないが、甲高い少女の声だった。

影はカクンと方向を変え、路地に入った。

少女も同じく影を追う。

いくつか角を曲がったところで少女はハタと足を止めた。

今の今まで前を走っていた影の姿がない。

少女はキョロキョロと辺りを見回した。

すると突然背後から腕を捻り上げられ、口を押さえられた。

「賞金稼ぎか？」

影は少女の耳元でボソボソと囁くように問いかけた。

少女は慌てて訂正するように首を激しく横に振った。

「騒いだら殺す」

そう言つと、影はゆっくりと少女の口から手を離れた。

少女の第一声。

「腕も離してよ」

影は少女を無視して続けた。

「目的は」

目的はと聞かれ、少女の顔色が変わった。

「…あなたは怪盗”モスキート”ね？」

影は黙ったまま答えない。

「お願いがあるの！」

「…お願い？」

てつきり少女が自分を追ってきた賞金稼ぎだと思い込んでいた影は、少女の思わぬ発言に一瞬手が緩んだ。

その一瞬を少女は逃さなかった。

スルリと影から抜け出すと、ペタンと両手と額を地面につけた。

「私を弟子にして！！」

「はあ！？」

影は素つ頓狂な声を上げた。

——ボロボロの安宿の一室

「先輩、何ターゲット以外のものまで取ってきてんスカ」

ふわふわのセミロングをポニーテールに結んだタンクトップとホットパンツの若い女は、

簡易なベッドの上にちょこんと座る少女に目をやりながら、部屋のドアの前で黒装束から着替えている男に話しかけた。

男はこたえた。

「盗ったモンじゃねえよ、俺あいらねえ」  
女は頬を膨らませた。

「じゃあなんで連れてきたんですかあ」

「それも違えよ、勝手についてきたただけだ」

女は今度は少女を見た。

女「なんで勝手についてきたんスカあ！」

少女「あたしを弟子にしてほしいの」

少女は間髪入れず答えた。

女「は？弟子イ！？なんでっスカ！？」

少女「お金持ちの持て余してるお金をお金に困っている人にあげたいの」

女「はあ~~~~！？アナタ何様っスカあ！」

少女はムツとした。

少女「別に何様でもないわっ！

お金持ちが嫌いなだけ、お金の無さで人生決まるのが嫌なだけ」

男「誰もお前が盗みを働いてゲットした黒い金なんざ、貰ったところで喜ばねえよ」

そついうと男はタオルを首にかけシャワールームに向かった。

少女は立ち上がった。

少女「本当にお金に困ってる人は！」

シャワールームのドアに手をかけた男はその手を止め、少女を見た。

少女「…何色のお金でも関係ない……！」

男「お前、名前は？」

少女「ラプリー」

男はニツと笑いながらシャワールームへ入っていった。

少女「…」

女はしょぼくれた声で口を開いた。

女「先輩はヘズ、あたしはエテルって言っス…」

ラプリー「よろしくね！エテル！…あと、ヘズ！」

エテル「弟子なんだから師匠って呼ぶっス！」

あと後輩なんだからエテルのことは先輩って呼ぶっス！」

数日後――

ラプリー「先輩」

ヘズ「あ？」

ラプリー「あ、いや、エテル先輩…」

エテル「先輩！ラプリーにとっては師匠なんだからラプリーが先輩と呼ぶときは”先輩”じゃなくて”師匠”…」

ヘズは手にしていたタオルをボスリとエテルに投げつけた。

ヘズ「紛らわしいんだよボケナス！」

エテル「なっ”ナス”まで言うことないじゃないスかあ…」

ヘズはエテルを見ながら顎でラプリーを指した。

エテル「あっ！そうだ、何か用っスか！後輩！」

ラプリー「ここ数日ヘズ…じゃなくて”師匠”は金持ちの屋敷の下見とか行ってますけど先輩は何係なんですか？」

エテル「世話係っス」

ラプリイはキョトンとした。

エテルは体をクネクネと、嬉しそうに語った。  
エテル「ご飯作ったりい、お洗濯したりい、

後輩っていうかもう妻…きゃく言っちゃったっすく！」

ヘズ「主に緊急時の逃走経路確保とか、サポート係だ」

エテルはヘズをジトリと見た。

ヘズ「今日は活躍してもらうぞ…多分」

エテル「お？」

ラプリイ「！」

ヘズは簡素なテーブルにメモ用紙を広げた。

ヘズはラプリイを見た。

ラプリイは反射的にドキリとした。

ヘズ「ここ数日、俺と一緒に何軒か下見したな。

俺は次にどれを狙うと思う？」

ラプリイは数日間の記憶を辿った。

ラプリイ「三件目くらいが一番大きなところ」

ヘズ「それはお前が行きたいところだが」

ラプリイはペシリと脳天からタオルで叩かれた。

ラプリイ（痛くないし…）

「じゃあ、7件目に見た一番ショボいところ」

再びラプリイの脳天にタオルが降ってきた。

ヘズ「それはお前がチョロいと思ってるってこと」

ラプリー「???」

ヘズはニツと笑うとペン先をラプリーに向けた。

ヘズ「お前が思いつてこたあ他のヤツらもおんなじこと思ってんだよ」

ラプリー「…なるほど」

ヘズは頬杖をつき窓をみた。

ヘズ「マイノリティ少数派にはスキがある、

”自分は注目されてないから大丈夫だ”ってな」

ヘズはカツンとペンでテーブルを突いた。

ヘズ「そこを突く」

ラプリーは口を尖らせた。

ラプリー「案外地味っスね」

エテルがラプリーの両頬をムニと摘み、引っ張った。

ラプリー「いたたた！」

ヘズ「…気づかない間に、

盗られたことにすら気づかないような持て余しモンをちょうだいする、

相手は気づかない、俺らは金が入る、ハッピーエンドだよ」

ラプリーは不服そうに眉根を寄せた。

ラプリー「…金持ちもハッピーなままなの…?」

ヘズは笑った。

ヘズ「…まア、お前は俺から技盗んだら好きなポリシーの盗人になっただいいさ、

さあ、…作戦説明するぞ」

その夜――

街でも中堅の富豪の館。

そこから音もなく出てくる2つの影。

館から距離を取った路地裏。

ヘズ「よし、口開いていいぞ。

獣人だけあってなかなかスジがいいな」

ラプリー「…」

ラプリーはゴソリと懷にしまわれた豪華な宝石の散りばめられたネツクレスを撫でた。

ドキドキと体が飛び跳ねるような鼓動。

ラプリー「…ヘズは、初めて”仕事”をしたとき、どんな気持ちだった？」

ヘズは記憶を絞り出すように顔をしかめ、顎に手を当てた。

ヘズ「やつぱちよつと罪悪感はあるかなア、…」でも仕方ない」  
ラプリー「そっか…」

ヘズ「お前は？」

ラプリーはネックレスに当てていた手のひらに目を落とした。  
ラプリー「…」してやった”、それだけ。…変かな…」

ヘズは鼻を掻いた。

ヘズ「人それぞれだろ」

ラプリーは無意識に笑みがこぼれた。

表通りが騒がしい。

ラプリーはドキリとした。

ヘズ「…先方サン、”お気づき”になったようで」

ラプリーは慌てふためいた。

ヘズ「慌てんな。落ち着けなくなったら負けだ。」

ラプリー「お、落ち着くつたって…」

どうしよう、どうしよう、捕まりたくない。

ラプリーは短剣に手が伸びた。

その手をヘズが掴んだ。

ヘズ「相手を傷つけても負けだ」

ラプリー「だって！」

ヘズ「テメエの心に一生モンの傷を負うことになんぞ」

相手じゃなくて？

ラプリーにはヘズの言葉の意味が分からなかった。

ヘズの誘導で追っ手に感づかれることなく街の出入り口までたどり着いた。

ラプリー「エテルはどうするの…!？」

ヘズはニヤリと笑って顎で出入り口近くに止まる荷馬車を指した。

荷馬車の操縦士はマントのフードを目深に被った陰気な老人。

ラプリー（この人も仲間？）

積み荷に紛れようと老人の横を通り過ぎる時、その老人と目があつた。

「エテル」じゃなくて”先輩”だって何回言ったらわかるっすか」

ラプリーはキョトンとした。

老人の口から出てきた声は紛れもなく若い女性——エテルの声だった。

ヘズは早くしろとラプリーの首根っこをひつつかんで荷台へ乗り込んだ。

馬車が動き出した。

ヘズは笑った。

ヘズ「エテルは変装の達人なんだ」

ラプリー「ま、魔法!？」

ヘズは笑いをこらえた。

ヘズ「化粧だ化粧」

ラプリー（お化粧…したことないからわかんないけど、ああいうこともできるんだ…）

ラプリーにはいまいち淒さがわからなかった。

馬車が止まった。

外で声がする。

ヘズは人差し指を立て、ラプリーを引き寄せた。

ラプリー（わ、わ、わ！）

——こんな時間に出発か？今し方泥棒が現れてな…

——泥棒はよく知らないですが、積み荷は朝までに隣町まで運ばないといけないんです…——

服越しに伝わるヘズの体温。

暖かい、というより熱い、それでいて、自分と同じくらいドキドキしている。

ラプリーはヘズの顔を見ることがなかった。

馬車は再び動きだした。

ヘズはため息をついてラプリーから手を離れた。

ヘズ「盗む」だけで満足したらそこから油断につながる。逃げ切るまでが「仕事」な」

ラプリーはそっぽを向きながら何度も頷いた。

やがて日が昇り、小鳥が囀り始めた。

エテル「ラプリーは？」

ヘズ「寝ちまいやがったよ、このまま」母ちゃん」ここに戻る」

エテル「了々解っス！」

荷馬車の揺れは心地よく、ラプリーは荷馬車が止まるまで目を覚ま  
さなかった。

ラプリーが次に目を覚ますと目の前にはエテルの顔。

ラプリーはそこで初めて自分が寝ていたことに気が付いた。

エテル「やっと起きたっスか！ついたっスよ」

ラプリー「ついた？」

エテルは両腕を広げた。

エテル「私と先輩の愛の巣？」

” 孤児院デザートハウス ”

そう書かれた看板を見、辺りを見回し、

ラプリーはここが山奥か森の奥であることを理解した。

ラプリー「…愛の巣？」

看板の奥には天井の高い洞穴。

中には明かりが灯っているのが見える。

ラプリー「ああ、あの中がそうなのね。」

すると、洞穴の奥からヘズが現れた。

ヘズ「ラプリー、起きたか」

ヘズにしては珍しく嬉しそうな笑顔。

ラプリーは心臓が飛び跳ねるかと思った。

ラプリー「な、何何何！？」

ヘズ「来な、母ちゃんがお前に会いたいわってさ！」

ラプリー（おおお母さん！？ヘズの！？）

洞穴の奥の広間。

大きなソファに溢れんばかりの贅肉、

ギラギラギトギトのメイク、

豪華なアクセサリーに

決して趣味がよいと言えないハデな服、

どっしり構えるその女の第一印象は”トド”だった。

母ちゃん「あんたがラプリーかい」

ラプリーはおずおずと頷いた。

”母ちゃん”はジロジロとラプリーの頭から爪先まで舐めるように見た。

ラプリー（なに！？）

”母ちゃん”はニコリと笑った。

母ちゃん「ようこそ”デザートハウス”へ！ゆっくりしておいで」

ラプリー「はあ…」

母ちゃん「ヘズ」

ヘズは盗品の入った麻袋を”母ちゃん”に渡した。

”母ちゃん”は歓声をあげた。

ヘズは鼻を掻いた。

ヘズ「これで少しは薬代の足しになればいいけど」

”母ちゃん”は気色の悪い満面の笑みでヘズを抱きしめた。

母ちゃん「ありがとう、ヘズ」

ラプリー（薬代の足し？）

今度はラプリーが”母ちゃん”の頭から爪先までジロジロと見た。

ラプリー（あんなに豪華な感じなのに…それでもなかなか買えないほど高価な薬なの？）

母ちゃん「それはそうと、お前また懸賞金上がったねえ」

ヘズ「そうなんだよ、盗みのほとんどはバレてねえハズなんだけど……おかしいんだよな」

”母ちゃん”はヘズの頭を撫でた。

母ちゃん「……気をつけるんだよ」

ヘズ「心配すんなって、母ちゃんの病気が治るまでは捕まんねえよ」

エテル「私と先輩は孤児だったっす」

洞穴の外、木々の間から差す、心地よい日の光。  
その中をエテルとラプリーは薪を集めていた。

ラプリー「孤児……」

エテル「母ちゃんは拾ってここまで育ててくれた、恩人っす。

なかなかいいっすよ、このご時世、なんのメリットもないのに」

ラプリー「……」

薪を拾って、重なる音が大きく聞こえた。

その夜、ラプリーはなかなか寝付けず、

部屋から出たのはよいが、入り組んだ洞穴の中で道に迷ってしまった。

ヒタヒタと洞穴を進むと、こんな時間だというのにドアから光が漏れている部屋があった。

ドアは完全に閉まっていたが、下から中の様子が窺えそうだった。

ラプリーは単なる好奇心から中の様子を覗いた。

ドアの向こう見えたのは

豪華な椅子に腰掛け、豪華なテーブルの上につまれた札束をニヤニヤと数える”母ちゃん”。

ラプリー（お金…あるじゃん）

その時、ツンと後頭部をつつかれ、ラプリーは顔を上げた。

目の前にはヘズ。

思わず声を上げかけたラプリーの口をつまみ、ヘズは人差し指を立てた。

暗い森の濃い緑の香り。

洞穴の入り口まで連れてこられて、ラプリーは開口一番にこう言った。

ラプリー「知ってたの？」

ヘズ「まあな」

ラプリー「…わけわかんない」

ヘズは地べたに腰掛けた。

ヘズ「お前、家族は？」

ラプリー「…いるけど…」

ラプリーもヘズの隣に腰掛けた。

ヘズ「家族が、悲しんだり、悔しんだり、苦しんだりしたら嫌だろ

？」

ラプリー「…まあ、…でもそれとこれとは」

ヘズ「変わんねえさ」

ヘズは指を組んだ。

ヘズ「あの人にはいつまでも喜んでいてほしい、そういうもんだろ」  
ラプリーは「何か違う」とヘズの言葉が引っかったが、その「何か」が何なのかがわからなかった。

ラプリー「…怪盗”モスキート”はもつと自由な人だと思ってたわ」  
ヘズは天井を見上げた。

ヘズ「”自由”はここに拾われる前に十二分に味わった。」

ラプリーは「意味が分からない」とヘズを見た。

ヘズはデザートハウスに来る前のことを思い出し、鼻を掻いた。  
自分を守るものなど何もない、

話す相手もない、

周りはずべて子どもである弱い自分から”搾取”する者ばかり。

ヘズ「誰かがいる”安心感”、”安定感”、俺にとっては何にも代えらんねえ」

ラプリーは下を向いた。

ラプリー「やっぱよくわかんない」

ヘズ「ま、要は俺もエテルも満足してるっつーことだ」

暫しの沈黙。

ヘズ「…そろそろ寝ねえと明日起きねえぞ。明日はまた”仕事”だ」

ラプリー「…私、ここ出るね」

ラプリーは思いがけず声が震え、自分でも驚いた。

ヘズは「そうか」とラプリーの頭をポンポンと撫でた。  
ヘズ「途中まで送ってやるから、ちゃんと朝起きろよ」

ラプリーは自分がなぜあのようなことを言ったのか、自分自身わからなかった。

何かと構ってくれるエテルといると楽しい。

”仕事”ももっとちゃんと勉強したい。

何より、ヘズと離れたくない。

家族と別れたときの気持ちとは違っていた。

だが、このままここにいてはいけない。なぜだかそう思った。

ラプリー（…そうだよ、フィードさんとエオルさんに会いにいかなくっちゃいけないんだよ、…だからだよ…）

部屋に戻るとエテルがベッドに腰掛けていた。

ラプリー「あ、ごめん、起こしちゃった？」

エテルは俯いたまま黙っている。

ラプリー「エテル…？」

エテル「…見ちゃったっス」

ラプリーはギクリとした、”何に”かはわからなかったが。  
エテル「こんな夜中に」  
ラプリー「えつとね！トイレ行こうとしたら迷っちゃっ」

エテルはボロボロと泣き出した。  
エテル「ヘズ先輩といるところ！」

ラプリー「え……」

エテルはか細い声を上げて泣き出した。  
エテル「エテルから先輩をとらないでほしいっすう」

ラプリーはエテルの隣に座り、おずおずとぶつきらばうに頭を撫でた。

ラプリー「……大丈夫だよ、エテル」

夜が明け、泣きつかれて熟睡したエテルとは対象的に、結局ラプリーは寝付くことができなかった。

迎えた朝はなぜだか心にぽっかりと穴が空いたようだった。

馬車に揺られ森を抜け、数時間。  
視界が開け、広い道へ出た。

ナイル国国境付近。

ラプリー「ここへんでいい」

エテル「み、道のと真ん中っスよ!？」

ラプリーは微笑んだ。

ラプリー「いいよ」

荷台からだと、ヘズは遠くを指差した。

ヘズ「…ここを行けばポホヨラ街道にぶつかる。そうすりゃどこへとも行けらあ」

ラプリーはヘズを見た。

ヘズ「なんだよ」

ラプリー「…」

そっと、手をのばし、ヘズの手を両手でギュツと握った。

握ったのはいいがヘズの顔をみることはできなかった。

エテル「ちえ、しょうがないからそのくらいは許してやるっス」

ラプリー「…ありがとう、ヘズ」

ヘズ「まあ、”ヘマ”すんなよ」

ラプリーは笑った。

ラプリー「ヘズもね」

エオル「おっ！」

地図を眺めながら、声を上げたエオルに、フィードとよしのは同時に反応した。

エオルはピタリと歩みを止めた。

エオル「多分ここらへんが国境だ。」

よしのは辺りを見回した。

辺りは見通しのよい平原のど真ん中。

よしのはエオルを見上げた。

よしの「どのあたりですか」

エオル「んゝ…」

エオルは前方に目を凝らした。

エオル「あ、多分あの看板のそこだよ」

—— ナイム国・ジャラル国 国境 ——

よしの「何と記してありますの？」

フィード「国境だよ」

よしの「????」

よしのは左右を見回した。

エオル「あ、もしかして”線”を探してる？」

よしのは頷いた。

フィード「あ？線」

エオルは地図を指差した。

地図には確かに国と国の輪郭がはっきりと書かれている。

フィード「ウハハ！まだ信じてんのかよ！線が引かれてるって！」

よしの「ええっ!?!」

エオル「じつじつ実際は看板とか、

グインディア山の時みたいに本当に何にもないところや、

…まあ本当に実際線を引いてるところなんかもあって、それぞれだよ」

フィード「ま、今回はたまたま看板バージョンってだけさ」

よしの「そうでしたか」

よしのは看板の斜め横で身構えた。

エオル「えっ、何?」

よしの「せっかくですので、飛び越えます…!」

フィード「面白えー!おっしゃあ!」

フィードは少し後ろに下がり、勢いよく走り出した。

そしてよしのの手を、エオルの腕を掴んだ。

フィード「せえのお!」

よしのは小さく拍手した。

よしの「わあ!飛び越えてしまいましたあ」

フィードは両拳を空に突き上げ吠えた。

フィード「おっしゃあ!」

エオル「…何このテンション」

——ジャラル国南部、ポホヨラ街道にて

人々が寝静まる真夜中。

豪邸からスルリと抜け出した黒い影。

今回は感づかれることなく”仕事”を終えた。

ヘズ（ラプリーあいつこういう仕事一人で大丈夫かなあ、…なんかガサツっぽいし）

そう思いつつ、ついつい思い出し笑い。

そうして豪邸の外壁を飛び越え着地したときだった。

「見つけた」

ヘズは後ろを振り返った。

暗くてよく見えないが、男のようだった。

ヘズ「…悪いけど、もう弟子は募集してねえんで」

逃げようと、二歩、三歩後ろにステップを踏み、男から十二分に距離をとったことを確認すると、くるりと後ろに体の向きを変えた。

その時だった。

何かが鳩尾に当たる感覚。

そこでヘズの意識は途絶えた。

——デザートハウス

母ちゃん「おうおう、随分仕事が早いねえ！」

そう言う”母ちゃん”の目の前には黒衣の男。

黒衣の男は布にくるまれたいくつかの札束を”母ちゃん”に投げ渡した。

”母ちゃん”は札束を確認すると、そのうちの一つを男に投げ渡した。

男「話が違うようだ？」

母ちゃん「なんだい、怪盗”モスキート”がどこに出るかって情報をやったのは誰だい？」

男「あんただな」

母ちゃん「だろう？あんたの賞金稼ぎとしての名を挙げてやったんだ、その報酬差し引いてソレだよ！」

”母ちゃん”は顎で男の手もとの一つの札束を指した。

男「そうか」

”母ちゃん”はシツシツと追い払うように手を払った。

母ちゃん「わかったんならとつと消えな！」

男「ああ、わかった」

男は持っていた”長ドス”の柄に手をかけ、鞘から抜いた。

母ちゃん「ヒツ！ななな何だい何だい！」

男「…お前も見たことがあるぞ」

”母ちゃん”は男が何を言っているのかわからなかったが、目の前の見たことのない刃物を前に、声が出なかった。

男「連続幼児誘拐犯”コトリ”」

母ちゃん「そんな何年も前の…」

賞金首になるまでは子どもを誘拐して売りさばいていた。

賞金首になってからは賞金稼ぎを恐れ森の奥に身を隠し、孤児を育てては女は売り、男は稼がせ生活していた。

男「お前をやればもつと」名を挙げてもらえる”な…まあ、俺は名には興味はないが」

母ちゃん「じゃっ、だったら、見逃しとくれよっ！こんな小物」

男「”入り用”でな」

男はニタリと笑った。

その目は明らかに”金が欲しいがため”である目ではなかった。母ちゃん「けっ、けだもの！」

男は舌なめずりをした。

ハンターズギルドでここ最近話題になっていることがある。

先日の魔導師協会からの発表。

——魔導師犯罪組織W・B・アライランスがジパング人を人質に取って各所で犯罪を重ねている——

ジパング人を”人質”としたのは宗教対立抑止のための魔導師協会のせめてもの配慮であった。

W・B・アライランスをとらえた際に共犯であるというジパング人から共犯であることを自白させるシナリオを描いていた。

「魔導師による犯罪」

しかも「対立している神使教の象徴であるジパング人を巻き込んでいる」、

そのニュースは全世界に衝撃を与えた。

魔導師協会は各国の代表からの審問を現在継続的である。

とあるハンターズの店長がぼそりと呟いた。

「これで”W・B・アライランス”も一気に”大悪党”の仲間入りだな」

——W・B・アライランスのメンバー

”火葬屋”フィード

”堕ちた天才”エオル

それぞれSーランクの賞金首とされた手配書が各国へ配られた。

当然、そのハンターズギルドでも新しい大物賞金首として目立つと

ころに掲示された。

店長が掲示板を眺めていると、  
ドサリ、と重い荷物が置かれる音。

見るとカウンターに大きな麻袋。

店長は麻袋を置いた本人を見た。

そこにはつい昨日一昨日くらいに怪盗”モスキート”の懸賞金を得た黒衣の男。

店長は顔をしかめた。それには理由があった。

店長「まあ、あなたか」

店長は麻袋の中を確認した。

店長「うっ」

反射的に袋を閉じた。

店長「あんたまたこんなスプラッタに…これじゃ誰かわかんないでしょ」

黒衣の男は無数に手配書が張られた掲示板から、  
かなりの枚数に埋もれていた古ぼけた手配書を剥がすと、店長に差し出した。

店長「連続幼児誘拐犯”コトリ”…」

店長は「仕事だから仕方がない」ともう一度麻袋の中身を確認した。

店長「確かに」

店長は数十枚の紙幣をカウンターに置いた。

黒衣の男はそれを受け取るとツカツカと出口へ向かった。

掲示板の正面にさしかかった時、ふと、目の端に映った真新しい手配書に足を止めた。

”魔導師犯罪組織W・B・アライランス”

”ランクS1”

”捕獲分類 D・O・A（生死問わず）”

黒衣の男はニタリと笑い、舌なめずりした。

黒衣の男が去った後、やりとりを見ていた数人の冒険者が店長の元に集まった。

「だいぶヤバイ雰囲気のヤツだな」

「何者だい」

店長は下っ端の店員に麻袋を渡しながらため息をついた。

店長「……狂犬”」

「え？」

店長「”狂犬”ハイジ、頭のイカれた賞金稼ぎとして有名だ」

そのやり取りを隅で聞いていたベテランの賞金稼ぎは軽蔑を込めて鼻で笑った。

「ヤツが”賞金稼ぎ”？」

”ただの殺人鬼”の間違いだろ」

「あいつにターゲットにされたら終わりだな」

ベテラン賞金稼ぎはW・B・アライランスの手配書を一瞥し、煙草

をふかした。

## 17・take to feeding(後書き)

さてさて、何やらやばそうなやつに目をつけられた一行。  
新たな道を歩き出したラブリー。

次回の本編11月上旬更新。ちよこつとバトルあり。

次週からはN・B・Chaseシリーズ。リケとトウジロウはギル  
ティンを見つけられるのか!?

17・i・N・B・Chase―とある路地裏にて―（前書き）

17・x小話シリーズは

魔薬テロ犯ギルティンを追うリケとトウジロウのN・B・Chaseシリーズ。

17・i・N・B・Chase―とある路地裏にて―

ムー大陸 とある国

深夜人通りのないスラム街

女が一人、キヨロキヨロと辺りを見回しながら歩いている。

「よう、ネエちゃん、こんな時間にこんなところで何してんだい？」

冒険者とおぼしき格好をした男が近寄ってきた。

女は助かったと困った笑顔を向けた。

「ちょっと行きたいところがあつて、ここなんですけど」

女は地図を見せようと男に近づいた。

男は地図を覗き込む振りをして女の肩に手をかけようとした、その時だった。

パシッ

女の肩にかけようとしていた男の手を後ろから捻り上げる小さな手。

「いでえ！」

男の後ろから地図を覗き込む赤毛の女。

赤毛「奇遇ですね、私も同じところを目指しているんですよ。よろしければ一緒にしません？」

地図を持っていた女はニコリと微笑んだ。

女「ぜひお願いします」

赤毛は地図の女が刃物をしまうのを見逃さなかった。

男「覚えてるよ!!」

男は立ち去った。

赤毛（助けてやったのよ）

男の背中を見て、赤毛は溜め息をついた。

赤毛は地図の女に握手を求めた。

赤毛「リケよ」

地図の女は握手に応じた。

地図の女「エテルツス」

リケ」では向かいましょうか、ハンターズの裏ギルドへ」

17・i・N・B・C h a s e ―とある路地裏にて―（後書き）

リケとであったのは17話に登場したエテル。  
さて、彼女は何故裏ギルドに用事があるのか。

次回17・2話は次週10/15更新予定！

17・2・N・B・C Chase―とあるテーブルにて―（前書き）

裏ギルドに向かう途中、目的地を同じとする女性エテルとであったリケは…。

17・2・N・B・Chase―とあるテーブルにて―

その裏ギルドは街の文書上何年も廃屋のままであるはずの場所であった。

どこの裏ギルドでも共通だが、この独特の、陰気でいて身の危険や不安を肌で感じさせる空気。

仕事で当然のように利用しているリケはいつも同じことを思っていた。

リケ（慣れないなあ…）

リケはチラリと隣を見た。

この裏ギルドへ来る途中、同じ場所を目的地とする女性、エテルと出会い、道に迷っていた彼女と来たのだが、

リケ（ワケありか、犯罪者か）

エテルはキョロキョロと落ち着かない。

リケ「コーヒーでも頼みましょうか」

二人は近くの席についた。

周囲は荒くれどものドンチャン騒ぎでうまい具合に女二人の存在を

薄めていた。

リケ「エテルさんはどうしてここへ？」

エテルは輪をかけて拳動不審になった。

エテル「どどどうしてそんなことを聞くツスカ！？」

リケ「素人っぽいから」

エテルは唇を噛んだ。

リケ「安心して、私はこういう者よ」

リケは胸元の魔導師バッチを指差した。

エテル「ま…魔導師！」

エテルは拗ねたように唇をつき出した。

エテル「魔導師がこんな素人に何の用ツスカっ」

リケは少し天井を見てからニコリと笑った。

リケ「魔導師というより一個人として、心配しているだけ。

女一人でこんなところ、人生を棒に振りにきただけよ」

エテル「…ほんのちよつと前にすでに棒に振られたツス」

リケ（…）

「ここへは何をしに？」

エテルはゴクリと生唾を飲み込み、一呼吸置いてから、これまでのフワフワとした自身の雰囲気を一変させた。

エテル「ある男に懸賞金をかけに来ました」

リケ（なるほど、私怨か）

「ハンターズギルドには？」

エテル「断られました、功績を挙げている賞金稼ぎだから私怨で賞金首になんかできないって」

リケは眉ねを寄せた。

リケ「功績を挙げている賞金稼ぎ？誰なの？」

エテルは組んだ両手を力一杯握りしめ、うつむいた。

その声は更に低くなった。

エテル「”狂犬”ハイジ」

リケはその単語を聞いた瞬間、危険だ、止めなければと思った。

リケ「…彼に怨みが？」

エテルは目に涙を溜めた顔を上げた。

エテル「リケさんは、大切な人を他人の手にかけられたことはありませんか？」

リケの両親、弟妹、祖父母ともに健在だった。

リケ「そうねえ……」

エテル「じゃあ……好きな人は？」

リケ「いるかもね」

だが、「その人」が他人に手をかけられるなんて到底想像もつかなかった。

エテル「……魔導師さんにはわからないッス」

リケ「……友達や仲間は何人も失ったわ」

エテルはリケを見た。

店員が乱暴にコーヒーをテーブルに置いた。

リケはコーヒーを一口飲んだ。

リケ「家族と同じくらい大切な人たちだった」

エテル「…相手に復讐したいと思わないツスカ？」

リケは笑った。

リケ「その人たちが選んだ道だったからね」

エテル「選んだ道じゃなかったら…？」

リケはニコリとエテルを見た。

リケ「私はこう考えるわね、その人たちが今の私をみたら何て思うか」

エテル「…なんて思うスカ」

リケ「自分の仕事をしろ」かな、もっと自分のことを考えてって、  
そういう意味」

エテルは俯いた。

その目からは大粒の涙。

エテル「でも、悔しくって、悲しくって、ムカついて…」

リケ「…魔導師の根性論だけど」

エテルは顔をあげた。

リケ「耐えなくてはダメ。

相手にも、大切に思われている人がいるかもしれない、  
その人に対して、エテルさんは同じことをするの？」

エテルは眉をつり上げた。

エテル「エテルだけガマンッスか…？」

リケは背もたれに寄りかかった。

リケ「あくまで魔導師の根性論だよ、

結局のところあなたがどうするかはあなたが自分の責任で決  
めていくしかないわ、ただひとつだけ、」

リケはエテルを見た。

リケ「“この世界”に足を踏み入れることを、恐らく誰も歓迎はし  
ない」

どうか考え直してくれ、リケは強く願った。

エテルは笑った。

エテル「エテルにはもう、この道しかないっス」

リケ「…」

こういう仕事に関わっていると少なからず裏社会の被害者と直接関わることもある。

そんなとき、リケは必ず彼らが身を落とさないよう、少しでも前を向けるよう、なんとかしたいと思ってきた。  
だが、それがうまくいくことはまずなかった。

所詮リケは犯人を捕まえるだけの人間であり、彼らからしてみれば全く外野の、赤の他人なのだ。

彼らの怒りや悲しみや憎しみは、彼らにしかわからない。

エテル「…リケさんはどうしてここに？」

リケ「…ちょっとね、人を探していて」

エテルは席についてから初めてコーヒーをすすった。

エテル「どんな人ッスか？」

リケ（どんな人か…）

「こっ、恰幅のいい感じの」

リケは腹回りの太さをジェスチャーしてみせた。

エテル「そんな人いくらでもいるツスよ」

リケ「あとは”ギルティン”って名前くらいしかわかってなくてね」

エテル「えっ！ギルティンさん？会ったことあるツスよお！」

リケ「！？」

リケはきょとんとエテルを見つめた。

17・2・N・B・C h a s e ―とあるテーブルにて―（後書き）

突拍子もないところからギルティンの名前がでてきました。  
はたして、捜査のヒントとなるのか？

次回17・3話は10/22更新予定！

17・3・N・B・C h a s e ―とある裏ギルドにて―（前書き）

魔薬テロ犯ギルティンを知るというエテル。  
リケは有力情報を得られるのか？

17・3・N・B・Chase―とある裏ギルドにて―

とあるの街 路地裏の廃屋 裏ギルド

道中裏ギルドを目指す女性エテルと出会い、裏ギルドで話し込んでいたリケ。

会話の中でエテルから魔薬テロ犯ギルティンを知っているという話が出て、そのあまりに突拍子のない展開にリケはきょとんと固まった。

リケ「えと…どんな人？どうして知っているの？」

エテル「なんか旅の途中とかで…こう、太った感じの中年の面白いおじさんで」

リケ（面白いかはともかく特徴はあってるな）

エテル「ハンチング帽をかぶってたツス！背はこんくらい」

エテルは手をヒラヒラさせた。

リケ（160もないくらいか）

エテル「リケさんのギルティンさんとおんなじッスか？」

リケ「何かもらわなかった？」

エテルは少し笑顔がひきつった。

エテル「…ラムネたくさんくれたッス…でも…先輩が売ったら金になるから…食べるなって」

エテルは泣き出した。

リケ（あちゃーしまった、そう繋がるか）

リケはエテルを宥めた。

リケ「辛いことを思い出させてごめん、あといくつか教えて。その話、いつ頃のもの？」

エテル（ラプリーに会う前だから…）

「多分一、二週間前くらいッス」

リケ（最近！！）

「どこで会ったの？それから何処へ行った？」

リケのただならぬ雰囲気のエテルは何かを感じ取ったようだった。

エテル「ナائم国ツス。ジャラル国からパンゲア大陸に出るって言うたツス」

リケ（…）

「…わざわざ言っていたの？どこからどこに行くつもりって」

エテル「はい…」

”何か”ある、畏かもしれない

リケは直感的にそう思った。

部下が送ってきた”メモリアリスタル”の映像

顔は映っていない、特徴は恰幅のいい男というものだけ。

リケ（真に受けるべきか否か）

リケは少しの間腕を組んで考え込んだ。

エテルは困ったようにリケの顔を伺った。

エテル「えと…エテルが知っているのはそのくらいツス」

リケ「うん、ありがと。カウンターでちょっと店員と話したらここを出るわ」

エテルは心許なさそうに頷いた。

リケはニコリと笑った。

リケ「あなたはどつするの？…とは敢えて聞かないわ。でもちよつと話をしてわかった」

エテル「何を？」

リケ「あなた、素直で親切で、とっても素敵な女性ね」

エテル「え…エテルがツスカ！？」

リケはうなずくと席を立った。

エテルは一人になったテーブルで一口コーヒーを飲むと、キヨロキヨロと辺りを見回した。

ごくりと生唾を飲む。

店主からは”狂犬”の恨みを買うことを恐れ、懸賞金をかけることを拒否された。

かわりに、個人に殺害を依頼する方法を勧められた。

そうして紹介された、テーブルで一人酒を呑む怪しげな男に、僅かな金とともに”狂犬”ハイジの殺害を依頼した。

怪しげな男は当然のように金を持ち逃げするつもりであった。

そうとは知らず、エテルはカタカタと震える足でカウンターに向かった。

コーヒー代を払うために再びカウンターへ向かったとき、リケが払った金額が二人分であったことがわかった。

エテル「……」

胸にズシリと何かがのしかかった気がした。

17・3・N・B・C h a s e ―とある裏ギルドにて―（後書き）

エテルの胸にズシリと来たのはなんなのでしょうね。

ただ、悪いこと（殺害依頼）をして、そのあとに他人の良心に触れ<sup>おこっつけていた</sup>た、その時にエテルが何を感じたか、ということ表現したかったのです。

さて、ギルティンの怪しげな情報をゲットしたリケ。

しかし罨かもしれないしそうではないかもしれない、どうする…！？

次回17・4話は10/29更新予定！

# 17・4・N・B・C・haseーとある国にてー（前書き）

ギルティンについての怪しげな目撃情報をゲットしたりケ。  
そのころその相棒は…

## 17・4・N・B・Chase―とある国にて―

ムー大陸 ジャラル国

長い足を大股に、幅をきかせながらズンズンと  
その大男の歩く様に

ある者は目を背け、またある者は道を避けた。

黒髪坊主にジャラジャラピアスの大男――トウジロウはイライラしていた。

なぜなら

トウジロウ「どこにあんねん、裏ギルド」

魔薬テロ犯ギルティンの足取りを追うべく、トランプから派遣されたトウジロウとリケ。

手がかりが殆ど無い中、魔薬”免罪符”蔓延の境界線をギルティンの位置特定の目安とし、情報を得るために各国北端の街の裏ギルドを探していた。

トウジロウの頭がついに沸騰しかけたときであった。

『トウジロウさん』

耳元からリケの声。

魔導師専用器具による風魔法の通信技術――

たまたま目があったチンピラに絡みかけていたトウジロウはチンピラの胸ぐらをポイと離し、道端にしゃがみこんだ。

トウジロウ「リケは〜ん、ボクこの仕事向いてへんみたいやねん、どないしょ〜」

トウジロウの拗ねたようなからかうような口振りに、リケはこりやだめだ、と思った。

『今どちらに』

トウジロウ「未だにジャラル国（一カ国目）ですわあ、リケはん何十カ国目？」↑明らかにからかっている

『ちょうどいい、一つ相談が』

トウジロウ「無視かい」

『ギルティンがジャラル国にいるかもしれないという情報を得ました』

トウジロウはニヤリと笑った。

トウジロウ「ホンマかいな」

『私もそちらへ向かいます、トウジロウさんは少しでも情報を』

トウジロウ「それ俺に言うか」

『特徴は』

トウジロウ「…」↑反論を諦めた

『背は155〜160ほどで、ハンティング帽を目深に被っていて、髭面』

トウジロウ「そんなんそこらじゅうおるがな」

『”恰幅のいい男”よりかは具体的でしょ、それから一、二週間前にナйм国西北部で目撃情報アリ』

トウジロウは立ち上がった。

トウジロウ「しゃあないな」

トウジロウはバサリと地図を広げ、目を落とした。

トウジロウ「ジャラル国の中部にクジムいう街があるさかい、明朝そのハンターズで落ち合うでええな」

『それまでにクジム以北に情報がないかはお願いしますね』

トウジロウ「諜報の才能ナシのボクにそないアッパーな要求せえへんといてや」

『はいはい、』

通信は切られた。

太陽は頂点に昇りかけ。

マジックワープ駆使してもこれは徹夜作業やな、いやそれでも間に合うか

トウジロウは吸っていたタバコをポトリと落とし、グリグリと雪駄で揉み消しながら、新しいタバコに火をつけた。

軽く白い煙を吐くと、ニヤリと笑った。

トランプの隊員にあるまじきだが、明日までには物理的に不可能と思うと、ようやく自身に火がついた。

トウジロウ「やったるやんけ」



# 17・4・N・B・C・hase―とある国にて―（後書き）

さて、前話で「畏かもしれない」と考えていたリケですが、ここでは混乱を避けるためあえてその話は出ませんでした。この話の続きは本編19話（12月上旬予定）にて。次週は本編第18話、11/5更新予定です。

18 · d o n · t q u e n c h t h e i r t h i r s t (前書き)

11月の本編です。

一行が訪れた先で出会ったのは…

18・don't quench their thirst

ムー大陸北部ジャラル国南部

荒れた田畑、

朽ちた家屋、

枯れた草木、

ひどく寂れたその村は、生ぬるいそよ風で一行を歓迎した。

フィード「なんだ、廃村じゃねーか」

エオル「おかしいな、地図にはしっかり載ってるんだけど」

よしの「どなたかいらっしゃるかもしれませんよ」

クリスは欠伸した。

— don't quench their thirst

（潤わない喉）

フィード「人がいねえんなら、しょーがねーな」

エオル「いや、まだ探してもいないでしょ…」

フィードは腕を組んだ。

フィード「こんな村でもちったあ金目のモンくらいあんだろ」

エオルは指をボキボキと鳴らした。

よしの「あの…」

2人の魔導師はよしのを見た。

よしの「エオル様の仰る通り、まずはどなたかいらっしやらないか探ませんか？」

フィードはニヤリと笑った。

フィード「そうだな、棚の中とかにいるかもな」

エオル「家の中ね！」

そうして3人は別々に村を回ることにした。

よしの「どなたかいらっしやいませんか？」

何処へともなく呼びかけた言葉はむなしく中空に掻き消えた。

よしの「……」

よしのの腕の中で、クリスは自身に絡みつく生ぬるい風を振り払うように尻尾を振った。

クリス「……人間の気配はするけどね」

よしの「本当ですかっ!？」

すると、微かだが人の会話している声が聞こえてきた。  
少しずつ近づいていきているようだった。

よしの「一つ隣の通りでしょうか！」

よしのは駆け出した。

エオル「おっ！」

村の端まで歩き終えたエオルは、

柵に囲われた村の出入り口となっている門（一行がやって来た方角とは逆の出入り口）に、

荷を下げた鹿のような生き物が4頭繋がれているを発見した。

エオル（4名様はいらっしゃるようね）

「あの〜…」

エオル「！」

エオルは後ろを振り返った。

フィード「チツ！金目のモンの一つもありやしねえ！」

乾いた小石を蹴りながら、ダルそうに目の前にある道をただ歩く、その小石を蹴る音に、いつの間にか足音が混じっていることにフィードは気が付いた。

ちょうど次の角のところ、こちらに向かって来ている。

コツコツと響く足音に、フィードは聞き覚えはなかった。

その真っ直ぐ淀みのない足音は、この寂れた廃村に似つかわしくないものだった。

フィード（旅人か？）

コツ

コツ

コツ…

生ぬるい風に棚引く灰色のマントに黒のキャソック  
無地の制帽の下から覗く鋭い瞳は眉から鼻までの黒い仮面に覆われていた。

男は足を止めた。

フィード「…お前、村のヤツか？」

男「…」

男は足を止めたままフィードの頭から爪先までジロジロと凝視している。

フィードはイライラしながら声を荒げた。

フィード「なんだよ」

男はニタリと笑った。

男「フハハハハ」

フィードはボキボキと指を鳴らした。

フィード「てめー、いい加減にしねーと、」

男「貴様は見たことがあるぞ」

フィード「！？」

男はマントの下から長ドスを覗かせた。

フィード「？」

杖？」

木製の鞘から刀がズラリと引き抜かれた。

男「”火葬屋” フィード」

フィードが返事をする間もなく、男はフィードの懐に入り込んだ。

フィード「！？」（速え！！）

フィードは後ろに飛んだ。

フィードの首からツウと真っ赤な血が流れた。

フィードはそれを袖で拭うとニヤリと笑い、構えた。

フィード「危ねえな」

男はツカツカとフィードに近寄ってくる。

男「貴様の捕獲レベルは”D・O・A（生死問わず）”だ……!!」

フィード「…なんだ、ただの賞金稼ぎか、なら知ってんだろ、俺様は」

男は淀みなくフィードとの距離を縮めた。

男「魔導師」

男はニタリと笑った。

男「それがどうした。」

フィード「…ヤロー」

フィードは男の正面目掛けて駆け出した。

男の刀が宙を切った。

その懐にはフィード。

フィードの放った拳はくるりと避けられ、その後頭部には男の踵。

フィードはそのまま前に宙返り、タイミングよく男の踵を空振らせる。

フィードが着地したところで、その脳天には真っ直ぐ振りおろされる刀。

フィードは着地したその足で横に大きく飛んだ。

ゴロリと肩で受け身を取って一回転すると、その勢いでピョンと立ち上がった。

フィードは勢いよく構えた。

フィード「やんじゃねえか！賞金稼ぎ！」

男は刀を鞘に収めた。

フィード「ん？」

男の手は柄から離れない。

ヒヤリ、と顔が冷たくなった。

フィードは直感的に後ろに飛んで間合いを取った。

男はニタリと笑った。

男「キル」

フィード「！！？」

男は地を蹴った。

「ハイジー！」

ザリザリと音を立て、男は急ブレーキをかけた。

そしてゆっくりと後ろを振り返った。

視線の先には13、14歳ほどの少年。

「何やってんだよ！もう！」

少年はプリプリと怒りながらツカツカと男に歩み寄った。

少年「人が見つかったんだって！旅人さんだけど…」

男「それなら俺も見つけた」

少年は男の陰からひょっこりと顔を出した。

少年「あっ！もしかしてエルフの兄ちゃんと黒髪のお姉ちゃんの仲間！？」

フィードはキョトンとした。

フィード「あ？」

――間――

エオル「ご家族で巡礼の旅ですか」

鹿が繋がれていた村の出入り口、

一行と、その目の前には夫婦と見られる男女、少年、そして”ハイジ”と呼ばれた男。

エオル（…家族はわかるけど…この仮面の人、何？）

エオルの視線に気づき、夫妻が口を開いた。

妻「彼には道中の警護を依頼しています」

夫「とても優秀な賞金稼ぎさんらしくてね、

ジパングの”サムライ”に会いたいらしく、

我々がジパングまで案内する代わりに用心棒をしていただいていて」

エオル（げ…賞金稼ぎ！？）

よしの（ジパング…！！）

仮面の男はエオルをジロリと見た。

エオル「う！？」

男「お前も見覚えがある、”堕ちた天才”エオル・ラーセン」  
フィードは再び構えた。

フィード「こいつ、俺様らのこと知ってるみてえだぞ」

エオル「げっ…！！」

よしの「??」

男は鞘から刀を抜いた。

少年「ちょ、ちょっと！ハイジ！？」

ハイジと呼ばれたその男は淡々と答えた。

ハイジ「金が入るぞ、よかったな」

少年「なっ！？何言って…」

夫妻は少年を引き止め後ろへ下がった。

少年「何すんだよ！止めなきゃ…！！」

夫「ハイジさんは賞金稼ぎだ！」

つまり彼らは賞金首…犯罪者ってことだろう！？危ないよ」

妻「ここはハイジさんに任せなさい」

少年「…！！」

フィード「…」狂犬」」

エオルは「え？」と聞き返ししながら剣を構えた。

フィード「」狂犬」ハイジ、かなり名の通った賞金稼ぎだ」

エオルはため息をついた。

エオル「一般人の俺には」裏社会の」有名人なんて縁遠すぎるよ」

フィードはニヤリと笑った。

フィード「よかったな、その縁遠い有名人とこれでお近づきになれるじゃねえか」

エオル「大事な部分を端折らないでくれます!？」

ハイジは刀を構えた。

フィード「ハン、魔導師2人相手に良い度胸じゃねえか」

ピリ、と空気が張り詰めた。

フィード「魔法拳!」

フィードの拳から炎が吹き出した。

エオル「ちよっ、フィード! 相手は魔導師じゃないんだよ!」

フィードは鼻から息を吐いた。

フィード「ナメてかかっ」と

フィードは地を蹴った。

フィード「痛い目見っぞ!」

同時にハイジも地を蹴った。

その時だった。

目の前にはサラリとなびく黒髪  
真っ直ぐ広げられた小さな手

フィード「げっ」

フィードは炎を引つ込めブレーキをかけた。

目の前には両腕を大きく広げ立ちはだかる、よしの。

よしのとハイジの視線がかち合う。

よしのは微動だにしなかった。

ハイジ「…！」

ハイジの手は止まらない。

フィード「…！」

フィードは再び地を蹴った。

よしのの顔の横にはフィードの腕、  
そのすぐ横にはハイジの刀。

エオル「す…寸止め…」

ハイジはニタリと笑い、2、3歩下がった。

ハイジ「女のために腕を差し出そうとするとはな、余程大事な女とみた」

フィードは僅かに裂けた袖をさすりながらズイとよしのを後ろに押しつけた。

フィード「よしのは大事な仲間、」

今度はよしのがズイとフィードの前に出た。

フィード「オイ！」

よしのはすうと息を吸った。

よしの「理由もないのにケンカはいけません！」

フィード&エオル「うっ！」

フィードとエオルは首根っこを摘まれた気分になった。

ハイジは刀は納めたが、柄から手を離さなかった。

ハイジ「理由ならあるぞ」

よしの「なんです！」

ハイジは顎を上げた。

ハイジ「そいつらを殺れば金が入る、旅には必要なものだろう？」

よしの「…あなたは本当にそれだけですか…？」

ハイジは薄ら笑いを浮かべた。

よしの「このケンカ、これ以上続けるようでしたら、二人とも私がお相手いたします」

フィード「アホか！ケンカはダメなんて通用するようなヤツじゃ…」

少年「オレも！」

少年が三人の真ん中に割って入った。

少年「ハイジ！！ここは刀を納めて…」

オレや父さんたちは必要以上のお金は望んでないんだ…」

ハイジはニタリと笑った。

ハイジ「わかった」

フィード（こいつ絶対わかってねえ…！！）

よしの&少年「よかった！！」

エオルがフィードの元へ駆け寄った。

エオル「あの彼、絶対わかってないね、諦めてないよ…！！」

フィード「身のこなしが人間じゃねえ、まるで獣人のそれだ。

次来たら本気で行かねえと、マジでうっかり”とられる

”ぞ」

そう言うフィードの顔はニヤリと口角が上がっていた。

エオル「…なに」

フィード「世界は広いなと思ってな」

エオルはため息をついて、ハイジを見た。

エオル（確かにあの太刀筋…俺たちが魔導師と分かかって向かってきたのは驕りじゃないな…）

エオルは夫妻に視線を向けた。

エオル（早く離れよう）

「…俺たちはあなた方を襲ったりするつもりはありません、すぐここから去ります」

夫は少年を後ろに押しやりながら答えた。

夫「ああ、そうしてくれると助かる…！！」

その、社会の異物をみるような目は、  
自分が元いた世界から完全に弾き出された、  
自分はそんな存在だと知らしめるには十分であった。

”うわぁ…凹むなあ…” エオルは「はい」と返答をしつつ、そう思った。

少年「待つて！」

一同は少年に視線を向けた。

少年「俺たち、旅の生活用品が尽きちゃったから供給にここ寄ったんだ、

兄ちゃんたちもそうなんじゃないの…？」

エオルは微笑んだ。

エオル「気にしなくていいよ」

少年「…」

少年は父親を見上げた。

少年「父さん！この人たち、多分悪い人じゃないよ！」

少年と父親のやり取りを見つつ、エオルは呟いた。

エオル「…いい子だね」

フィード「ただの世間知らずだろ」

…カタン

2人の魔導師と賞金稼ぎは同時に同じ方向へ目を向けた。

少年「ハイジ？」

よしの「どうかされました？」

風はなかった。

何かが落ちた音でもない。

そう、何かが”ぶつかった”音。

よしの「ぶつかった音？

やはり誰かいらつしやるのでしょうか。」

エオル「”誰か”かもしれないし、」

フィードはニヤリと笑った。

フィード「”何か”かもしれねえ」

少年「本当は誰がいるのかも！」

少年は駆け出した。

妻「こら！ハニア！待ちなさい！」

夫「ハイジさん！」

ハイジは頷いた。

夫妻とその用心棒は少年の後を追っていった。

静かになった場。

エオル「…行こっか」

フィード「そうだな、ちょっとコイツを失敬して」

鹿の縄を解こうとするフィードの脳天にエオルの拳が注がれた。

フィード「何すんだよ」

エオル「絶対ダメえー！ー！！俺の良心が許さない！！」

よしの「お二人とも、ケンカは…」

――少年の悲鳴

フィード「お？」

エオル「！！？」

よしの「……！！」

よしのは弾かれたように走り出した。

フィード「なんだなんだ」

後に続くフィード。

エオルは額に手を当てた。

エオル「ああもう……」

悲鳴が聞こえたのはどの辺りだろう、

キヨロキヨロと周囲を見回しながら走っていると、

後ろからフィードの声がよしのをつついた。

フィード「バカ！前見ろ、前！」

よしの「え」

どかつ

何かにぶつかったかと思えばしかと肩を抱き止められた。

よしのが見上げると、そこには先の仮面の男。

フィード「なんでまだうるついてんだよ」

ハイジ「見失った」

フィードはため息をつきながらすぐ横の民家の窓に寄りかかった。

フィード「ケツ！頼りのねえ用心棒さま……」

少年「ギャー！！」

ズバン！

フィードが寄りかかり、頭をつけていた窓が勢いよく開き、少年が泣きながら飛び出してきた。

少年はハイジを見つけるや、慌ててハイジの背後に身を隠した。ハイジ「？」

よしのは少年に向けて身を屈めた。

よしの「大丈夫ですか？お怪我は？」

少年はよしのと目が合うと、ヘナヘナと力なくしゃがみ込んだ。

少年「こ…怖かった…」

ハイジは少年を見つめた。

少年はハイジの視線に気が付き、口を開いた。

少年「な…なか…家の中に…」

フィード「痛ってえな、このクソガキ…」

フィードが後頭部を押さえながらムクリと起き上がりかけたその時、

ドカツ

ツカツカと件の家屋に入るハイジ。

フィードはハイジに向け怒鳴った。

フィード「踏むなーーーー！！」

ハイジは家屋に入ってから数歩で歩みを止めた。

フィード「…？なんだよ？」

家屋内は腐乱臭に充ちていた。

ハイジの背後からフィードとよしのは家の中を覗き込んだ。

その目の前にはイスに腰掛けた人間。

しかし、その腕は、顔は、見る影もなく腐りきっていた。

フィードは盛大にため息をついた。

フィード「なんだ、ただの死体かよ……」

よしのは死体の前で腰を落とした。

よしの「お辛いでしょように……フィード様、私この方を埋葬差し上げます。」

フィードは「ええ〜」とうなだれた。

その時、スツと長ドスの鞘がよしのと死体の間を隔てた。

よしの「?」

よしのはハイジを見上げた。

フィード「……よしの、ちょっと、」

フィードはそろりとよしのの首根っこを捕まえたかと思うと、

フィード「下がってろ!」

よしの「!?!」

グイと後ろに引き寄せながら無理やり立たせた。  
同時に

「グバァ!!!」

腐乱した死体が突然イスから立ち上がった。

フィードは構えた。

…の前に、ズラリと光る刃。

ハイズは長ドスの4分の1ほどを引き抜いてズイと死体の首もとに押し当てた。

死体「ギヤアアア！ごごごめんなさいい——！！！」

——間——

死体「いやあー驚かしてすまなかつたね」

再びイスに腰掛けた死体を囲み、  
エオルや夫妻はポカンと目の前のありえないものを見つめていた。

フィード「謝るくらいなら驚かすな」

死体はあっけらかんと笑い声をあげた。

死体「ハッハッハッ！」

人を驚かすのは趣味なんだ、

いや、むしろライフワークだな、あ！”デッド”ワークか！

ハッハッハッ！」

フィード「えっ！」

ちよつと待てお前、今……！」

エオル（！

やっぱり死体なんだ！）

フィード「……どこが笑いポイントなんだ？」

エオル「突っ込むところ、そこじゃないから！」

フィードは「何！？」とエオルを見上げた。

フィード「じゃあどこなんだ！」

エオルはまじまじと死体を見た。

エオル「村のこの有り様と、あなたのその姿、何か関係が？」

死体は膝の上で頬杖をついた。

死体「…人と話をするのは何年ぶりか…」

そう言うつと小さくため息をつき、目を細めた。

死体「恐ろしい話だ、

旅人がもたらした”不思議な粉”で村の奴ら全員廃人みたいになってしまったの、

だーれも仕事をせなくなってしまった」

エオル（不思議な粉…魔薬？）

死体「粉が切れるとみんな狂ったように暴れ出して、そりゃあもう地獄絵図だった」

エオル「あなたもその粉を？」

死体は首を横に振って小さく笑った。

死体「小心者だったからな」

そうして今度は腕を組んだ。

死体「そのあとだ、パーヴァーとか名乗る旅の音楽家が訪れてな、

そいつの音楽を聞くと、みんな心が癒されるのか、大人しくなっただけ…

私もその時ばかりはみんなに混じってその音楽に聞き入っていたものだ」

死体は自分を抱き締めるように身を縮めた。

死体「だがそれがまずかった、

粉をもたらした旅人と、その音楽家はグルだったのだ」

エオル「！？

なぜそうだと？」

死体は頭を抱えた。

死体「音楽家がやってきて、何度目かの演奏の時、

みんなが集まっているその場に、再び粉がまかれた」

エオル「！！？」

死体「だがその粉は初めての粉とは違ったようだ、

臓器が止まり、体が朽ちようと、”死なくなってしまう

た”」

フィード「ハア！？」

死体「初めの粉で頭をやられた連中は、そのままゾロゾロとその音楽家について村を出てしまった」

少年「な…なにそれ…」

クリス「…ゾンビパウダーだな」

エオル「ゾンビパウダー？」

少年は目を丸くした。

少年「タヌキがしゃべった！」

クリスは毛を逆立て威嚇した。

クリス「誰がタヌキだ！」

フィードはクリスを握り締め上げた。

フィード「話を続ける、クソタヌキ」

クリス「どいつもこいつも！」

クリス「ゾンビパウダーって言ってな、

肉体と魂を癒着させる、接着剤みたいな粉さ」

フィード「よくわかんねえ」

クリスは目をそらしてため息をついた。

エオルは慌ててフィードの硬く握り締められた拳を押さえた。

クリス「ようは、肉体の機能が停止しても魂が肉体から離れなくなる」

エオル「…死ななくなるってこと…？そんなこと、”呪い”だけか  
と思つてた…」

クリス「つい数年前、ある国で軍事利用されて問題になった。」

エオル「軍事利用？」

クリスは冷ややかな笑みを死体に向けた。

クリス「いくら殺しても死なない最強の兵士」

死体は目の前のしゃべる猫をポカンと見つめた。

死体「…何年前の話だ…」

クリス「4、5年くらい前の話さ。」

死体「…私の今の話も6年前の話だ」

クリス「へえ」

死体の開きかけた口を、

クリスはその口から出るであろう言葉が想像容易いことであるかの  
ように、次の言葉で遮った。

クリス「ちなみにゾンビパウダーを軍に売って大金を儲けた輩は未  
だ見つかっていない」

死体は両手で顔を覆った。

旅人によつてもたらされた元に戻る手がかりは一瞬にして潰えた。

食べることも眠ることもできない腐った体。  
自らの目も当てられぬ容姿。

このまま永久に生き続けなければならぬ絶望。  
苦しいのに、悔しいのに、寂しいのに、悲しいのに、目から出す水  
すらない。

死体「…死にたい…死にたい…」

よしのは涙も拭わず死体を強く抱き締めた。

少年「…なんとかならないのかな…」

母親は少年を抱き寄せた。

少年「…神様はどうしてこんな仕打ちを？」

少年の問いは虚しく宙に消えた。

死体（神…）

エオルは死体の前に腰を落とした。

エオル「…魔導師協会に”呪い”患者専門の療養施設があります。

あなたのような症状の人もいくらかいるかもしれません」

死体「…」

エオル「残念ながら俺たちは追われる身でして…ご案内することは  
できませんが所在地なら…」

死体「…いや」

一同の視線が死体に集まった。

死体「私は魔法圏の人間だったが、こんなになってようやくわかつ  
た。

人間最後に頼るのは魔法なんて現実的なものなんかじゃあな  
い」

エオルはキョトンと死体を見つめた。

死体は夫妻に視線を向けた。

死体「…風の噂で聞いたことがある、

桃花源国の山中に、天界から地上に移り住んだ本物の神がいると」

少年はハイハイと手を挙げた。

少年「いるよ！ハクオウキ様って言うんだ！」

死体「お会いしたい」

父親「山を登って来られた者には、

この世のどんな善人悪人にも分け隔てなく道を示してくださいと聞きます。」

エオルはすぐさま反論した。

エオル「現実的じゃない、

失礼を承知で言いますがあなたのその体でまともに旅ができるとは思えません」

死体は俯いた。

少年はムツとした。

少年「なんだよその言い方！これだから魔導師は！」

死体「いいよ、坊や」

少年は悲しそうに死体を見つめた。

少年「…な、なんで…」

死体は自嘲気味に笑った。

死体「その人の言うことは本当のことだ。

珍しがられて見せ物にされるか、

怖がられて人以下の扱いか、

それともこの腐った足が腐りきって取れてしまったら、もう歩けやしない、

あんた、そういうの心配してくれてんだろっ？」

エオルは黙ったまま死体を見つめた。

死体は少年に目をやった。

死体「これが、魔法圏の優しさってやつさ、…現実知る前に諦めがついたよ、ありがとう」

明らかに嘘だった。

エオル「…」

少年は泣き出した。

よしのは目を潤ませ、唇を噛んだ。

よしの（なんとかできないでしょうか…なんとか…）

フィード「…おい」

一同がフィードに視線を集めた。

フィード「お前、金目のモン持つてるか？」

死体はキョトンとした。

エオル「ちよつとフィード！こんなときに何を…！」

死体「…なんとかしてくれるのか…！？」

フィードはニヤリと笑った。

フィード「運び屋”つつうヤツらがいてな、

金さえ積みめば、どんなものでも運んでくれる」

死体「どんなものでも！」

エオルは訝しげな視線を向けた。

エオル「いるの？そんな知り合い」

フィード「いいや、これから」  
エオル「それ…大丈夫なの…」

フィード「そうだ！」狂犬”、お前知り合いにいないのかよ」

ハイジ「いない、何度かバイトをしたことはあるが」

フィード「ちえ、ひとりくらいツテねえのかよ」

ハイジ「いない、すべて切った」

エオル「はい？」

ハイジはニタリと笑った。

ハイジ「裏社会の人間は片端から切っている」

そう語るその目はフィードとエオルに”お前らも例外ではない”と語っていた。

よしのはぽんと手を叩いた。

よしの「ケンカはダメです！

それでフィード様、どちらに行けばその”運び屋”様にお会いできるのですか」

フィードはハイジの手元から視線を外さず答えた。

フィード「ハンターズに行きやあ四六時中仕事待ちのそいつらがいやがるよ、

問題は相応の報酬を奴らに用意できるかだ」  
死体「…貯えなら少しはある、

この姿になってから使う必要がなくなったからな」

フィードはニヤリと笑った。

フィード「そうとくりやあ」

夫「あとは我々が引き受けます」

フィードは「あゝン？」と勢いよく睨みつけた。

夫「あなた方は犯罪者だ、

この方（死体）を約束通り運び屋の元に連れて行ってくれる確

証もなければ義理もない」

エオルはフィードが夫妻に飛びかからないようフィードのコートの端を掴んだ。

エオル「なるほど」

よしのは夫妻を真っ直ぐと見つめた。

よしの「必ず運び屋様の元へお連れします。信じていただけませんか？」

夫は首を振った。

夫「あなた方の」現実的か否か」はいつ別の方向に意思を変えるか、正直怖い」

フィード「柔軟な適応力つつってほしいな」

妻「この方（死体）は私たちが必ず信頼できる運び屋さんの元にお連れします」

一行はキヨトンとした。

エオル「あなた方が？」

エオルの「大丈夫ですか？」という視線に、夫妻は同時にハイジに目をやった。

夫「ハイジさんはその道にお詳しいという話でした」

フィード&エオル（オイイイ！！）

フィード（発言内容歪めんな！そいつが何言ったか思い出せよ！）

エオル（ああもう…これだから神使教は…！！）

よしの「そうですか…信じていただけないのは残念ですが…」

よしのは死体に向き直った。

よしの「よかったですね」

フィード&エオル（ここにもいたーーーー！！）

フィード「おい狂犬！変な方向に頼られてんぞ、いいのかよ、」

言いつつ向けた視線の先の狂犬は  
フィードとエオルを交互に見ながら、  
親指で鞘から刀を出したりしまったりを繰り返していた。  
フィード「聞いちゃいねえ!!」

――間――

エオル「本当に連れて行っちゃった…」

フィード「ケツ！ほっとけほっとけ」

よしの「目的地も同じですし、一緒にできればよろしかったのです  
けれど…」

エオル「いやいやいや…」

フィード「どの道あのハイジとかいうヤツとはそのうちやり合っ  
るうな」

少年「あっ！」

夫「どうした？ハニア」

ハニアと呼ばれた少年は後ろを振り返った。

ハニア「ハイジ！さっきの人たち魔導師って言ってたよね!？」

ハニアの隣で鹿に揺られていたハイジはコクリと頷いた。

ハニア「ヤクトミ兄ちゃんのこと知ってるかどうか聞けばよかった」

夫「ヤクトミさんが犯罪者と知り合いなわけないだろう」

ハニアは口をすぼめた。

ハニア「さっきから犯罪者犯罪者って…」

妻「ハニア、ここまでやってくる間に、

どれだけ恐ろしい目にあったか、忘れたのかい？」

夫「本当に恐ろしいのは魔物でも自然でも病でもない、

…信仰心のない、人間だ」

ハニア「…神使教以外の人は恐ろしい？」

んー…だってヤクトミ兄ちゃんとかいるじゃん」

夫「信仰心というのは絶対領域の心の余裕だ、

それがない人間は心に余裕がなくなったとき、

何をしてくすかわからない。

…父さんはそれをこの短い期間で学んだよ。」

ハニア「…」

死体「心の余裕…」

全身をマントとケープで隠し、

ハイジとともに鹿に揺られている死体はポツリと呟いた。

ハニア「ん？何か言った？」

死体は正面を向いたまま口を開いた。

死体「…私のような者でも、神使教に入信できるだろうか」

ハニア「モチロンだよ！誰だって！ハイジも入れば？」

ハイジはニコリと微笑んで申し訳なさそうに首を横に振った。

ハニア「ちえー！」

妻「こらハニア！強制するものじゃありませんよ」

夫「ハイジさんのそれは法衣だろう？別の宗教に入っているのですよ？」

ハイジは困ったように首を横に振った。

夫「ハハハ！本当に無口なお方だ！」

ハニア「俺もさつき初めてしゃべるとこ見たよ！ハイジ、しゃべれるんじゃない」

ハイジは頷いた。

ハニア「いや、だから、しゃべってよ…」

フィード「ハクオウキ様ねえ…」

フィードは歩きながらボンヤリと遠くを見つめて呟いた。

エオル「ん？なんか言った？」

フィード「腹減ったつつたんだよ」

エオル「あぁね。よしのさんは…どうかした？」

よしのは先ほどからギュツと手を組んで黙っていた。

よしの「あの方は一体…普段どのように考えて

…いえ、どのように育ってきた方なのでしょうね」

エオルはキョトンとした。

エオル「…？」

……もしかしてあの賞金稼ぎのこと？」

よしのはまっすぐ一点を見つめたままだった。

——良心や罪悪感といった人間の理性的な部分を微塵も感じさせない、あれが

フィード「”狂気”」

エオルとよしのはフィードを見た。

フィード「ああいうヤツのことをいくら考えようが、理解なんざで

きねえよ。

わかるうとするな、あいつはああいうヤツなんだ」

よしの（…そうでしょうか…）

理由のない暴力、

狂気を宿した瞳、

それとは対照的に夫妻やその息子には好かれている様子、

よしのはそのチグハグで読めないハイジという男に無意識に一種の恐怖を感じていた。

その恐怖を拭うため、彼を理解したいと思った。

ヴァルハラ帝国    グラブ・ダブ・ドリツプ魔導師協会管轄地区    ト  
ランプ本部

ハートのキングの執務室にノックの音が響いた。

ドアが開き、

黒ぶちメガネにライトブラウンの癖っ毛のヌボツとした男、”ハートのエース” ウランドが顔を出した。

ウランドはいつものボソボソとした低い声で執務室の主へ声をかけた。

ウランド「…大分お疲れのようですね」

デスクで眉間を押さえながら

机上に山積みの書類を睨んでいた”ハートのキング”カグヤは睨む対象をウランドに変えた。

ウランドはデスクに山積まれた書類の上に、さらにドサリと書類を置き、カグヤを見た。

ウランド「…別に女性だから体力ないとかいう意味合いじゃないですよ、

少なくとも私の数倍は働いておられる」

カグヤ「…持ってきた書類で最優先のものは？」

ウランドは窓の外を見ながら答えた。

ウランド「…強いていうならデスクの上のもの全てですかね」

カグヤ「他の書類と優先順位は変わらないということとで理解した」

ウランド「…コーヒーでもお持ちしましょうか？」

カグヤ「いや、いい。他に用件は？」

カグヤから”早く出て行ってほしい””邪魔だ”という空気がビシビシと伝わってきた。

ウランドは心の中で肩をすくめた。

ウランド「”魔薬事件”の件で進捗の報告を。」

カグヤは椅子の肘掛けに頬杖をついた。

カグヤ「聞こう」

ウランドは腕を組んだ。

ウランド「…ギルティンの足取りを掴んだそうです。

場所はムー大陸ジャラル国北部」

カグヤ「海に出るつもりではないか？」

ウランド「そのように自らアピールしているようです」

カグヤ「…我々を誘い込む罠かもしれんな」

ウランドは両手を後ろに組んだ。

ウランド「まあどのみち港町に入る前に叩くとのことです。」

カグヤは一瞬”忌々しい”と顔をしかめ、口にしたくなかった単語を口にした。

カグヤ「叩く”のは”スペードのエース”だな？」

ウランドは頭を掻いた。

ウランド「…ええ、両エースともにアーティファクトを持たせています」

カグヤ「…ならよい、新たな進捗があればまた報告を。」

ウランド「…コーヒーお持ちしましょうか」

カグヤはキョトンとした。

カグヤ「いや、いい」

ウランドは窓の外を見た。

ウランド「…ではランチでも」

カグヤ「？」

何が言いたい」

ウランドはカグヤをまっすぐ見つめた。

ウランド「…はつきり申し上げますと、

キング、作業効率が落ちています」

カグヤの低い声が更に低くなった。

カグヤ「使い物にならんと？」

ウランドは今度はカグヤに見えるように肩をすくめた。

ウランド「…効率のためには適度な休憩も必要ですと申し上げます」

カグヤは鼻で笑った。

カグヤ「この程度の仕事量」

ウランドはフツと笑いながら顎に手を当てた。

ウランド「…何徹（夜）してもケロッツとしてられるのはリケさんくらいですよ、

あの人は精神力で生きてますからね」

カグヤはしばらく沈黙し、眉根を寄せてこめかみを押さえた。  
カグヤ「エースがあれだけの仕事をこなしているのにキングはこのザマか、示しがつかん」

ウランドは両手を後ろに組んだ。

ウランド「人間、疲れには勝てません、それといくつか」

ウランドは人差し指を立てた。

ウランド「まず一つ、

リケさんがこなしているのは諜報活動の始末書やら被害の保証業務つまり量、

キングのは各国と捜査活動との調整業務つまり質です、  
一つ一つが重い」

ウランドは次に中指も立てた。

ウランド「二つ目、キングに求められているのは

こんな雑用をどこぞのエース並みにこなすことではありません。」

ウランドはカグヤに答えるよう促した。

カグヤ「隊員たちの上に立つこと？」

ウランド「ノー」

カグヤ「対外交渉？」

ウランドは窓の外を見た。

ウランド「もっと究極的な答えを求めています」

カグヤは唇に指を当てて少し考えた。

カグヤ「……絶对的な脅威に戦い、勝利すること……」

隊規に書かれている”キングとは何か”の一つであった。  
ウランドはデスクに積まれた書類をパラパラとめくった。

ウランド「…そうです。

あなたはキングである上に”最強の7人”<sup>グランドセブン</sup>です、

もしものときに力を発揮していただければ、

雑務まで完璧にこなしていただかなくて結構です」

ウランドは最後にむしろそこまで期待していません、と付け加えた。

カグヤは笑った。

カグヤ「そこまで言うか」

ウランドは薬指も立てた。

ウランド「ついでに三つ目」

カグヤ「三つ目はついでか」

ウランド「リケさんはあなたより約一回り年上です。

張り合ったところで10年分の雑務経験の差は埋められ

ません」

カグヤ「一回りもない、9年だ、失礼なやつだな」

そう言うカグヤからは眉間のしわが消え、笑みがこぼれていた。

ウランド「…笑うほうが失礼ですって」

カグヤ「うるさいな」

ウランド「…コーヒーでも？」

カグヤ「ランチにする」

ウランド「ご一緒しましょう」

## 18・don't quench their thirst(後書き)

ハイジの黒い仮面とは、べつに格好つけて仮面をつけているわけではなく、

ただ単に鼻を骨折したときにつけた鼻サポーターです。医療器具です。

なんでつけているのかは気になる方は本家サイトの登場人物紹介(PCのみ)

をご覧ください。

ついでにウランドのいちいちの行動には全く意味はありません。ただ単に落ち着きがないだけです。

次回本編は12月上旬更新です。

次週は小話「A・(エーピリオド)」シリーズです。

ハートのエース、ウランドの小話シリーズとなります。

11/12更新予定です。

18・1・A―魔導師山賊事件―（前書き）

A・（エーピリオド）第2話。

ハートのエース、ウランドが主人公の小話シリーズです。

ウランドは現在、大悪魔ノツシュナイド討伐体制（W・B・アラ  
イランス討伐体制）を整えるため、トランプでたまった案件を強制的に潰してゆく任務についています。なんで一人でやっているのか等は14・3話をご覧くださいただけたらと思います。  
まずはあいさつ代わりに軽いギャブ的な案件から。

枯れた草木、積もった落ち葉、そこは水をうったように静かで、澄んだ空気は都会の喧騒を忘れさせてくれる。

「家を建てるならやっぱり緑が多いところがいいな」

とある山中。

積もった落ち葉の絨毯を踏みしめ、  
山中だというのにワイシャツにネクタイという登山中だとは思えない格好の男が一人。

ライトブラウンの癖っ毛にクロブチメガネのその男は  
今の仕事を辞めて、どこを新天地とするかと、あれこれ思案しながら山道を進んでいた。

考え事をしながらだったので気づいていなかった。

いつの間にか”取り囲まれている”ことに。

「よう兄ちゃん、インテリな格好して登山ってのは流行ってんのかい？」

木の影から、刃物を片手に簑を纏った薄汚れた男が一人。

それを合図に周囲の木々の後ろから次々と武器を手にした男たちが現れた。

クロブチメガネの男はようやく気付いたとぐるりと周囲を見回した。

「…忘れてた」

クロブチメガネの男の低くボソボソとした声は非常に聞き取りづらかった。

「おい、なんつったか聞こえねえよ！ビビッて声でましえんってか」  
ギヤハハと下品な笑いが巻き起こった。

「…道案内を頼みたいのですが」

「この状況わかってねえな？てめえはこれから山賊に襲われるんだよ！」

クロブチメガネの男はワイシャツの袖を肘まで捲り、腰に手を当てた。

「…誰か一人でいいか」

「ボス！大変です！」

山道からかなり外れた場所にある洞穴。

いくつも松明が焚かれ奥行がある。

その一番奥で行われていた荒くれ共の酒盛りは中断された。

出入口に立つのはボコボコにされた仲間の一人と、背後でその腕をひねりあげるクロブチメガネの男。

「…てんめえ、何者だ！」

クロブチメガネの男はキョロキョロと辺りを見回し、奥に鎮座する大男を見た。

奥に鎮座する大男——山賊たちのボスはクロブチメガネの男のワイシャツを見、明らかに動揺し始めた。

ボス「な…なんたつてランプがここに！？そいつは一般人だぞ、暴力なんか振るって…」

クロブチメガネの男は両手のひらを肩の高さに上げた。

捻り上げられていた男はその場に倒れ込んだ。

クロブチメガネの男は平然と言った。

「正当防衛ですよ、先に襲ってきたのはそちらですが」

「…てんめえ」

クロブチメガネの男は山賊のボスの所作を一瞥し、溜め息をついた。

「…魔導師犯罪というくくりでもピンキリだな…」

こんなレベルの低い相手を仕事とするのは新人の時以来だ、クロブチメガネの男は妙な懐かしさを感じた。

山賊のボスは呪文を唱えだした。

「何言ってるかわかんねえんだよ！はつきり喋りやがれ！」

巨大な炎がクロブチメガネの男に襲いかかる。

「…悪いが、無駄にしている時間はない」

とある国のある山中。

長年近隣住民や旅人を悩ませていた山賊団が壊滅した。

怪我だらけで自警団に捕まった山賊団の一味は口を揃えて言った。

「クロブチメガネ怖い」

自警団が捕らえた山賊団のメンバーにボスの姿は無かった。

メンバーの一人が問うた。

「ボスは…？」

自警団の男は憧れと尊敬の念を籠めて答えた。

「セイラムにしょっ引かれたよ、ハートのエースによってね」

18・1・A―魔導師山賊事件―（後書き）

まえがきで少し書きましたが、このクロブチメガネの男は誰で一体何やってるの？という方は14・2話と14・3話をご覧ください。（おそらく期間開きすぎて覚えている人はいないだろう…）

ところでなんでウランドはワイシャツにネクタイなのかが気になる方は本家サイトの登場人物紹介（PCのみ）をご覧くださいただけだと思います。

さて、次週はA・第3話。なんだか2時間ドラマの終盤のような話です。

11/19更新予定です。

18・2・A―魔導師強盗殺人事件―（前書き）

A・第3話。

とある町のとある酒場に現れたウランドは…

そのバーはその夜も常連で賑わっていた。

ただ一つ、いつもと違ったのは

余所者が一人、カウンターにいたことだった。

看板娘がその余所者に酒を出した。

「どちらから？」

余所者はクロブチメガネを拭きながら独特の低くボソボソとした口調で答えた。

「…ヴァルハラ帝国からです」

「まあ、都会から」

「…いえ、帝国といっても山奥からでして」

看板娘はにっこりと笑った。

「奇遇ですね！うちの旦那も帝国出身らしいのですが山奥の出身らしく」

余所者はクロブチメガネをかけ、一瞬酒に手を伸ばしたが、その手を止めた。

「…お若いのに結婚されているのですか、

旦那さんは帝国のどのあたりのご出身なのですか？わかるかもしれない」

看板娘は皿を拭きながら申し訳なさそうに笑った。

「何回か聞いたけど他所の国の地名だからね、忘れちゃいました、お酒、口に合いませんでした？」

「旦那さんと話が合うかもしれないな、今日はいらっしやらないのですか」

「ええ、ちょっと…お酒、新しいのに替えましょうか」

看板娘はクロブチメガネの男の目の前の酒をカウンターに引っ付めた。

「…あらいけない、トニックがきれちゃった、奥から取ってきますね」

看板娘はドアノブに手をかけた。

「あなたは」

クロブチメガネの男が突然ハッキリとした口調となり、看板娘は思わず振り返った。

「…旦那さんを愛しておられるんですね」

看板娘の額を汗が伝った。

クロブチメガネの男のワイシャツに描かれている紋章――

看板娘は堰を切ったかのようにバンと店の奥のドアを開け、叫んだ。

「あんだあー！逃げてえー！！！！」

店の客たちは何事かとカウンターを注視した。

「無駄ですよ、すでに部下が取り囲んでいます」

看板娘はその場にへたり込んだ。

そのノブに手をかけたままの半開きのドアがゆっくりと開いた。

客の一人が思わず呟いた。

「……旦那……」

扉の奥から、背の高い、ひげ面の男が現れた。

その男は快活で愛想がよく、それでいてよく気のつく、町の人々に大変好かれていた人物だった。

男は剣を手にしていた。

「いつかこの日がくると思っていた」

クロブチメガネの男はピーナッツの皮剥きに没頭しているようだった。

「俺は今の生活がしてえ…！見逃しちゃあくれねえか…！今が幸せで仕方がねえんだよ…！」

クロブチメガネの男は腕を組み、窓の外を見た。

「残念ですが、こちらも仕事なので」

男はガン、と壁を叩いた。

「仕事仕事って、ああそうかよ、仕事が何より大事かよ！他人の大事なもん踏みにじって、それがあんたらトランプだ！俺は一時でも”お前らと同じだった”と思うとゾッとするよ…！」

クロブチメガネの男はピーナッツをポイポイと口に入れた。

「…トランプにいたのにトランプの仕事の意味をご存知ないようだ」

「なに…！？」

クロブチメガネの男はナフキンで折り紙を始めた。

「…たとえば、」

クロブチメガネの男は足を組んで折り紙に集中するように背を丸めた。

「とある女性は、旦那に先立たれ余命ももう幾ばくもない、ある雪の降りしきる夜、凍えながら道端で丸まっているホームレスがいました。

彼女は不憫に思ったのか、そのホームレスに」

男は胃の奥底から何かが上がってくるようだった。

「やめろ！」

クロブチメガネの男はかまわず話を続けた。

「ホームレスはあまりの空腹と寒さに、彼女が与えたはした金では満足せず」

男は自らの顔を覆った。

「…頼むからやめてくれ」

「彼女のカバンを取り上げようともみ合いになり、雪で足を滑らせて彼女は…頭を打った。」

男は項垂れた。

「そりゃあものすごく後悔した！死のうとも思った！…けど」

男は足元で自分を見上げる妻を見つめた。

「…彼女から支えてくれて、ようやく…」

「あなた一人が反省したところで、これはあなただけの話ではありません、

想像したことがありますか、ご自分のお母様が早朝道端で雪に積もった状態で…」

男は涙も鼻水も拭わず剣を抜いた。

「ご遺族の気持ちを考えたことは？」

「うわあああ」

男は剣を振りかざした。

「罪は、償わなければなりません」

クロブチメガネの男はひらりと剣をかわし、男の手を捻りあげた。

泣きじゃくる愛する妻や、大好きな町の仲間たちを背に、  
頂垂れた男はクロブチメガネの男に脇を抱えられ表へ出た。

「…なんだ、部下なんて店の周りにいやしねえじゃねえか」

クロブチメガネの男はいつもの低くボソボソとした口調で気に病む

様子もなく答えた。

「…ええ、ハツタリです、  
無闇に逃げられては、場合によっては”誰か”怪我するかもしれない  
ませんでしたからね」

男は俯いた。

あのまま逃げていたら

この男に取り押さえられるために拳を振るわれていたかもしれない  
し、

逃亡先で自分が、逃げるための金を奪ったり、人質をとったり、そ  
れこそ誰かを傷つけていたかもしれないかった。

…あの老婦人の時と同じように…

「…悪かったよ、あんたらの仕事をバカにして」

「…かまいません、所詮は仕事です」

店を出るときのこの男の妻の顔が頭から離れなかった。

自分も、このいつ死ぬかわからないような仕事に向かうとき、  
自分の妻は毎朝どのような気持ちで送り出してくれているのだろう  
か。

クロブチメガネの男は真っ暗な夜の空を仰ぎ見た。

その時ちょうど空から雪が舞いだした。

”あの時”と同じように雪が降る夜。

雪が肩に舞い降りた瞬間、項垂れたままの男の頬に再び涙が伝った。

18・2・A―魔導師強盗殺人事件―（後書き）

魔導師の事件のはずなのに魔導師的なものが一切ないという・・・  
トランプとして重要なのは「魔導師が犯した罪」なので  
ウランドとしては魔法を使われようが使われまいが関係ないので  
けどね。

次回はA・第4話。

細かい描写は控えてますが残酷なシーンが含まれますのでご注意ください。  
11/26更新予定です。

18・3・A―魔法法外使用事件―（前書き）

A・第4話。

残酷な描写が含まれますので苦手な方はご注意ください。

その女は”森の魔女”と呼ばれていた。

若く美しい彼女はどんな病もたちどころに治し、火や水も自在に操った。

それを求める者には高額な請求をするが、それでも彼女を求める者は後を絶たなかった。

ある日、森の奥の魔女の住まいに一人の男が訪ねてきた。

「あなたは何の用かしら」

魔女はいつものように尋ねた。

だが、その男はいつもの客とは違っていた。

「登録番号239、ベルティナ」

魔女の顔から微笑みが消え失せた。

男はキョロキョロと部屋の様子を見回しながら続けた。

「確か治癒魔法の魔導師のはずですが」

魔女の掌の上にはグツグツと煮えたぎるケトル。

「…治癒の”術”の一種だよ」

「治癒”魔法”で火の精霊は動きませんよ」

男の目にはしかと魔女の手元で活甕に踊り回る火の精霊の姿が見えていた。

魔女は男めがけてケトルを投げつけた。

男は器用に中身をこぼさないようケトルの取っ手をキャッチした。

「危ないですね」

魔女は部屋中の怪しげな道具を手当たり次第投げつけた。

男はひよいひよいと避けたり、たまに上手い具合にキャッチしては「これは未登録の魔導師専用道具」などとボソリと呟いた。

そうしてついに壁際に追い詰められ、魔女は叫んだ。

「マモン！マモン！」

『うるせえな、一回呼べばわかるって』

部屋中に子どものような高い声が響いた。

「…貴女は個別悪魔契約の魔導師協会登録を行っていませんか」

部屋の角の暗がりから目付きの悪い生気のない少年が現れた。

少年は八重歯を覗かせた。

『おじさん、トランプの人？』

「そうですよ」

『リーダークラスかな、今まで始末してきた魔導師より魔力あるね』

この案件、派遣したハートの小隊が、命からがら逃がされた新人以外全滅、緊急度の高い案件であった。

『おいベルティナ、こいつ、これまでのようにはいかないぞ、このままだとお縄だぜ』

「ど、どうしたら…」

『そうだな、お前の体と引き換えに契約レベルを上げ、』

「させません」

男は背中から三連の棍を取り出した。

「さ…三節棍…？」

カシャンと一瞬のうちに一本の棒に組み立てられたその三節棍の先端には

鉤爪のような鋭いものが取り付けられている。

『槍かな、……なんか見覚えがあるような』

男は先端の鉤爪のようなものにキラキラと光る液体を振りかけた。

少年は顔を覆った。

『臭いつ…顔が、顔が熱い！！』

「ユニコーンの血清!？」

間髪入れず

ガン!

鈍い液体音とともに少年の顔のど真ん中を壁ごと槍が貫いた。

男は少年の姿の悪魔を串刺したまま魔女を見た。

「…どこまで契約レベルをあげているのですか」

魔女には男の質問の意図がわからなかった。

男は軽く溜め息をついた。

「この悪魔をこのまま殺しても、貴女は死なない”程度”の契約かと聞いています」

「わ、わからない…」

男はコンコンと爪先で床にリズムを刻みながら自身の足下を見つめていた。

「悪魔契約の知識がない訳ではありませんよね、悪魔の強い力に目が眩んで、後先考えずに契約したところですか」

「さ、最初は！」

男は魔女を見た。

「…治療魔法で治せない不治の病の子どもを助けたかったのよ…！でも、そうしたら噂がどんどん広まって、次々に…」

男は壁を貫かせたままの槍の先端に顎を乗せた。

「…魔導師のくせに、魔法の限界をキチンと把握しないからですよ、”魔導師の万能感”ですね」

魔女は眉を吊り上げた。

「アンタのはただの理想論じゃないか！

現実には、藁にもすがる気持ちで治癒魔法を頼りに来る人が山ほどいるんだ！

私は！…見過ごすことはできない…！」

男は背中をボリボリと掻いた。

「見過ごすことは”できなかった”、です、貴女のそれこそが理想論ですよ、魔導師は神ではありません

患者の体の負担を考えず強力な治癒魔法を施すことは、本当に患者のことを考えていると言えますか？

なぜ悪魔との下級契約以上を禁止しているか、貴女は理解しなくてはいいません」

魔女は唇を嚙んだ。

「マモン！マモン！さっき言ってた契約をするよ！」

『毎度ありい』

ズズズ…と顔を貫かれたままの少年は自ら槍にそって男に近付いた。

ユニコーンの血清の光の粒が消え、少年の顔から黒い煙——瘴気が噴き出した。

男は槍の先端から顎を離し、鼻と口を覆った。

『どかしてもらおうか』

少年は槍を持つ男の手に手を伸ばした。

男は少年を冷たく見下ろした。

「消えてもらおうか」

ドン！

槍が輝きだし、同時に少年は音もなく光となって消え失せた。

「なっ…！マモン！マモン！」

男は槍を3つに分解して、背中のケースに戻した。

「なんだいそれ！」

「…アーティファクトです、

イクセスブレイク

さすがに”悪魔合体”でもされたらひとたまりもありませんからね」

魔女はヘナヘナと力なく座り込んだ。

「…まああとはセイラムにご自慢の理想論を語ってください、”アレ”は聞く耳など持ち合わせていませんがね」



### 18・3・A―魔法法外使用事件―（後書き）

ウランドのアーティファクトがチラツと登場しました。

三節棍？槍？実はどれもはずれです。A・で強敵がでたら、もしくは本編で。

さて、弱い敵ばかりの軽ジャブ2 4話が終わったところで次回の

A・は続きもの。

その名も「ハートのエース不倫事件」（笑）

12/10から更新予定です。

次週は本編19話。12/4更新予定です。

## 19・clush heart (前書き)

2010年最後の本編更新です。

ギルティンを追うリケとトウジロウは…

## 19・clush heart

ムー大陸 ジャラル国 中北部 山合の宿場町

朝靄かかる早朝、

路地裏の地階より足取り軽く階段を昇る男。

階段を昇り終え、早朝の清々しい空気から身を隠すようにくたびれたコートを着直したその時だった。

「おい」

背後から声をかけられ振り向くと、数段下の階段に黒髪坊主の大男と赤毛の女。

「なんだい、あんたらも”欲しい”ってか、好きだねえ」

その男は小太りで、ボロボロのハンチング帽を目深に被り、生気の無い笑みをたたえていた。

赤毛の女も微笑み返した。

赤毛「まずモノの質を確認したいんだけど、」

ハンチング帽の男はクツクツと笑った。

ハンチング帽「安心しな、コイツは直に流行るから」

赤毛「そう、それじゃあ取引しましょう、お金はあるの。だからありったけを頂戴。」

ハンチング帽の男は手を叩いて大笑いした。

ハンチング帽「クレイジーな奴らだなあ！気に入った！」

赤毛「村の外れに使われていない掘っ建て小屋を見つけたの、そこでいいかしら」  
ハンチング帽「構わねえ、ただもう日が昇っちまってるから、運ぶのが目立つ、夜でいいかい」  
赤毛「では23時に」

—— clush heart (相容れぬ意志) ——

ハンターズギルド am10:00

赤毛の女——リケは目の前の黒髪坊主の大男トウジロウに呆れていた。

リケ「朝まで呑んでたのに……」

トウジロウ「喉渴いてん」

トウジロウは三杯目のジョッキを飲み干したところであつた。

リケ「……夜まで寝ます」

トウジロウ「添い寝したるか？」

リケ「結構です！」

リケが去った後、さらに数杯酒を呑み、これから何をしようかと考えていたところだつた。

ハンターズのドアが乱暴に開いた。

何やら訳のわからない言葉を発しながら男が一人、凶器を振り回しながら室内で暴れたした。

「わぁ！なんだコイツ！」

「取り押さえる」

男は冒険者たちにあつという間に取り押さえられた。

トウジロウ（あいつは確か…）

昨晚裏ギルドで自分たちより先に”ギルティン”に接触していた男。トウジロウはタバコをふかした。

出入口付近では、男が入ってきた瞬間に不意を突かれて襲われた冒険者が横たわっていた。

そのすぐ横で、仲間とおぼしき冒険者が泣き崩れていた。

他の冒険者たちが片付けに近づいた。

「まだ生きてる！」

「止血をすれば間に合うかもしれない！」

「この出血量じゃあ無理だろ」

「頸動脈をやられてる…」

「のけ」

冒険者たちが後ろを振り向くと黒髪坊主の大男。

一同（恐っ！！）

トウジロウは横たわる冒険者の首もとに手をかざし、呪文を唱えた。すると傷口に霜が降り、出血が止まった。

トウジロウ「応急処置や、助かるかはここの医者次第やな」

「ま…魔導師だったのか」

トウジロウ「さっさと行け」

冒険者たちは横たわる男を抱えてギルドを出た。

「騒ぎはここかぁー！！！」

再びドアが乱暴に開き、中年の制服を着た男が現れた。制服の男は出入口のすぐ横にいたトウジロウと目があった。

トウジロウ「あゝ あっ！？」

トウジロウは反射的に睨み返した。

「見るからに凶悪そうな男！！騒ぎの原因はお前かぁ」

トウジロウ「なんやとコラァ！！！」

掴み合い寸前の二人の間に割って入ったのはガタイのいい口髭の男――このハンターズの店長であった。

店長「保安官殿、この方は被害者の応急処置をただけだ、犯人はあっち」

店長の指し示した先には数人に取り押さえられている男。

保安官と呼ばれた男は取り押さえられた男とトウジロウを交互に見やった。

保安官「はっはっはっはっ」

保安官はパンパンとトウジロウの肩を叩きながら取り押さえられている男のほうへ向かった。

その通り過ぎ様にトウジロウに向け一言。

保安官「お詫びしてやるから、ちよつとそこで待つとれ」

保安官の現行犯の引き渡し作業を尻目にトウジロウは店を出た。

トウジロウ（むっさいオッサンやったな）

トウジロウは道端に唾を吐いた。

しばらく町を歩き、リケ同様夜まで寝るかとも思ったが、どうにもその気になれない。

仕方なく道端で座り込んで町行く女たちの丈の短い”良い景色”を眺め始めた。

そうしてしばらくたつた頃だった。

ふと目の前を”良い景色”から視界が遮られ、邪魔だと上を見上げると、そこには先ほどの保安官。

トウジロウ「ごつつ邪魔やねんけど」

保安官はニカツと笑うとトウジロウに焼きトウモロコシを差し出した。

保安官「ここのは美味いぞ！」

トウジロウ（何やねん！）

「…そらおおきに」

保安官はトウジロウの隣に腰を下ろした。

ガシガシとトウモロコシを食べる互いの音が近い。

トウジロウ「これが詫びなら充分やで」

保安官「はっはっはっはっ！つれない奴だな、大人しく味わえ！」

トウジロウ「食った、美味かったわ、以上」

ペロンと摘ままれた実のないトウモロコシを見、保安官は目を丸くした。

保安官「お前、トウモロコシ食べるの巧いな！」

トウジロウ「ハア？」

保安官は笑いながら自分のトウモロコシを見せた。

トウジロウ「勿体無！アホちゃう！？めっちゃ食つとこ残ってんで！」

保安官「なにおう！？お前の食べ方がキレイさっぱりすぎなんだ！」

デカイなりして几帳面か！」

トウジロウ「やかましいわ！」

はたと気がつくと、周囲からクスクスと笑われていた。

「仲良いねえ」

「保安官さんとやり合うなんて元気のいいやつだなあ」

トウジロウは落ち着かなかった。

トウジロウ「…なんやねん」

保安官「はっはっはっはっは」

気の良さそうな老夫婦が近付いた。

「この町に越してきた方？」

保安官「いや、ハンターズギルドで会った。旅人さんだ」

「残念だなあ！あんたみたいのがこいつの息子だったら、」

「あんた！」

その場に妙な空気が流れた。

「すまん」

保安官「はっはっはっは…気にするな！」

老夫婦はそそくさと去った。

トウジロウ「…」

トウジロウは煙草に火をつけた。

保安官「…昔、息子がいてな」

保安官は遠くを見つめた。

トウジロウ「誰も聞いてへんけど」

保安官はクワツとトウジロウを見た。

保安官「何！話せという空気ではなかったか！」

トウジロウ「俺ん中ではとっくに終わてたわ」

保安官「まあせっかくだから付き合え」

トウジロウ「めんどくさ！」

保安官「なんだとー！」

トウジロウはフーと煙をはいた。

トウジロウ「で、息子がなんやて？」

保安官「面倒くさいんじゃないのか」

トウジロウはニツと笑った。

トウジロウ「とか言うて実は夜までヒマやねん」

6年ほど前の話であつた。

その時確かに息子は”いた”。

小さい頃から「お父さんのような保安官になりたい」と言っていた自慢の息子であつた。

ある時期から裏ギルドの連中と付き合いだし、しばらくすると人が変わったように性格が激変した。

平気で親から金を奪い取り、思う通りにならないと簡単に暴力を振るうようになった。

自分の知っていた息子はいなくなった。

ほどなくして、息子は町から姿を消した。

トウジロウはあくびした。

トウジロウ「ま、よくある話やな」

保安官「風の噂だが、パンゲア大陸に渡つたらしくてな」

保安官はただ町行く人々の流れを見つめた。

保安官「イワンと言う。もし旅先で出会ったら、文の一つでもよこ

せと言っていたと伝えてくれ」

トウジロウは煙草を地面に押し付けた。

トウジロウ「残念やな、旅はこの国で終わりやねん」

保安官「そうか」

トウジロウは立ち上がり、尻の砂を払った。

トウジロウ「退屈な話聞いてたら眠なった、宿戻るわ」

保安官も立ち上がるとポンとトウジロウの肩を叩き、踵を返した。

保安官「達者でな」

トウジロウはしばらく保安官の背中を見つめていた。

トウジロウ（「父親」な……いろんなのがおるもんや）

トウジロウは宿へ向かった。

リケ「そろそろね」

リケは時計を確認しながら呟いた。

隣で頭を抱えながらしゃがみこむトウジロウからは返事の一つもない。

リケは溜め息をついた。

リケ「朝っぱらからジョッキビールなんて何杯も飲むからですよ」

トウジロウ「ちょ、黙てて」

町外れの、今は使われていない掘っ建て小屋。

元の持ち主が倉庫に使っていたのか、耕具や箱が積み上げられてい

た。

P M 23:00

辺りは月明かりのみ、眼下に町を見下ろす小さな丘の上、  
回りは疎らな木々に囲まれており、注意して見なければ人がうつろつ  
いていることには気づかない。

「待たせたな」

掘つ建て小屋のドアが開き、  
ハンチング帽を目深にくたびれたコートを着込んだ小太りの男。

ハンチング帽の男はニヤリと笑い、外に親指を向けた。  
ハンチング「この小せえ小屋に入る量じゃなくてな」

外には荷車に積み上げられた大量の木箱。

リケ「中身を確認しても？」

リケは木箱の一つの蓋を開けた。  
中には大量の小瓶。

小瓶には小さなラムネ菓子が詰まっていた。

次にリケはハンチング帽の男の胸元を見た。  
魔導師バッチはない。コートの下か？

リケ（…）

「確かに」

ハンチング帽子の男はニヤリと笑うと月明かりを背に、荷車に積ま

れた木箱の上にどかりと腰かけた。

ハンチング「それなら次にお値段の交渉だが」

トウジロウ「なあ」

小屋の外壁を背もたれにしゃがみこみ、様子を伺っていたトウジロウは、煙草に火をつけ煙を吐いた。

トウジロウ「噂で聞いたで、自分ほんまに魔導師なん？」

ハンチング「おっ？」

トウジロウ「最近”ホンマもんのラムネ菓子”掴まされてボクら人間不審やねん」

ハンチング帽の男は鼻で笑った。

ハンチング「なんだ、パチモンだと疑ってるってか？」

いいだろう、とハンチング帽の男はコートを脱いだ。

そのコートの下からはキラリと光る3つの魔導師バッチ。

ハンチング「こいつが”品質保証”だ」

トウジロウ「あゝん？みつつ？」

ハンチング「位が高い魔導師はバッチが増えるのさ」

トウジロウは膝の上に頬杖をつきニヤニヤと笑った。

トウジロウ「ほゝ」

リケ「それは知らなかったね」

言いながらモゾモゾと胸元で手を動かす赤毛の女の、手が胸元から離れた瞬間、

ハンチング帽子の男の顔から笑みが消えた。

リケ「では私たちはバッチひとつなので大した魔導師じゃありませんね」

キラキラと金色に輝く竜と剣の紋章。

リケはニコリと微笑んだ。

トウジロウ「残念やな、そのコートの下見せびらかさへんやつたら、俺ら捕まえる権利無かつてんけど」

トランプは一般人を捕らえる権利がない

リケ「ギルティンさん、魔導師詐称とバッチ不正使用の現行犯です」

ハンチング帽の男はハンと鼻で笑った。

ハンチング「トランプか」

その口の端はつり上がった。

ハンチング「俺を捕まえて、その後はどうするんだ？」

リケ「その後？」

ハンチング帽の男の質問の意図がわかりかねた。

リケの様子を早々に見かね、ハンチング帽の男は木箱の上に立ち、両腕を広げた。

ハンチング「後は後さ。俺を捕まえても”免罪符”は広まり続ける」

リケ「そうね、止めなければ。ただそれは我々の仕事ではないわ」

ハンチング帽子の男は声をあげて笑った。

ハンチング「はぁーっはっは！やっぱりな！やっぱりそうだ！」

リケ「何！？」

ハンチング帽の男は勝ち誇ったようにリケを見下ろした。  
ハンチング「魔導師は他人の命なんざこれっぽっちも何とも思っ  
てねえ！」

リケ「…！！」

トウジロウはくわえたタバコから今にも落ちそうな灰に気にも止め  
ず立ち上がった。

トウジロウ「リケ」

リケ「…ええ」

リケはハンチング帽の男から視線を外さず後ずさった。

ハンチング帽の男の身体がボコボコと波打った。

ハンチング「マドウシミナゴロス」

ハンチング帽の男の紅く光る瞳とリケとの目があった。

ドガアン！

ヒラリと宙を舞うリケ。

リケが立っていた場所にめり込むハンチング帽の男の腕。

リケが着地した瞬間。

「魔導師なんざ亀だな」

リケ「！？」

背後にハンチング帽の男。

振り下ろされた腕。

ガッ…！！

ハンチング帽の男の手には黒い鞘。

鞘の先を辿るとゴツゴツとした大きな手。

ハンチング「こんな細エ剣で受け止めるたあな、特別製かい？」  
トウジロウ「特別なんは俺や」

ハンチング帽の男はそのまま鞘を握り締め、トウジロウから奪おうとした。

だが、どうしたことが、ビクともしない。  
力を入れた拍子に、カチリ、と僅かに鞘が動き、白刃が覗いた。

トウジロウ「抜いたら終わるで」

背筋から脳天にかけて痺れるような寒気。

ハンチング帽の男は息をするのも忘れ、掘っ建て小屋の屋根へ飛び退いた。

リケはハンチング帽の男を見上げた。

リケ「…ひとつ飛びで小屋の上…地面を抉る怪力…トウジロウさん！」

リケは隣のトウジロウを見上げた。

トウジロウは新しいタバコに火をつけ、ハンチング帽の男に目をやるとニヤリと笑った。

リケは再びハンチング帽の男を見上げた。  
リケ「あなた、”その人”の”身体を乗っ取って”、何するつもり  
！！」

ハンチング帽の男は見下したように笑った。

その目は紅く光続けている。

ハンチング「俺の身体を乗っ取る？何言ってるんだ、てめえは」

リケ「…質問を変えるわ、あなた、悪魔ね」

ハンチング帽の男は腹を抱えて笑った。

ハンチング「悪魔だと？俺があ！？ハハハ！バカかてめえ！」

トウジロウ「リケは、ん、どないしまひよ。ボくら完つ全アホ扱い  
でっせ」

リケ「きちんと状況を把握しないと、手遅れになってからでは遅い  
わ」

トウジロウ「状況把握？必要あれへんがな」

トウジロウは剣を肩に担いだ。

次の瞬間、

次の言葉を伺おうとリケが見上げたその場所にトウジロウの姿は無  
かった。

トウジロウ「とつとと取っ捕まえええねん！」

ハンチング「！！」

トウジロウはハンチング帽の男目掛け屋根に飛び乗ると鞘に納まっ  
たまの剣を袈裟斬りに振り下ろした。

ハンチング帽の男は足が絡まり後ろへ転がった。

ヴォン、という音を立てて、鞘は宙を切った。

仰向けのハンチング帽の男に鞆の先端が振り下ろされる。

リケ「ワ・アール風縛結界」

ハンチング帽の男の周囲に激しい風が繭状に渦巻き、ハンチング帽の男はふわりと浮いた。

リケ「そこまですよ、トウジロウさん」

トウジロウ「…」

トウジロウはハンチング帽の男から視線を外さず数歩下がった。

ハンチング帽の男を包むように渦巻く風にはキラキラと光の粒が混じっていた。

リケ「大丈夫ですよ、”ユニコーンの血清”を混ぜていますから」

トウジロウ「…まだや」

リケ「え…」

次の瞬間、バキという音とともにトウジロウが姿を消した。  
併せてズシューという痛そうな音。

トウジロウ「痛ってえ！」

トウジロウの重みに耐え兼ね、掘っ建て小屋の屋根が抜けたらしい。  
リケ「トウジロウさん」

風が止んだ。

リケ「!!」

ハンチング帽の男の姿が無い。

ガキーン!!

リケは腕だけ背後に回し、持っていた短剣でハンチング帽の男の手を受け止めた。

リケ「あなた背後狙いばかりね、懸命だけど、もう通じない」

ハンチング「なんだ、”そいつ”も特別製かい」

ギャン、という固いものが激しく擦れる音を立て、リケとハンチング帽の男は互いに距離を取った。

リケ「!!」

目の前に映るハンチング帽の男の姿は最早人間のものではなかった。

口は大きくせりだし、耳の向こうまで裂け、

ギョロリと飛び出した巨大な目は左右別々にギョロギョロと動き回り、

体表はヌルヌルとした粘膜に覆われていた。

ハンチング「魔導師は殺す!!」

リケ「イクセスブレイク悪魔合体!？」

リケが息を飲む間もなく、ギョロリとした目玉がリケの顔の前に詰めてきた。

リケ（はや）

ハンチング「いくら道具が特別製でも、持ち主が生身の人間なら意味ねえな」

鋭い爪がリケを襲った。

ガキッ

ギチギチと爪と短剣が拮抗する。

ハンチング帽の男は笑った。

ハンチング「人間じゃねえか、魔導師だな」

リケ「魔導師も人間よ」

ハンチング「ふざけんな！」

ハンチング帽の男が声を張り上げたのと同時に魔力の衝撃波がリケを襲った。

リケの身体は大きく吹き飛んだが、クルリと体制を整え、ズザアと土煙を巻き上げながら着地した。

リケ「う……」

（気持ち悪い……こりゃあアテられたな）

ハンチング「ハハハ！どうした、フラフラじゃねえか！」

リケは短剣を握り直した。

すると、短剣から炎が噴き出し、その炎は短剣の刃を伝うと、更にその先へ、短剣は炎の大剣と化した。

ハンチング「なんだあ？」

「アーティファクト」ラハト・ケレブ……！！

リケ「ふー」  
「……」

リケはムクリと起き上がった。

イクセスブレイク

リケ「悪魔合体を解除して」

リケは炎の剣をハンチング帽の男に向けた。

ハンチング「ハン、そんな」松明「脅しになるかよ」

だがどうしたとか、身体が動かない。

ハンチング「おい悪魔！何びびってんだよ！」

リケ（契約悪魔がアーティファクトと戦うのを拒絶してるんだ……どうかこのまま、余計な血を流さないで……！！）

悪魔の生の魔力を正面から浴び、リケの意識は朦朧としていた。

だが、できうることなら、このアーティファクトを使いたくない。  
穩便に済ませたい。

ハンチング「うるせえええええ！！魔導師は殺すっつったら殺すんだよ！！」

地面に足がめり込むほどの強烈な踏み込み、音速で詰められた間合

ガキィン！！

鋭い爪が炎の剣に埋もれていく、その端から黒い煙が噴き出した。

——瘴気だった。

リケは袖で口と鼻を覆った。

リケ「なぜそこまで魔導師を怨むの!!」

ハンティング「オ前ヲハおレの妹ヲ殺シタァ！！」

リケ（魔導師の…殺し！？）

「どこで！？いつの事件！？」

ハンティング「事件」なんて言葉デ片付けンジャねえエ！！」

競り負ける、そう感じたリケは後ろに飛んで距離を置いた。

リケ「ごめんなさい、無神経な発言で悪かったわ。

私はトランプで諜報をしているの、妹さんのこと、何か知っているかもしれない」

ハンティング「コロす…殺ス」

ハンティング帽の男は目を白向き、鼻水と涎を垂らしたまま、フラフラとしている。

そのままなんの前触れもなくリケに飛びかかった。

リケ「話を聞いて！！」

ドガッ

リケの目前まで詰めてきていたハンティング帽の男は大きく横の雑木林に吹き飛んだ。

バキバキと草木がなぎ倒される音が続いた。

トウジロウ「無駄やろ」

リケの目の前、ハンチング帽の男が飛びかかりかけていた位置にはトウジロウの足。

リケ「トウジロウさん、待って、まだ、」

トウジロウ「そう言うやる思て黙って見ててん、それでいて無駄や判断した、あきらめろ」

リケ「魔導師事件の被害者かもしれないのよ…!!」

リケはフラリとバランスを崩した。

リケ「…瘴気を少し吸ったみたい」

トウジロウ「ま、悪魔は専門外やしなあ、こら割増給もらわなきついで」

「ほな、リケはんは戦闘不能っちゅーことで」とトウジロウはリケからアーティファクトを取り上げた。

リケ「ちよっ…自分のは!？」

トウジロウ「抜く価値ない」

ラハト・ケレブの炎はリケがふらついた瞬間失われていた。

リケ「アーティファクトは主人以外が使うのは危険…」

ボゴウウウ!!

勢いよくラハト・ケレブに再び炎が灯った。

リケ「う…うそでしょ…従えた…!」

リケはゴクリと唾を飲み込んだ。

——これが……”千年に一度の天才”市松桃次郎……

トウジロウは雑木林を見つめ、ニヤリと笑った。

トウジロウ「俺のターンや」

ジャラル国中部 山中。

緑が鬱蒼と生い茂り、踏みしめる土は軟らかく、

空気を吸い込めばそれら土と緑のむせかえるような香りが鼻孔に広がる。

木々の隙間から所々光が差し、ゆらゆらゆれる斑模様は見ていて飽きない、よしのはそう思った。

だが同じく地面を見ながら歩いていたエオルは別のものを見ていた。

エオル「…鹿の足跡だね、四頭」

並んで歩くエオルとよしのの随分先を、ポケットに手をつ突っ込み口笛を歩きながら歩いていたフィードも下を見た。

フィード「のわっ！鹿のウンコ踏んだ〜！」

奴らめ、と逆恨むフィードを横目にエオルは提案した。

エオル「ルート外さない？」

それは、自分達の命を狙っている賞金稼ぎ”狂犬”ハイジとの鉢合わせを懸念してのことであつた。

フィードは鼻で笑つた。

フィード「なあんで俺様らが道を譲つてやんなきゃなんねーんだよ」

エオル「妙な意地張んないでよ」

エオルはチラリとよしのを見た。

それに気がつきフィードもよしのを見た。

フィード「それもそうだな」

先日のフィードとハイジの一戦で、

ケンカの仲裁に割つて入つたよしのは危うくハイジに斬られかけたのだ、

二人の魔導師にとってこれ程恐ろしいことは無かつた。

よしの「????」

クリスはよしのの腕の中で欠伸した。

エオルは地図を広げた。

エオル「ちよつと行つたら道が3つに分かれてるな…」

フィード「じゃあそこで道決めようぜ」

しばらく進むと、地図通り道が3つに分かれていた。

右の道は木々がより深くなり、薄暗い道。

左の道は視界が開け、岩場の道。

中央の道は

フィード「論外だな」

左右の道が上向いているのに対し、その道は下っていた。

エオル「鹿の足跡はと…」

左の道を選んだようだった。

エオル「…そりやそうっすね」

一行は必然的に右の道を選んだ。

怪しい虫や動物の鳴き声が響き渡り、木々は正にトンネル、先ほども差していた陽射しは無くなり、昼間だというのにその道は黄昏のように暗かった。

フィード「本当に山かよ！ジャングルじゃねーの！？」

エオル「多分山の中腹をずっと行くルートなんだろうね、ジメジメしてるから、滑って転ばないようにね！」

よしの「きゃっ！」

フィードはヤレヤレと振り返った。

フィード「だーから言わんこっちゃねえ」

エオルも慌てて隣を見た。

エオル「ごめん、もっと早く言えば…」

二人の視線の先によしのの姿はなかった。

フィード「…」

エオル「…」

フィード& amp; エオル「またはくれたーーーーー」

フィード「ちょっ！あのバカどこだよ！！」

エオル「よしのさんっ！！」

――…フィード様ーエオル様ー

どこからか微かに聞こえるよしの声。

フィード「…」

エオル「え…ここ！？よ、よしのさん！！？」

――…はい

二人の魔導師が覗き込むのは大きな木の根元…の子ども一人分くらいの穴。エオルは穴の中に語りかけた。

エオル「怪我はーっ！？」

――…大丈夫ですー

エオル「登ってこれそうー？」

…

…

…ズルツ、ドテツ

――…申し訳ありませんっ土が滑ってしまっって無理ですー

エオルはフィードを見た。

エオル「…俺確実にこの穴通れないんだけど（↑身長180センチでガタイがいい）、

フィードなら通れるんじゃない？よしのさん抱えて登って

きてよ」

フィード「しょーがねーなア」(↑身長160センチで小柄)

フィードは「よっ」と穴に足を入れ、ズルズルと身体を入れていったが、

フィード「…ダメだ、つかかって入んねえ」

エオルは慌てた。

エオル「何こんなときに肩幅見栄張ってんのっ!!」

背丈よしのさんとそうかわらないんだから、よしのさんが通れて君が通れないわけないでしょっ!」

エオルはフィードの頭をグイグイ押し込んだ。

フィード「痛えよバカヤローツ、通れねえーもんは通れねえんだよっ!!」

エオル「…無駄に体鍛えてるから…」

フィード「エオルてめー後でブツ殺す」

フィードはよいしょと穴から這い上がった。

エオル「困ったね、君の魔法で穴広げるのは?」

フィード「よしのを生き埋めにする自信がある」

エオル「そんな自信いらない」

——フィード様、エオル様、道があるので進んでみます」

エオル「道があるの!?!」

エオルは地図を広げた。

フィード「もしかしてさっきの”真ん中”の道に落ちたってことか?」

エオル「かもね、よしのさーん、その道ってどんな道?」

——下っています」

エオル「戻ろう！」

フィード「はー…めんどくせえ」

――間――

エオル「…」

フィード「おいおい…」

来た道を戻り3つの道のうちの真ん中の道を進んだ二人の魔導師はしばらく進んでその歩みを止めた。

道が途中から無い。すぐとなりは切り立った崖。

山道は山崩れで流されたようだった。

おまけに霧が濃く、向こう岸が見えないため、飛び越えようにもあまりに危険だった。

霧の向こうからよしのの声が聞こえた。

――先に進んでみますー！山を越えるのが目的ですし、進めば合流できるのではないでしょうかー！

エオルは再び地図を広げた。

確かに、自分たちが選んだ道は、よしのが落ちた道と運良く繋がっているようだった。

エオル「でも…」

フィードは両手を口の横に当てた。

フィード「よしっ、んーなら進んだ先で道がぶつかるから、そこで合流だっ！クリス！いんだろっ！？」

――…よしのちゃん、ようやく二人つきりだね

フィード「…よしの、手前の崖からソイツを落つことせ」

——任せろガキどもっ！よしのちゃんの身の安全は俺が保証するっ

エオル「いや、まったく説得力ないんだけど」

フィード「…仕方ねえ、こうなりや合流地点まで急ぐぞ！」

深い霧、暫く進むと左側に広がっていた崖は無くなり、  
右手は湿った土の壁、左手は岩の壁に挟まれた一本道になった。

よしの「…くしゅん」

よしのは鼻をすすった。

クリス「あ！寒いもんね」

クリスはよしのの腕の中から肩に登り、よしのの首に巻き付いた。

クリス「暖めてあげる？」

よしの「ありがとう、クリスちゃん」

クリス「…それと、ちよつと先に人間の気配がするね」

よしの「反対側からいらした方でしょうか！道が無くなっていることをお伝えしないといっ」

クリス「よしのちゃん優しい？」

少し進むと、元居た道同様深い森が広がっていた。

よしのは辺りをキョロキョロと見回した。

「おい」

遠くで甲高い声。

どこかで聞き覚えがあるような…よしのは声の方へ急いだ。

岩の壁を見上げながら少年はつぶやいた。

「弱ったな…どうしょつか」

背後からガサガサと繁みを揺さぶる音。

「うわっモンスター!?!」

繁みをかき分け顔を出したよしのは目の前の人間を見て固まった。

「あつ!この間のお姉ちゃん!?!」

先日廃村で出くわした巡礼の少年と、その隣に立つ黒衣の仮面の男。

よしの(あの怖いかたもいらっしやいます…)

よしのは慌てた。

ハニア「他のお兄ちゃんたちは?」

――間――

ハニア「えーっ?俺たちと一緒にじゃん」

よしの「ハニア様も落ちてこられたのですか」

ハニアは照れ臭そうに笑った。

ハニア「よしてよ”様”なんて」

よしのはハニアの背後の岩の壁を見上げた。

霧が濃いせいか、山道は見えなかったが、かなりの高さがあることは窺えた。

よしの「あの…お怪我は」

ハニアはハイジを見上げた。

ハニア「ハイジが抱えて着地してくれたから」

岩場の道は足場が悪く、鹿から降りて進んでいたが、足を滑らせ崖から落下したハニアを追ってハイジも飛び降り、ハニアを抱えて着地した、  
というのが事の次第であつた。

よしのはそれこそ崖から飛び降りる気持ちでハイジを見た。

よしの「ハ…ハイジさん…えと、その…お、お怪我は」

クリス「よしのちゃんビビリすぎ」

ハイジはよしのと目を合わせると、静かに微笑んで首を振った。

ハニア「でも困ったな…どうやって上まで登ろう」

濃霧のため、岩は滑りやすくなっており、登るのは非常に危険であることがよしのでも見てとれた。

ハイジはハニアを背負い、岩の壁をひいひいと登っていった。

よしのは先ほど穴をよじ登ろうとして滑り落ちた自分を思い出した。  
よしの「待ってください」

ハイジは片腕でブラブラと岩にぶら下がりながらよしを見下ろした。

よしの「滑って落ちたら危ないです」

ハイジはチラリと背中にしがみつくハニアを見、岩から手を離して着地した。

ハイジはよしのを見つめた。

よしの「えーっと…」

クリス（蛇に睨まれたカエル…）

「どれ、ちよっと地の精霊に聞いてやるう」

クリスはよしのの首から飛び降り地面に座り込んだ。

ハニア「タヌキって精霊とお話できるんだ」

クリス「タヌキじゃねーつつってんだろがクソガキ」

ハニア「わあ！またしゃべったあ！」

暫くの沈黙の後、クリスはよしのを見上げた。

クリス「ここから先、岩場の道はこの道と合流はしないけど霧が晴れた辺りで、岩場の道との高さが縮まる」

クリスはハイジを汚物を見るような目で見上げた。

クリス「まっ、そこからせいぜいナメクジみたいに這い上がるんだな」

ハニアはクリスをポカポカと叩いた。

ハニア「なんだよこのタヌキめっ」

クリス「いてててっ！おまっ、俺を誰だと思っただ！」

ハイジはクリスの前に両膝をつき、膝の上で拳を握るとペコリと頭を下げた。

ハニア「…もーっ！素直すぎっ！」

よしの（す…すなお…！？）

ハイジは歩きだした。

ハニアも後を追って進み出した。

当然よしのも、

クリス「なんであんな奴らに着いてくのっ…！」

よしの「方向が同じですし…」

三人と一匹は山道を進み続けた。

やがて霧が晴れぬまま夜となり、三人と一匹は火を囲んだ。

ハニア「はゝゝお腹空いた…」

ポツリとハニアが呟いた。

よしの「…あわわ、ごめんなさい、何か持っていれば…」

ハイジはおもむろに長ドスを手にし、繁みの奥へと消えていった。

ハニアは慌ててよしのにしがみついた。

ハニア「モンスターでもいたのかな…」

辺りは静まりかえった。

――間――

ハニア「…戻ってこないし…」

よしの「…ハニアさんは…」

ハニアはよしのを見た。

よしの「…ハイジさんと仲がよろしいんですね」

ハニアは笑った。

ハニア「無口だけどさ、優しいし、俺たち家族を守ってくれるし、旅の知識豊富だから頼りになるし、

それにああ見えて結構おつちよこちよいだから面白いんだ

よ?」

よしの「そ…そうなのですか…」

よしのは俯いた。

ハニアは頬杖をついた。

ハニア「…怖いんだ？」

よしのはギクリとした。

あれだけ慕っているこの少年に対し、失礼だと感じたためだ。

ハニアは落ちていた木の枝で地面に落書きを始めた。

ハニア「そりゃあね、…犯罪者に対してはちよつと怖いかも…こないだの、よしの姉ちゃんの仲間に対してとか」

よしのは何度も頷いた。

ハニア「ま、でもそれ以外は普通だよ？」

よしの「…それが理解できなくて…」

ハニアはキョトンとよしのを見た。

ハニア「理解？ハイジを？」

よしの「はい…」

ハニアは落書きを続けた。

ハニア「ま、相容れないってことはあるからね、仕方ないと思うよ」  
よしの「…」 相容れない”…？」

そんなことあるのだろうか、

頑張れば、誰とだって仲良くできるものではないだろうか。

よしのの不満そうな顔にハニアは再び笑った。

ハニア「実はこれ父さんの受け売り。よしの姉ちゃん、俺と考え方似てるね」

…ガサッ

繁みが揺れる音。

ハニアは飛び上がった。

繁みをかき分け現れたのはハイジ。

ハニアは突っ伏した。

ハニア「脅かさないでよ……」

ハイジはドサドサと何かを火の中に投げ入れた。

兎ほどの大きさのモンスターだった。

ハニアは腹が減ったと呟いたのを思い出した。

ハニア「ありがとうハイジ！」

兎は四頭あった。

よしの「……」

ハニア「たぶんこれ、よしの姉ちゃんとタヌキの分だよ」

クリス「タヌキじゃねえつつってんだろ」

よしのは火加減をみていたハイジを見た。

よしの「あ……ありがとうございます」

ハイジは少し吃驚したようによしを見ると、ニコリと微笑んで会釈した。

よしのはハイジの横顔をじっと見つめた。

よしの（……私決めました。”相容れないなんてことはない”、そのことを証明してみせますわ！）

ハニア「……なんか、よしの姉ちゃんの背中に炎が見える……」

——翌朝、三人と一匹は黙々と道を進んでいた。

よしのは前を歩くハイジの隣に立った。

よしの「ハイジさんはおいくつですの」

ハイジはチラリとよしのを見た。

よしの（うつ…）

そうして視線を今度は霧しか見えない空に向け、それから再びよしのを見た。

ハイジ「…」

よしの「…はっ！もしかして伺ってはいけませんでした!？」

ハイジは首を横に振った。

よしの「…?」

ハイジは気恥ずかしそうに笑った。

よしの「…もしかして、お分かりにならない…とか？」  
言ってしまうてよしのはギクリとした。

よしの「ごごごめんなさい、そんなこと、失礼にもほど…」

ハイジはコクリと頷いた。

よしのは再び視線を前に戻した仮面の男をキョトンと見上げた。

ハニア「わかんないっていうか、数えてないんじゃないの？」

変なところ几帳面で変なところズボラなんだよ、ハイジって

よしのは思わず笑った。

ハニア「あはは、ハイジ笑われてやんの」

よしの「ちちち違います」

それからいくつか、同じような問答を繰り返し、よしのは思った。  
よしの（…全部”知らない”か”忘れた”です…）

そうして自分の前方でハイジにじゃれつくハニアを見た。

よしの（ハニアさんは…ハイジさんの言いたいことをよく理解しておいでです、

だけど、伝えたいことがわかるのであって、ハイジさんの人となりをご存知ではない…

何故ならハイジさんはご自分のことを見せないから…）

よしのは俯いた。

クリス「それはね、よしのちゃん」

よしのは自分の腕の中で丸まるクリスを見た。

クリス「あの男は仕事だと割りきっているからさ、

ただ単に愛想も、親切も、全部仕事以前の当たり前のこと。それ以上距離を縮める必要が無いと考えているのさ。

まあ、今の会話の回答は全部本当みたいだけど」

よしのは再び俯いた。

たしかにいくら会話を交わしても近付いた気がしなかった。

よしの「…悲しいです」

クリス「あのクソガキが仲良さそうに”見える”のは単にクソガキが人懐っこいだけだよ」

クリスはニヤリと笑った。

クリス「”常軌を逸したヤツ”ってのは、”普通の人間”には理解できないもんさ。

理解できないから怖い、よしのちゃんのはそれ、どうってことないよ」

よしの「…」

クリス「フィードのバカも言ってたでしょ？あいつはああいうやつ

なんだ、それ以上でも以下でもない」

よしのは唇をかみしめた。

よしの「…私諦めません」

クリスは欠伸した。

クリス「まあ頑張つて、また慰めてあげるから」

霧が晴れかけてきた、わずかに太陽の温もりを感じる。

ハイジは足を止めた。

ハニア「ハイジ？」

よしの「…？」

よしのはハイジの視線の先に目をやった。

「よしのさん！」

霧の向こうから聞き慣れた声、見慣れた金髪。

よしの「エオル様！」

その時、よしのはハイジの顔つきが変わるのを見た。

目は爛々と輝き、ニタリと笑うまさにエモノを手に入れた”犬”。

ハニア「ちょっと、ハイジ！」

ハイジは長ドスに手をかけた。

視線の先にはこの霧でもすぐにわかる黒づくめ、真っ赤な瞳。

「まーた出やがったな」

よしの「フィード様！！」

フィードはニヤリと笑い、指をボキボキと鳴らした。

フィード「狂犬」

今にもエモノに飛びかからんとするその”犬”は、逸る気持ちを抑えるかのようにペロリと舌なめずりをした。

## 19・clush heart（後書き）

次回の本編は

トウジロウVSハンティング帽の男？

フィードorエオルVSハイジ？

なにやらバトル的なものが多そうです。

しかし、二日酔いになったり堂々と手抜き宣言をしたり、

トウジロウの仕事に対する姿勢というのは基本部下に厳しく自分にゆるいですね。

部下から反発も買うわけです。

ただ、「特別な俺や」という発言からも自分は特別だからいいんだ、という気持ちがどこかにありそうです。

これは決して「おごり」ではなく「自信」です。

まあ、要は「できちゃう」から他人から見たら「鼻につく」やつと理解いただけたらと思います。

さて、次回からは小話「A・（エーピリオド）」シリーズで「ハートのエース不倫事件」という全4話の続きものです。

…どんなファンタジー小説だよ（笑）

12/10更新予定です。

## 19・1・A・ハートのエース不倫事件1―(前書き)

19・X話はハートのエース不倫事件というなんともブラック(?)な表題。

4話+2話の続きものとなります。

ウランドという人物像にもう少し迫る話となります。

ちなみにどうでもいい話ですが、ウランドは仕事はできるが普段はさえない男、というイメージです。

19・1・A・ハートのエース不倫事件1――

カグヤ「記者が嗅ぎ回っている？」

――トランプ本部　ハートのキング執務室

後ろに組んだ手を閉じたり開いたり、  
相変わらずじっとすることができないクロブチメガネの男は  
目の前の上司の麗人にいつものボソボソとした独特の低い口調で報告をしているところであつた。

そのいくつかの報告の中で上司が耳をとめたのは  
”記者が現在のトランプの特別体制の理由を嗅ぎ回っているらしい”との報告だつた。

カグヤ「ジパング人共犯者の件以外はノッシュナイドの件含め共有済みだ、

それを自国民に伝えるかは各国次第のはず、それ以上何も出ないが」

ウランドは窓の外を見た。

ウランド「……まあ、まだ叩けば埃が出ると思っているのではないでしょうが、……そのジパング人共犯者の件とか」

カグヤは椅子に寄りかかり頬杖をついた。

カグヤ「ジパング人の件は何としても伝えるな、

何も考えずただ単に真実を伝えるすなはち正義と勘違いしている人種だ」

ウランドは足元を見ながら答えた。

ウランド「…了解」

…まあ彼らすべてが正義と考えて仕事をしているわけではないと思いますが…

ヴァルハラ帝国の首都アヴァロンでかなり好き勝手しているスペードのエースは

それは面白おかしく事実を歪めて書かれている、  
兎に角売ればいい、そういう人もいる。

今回嗅ぎ回っているその記者がどちらの人種か、それによっては対応を変える必要もある、

カグヤの命令をどのように実行するか、あれこれ考えながらウランドは次の仕事に向かった。

ウランド「…うちにも広報室とかあればいいのに」

ボソツと呟いた独り言は虚しく宙に消えた。

とある国国境付近、一面に広がる膝丈まで伸びた草の海。

複数人のトランプの隊員が一人の男を取り囲んでいる。

トランプの隊員たちはいずれも満身創痍、疲労困憊、一人の男に完全に翻弄されていた。

その現場に向かう途中、

「ハートのエースさんですか」

鈴を転がすような声、

見るとメモと鉛筆を構え、こちらを見つめる切れ長の瞳、ふくよかな唇に泣きボクロの美女

ウランド「…そうですが」

ウランドは歩調を緩めなかった。

「W・B・アライランスの件でお聞きしたいのですが」

ウランド「…どちら様です」

「あっ！申し遅れました、私ジャーナリストの…」

女が名刺を取り出している間にクロブチメガネの男は目の前から消えていた。

「あれっ」

キヨロキヨロと見回すと随分先に先の男を見つけた。

女は急ぎ追いつくとめげた様子もなく再び口を開いた。

「エルージュといいます、ジャーナリストをしています、ところでW・B・アライランスの件なのですが」

ウランドは立ち止まった。

ウランド「…仕事なので」

エルージュの顔の前で制止を促すよう手のひらを向けた。

ウランドはエルージュが制止したことを確認すると複数の魔導師の集まりの中に身を投じていった。

エルージュ（ちょっとちょっと！あんな地獄絵図みたいな輪の中に平気で入ってっちゃうの！？）

ウランドは複数の魔導師を相手にしていた一人の男をたちどころに押さえつけた。

男は手錠をかけられ、突如中空に表れたブラックホールのような黒い渦——マジックワープにてセイラムに転送された。

他の魔導師たちも次々と転送されていく。

エルージュ「あつ！ちよつと！」

そうして残った最後の一人、ウランドはマジックワープではなくエルージュの方へ歩を進めた。

マジックワープの効力が切れ、黒い渦は消えてなくなった。

エルージュは腕を組んだ。

エルージュ「いいんですか、置いてかれちゃいましたよ」

ウランドはキュツとネクタイを正し、エルージュを見下ろした。

ウランド「構いません、一般人をこんな平原のど真ん中に置いていくと、何書かれるかわかりませんからね」

エルージュはニヤリと笑った。

エルージュ「なるほどね」

ウランドは溜め息をついて片手を腰に当てた。

それとほとんど同じタイミングで、風が草原を波打たせた。

ウランド「それで、W・B・アライランスの何を取材したいんですか」



19・1・A・ハートのエース不倫事件1―（後書き）

「記者は『な人種だ』なんて失礼な話ですが、取材される側からしたらそんな言葉もできちゃうのかなあと。

次回は19・2話、ハートのエース不倫事件第2話。 12/17更新予定です。

## 19・2・A―ハートのエース不倫事件2―（前書き）

ハートのエース不倫事件シリーズ第2話。

場所を町中に移し、エルージュの取材が始まります？

## 19・2・A・ハートのエース不倫事件2―

エルージュ「マジックワープなんて利用したの初めて」

平原のど真ん中で、二度目に現れたマジックワープを通った先は最寄りの街の路地裏だった。

エルージュはスキップしながら路地裏を抜け、石畳の広がる表通りに出た。

表通りは正午の活気に包まれ、平原で行われていた逮捕劇が嘘のようだった。

エルージュは背後のクロブチメガネの男を振り返った。

エルージュ「カフェに入りましょう」

ウランドはキョロキョロと辺りを見回しながら低くボソボソとした聞き取りにくい声で答えた。

ウランド「…手短にお願いします」

主婦たちや老夫婦、犬の散歩途中の若者など多くの人で溢れかえるオープンカフェ。

ウランド「…注文決まりましたか」

エルージュ「ええ、ブラックにするわ」

ウランドはウェイターを呼んだ。

ウランド「…ブラック2つ」

女は頼杖についてニツコリとウランドを見つめている。

ウランドは無表情に顎を上げて腕を組んだまま脚を組み、そして背もたれに寄りかかった。

ウランド「…それで？」

エルージュ「あら、ツレナイ態度ね」

ウランドは表通りの人の流れに目をやった。

ウランド「…うちのスピードのエースがうっかりツツモタセジャーナリストの、

普段は断っている取材を受けたら、あることないこと好き勝手書かれましてね」

エルージュはクスリと笑った。

エルージュ「心外ね、ツツモタセだなんて、イチマツ氏には稼がせてもらったわ」

テーブルにコーヒーが出された。

ウランド「…言っておきますが、情報は各国代表へ出し終えました、それを自国民にどこまで展開するかはお宅のお国次第ですよ、それ以上ありません」

エルージュはコーヒーを一口啜った。

エルージュ「…取材を受けに来たっていうより、何も無いことを説得しにきたってところかしら？」

ウランド「…そうですね、どちらかといえば」

エルージュはニヤリと笑った。

エルージュ「その出し終えた情報は本当に全て？」

たかだか新人魔導師の犯罪で、わざわざランプの体制変えるほど？」

ウランド「現在の体制変更はノッシュナイド対策で体制を整えるためです」

ウランドはコーヒーを啜った。

ウランド（…）“そこ”に引っかかっているのであれば残念ながら的外れですね（

エルージュは胸の谷間を強調するように身を乗り出した。

エルージュ「ねえ、本当に何もないの？」

ウランド（…なんのアタリも根拠もない）

ウランドは左手の薬指の指輪をクルクル回しながら俯いて溜め息をついた。

ウランド「なぜこの取材をしようと考えたのですか？

叩いても出る埃なんてありませんよ」

エルージュ「本当かなあ…じゃあジパング人の件、ジパング国への対応…」

ウランドはエルージュの言葉を遮るようにドカリとテーブルに頬杖をついた。

ウランド「どうぞご自分の国へお問い合わせください、

…というか、何がしたいのですか、貴女は」

エルージュはキョトンとウランドを見た。

ウランド「全て国に問い合わせれば答えはあります、それをわざわざ魔導師に聞く意味はありますか？」

ウランドの口調はキツかった。

エルージュ「…えーと、……」

エルージュの切れ長の瞳からポロリと涙が零れた。

ウランド（ぎくっ）

ウランドは組んだ足をブラブラさせながら、空を仰いで固く目を瞑った。

ウランド「……貴女は仕事にプライドはおありのようだ」

エルージュは目を擦りながらウランドを見た。

ウランド「私にあれこれ言われて口惜しいのでしょうか、見かけによらず負けず嫌いですね、

魔導師でないのが惜しい」

エルージュ「…」

エルージュはポカンとウランドを見つめている。

ウランドは伝票を手に立ち上がった。

エルージュ「あつ、ちょっと」

ウランド「私のことはどうぞ好き勝手お書きください、

ただし、ジパング人の件やトランプの特別体制の件であ

ることないこと書いて、

世間に余計な混乱をきたさないように」

クロブチメガネの男はカフェを後にした。

エルージュは唇を噛み、拳を握りしめた。

背後で新聞をバサリと広げる音が響いた。

「ヘタクソジャーナリストが、早く情報入手しねえと、  
…どうなる  
かわかってんだろっな」

エルージュは震える手をコーヒーに伸ばした。

エルージュ「…わかつているわ」

19・2・A・ハートのエース不倫事件2―（後書き）

なにやら黒い影がチラホラと出てきました。

女性記者に目をつけられたウランド。

ウランドに逃げられた女性記者。

どうする！？

次回は12/23ハートのエース不倫事件第3話です。

19・3・A―ハートのエース不倫事件3―（前書き）

ハートのエース不倫事件シリーズ第3話。  
美人記者エルージュの次なる一手は…？

19・3・A・ハートのエース不倫事件3―

ハートのエース執務室。

響くノックの音。

ウランドは事務処理をしていた手を止めた。

秘書が非常に気まずそうに入室してきた。

「お客様です、エース」

ウランド「…客？予定にはなかったと思ったが」

秘書はウランドから目をそらした。

「アポイントはなしで、その…女性の方なのですが…」

ウランドは妻だと思った、わざわざ職場まで来るなんて。

嫌な予感がし、急いで席を立った。

応接室に急ぐと、豪華なソファに悠然と  
ミニスカートに高いヒール、胸元が広く開いた目のやり場に困る服、

あのジャーナリストだった。

ウランドは肩の力が抜けた。

そうしてそそくさと応接室を出ようとする秘書をジトリと見た。

秘書はギクリとした。

秘書（…不倫だ…不倫現場だ…）「えっと…さ、最近ご出張多かったですし…ね！」

ウランドは秘書に向きなおった。

秘書は慌てた。

秘書（うわっ、…）「ひっ秘密にしておきますからっ！」

逃げ去ろうとする秘書をウランドは慌てて引き留めた。

ウランド「誤解だ！」

…それと、キングには俺から話すから…」

ジャーナリストが乗り込んできた件は後で自分で報告するという意味であつたが、

秘書の誤解を解くには明らかに言葉足らずであつた。

秘書は早く立ち去りたいがために何度も頷くと慌てて部屋を出た。

ウランドはため息をつく足早に女ジャーナリストの向かいのソファに腰かけた。

ウランド「アポなしとはマナーの無い方ですね、まだ何か？」

エルージュは真っ赤な唇をニコリとつり上げた。

エルージュ「人質のジパング人について記事を書きたくて、」

エルージュは紅茶を一口啜った。

エルージュ「×切近くてね、情報くれないと、あなたと私の不倫記事にしちゃうわよ」

ウランドはため息をついて背もたれに寄りかかった。

そうして、

これはこの仕事をしていて何となく付いた癖だが、目の前の美女に発言内容に他意がないか、仕草を観察した。

確かに、×切が近いと言っていただけに、

先日よりカリカリしているようであつたし、作っている笑顔に余裕は無いようだった。

だが、一点だけ、ウランドは引かなかった。

ウランド「…なぜ、ジパング人の件の記事にしよう？」

ただ単に、自分の忠告を無視してまでジパング人の件を記事にすることに決めた、

先日までまるで記事にすることが定まっていなかったこのジャーナリストが、

どのようにして記事の内容を決めたのか、興味があつての質問だつた。

だが、ウランドの予想に反してそのジャーナリストはあわてふためいた。

エルージュ「な、なんで、ダメなの!？」

エルージュの剣幕に、ウランドは直感的な違和感を感じた。

ウランド「…ダメとは一言も言っていないですよ、

×切が迫っているとはいえ、少しご自分を追い詰めすぎでは？」

エルージュは立ち上がり眉を吊り上げた。

エルージュ「ダメじゃないならいいじゃない!」

ウランドはソファの背もたれに頬杖を付き、足を組んだ。

ウランド「貴女を追い詰めているのは本当に×切だけですか…?」

それは、もしやクビでもかかっているのでは、という意図であつたが、

その次の女ジャーナリストのリアクションは、これまたウランドの予想を覆すものであつた。

ジャーナリストの切れ長で美しい瞳から、一筋の涙が零れ落ちた。

エルージュ「…あなた…魔導師でしょう」

ウランドはキョトンとした。

ウランド「…はい、そうです」

エルージュ「…お願い！…助けて…！」

ウランドはエルージュに座るよう促した。

ウランド「…各国に出している程度しかありませんが、ジパング人の情報ならお出しますから」

エルージュ「違う！」

ウランドは頼杖を止めた。

そして訳がわからないと訝しげに眉を寄せ、エルージュを見た。

エルージュは顔を伏せた。

エルージュ「弟が…人質にとられているの…反神使教派のテロリストに…！」

私…トランプ担当の記者だから…立場使ってジパング人の情報を聞き出さないと殺すって…！！」

あまりにも突拍子のない話であつた。

たしかに反神使教派のテロリストであれば  
国外に出たジパング人を利用して何らかのテロ行為を企てようとするかもしれない。

ジパング人の情報がほしいというのもうなづける。

だが、仮にそうだとして、どこまでが本当の話か。

もしこの女も本当はテロリストの一味で、確実に情報を得るため弟が人質であると嘘をついていたら？

そもそもテロリスト云々は嘘で  
無理矢理特別な情報を絞りだそうという悪徳ジャーナリストのハッタリかもしれない。

ありとあらゆる可能性が考えられた。

ウランド「…そのテロリストに魔導師は関わっていますか？」

エルージュは首を振った。

ウランド「…でなければ残念ですが、我々が手を出すことは出来ません」

エルージュはさすがのようにウランドを見た。

エルージュ「わからない！もしかしたら多分、関わっているかもしれない！」

ウランドは背もたれのへりに頭を乗せて目を瞑った。

次の遠征の予定は明後日だ。

今日明日は1日事務処理の予定しかなかった。

ウランドはニヤリと笑った。

エルージュ「な…何が可笑しいのよ…！」

ウランド「トランプというのは血の気の多い連中の集まりでしてね、特にスピードとハートのエースは。」

つい先日にも犯人検挙を賭けにしようとして別のエースから怒られました」

エルージュはキョトンとした。

ウランド「…貴女、口裏合わせられますか？」

エルージュ「え…」

ウランドは立ち上がった。

ウランド「… たった今、魔導師が反新使教派テロリストに関わっているという”匿名の”タレコミがありました、

ちよっと、”諜報活動”に出掛けます」

### 19・3・A「ハートのエース不倫事件3」（後書き）

15・5話しかり18話しかり今回の「もしやクビでは？」しかり基本的にウランドはズバズバと人の気にしていることを言ってしまうのですが、進むべき道を示したり一緒に考えたり、諭したり、他人に対して親身です。一応世話焼き。

トウジロウやカグヤにとっては兄貴的な存在として描いています。ちなみにどうでもいい話ですが、ウランドは敬語キャラではありません。

ただ単にハートのエースとして上司や外の人（客）に対して丁寧な言葉を使っているだけです。

今回は12/24ハートのエース不倫事件シリーズの第4話です。

# 19・4・A・ハートのエース不倫事件4―(前書き)

メリークリスマス。今年最後の更新です。

エルージュの訴えの真偽を確かめるため、ウランドは…？

19・4・A―ハートのエース不倫事件4―

カグヤ「ウランドを呼んできてくれないか」

――ハートのキング執務室。

事務書類を届けにきたのはタイミングが悪かったようだ。  
頼まれた秘書は歯切れが悪かった。

カグヤ「…どうした？」

秘書はおずおずと答えた。

秘書「その…エースは先ほどお出掛けになりました…」

カグヤ「？遠征は明日ではなかったか？」

秘書「ええと、テロリストに関する匿名の情報提供があったとかで  
諜報に出ると」

カグヤはため息をついて眉間を押さえた。

カグヤ「またあの病気か…」

秘書「……あの病気？」

その街は石畳の美しい、家々に花が溢れるのどかな街並みであった。

品の良いカーディガンでワイシャツにつけられている隊章を隠し、ワイシャツから下を軍服から通勤着に着替え、そのクロブチメガネの男は石畳を歩いていた。

ウランド「…弟さんが捕らえられている場所はわかりますか？」

エルージュ「いいえ…」

エルージュは不安げにウランドを見上げた。

ウランドはニヤリと笑った。

ウランド「では仕方ありませんね」

カグヤ「奴はいい歳の割に落ち着きが無さず器用と思わんか」  
秘書は思わず笑った。

カグヤ「…結婚して大人しくなつたと思つたが…」  
秘書「？」

カグヤは頬杖をついた。

カグヤ「ああ見えて、スペードのエース並にやんちゃが過ぎる」

貸家であつたその部屋のドアが乱暴に開き、小さな卓を囲んで、カードゲームに熱中していた男どもは何事かと出入口を見た。

「エルージュ！てめえ！なんだその男は」

エルージュは柳眉を逆立てた。

エルージュ「メルスは！弟はどこ！」

男たちは立ち上がった。

「なんだよ、男作って強気になっちゃったってか？」

下品な笑い声が上がった。

男の一人がウランドに近付いた。

「この女に目え眩ましたのが運のツキだったな、インテリメガネくうん」

男はナイフを取り出した。

エルージュ「！ちょっと！」

「エルージュ、てめえは誰に飼われてるのか、見誤っちゃいけないえよ、弟のためにな……！」

ウランド「なるほど」

男の手からナイフが零れ落ちた。

「いててて！」

男は腕を捻りあげられ身動きがとれなくなった。

ウランド「貴女の訴えのウラは取れました」

エルージュ「！！」

ウランドはボキボキと指を鳴らし、ニヤリと笑った。

ウランド「ナイフをかざされてしまいました、身を守るためには正

当防衛も致し方ない」

「何訳わかんねえこと言ってるんだ！」

男たちは次々に武器を手にした。

ところがバツバツとまるで紙切れのように男たちはなぎ倒されていった。

「うっ…」

「いってえ…」

エルージュ「っ…強い…」

その時、出入口のドアが閉じられた。

エルージュ「きゃっ！」

ウランド「！」

「動くなよ」

足もとには落とされた買い物袋から転がった林檎。

買い物帰りの仲間の一人がエルージュを羽交い締めにし、ナイフを突きつけていた。

ウランドは両手を後頭部に置いた。

「わかってんじゃねえか」

ウランド「…あなた、見覚えありますねえ」

「はぁ！？何言っ」

ウランド「…思い出した、魔導師を騙って詐欺を働いていた指名手配中の——」

男は背中から汗が噴き出した。

「てめっ、なんでそんなこと、」

ウランドはカーディガンを脱ぎ捨てた。

その下から現れたワイシャツの紋章。

男はナイフを落とし、ドアにへばりついた。

「とっ…トランプ…！」

ウランド「あー…よかった」

ウランドはニヤリと笑った。

ウランド「これでオトガメなしだ」

（こっ…このトランプ隊員目がやべえ！ま、まさか…）  
「す、スピードのエース！？」

ウランド「残念」

その貸家に一人の男の断末魔が響いた。

エルージュ「メルス！」

メルス「おねえちゃん」

久しぶりの姉弟の再開だった。

エルージュ「ごめんね…おねえちゃんが記者なんかやってるから」

メルス「…ううん」

エルージュは弟を強く抱き締めた。

エルージュ「…おねえちゃん、もっと普通の仕事につくから」

メルス「え…だって、きしゃになるの、ゆめだって…」

エルージュは微笑んだ。

エルージュ「…いいの、いいのよ…」

ウランド「…えー…コホン」

エルージュ「あ…ごめんなさい、ありが」

ウランド「…それより、大変申し訳ないのですが」

エルージュ「？」

――ハートのキング執務室

ふと目をやった窓の外、

本部への正面通りを遠くから歩いてくる人影に、  
カグヤは勢いよく席を立った。

エルージュ「ふふ…オトガメなしって自分で言ってたのに」

ウランド「念のための証人です…意外とキングから信用ないんですよ、私」

エルージュ「くす…でしょうね」

ウランドはチラリと横目でエルージュを見た。

ウランド「…ジャーナリストであれば証人としての信頼も高いでしょうし」

エルージュは空を見上げた。

エルージュ「…もうジャーナリストじゃないわ」

ウランド「…そうなんですか？」

エルージュは笑った。

エルージュ「ありがとう…」

そうして自然と目がいったウランドの左手の薬指。

エルージュ「…あれ？それ本当に結婚指輪？」

ウランドはつられて自分の左手を見た。

ウランド「…いえ、ただのペアリングです。式は今度…」

エルージュ「へええ…」

エルージュの笑みの意味をウランドは理解できなかった。  
ウランド「？」

エルージュはウランドを見上げた。

エルージュ「だったらまだ、チャンスあるわね」

ウランド「何の？」

エルージュはウランドの首に腕を回した。

トランプ本部の正面扉が勢いよく開き、低く凜々しい声が響いた。  
カグヤ「ウランド！貴様一体何処をほつつき歩い…」  
カグヤは固まった。

ウランドはエルージュをひっぺがした。

カグヤの後ろの秘書が思わず呟いた。  
秘書「大胆」

ウランド「ご、誤解です！キング！」

カグヤ「…」

カグヤは固く目を瞑り、真一文に結んだ自分の唇を人差し指でトンと叩いた。

ウランド「!？」

ウランドは自分の口を拭った。

拭ったその手の甲にはべつたりと真っ赤な口紅。

ウランド「何するんですか!！」

エルージュ「あら、ハッキリ喋れるじゃない」

ウランド「話をそらさないでください!！」

カグヤは溜め息をついた。

カグヤ「不潔」

ウランド「キング!話を聞いてください!」

エルージュ「やだあ、あたしとのこと無かったことにするわけえ」

ウランド「初めから何もないじゃないか!」

カグヤ「今日の午後はデートで有休ということだな」

カグヤは踵を返した。

ウランド「ああっ!待ってください!キング!」

秘書「…よいのですか?」

カグヤは鼻で笑った。

カグヤ「単独行動の罰だ、これで犯罪者を捕まえていなければヤツの細君へ報告していたところだ」

秘書は笑った。



#### 19・4・A・ハートのエース不倫事件4―（後書き）

聖夜になんとブラックな締め方でしょう…（謝）

ちなみに普段さえない男がその気もないのにモテまくる話は大好きです（笑）

さて、今回の話で「？」と思われた方は…なんというかありがとうございます。

ウランドは妻が妻がと散々言っていますが、どうもまだ結婚していない模様です。

理由は次回の19・5・19・6話にて明らかになります。

さて、今回はこの話の後日談2話続きます。

1/7に19・5話更新予定。みなさんよいお年を。

19・5・A―19・4話後日談―（前書き）

前置きとしてウランドは現在33歳です。

ちなみにどうでもいいですが、

カグヤは27歳。

マリアは36歳。

年齢層高…。

トランプの朝は早い。

若い隊員たちは隊の垣根を超え、早朝の本部の清掃を行うのが日課だった。

「あれ？エース、どうされたのですか？その顔……」

隊員が思わず声をかけたのはちょうど本部へ出勤してきたハートのエース、ウランド・ヴァン・ウィンクル。

ウランドの頬にはくつきりと真つ赤な掌の痕。

ウランド「……へっくし！」

ウランドは鼻をすすった。

ウランド「……ちょっといろいろあって」

「……しかも風邪ですか？」

ウランド「仕事には問題ないよ、けど体調管理もできないなんて、エース失格だな」

隊員はとんでもないと首を振った。

ウランドはニコリとほほ笑んでその隊員の肩をぼんと叩くと本部へ入って行った。

就業開始から小一時間。

ハートのキングの執務室にノックの音が響いた。

入ってきたのは秘書官。

秘書「キング、お客様です。」

ハートのキング——イチマツ・カグヤは書類に目を落したまま答えた。

カグヤ「この時間にアポはないハズだが」

秘書「その…アポなしで…女性の方なのですが」

先日の記者か。

カグヤは溜息をついた。

カグヤ「エースは」

秘書はおずおずと申し出た。

秘書「…その…女性がどうしてもキングにと…」

カグヤは席を立った。

応接室のドアを開くと、  
フェミニンな服装のロングヘアの女性。

エルージュ  
この間の記者ではない。

カグヤはきょとんとした。

女性とは面識がなかった。

カグヤ「…お待たせしました。私がハートのキング、カグヤ・イチマツです。」

低く凜々しい声を聞くと、  
ロングヘアの女性は入室してきたカグヤの姿を頭のとっぺんからつま先までジロジロと見た。

カグヤ「？」

カグヤは女性の向かい側のソファに掛けた。

カグヤ「…失礼、どちら様でしょうか」

ヨトルヤ「ヨトルヤ・ドラグニクと申します。」

カグヤはその名前に聞き覚えがあった。

カグヤ「…ドラグニク？”ウインクル”ではなくですか？」

ヨトルヤはカグヤをにらみつけた。

ヨトルヤ「あなたのせいで”ウインクル”と名乗れないんですよ、カグヤさん」

カグヤは背筋を伸ばした。

ウランド「あ、ちょっと」

呼び止められた秘書官はウランドの顔を見、目を見開いた。

秘書「どうしたんですか、その顔」

明らかに平手打ちの痕。

先日不倫扱いした記者との件に、秘書官はわずかに罪悪感を感じた。

ウランド「あー…それより、キング見かけなかった」

秘書「キングはただ今お客様の応対中です」

ウランド「…？今日は午前にはアポはなかったはずだが」

秘書「アポなしなんです」

ウランドは先日の記者の時のことが脳裏をよぎった。

ウランド「…まさか女性？」

秘書「…ええ」

ウランドは応接室へ急いだ。

ヨトルヤ「なぜ彼を辞めさせてくれないのですか？死んだりしたらどうしてくれるんです！」

カグヤ「今は状況がとても悪いのです、ウィンクル氏の力がどうしても必要…」

ヨトルヤは立ち上がった。

ヨトルヤ「そうして何年も退職が先延ばしじゃない！」

カグヤは目を伏せた。

ヨトルヤ「子どもだって作れないんだから！私もう35なのよ！？このままおばあちゃんにするつもり！？」

カグヤ「貴女にもウィンクル氏にも悪いとは感じております…何年も」

ヨトルヤは拳を握りしめた。

応接室のドアが勢いよく開いた。

ウランド「エルージュ！貴女また…」

ウランドは目の前の光景に、持っていた書類を思わずバサバサと落した。

目の前に広がるは、自らの上司と、その上司に掴みかかる自らの妻…になる予定の女性。

ウランドは真っ青になった。

ウランド「ヨトルヤ！何してるんだ！」

ヨトルヤ「…エルージュって、誰よ」

ウランド「昨日話したでしょ」

ヨトルヤはウランドと視線を合わせなかった。

ヨトルヤ「ああ、キスしたって女の人、どうしてその人が来てると思ったのかしら」

ウランド「…帰ってからゆっくり話そう」

ウランドはヨトルヤに手を伸ばした。

ヨトルヤは身構えた。

カグヤ「ウランド」

ウランドは手を止めた。

カグヤ「貴様、上司の客人の前で何たる無礼か」

ウランド「…ただの夫婦喧嘩です、キングのお手を煩わせるわけには」

カグヤの柳眉が逆立った。

カグヤ「口答えするな、出ていけ」

ウランド「しかしキング」

カグヤはさらに声が低くなった。

カグヤ「…出ていけと言っているのが聞こえんのか」

ウランド「…」

ウランドは踵を返した。

ヨトルヤの目が潤んだ。

出入り口付近で落した書類を集め、立ち上がろうとしたその時だった。

バシッ！

ウランドはヨトルヤのバッグで後頭部を思い切りひっぱたかれた。

ヨトルヤはそのままツカツカと出て行ってしまった。

後を追おうとするウランドを、カグヤは呼びとめた。

カグヤ「就業時間中だ、職務を放棄するつもりか」

先日のエルージュの件の単独行動から、ウランドへの監視の目は厳しくなっていた。

もちろんウランドの自業自得だが。

ウランドは足をとめた。

ウランド「……………いいえ、…それよりキング、ちようどお伺いしよ  
うとしておりました」

カグヤ「その書類の件だな、” 客人を見送ったら ” 執務室で聞こう」

応接室を出た2人は、ドアのすぐそばで立っていた女性に目を丸くした。

女性はしまったとわざとおどけて見せた。

マリア「ハロー、なーんかタイミング悪く楽しそうな時にきちちゃったわねえ」

カグヤ「…マスター・マリア」

再び応接室。

カグヤとマリアは向かい合いにソファに掛けた。

ウランドはテーブルにコーヒーを置いた。

一礼して出て行こうとするウランドへ、マリアが呼び止めた。

マリア「あんたが座んないと意味ないじゃない、ほら、自分の分の  
コーヒーももってらっしゃい」

ウランドはきょとんとした。

ウランド「はあ…？」

カグヤ「またアポなしですか」

マリアは笑った。

マリア「こないだシェンくんちゃんとアポとれって言われたの忘れててさー！」

久しぶりに聞くシェンの名に、カグヤの目が泳いだ。

マリア「いつものごとく、暇つぶしに来ただけど、今日のターゲットはあんだね、ウランド」

ウランドはコーヒーを置き、しぶしぶとカグヤの隣へ腰を落した。

ウランド「ターゲット？」

マリアはコーヒーをすすった。

マリア「実は、さっきの一連のシュラバに聞く耳立てててさあ」

ウランドはぼそりとつぶやいた。

ウランド「…あいかわらず行儀の悪い方ですね」

ゴン

カグヤの拳がウランドの後頭部に命中した。

マリアはニヤリと笑った。

マリア「カグヤ、あんた上司としてきちんと奥さんに話そうとしていたのよね」

カグヤ「…そうですね」

マリアはニヤニヤとしながら腕を組んだ。

マリア「あれは取り付く島なかったと思うよ！女は感情の生き物だからねえ！

で、ウランド、あんたのそのほっぺのモミジマークは？」

ウランド「…昨日取材を受けた女性記者とちよつといろいろありまして」

マリアは嬉しそうにウランドを指差した。

マリア「そうそう！それ！本当はそれを今日聞きに來ただけだねー！で？」

ウランド「…昨日のうちに婚約者に話したのですが、うまく伝わらなかったようで、

平手打ち食らって外に締め出されました」

マリアは笑いを堪えた。

マリア「…なんでわざわざ話すのよ…」

ウランド「…隠し事はしないと決めています」

カグヤは腕を組んだ。

カグヤ「上司に対してもそのくらい誠実であってほしいものだ」

ウランドは組んだ足をブラブラとさせて天井を見た。

ウランド「仕事とプライベートは切り分けてます」  
↑反省の色が  
まったく見えない。

カグヤ「…もう一遍殴っていいか」

マリア「しかし、ずいぶんとまあヒステリックな彼女ね、無理もないけど。」

今日はそこらへんをお土産にくれたら帰るわ」

ウランド「…そこらへんというのは？」

マリアはウィンクした。

マリア「な・れ・そ・め」

ウランドは溜息をついてカグヤを見た。

カグヤは早く帰ってほしいからとつと話してしまえという視線を送った。

ウランド「…別にごくごくありきたりですよ」

マリア「最初の出会いはい？」

ウランド「…学生時代、先輩に地元の彼女ができて、

そのお披露目会みたいなものに顔を出したときです」

マリア「お披露目会に来ていた女の子ってこと」

ウランド「ええ」

マリアとカグヤはふーんと同時にコーヒーをすすった。

ウランド「…その先輩の彼女です」

マリア&カグヤ「ブーーーーーッ」

2人は同時にコーヒーを噴き出した。

マリア「ゲホッ…はい？」

ウランド「…アカデミー入学当初、私は大変落ち着きのない子どもだったようで」

カグヤ「大人になってからもな」

ウランド「しょっちゅう先生方に怒られていました」

マリアは笑った。

マリア（あー、たしかに言ってたわ、ガルフィンやらジャイブのやつが、”すごく”手のかかるヤツだったって）

ウランド「怒られっぱなしだったせいかな、ちょっとグレちゃいましたね」

マリア「いま”ちょっと”って言わなかった？」

ウランドは目を細めた。

ウランド「そんなある日、マスター・ジャイブのゼミで一緒になったのがその先輩でした。」

マリア「…彼女のこと聞いてんだけど」

ウランド「…その先輩はスペードのキングのように非常に明るくて常に仲間の中心にいる人物でした」

常にみんなの中心にいて、常にみんなのことを考えていて、グレていた俺にはまぶしかった。

そんな俺にも分け隔てなく接してくれて、一緒に苦しい修行を乗り越え、同じだけ一緒に悪さもした。

本当に尊敬していた。

そんなある日だった。

——ウランド 18歳

「おい、ウランド、聞け」

連休明け早々、授業の準備をしていた俺に、先輩は目を輝かせてやってきた。

「俺、彼女できた」

「…へえ、おめでとうございます」

「今度みんなに紹介してやつから、絶対こいよな！」

そう言つて先輩は朝から友人中に言いまわっているらしい。

先輩命令は絶対で、逆らえば後がひどかつたし、特に興味はなかったが、メシをおごつてもらえることもあり、その”お披露目会”に顔を出した。

そのお披露目会でちょうど俺の正面に座っていたのがヨトルヤだった。

周りの仲間が笑った。

「ウランド！こんな日くらい落ち着いて食えよ！」

「こいつホント落ち着きなくてさあ！」

しらねえよ、仕方ないだろ、生まれつきなんだよ。

大人たちから怒られて、直そうとして、でも直らなくて、周囲に呆れられる。

ずっとそうだったのだ。

ところが、ヨトルヤの笑みは違った。

ヨトルヤ「彼氏から君のことは聞いてるよ、無理して直そうとしな

くて大丈夫だからね、ウランドくん」

ヨトルヤの笑みは受容の笑みだった。

”恋に落ちる”

その意味が初めて分かった。

「おい、ウランド」

ある日、先輩はニヤリとしながら話しかけてきた。

「おまえ、何回人の彼女に告ってんだよ、いくらやったって無駄だよ」

今日の槍術の実践授業で負けたらもう諦める。

そう言って迎えたゼミでの実践授業。

2人一組で槍に見立てた棒で勝負、

負けたほうは授業が終わるまでに校舎1000周。

先輩は当然のように俺と組んだ。

実技やテストというものになぜかやる気を出せなかった俺はいつも落第ギリギリの綱渡り。

周囲も結果は見えていると大して注目していなかった。

先輩のことを尊敬していた。本当に。

先輩の動きは全部見えていたし、少しやる気を出せば、悪いけど勝てた。

けど、先輩とその彼女の幸せそうな姿が頭をよぎる。

俺は明らかに邪魔ものだった。わかってた。

結局授業の終わりまで校舎を1000周走りきることができず、便所掃除となった。

「ようウランド、予想通りサボってんな」

バケツを手にした先輩。

先輩は何の気なしに俺の目の前で便所掃除をはじめた。

「なにしてるんスカ、勝ったのに」

「便所掃除は趣味なんだよ」

「じゃあ、先輩におまかせしていいですか」

「アホか」

先輩はトイレの床をブラシで磨き始めた。

「うらみつこなしな、俺も…多分お前よりヨトルヤのこと好きだ」

「…別に」

先輩は言った。

ヨトルヤは幼い時に事故で自分をかばい父親を亡くした。  
つらい過去を乗り越え、懸命に生きる姿に守りたい、そう思った、  
と。

別に好きになった理由なんて聞いていないのに、  
まあ、追い打ちをかけられたということか。

タイミングというのは残酷なものだ。

——ウランド 20歳

先輩はトランプへの就職が決まり、  
再びヨトルヤを交えての祝賀会が開かれた。

その日、ヨトルヤは俺と目を合わせようとしなかった。

「みんな聞け！おれは30までにトランプの大佐になる！」

歓声が上がった。

先輩はヨトルヤを見た。

「そうしたらヨトルヤ！俺と結婚してくれ！」

周囲は期待を込めてヨトルヤに視線を注いだ。  
ヨトルヤは不安そうな顔で俯いた。

先輩は言った後で慌てた。

「あ、30つてのはごめん、でも厳しいトランプで仕事も生活も確立するつてのだけじめのつもり、もし待てなかったら…」

「うん、待てない」

周囲は息をのんだ。

「…妊娠、3か月だつてさ」

一瞬の静寂のあと、再び、今度はより大きく歓声が上がった。

先輩は嬉しそうにヨトルヤを抱きしめた。

受け入れられたその時のヨトルヤの、あの幸せそうな顔は、今でもしっかりと目に焼き付いている。

マリア「ちょ…ちょっとちょっと、妊娠！？完全にデキ婚コースじゃない」

ウランドはコーヒーをすすった。

ウランド「…ええ、まあ、悔しさ半分、嬉しさ半分ですね、

我ながら女々しいですが、18で出会ってから20のその時まで、ずっと好きでした」

カグヤ「…」

マリア「…えーと、どうやったら今の状態につながるのかさっぱり  
なんだけど」

ウランドは淡々と答えた。

ウランド「…彼女が妊娠9か月の時、その先輩は殉職しました」

マリア「…！」

カグヤ「…」

旦那の殉職の精神的ショックからか、彼女は流産した。

「…ウランドのやつ、今日も行くのかよ」

平日、学外を抜け出すのは規則違反だった。

けど、いてもたってもいられなかった。

俺は毎晩何をするというわけでもなく彼女の病室に通った。

俺にとって先輩の死はかなりの精神的ダメージだった。

彼女を慰めるような余裕はなく、

悲しみを共有できる唯一の人、

そう思ってた。ただ、傷をなめあう時間を共有しに行っていただけだ  
った。

病室の窓が開いた。

ヨトルヤは俯いたまま口を開いた。

「…また来たの」

「…暇で」

その夜のヨトルヤは様子が違った。

寝たきりだった彼女が目を真つ赤にはらし、ベットから起き上がった。

「…夫も子どももなくした私を、みんな腫れ物に触るよう」

「…うん、まあ、そうだろうね、どう接したらいいのかみんなわからない」

「…あいかわらずデリカシーないな」

「…よく言われる」

「…でも、ズバズバ言っちゃうけど、結局親身なんだよね、ウランドくんて」

「…そうかな」

「…私みたいな女、やめときなよ」

俺は彼女の言った意味がわからなかった。

「…お父さんも、旦那も、…生まれてくるはずだった………息子も、

私にかかわる男はみんな死んじやう」

「…」

ヨトルヤは泣きはらした顔で自嘲的に笑んだ。

「ウランドくんも、わたしといったら死んじやうよ」

なんでそうなったのか、全然覚えてないけど、  
気がついたときにはヨトルヤを抱きしめていた。

「…死なないよ、俺が証明してみせる」

「どうやって」

彼女の顔を見据えた。

「約束する、ヨトルヤが30になるまでに、必ず生きてトランプの  
大佐になる」

ヨトルヤは笑った。

「落第スレスレでトランプに入れるかも怪しいじゃない」

「これが最後でいい、俺を信じて」

開いたままの窓から夜風が入り、カーテンが開かれ、背後には輝く  
満月。

「俺と、結婚を前提に付き合ってください」

ウランド「…まあ、旦那と息子を亡くした直後の女性に言う言葉じゃないですね、さすがに反省して先輩の墓前に謝罪しましたが」

マリア「わかってて言ったなら確信犯ね」

ウランド「その時はこっぴどく拒絶されて、…結局付き合うようになっただけはその1年後でしたけどね」

マリア「亡くなった先輩に謝罪したんじゃないの」

ウランド「ええ、槍術の実技の時に負けたのであきらめろと言われていたのに、結局まだあきらめていなかったことに対しての謝罪です」

マリア「…ほんと図太いわね」

カグヤ「…」

マリアはコーヒーをすすった。

マリア「しかし、あんたひどい目にしか遭ってないじゃない、

ホントに好きなのねえ、”初めての彼女だから”とかだつたらちよつと盲目的だと思うわよ？」

ウランドはきょとした。

ウランド「初めて？」

カグヤ「…」

マリア「あれ？違うの？」

ウランド「ええ、その前に何人かは…その”お披露目会”の当時も別に付き合っていた女性はいました」

マリア「ええと？」

ウランドはコーヒーをすすった。

ウランド「ああ、彼女を好きになったので、きちんと別れました」

カグヤ「…不潔」

ウランドはむせ込んだ。

ウランド「いやいや、きちんと誠意をこめて話し合ったうえでの別れですよ！変にこじれてはいません」

マリアはヒュウと口笛を吹いた。

マリア「モテ男〜！」

ウランド「からかわないでください！ただ単に私は彼女に対して盲目的ではないと言いたいただけです！」

マリア「なんでまだ結婚しないの？」

ウランドは苦い顔をした。

ウランド「…なれそめとは関係ないじゃないですか」

マリアは唇を尖らせた。

マリア「彼女が30になったら結婚って言ったのに、約束を果たしてないじゃない」

ウランド（…べつに30になったら結婚するとは一言も言っ  
てませんが…）

「…その前に今の地位についたので、正直それどころではなかったのと」

マリア「ひどーい！」

ウランド「…彼女は私が死ぬのが怖いんです」

マリアはどういうこと？という視線を向けた。

ウランド「トランプを辞めて安全で安定した職に就くまでは結婚しないと言われています」

カグヤは目を伏せた。

マリアはそのあとに用意していたいくつもの質問を投げかけることを取りやめた。

ウランドが結婚しない、いや、できない理由を話すのをためらったワケがわかったからだった。

マリアはカグヤを見た。

ウランド「…キング、この間も申し上げましたが、あなたはご自分の仕事をこなしていただければそれでいい、

気に病むことなど何一つありませんよ」

カグヤは目を開け、まっすぐ前を見据えた。

カグヤ「当然だ、トランプは身内のQOLまで考える必要はない、世界のために尽くす、それだけだ」

ウランドは笑った。

本当に頼もしい上司だ。

年下ではあるがこの上司のことは本当に信頼できる。たまにあの先輩と重なるくらいだ。

カグヤはウランドを見た。

カグヤ「単独行動は許さぬが、休暇までは別に制限しておらん」

ウランドはきょとんとカグヤを見た。

カグヤ「午前中にその書類の整理が終わったら、午後は休暇の取得を許可する」

マリアは笑った。

普段、日付を超えて帰ってくるか来ないかの婚約者が、その日は昼過ぎに帰ってきた。

玄関先で、ヨトルヤはその”絶対ありえない現象”に思わず声が上ずった。

ヨトルヤ「どうしたの!？」

ウランド「…今日は…ちょっと風邪で…午後は休暇もらった」

ヨトルヤはそっぽを向いた。

ヨトルヤ「わたしのせいよね、その風邪」

ウランドはぎくりとした。

ウランド「ええと、違うよ、その…遠征先でうつされたんだ」

ウランドは鼻をすすった。

ヨトルヤ「じゃあ、寝てれば、わたし知らないから、不倫男なんて」

ヨトルヤは部屋の奥へ戻って行った。

ウランドはヨトルヤを追った。

ウランド「…風邪は一晩寝れば治る」

ヨトルヤ「あなた、体だけは丈夫なものね」

ウランド「…だから、これからちよつと出かけない？」

平日休日昼夜問わず働きづめ、最近は家は”寝に帰ってくるころ”と化していた生活。

そんな中、こんなに外が明るい時間から、起きているこの男と、ともに時間を過ごすのは本当に久しぶりとなる。

ヨトルヤは背を向けた。

ヨトルヤ「どうせいつもの機嫌取りでしょ」

ヨトルヤは背を向けたまま目に涙をためた。

いつからこんなにこの男にここまで甘えるようになったのか。

叱ることはあっても、決してヨトルヤを責めるということとはしない、そんなウランドへ、自分はやりたい放題だ。

いつ呆れられてもしかたない。

だが、今回は、女性記者と、無理矢理とは言っていたもののキスをした、

そのことに、いつかこんな自分は見放されるのではと常日頃考えているヨトルヤは疎外感を感じた。

同時にいつも自分に甘いウランドが自分を裏切った、そのことが許せなかった。

ウランド「…今は、本当に忙しくて、すぐにトランプを辞めることはできない」

この期に及んでまた仕事の話が、  
ヨトルヤはうんざりした。

ウランド「けど、」

ヨトルヤ「…もう、疲れたよ、ウランドくん」

ヨトルヤは深呼吸した。

ヨトルヤ「別れよう」

背後にいるウランドからしばらく返事はなかった。

ウランド「…疲れさせてごめん」

ヨトルヤ（そこ！？別れようって、今、わたし言ったのよ！？）

ウランド「けど、俺、ヨトルヤが”いないと”きつと死んじゃうと  
思うんだ」

トランプの隊員として数々の地獄を見てきた。

だが、この年まで無事に生きてこられたのは君のおかげ、  
そういう思いがこもっていた。

ヨトルヤ（生きてこれたのはあなたの實力じゃない、なんでわたし  
…）

ヨトルヤはあふれる涙を抑えることができなかった。

ウランドはヨトルヤの頭をなでた。

ウランド「ヨトルヤがいたから、どんな現場でも死んじやいけない  
って思っで切り抜けてこれた、

きみのおかげなのは、本当に本当だよ、だから、お願い  
だから別れようだなんて言わないで」

ヨトルヤはウランドの胸板に顔をうずめた。

ヨトルヤ「ごめん！嘘！他の女の人とキスしたのが許せなかったの  
！」

ウランドは脂汗をかいだ。

ウランド「…すみません」

ヨトルヤ「さっき出かけるっていったよね」

ウランド「うん」

ヨトルヤ「今日はデート中に居眠り絶対禁止だからね！」

ウランドは心外だと顔をしかめた。

ウランド「…居眠りとかしてないし」

ヨトルヤ「そりゃ寝てる本人は気付かないでしょうけど」

19・5・A・19・4話後日談―（後書き）

さて、妻が妻がと散々のたまっているウランドですが、こうこうこ  
ういう理由で結婚できないでいるという内容のお話でした。

ではなぜヨトルヤを妻と言っているのか、チラッと（というかサラ  
ッと）次回明らかになります。

「私にかかわる男はみんな死んじゃう」と思っているヨトルヤ  
「ヨトルヤがそばにいてくれたからこそ死ななかった」と考えてい  
るウランド

考え方は違うけど、心の深い部分ではしっかり手を握れているので  
はないか…と思いますが、これから二人のすれ違い具合はたびた  
びネタになっていきます。

さて、今回は19・Xシリーズ最終話です。カグヤとヨトルヤのお  
話。

1/14更新予定です。

19・6・A―19・5話後日談―（前書き）

ウランドの上司 カグヤと

ウランドの婚約者 ヨトルヤのお話

ウランド「キング」

就業時間を終え、いつもの残業時間帯。

ハートのキングの執務室に顔を出したのはハートのエース、ウランド。

カグヤは書類に目を落としたまま口を開いた。

カグヤ「どうした」

ウランド「次の休みなんですが」

カグヤは次の書類を捲った。

ウランド「ご予定ありますか」

カグヤはきょとんとウランドを見た。

ウランド自身の休暇の話だと思っていたからだ。

カグヤ「私の休暇の話をしているのか？」

ウランドは手元の上司のスケジュールに目を落とした。

カグヤのこの一月の予定に休暇は無かった。

ウランド「ええ」

カグヤは即答した。

カグヤ「特に予定していない」

ウランド「そういう意味の”予定”ではなくてですな……」

カグヤは怪訝そうに眉根を寄せた。

ウランドは窓の外を見た。

ウランド「……私の妻が先日ご迷惑をおかけしまして」

カグヤは「ああ、そのことか」と再び視線を書類に戻した。

カグヤ「構わん」

ウランド「そのお詫びをしたいと」

カグヤは再びきょとんとウランドを見た。

ヨトルヤ「ごめんなさいね、貴重なお休みを」

カグヤ「いいえ、休暇をとっても退屈なだけでしたので」

ヴァルハラ帝国首都アヴァロン。

世界一の人口と、世界中の一流が揃う世界一の大都市。

話題のティーサロンで待ち合わせ、ウランドの婚約者ヨトルヤとカグヤは人気のランチに舌鼓を打っていた。

カグヤ「…先日はまともにご対応もできず申し訳ありませんでした」  
ヨトルヤは笑った。

ヨトルヤ「こちらこそごめんなさい、

”このくらい”のことでいちいち取り乱していたら、  
あの人の妻になったときに身がもたないわね」

カグヤ「…」

カグヤは何か言いたそうにヨトルヤを見つめている。

ヨトルヤはニコリと微笑んだ。

ヨトルヤ「なあに」

カグヤ「…あの、気を悪くさせたらすみません、

ウインクル氏は貴女のことを妻が妻がと言っているの  
私はてつきり…」

先日、ヨトルヤが姓を”ドラグニク”と名乗ったとき、カグヤはウランドの姓である”ウインクルではなくて?”と聞き返し、ヨトルヤを憤慨させた。

そのことを謝罪しなくてはと考えていた。

ヨトルヤは嬉しそうに笑った。

ヨトルヤ「もう、あの人ったら」

そうしてとたんに鼻で笑った。

ヨトルヤ「いつまで結婚しないのか周りに聞かれるのが面倒くさいんでしょうね」

結婚できない理由が仕事を辞められないことであるため

退職を許可できないカグヤに気を使わせないためのウランドなりの配慮、のつもり

カグヤ「ハハ…」

ヨトルヤはカグヤを見つめた。

見れば見るほど目を引く美女だ。

男女問わず、周囲の視線を集めている。

ヨトルヤ「カグヤさんは今お付き合いしている方は？」

カグヤは苦笑した。

ヨトルヤ「最後にお付き合いしたのはいつ？」

カグヤは懐かしそうに目を細めた。

カグヤ「…私がまだジパングに居た頃ですから…10代前半ですね」

ヨトルヤ「まあ、どんな方だったの？」

カグヤ「とてもかわいらしい娘さんでした」

ヨトルヤは紅茶をむせた。

ヨトルヤ「！？ええと…」そっち”の方なの？」

カグヤは入店時にドアをあけヨトルヤを通したり、

着席の際にヨトルヤの椅子を引いたり、

確かにどちらかといえば淑女というより紳士であった。

カグヤは笑った。

カグヤ「…訳あって当時は男として育てられていました」

ヨトルヤ「お、男として!？」

この美しい人を?それはあまりに無理があるのではないだろうか?  
ただ、他国の、それもジパング国でのこと、ヨトルヤは不用意な質問は差し控えることにした。

…まあ婚約者であるあのデリカシーなし男はなんの遠慮もなしにズバズバ聞くんでしょうけど。

実際はカグヤとトウジロウの仲の悪さやトウジロウのジパング人云々のトラブルを肌で感じているため、

個人的なことは聞かないようウランドなりに配慮している、つもり

ヨトルヤは話題を変えた。

ヨトルヤ「……カグヤさん、あまりお化粧はなさらないの?」

カグヤ「…お恥ずかしながら、よくわからなくて」

ヨトルヤ「お洋服は普段は?」

カグヤの服装は黒いスーツに白いシャツ、美人で目を引く分、悪いが一見したらマフィアに見える。

カグヤ「いつもスーツです。お恥ずかしながらあまりくわしくなくて」

ヨトルヤはポンと手を叩いた。

ヨトルヤ「じゃあ終わったら買い物行きましょう!見立ててあげる!」

世界中のありとあらゆるものがそろった大都市アヴァロンの街は  
常に人であふれかえり、石畳や歴史ある建造物の町並みはいつ来て

も美しい。

また、普通なら女性が飛び上がるようなきれいな店もたくさん並び…普通の女性なら、隣できゃあきゃあと楽しそうなのヨトルヤのようになるのだろう、

環境的にもう男でいる必要はないのにカグヤはどこか自分とは遠い世界のことにように思えて、

自分とは関係ないと壁を作る癖がついていた。

ヨトルヤ「カグヤさん、まずはここ！」

カグヤ「うっ」

——宝石のような美しい色とりどりの下着が並ぶランジェリーショップ

自分も女性のはずだが、どうにもものすごくいたたまれない。

カグヤは非常に落着かなかった。

ヨトルヤはあれもかわいいこれもかわいいとさまざまな商品を手に取り、はたとカグヤを見上げた。

ヨトルヤ「カグヤさん、何カップ？」

こういう女性特有な会話は苦手だ、自分は女性なんだという事実をつきつけられているようで。

カグヤは苦笑いした。

カグヤ「……はかったことがないので……」

ヨトルヤ「じゃあサイズが合わないものをつけている可能性もあるわね！」

だめよー！形が悪くなっちゃう！測ってもらいましょう

！」

カグヤ「いえ、…というかそもそも……」

フィッティングルームで脱いだシャツの下は、サラシだった。

カグヤは申し訳なさそうにヨトルヤと店員を見た。

カグヤ「…さらしなんです」

店員（ええー……っ！？）

ヨトルヤ（…）

ヨトルヤはカグヤの手をとり、ほほ笑んだ。

ヨトルヤ「これから、ゆっくりでいいから、”女の子になって”いきましよう」

カグヤはきょとんとヨトルヤを見つめた。

カグヤ「…人生で始めて魔法圈の下着を購入しました…」

カグヤはなんとなく取り返しのつかないことをしてしまった気分になった。

…父がいれば間違いなく「家の恥」だとぶん殴られているだろう。

ヨトルヤはカグヤを見上げた。

ヨトルヤ「…今、カグヤさんが”女性として”好きな方はいらっしゃるの？」

カグヤ「女性として？」

ふと、浮かぶ屈託のないあの笑顔。

カグヤ「…」

真っ赤になったカグヤの顔を見、ヨトルヤはクスリと笑った。

ヨトルヤ「であれば大丈夫、カグヤさんはきっと女の子になれるわよ、さあ次！」

——女性に人気のブティック

きれいな生地、きれいなデザインの、きれいな洋服たちがズラリと並び。

こんなものを着たら、怒られる。

カグヤはますます背徳的な気持ちになった。

店員が嬉しそうに近寄ってきた。

店員「なんてお美しい方！背も高いし、女優さんかモデルさんでいらつしゃいますの？」

ヨトルヤはフフと笑った。

ヨトルヤ「女優さんかモデルさんに、本当に見えちゃうような服を買いに来たの」

店員とヨトルヤにあれやこれや服を当てられ、まるで着せ替え人形のような、

カグヤは好意はありがたかったが、興味がまったく持てずにいた。

ヨトルヤ「じゃあ、これ、着てみましょうか」

テロテロでヒラヒラのワンピース。

カグヤは後ずさった。

カグヤ「そ、そのような召し物は…ちょっと…」

ヨトルヤは笑って「いいからほら」とカグヤをフィッティングルームへ押し込んだ。

密室に一人になり、ワンピースと向き合う。

これは女の着るもの、着せられるなど屈辱的な気分だ。

トウジロウのヤツが見れば間違いなく大笑いして貶すに違いない、父は肩を落とすに違いない。

自分はこんなもの、着てはいけない。

いつまでたつても出てこないカグヤに声をかけようとした店員をヨトルヤは制止した。

ヨトルヤはフィッティングルーム越しに声をかけた。

ヨトルヤ「大丈夫よカグヤさん、あなたの好きな方は、きっとあなたの女性らしい姿をみて、喜ぶわ」

カグヤ「…そうでしょうか…」

ヨトルヤ「女性らしい格好をした”女性”を、喜ばない男性なんていないわ

もしいたとしても、そんなデリカシーないやつぶつとばしちやえばいいのよ！」

フィッティングルームからクスリと笑い声が聞こえた。

ヨトルヤ「あなたに必要なのは、女性としての自信をもつことよ、大丈夫、私があなたを保証する」

そうして出てきたカグヤの姿に、店中がざわめいた。

店員は思わず拍手した。

店員「なんてお美しい」

まっすぐの背筋、凛とした立ち振る舞い、周囲を思わずキリッとさせるオーラ。

それはまったくといって普段のカグヤであるが、着ている服が軍服からワンピースに変わること、その印象はガラリと変わる。

ヨトルヤは自信たっぷりにならずいた。

ヨトルヤ「うん、いいじゃない！」

そうして何軒かブティックをはしごし、日が落ちて、これまた人気の店でディナー。

ヨトルヤを家の前まで送り、その別れ際。

ヨトルヤ「次のお休みはいつ？また行きましょう！」

カグヤは遠慮がちに笑った。

カグヤ「あまりウインクル氏との邪魔をするわけにも」

ヨトルヤ「いいのよ、あんなさえない男とばかりじゃ、私の女子力も落ちちゃう！」

今日は久しぶりに楽しかった、あなたとはいいお友達になれそう！」

——” お前とはええダチになれそうやな”

昔一度言われたきりだったその言葉。

いつも一目置かれてばかりで、近寄ろうとしても遠慮されてしまう。それに慣れてしまっていたが、それではいけなかったのだ。

自分を好意的に対等に見てくれる、この人を、大切にしたい。

カグヤはほほ笑んだ。

カグヤ「また連絡します」

ヨトルヤ「ただいま、あらウランドくん早かったのね」

帰宅と同時に玄関で出迎えた婚約者にヨトルヤは爽やかな笑顔を向けた。

ヨトルヤからドサドサと荷物を受け取りながらウランドはなるべく不自然にならないように問うた。

ウランド「…今日はね…ところでどうだった？」

勤務中ウランドは婚約者が上司にまた喧嘩を売らないか気が気でなかった。

ヨトルヤ「ウランドくん」

ウランド「うん？」

ヨトルヤの声色は怖かった。

ヨトルヤ「ちゃんと女性扱いしなきゃだめよ」

ウランド「???」

その翌日のカグヤの通勤姿は、一気にトランプ中の話題となった。

トウジロウ「ついに脳みそ腐ったか、豚に真珠てまさにこのことかな」

カグヤ「ふん、腐っているのは貴様の目玉ではないか？」

少し他人と焦点がズれているようだ、治してやろうか？」

その姿を一目見ようとカグヤの帰宅時までほとんどの人が残っていたくらいだった。

それ以来カグヤは適度に休暇をとるようになった。

どうにもヨトルヤにいろいろ連れ回されているらしい。

ある日、ウランドは訊ねた。  
ウランド「…ご迷惑では？」  
カグヤ「…」

学生時代はまるで王子様扱い、

トランプへ就職してからほどなくキングになり、軍の頂点に立つ者として扱われている。

自分を対等に扱う人間など、もはや同じキング同士くらいしかないな  
いと思っていた。

だが、彼女は違った。

自分を一人の女性として、友人として接してくれる。

カグヤはほほ笑んだ。

カグヤ「いいや、ウランド、お前には勿体無い女性だな」

ウランドはきよんとした。

上司のこんなに柔らかにほほ笑む顔を初めて見たからだった。

カグヤ「なんだ？」

ウランド「…妻と浮気とかやめてくださいね」

カグヤは頬杖をついてニヤリと笑った。

カグヤ「どうかな」

男から見ても男前なこの人を、やはり女性扱いは無理だ、とウランドは思った。

19・6・A―19・5話後日談―（後書き）

晴れて二人は仲良しさんになりましたとき、めでたしめでたし？

さて、次回は今月の本編第20話の更新です。

1/21更新予定！

## 20・f o g g y f o g (前書き)

今年初本編。

冷酷な賞金稼ぎ”狂犬”ハイジと再び出くわしたW・B・アライラ  
ンス一行。

”やる”気まんまんのハイジに対して、どうする！？

## 20・f o g g y f o g

霧が立ち込める。

じめじめとした空気が肺にへばりつく。

靄を通して差す日の光は温もりまでは届かない。

鞘から引き抜かれた刀の共鳴音が辺りに響き渡った。

「フィード様！」

よしのは目の前の、コートの袖を捲り、静かに拳を構える”火葬屋”をたしなめるように名を呼んだ。

「ハイジ！」

同時にハニアも、目の前で鞘から抜いた長ドスをぶら下げ、今にも飛びかからんとする”狂犬”を止めようと名を呼んだ。

エオル「よしのさん、絶対動かないでね…！」

エオルはよしのに念を押し、剣を抜いた。

エオル「2対1だよ、分が悪いんじゃない？」

声をかけた先の狂犬は気にする様子もなくニタリと笑った。

そうして何の前触れもなく地を蹴った。

— f o g g y f o g (霧の向こうの霧) —

ガキイン…！

刃物が激しくぶつかる音。

エオルは長ドスの白刃に目をやった。

エオル（何……！？この剣全然手入れされてない……！！）

その長ドスの刃は、刃こぼれや錆びだらけでまるで”刃物”としての役割を果たしていないようだった。

フィード「コラ！エオル！てめえ！俺様がやるハズだったんだぞ！」

エオルはギリギリと剣を拮抗させながらいつもの調子でフィードをたしなめた。

エオル「おバカ！武器持ち相手に危ないでしょ……！」

その時、ドスりと鈍い音が響き、狂犬の革靴がエオルの腹部にめり込んだ。

エオルは吹き飛んだ。

間髪入れず、狂犬はフィードに向け飛びかかった。

ウン、と空気を斬る音が響いた。

クルリとバック転で長ドスを避けたフィードは、着地した足をそのまま踏みきり狂犬の懷へ入った。

フィード「こないだのキレがねえぞ」

狂犬の鳩尾へ向けて放った拳は宙を切った。

フィードの頭上スレスレをクルリと回るハズだった狂犬は突然バランスを崩し、背中からフィードの真上に落下した。

フィード「ぐっ！」

上からのし掛かられる形となったフィードは思わず前屈みに体勢を崩した。

狂犬はクルリと横に転がり、フィードの背中から降りると、呼吸する間もなく長ドスを振り抜いた。

フィード「いつ！？」

ガキン

フィードの首の横で再び刃物と刃物がぶつかる音。

エオル「だから危ないって言ったでしょ」  
フィード「うっせ」

フィードは悔しそうに後ろへ下がった。

エオルはクルリと剣を回し、握り直した。

狂犬はニヤニヤとエオルを真似るようにクルリと長ドスを回し、握り直した。

明らかに挑発であつた。

エオル「…俺はあそこの銀髪と違って安い挑発には乗らないよ」

狂犬はニタリと笑った。

ピリ、と空気が張りつめた。

ハニア「よしの姉ちゃん」

エオルから動かないよう言われた場所から一歩たりとも動けずにいたよしの。

ふと隣を見るとそこには不安げなハニア。

ハニア「止めよう！？危ないよ、怪我でもしたら」

よしのは二人の魔導師を見た。

よしの「…」

ハニア「姉ちゃん！！」

よしの「…危なくなったら止めましょう」

二人の魔導師の爛々とした瞳、

トウジロウの時とは違い二人いつぺんにかからない闘い、

何故かはわからないが、まだこの時点で止めてしまうのは、すなはち”水を差す”ことだ、とよしのは思った。

エオルは地を蹴った。

幾度となく繰り返される金属音。

”当たり前そうなのに”、そういった闘いだった。

フィードは遠巻きに闘いを眺めながらニヤリと笑った。

フィード「一般人があのエオルと互角かよ」

純粹に魔導師でない相手との互角の闘いを楽しむ二人の魔導師とは裏腹に、狂犬は少し苛立っているようだった。

ハイジは突然、長ドスを鞘へ収めた。

エオル「!?」

収めた長ドスの柄からハイジの手は離れない。

ハイジ「キル」

エオルは狂気と殺意を向けられた独特の悪寒を感じた。

ハイジは地を蹴った。

鞘から白刃が覗く。

エオル（居合いの変形か！）

通常であれば剣で受け止めるところであつたが、エオルの直感が”受けるな”と叫んだ。

エオルは反射的に真横に跳んだ。

ズッ

パン…！！

抜かれた長ドスの軌跡に押し出されるように周囲の霧が真っ二つに切り開かれ、一瞬霧の向こう側が覗いた。

後を追うように霧の向こうから木々や岩が地面に落下する音が響いた。

フィードは苦笑した。

フィード「オイオイ…」

エオルはゴロリと一回転し、立ち上がった。

エオル「人間技じゃないな…」

まるで魔法剣のそれだ。

狂犬はニタリと笑うとエオルの方を向き、再び長ドスを鞘に納めた。

ハニア「…なんか…ハイジのやつ様子が変だ…」

よしのはハイジの背中を見つめた。

よしの「…そうですね…あれだけ穏やかな方が…」

ハニア「そうじゃなくて！」

よしのはキョトンとハニアを見つめた。

フィード「そうだなあ」

頭上から聞きなれた濁声が降ってきた。

よしのとハニアは背後を見た。

よしの「フィード様」

フィード「どうにも動きに精彩がねえ」

ハニア「…こないだおいはぎから助けてもらった時は相手に息させるヒマもないくらいずっと刀振るってたのに…」

フィードは”狂犬”の背中を見、溜息をついた。

それは相手が魔導師だからだろう、そこいらのチンピラ相手とはさすがの”狂犬”もワケが違う。

だが、それにしても、前回廃村でほんの数手交えたただだが、だからこそわかる、その精彩の無さ。

よしのはフィードの表情を見、再びハイジを見た。

よしのの目からは所作はまったく歪みなかったが

よしの「…まさか、お怪我をされている…？」

ハニアは血の気が引いた。

ハニア「…崖から落ちた時だ…！」

よしの「エオル様っ！お止めになつてくださいつ！」

剣を構えるエオルの耳にはよしのの声が入っていない様子だった。

フィード「集中しきつてんな、聴こえてねえ」

ハニア「ハイジ！」

ハイジはエオルを見つめ、ニタリと笑った。

ハイジ「キル」

ハイジは再び地を蹴った。

ザアッ

突然、霧が濃くなった。

それは突然どしゃ降りの雨となり、

ジュッ

雨粒の当たった部分が煙を上げ、衣服に穴が空き始めた。

ハニア「痛っ！痛たたたっ！」

ハニアは頭を押さえた。

よしのはハニアに雨粒が当たらないよう覆い被さった。

バサッ

よしのの上から黒いコートが被された。

よしの「フィード様！」

フィードはエオルに目をやりながら口を開いた。

フィード「俺様のコートは特別製だ、この雨でも通さねえ」

覆い被さるコートの隙間からチラリと見えたフィードの腕は焼け爛れ、出血していた。

よしのは自分の頭の上のコートを取り払った。

よしの「フィードさ…」

フィードは無理矢理コートを被せた。

フィード「いいから被ってろっつーの！」

フィードは息を吸った。

フィード「テメエらそこまでだ！」

エオルは剣を降ろした。

エオル「フィード！この雨って多分…」

ブォン！

長ドスの切っ先を、エオルは間一髪避けた。

エオル「ちよつとアンタ！」

エオルはハイジを睨み付けた。

睨みつけられたハイジはニタリと口元を釣り上げた。

フィードは舌打ちした。

フィード「関係ナシかよ…！」

ハニア「ハイジッ！」

ハニアの今にも泣きそうな声に、ハイジはハッとしたように無表情に戻り、ハニアの声のする方を振り返った。

ハニアは泣き出した。

ハニア「痛いよう…！」

ハイジは空を見上げた。

フィードとエオルも同時に見上げた。

エオル「…フィード、さっき言いかけたことだけど、」

フィードはニヤリと笑った。

フィード「ああ、どうやら俺様たちは、”こいつ”の腹の中にいる

らしい」

三人の視線の先、一行の真上には、霧の中から覗く、宙に浮かぶ巨大な瞳。

エオル「雲中顎だ…霧を装って入った生き物を胃液の雨で溶かしてエサにする」

フィード「一時休戦だ、いいな狂犬」

ハイジは長ドスを鞘へ収めた。

ハイジ「キル」

フィード「やめとけ、見るからに武器なんざ効きやしねえよ」

下がってな、とハイジを押し退けると、フィードは呪文を唱え始めた。

フィード「フロム・エ・ス火炎龍！！」

巨大な蛇のような炎が辺りをオレンジ色へと染めた。

炎の通り道は一瞬立ち込める霧に穴を開けたが、すぐさま周囲の霧で穴は塞がれた。

フィードはイライラと頭をかきむしった。

フィード「あーっ！！早くしねえとハゲちまうっ！！」

エオル「フィード、あまり気が進まないけど、ここら辺を大火事に出る？」

大火で蒸発させてしまおう、それがエオルの狙いだっただ。

フィードはブスツと不機嫌そうな顔をした。

フィード「そいつはたぶん”光炎魔法”の範疇だ」

フィードの専攻は爆炎魔法

エオル「…住み分けがよくわかんないよ…」

エオルは背中に剣をしまい、呪文を唱えた。

エオル「フィル・ディク浄水盤！」

——大気中の水分を集める魔法

ザザアと水がぶつかる音が辺りを取り囲んだ。

エオルの正面に巨大な渦が浮かんだ。

フィード「おっ」

辺りの霧も、渦に吸い込まれるように引き寄せられて行く。

上空の巨大な目はパチクリとし、エオルを見た。

フィード「…水の精霊の”力”比べか」

エオルはニツと笑った。

エオル「どっちが従えられるかな？」

霧が徐々に薄らいできた。同時に”雨”も小雨に変わった。

薄らいだ霧の中に濁った泥水のような”もや”が現れた。

フィード「あれが本体か！」

フィードの両手から炎が噴き出した。——魔法拳！

フィード「こいつで終わりだ！」

フィードは地を蹴った。

どかつ

フィードは前のめりに盛大に転けた。

ヒュン、と長ドスが風を切る音。真っ二つになり中空に消えた濁った”もや”。

ハイジの着地と同時に霧は一瞬にして晴れ渡った。

穏やかな陽光のぬくもりが辺りを包み込んだ。

むくりと起き上がったフィードの後頭部にはくつきりと革靴の裏の

形に泥がついていた。

フィード「踏み台にすんなー！！！」

しばらく着地した体勢のままだったハイジは長ドスを鞘に納めながら立ち上がりかけた。

だがフラリとよろめくとズシャリと音を立てて膝をついた。

ハニア「ハイジ！」

ハニアは駆け寄った。

ハニア「ごめん！俺のせいだよね」

ハイジは一瞬キョトンとし、首を横に振った。

ハニア（あ、絶対何のことかわかってない）

よしの（よくわからないけどとりあえず首を横に振りましたわね）  
ハイジの前によしのはしゃがみこんだ。

よしの「どこをお怪我されているのですかっ！？」

フィード「おーい、よしのー俺様らも怪我してんだけどー」

ハイジはよしのに目配せした。

よしのはそれを見せしめ、まっすぐハイジを見つめた。

よしの「一番酷い怪我をされている方が優先ですっ！フィード様、エオル様、少々お時間いただきますっ」

フィード「……」

フィードは苦い顔をした。

エオルは笑った。

エオル「よしのさんには敵味方関係ないみたいね」  
フィードはあからさまに不機嫌になった。  
フィード「よーしのーっ！はーやーくっ！ー！」

ハニア「ええと…落ちたとき、どうやって着地したんだっけ」  
ハニアは必死に思いだそうとした。

だが、ほとんど目を瞑っていて、記憶という記憶がない。

ハニア「ハイジー！お願いだから痛いところを見せてよっ！」

ハイジは「ああ、そういうことか」とキャソックを脱いだ。

キャソックが黒いため分からなかったが、その下の白いシャツは真っ赤に染まっていた。

ハニアは思わず口を塞いだ。

ハイジ「…」

ハイジはこの下も？という視線をよしのに向けた。

よしのは当たり前だと頷いた。

エオルは苦笑いした。

エオル「オイオイ…」

白いシャツの下は古傷だらけの痛々しい体、そしてその鳩尾の真新しい傷口からは肋骨が飛び出していた。

ハニア「背中もっ！！！」

背中一面うつ血、パンパンに腫れていた。

よしのとハニアはポロポロと泣き出した。

ハニア「バカハイジ！こんなになるまで…」

よしの「…何をお考えなんですっ」

ハイジは慌ててシャツを着ようとした。

よしのとハニアはシャツを引っ張ってそれを阻止した。

フィード「なんか楽しそうだな」

エオル「普通の人間なら痛みで卒倒してるよ…それをあの闘い…」

エオルはサンドワームの巣で手首の怪我を強がって隠していたフィードを思い出し、本人を横目で見た。

エオル「君レベルのバカだね」

フィード「意味わかんねー、っかこのまま怪我治ったらまた襲ってくるじゃね？」

それはそれで楽しいけどなとフィードは笑った。

エオルはよしのの肩に手を置いた。

エオル「狂犬、その怪我は治療する、だがそのかわり、剣を引いてくれ」

ハイジはニタリと笑った。

ハイジ「では尚更治療などいらんな」

ハイジは長ドスの柄に手をかけた。

ハニア「ハイジ…」

ハニアは更に泣き出した。

ギユッ

長ドスにかかった手を、それより細く小さな両手が押さえつけた。

よしの「…雇い主様が泣いていらっしやいますよ！！ご自分の仕事をこなしてくださいませ！！」

ハイジはよしのを睨みつけた。

よしのはまっすぐハイジを見つめた。

ハイジ「…俺は賞金稼ぎだ」

よしのは眉をつり上げた。

よしの「今はその前に用心棒でいらっしやいましょう？」

ハイジ「…」

ハイジはフツと笑うと抜きかけていた長ドスを力チリと鞘におさめた。

ハイジはエオルを見た。

ハイジ「うまいエサ」は後に残しておかんな

エオルは腕を組んだ。

エオル「こっちは」面倒事」を後に回してるみたいでいい気分じゃないけどね」

ハイジはよしのの方に向き直った。

ハイジ「頼む」

よしの「はい！」

よしのを取り囲むように風が巻き起こり、光とともによしのの周囲に手のひらサイズの宝珠がユラリと現れた。

宝珠はよしのの周囲をクルクルと回り、正面にライム色の宝珠が来た所で止まった。

宝珠はライム色に輝きだし、光の中からライム色に輝く狛犬が現れた。

狛犬が一度キャンと吠えれば、たちどころに出血が止まり、ペロリ舐めれば、たちまち時間を逆再生するかのように傷口が元へ戻った。

狛犬は古傷も治そうとしたが、ハイジは狛犬の顎を撫で、ニコリ微笑み首を横に振った。

よしの「…よろしいので？」

ハイジは立ち上がりながら頷き、泣きじゃくるハニアの頭にポンと手をおいた。

ハイジ「…それと同じようなものを見たことがある」

ハイジは光とともに消えていく狛犬を見ながらぼそりとつぶやいた。

よしの「え」

エオル「！ど、どこで！？」

ハイジはシャツとキャソックを着ながら答えた。

ハイジ「パンゲア大陸の魔薬業者が持っていたな」

よしの「なぜご存知なのですか」

ハイジはシャツの自分の手元を注視し、不器用な手つきでボタンがけながら答えた。

ハイジ「別のバイトで」

エオル「なんて業者？」

ハイジ「忘れた」

エオル「…同じようなものって、どんなもの？」

ハイジはよしのをチラリと見、再びボタンに視線を落した。

ハイジ「それみたいの中に文字のようなものが入った玉を使って、不思議な力を使っていた」

エオル「不思議な力？どんな？」

ハイジはボタンをかける手を止め、固まった。

ハイジ「………」↑ 思い出そうと頭を巡らせているが、どうにも出てきそうにない。

ハニアはエオルを見上げた。

ハニア「ハイジ、自分に関係ないことってホント覚え悪いから……」

エオル「…ええと、他に何か知らない？」

ハイジ「ない」

ハイジはキャソックの最後のボタンを摘め終わると踵を返した。

ハニア「またねっ」

ハニアはハイジの後を追った。

エオル「…な、なんて微妙な情報……」

よしの「魔薬業者……」

キーテジの町での、嫌な記憶が蘇った。

二人の影が見えなくなると、よしのは二人の魔導師の怪我を治していなかったと慌てて向き直った。

目を向けられたフィードは狂犬の進んでいった方角をにらみつけ、更にブスくれていた。

フィード「あのやる、ガンくれやがった」

ラプリー「んーっ！いい風！」

ラプリーは両手いっぱい広げた体に心地よい潮風を浴びていた。

盗品を売っては金を儲け、貯めた金で馬を買い、あっという間にムー大陸北部の港町にたどり着いた。

自分で自分のための自由な金を稼いでいるという充実感は、ラプリーの”仕事”への意欲を一層駆り立てていた。

ラプリー「さてと、」

潮の匂いは感じるが、空は夜の闇。

正面に広がる海であるはずの景色は真っ黒な平原。

遠くで火影漁の灯りが点々と、辺りはただ波音のみ。

ラプリーはくると振り返ると背後に広がる町明かりに消えていった。

閉店間際のハンターズギルドのバーにて、カウンターで軽食とミルクティー。

口に運びながら眺めるのは無数の手配書が重ね貼られた賞金首の掲

示板、その一番目立つ所にある真新しい手配書。  
ラプリー（フィードさん、エオルさん…）

「お嬢ちゃん」

カウンター越しに皿を吹いていた女店主が話しかけてきた。

ラプリー「あ、ごめん、早く食べちゃうね」

「いいえ、ゆつくりどうぞ」

冒険者登録はしていないが、裏ギルドは怖くて利用できず、泥棒であることを隠してハンターズギルドに出入りしていた。

「賞金稼ぎになりたいの？」

ラプリー「…ううん、でも、ちょっと見ていい？」

「どうぞ」

ラプリーは掲示板の前で手配書の一枚一枚をしげしげと眺めた。

ラプリー（…あれ？）

この間まであった”怪盗モスキート”の手配書が見当たらない。

ラプリー（埋もれちゃったのかな…）

手配書は何枚も上から重ねて貼られているため、下に埋もれている手配書まで掘って探すのは億劫だった。

ラプリー（ま、どうせヘズのことだから元気でやってるよね）

…自分もいずれここに載る時が来るのだろうか。

「人捜しかい？」

カウンター越しの女店主は食器をしまいながら手配書を見つめる、冒険者としてはあまりに幼い少女に話しかけた。

ラプリー「まあそんなところ」

ラプリーは席に戻り食事を再開した。

「俺のターンや」

雲ひとつない夜空。

輝く月。

眼下に街を見下ろす丘の上。

燃え盛る炎の剣、

剣から発せられる炎に照らし出されるは、ニヤリと笑い一点を見つめる黒髪坊主の強面男、トウジロウ。

その脇で力なく膝を折るリケは朦朧とした意識の中で声を捻り出した。

リケ「あの人”を助けない”

トウジロウは剣の炎で啜えた煙草に火をつけ、鼻で笑った。

トウジロウ「何をどうしたら助けたことになんねん、リーダーはん」  
リケは即答した。

リケ「生かして確保、それがリーダーとしての指示よ」

トウジロウは鼻からタバコの煙をゆっくりと吐き、無表情で答えた。  
トウジロウ「了解」

トウジロウの視線の先、雑木林の奥。  
ガサガサと茂みが揺れた。

『クロス』

ヌルヌルとした体表、耳の向こうまで裂けた口、何処を向いているのかわからない紅く光る異形の瞳。

ハンチング帽の男の原型は、既にその衣服のみであった。

トウジロウは笑った。  
トウジロウ「やってみい」

瞬間

トウジロウの左上が陰った。

茂みの奥にあったハンチング帽の男の姿が消えた。

リケ（残像！）

ガン！

炎が激しく揺れた。

ハンチング帽の男の鉤爪と炎の剣とが拮抗する。

だが力加減を測るように徐々に炎の剣が押し始めた。

リケは声を振り絞った。

リケ「悪魔！貴方に戦意はないでしょう！？アーティファクトの炎に焼かれたくなければ、（悪魔）契約解除しなさい！」

ハンチング帽の男に反応は無かった。

リケ（…悪魔の意志ではない）

それはつまり、ハンチング帽の男の強い怨みが悪魔を縛っていることを意味していた。

リケ「…であれば話は早いわね、トウジロウさん！」

悪魔からではなく人間から縛っているのであれば――

炎の向こうからトウジロウの大きな拳が、ハンチング帽の男の大き  
くせりだした鼻先にめり込んだ。

ハンチング帽の男は大きく後ろへ吹き飛んだ。

砂埃を上げて倒れ込んだ瞬間、ハンチング帽の男の周囲から黒煙が  
噴き出した。

リケ（人間が意識を失えば悪魔合体は解ける！！）  
イクセスブレイク

「…マだダ」

立ち込めかけた黒煙は逆再生するかのようにはんちング帽の男の体の中へ戻っていった。

トウジロウはニヤリと笑った。

トウジロウ「おっさん、根性あるな」

はんちング帽の男は立ち上がった。

はんちング帽の男からは繋がりのない単語がブツブツと発せられ、意識という意識が感じられなかった。

はんちング「…帽子…コート…パン屋…」

リケ「記憶の中の単語…必死に自分を”繋ぎ止めている”んだ…!」

トウジロウは炎の剣をリケの足元に投げ捨てた。

炎の剣はたちまちに炎を失い、ただの短剣へと戻った。

トウジロウは地を蹴った。

はんちング「…カード…魔導師…魔薬…」

トウジロウははんちング帽の男の目の前で更に踏み込んだ。

はんちング「…リディア…キーテジ…」

リケ「……トウジロウさん!ストップ!!」

トウジロウの拳ははんちング帽の男の鳩尾スレスレでピタリと止まった。

トウジロウは苦々しい顔をしてリケを見た。

トウジロウ「何やねん」

リケはゆっくりハンチング帽の男に語りかけた。  
リケ「キーテジの町のリディアさん…もしや彼女の行方不明お兄さんでは？」

ハンチング帽の男は制御がきかず震える瞳でリケを見た。

リケ「…あのことを”魔導師によるもの”だと考えなのですね…ですが、…残念ながら直接の原因は別にあります」

トウジロウ（キーテジ…？W・B・アライランスの件か？）

リケ「彼女の死因は魔薬による幻覚症状からの転落死です」

ハンチング帽の男はダランと腕を垂らした。

暫しの沈黙。

ハンチング「…うソダ…」

リケはゆっくりと首を横に振った。

リケ「リディアさんは魔薬の常習者だったの、体が弱いのにバイトを始めたのも魔薬を買うお金を稼ぐため…」

ハンチング「…勝手なことを言うな…」

ハンチング帽の男の体がブルブルと大きく震えだした。

リケ「…妹さんが亡くなった原因は魔導師ではなく、あなたが配っている魔薬よ、ギルティンさん」

ハンチング「…違う…」

リケ「え…」

トウジロウはハンチング帽の男の様子を見、数歩距離をとった。

トウジロウ「リケはん、そろそろあかん」

ハンチング帽の男の瞳の紅い輝きが増した。

ゴッ

そうはさせじとトウジロウの拳がハンティング帽の男の顔面にめり込んだ。

だが、ハンティング帽の男の体はびくともしなかった。

トウジロウはニヤリと笑いながらブラブラと手を振った。

トウジロウ「ケガ治ったばっかやねんけど」

紅い瞳と目があった。

間髪入れずに巨大な口が開いた。

ガチン

金属音を立てて噛んだのはトウジロウがいたはずの中空。

同時に、ハンティング帽の男の足元に鈍い音が響いた。

ハンティング帽の男は足を払われ、一瞬宙を舞った。

仰向くハンティング帽の男の正面には見下ろすトウジロウ。

瞬時に降り下ろされる大きな拳。

ズガアン！！

仰向けに倒れ込んだハンティング帽の男の背中から、地面に亀裂が走った。

ハンティング帽の男の口から黒い煙が噴き出した。

トウジロウ「フ・リージャ熾霜床」——物を凍らせる魔法

ハンティング帽の男の体に霜が降り、黒い煙の噴出が止まった。

そうして再び降り下ろされるトウジロウの拳。

リケ「……」

悪魔が契約を拒否し、それを人間が無理矢理繋ぎ止めている状態、つまり、人間側が意識を失えば契約は解ける……！

ハンティング「グ、アアアアア！！」

氷結した体表をバリバリと鳴らし、ハンティング帽の男の体が激しく波打った。

トウジロウはよし、と数歩距離をとった。

バシッ

トウジロウ「おっ」

トウジロウの腕に絡み付いたのはハンティング帽の男から伸びるトカゲのような尾。

絡み付かれた腕はミシミシと音を立てて引き寄せられる。

トウジロウ「おもしろいやんけ」

トウジロウはニヤリと笑うと尾に絡み付かれたままハンティング帽の男めがけて駆け出した。

リケ「うわっ！」

トウジロウ「！」

リケを見ると、もう一本の尾がリケの足に絡み付きそのままズルズルと引き寄せられている。

リケ「くっ」

トウジロウが投げ捨てた短剣に手を伸ばすが、

ゴボッ

不快な液体音とともにハンティング帽の男の口から吐き出された大量の濁った水。

あと少しで届くというところで水とともに短剣は押し流されてしまった。

同時に

トウジロウ「うおわっ！」

ドチャッと音を立てて、トウジロウは尻餅をついた。

ハンティング帽の男から吐き出された液体は辺り一面に広がり、ヌル

ヌルと全てを滑らせた。

トウジロウのこめかみに青筋が立った。

トウジロウ「野っ郎……！」

リケ「手を抜くからですよ、もう！」

リケは手をかざした。

リケ「<sup>ヴェ・リゼ</sup>風流動！」——物を動かす風魔法

遠くに流された短剣はふわりと浮きあがり、パン！と音を立ててリケの手のひらに納まった。

そうしている間にもリケの足はハンチング帽の男の巨大な口へと近づいていく。

ビチャツと音を立て、トウジロウは液体に手を沈めた。

トウジロウ「<sup>フ・リージャ</sup>熾霜床！」

辺りの液体は変化ない。

トウジロウ（水の精霊完つ壁支配されとる……こりゃあかんわ）

リケ「ラハト・ケレブ！」

短剣に炎が灯り、炎の大剣となった。

炎の剣は足に絡みつく尾を焼き切り、リケの周りの液体を蒸発させた。

ハンチング「オオオ……！」

ハンチング帽の男の巨大な口がリケに迫った。

リケは炎の剣を構えた。

ドカン

リケの頬に液体が飛び散った。

ハンチング帽の男の頭は頭上から降ってきた拳に抑えつけられた。  
ハンチング帽の男の頭上には黒髪坊主の大男。

リケ「トウジロウさん」

リケは先ほどまでトウジロウの居た場所を見た。

一ヶ所地面がめり込んでいる、トウジロウの足形の。

リケはハハと苦笑い、ポツリと呟いた。

リケ「…規格外」

ハンチング帽の男の口から勢いよく黒い煙が噴き出した。

同時に、まるで空気が抜けてしぼんで行くようにハンチング帽の男は元の人間の姿へと戻っていった。

上空に黒い煙が渦巻いている。

リケは炎の剣を構えた。

その時だった。

「こらゝお前！夜中に何しとるかゝ！」

トウジロウ「げっ！」

昼間トウジロウがハンターズギルドで出会った保安官だった。

丘を駆け上ってこちらへ向かってくる。

リケ「知り合い？悪魔を始末するまで足止めを」

トウジロウはリケを見た。

トウジロウ「ちょ、ええとこ（悪魔の始末）もってくなや」

リケ「リーダー命令です。そんなにやりたいならご自分のアーティファクトをもってきてください」

トウジロウはガシガシと頭を掻くと保安官の方へ向かった。

リケは上空に浮かぶ黒い煙をにらみつけた。

リケ「この人から”持って行った”ものを還しなさい」

黒い煙は徐々に爬虫類の形をなし、煙の中から紅い瞳がこちらへ向いた。

悪魔「…視力…還ス…」

リケは悪魔を睨み付けた。

リケ「…”全て”還すのよ！」

悪魔「…聴力…言葉…モウナイ」

リケは短剣から発せられる炎を揺らした。

悪魔「…心臓…ホントウニモウナイ」

リケ「…まだ”持ってる”わね、あなたも連行します」

保安官「何をやっとするんだ！」

トウジロウ「俺らこういう者やねん」

トウジロウは腰に巻いていた隊服の上着を取り上げた。

上着につけられている紋章を見、保安官は再びトウジロウを見た。

保安官「ランプだったのか」

トウジロウは煙草に火をつけた。

トウジロウ「そういうことや」

保安官「…ところで」

トウジロウ「あん？」

保安官「お前ものすごく汚いな」

トウジロウは悪魔の粘液でドロドロとしていた。

トウジロウ「やかましいわ」

保安官はリケを見た。

保安官「で、どんなやつなんだ」

トウジロウ「…そのうち新聞にのるやろ」

保安官はプンスカと怒り出した。

保安官「ワシはこの町の保安官だぞ！知る権利がある！」

トウジロウを通り過ぎようとした保安官を、トウジロウは遮った。

トウジロウ「…おっさん、元気やなあ」

保安官「町を守るもんとして当然だ」

リケ「トウジロウさん！マジックワープの準備が出来たわ」

トウジロウが背後から声をかけてきたリケを振り返った時だった。

ドスッ

保安官「ぐあっ」

トウジロウは脇を締め、背後から伸びるナイフを持つ手を挟み込むとそのまま捻りあげた。

トウジロウ「どういいうつもりやねん、おっさん」

保安官の手からナイフが滑り落ちた。

保安官「…実はこの町の大事な客人が今晚裏ギルドに姿を現さんでな、探しておったのだ」

トウジロウはニヤリと笑った。

トウジロウ「へえ、おっさん裏ギルドなんて出入りしてたん」

保安官「お前ら、ギルティン氏を捕らえに来たな」

トウジロウは保安官の腕を締めたままグルリと体を回転させた。

保安官は前のめりにバランスを崩した。

そのまま足をかけられ、保安官はズダンと音を立て仰向けに投げられた。

トウジロウは起き上がれないよう保安官の胸あたりを踏みつけた。

トウジロウ「ナニ魔薬とか手エ出してん」

保安官「いつものワシでいられるからだ！」

息子がいなくなっってから自分が自分でないようにすっかり気落ちしてしまった。

その落ち込み具合は町中の人に心配されたぐらいだ。もう二度と元の自分には戻れないと思った。

そんな時だ、ギルティン氏に会ったのは。

”魔導師が作った元気の出る薬”

たまたま捕まえた売人が手にしていたその触れ込みを目にし、魔導師が手がけるものということで何の疑いもなく裏ギルドへ足を運んだ。

本当にすぎるような気持ちだった。

「これを飲めば、元通り元気なアンタに戻れるよ」

飲めばたちまちに気分が高揚し、体に力がみなぎった。町のみんなも「元気になった」と喜んでくれた。

保安官「ギルティン氏は救世主だ」

トウジロウ「目エ覚ませドアホ」

保安官「魔導師のお前にはワシらのような弱者がわからんのじゃ！」

トウジロウは呆れ混じりの溜息とともに煙を吐いた。

トウジロウ「知りたないわ」

リケ「どうしたの!？」

様子がおかしい、とリケが慌てて駆け寄った。

トウジロウは保安官から足をどかした。

トウジロウ「リケはん、あの荷車俺運んだるわ」

トウジロウは掘っ立て小屋の前の、魔薬が積まれた荷車へ向かった。

保安官「ま、まて……」

トウジロウは足を止めなかった。

保安官はリケにすがりついた。

保安官「ギルティン氏の持ち物は！？すべて押収してしまうのか」  
リケ「…そのつもりの方ですね」

保安官「ま、魔薬もか！？」

リケは保安官の前に腰を落とした。

リケ「あなたの国の法律では、魔薬はどのように扱われていますか」  
保安官「だがワシは！！」

リケ「私たちにはあなたをどうこうする権利はありません、ただ…  
あなたがやっているのは魔薬です、

もし考える脳がまだ残っているのであれば、よく考えて」

保安官「ワシは…ワシはどうすればいいんだ！」

リケは踵を返した。

保安官「魔薬をよこせええ！！」

保安官はなりふり構わずリケに飛びかかった。

トウジロウ「リケは…ん、何じゃれついてんね…ん」

リケは保安官を取り押さえた。

リケ「…この街の自警団に引き渡してきます、トウジロウさんは先に帰っててください」

トウジロウはタバコの火をもみ消した。

トウジロウ「…了解」

フィード「なんだよ」

よしの「クリスちゃん？」

星が瞬き、ひんやりと冷えてきた地表。

三人と一匹が囲む焚火が心地よい。

さあ就寝だ、とフィードとエオルがどちらが先に火の番をするか話始めた際、よしのがやりたいと言い出し、一モメ始まった時だった。クリスはある方角を見つめていた。

よしのが様子を窺うようにクリスの背中を撫でた。

クリス「いいや、ちよつと距離があるところで、なんか楽しそうなことがあつてそうだなって」

よしの「まあ、クリスちゃんたら、ここも楽しいですわ」

同意を求めて振り返った先の魔導師二人は静かに目を閉じ眉間に皺を寄せていた。

エオル「すごい僅かだけど…精霊たちが震えてる」

クリス「ほー、これがわかるか、まあ、さすがは”天才”様だな、”堕ち”てるけど」

エオルの通り名は”堕ちた天才”

エオル「うるさいタヌキ」

クリス「なんだとこら」

フィードは溜め息をついた。

フィード「こんな、気を付けてわかるかわかんねえかレベルの精霊どものどんちゃん騒ぎが楽しいって？意味わかんねー」

フィードはエオルから毛布を奪うと寝転んだ。

エオル「あーっ！こらフィード！ジャンケンで決めようって！」

よしの「エオル様！私火の番をいたしますから」

エオル「いやっ、えーと…」

クリス「…」

——「どうやら”連中”、本格的に”カーニバル”の準備に取りかかったな…。」——

クリスはエオルと毛布の奪いあいをするフィードを見つめた。

そうしてまるで他人事のように欠伸をすると、よしのの膝の上に飛び乗り、丸まった。

「いいことを思い付いたぞ、フォビアリ」

姿を表す前に声をかけられたシルクハットの男は、

その力士のような大男の背後、蠟燭がチラチラと揺らす柵の影からユラリと現れた。

フォビアリ「…いいこととは？」

フォビアリの声色には一切の期待も込もっていなかった。

「俺の名をいろんなヤツに名乗らせて薬をばらまかせる、

幸い、魔導師のバツチは”山ほどある”しな」

フォビアリはちよび髭を撫でた。

フォビアリ「トランプの捜査を攪乱させるのですか、貴方にしては考えましたね、ギルティン」

その力士のような大男はニヤリと笑った。

ギルティン「俺じゃあねえよ、魔導師に怨みがあるつつつてた、バカな人間さ」

## 20・foggy fog(後書き)

精霊たちのばか騒ぎとは、トウジロウ・リケvsハンティング帽の男のことです。魔法やアーティファクト(魔力を使うもの)を使ったので精霊たちが活発に活動していたのです。

よしのの使命に関してなんとも中途半端な情報をゲットした一行。はたして嘘か本当か!?

ハンティング帽子の男をギルティンと思い込んでいるトランプ。

あざ笑うかのように裏をかくギルティン。

ギルティンたち犯罪組織”ブレイメン”が言っていた”カーニバル”という単語。

なぜかその単語を知っているクリス。

そのクリスが視線を向けた先はフィード。

3周年目(4月)からは物語をどんどん動かしていきたいと思えます。

さて、次週1/28はA.の4~5話(予定)シリーズもの。  
今度はウランド、真面目に仕事します。

20・1・A―魔導師反神使教派テロ加担事件1―（前書き）

ウランドの次の担当事件は…？

その町は低く垂れ込めた分厚い雲に覆われて、昼間だというのに黄昏のようだった。

2、3階建の家々が並ぶ石畳の町。その町の中央に家々よりはるかに高くそびえる窓一つない漆黒の塔。

山吹色のローブにこれまた山吹色のフードを目深に被った男たちが唯一の出入口を出たり入ったり。

その様子を、塔の正面にある建物の二階のカフェから覗く一人の男――”ハートのエース”ウランド

「どうぞ」

ウエイトレスが怪訝そうにウランドの前にコーヒーを置いた。

この男、これで何杯目だろう、かれこれ数時間こうして窓の外を眺めている。

ウエイトレスのその目は明らかに不審者を見る目であった。

ウランド「…どうも」

その視線を知ってか知らずかウランドは変わらずコーヒーをすすった。

ふと視線を感じ、窓からカフェのある建物の出入口付近まで目を落とすと、こちらを見上げる一人の少女。

少女は山吹色のローブを身にまとっていた。

ウランド「…？」

ウランドは再び視線を漆黒の塔の出入口にやった。

少女の姿は無くなった。

少しして

「もし」

声をかけられ振り返ると、そこには先ほどの少女。

16、7くらいだろうか、ふわふわのアッシュがかった金の髪に、深い空色のドングリまなこ、

そして、大きなフードのついた山吹色のコート

少女はじいつとウランドを見つめた。

「お主、”ハイヴ”に興味がありますか」

ウランド（お主？）「ずいぶん若い養蜂家さんですね」

ウランドは興味ないと再び窓の外を見た。

少女はウランドの正面の椅子に腰掛けた。

「その”hive”ではない、見ておりましたぞ、朝からずっとあの塔を見ておられる」

ウランド「…そうですね、なんなんですか？その”ハイヴ”というのは」

少女は目を輝かせた。

「あの塔の者たちのことだ、”腰抜けトランプ”の代わりに神使教徒どもを追い出す正義の使者、それが”ハイヴ”」

ウランドは組んだ足をブラブラとさせながら腕を組み、ニヤリと笑った。

ウランド「なるほど魔法圏の先頭に立っているはずなのに神使教との摩擦に腰が引けてる魔導師たちの代わりに」

神使教と戦ってくれているありがたい集団、ということですね」

要するに、反神使教派のテロリスト集団ということであった。

少女は誇らしげに答えた。

「その通りだ、ワシはそのスカウト担当なのだが、お主はそうわかってここへ来たのではないのか」

ウランドはコーヒーをすすった。

ウランド「いいえ、知り合いを訪ねに来ました。

現在ちょうどその”ハイヴ”のメンバーなのですが、案内いただくことは可能ですか」

少女は残念そうにウランドを上目遣いに見た。

「すまない、スカウト以外は外の者と接触することはかなわんのだから」

ウランドはテーブルに頬杖をついた。

ウランド「ふーん、では私が”外の者”で無くなればよいということですね」

少女は憤慨した。

「我々は確固たる信念のもとに活動しておる！知人に会いたいなどという生半可な意思で入団されては困る」

ウランドは笑った。

ウランド「失礼しました、その”確固たる信念”とは”神使教を排除したいという気持ち”ということでしょうか」

少女はウランドの意図が解りかねた。

ウランドは窓の外を見た。

ウランド「いやゝ本当、

乱暴だしタバコ臭いし、

不真面目だし、

いちいち反抗的だし、

ガキのクセに生意気だし、

目上を敬う気持に欠けてるし、

無意味に偉そうだし、

上から見下ろすし」

少女はきょとんとウランドを見つめている。

ウランドは少女を見、いたずらっぽく笑った。

ウランド「…職場の神使教徒の話です」

少女はまじまじと目の前の男のクロブチメガネの奥を見つめた。

「なるほど、神使教徒へ個人的な怨みがあると」

少女は右手を差し出した。

カーミラ「カーミラという、ようこそ”ハイヴ”へ」

ウランド「…どーも」

ウランドはニヤリと笑い握手に応じた。

20・1・A―魔導師反神使教派テロ加担事件1―（後書き）

さて、なにやら怪しい集団に入団してしまったウランド。  
はてさてどうなることやら。

そして少女は一体何者なのか？

次回は20・2話 2/4更新予定です。

20・2・A―魔導師反神使教派テロ加担事件2―（前書き）

捜査のため反神使教派テロ集団「ハイヴ」に入団したウランド。

「ハイヴ」の少女カーミラに連れられてやってきたのは…

カーミラ「どのサイズがいいかのう」

窓のない真っ白の壁。山ほど山吹色のローブがかけられたクローゼット。

フワフワのアッシュがかった金髪にブルーの瞳の少女

――反神使教派テロリスト集団”ハイヴ”のスカウト　カーミラはクローゼットの前で腕を組んで考えて込んでいた。

その後ろで壁際のベンチに腰掛け、組んだ足をブラブラと揺らすクロブチメガネの男

――”ハートのエース”　ウランドは頭を壁につけ、見下ろすようにカーミラの様子を眺めていた。

ウランド「…別にどれでもいいですよ、…むしろ（そんなの）着なくてもいいんですが」

カーミラはムツとしてウランドに顔を近づけた。

カーミラ「いけませんぞ！制服は団結力の証！ウランド殿、背丈はおいくつですか」

ウランドはクシャクシャと頭をかいた。

ウランド「…若い頃測ったときは確か180くらいでしたから、それよりちよつと縮んだくらいじゃないですか」

カーミラ「…」

カーミラは少しの間ウランドを見つめ、そして部屋を出た。

ウランド「？」

よくはわからないが、監視の目が無くなるのであればちよつどよい。

ウランドはドアノブに手をかけた。

ガチャッ

外側からドアノブが回された。

ウランド「おっと」

開かれたドアにはカーミラ。その手にはメジャー。

カーミラ「おや、お手洗いですかな？」

ウランドはカーミラの持つメジャーを見つめた。

ウランド「…ええ」

カーミラはウランドを部屋の壁際まで押し戻した。

カーミラ「しばしガマンされよ、ほれ、壁に頭と肩をつけて！」

ウランドは心底ハタ迷惑そうにカーミラを見下ろした。

ウランド「…どこまで”スカウト”のお仕事なのですか？」

カーミラはフフと嬉しそうに笑った。

カーミラ「これは私が好きでやっている。同士が増えるのはほんに嬉しくてな…185だ、ウランド殿」

どうにも面倒なお節介娘と関わってしまったようだ、ウランドはどのように展開を持ってゆこうか考え始めた。

ウランド「…いつ知り合いの元に案内いただけるのでしょうか」

カーミラはクローゼットから山吹色のローブを取り出すと目を輝か

せながらウランドに差し出した。

カーミラ「これをお召しになりなされ、きつとちょうどよいはずだ、それからボスに挨拶、お友達にはそれからだ」

ウランド「…へえ、ここのトップに会えるのですか」

魔導師でない犯罪者の親玉がどんな人物か、いささか興味を持った。ウランドは山吹色のローブを羽織った。

――黒の塔の最上階。

ウランド「…どこのボスもテッペンがお好きですねえ」

カーミラ「ん？何か申しましたかな？」

ウランドはニヤリと笑った。

ウランド「…単なる独り言です」

真っ白な壁に囲まれた窓一つない、ドーム型の高い天井の部屋。

ウランドは出入り口付近で立ち止まるようカーミラに制止された。

カッソカッソとカーミラのヒールの音が天井に響く。

カーミラ「ボス！新たな入団希望者を連れて参りました」

部屋の中央にポツンとある白い玉座。

ローブのフードを目深に被り、長い裾で手足すら見えない、男か女かもわからないが、独り、誰か座っている。

何かをボソボソと話しているようだった。

ウランドは違和感を感じた。

ボスと呼ばれたその人物からは生気を全く感じられなかった。

カーミラは話を終えたのか、ウランドの元へ戻ってきた。

カーミラ「ウランド殿、入団式はこれにて終わる」

カーミラの手のひらには小さなカプセル。

カーミラ「これを飲まれよ、さすれば完了だ」

ウランド「…これは何ですか？」

カーミラ「団結のための乾杯のようなものだ」

ウランドはしげしげとカプセルを眺めた。

ウランド「…水なしで飲めと？」

カーミラ「水か！すぐに準備するぞ！待っておれ！」

カーミラが部屋から出たことを確認すると、ウランドはボスと呼ばれる人物を見つめた。

そのままニツと笑うとカプセルを開け、中に詰めてあった赤い粉を胸ポケットの中に全て出した。

ウランド（赤い粉ねえ）

そっして空になったカプセルを元通りキュツと合わせた。

「ウランド殿」

背後にはコップをもったカーミラ。

カーミラ「なぜズルをする」

ウランド「…投薬されるとは伺っておりませんでしたので、キチンと説明していただかないと、

それはそうと何故わかったのですか？貴女、今の今まで水を取りに行ってたじゃないですか」

そうして振り向いた先のカーミラの瞳は不気味に青く光っていた。カーミラの指先からコップが滑り落ちた。

20・2・A―魔導師反神使教派テロ加担事件2―（後書き）

ウランド、いきなりピンチです。

不気味な「ボス」、

豹変する「カーミラ」、

どこにいるかわからない「捜査対象の魔導師」、

ウランドは仕事を果たせるのか！？

次回は2／11更新予定！

20・3・A―魔導師反神使教派テロ加担事件3―（前書き）

テロリスト、カーミラは

潜入捜査目的の入団希望者ウランドの不審な行動に…

20・3・A―魔導師反神使教派テロ加担事件3―

カーミラ「またれよ、ウランド殿」

ウランド「誰が待ちますか」

黒い塔の最上階、窓一つない真っ白な部屋

コウモリの翼を生やし、スイスイと部屋中を飛び回る少女――カーミラと

魔導師の超人的な跳躍力で壁や天井を駆け回り、その追撃を紙一重にかわしてゆくクロブチメガネの男――ウランド

ウランド「通りで、”カーミラ”なんて吸血鬼の女性によくある名前だと思いましたよ」

カーミラ「お主、何者だ、人間の身のこなしではないな」

ウランド「……」

テロリストとはいえ、魔導師ではない、ただの吸血鬼だ。ウランドには攻撃を仕掛ける権限はない。

トランプは検挙対象の魔導師以外は攻撃できない。

カーミラが攻撃を仕掛ける素振りもないためウランドお得意の”正当防衛”も使えない。

ウランド（このままじゃ無理矢理あの薬を飲まされるのがオチだな……）

ウランドはブツブツと呪文を唱えだした。

カーミラ「魔導師か！」

ふと、クロブチメガネに部屋の中央で玉座に座ったまま微動だにし

ない”ボス”と呼ばれる人物が映った。

カーミラ「カミュ！」

カーミラは玉座の”ボス”を守るように覆い被さった。

ウランドは聞こえないようにボソリと呟いた。

ウランド「…別に攻撃なんてしやしませんよ」

ウランドは壁に向かい手をかざした。

ウランド「<sup>グラン・デ</sup>小爆炎」

ドガン…！！

白壁の密室に風が流れる。

ウランドはニコリと笑った。

ウランド「…どうします？もし私があなたの”ボス”の命を狙う、よその団体の刺客だったら」

カーミラはウランドを睨み付けた。

ウランド「…貴女では魔導師に敵いませんよ、どうぞ”お宅の魔導師”をお頼りください」

「また伺います」と言い残し、壁に開いた大穴から、クロブチメガネの男は飛び降りた。

カーミラ「…」

黒い塔を正面に、建物の二階のカフェ。

ウエイトレスはまたかと呆れ顔で窓際を陣取るクロブチメガネの男にコーヒーを出した。

ウランド「ちよつとすいません」

ウエイトレスはウランドを見た。

ウランド「あの塔って、反神使教派の集団ですよね」

ウエイトレスは怪訝そうに眉根を寄せた。

「なに、入団したいの？」

ウランド「知り合いに”会いに来てだけ”なのですが」

「さつきカーミラに連れていかれていたじゃない」

ウランドはニヤリと笑った。

ウランド「交渉決裂です、…原因は私の無知にあったのかと」

「ああ、それでその質問」とウエイトレスは塔を一瞥し、鼻で笑った。

「ハンターズに行ってみな」

ウランドは「あれ？」と身を乗り出した。

ウランド「ありました？最初こちらに伺う前に探したのですが」

「あの団体<sup>ハイヴ</sup>に追いやられて町外れで隠れて営業してるよ」

渡された手書きの地図を頼りに行き着いた先は町外れの今は使われていない古井戸。

井戸に被された木蓋を開けると中に灯りが見える。

井戸を降りると陰気なバーが広がっていた。

ウランド（場所といい…裏ギルドじゃないの？）

カウンター越しに店員に尋ねた。

ウランド「ちよっとお伺いしたいのですが」

店員はニコリと笑顔を向けた。

「はいよ、何にいたしましょう」

店員はメニューを突き出した。

ウランド「…ブラックで」

店員はにこやかに椅子につくよう促した。

ウランド「“ブラック” ついでにいいですか、この町の“黒い”塔についての情報をいただきたいのですが」

店員は笑った。

「賞金稼ぎかい？止めときな」

店員は賞金首の手配書が無数に貼られた掲示板に目をやった。  
その真ん中に何枚も同じ手配書が貼られていた。

——賞金ランクB “女王蜂” カーミラ

「ランクBだ、そんじょそこらの冒険者じゃ手エだせないよ」

ウランド「…ふーん、その冒険者の相場みたいのは詳しくありませんが、カーミラさんが賞金首だということはわかりました」

ウランドはコーヒーを一口飲んだ。

ウランド「私は賞金稼ぎではありませんし、カーミラさんに用があるわけでもありません。」

ウランドはカーミラに着せられたローブを脱いだ。

シャツの胸ポケットと両袖にある紋章——

「あ、あんたトランプだったのか!？」

ウランド「あの団体に魔導師が二名所属しているはずなのですが」  
店員は皿を拭く自らの手元を見つめた。

「一人はカーミラの賞金狙ってやってきた賞金稼ぎだ、”自分は魔

導師だから大丈夫”とタカを括って”あのザマ”さ、もう一人は「ウランド」”そのザマ”になった魔導師の件を調査しにきたトラ<sup>っ</sup>ン<sup>ち</sup>プの諜報です」

ウランドはコーヒーを啜った。

ウランド「で、”あのザマ”ってなんなのですか？話を聞く限りは”自ら望んで”というようには聞こえませんが」

店員はニヤリと笑った。

「なんでも、”骨抜き<sup>き</sup>の術

ウランド「骨抜き？」

そうしてチラリとウランドの左手薬指に目をやった。

「あんたもカーミラにかかったら嫁さんどころじゃなくなっちゃうかもよ」

ウランドは「ああ、そういう意味か」と再びコーヒーを啜りかけた。しかし、その手を止めた。

ウランド「その噂って、どこから出たんでしょうね」

店員は笑った。

「んん？」

ウランドはコーヒーを見つめた。

ウランド「…」

（賞金稼ぎのほうはともかく、うちの諜報まで）

赤い薬、

賞金稼ぎや諜報が町について最初に行く場所、

カーミラに薬を飲まされていたら決して漏れるはずのない”噂”、

カーミラに追いやられたハンターズギルド、

…ワンドリンク制

ウランド「…お手洗い借りていいですか」

「飲んでからにしろよ、今混んでるから」

店には店員とウランド以外人っ子ひとりいない。

ウランドは店員を無視し席を立った。

ウランド「ゲホッゴホッ」

口に指を突っ込み、先ほど飲んだコーヒーを全て出した。  
僅かに身体が熱い気がする。

水道で口をすすぎ、腕で拭う。

ウランド（やってくれましたね…）

便所のドアを開くと、目の前には先ほどの店員。

瞳は不気味に青く光り、その手には包丁。

「…コーヒー…、飲み干すまで帰さないよ」

ウランドはニヤリと笑った。

ウランド「やっぱり」

便所の前で白目を剥いてのびた店員。

荒らされたカウンターキッチン。

荒らした張本人の手の中には瓶に入った大量のカプセル。

カプセルを開けると赤い粉。

ウランドはダルク熱っぽい身体をそのままに、ハンターズを出た。

20・3・A―魔導師反神使教派テロ加担事件3―（後書き）

どうやら変な薬を飲まされてしまったらしいウランド。

ターゲットの魔導師は二人。

しかし潜入捜査では居場所の確認できず。

はたして無事確保することはできるのか？

次回は2／18更新予定！

20・4・A―魔導師反神使教派テロ加担事件4―（前書き）

冒険者のための情報提供施設であるハンターズギルドが”ハイヴ”とグルだった。

まんまと謎の薬を飲まされてしまったウランドは…

人気のない路地裏。

長い溜め息をつき、体から空気が抜けて行くのと同時に、ズルズルと壁に寄りかかってしゃがみこんだ。

体が熱い、脈拍が速くなり、息が上がる。

ウランド（何の薬だったんだろ、嫌だな）

昔から体は頑丈で、病気という病気をしたことがなかったウランド。例え風邪を引いても根性で治してきた。それには理由があった。

ウランド（薬って本当嫌いなんだよな、苦いし） ↑ ”丸飲み” という言葉はこの男の辞書にない

ウランドはYシャツの胸ポケットに指を入れ、摘まんだ。

胸ポケットから出てきた指に摘ままれていたのは”赤い粉”。

ウランドの頭の中に一つの単語が浮かんた。

”一時退却”

正体不明のこの赤い粉。

ボスとカーミラ以外は全員飲まされているに違いない。

飲まされることによって、どうして本案件のような状況になるのか、正確な状況を分析するためにも赤い粉を調べに一度持ち帰る必要がある。

そのついでに治療してもらおう。

だが、ウランドのその考えは次の瞬間見事に打ち破られた。

「ウランド殿」

野太い声が横から降ってきた。

ウランドは腰を降ろしたまま目だけ右上に向けた。

山吹色のローブ。

青白い顔をした生気のない、まるでゾンビのような男。  
その男の顔に、ウランドは見覚えがあった。

「お主が探している男というのはこれか」

まるで他人事のような言葉。

ウランドは男の目を見つめながら問いかけた。

ウランド「…私は今カーミラさんとお話しているということですかね」

男は死人のような表情のまま答えた。

「いかにも」

山吹色のコートの隙間から、首筋に小さな穴が二つ並んでいたのをウランドは見逃さなかった。

ウランド「…吸血鬼に吸血されると吸血鬼になるのは存じていますが、操られるというのは耳にしたことないですね」

「もう一人魔導師がいる。お主のように潜入して妨害しようとした輩だろう」

ウランド「あなたが飲ませようとした赤い粉に関係が？」

「そやつもじきに寄越そう」

言い放つと、男からカーミラの気配が消えた。

話しまるでかみ合っていない、というよりカーミラはウランドの話に対し相手をする気がないらしい。

男は呪文を唱え始めた。ウランドは苦笑いした。

ウランド「こらこら、ここは町中ですよ…」

ゴッ

唱えかけた呪文は咳き込みで中断された。

鈍い男を立てて、男の鳩尾にウランドの拳がめり込んだ。

立て続けに、腹を押さえて丸まった男の背中を掴み、グイと引き寄せ鳩尾に膝。

男はたまらず膝をつきかけた。

ウランドはそれを許さず、襟首を掴むとドカリと壁に押し付けた。

男は相変わらず表情に生気がない。瞳は不気味に青く光続けている。ウランド「…正気には戻っていないみたいですね」

（術であれば術者を叩けば戻ることもある…」どさくさに紛れて”賭けてみますか）

”どさくさに紛れて”とは、

通常トランプの業務としてはターゲットの魔導師を捕らえてセイラムに引き渡すだけであり、今回で言えばカーミラを深追いする必要はない。

それは冗長であり、トランプの業務外であり、ただの単独行動。

もしこの場にいるのがカグヤやトウジロウであれば unnecessary ことはなかっただろうが。

ウランドは笑った。

ウランド（カーミラさんをお節介だと思ってしまいましたが、人のこと言えないですね）

ウランドは再び呪文を唱え始めた男の頸部に手刀を入れ気絶させた。

カグヤの言う”いつもの病気（ ）”の始まりだった。

トランプの規律違反、つまり単独行動。 19・4話参照

カーミラ「カミュ……」

黒い塔の最上階。

窓一つない白壁の密室。

中央の玉座に座するローブをすっぽりと被った人物の前に屈み、カーミラはその膝の上に頭を乗せた。

カーミラ「…何があってもお前は私が守るよ、お前がそうしてくれよう」

ズズン…

僅かに塔が揺れた。

火と風の精霊のざわめきをカーミラはただただ見つめていた。

カーミラ「…必ず守る」

黒い塔の一階。

塔の唯一の出入口。

その真逆の壁が突然爆発した。

魔法を放った後で、ウランドは気付いた。

ウランド（あ、この塔倒したら町が下敷きになるな…）

塔は町の中央に建っている。

魔法はこれ以上使えないな、とウランドは思った。

わらわらと山吹色のコートを羽織った男たちが衣擦れと足音だけ鳴らして集まってきた。

まるでゾンビのようだ、とウランドは思った。

男たちの手には物々しい耕具や剣。

ウランドはニヤリと笑った。

ウランド「ごめんなさい、ちょっと入り口間違えちゃいました」

ウランドが両手をあげ、降参のジェスチャーをした瞬間、男たちは

一斉にウランドへ飛びかかってきた。  
同時にウランドも男たち目掛け走り出した。

魔導師との戦いで勢い余って塔に穴を開けた（大嘘、魔法を使わせる前に気絶させた）

武器を構え襲われたから正当防衛（実際は襲わせた）、  
一対多の多勢に無勢（大好きなシチュエーション）、

ウランド「言い訳完璧イ！！」

塔の地響きがだんだんと鎮まってく。  
やがて本当に鎮まり、白い扉が開いた。

「どうも。もう一人の魔導師が見当たらなかったのですがこちらですか？」

扉から現れたのは、息を弾ませ額から汗を流す、クロブチメガネの男。

ネクタイを緩めると、ウランドは髪をかきあげた。

玉座に座する人物の膝の上から、カーミラは顔をあげた。

カーミラ「いかにも。彼はこの”ハイブ”で一番の実力者」

カーミラは立ち上がり、背中からコウモリの羽を広げた。

同時に玉座の影から山吹色のコート、身に覚えのある顔だった。

元気な挨拶の気持ちいい諜報四年目の若手。

初めて一人で事件を担当するのだと目を輝かせながら報告に来たのがウランドの中の最後の記憶だった。

あの元気で澁刺としたエネルギーシユさは、見る影もない。

ウランド「多勢に無勢だなんて卑怯ですね」  
カーミラ「散々暴れておきながら何を言う」

——ヤツはハンターズで赤い粉を飲ませた。  
——…勝てる。

カーミラが指をパチンと鳴らすと、玉座の後ろに立つ山吹の男の瞳が不気味に青く光だした。

20・4・A―魔導師反神使教派テロ加担事件4―（後書き）

二人目の魔導師と対峙するウランド、  
たちはだかるカーミラ、そして”ハイヴ”のボス。

トランプであるウランドは魔導師以外の一般人を攻撃できない。  
おまけに薬でヘロヘロ。

はてさてどうなる！？

次回は2/25更新予定！

20・5・A―魔導師反神使教派テロ加担事件5―（前書き）

ついにたどり着いた二人目のターゲット魔導師。

しかし、カーミラ、ハイヴのボスがその前に立ちはだかる？

「イド・ローク  
爆水圧」

激しい勢いで襲いかかる滝のような多量の水。

ウランドは軽々と避けると山吹色のコート目掛け走り出した。

山吹色のコートが次の呪文を唱え始めたと同時にウランドの拳が伸びる。

カーミラ「させぬ」

羽ばたく蝙蝠の羽。

ウランド「おっと」

顔の前に伸びたカーミラの細く白い手がウランドの鼻先を掠めた。

カーミラ「おのれちよこまかと」

カーミラが目の前を飛び去る瞬間、ウランドとカーミラの視線がち合う。

カーミラを挑発するためニヤリと笑い掛けたその時だった。

カーミラの青い瞳にドキリと心臓が跳び跳ねた。

ウランド「?!」

ウランドは思わず左胸を押さえた。

ウランドの顔の正面に手が延びた。

「イド・ローク  
爆水圧」

ウランドは激しく壁に叩きつけられた。

ウランド「あいたた」

ウランドは頭を押さえながらムクリと起き上がりかけた。

しかしその時、頭上が翳った。

どきり

ウランドの上に馬乗りになるカーミラ。

カーミラ「てこずらせおつて」

カーミラはウランドの両頬に手を添えた。

カーミラ「私を見る、ウランド殿」

カーミラの両目が青く光った。

ウランド「…」

ウランドは目を細めた。

カーミラはウランドのネクタイをほどき、その端に口づけると、怪しく笑った。

カーミラ「どうだ、ドキドキするだろう?」

ウランド「…よく見ると言われても」

ウランドは左右を見回した。

カーミラ「ひゃ！」

ウランドが突然立ち上がったため、カーミラはウランドの上から転げ落ちた。

ウランドは横に大きく飛び、カーミラと距離をとった。が、飛びすぎて背中を壁に強打した。

ウランド「う…げっほっ」

世界がぼやけ、何一つ焦点があわない。

ウランド「すいません、メガネどこです？」

カーミラ「は？」

真正面から魔法を浴び、クロブチメガネは部屋の角で粉々になっていた。

カーミラ「わ、私の目が見えぬのか」

ウランドはポリポリと頭をかいいた。

ウランド「…ええ、そもそも”私の目が見えない”ですからね、どうもすいません」

その謝罪には全く悪びれた様子 wasn't.

呪文を唱える声が聞こえる。

呪文の内容から次に来る魔法を推測した。

ああ、これは下手したらケガするやつだ。

相手は流水魔法使い、水の精霊が見えていたら魔法の流れも読めるが、あいにくウランドは爆炎魔法使い、火と風の精霊しか見ることが出来なかった。

スフ・リエル・ロー  
「流水槍！」

ズガン！

白壁を貫く水の槍。勘で避けたギリギリ頭上。

ウランドはフーと溜め息をつき、いつもの低くボソボソとした声で  
呟いた。

ウランド「…困りましたねえ」

そうしてニヤリと笑い、目を細めた。

ウランド「本当に何も見えない」

20・5・A―魔導師反神使教派テロ加担事件5―（後書き）

メガネが壊れたっ！

代替品くらい用意しておきなよ、ウランド…。

かなり視力が弱い様子のウランド。その理由は次回明らかになります。

思わぬところで絶体絶命のピンチが訪れた！どうするハートのエース！

次回は3／4更新予定。ちなみにこのシリーズ、20・6話まであります。

20・6・A―魔導師反神使教派テロ加担事件6―（前書き）

戦闘中、メガネを壊し、全く見えなくなってしまったウランド。  
2対1の多勢に無勢、どうする！？

反神使教派テロリスト集団”ハイヴ”のアジト黒の塔。

その最上階、窓一つない白壁の密室。

中央の玉座で微動だにしない”ハイヴ”のボス。

”ハイヴ”の制服、山吹色のローブを纏うトランプの諜報隊員。

ハイヴのスカウトだと名乗る吸血鬼の少女、カーミラ。

部屋の角で粉々になったクロブチメガネ。

ウランドは目を瞑った。

カーミラは笑った。

カーミラ「なんだ、観念したか」

ウランドも笑った。

ウランド「いえいえ、こんな仕事柄ですからね、メガネなんてかけていたらよくあることです」

魔導師の中でも強い光を伴う爆炎魔法は視力低下や失明などはザラであった。

大抵の爆炎魔法使いは魔法の義眼や瓶底眼鏡である。

特にトランプのような戦闘集団では弱点になりやすい眼鏡などというものをかけていたらまず採用されない。

現在のトランプで任務中も眼鏡をかけているのはウランドだけであった。

トランプの採用試験の際に、受かったら魔法の義眼に変えるつもりと言って受かったが、

そのまま何年も手術を受ける気配がないまま今の要職についてしまったため、誰も何も言えずにいた。

当の本人はというと、

「手術とか怖くて無理」

全くの口八丁であつた。

ウランド自身「よくあること」と発言する通り、平隊員の頃も現在でも戦闘となると荒っぽいウランドはこの状況に既に慣れていた。カーミラ「ではなぜ目を閉じている」

ウランド「簡単です、使い物にならないなら使わないだけです」

爆炎魔法使いは火と風の精霊使い。

魔法は悪魔を介して精霊を操るものだが、

それ以前に精霊の存在を感じとることは魔導師の基本中の基本――

スフ・リエル・ロー  
「流水槍」

壁に突き刺さる水の槍。

ウランドはまたしても間一髪、それを避けてみせた。

カーミラ「なれば」

羽ばたくコウモリの羽。

カーミラはあつという間にウランドの頭上まで飛ぶと、背中をとろうとウランドの背後に回った。

だが、

ダン！

まるでわかっていたかのように、ウランドはくるりと後ろを向き、カーミラの両腕を掴むと壁に押さえつけた。

カーミラ「くっ！やはり見えているではないか！」

ウランド「いいえ、半分は風の精霊を感じ取って動いています」

カーミラ「はんぶん……」

目の前のウランドは明らかに両目とも瞑っている。

だが、正確にカーミラの腕の位置を把握して掴みに来た。いくら風が読めてもそこまでは無理だ。

カーミラ「なぜ腕の位置までわかる」

ウランドはニヤリと笑った。

ウランド「もう半分は、勘」

この男、戦闘慣れとかいうレベルではない。

カーミラはもがいた。

ウランド「あまり抵抗しないでください、あなたに危害を加えるつもりはありません」

背後で呪文を唱える声がする。ウランドはカーミラを羽交い締めにし、声のする方角——山吹色の魔導師へ向けた。

ウランド「こら、あなたにまで当たりますよ」

カーミラは笑った。

カーミラ「構わん、お前を倒せるのならば、それに私は吸血鬼だ、魔法では死なん」

……少し、痛いだけだ。

カーミラはウランドが逃げないよう自らを羽交い締めにする腕を掴み、硬く目を閉じた。その掴む手は震えていた。

ウランドは溜め息をついた。

ウランド「ああ、もう」

スフ・リエル・ロー  
「流水槍」

じんわりと広がる生暖かい赤。

カーミラ「…なぜだ…」

一瞬だった。

魔法が放たれた瞬間、ウランドは盾にしていたカーミラを守るようにくるりと後ろに向け、

さらに避けようと横へ跳んだが、一步遅かった。

自分の上に覆い被さった格好で倒れているウランド。

生暖かさを感じ、手のひらに目をやると真っ赤に染まっている。

カーミラ自身は単に重いだけで、どこも痛くはなかった。

この赤は目の前のこの男のわき腹から流れ出ている。

ウランドは溜め息をつき、むくりと上体を起こした。

ウランド「怪我はありませんか？頭、打ってませんか？」

カーミラ「…ない」

…頭も背中も打たぬよう、手を添えて跳んでくれたではないか…

カーミラ「なぜだと聞いている」

ウランドはわき腹を押さえながら呟いた。

ウランド「…こりや確実にトウジロウのヤツにバカにされるな…」

カーミラ「…」

ウランド「あ、すみません」

今度の謝罪は悪気を感じられた。

ウランド「一般人を守るのは普通に仕事ですからね」

カーミラ「あの魔導師は私が操っている」

ウランドは傷口を抑えていた血まみれの手を反対側の袖でふき取った。

ウランド「ええ、知っています、早く術を解いてください」

カーミラは唇を噛み、拳を握った。

カーミラ「…ボスには手を出すな、それが条件だ」

ウランドはキョトンとした。

ウランド「ええ、貴女のボスに手出しするつもりは毛頭ありません」  
今度はカーミラがキョトンとした。

カーミラ「お主、ボスの命を狙ってきた刺客だと申したではないか」  
ウランドは悪びれる様子もなく答えた。

ウランド「それはもしそうだったらどうしますかと申し上げただけで、意図は別にありました」

カーミラ「？」

ウランドはキョロキョロと辺りを見回しながら続けた。

ウランド「申し遅れましたが、私は”トランプ”で”ハートのエース”をしております」

カーミラの素っ頓狂な声が白壁の密室に響いた。

カーミラ「ハートのエース！？お主、あのウランド・ヴァン・ウィンクルか！！」

ウランドは一瞬再び傷口を押さえ、そうしてまた押さえた手を外すと反対側の袖でごしごしと血を拭いた。

ウランド「はい、うちの協会員が二名、そちらにお世話になっているのを連れ戻しに来ました」

カーミラ「連れ戻しに…」

ウランド「私の不用意な発言で話をこじらせてしまいましたね、すみません」

今度の謝罪に悪気は感じられなかった。

ウランドはワイシャツについた砂埃を払いながらカーミラを見つめた、…あまり焦点はあっていないが。

ウランド「神使教寺社の破壊や神使教徒への数々の野蛮な行為、貴女方のそれを私は咎める権利はありませんが、

例え操られていたとしても魔導師がそれに加担することは許されません」

カーミラは部屋の中央の玉座の隣で指示を待つ山吹色の魔導師に目をやった。

カーミラ「…私は仲間に入れる者を誤ったということか」

だが、始めにその話をされたところで、仲間を奪われた、この男を攻撃していたことに変わりはないかつたろうが。

ウランドはよつこらせとわき腹を押さえながら立ち上がった。

ウランド「あなたのいう仲間の定義についてあれこれ言つつもりはありませんが、一言だけ」

カーミラはウランドを見上げた。

ウランドはわき腹を押さえている方の肩に反対の手を添え、玉座のあるらしい方角に目をやった。

ウランド「あなたとあなたのボスクらいの信頼関係を、仲間というのではないかと、私は思います」

山吹色のローブに身を包み、誰もが同じ死人のような表情、個人の意思を全く無視した命令をこなすだけの生きた人形――

カーミラはフラリと立ち上がり、玉座の主を抱き締めた。

カーミラ「…それは、私と会話を交わしてくれなくともか？」

玉座のひじ掛けから、主の腕がだらりと下がった。

ウランドはやはりかと思った。そうしてカーミラの声を頼りにゆっくり玉座があるらしい方角へ足を進めた。

ウランド「…ミイラ崇拜の文化がおりになるのであれば失礼かわかりませんが、亡くなった方はもう喋りません」

カーミラの目から大粒の涙が零れ落ちた。

カーミラ「息もしてくれぬ、いつものように笑いかけも名前を呼んでくれさえも！」

ウランド「カーミラさん」

カーミラは泣き叫んだ。

カーミラ「神使教の者どもが！カミュの頭に石を投げた！」

ウランドはぼんやりと見える、ボスを抱きしめ泣きじゃくる金髪を撫でた。

カーミラ「…そうしたら…カミュは…動かなくなった…！」

吸血鬼は悪魔の使い。

そういう教えの神使教分派の地域だった。

他所から巡礼で立ち寄った神使教徒、それがカミュだった。

地域のものに捕らえられ、殺処分寸前の私を助けてくれた。

カミュの仕える分派では、吸血鬼差別は無かったそうだ。

どこまでも慈悲深いカミュに、私はなついた。

ある日私は尋ねた。

「お前も吸血鬼にしてやろう、さすればほぼ永遠の命が手にはいるぞ」

カミュはうなずかなかった。

カミュは言った。

「神から自分に与えられた限りある命をまっとうすることが自分の役割だ」と。

私は理解出来なかった。なぜ永遠を選ばないのか、それはすなわち死を、永遠の孤独を選ぶということだと。

カミュは笑った。

「永遠の孤独だなんて、さみしいこと言わないで。もしそうだったとしても、君が思いさえしてくれれば、僕は孤独にはならない」

やはり、私にはカミュの言うことが理解できなかった。

日に日に、吸血鬼を擁護するカミュへの嫌がらせがエスカレートした。

カミュはもうじき新たな巡礼地に赴くと言っていた。

私はついていきたいと言った。

カミュは笑って答えた。

「もちろんだとも、この地域の外で、君の他の仲間がどんな暮らしをしているか、見せてあげるよ。」

もうじきだったのだ、旅立ちまで。

だがその旅立ちはやわなかった。

ウランド「神使教への復讐のために立ち上げたのが”ハイヴ”ですか」

カーミラは首を横に降った。

カーミラ「カミュを神使教から守るための”ハイヴ”だ」

ウランドはボリボリと頭をかいた。

ウランド「貴女は優しい方ですね、ただ、お気づきですか？」

カーミラは涙の止まらないどんぐりまなこをウランドへ向けた。

ウランド「あなたの無差別な神使教への暴力も、貴女とカミュさんを迫害した神使教徒と同じです」

カーミラは怒りのこもった、叫び声に似た声をあげた。

カーミラ「違う！」

ウランド「違います、貴女はカミュさんを守りたかった、

神使教徒のみなさんも吸血鬼からご自身を守りたかった、  
そのために暴力を振るった」

耳を塞ごうとするカーミラの手をウランドは掴み、無理矢理こちらを向かせた。

ウランド「貴女の優しいカミュさんは、今の貴女を見たら心を痛めませんか？」

震える瞳で、カーミラは玉座に座するミイラを見つめた。

カーミラ「…何か言ってくれ、カミュ」

ウランドはカーミラの腕をそつと離すと優しく言った。

ウランド「彼は神から与えられた限りある命を既にまっとうしています、自由にしてあげましょう」

生き人形たちで組み立てられた”仮初の仲間”、すでに”永遠の孤独”に旅立っていた命の恩人、いや、本当に”孤独”だったのは、…私か。

カーミラ「…私にはもう何もない、これから何をしたらいいかわからない、…もうどうでもいい、自首するよ」  
ウランド「…何をしたらいいかわかりじゃないですが、貴女の”これから”はまずそこからです」

——ハートのキング執務室

キングのデスクの横に簡素な椅子。  
向かい合う形でカグヤとウランドは座っていた。

カグヤ「なるほど、強力な惚れ魔薬で操る術の効果を増幅させ、魔導師をも従えていたのか」

ウランドの脇腹に翳されたカグヤの手からは暖かな光。

ウランドはその間、いつものごとく落ち着きなくモゾモゾとしている。

ウランド「ええ、ただそんな魔薬を提供する業者もえげつないですねえ」

カグヤの手から光が消えた。

カグヤ「よし、熱っぽさとわき腹の痛みは無くなったはずだ」

ウランドは傷を負ったほうの肩をぐるぐると回した。

ウランド「ありがとうございます」

カグヤはジロリとウランドを見た。

カグヤ「しかし流れとはいえ今回はまた随分と派手にやったな」

ギクリ

ウランドはすでに傷が全く無くなったわき腹をさすった。

ウランド「ええ、流れで」 ↑ 強調

カグヤはウランドの横の椅子に置かれた血染めのワイシャツに目をやった。

カグヤ「そのシャツはお前の細君には見せるなよ、心配する」

ウランド「ええ、もちろんそのつもりです」

突然執務室のドアが開いた。

「キング！聞いてくださいよ！エースがまた…」

ドアを開けた秘書は固まった。

ウランド「…私がなんです？」

秘書は苦笑いしてまた後で来ますとドアをしめかけた。

しめかけたドアを、ウランドは足を挟み、そしてこじ開けた。  
この秘書は先日の記者の件でも妙な誤解をされている。

怪我の治療でカグヤの前でワイシャツを脱いで座っていたから、そのことでまた妙な誤解をされているとウランドは考えた。  
観念した秘書はウランドの横をくぐり、カグヤの元へ走った。

「取り調べの中で、エースが”女王蜂”カーミラに抱きついたり押し倒したりしていたと！」

ウランド「は？」

ウランドは固まった。一瞬なんのことを言っているのかわからなかった。

記憶を辿り、それっぽいのはあのことが、と言われている内容を整理した。

羽交い締めにした時と、脇腹を怪我した時のことを言っているようだ、それしかない。

今取り調べをしているのは玉座の間で戦った魔導師だ、操られているときの記憶があるのは今後に役立つが、それにはどうも中途半端すぎるようだ。

ウランド（誤解をしているのはそっちーっ！？）

この秘書でなく、あの魔導師が。

向けられたカグヤの視線は冷ややかだった。  
カグヤ「今度”こそ”細君へ報告だな」

「ウランド」今度”も”誤解ですっ！！！！」

## 20・6・A―魔導師反神使教派テロ加担事件6―（後書き）

（本家サイトブログより転載）

この話で顕著だったのは、神使教カミュと魔法圏ウランドの考え方の違いかなと。ウランドは亡くなった方はもうしゃべらない、とか、もう自由にしておきましょう、とか、「死んだらそれで終わり」といったような論理的、物理的な内容の話をしていますが、それに対しカミュは生きている人が死んだ人のことを思っていれば、死んだ人は孤独じゃない、というすごく精神的、宗教的な考えです。

これはこの小説の中でたびたび出てきている神使教と魔法圏の対立における根本的な考え方の違いといえますが、そういったところが如実に表れているのかなあと。

これは当初意図的に書いたわけではなく、ウランドの言動を書くときはウランドの気持ち、考え方になって、カミュの言動を書くときはカミュの気持ち、考え方になって、書いた結果がまさにこのような違いになりました。

あー、やっぱり根本的に両者は違うんだな、と後から思いました。なんというノープラン。

それからウランドがカミラにかけた最後の言葉

「貴女の”これから”はまずそこからです」

やさしい言葉や同情的な言葉ではなく、だが、相手を貶めるような言葉でもなく、あくまで今現実にあるべき道を客観的に示す、ウランドらしさを表現したつもりです。

また、

「貴女の優しいカミュさんは、今の貴女を見たら心を痛めませんか？」

というセリフ。ここはかなり迷いました。

ありきたりなセリフですよね。

「今のあなたをみたら悲しむだろ！」

みたいな、よくあるセリフ。

ただ、犯人が相手のことを思っ”やっっている”場合、上のセリフをかけられても、絶対「悲しむはずがない」と答えると思うんですね。

犯人の思いの中では、相手の思いは自分に同調してくれているはず、だから”やっっているんだ”、みたいな。

だから、そのパターンでは「今のあなたをみたら悲しむだろ！」というセリフは犯人に響かないのではと考えました。ウランドは。

そこで

「貴女の優しいカミュさんは、今の貴女を見たら心を痛めませんか？」

というわざと微妙に遠まわしな表現を使って、カーミラが「カミュが心を痛めるはずがない」と答えると、カミュが貶められるような言い回しにしています。

カーミラにとってカミュはやさしい人ですから。

もしカーミラが「心を痛めるはずがない」と発言したなら、すぐさま「ふーん、カミュさんは他人の暴力を許容するような方なんです。ね。神使教なのにひどい人ですね」みたいな感じで切り返したことでしょう。

カーミラ自身でなく、カーミラが思う相手のほうを貶すことで気付かせているわけです。いやな男ですね。

貴女の優しいカミュさんは、というセリフで、カーミラのカミュとの心の同化？を切り離して客観的に見させることを意図しています。まあ、効果があるのかわかりませんが。

でもそうすることで、カミュのために罪を犯すカーミラにブレーキをかけられた

ということを書いています。

ちなみに、ミイラ崇拝のくだりですが、これは作者がこのあいだ  
なんかのテレビでミイラの特集をやっているのをみて、普通に居間  
に仏壇みたくミイラがまつてあって、そこにいる人たちはそれが  
普通で、ミイラがある空間で、日常を過ごしているというのを見ま  
した。こういう文化もあるんだな〜ということ、ウランドなりの  
配慮のつもりの一言でした。

配慮をしたうえで、ズバツと自分の意見を言ってしまうところが、  
この男ですが。

あれ？これ配慮？

そんなこんなで結局あのオチになるわけですが、A・シリーズでは  
このネタ（オチ）でいきつつ、人情物路線で行けたらなあと思いま  
す。本編にはないお色気を！

そんなこんなで次回は久々の本編。

前後編の前編になります。興味を持たれましたらばぜひ！

3 / 1 1 更新予定です。

21・cage garden (the first part) (前書き)

久々の本編。

次の大陸に出たいフィードたち一行がたどり着いたのは…

## 21・cage garden(the first part)

雲一つない晴天

顔にかかる日差しが暑い

香る潮の香り

湿った風がまとわりつく

白い浜辺に三人分の足跡

よしのは目を瞑り陽射しを感じながら鼻から潮の香りをゆっくり吸った。

よしの「気持ちいい……」

フィード「あーっ！クソッ、ベタベタしやがる！だーから嫌なんだよ、海つてえのは」

エオル「そこ……空気読んで心の中に留めてくれない……」

ジャラル国北端 波の音が響き渡る静かな漁村

エオルは「さて」と腕を組んだ。

エオル「当初の目的（ ）とはだいぶルート外れてますけど」

ジャラル国の東隣の国の港町（三話参照）だった

フィードは腕を組んだ。

フィード「旅なんてそんなもんだろ」

エオル「じゃなくて、パンゲア大陸に出るのにそこしかないって話だったじゃん」

フィードは浜辺にあげられた漁船に目をやった。

フィード「んなこたねえよ、海挟んで北隣の大陸出んのに、ルート

が一ヶ所なんてありえねえだろ」

エオルはフィードの視線の先を追いながら答えた。

エオル「……パンゲア大陸に船出してる港で最短がどこかって話で目的地を設定したと記憶しているけど」

フィードはある一点に目を止め、ニヤリと笑った。

フィード「着いちまったもんはしょーがねー、ここが”最短”だ」  
エオル「いや、ここどう見ても漁村……」

何言ってるのと向けた視線の先にフィードの姿は無かった。

—— cage garden (the first part)  
t) (かこの庭(前編)) ——

ガタン

誰もいない砂浜。

木と木がぶつかる音。

小さな小舟に小さな人影。

銀縁の丸い眼鏡、細く色白な手足、ツルリとしたマッシュルームカ  
ット。

少年は小舟に積んだ数個の木箱を見下ろすとフウとため息をついた。

「よう」

少年はギクリとして恐る恐る後ろを振り返った。

黒いフードから覗く真っ白な肌と真っ赤な瞳——

少年は一瞬ウサギかと思った。

そのウサギはきょとんとしている少年を見かね、小突いた。

「なーにボケツとしてんだよ、挨拶もできねーのか、最近のガキは」

ゴン

フィードは後頭部をさすった。

フィード「何すんだよ」

エオル「怯えてるじゃない」

よしのはしやがみ、少年の頭をさすった。

よしの「大丈夫ですか？」

少年は頷いた。

フィード「おい、この舟お前のか？」

エオル「んな訳ないじゃない……」

少年はエオルを見上げた。

少年「ぼ……お、おれのだ！」

エオルはきょとんと少年を見た。

フィードは「ホレ見ろ」と得意気に腕を組んだ。

よしのはポンと手を叩いた。

よしの「荷物を積んでいらしたようですね、舟をお出しになるので  
すか？」

エオル「いやいやいや……」

少年「そ、その通りだ！」

よしの「まあ」

エオルは怪訝そうに眉を寄せた。舟なんて、こんな小さな子どもが  
玩具にするには危険すぎる。

エオル「きみ、お父さんかお母さんは？」

少年はギクリと顔を硬直させ、エオルから視線を逸らした。  
エオル「？」

フィードは笑いながら少年を指差した。

フィード「さては家出だなあ〜！」

少年は今にも泣きそうな顔で舟の積み荷に目をやった。

エオル（図星……）

よしの（図星のようですね……ところで”いえで”とは何なのでしよう？）

フィード（……なんつーんだっけ、こういうの……ニボシ？）

繰り返す波の音が辺りに響いた。エオルは舟に積まれた荷物をチラリと見た。

エオル「……海に出るなんて危ないよ……もし君に何かあったら親御さん心配すると思うな」

少年はプルプルと体をこわばらせ涙を堪えているようだった。

フィードはポカリと少年の頭を殴った。

フィード「泣いてちやわかんねーよバカ」

エオル「コラ！殴ることないでしょ！」

少年「うわあああん」

少年は泣き出した。

エオルはジトリとフィードを見た。

少年「まだ泣いてないやあああい」

エオル「そっち！？」

フィード「泣いてんじゃねーか」

よしのは少年の頭をよしよしと撫でた。

フィード「男がメソメソ泣いてんじゃねえよ」

少年はボタボタと涙を流しながら、顎に力を入れて喚くのを止めた。  
エオル（お！）

フィード「涙引っ込める汚ねえな」

少年の鼻を嚙る音。

少しして

少年「……ひっ、引っ込まない……」

フィードは少年の両足を掴み逆さにするし上げ、上下に振った。

フィード「引っ込めろっつってんだろがぁぁ!!」

少年「ぎゃぁぁぁぁ」

ゴン

フィードは脳天を抑えて踞った。

エオル「大丈夫!？」

拳を擦りながら、エオルは少年の前に腰を下ろした。

少年「……あっ、涙止まった」

エオル「……」

フィード「ほぁぁうれえいみいいろぉう」

フィードはふんぞり返った。

フィード「昔よくこうやって泣くのを止められたもんだ、マリアのババアに」

エオル（何やってんのあの人ーっ!!）

現実には虐待です。決して真似しないでください。

――間――

波打ち際の砂浜。膝を抱えて座り込む少年を取り囲むように一行は

腰掛けた。

よしの「お名前をいただいてもよろしいですか？」

少年「……トウートだよ」

エオル「トウートくん、どうして一人で舟を出そうとしていたの？」

トウートは俯いた。

トウート「……関係ないじゃん」

ごりっ

トウートの左右のこめかみに拳があてがわれた。

フィード「いいから話しやがれ」

トウート「ひいっ」

エオルは「こーらっ」とフィードの耳を引っ張った。

少年はゴクリと生唾を飲み込んだ。

トウート「……い、一人前の漁師になりたいくて」

フィードはトウートの目を見つめた。

エオル「……？ えーと、ごめんね、話がよく見えないんだけど、一人前の漁師になることと一人で舟を出すのとどっちが関係が、」

フィード「ヨオーシ！」

フィードはエオルの言葉を遮った。

エオルは何事かとフィードを見た。

フィード「よく言った！ クソガキ！」

トウートはきょとんとフィードを見た。

フィードは立ち上がり、腕を組んでふんぞり返った。

フィード「一人前を目指してこそ漢だ！！」

エオルはヤレヤレと頭を抱えた。

エオル（まーた何か始めちゃったよ……）

フィードはトウートを指差した。

フィード「だがなクソガキ！ てめえは順番を間違つてやがる！！」  
トウート「じゅ、順番……？？」

フィードは顎をあげ、トウートを見下ろした。

フィード「そんなモヤシが漁師になれると思うかつ！！」

トウートの目に再び涙がにじんだ。慌ててフィードに見られないように、俯いた。

フィードはトウートの正面にしゃがみこみ、顔をあげさせるように人差し指でトウートの額を小突いた。

フィード「安心しろ、俺様が鍛えてやろう」

フィードの悪魔のような笑みにトウートは身の危険を感じた。

トウート「い……いい」

フィード「なんだ？ イチニンマエになりたいんじゃないのかア？」

トウート「う……」

トウートは暫く沈黙した。何か考えているようだった。

暫くしてトウートは固く拳を握りしめた。

トウート「ど……どうすれば……」

フィード「よしっ！ではさっそく、」

エオル「まずは親御さんに了解とろうね」

わずかに空気が固まった。

フィード「ふざけんな！ なーんで親なんかの許可が必要なんだよっ！」

エオルはヤレヤレと溜め息をつき、立ち上がると腕を組んだ。

エオル「当たり前でしょ、大事なお子さん預かるって言ってんだから」

…というか、そもそも俺ら、世間からみたら恐ろしい犯罪者なんだよ？

親に拒否され、それでこの話は終わるだろう、とエオルは考えていた。

フィードは舌打ちした。

フィード「チッ！ 甘ちゃんやローが、おいガキ、てめえで決めろ」  
トウートは手をもじもじとさせ、青い顔で俯いた。

声をかけようとしたよしのを、エオルは口の前に人差し指をあて制止した。

フィードはしゃがみこみ、膝の上で頬杖をついた。  
暫くの間、波の音のみが続いた。

そうしてトウートはチラリとフィードを見た。

トウート「……」

フィード「む、なんだよ」

トウートは再び視線を足元に落とした。

トウート「……」

フィード「だから、なんだつつってんだよ」

エオル「ふいーいーどッ！ 子ども相手に乱暴な言葉を使わないのっ！」

フィード「なにおう！」

トウート「……ど」

二人の魔導師は同時に少年を見た。

トウート「……どうしようかと思って……」

フィードはトウートの頭を引っ叩いた。

エオル「こらっ！ フィード！」

フィード「てめえで決めろつつつたるが！」

トウートは泣き出した。

トウート「……だって……どうしたらいいかわかんないんだ

もん〜」

エオルはトゥートの頭を撫でた。

エオル「だから親御さんに聞こう、ね？」

フィードは後頭部に手を組んだ。

フィード「けっ！ 家出は決められて修行はどうするか決めらんねえってか」

トゥートはフィードの足元を、一瞬チロリと睨んだ。

……なんでぼくが家出しようとしたか、しらなくせに

トゥートの家は村を一望できる高台にあった。

他の家屋に比べて大きく、都会的な雰囲気、丁寧な白塗りの木造家屋。

綺麗に手入れされた庭にはたくさんの花々が咲き誇り、それはまるで寂れた漁村とは隔絶された別世界のようだった。

来客の気配を察知したのか、花々の影からひよっこりと麦わら帽子に袖をまくったYシャツ、銀縁の眼鏡をかけた優しそうな男性。

男性はにこりと笑いかけた。

「見ない方ですね、旅人さん？」

よしのは自分の後ろを見、促した。

よしのの背後から気まずそうにトゥートが顔を出した。

男性は笑った。

「おかえり、”長い”家出だったね」

男性はトゥートの父親だった。一行はトゥートを送り届けてくれた

お礼にと居間に通された。

綺麗に片付けられ、至るところに花が飾られた内装はどこか女性らしさを感じさせる雰囲気だった。

木製のテーブルに、出された紅茶。

エオル（お茶なんて久しぶりだ…）

学生時代はインスタントでないお茶やコーヒーは当たり前、

お菓子や美味しい料理も当たり前、

快適な気温の室内で椅子に座るのも当たり前、

そんな日々だった。

紅茶を出し終え、トゥートの父親の隣に腰掛けたのは庭に咲き誇る花と同じような花柄のワンピースにフワフワのパーマの女性。

トゥートの母親らしい。

母親はトゥートに自分の隣の椅子に着くよう促したが、トゥートはよしのにしがみついたまま体を強ばらせ、動こうとしなかった。

母親は諦めたのか視線をエオルに向けた。

母親「旅人さんはどうしてこの村へ？ 観光も仕事も、漁業以外何もないのに……」

エオルは一瞬視線を天井に向けた。

エオル「あー…っと、その、パンゲア大陸に出たくてですね、とりあえず”海辺”を目指して……」

父親は笑った。

父親「ハハハ、どうせなら”港”を目指せばよろしかったのに」

エオルも笑った。

エオル「ごもつともです、旅慣れていないもので」

お恥ずかしい、と付け加えて、エオルは紅茶を一口啜った。

母親は父親に目を向けた。

母親「あなた、何とかならないかしら」

父親は窓の外を見た。

高台から海を一望できるその景色。

海の方こうにはうつすらと島影が見える。

エオル「パンゲア大陸ですか？」

父親「いいや、大陸はそのまた向こうさ、もうちょっと空気が澄んでいれば見えるんだけどね……」

父親はテーブルの上に手を組んでエオルを見た。

父親「あの島あたりに海賊がいてね、決まった場所での決まった時間にしか船を出せないんだ」

エオル「か、海賊！？」

海賊だなんて、新聞でしか見聞きしたことがない、遠い世界での出来事だった。それがこんな身近に暮らしている人がいるなんて。

エオル「……なんでまた……」

父親は微笑んだ。

父親「共存さ」

エオルはよくわからない、と眉を寄せ、首を傾げた。

エオル「何ですって？」

父親は再び窓の外を見た。

父親「この沖に、”海の主”という怪物がいてね、我々の漁業を守ってもらう代わりに売り上げの一部を納めているのさ、

時間と場所が決められているのは海賊たちの知らないところで海の主に襲われないように……

というタテマエの、実際は我々が不正に稼がないようにするためさ」

エオル「なんか……釈然としませんね……」

父親は笑った。

父親「こういう”共存”のあり方もあるのさ、私たちも初めは軍や自警団を呼ぶべきだと思ったけどね」

よしの「？ 初めは、とおっしゃいますと？」

母親はトウートをチラリと見つめた。

トウートはそっぽを向いた。母親は視線をよしのに向けた。

母親「去年、他所から引越して来まして」

フィード「ふーん、で、こいつ、ダチいねーの？」

フィードのあまりに突拍子のない発言にエオルは一瞬フィードが何を言っているのか理解できなかった。

夫婦も同じく固まっている。

フィードは後頭部に手を組んで椅子をブラブラと揺らした。

フィード「家出先がいきなり海だとよ、行くダチん家ねえからじゃねえの」

エオル「フィード！ 親御さんになんてこと…」

フィードはどかりとテーブルに頬杖をついて、ニヤニヤしながらエオルとよしのを挟んで二つとなりに座るトウートを見た。

母親は笑った。

母親「そんなことないですよ、小さいけど、村の学校にも通っている…」

トウート「うるさいんだよ……！」

一同は椅子から立ち上がったトウートを一斉に見つめた。

トウートは鼻息荒くフィードを見た。

トウート「だ…ダチならいるっつ…！」

フィードは菓子を頬張りながら鼻で笑った。

フィード「ウソつきめ」

トウート「違うっ…！！ 海に出るのは、りよ、漁師、にっ！なっ  
なりたい……からだっ…！」

母親は溜め息をついた。

母親「まだ言ってる」

父親は銀縁眼鏡を外した。

父親「いい加減にしなさい、なるのはいいけどいきなり海だなんて  
まだ早いと言っているでしょう、なんでそんなに拘るの」

母親「あなた！ なるのはいいけどってそんな無責任な、」

ガタン

玄関のドアの開閉の音——トウートは家を出ていった。

母親「もう！」

母親は父親をジトリと睨み付けた。

父親は笑った。

父親「暗くなったら戻ってくるさ、それより、すみませんね、目の  
前で親子喧嘩だなんて」

エオル（どっちかっていうと夫婦喧嘩……）

フィード「どっちかってっ—と夫婦ゲ」

ゴン

フィードは脳天を押さえてテーブルに突っ伏した。

父親はフィードを見つめた。

父親「あなたのおっしゃったことは間違いじゃないかもしれませんが」  
フィード「あゝ？」

父親は手元を見つめながら苦笑した。

父親「実はここに引越して来る前、私は街で役人をしていまして」  
エオル（あー……なんかそんな感じがする）

生真面目そうでどこか都会染みた立ち振舞いに、エオルは納得した。  
父親「ところが学校で息子が仲間外れにされているらしいということ  
とがわかりましてね……」

よしの「仲間外れ……」

よしのは隣に座る二人の魔導師に出会うまでに周囲から受けてきた  
仕打ちを思い出した。

よしの（人から受け入れられない、輪に入ることができない、何が  
違うのかわからない……）

あれだけ幼いですがのに、どれだけ……どれだけつらく寂し  
いことでしたでしょう……）

よしのは目に涙が溜まるのに気づき、俯いた。

フィードはテーブルの縁に膝を乗せてブラブラと椅子を揺らした。

フィード「で、逃げてきたわけだ、いでっ……！」

エオルはフィードの脇腹の皮をつねりあげた。

エオル「環境を変えて心機一転やり直そうとしているわけですね」

父親は笑った。

父親「ええ、ですがここでもあまりうまくいっていないようで……」  
母親「あなた！」

父親は眉を上げて口を下げ、ヤレヤレというジェスチャーをした。

父親「少し世間話が過ぎましたかな」

エオル「いえ……」

母親は立ち上がり、ヒラヒラとした絹の肩掛けを羽織った。

母親「今日泊まるところないでしょう？」

エオルは苦笑した。

母親「あなた、ちょっと集会所に掛け合ってくるわ」

父親「頼むよ」

エオル「あ、ありがとうございます……」

フィード「俺様もちょっと遊んでくるわ」

エオル「どこにだよ……」

フィード「海だ海」

エオルは笑った。

エオル「さつき、ベタベタするからどーのって言ったのはどちらさんでしたっけ？」

暫くして、エオルとよしのは村の端にある木造の簡素な平屋建てに案内された。

その久しぶりに人工的な雨風を凌げる所を見つめ、エオルはひどく背徳的な気分になった。

この人たちは自分達をただの旅人だと思っている。

自分達が指名手配犯だと知っていたら、この親切もなかったことだろう。

自分達はこの人たちの親切を今、こうして裏切っているのだ。

平屋建てのドアを開けると綺麗に掃除された床に、大量の酒、鼻腔をくすぐる色鮮やかな料理たち、大勢の屈強な男たちと笑顔が底抜けに明るい女たち。

エオルとよしのはポカンと立ち尽くした。

トウートの父親はその様子を見てエオルとよしのの間からこそつと耳打ちした。

父親「旅人さんなんて珍しいから、みんな話を聞きたいんだってさ」  
屈強な男の一人が笑った。

「なにやってんだ、とつとと座れ！」

そう言つて空のグラスを2つ、どかりと置いた。

グラスにはすかさず酒が注がれた。

エオル（お、お酒っ！？）

エオルはよしのを横目で見た。

エオル（多分……どう見ても俺より年下だよな……）

エオルは

20歳。

エオル「あの、彼女はお酒はちよつと……」

よしの「まあ、ありがとうございます」

見ると、女たちに促され既に席についているよしの。

エオル「よしのさん！ 待って！ それ水じゃ、」

「若いのが何野暮なこと言つてんだ」

屈強な男たちがわらわらわらとエオルを引っ張つて無理矢理席に着かせた。

エオル「わーっ！！」

真つ暗な空にポツンと月明かり。  
波の音が大きく聞こえる。

トウート（出るんだ……出るんだ……！！）

家を出て、日が沈んでも、月が昇っても、トウートは小舟の前で身構えたまま一歩たりとも動けずにいた。

「あれ、モヤシメガネじゃん」

突然背後から降ってきた聞き慣れた声に、トウートは飛び上がった。

「なにやってんだよ」

砂を踏む音、声が近づいてくるのがわかった。

トウートは急かされるように、慌てて小舟を押し出した。

「えっ！」

トウートは浮かんだ小舟にすかさず乗り込んだ。  
パドルを持ち、一心不乱に漕いだ。

「たったいへんだっ！！」

トウトは後ろを振り返った。

月明かりに照らされた浜辺はミルクを入れすぎたパンケーキのように薄っぺらい。

だいぶん遠くまで出てきてしまったようだ。

トウト（どうしよう……出ちゃった……出ちゃった）

急激に心細さがトウトを襲った。

浜辺に向かいパドルを漕ぐが、あれよあれよという間に、思いとは逆の方向に、舟は進んでいく。

いや、進んでいくというよりも流されてゆく、が正確であった。

舟は完全に潮の流れに乗っていた。

トウト（なんでっ！？　なんでえっ！？）

トウトの嗚咽とパドルを漕ぐ音だけが響く。

……はずだった。

「うるせえなあ」

誰もいないはずの船内から突然の声。

端に避けていた雨避けの掛け布がもぞもぞと動いた。

トウト「ひっ」

トウトは舟の縁にしがみつき、後ずさった。

バサリと乱暴に掛け布がめくられ、現れたのは

トウト「う、ウサギさん」

半分しか開いていない赤い瞳は大きな欠伸と共に塞がれ、そうしてまた半分だけ開かれた。

フィード「ん？　どこだここ」

トウト「ななな何やってんだよっ……！！」

フィードは今気づいたかのようにトウトに目をやった。

フィード「あれ？　お前何やってんだよ」

トウト「ええっ！？」

(こつちが聞けるのに……)

ふと、冷静になって気づいた。  
パドルがない。

トウトは慌てて辺りを見回した。  
やはりない、どこにも。

フィードに驚いた拍子に、海に落としたようだった。  
トウト「どつどうしてくれるんだよっ!!」

フィード「はあ? 何がだよ」

トウト「パドル!! 落としちゃったじゃないかっ!!」

フィード「??? は? ばどる??」

フィードはボリボリと頭を掻きながら辺りを見回した。  
次第にその目が開いていく。

フィード「あ??」

プカプカと揺れる地面、月明かりを反射して煌めく水面。

フィード「うおーっ!!」

フィードが突然立ち上がったため、舟は大きく揺れた。

トウト「うわあ!」

トウトは舟の縁にしがみついた。

トウト「なっなんだよっ!!」

フィード「海のと真ん中じゃねえかっ!!」

トウト「そうだよ!」

トウトは”ついに海にでてやった”という妙な自信が湧いていた。

フィード「俺様はてめえの家出に付き合う気はねえ!!」

トウト「じゃ、じゃあなんで舟にいたんだよっ!!」

フィードはどかりと乱暴に座った。舟は再び揺れた。

トウト「いちいち揺らさないでよ〜」

フィード「陽当たりが良くてな」

フィードはあくびをした。

フィード「腹減った、早く浜に戻せ」

トウト「だからっ！ パドル落としちゃったんだってば！」

フィード「何イーーっ！！ バカじゃねえの！？ どうやって戻んだよ！ー」

トウト「なんだよ！ おまえのせいだろっ！！」

その時ふと月明かりが陰った。

見上げると黒い壁、岩壁のようだ。

トウト「か、海賊島だ…！！」

フィード「かいぞくじま？ なんだそりや、面白そうだな」

フィードは近くの小岩に飛びうつろうとした。トウトはフィードの黒いコートを引っ張ってそれを阻止した。

フィード「なにすんだよっ」

トウト「しーっ！！ いいから！！」

目立たないように雨よけの布を被り、ただただ潮の流れに委ねた。プカリプカリと、舟は海賊島を横切っていく。

その途中岩の連なりが疎らな箇所が現れた。

岩の隙間から明かりが見える。

フィードとトウトは同時に呟いた。

トウト「三日月の形なんだ」

フィード「クロワツサンみてえな島だな」

島の中央は海、それを取り囲むように岩の陸地が広がっている。  
その所々には松明が煌々と焚かれ、海面をオレンジに照していた。

その中を一人、人影が岩の隙間から現れた。

フィード「お！ 人じゃねーか、助けてもらおうぜ」

トウト「何言ってるんだよ！！ 海賊だぞ！！」

人影は水際までくるとパンパンと手を叩いた。

トウト「あ……」

松明でオレンジ色に照らし出されたのはトウトと同じ年くらいの、  
恰幅のよい女の子だった。

フィード「何やってんだろな、金持ちが庭の池の鯉呼びみてえに」

すると海面が盛り上がり、まるで殻を破るように、その盛り上がり  
から現れたのは、

トウト「ひっ」

少女の身体ほどの巨大な爬虫類の瞳、鶏冠のようなヒレ、蛇のよう  
な鱗。

それは顔の半分だけ覗かせ、少女をじっと見つめていた。

トウト「何！？ あれ！？」

フィード「ウミヘビじゃねーの？ あ、でも鶏にも見えんな」

トウト「そんな平和的な生き物には見えないよ！？」

少女は傍に置いていたバケツから鶏の死骸を取り出し、”ウミヘビ  
” に向かい放り投げた。

バツシャアン！！

巨大な水飛沫を上げ、人を何人も丸飲みできそうな巨大な口が小さ  
な鶏を飲み込んだ。

トウト「ひいいい」

フィード「……あいつ、見覚えあんな」

確かここに来る前に立ち寄った町のハンターズ。

小遣い稼ぎはないものかと眺めていた賞金首魔物クリミナルモンスターの掲示板。

フィード「ここいらで暴れまわってる魔物がいるって聞いたぜ？」

トウトはフィードの発言が突拍子のないことに思え、眉根を寄せた。

トウト「海の主のこと？」

フィード「そいつじゃねーの、あれ」

トウトは首を振った。

トウト「そんなわけじゃない！ 海賊は海の主から漁師の人たちを守ってるんだぞ！」

どう見てもあれ海賊のペットじゃん！ エサあげてるし

！

フィードは顎を撫でながらニヤリと笑った。

フィード「ほおーう」

舟は潮の流れに乗り、どんぶらこと海賊島も離れていった。

トウトはようやく海賊から離れられたと安堵した。

フィード「なら試してみっか」

トウト「？」

ポツリと出たフィードの突然の提案が、何に對してのものなのか、

トウトにはわからなかった。

フィードは呪文を唱え始めた。

トウト「なっなに！？ なに！？！？」

フィード「小爆炎グラン・デ！」

ドオオオン！！

フィードの手のひらから放たれた光弾は舟から数十メートル先で巨大な水柱を起こした。

水柱が海に戻り、代わりに大きな波が舟を揺らした。

トウート「ぎゃあああ!!」

フィードは両手を腰にふんぞり返った。

フィード「ギャツハツハ! 出てこい! ウミノヌシ!!」

トウート「何考えてんだよ!! てか、お前、もしかして魔導師なのっ!?!」

フィードはなに当たり前のことと言ってんだと訝しげにトウートを見た。

フィード「見りゃわかんだろ」

トウート（ええーっ!!）

魔導師といえば、もっとこう、知的で真面目で優しくて、それでいて正義感の強い、ヒーローみたいなものじゃないの?

トウートは見事に自分の魔導師像を壊してくれた目の前の魔導師をまじまじと見つめた。

フィード「なんだコラ、ガンつけやがって」

トウート（どこの田舎のヤンキーだよっ!!）

波の揺れが徐々におさまってきた、かのように思えた。

今度は背後からの波に、舟は揺らされた。

風はない。

フィードは真下に手をかざした。

フィード「小爆炎<sup>グラン・デ</sup>!!」

ズドオン!!

フィードの手から放たれた光弾は舟のすぐ横の海中で爆発し、出来

上がった水柱に舟は一瞬ほぼ垂直に傾いた。

トウト「ぎゃあああ!!」

トウトは死に物狂いで舟にしがみついた。

ギヤアアア!!

トウト「え…」

空に突き刺さるかと思うほどの長い首、

大人数人を軽々と丸飲みできそうな大きく裂けた口から黒煙を吐き、その頭には先ほど見たあの鶏冠。

そしてボタボタと音をたて舟に生暖かい雨が降り注いだ。

トウト「うわっ!!」

降り注いだ雨は鉄臭く、そして赤かった。

フィードはニヤリと笑った。

フィード「これで菓子代の足しにでもなんだろう」

トウト「うわ……うわ」

トウトは見たこともない巨大な生物に言葉が出なかった。

それどころか、体はガタガタと震え、うまく力が入らない。まるで自分の体でないみたいだ。

首の直径だけでこの舟の2、3倍はある。

トウト（ダメだ……死ぬ……）

急に、今まで当たり前だった両親との家での毎日が恋しくなった。戻りたい、あの笑顔に会いたい、一緒にいたい、寂しい、もう会えないなんてイヤだ。

トウトの目からボタボタと大粒の涙が溢れた。

トウト「おうちに帰りたい……!!」

フロム・エ・ス  
フィード「火炎龍！！」

海の主と同じくらいの火龍の巨体が、海の主の頭を飲み込んだ。

フィード「ハン」

フィードはニヤリと笑った。

フィード「よし、ガキ、あいつの鶏冠、ちょっと行って採ってこい」

トウート「はあっ！？」

トウートはしゃくりあげながら鼻水をすすった。

フィード「金になんだよ」

トウート「じつ自分でとりに行けよっ！！」

フィードはふんぞり返った。

フィード「俺様泳げねーんだよ」

頭がよくてスポーツ万能、魔導師とはそういうものだ、

泳げないなんてあり得ない、僕をこきつかうための嘘だ、とトウートは思った。

その時だった。

月明かりが陰った。

頭部が消し炭と化した海の主の巨大はあろうことか舟の真上に傾き始めた。

トウート「えっ」

フィード「あ？」

ズドオン！！

激しい水飛沫をあげ、巨体は舟のすぐ横に倒れ込んだ。

トウト「うわああ!!」

二人は舟から投げ出され、多量の水を被った舟は転覆した。

トウト「ぶはっ!!」

都会にいた頃に、スイミングスクールに通っていてよかった、当然そこでもいじめられていたのだが。

トウトは辺りを見回した。

トウト「う、うさぎさん!？」

ブクブクブク……

トウトの少し背後に量のある泡ブク、それは徐々に少なくなっていく。

トウト「……」

ホントに泳げないの——っ!!!!？

トウトは慌てて潜った。夜の海は漆黒の闇。海の主が倒れたために起こった水の強い流れ。力いっぱい手足を動かした。

僅かに照らす月光とその光を反射して煌めきながら、僅かに上がる泡を頼りにフィードを探しあて、死に物狂いで急上昇。

トウト「ぶはっ!!」

こんなに深く潜ったことなどなかった。苦しくて、危つく意識を失うかと思った。

塩水で目が痛かった。口の中もしょっぱすぎて舌がどうにかなりそ  
うだ。

トウト「はー……はー……げほっ、うっ、うさぎさん!」

フィードの顎を支え、仰向けに浮くようにしながら、トウトは何度も頬を叩いた。

水は吐いたが起きる様子はない。トウトの立ち泳ぎもそろそろ限界だった。

トウト（どつか……どつか掴まるとこ……）

トウトはあてもなく泳ぎだした。

息は絶え絶え、誤って何度も海水を飲んだ。

トウト（死ぬ……死ぬ……）

トウトの目は海水と涙にまみれていた。

辺りは月明かりのみ、自分が水を掻き分ける音しかない。

一体どれだけ泳いだらう。

やがて、遠くにポツポツと明かりが見え始めた。

それはやがて大きくなり、ド派手な装飾とギラギラとした明かり、

トウト「ふねだ……」

トウトは明かりを見て安心するとそのまま眠るように意識を失った。

船にはドクロの旗が掲げられていた。

ポツン……

ポツン……

水滴が落ちる音にトウートは目を醒ました。

「女と子どもだよ」

「なんとたつてこんな夜更けに」

聞き覚えのない男たちの声。

ぼんやりとした頭はやがて覚め、その目の前には鉄格子。

トウートはムクリと起き上がり、目を擦った。

壁はゴツゴツとした岩。

洞穴に鉄格子を取り付けてあるようだ。

村の施設じゃないことは確かだ。

男たちの会話は続いた。

「リリーの様子は」

「ありやあダメだ、しばらく立ち直れそうにねえわ」

「あんなのできるの、あの女しかいねえだろ、魔導師のバッヂつけてたし」

「魔導師って怖え」

トウート（魔導師！！ うさぎさんのことだ……！！ てか、女と勘違いされてるし……そういえば、うさぎさんどこに、）

「ぶえつくし！！」

トウートは飛び上がった。

そうして自分のすぐ隣に目をやった。

「あゝ」

そうして鼻をすすりながらムクリと起き上がった赤目はキョロキョロと辺りを見回した。

フィード「んあ？ どこだここ」

鉄格子越しに二人の男が寄ってきた。

「このアマ、よくも海の主をやってくれたな」

フィードは自分の回りを見回し、「アマ」と話しかけられているのが自分だと気づいた。

フィードはにこりと笑った。

フィード「えゝごめんなさいゝ怖くってついゝ」  
↑裏声

トウート（キモッ！）

トウートは思わず鳥肌が立った。

「”つい”であんな化け物倒しちまうとか、やっぱ魔導師って化け物だな」

がしゃん……

フィードは手元を見た。

何やら文字の書かれた白い手錠がはめてある。

フィード「なんだこりゃ？」

男たちは鼻で笑った。

「知らねえのかよ、魔導師先生のクセに」

フィード「ハア！？」

トウート「ねえっ！ どこどこ！？」

男たちはさらにニヤニヤと笑いだした。格子越しにしゃがみ、トウートと目線を合わせると、舌を出した。

「どこだと思っ」

トウート「……」

「村のガキか？」

トウートは口をへの字に曲げてこらえたが、自然と涙が溜まってくる。

それは、ここがどこかわかっていたからだった。体の震えがとまらない。

ガシャアン

男たちは思わず飛び退いた。

フィードの足形に、鉄格子が湾曲した。

フィード「どこだっつつてんだハゲ」

「こんのアマ!!」

フィードは呪文を唱え始めた。だが、

フィード「ん？」

いつもは呪文を唱え出すと同時に周囲を漂う火と風の精霊たちが踊り出すのだが、

なぜか一向に、踊り出すどころか魔導師の呪文に見向きもしない。

フィードはめられた手錠に書かれた文字を改めて見つめた。

トウートも不安そうに手錠を見た。

トウートは学校に通っていたため文字の読み書きは不自由なかったが、見覚えのない文字だった。

トウート（外国の文字かな？）

フィード「あーっ！」

トウートは飛び上がった。

フィード「魔法封じとかって書いてやがんど…」

手錠に書かれていたのは魔力を封じ込める魔法陣だった。

「読めんのかよ、よく知らねえけど、そうらしいな」

フィードは顔をしかめながら、「どういうことだ」と眉根を寄せた。

男たちはフィードを見ながら吐き捨てるように言った。  
「魔導師先生はこっちにもいるってこった」

## 21・cage garden(the first part)(後書き)

まさかの前後編。

未成年の飲酒はいけません。ちなみによしのがいくつなのかはエオルもフィードも、当然よしの自身(記憶がないから)知りません。さて、魔法を封じられ、檻の中に閉じ込められてしまったフィード。どのように切り抜けるのか？

トウートは無事に家に帰ることができるのか？

一行は次なる大陸へ出ることができるのか！？

次回の本編は4月上旬更新予定です。

次週はA・シリーズ。3/18更新予定！

21・i・A・クラブ軍中佐隊規違反事件1――（前書き）

21・x話は3話の連載物。

今回のウランドの仕事は…？

## 21・1・A ―クラブ軍中佐隊規違反事件1―

「いやあ、しかし、お前も出世したよなあ」

「本当だよ、まさかお前、なあ」

ヴァルハラ帝国首都アヴァロン とある呑み屋

久しぶりに早く仕事を上がり、飛び込んだのは学生時代の悪友たちとのプチ同窓会。

当時の話題に花を咲かせながら、あいかわらずキョロキョロと周囲を見回したり、腕や足を組んだり組むのをやめたり、落ち着きのないクロブチメガネ。

友人たちの話題は、ちょうどウランドに向けられたところだった。

「トランプのエースとか、給料どんだけ入るんだよ」

「トランプのエースとか、どうやってたらお前みたいのがなれたんだよ」

トランプのエース

トランプのエース

……

話題はそればかりであった。

優秀学生しかとらない、また就職しても死と隣り合わせの危険な仕事で有名なトランプにいることは魔導師にとって一種のステータスであった。

おまけに、<sup>エース</sup>副將軍。

学生時代誰からみても落第生、おちこぼれであったウランドの目を見張る大出世には昔から彼を知る誰もが度肝を抜かれた。

だが、実際久しぶりにあってみても変わらないこの落ち着きのなさ。友人たちは不思議でなかった。

そんな中一人が言った。

「トランプのエースにでもなったらモテるんじゃない？」

ウランドは苦笑して左手の薬指を指差した。

「あれ、結婚してんの」

ウランド「いや、まだ。でも婚約中」

「おっ！誰！どんなこだよ」

ウランドはキョトンとした。

ウランド「誰って…ヨトルヤだよ」

悪友たちは驚きの声をあげた。

「なに、もう十年以上じゃね」

「長すぎだろ」

「謎だよな、こんな顔も性格もサエナイ眼鏡に…」

「若い頃あんなに”サイクル”短かったのに」

グラスに口をつけていたウランドは思わずむせ込んだ。

ウランド「いや、”落ち着いた”ってことでしょ」

友人の一人がニヤリとして言った。

「今の地位だろ？元カノたちがヨリ戻してよく！とかくんじゃねえの」

ウランド「……」

ウランドは少し視線を外して沈黙した。

ウランド「ないよ」

「なんだ今の間はあ！」

翌日、ウランドがいつものように事務処理をこなしていると、ふと一枚の書類に目が止まった。

それはある事件についての白紙の定期報告書。

現在トランプの特別体制として自分以外のメンバーは全て各事件の諜報活動にあてているが、

その中で、一つだけ、割り当てを全て外して誰も手をつけていない状態の事件があった。

”魔導師連続失踪事件”

随分古くから未解決のままの事件だが、諜報に充てたメンバーも何人か本当に失踪してしまった”いわく付き”の事件。

ただ、今回それが目に止まったのには昨日の飲み会に関連した理由があった。

その時、静かな執務室にノックの音響いた。

ウランド「どうぞ」

ドアから現れた人物にウランドは思わずドキリとした。

褐色の艶やかな肌にカールがかった長い黒髪、切れ長の瞳に筋肉の引き締まった長い手足。

ウランド（た…タイムリーすぎる…）

「エース」

低く落ち着いた声。

その女は腕を組みながら真っ直ぐウランドへ歩み寄った。

ウランドは背もたれに身を預け足を組んだ。  
ウランド「どうした？グウエン中佐」

長い睫毛の間からのぞく緑の瞳はウランドを捉えたまま。  
暫く間を置いてグウエンは言った。

グウエン「そろそろ元の案件に戻してくれる？」

そう、この特別体制の前まで”魔導師連続失踪事件”を担当していた諜報隊員こそ、このグウエンであった。

ウランドは手元の書類をピラピラと波打たせながら一言「無理」と一蹴した。

ウランド「何年も手がかり一つ見つからない案件だ、今の特別体制でそこに人員を割くのは非効率的だよ」

グウエン「事件に大小ないわ、同等に扱うべきよ」

ウランドは窓の外を見た。

ウランド「それとこれとは話が別。…というか、その言葉遣いなんとかはない？職場だよ」

グウエンは肩をすくめた。

グウエン「これは失礼しました、ハートのエース」

そうして、デスクの上に差し出された封筒。

そこに書かれているのは辞表の文字。

グウエン「今の特別体制でクラブ軍の指揮官は」

ウランドは封筒を手にとった。

ウランド「俺だ」

そうして足を組み直しグウエンを見上げた。

ウランド「直属の上司には」

グウェン「受理されなかった」

封筒の中身に目を通してながらウランドは笑った。

ウランド「だろうね」

グウェンはクラブ軍でもかなりの実力者。これまでいくつもの事件解決に貢献してきた。

辞表は、今度はグウェンの目の前に差し出された。

ウランド「今、どうしてもランプは特別体制敷いてる？」

グウェン「特別体制解除まで待てと言っている？」

ウランドは早く受けとれと封筒を揺らせた。

ウランド「正解」

グウェンは封筒を受け取らなかった。

ウランド「…聞き分けないね、一応聞くだけ聞くけど、どうしたの」

グウェンは髪をかきあげた。

グウェン「情報屋がネタを仕入れてきたの、今しかないのよ、魔導師の”ロスト”バッチ取引のネタらしいの」

ウランドはデスクの上にひじをおき、手を組んだ。

眼鏡の奥の瞳は冷たかった。

ウランド「…感情的になってるよ、らしくない」

この事件の以前の担当はグウェンの恋人だった。

だが事件に巻き込まれたのか、失踪したため、代わりに志願したグウェンが担当となった。

それをウランドは承知の上での発言だった。事件に対して感情で動いて命を落とした仲間を何人も見てきた。今のグウェンは危険な状態だと判断したのだ。

グウェンは溜め息をつき、デスクの上の封筒を手にとるとクスリと笑った。

グウェン「わかったわ、無理を言って申し訳ありませんでした」

ウランドは眉を寄せた。

ウランド「…納得してないだろう」

グウェン「そんなことないわ」

ウランド「…君が嘘をつくときはいつもそうだ」

グウェンは笑った。

グウェン「覚えてくれているのね」

ウランド「話をそらすな」

その時だった。ノックの音——秘書が顔を出した。

「エース、進捗報告会議のお時間です」

ウランドはしばらく無言でグウェンを見つめ、デスクの端にまとめた書類を手を立ち上がった。そしてグウェンを指差した。

ウランド「明日朝一で”面談”するから、ここへ来なさい、いいね」

グウェンにはこりと色っぽい笑みを向けた。

グウェン「分かりました、エース」

翌日、グウェンは姿を表さなかった。

ウランド「私の責任です」

カグヤ「……」

ハートのキング執務室

ピリピリとした耐え難い息苦しさには秘書は窒息すると思った。

クラブ軍の中佐グウエンが無断欠勤、連絡がつかない。

前日の最後の痕跡は彼女のデスク、

特別体制での担当事件の証拠を完璧に洗い出した、後はハートのエースが出動するだけという状態の書類のみ。

カグヤ「…隊規違反だ、脱走兵として確保しろ」

カグヤの声は低かった。

カグヤ「ただし、人員のアサインに余裕がない、特別体制解除後だ」

ウランド「…私が彼女をけしかけました」

カグヤは何を言っているんだと顔をしかめた。

ウランドが自分の責任だと言っているのは現在の特別体制の責任者としての発言だと思っていたからだだった。

ウランド「彼女は魔導師失踪事件を解決したがっていました、その

熱意に、私はただ水をかけてしまいました」

カグヤ「グウエン中佐は感情的で危険な状態だった、だから制止した、お前はそう私に報告したと理解していたが」

ウランド「危険な状態だとわかっていながら説得が不十分でした、私の管理不行き届きです」

秘書は涙ぐんだ。

秘書（だから、面談の約束を取り付けていたじゃないですか…）

カグヤ「…なるほど、わかった」

カグヤの目は冷ややかだった。

カグヤ「優秀な中佐を一人失った、貴様の責任だぞ、エース」

カグヤはもうこの件は終わりだと窓の外を見た。

カグヤ「お前に処分を下す、だがそれは特別体制後だ、今はそんなヒマはない、この件は終わりだ、他に無ければ仕事に戻れ」

ウランド「…午後、半休いただけますか」

カグヤは間髪入れず机を叩き怒鳴りつけた。

カグヤ「責任者がそれでどうするつもりだ！」

秘書（ひいっ）

あまりの迫力に秘書は身の毛がよだった。

ウランドは眉ひとつ動かさず、無表情のまま切り返した。

ウランド「何をお怒りか理解しかねます、ご自分でこの件は終わりだとおっしゃったではありませんか、これはただの休暇の申請です」

カグヤ「グウェン中佐を探しに行くと聞こえる」

ウランドは笑った。

ウランド「信用ありませんね」

カグヤは眉間を押さえ溜め息をついた。

カグヤ「お前、明日から遠征じゃないのか」

ウランド「ええ、だからその前に休養をとっておこうと思ひまして」

カグヤ「大馬鹿者が」



## 21・1・A ―クラブ軍中佐隊規違反事件1―（後書き）

ウランドの元カノ、グウエン登場。

事件解決のため無断欠勤をしたグウエン、

そんな彼女にウランドはどんなA・（answer）を出すのか？

次回は3 / 25 21・2話更新です。

## 21・2・A―クラブ軍中佐隊規違反事件2―（前書き）

迷宮入り事件である摩導師連続失踪事件の手がかりをつかむためトランプを脱走したグウェンは…。

## 21・2・A・クラブ軍中佐隊規違反事件2―

空は紺色とオレンジがせめぎ合い  
黄昏の中でぼんやりと浮かび上がる人影

うらぶれた僻地の村はずれ  
朽ちた要塞跡、生暖かい冷えた風  
剥げた石畳の隙間を埋めるようにたなびく名もなき花  
蕾はまだ、ない

要塞跡に未だ残る石壁

その影で数人の男たちが目深にフードを被った一人の男を囲んでいる。

取り囲むうちの一人が言った。

「ブツは？」

フードの男は微動だにしない。

「ブツはって聞いてんだよ！」

フードの男は口だけ動かした。フードの影で顔は見えない。

「取引する気があるなら来いと言った」

取り囲むうちのもう一人がフードの男の胸ぐらを掴んだ。

「だから来たんだろうが！」

ところがフードの中の瞳と目が合い、反射的に胸ぐらを放し、後ずさった。

フードの男はフードに手を掛けた。

「ではなぜトラップがいる」

「……随分鼻が効くのね」

石壁の影から現れたのは褐色の肌に長い手足の美女——クラブ軍中佐グウエン

「いつのまに！」

グウエンはニコリと艶っぽい笑顔を向けた。

「あなたたちが取引しようとしているものの入手ルートを知りたいの、教えてくれな」

ドガガガ！

フードの男の袖口から鋭利なトゲの生えた棘の束が伸び、それらは取り囲んでいた男たちを一瞬にして串刺した。

場にはグウエンとフードの男二人きりになった。  
生暖かい液体があたりの石畳を伝った。

グウエンは笑った。

「あなた……もしかして悪魔？」

フードの男は足元まで流れる血だまりをバシャンと蹴った。  
それは瞬きする間もなくグウエンの目の前に。フードの奥に大量の

棘の束が覗く。

グウェンは背負っていた細身の槍を男目掛け突きだした。

槍は男の服を突き破ったが、何ら手応えなく、まるで服だけ突き刺したようだった。

代わりに男の体は棘の束となり、ぐんぐんと伸びると、みるみるうちにグウェンはそれを後ずさりながら見上げることとなった。

男の頭だった部分は大人二人分ほどの直径の真つ赤なバラが咲き、バラの中央からはトゲだらけの棘が複数蠢いている。

男の手足だった部分の棘の束の先端にも真つ赤な花が咲き始め、それらの花の中央には牙だらけの口。

それらはあつという間に息絶えた男たちを飲み込むと、飲み込んだ口は平坦に閉じ、平坦になった花の中央にデスマスクのように飲み込んだ男たちの彫刻のような白い顔が浮き上がった。

息絶えた男たちの人数分の花は同時にグウェンにデスマスクを向けた。

グウェンは首を傾けた。

グウェン「余計な花を間引いてあげるから話を聞いてもらっわよ」

グウェンは槍をぐるりと回すと地を蹴った。

口を開けた真つ赤な花々がグウェンに襲いかかる。

グウエンは軽々と槍を振り回すと一瞬にして、そして正確に、迫り来る花たちの中央を貫いた。  
そしてそのまま巨大なバラの懷に入る――

グウエン「槍<sup>これ</sup>、アーティファクトなの」

バラの花弁に足をかけ、中央で蠢く棘のひとつをわし掴むと、棘の根元に槍を翳した。

グウエン「あなたが取引しようとしていたのはなに？」

グウエンの横からゆっくり棘が伸び、先端についていた蕾から真っ赤な花が開いた。

その中央に光るのは――

グウエンは息を飲んだ。

グウエン「魔導師バッチ」

果たして偽造品か、それとも本物のロストバッチか――

グウエンの注意が完全にバッチに向きかけた時だった。

グウエンの背後に音もなく迫る棘、牙を剥いた真っ赤な花。

グウエン「しまっ……」

更に数本の棘がグウエンの四肢に巻き付いた。

棘のトゲはグウエンの美しい柔肌に食い込み、血が流れた。

グウエンは引きちぎろうと引っ張るがトゲはただただ深く突き刺さるばかり。

槍も別の棘に奪われ、牙を剥く花弁の中央が大きく開いた。

その時だった。

ブチブチという不快音とともにグウェンを掴んでいた棘たちは力を失い、崩れるように倒れた。

グウェン「…何をしてるの」

落下したグウェンをキャッチした太い腕。

その先の両手のひらは無数のトゲが突き刺さり、だくだくと流血している。

「それはこっちのセリフだよ」

グウェンの見上げた視線の先には見慣れたクロブチメガネ。

ウランドは後ろに大きく跳んで朽ちた城壁の上に着地した。

城壁の上に座らせる形でグウェンを下ろすと溜め息をつき、手に刺さったトゲをズルズルと抜いた。

ウランド「おまけに悪魔がらみとはね」

グウェン「…悪魔を引きちぎるなんて相変わらず常識はずれね」

悪魔に物理的な攻撃は効かない

ウランドはトゲを抜きながら答えた。

ウランド「さすがに無理だよ、多分あれは本体じゃない」

この悪魔を攻略するには、幾つもの棘の束蠢く中からグウェンのアーティファクトと、悪魔の本体を見つけ出さなければならないということだった。

グウェンはウランドの背中を目にし、尋ねた。

グウェン「手ぶらなの？」

ウランド「あいにくと、休暇の散歩中でね」

グウェンは笑った。

グウェン「そう、じゃあ悪いけど、この”寄り道”につきあってもらうわ」

ウランド「……君は本当、昔からそうだ」

グウェンはクスリと笑った。

グウェン「あなたもね」

## 21・2・A・クラブ軍中佐隊規違反事件2―（後書き）

やっぱりヒーローはヒロインがピンチの時に駆けつけるものですね。

今回はそんなベタな感じにしたいくて書いています。

次回は21・Xシリーズの最終話21・3話。4/1更新予定です。

21・3・A―クラブ軍中佐隊規違反事件3―（前書き）

グウェンのピンチを救ったウランド。

だが、悪魔にとられたアーティファクトなしには勝機なし。  
どうする！？

## 21・3・A―クラブ軍中佐隊規違反事件3―

夜の帳がかかり始めた黄昏

古い要塞跡地

崩れた城壁

剥がれた石畳

蠢く無数の棘

棘の先端に咲く死人の顔

中央で咲き誇る巨大な人食いバラ。

棘の奥に飲み込まれたグウエンのアーティファクトで、どこかにいるはずの悪魔の本体を叩かなくてはならない。  
ボキボキと、ウランドの指が鳴った。

ウランド「君のアーティファクトは任せていい？中佐」

グウエンはウェーブがかった長い髪を耳にかけ、ニヤリと笑った。

グウエン「そのつもりよ」

グウエンは目を閉じ深く深呼吸した。

アーティファクトは主人を呼ぶ。耳を傾ければ呼び声が聴こえるはず。

グウエンは瞳を開いた。

グウエン「ごめんね仔猫ちゃん、今助けるわ」

それを合図にグウエンとウランドは同時に地を蹴った。

ウランド「小爆炎！！」  
グラン・デ

ウランドが投げた光弾は勢いよく中央の巨大なバラに命中した。爆発の勢いでバラは黒煙とともに地響きを上げながら後ろに倒れた。その勢いで棘が一斉に引きずられ、ほんの一瞬、棘の中にきらりと光るものが見えた。

その一瞬をグウエンは逃さなかった。

グウエン「見つけた」

目を爛々と輝かせ、巨大なバラに飛びかかるウランド。

その様子をちらりと見、グウエンはクスリと笑った。

グウエン「奥さんには到底見せられない姿ね」

今でこそトランプの上層は異例づくめで平均年齢が低い、ウラン

ドの時代の彼自身の異例と言われたスピード出世の所以

——その戦い方から新人当初からこのように呼ばれていた。

グウエン「相変わらずね、”戦闘狂”ベルセルク」

棘たちの注意が一斉に目の前の脅威——ウランドへ向いた。

その隙間からこぼれ落ちた細身の槍を、グウエンは確と受け止めた。

蠢く無数の棘たちがウランドへ向かう。

グウエン「エース、じっとして」

ぐるりと槍を回し、地を蹴ると同時に繰り出される無数の連撃、

グウェンの槍に突かれたそばから、棘たちは苦しむように動きが遅くなった。

——アーティファクト”ピサールの槍”、傷つけた相手の時間を奪う”——

巨大なバラはまるで毒がまわり悶え苦しむようにゴロゴロと転げ回った。

その巨大なバラの根元、無数の棘が生える茎部分とバラの境界部分に巨大なセミの幼虫

——例えるなら烏賊の口の部分に幼虫があり、

冬中花草のように幼虫の背中を割って巨大なバラが烏賊の頭部分、

無数の棘が足部分であるかような姿——

グウェン「本体はあれね」

ウランド「グウェン」

名を呼ばれ、グウェンはウランドに目を向けた。

ウランド「悪魔を捕らえる装備がない、このままそのアーティファクトでとどめを刺しなさい」

グウェン「手がかりかもしれないのよ」

ウランド「この状態で悪魔からまともな情報が聞き出せるとは思えない」

確かにそうだ、心の隅ではわかっていた、グウェンは唇を噛んだ。

わざわざこの忙しい時に脱走兵である自分を追ってきた、そのウランドをこれ以上裏切る訳にはいかない、だがしかし、

グウェン「……」

ウランド「……君は事件に大小ないと言ったね」

グウェン「ええ……」

ウランド「トランプはそれ以上に大事にすべきことがあると思う  
る」

グウェンはウランドの瞳を見つめた。

ウランド「今生きてる仲間の命だよ」

ここで下手に情報を聞き出そうとながらえさせれば、下手をしたら本気を出されて一網打尽にされかねない。

悪魔はどのような力を秘めているかわからない生き物だ。

深追いは禁物、出くわしたら直ちに始末するもしくは逃げる、重要参考人とする場合、悪魔を捕らえる魔導師専用道具にて本部に持ち帰り取り調べる、それが悪魔から身を守るためにトランプで定めた取り決めだった。

グウェン「……」

グウェンは黙ったまま槍を構えた。

動かなくなった棘の中からバッチを探しだし、全て回収した。

グウェン「……ありがとう、これ（バッチ）、クラブ軍の誰かに託して頂戴、処分を受けるわ」

いつものようにキョロキョロと落ち着きなくあたりを見回しながら、ウランドはボソリと言った。

ウランド「……戻ってきなよ」

上司として突拍子のない発言に、グウェンは思わず笑った。

グウェン「何を言っているの」

ウランド「俺が掛け合っておくから、明日はいつも通り出勤しておいで、君は”うっかり”休暇の申請を上長じゃなく俺に出した、俺

はそれの処理を失念してた」  
グウエン「いいのよ、ウランド」

ウランド「君のとこの現在が一番上は誰？」

腕を組んでグウエンは答えた。

グウエン「あなたよ」

ウランド「上司の仕事は部下がよく働けるようフォローすることと  
決断してやること、わかる？」

黙ったまま首を傾げグウエンは微笑んだ。

ウランドはため息をつきながら棘が刺さり血に染まった掌をシャツ  
で拭いた。

その掌をグウエンの細く長い指が掬い上げた。

グウエン「ありがとう、エース」

かざされたグウエンの手から温かな光が溢れだした、ウランドの傷  
口がみるみる塞がっていく。

ウランド「……ええと、お礼のつもり？」

「ふふ」とグウエンは妖しく笑った。

グウエン「何が」

グウエンに取られた手の、その指先が

ウランド「……その、当たってますけど」

グウエンはニコリと微笑んだ。

グウエン「わざとだけど？」

長い睫の間から覗く緑の瞳と黒縁眼鏡の奥のブラウンの瞳が合った。

村外れ、薄暗い廃虚に二人きり

ウランドは降参するように両手を上げた。  
ウランド「帰ろう、日が暮れる」

腰に手を当てグウェンは首をかしげた。

グウェン「とつくに暮れてるけど」

ウランド「……ごめんなさい、勘弁して」

グウェン「あら？　いつからそんなにチキンになったの？」

ウランド「……明日から遠征なんだ……玄関の外じゃなくて家  
の中で寝たい」

グウェンは笑った。

グウェン「じゃあ遠征が無いときにね」

ウランド「……あのね」

## 21・3・A ―クラブ軍中佐隊規違反事件3―（後書き）

ウランド、誘惑されるの巻でした。

やっぱり男なんで美女に迫られたら悪い気はしません。

ギリギリ正気を保って切り抜けましたが、きつぱりはつきり断らないあたりが悪い気がしてないポイントだったりします。

そして、結局闇の中に消えてしまった「摩導師連続失踪事件」の手がかり。

悪魔がかかわっているという時点でヤバそうだということはわかりました。

この事件をウランドが解決する日は来るのか！？

さて、次週は久々の本編22話更新！ 4/8更新予定です。

22・cage garden(the latter part)(前書き)

海賊にとらわれたフィードとトウト。

フォードの腕には魔法封じの手錠をはめられ、孤立無援。

そんな状況を知らず、村の宴会に参加したエオルとよしのは…。

22・cage garden(the latter part)

頂点を下り始めた月。  
月明かり揺らめく水面。  
寄せては返す波音。

—— cage garden(the latter part) ——  
(かごの庭(後編))

訪れた漁村の端、簡素な木造の公民館。  
男たちの荒々しいイビキ。  
ガチャガチャと食器を重ねる音。

女の一人が言った。  
「いいよオ、お客さんなんだから」  
よしのは笑った。  
よしの「いいえ、お世話になりますし」  
女はよしのの顔を見つめた。  
「本当ザルだね、あんた」  
よしの「ザル？」  
「それに比べて、あんたの旦那はだらしないねエ」  
よしの「旦那？」  
女は部屋の角で雑魚寝する”トドの群れ”に目をやった。

屈強なオヤジたちに混じって、真つ赤な顔で腹を出して寝息をたてるエオル。

よしのもつられて目を向けたが頬を染めて慌てて俯いた。

よしの「ただだ旦那様ではありません！」

女はキョトンとよしを見た。

「え？ ハネムーンじゃないの？ でなけりや男女二人旅だなんて」  
よしの「二人ではなく（クリス含め）四人です」

女は首をかしげた。

「あんたと旦那と、あすこでうちの娘にじゃれついてる黒タヌキと…… もう一人は？」  
よしのは「あら？」と首をかしげた。

ちょうどその時だった。

ソロリと公民館の出入口が開いた。部屋に籠った酒気が流れる。

女たちは出入口に視線を集めた。

そこには一人の少年。少年はどうにも気まずそうな顔をしていた。  
女の一人が訊ねた。

「どうしたんだい、もうとっくに寝てる時間だろ」

少年は恐る恐る口を開いた。

「トウートが……」

「え……」

「ひっく、えぐ、ひっく」

イビキとすすり泣きが響く。岩壁をくりぬき、鉄格子を取り付けた

だけの簡素な牢獄。

部屋のと真ん中でグッスリと眠っていたフィードの鼻提灯が割れた。フィード「んが？」

ボリボリと腹を掻き、背伸びをしようとし、それを両手にはめられた手錠の鎖に遮られた。

そうしてばつの悪そうに、上体を起こしながらヨダレを拭った。同時に腹がなった。

フィード「腹減った」

「ひつく、ひつく、えぐ」

フィードは部屋の角ですすり泣くトウートを見た。

フィード「てめー、まあーた泣いてやがんのか」

トウート「……だつ、だつて、ひぐ、もう、オエ、ダメじゃん……ひつく」

フィード「何言ってつかわかんねーぞオラア」

ジリジリと詰め寄るフィード。トウートは昼間の”乱暴な泣き止ませ”を思い出し、なかなかのように口を硬くへの字に曲げた。

フィードがトウートの両足を掴んだ時だった。再びフィードの腹が鳴った。

フィードはトウートの足を離れた。

トウート「いてっ！」

フィード「腹減った、そろそろ出るかあ」

トウート「はあ？」

フィードは息を思いきり吸った。

フィード「たいへんだあああ！」

少しして、バタバタと複数人が駆けつける足音。

トウート「あわわ！何してん、」

慌てて向けたフィードがいたはずの場所にフィードの姿はなかった。

トウト「あれっ？」

薄汚い熊のような大男たちが三人、憤怒の形相で現れた。

「大声出してんじゃねえ」

トウト「ひいっ！」

男の一人が言った。

「ん！？」女”の方はどうした！」

トウトはわからない、と首を横に振った。

男は「そんなわけないだろ」と凄んだ。

トウトは泣きながら激しく首を振った。

男は檻を開けた。

そうしてトウトを問い詰めようとズンズンと近づいた。

トウト「ひいひい」

どすっ

突然男の肩に降ってきたものの重みで、男は思わず前のめりに体勢を崩した。

倒れ込むギリギリのところを足でこらえ、何事かと上を向きかけた時だった。

フィード「よう」

肩車をする形でフィードが男の肩に乗っている。

「てめ……」

ゴキッ

フィードは両足で男の首を締め上げた。

男は白目を剥いてドスンと気絶した。

トウート「え？ え？」

トウートはフィードと天井を何度も見た。フィードはパンパンと手を払った。

岩壁の天井、岩の凹凸に指を入れ、天井にへばりついていたらしい。余程の筋力がないと出来ない芸当だった。

「このクソアマア！！」

男が二人、剣を手に檻に乗り込んできた。

トウート「うわぁーっ！！」

フィードはニヤリと笑った。

フィード「俺様は今、腹減ってんだ、機嫌悪いぞ」

檻の中にはぐったり横たわる三人の男。

フィード「よしっ！ 食い物探しに行くか！」

トウート（逃げるんじゃない？）

トウートはすぐ隣で倒れている男たちを見た。とたんに手足が震える。

トウート「あ、危ないよ……」

すでに檻から体半分出ていたフィードはトウートを振り返った。

フィード「あ？」

トウート「だから、外にはもっとたくさん海賊たちがいるんだよっ！ 危ないよ！」

フィードはトウートの隣で横たわる三人の男たちを指差した。

フィード「このままここにいたほうが危ねえと思うけどな」

トウートはギクリとした。

トウート「だだだだつてっ！ 大人しくここにいたら怒られると思うけどっ！ 外に出たら殺されちゃうかもしれないだろっ！」

フィードはイライラと頭をかきむしった。

フィード「あーもー、めんどくせえ、てめえで決める」

トウート「え」

トウートは血の気が引いた。

フィード「だから、死ぬまでここにいるか、今逃げ出すか、てめえで決めるつつてんだ、俺様は知らん」

そう言くとフィードはズカズカと檻から出ていってしまった。

トウートは隣でぐったりと横たわる男たちと、フィードが出ていった方を何度も交互に見た。

トウート「どうしよう……どうしよう」

内臓がひっくり返りそうなくらい心臓がバクバクと鳴っている。

その時、フィードがひよっこりと現れた。

トウート（迎えに来てくれた！）

フィードはイライラしながら独り言のように呟いた。

フィード「行き止まりだった」

檻から出ると道は左右、確かに、フィードが進んだのは海賊たちが現れたのとは逆の方向であった。

フィードはそのままトウートに見向きもせず、ズカズカと立ち去った。

トウートはボタボタと涙と鼻水を垂らしながら立ち上がった。

トウート「待つてよお！ 置いていかないでよおオ！！」

点々と松明が焚かれた洞窟。

おそらく舟で通り過ぎた三日月形の島の、あの岩山の中なのだろう。殆ど人の手の加わっていない天然の岩肌、ゴツゴツとした足場で、

トウートは何度も足を捻った。

トウート「待つてよお」

フィードはズカズカと淀みなく先に行く。

トウート（出口わかってんのかな……？）

ふと、頭上が開け、トウートを白い光が照らした。トウートは頭上を見上げた。

まるで吹き抜けのようにぽっかりと穴が開き、この海賊島と同じ形の三日月がトウートに笑いかけている。

人の気も知らないで

トウートはフィードの後を追った。

「あいつら戻りが遅いな」

パチパチと響く松明の弾ける音。

毎晩の飲めや騒げやの宴が終わり、パラパラと寢室に戻り始めたところだった。

宴会場の奥で派手な装飾の椅子に腰掛け、ポツリと呟いたその男の言葉に、その場の全員が足を止めた。

「そういえばそうだな」

「ちよつと見てくるわ、親方」

派手な装飾のターバンを頭に巻き、長いふわふわのカールがかった髭を蓄えた熊のような大男

——親方と呼ばれたその男は組んでいた足を組み替え、部屋の角に目を向けた。

「まあ待て、”あの女”、魔導師だって話じゃないか」

親方に視線を向けられた、白髪の腰が曲がった中年男性は残っていた酒を瓶からあおった。

「精霊に動きはない、魔法はつかっていないよ、いやそれ以前に使えないよ、”あの手錠”をしているかぎりね」

親方は満足げに髭ををなで、ニヤリと笑った。

「よし、野郎ども、ちよつと見てこい」

フィード「おっ！ あったあつた」

トウート「出口！？」

二人の目の前には生唾沸き起こる香りに包まれた——

トウート「キッチン？」

奥には複数のコンロ、それぞれの上には大小様々な鍋。

フィードは何のためらいもなく奥へ進み、鍋の中を覗いた。

フィード「……」

フィードは次々と鍋の蓋をひっぺがしてゆく。

トウート「なに？ 何やってんの！？」

フィード「……残ってねえ」

トウート「はい？」

そうして最後の鍋に目を向けたと同時に、フィードの視線はシンク下へ向いた。

トウト「あつ」

気まずそうにフィードを見上げる丸々とした少女、海の主に餌をやっていた少女だった。

手にしている碗には鍋の残りらしき物。少女はそれをかきこむとポヨンと立ち上がり、くるりと背を向けた。

そうして走りかけたところでフィードに襟首をつかまれ、子猫のようにはぐらんとつり上げられた。

フィードは少女に顔を近づけた。

フィード「食いもんよこせ」

トウト「出口聞くんじゃなくて!？」

フィード「え？ あゝじゃあ、あとついでに出口教える」

トウト「ついでって……」

がぶっ

少女はフィードの尖った鼻に思い切り噛みついた。

フィード「いいゝってえ!!」

フィードは思わず少女の襟首を離した。

少女はどてんと尻で着地するとシンク下の戸棚を開け、包丁を取り出した。

フィードは歯形のついた鼻を押さえながら涙目で少女を睨んだ。

フィード「てんめえゝ!!」

少女は叫んだ。

「ぬっしー」を殺した!」

フィード「はあ？」

「ぬっしー」のカタキ!!」

少女は包丁を振り回しながらフィードめがけ走り出した。

フィードは易々と包丁をもつ少女の手を掴み、そのまま再び吊り下

げる形で持ち上げた。

それでも少女はジタバタと暴れた。

トウト「……もしかしてさ、”ぬっしー”って”海の主”のこと？」

少女は声を張り上げた。

「そうだ！」

フィードは笑った。

フィード「ギャハハハハ！！ ダッセエネーミング！！」

少女は涙目でフィードを睨み付けた。

トウト「……じゃあお前だったら何てつけるんだよ」

フィード「ん？ そうだな…… スーパークロスファイア12号」

トウトと少女は同時に声をあげた。

「ダッセエー！！」

トウトと少女は顔を見合わせた。

「キッチンから声が聞こえるぞ」

「あつちか」

野太い男たちの声。トウトは慌ててフィードに駆け寄った。

フィードは手錠をガシャガシャと鳴らし、ニヤリと笑った。

フィード「よし、あいつらに飯作らせるか」

トウト「出口を聞いてよ！」

「見つけたぞ！」

フィード「おおっとおー！」

フィードは少女を抱き上げた。

「リリー！」

「てめえ！ リリーを離せ！」

トウト「ちよっと！ こっちが悪者みたくなってるじゃん！」

フィード「ギャハハハハ！ このガキの命が欲しくば……」  
海賊たちは身構えた。

トウート（絶対飯作れって言う！）

トウートは海賊たちを見た。

フィード「飯、」

トウート「でっ 出口を教えろ！」

フィードはトウートを見下ろした。

こん

トウートは頭を押さえてしゃがみこんだ。

フィード「勝手に言っ てんじゃねえよ」

トウート「いたいゝゝ」

フィードはため息をついた。

フィード「出口まで」案内” しゃがれ、あと船よこせ」

海賊たちはニヤニヤと笑い、武器を構えた。

「魔法が使えなけりや」

「魔導師もただの人」

リリーはどさりとフィードの腕の隙間から落ちた。 トウートはリリーの元へ駆け寄った。

トウート「大丈夫!？」

フィードはボキボキと指を鳴らせた。

フィード「魔導師は魔法だけじゃねえって教えてやるよ」

「うごくなっ！」

フィード「あゝん？」

リリーはトゥートの首元に包丁を押し当て、フィードを睨み付けた。首に当たる刃物の感覚、当たっているだけだが、ヒリヒリする。この少女の頼りない手が少しでも動けば終わる、自分ではどうしようもない、他人に全く委ねられた自分の命――

トゥートはただ、じっとしていることしか出来なかった。

トゥート「いやだ……こわい……やめてよ」

フィード「……」

海賊たちは笑った。

「万事休すだな、魔導師」

フィード「……おい」

リリーは身構えた。

フィード「他人に刃物むけるってこたあ、覚悟ができてやってんだろうな」

リリーはフィードの発言の意図がわからず、思わず手を緩めた。

トゥート「うわああ！」

トゥートはリリーの腕を引き離し、リリーから離れようとした。もみ合うと同時に包丁が揺れる。

バシッ

フィードが蹴りあげたリリーの手から包丁が弾かれ、カラカラと音を立ててキッチンの端まで転がった。

リリーは蹴られた手を押さえた。

リリー「痛……！！！」

トウートはヘナヘナとへたりこんだ。

海賊の一人が叫んだ。

「てめえ！ 相手はガキだぞ！！」

リリーの首根っこを掴み、フィードは見下ろすように冷たい視線を海賊たちへ向けた。

フィード「不必要に他人の命脅かしてんのに、大人もガキも関係ねえ。」

海賊たちは武器を構え飛びかかった。

「リリーを離せ！！ クソ魔導師いい！！」

フィードはため息をついた。

フィード「あー……クソ、腹減ってんだよ」

フィードは海賊たちの振るう武器の隙間をスルスルと掻い潜り懷に潜り込むと、

先ず一人目の鳩尾を掌底で、

横から武器を振り上げた二人目の足を払い体勢を崩してこめかみに脚、

向かってきた三人目をバック宙からの蹴りで顎に、

バック宙の着地を狙ってきた四人目の武器を手錠の鎖で受け、クルリと捻って体勢を崩した所に鳩尾へ蹴り、

そうして後ずさる最後の五人目の首に手錠の鎖を押し当て壁際まで押しやった。

フィード「なんだ、道案内立候補か？ 優等生」

五人目の海賊は武器を捨てて何度も頷いた。

トウート「だ、大丈夫？」

震える右手を押さえ、泣きじゃくる少女に、トウートはどうかしなければと思っていた。

トウート「み、見せて？」

そっと離れた左手から現れたのは親指の付け根が内出血したふくよかな右手。

トウート「つ、つきゆびかな……」

トウートはポケットに手をつ込んだ。取り出したのはハンカチ。いつもお母さんから出掛ける時はポケットに入れるよう言われていた。

シンクの蛇口を捻り、ハンカチを湿らせると少女の手に当てた。リリーは涙の零れる目をトウートへ向けた。

トウート「大丈夫、大丈夫」

トウートは少女の頭を撫でた。

フィード「オラア行くぞモヤシメガネ」

トウート「なんでそのあだ名知ってんだよバカーッ!!」

残った海賊の胸ぐらを掴みズカズカと出ていくフィードを、慌ててトウートは追いかけた。

リリーと寝転がる海賊たちだけとなったキッチンが静かになった。

リリー「……」

フィードに胸ぐらを引っ張られよろめく海賊に、右へ左へと案内さ

れ、たどり着いたのは

フィード「あん？」

足の踏み場もなく食器や酒瓶が散乱する広間。トウートは何かの暴動の後ではないかと思った。

「なにしてやがる」

奥に置かれたド派手な椅子から悠然と見つめるひげ面の熊のような大男。

胸ぐらを掴むフィードの手を振り払い、海賊は大男の元へ駆け寄った。

「親方あ！ やられました！ あいつ強いッスー！」

親方と呼ばれた大男は立ち上がった。

「表へ出やがれ、俺が直々におとなしくさせてやる」

フィードの額に青筋が立った。

フィード「ああ！？」

トウート「表に出してくれるまででいいんだけど……」

「親方！」

屈強な海賊たちがぞくぞくと広間に集まりだした。

トウート「ひいっ！」

トウートはあわてて部屋の隅に身をかがめた。

フィード「ハン、わざわざ外出なくったって、」

フィードはニヤリと笑って地を蹴った。

フィード「この場で大人しくさせてやんよ！」

トウート「ちよっとー！ 外まで案内してもらおうよっ！ー！」

このケン力をわざわざ買う必要があるのか、この魔導師は自分のその時の感情のまま、寄り道しすぎだ、とトウートは思った。

以前住んでいた街の役場にいた魔導師は、もっと効率を重視する知的な人だった。

フィード「おらあ！」

フィードの強烈な飛び蹴りを親方の太い腕が受け止めた。

その腕はみるみるうちに黒く短い体毛に被われ、爪が伸びた。

親方はニヤリと笑うと真つ黒な拳をフィードの頬にぶちこんだ。

フィードはそのまま壁に突っ込み、ガラガラと崩れた壁の瓦礫に埋もれた。

親方は肩をすくめた。

親方「ほれ、見ろ、表へ出たほうがよかつたろ？」

トウートは血の気が引いた。人を吹き飛ばし壁をも破壊するほどの力——人間じゃない。

フィード「なるほど獣人か」

瓦礫の中からフィードはむくりと起き上がった。

親方「……頑丈なやつだ」

隆起した肩、太く長い腕、天井につかんばかりの黒い巨体——熊人間だった。

身体能力について、“獣人のような”、“獣人のように”など何かと比較される魔導師。

魔法が無ければ、一般人と言えど獣人は魔導師と互角あるいは、

親方「俺はお前より強い」

両の拳をガツンと突き合わせて、さらに追い討ちをかけるべくツカツカとフィードの元へ歩を進めた。

フィードは立ち上がると静かに構えた。

その目は爛々と輝いている。

フィード「ガルフィンのオヤジよりでけえ獣人、初めて見た」

ニヤリと笑うと、再び地を蹴った。

親方「ん？」

構えから駆け出しまで、先ほどの身体能力に物を言わせた動きとはまるで違う——正式な格闘技の型にそった流れるような動き。

親方の繰り出した拳を手にとるとそのまま受け流し、体勢を崩したところで軸足の関節を取り、引き倒した。

親方の口からうめき声が漏れた。

追い打ちをかけるため振り下ろされたフィードの足を確と掴むと、黒い巨体はむくりと立ち上がった。

フィードはそのまま吊し上げられる形となった。

フィード「いつ!？」

そして、ぐるんと振り回されそのまま地面に叩きつけられた。

トウト「ひいっ!!」

フィードは動かなくなった。

親方はニヤリと笑うとフィードを思いきり壁に投げつけた。再び壁がガラガラと崩れた。

トウト「あわっ……う、うさぎさん!」

トウトは慌てて駆け寄った。

親方「檻にぶちこんどけ」

フィードは瓦礫の中からむくりと起き上がった。

フィード「あーびびった、一瞬トんだ」

垂れた鼻血を啜ると、フィードはニヤリと笑って親方を見た。

フィード「いいこと思いついた！ お前、海賊なんだろう」

親方はいきなりなんだと鼻で笑った。

親方「だからどうした」

フィードは再び静かに構えた。

フィード「負けたらパンゲア大陸まで船だしやがれ」

親方は笑った。

親方「なんだあっちに出たいのか」

そうしてボキボキと指をならし地を蹴った。

親方「やってみろ、だがてめえは”ぬっしー”のカタキだ、手加減しねえぞ！」

トウト「わっ！」

いきなりフィードに突き飛ばされ、トウトは何するんだよと起き上がった、その目の前で

ズガァン！

山のような黒い巨体とその拳がフィードがいるはずの部分に突っ込んだ。

トウト「うさぎさんっ！！」

親方「む」

黒い拳を、手錠の鎖で白刃取りのように受け、そして横に流すと、すかさず拳を繰り出した右腕の関節を取る、

親方「いつて！」

黒い巨体は肘におかしな方向の力を加えられ、思わず膝をついた。そして膝をつき、射程圏内に入った親方の顎にフィードの足が炸裂した。

親方の視界はグルンと回った。

フィードは人差し指を天に突き出し、勝ち誇った。  
フィード「イエーイ」

魔導師養成学校には各スペリアルマスターがそれぞれに専門とする格闘技を学ぶ”ゼミ”がある。

そのうち徒手格闘技は2つ、主に自分の力を使う格闘技のガルフィンゼミと、主に相手の力を利用する格闘技のユディウスゼミ。

フィードはそのうちのユディウスゼミ出身であり、力に物を言わせる戦い方ではなく、間接技や急所攻撃など相手の体を利用する戦い方を専門としていた。

「親方！」

周囲で観戦していた海賊たちはぐったりして動かない親方に駆け寄った。

次にフィードは部屋の角にポツンと座る中年の男を指差した。

フィード「おらあ！ てめえ魔導師だろ！ さっさとこの手錠外しやがれ」

中年の男は陰気な笑みを浮かべた。

「お前……”火葬屋”だろっ？」

フィードは目を輝かせた。

フィード「おっ！ 俺様もついにそのカッコイイあだ名で呼ばれるようになったか！」

「バカだろお前、ヒヒッ」

フィード「あゝん？」

中年の男は酒瓶に残っていた酒を飲み干し、口を拭いた。

「お前のせいでランプが来る、俺はここをオサラバさせてもらっ  
よ」

フィードは「ふざけんな！」と男に殴りかかった。

「ミ・ステイフ  
時空歩」

拳が届こうかという瞬間、男の体は蜃気楼のようにユラリと揺れ、すうっと消え去った。

フィードは舌打ちした。

フィード「チッ、”補助魔法使い”か……」

手元にズシリとまとわりつく白い手錠。

フィード「んがあああ！」

近くの岩に何度も叩きつけるがびくともしない。

フィード「ハア……まあ、そのうちなんとかなんだろう」

海賊のアジトの外、点々と道に沿って灯る松明を背に、中年の魔導師は海賊船を目指し岩場を急いだ。

ちょうど、角を曲がりかけた時だった、誰かにぶつかり、尻餅をついた。

目の前には金髪の長い髪、その手には剣。金髪はにこりとさわやかに微笑んだ。

「ちょうどよかった」

「おいこら！ 魔導師！」

野太い男の声に呼ばれ振り向くと、親方の周りに集まっていた海賊たちが一斉に武器を構え、そのうちの一人の腕の中には、刃物を向

けられ硬直するトゥート。

「てめえ！ やりやがったな！」

フィード「それはこっちのセリフだ！ バカヤロー！」

海賊たちはフィードの手元の白い手錠を見た。

「ハン、てめえは”ぬっしー”を殺した！ 当然の報いだ」

フィードは鼻をほじって渴いた笑みを浮かべた。

フィード「ハア？ 何言ってやがんだバカか」

「何だと！」

鼻から出た血の塊をピンツと飛ばすと、顎をあげ、海賊たちを見下ろした。

フィード「そういつてめえらの”ぬっしー”は、何人殺していやがんだ」

「そりやあてめえ！ 村人脅すにはそれなりの……」

「おい！」

言いかけた海賊は思わず口を押さえた。

フィードはニヤリと笑った。

フィード「村人怖がらせて金巻き上げんのに、大事なペット使ってたんだろ？」

それをなんだ、棚にあげて被害者ぶってんじゃねーよバ  
ーカ」

「このヤロウ！」

海賊の一人が殴りかかった時だった。

「やめて！」

甲高い少女の声。

部屋の入り口にはキッチンで遭遇した恰幅の良い少女。

「リリー」

リリー「……お金まき上げるのに”ぬっしー”をつかってたってどういうこと……？」

海賊たちは慌てた。

「ち、違うんだリリー」

リリーは目に涙を浮かべ尋ねた。

「なにがちがうの？」

「えーと……」

海賊たちは困り果てたと互いに顔を見合せた。

親方「リリー」

数人の海賊たちに支えられ、親方は上体を起こした。

そうして周囲を見渡すよう手のひらを向けた。

親方「俺たちがたらふく食うには金がいる」

そうして次に仲間たちを見回した。

親方「昔みたいに船を襲えばいいが、仲間の犠牲も覚悟しなきゃなんねえし、逮捕されるかもしれないねえ」

最後に、親方はリリーを見つめた。

親方「仲間との生活のためには楽に安全に金を稼ぐ必要があった、それにお前が拾ってきた”ぬっしー”は最適だったんだ」

冒険者に親を狩られ、自身もひん死のケガをしていた小さな海竜を、かわいそうにと看病した。

父である海賊の親方に「海竜は海の主である」と聞かされ、海の主という意味は分かっていたいなかったが”ぬっしー”という名前を付け、

かわいがった。

そんな”ぬっしー”を悪いことに利用していたなんて。  
リリー「わあああん！」

大声をあげ、リリーは泣き出した。

フィード「そんな甘ったれた考えが賢いとも思ってたのか？」

親方「あゝん？　なんだと？」

ズンズンズンとフィードは真つ直ぐ親方に向かって歩みよる。  
取り押さえようと飛びかかる海賊たちをなぎ倒し、親方の目の前で  
ピタリと立ち止まると片足を引いて拳に力を込めた。

フィード「働け！！！！！！」

固く握られた拳は親方の頬にめり込み、背後の壁を壊しながら黒い  
巨体を吹き飛ばした。

フィードは鼻から息を吐くと、ギロリと辺りの海賊たちを睨み付け  
た。

トウートを捉えていた海賊はトウートを放り出した。

ドタリと尻餅をついて投げ出された目の前の、見下ろすウサギの赤  
い瞳にトウートはきよんとした。

目があうと、ウサギはファイと赤い瞳を逸らした。

フィード「ガンつけてんじゃねーよ」

トウートは笑った。

小舟で寝てたのも、牢屋から出るとき道間違えたのも、そして今の  
も。

トウート（なんだかんだ言って、ちゃんと心配してくれてたんだ…  
…）

そして、心配という具体的な単語が浮かぶと共に両親の顔がよぎった。

トウト（お父さんも、お母さんも……？）

トウトの目から涙がこみ上げた。

頭の中はありがとうだとかごめんなさいだとか早く帰りたいとかいった気持ちでぐちゃぐちゃとしていた。

緊張の糸がとけた。

フィード「なーくーなっつってんだろが」

トウト「ぼっぼくっ、前の町でもっ今の村でもっいっじめられてっ、」

過保護な母親と気の弱い父親、

甘ったれで不器用なくせに過保護に守られてきたプライドばかり高く、それが同年代たちから反感を買った。

出来ないくせに態度だけ偉そうだと。

そうしていつしかついたあだ名が”モヤシメガネ”。

いじめられていることを両親に言うのは恥ずかしかった。

なぜだろう、自分に期待してくれているのに、友達の一人もいないのかとがっかりさせてしまうと思ったからだろうか。

友達がいらないなんて、言えない。今日は友達と遊ぶだのなんだのと必死に嘘をついていた。

だが、そんな嘘まみれの生活は突然終わりを告げた。いつも一人でいる様子を教師が両親に伝えたのだ。

学校に気の合う友達がいなかったと、スイミングスクールに通わせてくれた。だが、それでも結果は変わらなかった。

何をやっても人より出来ない、それによりプライドが傷つくことを何より恐れた。それは自然と態度に出た。

やはり、友達は出来なかった。

両親は今度は田舎に引っ越そうと提案した。

理由はせつかくスイミングスクールに通っているのだから海のあるところに住もうというものだった。

それが自分への気遣いだと、子どもながらに気付いた。

海があり、のんびりとした田舎で、それでいて学校がある、そんな条件で探し当てたのが今の村だった。

学校の同年代たちは都会からの転入生に興味津々だった。

だが、虫を怖がったり、木登りが出来なかったり、みんなが出来て自分だけできない。「これだから都会人は」と思われている気がした。偶然か、ここでのあだ名も”モヤシメガネ”だった。そうしてしばらくしてだった。

いつも野山で冒険ばかりしている同級生たちがまだ自分達だけで足を踏み入れられない場所があることを知った。海だった。

同級生たちのほとんどが漁師の家。

親の手伝いで船に乗ることはあっても、学校の裏山のように自由に行ける場所ではないことを学んでいた。

船は大事な商売道具、なにより親から海の恐ろしさを聞かされて育った。

ゆえに、海の男になることは憧れで、海に出られることは一人前の証だった。

周りがそうなのだ、トウートもまた自然と漁師になりたいと思うようになった。

ある日、学校で将来の夢という作文を書くことになった。全員が全員漁師になると書き、トウートも当然そのように書いた。

同級生たちは笑った。虫も木登りもダメなやつが漁師になるつもりかと。

過保護な母親は当然頭ごなしに大反対、いつも優しい父親は何も言わなかったが、友達の家の船にのせてもらいたいと言うと、まだ早いとか、漁の邪魔になるとか言い、取り合ってくれなかった。

トウートは腹を立てた。

それが家出を決意させた理由だった。

トウト「だけど、もうお家に帰りたい」

目をいくら拭いても、涙は止めどなく溢れ続けた。

フィード「なんだ、イチニソマエになるために海に出たんじゃねえのか？ 諦めんのかよダッセ」

沸き起こる涙とともに余計な感情は流され、フィードのその言葉に、トウトは何ら怒りの一つも込み上げなかった。

トウト「もうい、」

フィード「痛って！」

見ると、リリーがフィードの腕に噛みついている。

フィード「何すんだよ、離せバカ！！」

リリーはトウトに向き直った。

女の子に泣き顔を見られるのは恥ずかしい、トウトは必死に涙を拭った。

リリー「おまえ、村のやつなんだってな」

トウト「……そうだよ……！」

ふくよかな小さい拳が固く握られた。

リリー「……わかったな、”ぬっしー”がひどいことして」

トウトはきよとした。

リリーの瞳はうつすらと潤み始めた。

トウト「……なんできみがあやまるの」

一呼吸整え、ふくよかな頬に一筋涙が伝った。

リリー「……ともだちだからさ」

トウートにはリリーの発言の意味が分からなかった。

「おーい！」

男が一人、慌てて広間に入ってきた。

「大変だ！村の漁師どもが押し掛けて来やがつ、うわっ！」

トウート「えっ」

男は屈強な太い腕になぎ倒された。

「大丈夫かトウート！？」

太い腕の主を、トウートは知っていた。隣の家のお父さんだ。

「うちのせがれがよ！ おめえが一人で舟乗っちまったって知らせ  
てきてよ！」

その影からちらりと顔を覗かせたのは、海に出る時、背後から話しかけてきたあの同級生だった。同級生は慌てて駆け寄った。

「モヤシメガネ！ 大丈夫かよ！」

「おめえら二人！罰として1ヶ月漁の手伝いだ！」

「えーっ！……まあモヤシメガネ初めてだしな、おれがいろいろ教えてやるよ」

父親は息子をポカリと小突いた。

「偉そうなこと言ってんじゃねーよ」

トウートは夢じゃないかとぽかんとしていた。

トウート「船に、乗れるの、ぼく」

「乗れるじゃねえよ、乗るんだよ」

心臓がドクドクとなり、体が熱くなった。自然と口の端が上がった。

後ろからぞくぞくと屈強な男たちが集まってきた。

「大丈夫かトウート！」

「よかった」

「心配かけるんじゃないよ」

大きく温かい手が次々とトゥートの頭をくしゃくしゃと撫でた。

村の男の一人が熊男を睨み付けた。

「海賊さんよう」

海賊の親方は胡座をかき、向き直った。村の男は頭を下げた。

「うちの村のもんが、迷惑かけたな」

トゥート「……」

いつも堂々としている隣のお父さんのその姿を見、トゥートは今更ながら事の大きさに気づいた。

先ほどのリリーの発言の意味が、分かった。

フィード「おい」

一同がフィードを注視した。

腕を組み、フィードはふんぞり返った。

フィード「海の主は俺様が倒してやった、これからは海賊こまつらも漁業の手伝いやるつてよ」

親方「は？ おいつ！」

リリー「やる！ やるよ！」

親方「おい！ リリー！」

リリー「……ぬつしーが迷惑かけたぶん」

親方はフィードに殴られ腫れた頬をさすった。

フィードはボキボキと指を鳴らした。

フィード「それともブタ箱入るか？」

親方は顔をしかめ押し黙った。

村の男たちはガハハと笑った。

「これからシーズンなんだ、そいつは大歓迎だ！」

「トゥート！」

背後から、聞きたかった声、

トウトが振り返るとすでにその腕の中にいた。父親だった。とたんに不思議と誇らしげな気持ちになった。

隣のお父さんに船に乗せてもらえること、海を出てからの冒険劇、怪我をした女の子を助けたこと、いろいろなことを語ろうと口を開きかけた時だった。先に口を開いたのは父親だった。

父親「心配かけさせて！」

トウトの中にあつた誇らしげな気持は消え失せた。そうして知らずに込み上げる、

トウト「……ごめんなさい……」

父親「母さん泣きながら寝込んだんだよ、帰ったら、」

トウトは声をあげて泣き出した。

トウト「ごべんだい~~~~~!!」

「くら」

後頭部を小突かれ、フィードは振り返った。そこには見慣れた金髪。

エオル「派手にやってくれたじゃない」

フィードは後頭部をさすりながらそっぽを向いた。

フィード「ちよつと遊んだだけじゃねーか」

そのそっぽを向いた先には見慣れた黒髪。

よしの「フィード様……こんなに酷いお怪我を……今治しますね！」

フィードは顔をしかめた。

フィード「あーもー」

ふと、エオルの手元に引きずられているものが目に入った。

フィード「……」

エオル「ああ、なんか海賊島をうろついでる”同胞”を見つけたからね、”案内”してもらったんだ」

先ほど逃げた、あの魔導師だった。

エオル「ところでその手錠、何？」

魔導師と目が合うと、フィードはニヤリと笑った。

肌を包む冷たい朝もや

纏う冷気を溶かすように顔にかかる朝日が眩しい

夜まで昼寝をしていたためか、この日のフィードは珍しく朝から元気だった。

フィード「おらーっ！ とつとと出航すっぞ！」

トゥートの父親は問いかけた。

父親「本当にもう行ってしまうのですか」

フィードのガナリ声が頭に響くのか、目をしょぼしょぼとさせ、真つ青な顔をさせたエオル。

エオル「ええ……（追われているので）急ぎの旅なので……」

トゥートの母親は深々と頭を下げた。

母親「本当に、息子を助けていただいてありがとうございます。」  
よしの「トゥート様は今？」

母親は苦笑した。

母親「ベッドでぐつつりです。起きたら叱らなきゃ」

父親「……あそこまで行動力があるとは思わなかったけどな」

母親は父親を睨み付けた。

母親「あなた！」

エオル（また始まった……）

父親「俺たちが石橋叩いてやるんじゃないやなくてさ、もう少しあの子の自由に、させてみようよ」

母親「あの子が傷ついたらどうするのよ」

父親「手当てしてやればいい、そうじゃなきゃ、学ばないこともあるさ、俺たちが子どもの頃はそうじゃなかったか？」

エオルは笑った。

エオル「でも、今回ほど危険なことはさせないように、ちゃんと見ていてくださいね」

父親も笑った。

父親「ハハ！　そうします。ちょっとあの子を見くびりすぎているようです」

母親は頬を膨らませた。

母親「もう！」

よしの「殿方のやんちゃに気を揉むのは女性のさだめやもしれませんね」

母親はクスリと笑った。

母親「まったくそうね」

フィード「はーやーくーしーろー！」

ド派手な装飾の海賊船の船首でフィードが跳び跳ねている。それを背中に受け、エオルはヤレヤレとため息をついた。

エオル「それでは」

父親「ええ、お気をつけて」

錨が上がり、海賊船は緩やかに大海に解き放たれた。

船の縁に寄りかかり、地平線付近のオレンジと水色の境界を眺め、フィードはポツリと呟いた。

フィード「たまには早起きもいいな」

その左隣で縁に頬杖をついて今にも眠りそうなエオル。

エオル「こっちはたまの遅起きもいいと思ってるよ」

フィードの右隣で腕に抱いたクリスを撫でながら海を眺めているよ

しの。

よしの「……」

フィード「何見てんだよ」

よしの「なんだか不思議です。海を、初めて見ますのに、初めてではない気がいたします」

エオル「もしかしたら、よしのさんはジパングの海辺に住んでいたのかも」

よしの「そうなのでしょうか」

フィードはにやりと笑った。

フィード「行けばわかんたろ、ジパングに！」

「おーーい」

一行は浜辺を見た。

疲れてぐっすり眠っていたはずなのに、こちらに懸命に呼びかける小さな体。

トウトはもはや遠くに離れた海賊船から見えるよう、渾身の力を込めて大きく腕を振った。

フィードは背を向け、うれしそうに笑った。

フィード「たまには子守も悪くねえ」

エオル「こっちはたまには”子守”も休みたいけどね」

フィード「てめ、どういう意味だコラ」

いつも通りの二人のやり取りに、よしのはいつも通りクスリと笑った。



さて、ようやく新しい大陸へと出発です。

一行が目指すルートは

「ムー大陸」(今回脱出)↓「パンゲア大陸」の「ファリアスの港町」↓「巡礼船」↓「ジパング国」です。

一方で、ファリアスの港町には「黒い三日月」シリーズのロロが居を構え、さらに、魔薬テロ犯であるギルティンのテロ目的は巡礼船に集まる神使教徒たち、

加えて、ギルティンの魔薬テロと黒い三日月のロロはランプが追っている事件でもあります。

このままいくとよつどもえの大混乱が起こりそうです。

よしのの記憶の手がかりである「ジパング」、  
それとは別にフィードがもくろむ「W・B・アライランスの目的」とは…？

まだ謎は一つも明らかになっていません。

はてさてどうなることやら。

22・1 明解! W・B・アライランス! 3 (前書き)

1111までの数をい?

## 22・1・明解！W・B・アライランス！3

これまでのおおまかなおはなし

魔法が生活の基盤である世の中で、魔法を扱うことのできる世界的公務員『魔導師』。

その魔導師の学校を優秀な成績で卒業した『エオル』は、同級生の『フィード』に騙され、魔導師犯罪組織『W・B・アライランス』の一員になってしまう。

そんな二人が出会った記憶喪失の少女『よしの』。彼女の記憶の手がかりを掴むため、三人は一路『ジパング国』を目指す。

世に広まった魔法文化に異を唱える宗教『神使教』。

W・B・アライアンス一行が目指すジパング国は神使教の総本山。魔法文化圏『魔法圏』との対立から鎖国中であり、入国するには年に一度巡礼者の入国を許可する『巡礼船』に乗る必要がある。

その巡礼船に乗るためにはファンディアス国の港町ファリアスに向かう必要がある。

一方、神使教の巡礼ルートに合わせるように、人心を狂わせ破滅に導く悪魔の薬『魔薬』“免罪符”『』が蔓延し始める。

その首謀者『ギルティン』が魔導師バッヂをつけていたことから対犯罪魔導師警察組織『トランプ』が捜査に乗り出す。

さらに捜査中のW・B・アライアンスに大悪魔『ノツシュナイト』が関与していることが判明し、危機感を増している。

新大陸に渡った一行は、トランプの追撃を掻い潜り、巡礼船に乗り込むことはできるのか？

## 各勢力の現状

### ■ W・B・アライアンス ■

よしのの記憶の手がかりを求めジパングを目指す。  
そのためにはファンディアスのファリアス港から巡礼船に乗る必要があり、ムー大陸から、ファリアス港のあるパンゲア大陸へ移動中。黒猫『クリス』の正体が大悪魔ノツシュナイドであることがわかり、加えてフィードがクリスと悪魔契約を行い危険な力を得ていることを知り、エオルはクリスを警戒する。

よしのは記憶がないこと、トウジロウから自分の名前が偽名であると言われたことなど、自身の存在に不安に抱きつつも、フィードたちを信じ、今日の前にあることを精一杯こなしてその悩み自体考える（思い出す）ヒマがなく楽しく過ごしている。

魔王の息子であるクリスは実家に連れ戻そうと悪魔たちから追われる身であり、身を隠すためにフィードたちという模様だが、犯罪組織『ブレイメン』の面々の言う『カーニバル』というキーワードの正体を知っている様子。

大悪魔ノツシュナイドと悪魔契約を結んでいたフィードだが、その危険な力を使う理由に上げたWBアライアンス結成の目的は未だ明かさず、よしのの記憶を探す旅も、そのカモフラージュだという。  
”狂犬”ハイジよりよしのの記憶の手がかりアーティファクト”ヤサカニ”のパーツの手がかりを得たが、巡礼船を目指しつつ、パー

ッをゲットできるのか!?

#### ■魔導師協会■

魔導師の犯罪組織であるW・B・アライアンスがジパング人を人質にとったことをいち早く確認、魔導師協会同盟国である世界中の国々へ情報開示対象となるトランプによる人質救出の前にW・B・アライアンスを捕らえるを試みるも失敗。

現在各国への説明対応に追われている。国際対応への方針転換により、一時協会に戻ったヤクトミは……?

#### ■トランプ■

捜査中のW・B・アライアンスにノツシュナイドが関わっていることがわかり、以下のような特別体制を敷いている。

スペード軍（対魔導師犯罪第一軍） …… エースより下の隊員は全員諜報活動に就いている。

キング シェン …… ノツシュナイド戦のため、”最強の<sup>グラン</sup>7人の魔導師”召集の任に就く。

エース トウジロウ …… ギルティン逮捕のためリケとペアを組み、捜査。ギルティンと思われる人物の逮捕に成功するが…?

ハート軍（対魔導師犯罪第二軍） …… エースより下の隊員は全員諜報活動に就いている。

キング カグヤ …… 現特別体制最高責任者。主に捜査の涉外処理を担う。

エース ウランド …… 特別体制責任者。一般隊員の諜報活動結果をすべて”エース出動レベル（国際的な事務手続きを後回しにすべき緊急的案件）”として一人案件解決にあたる。

ダイヤ軍（対災害支援軍） …… 緊急案件につき長期遠征中。

クラブ軍（諜報軍） …… エースより下の隊員は全員諜報活動に就いている。

キング ??? …… 行方不明。シエンが探すべきグランドセブンの一人。

エース リケ …… トウジロウとともにギルティンの魔薬事件担当。犯人ギルティン逮捕に成功するが…？

#### ■ハニア一行■

W・B・アライアンス同様巡礼船に乗るためファリアス港を目指す。次に出くわした際の用心棒『ハイジ』との再戦は必至。

#### ■ラプリー■

泥棒としてメキメキと腕をあげている。恩人であるW・B・アライアンスを追っていたが初めて手にした自由に心の充実感を得ていく。

#### ■ブレーメン■

『カーニバル』という謎のキーワードの元それぞれ暗躍している。中でもギルティンは殺害したトランプ隊員から奪った魔導師バッヂを付けて魔導師を騙り、巡礼船の時期をターゲットに魔薬”免罪符”をばらまいて魔導師と神使教との摩擦を図っている。また影武者として『ハンチング帽の男』を手伝わせ、トランプの捜査を攪乱に成功する。

#### ■黒い三日月■

ファリアス港にて街の裏社会を牛耳り、魔薬”フォビドゥンフルーツ”を売りさばいては大金を稼ぐ。  
W・B・アライアンス、同業者のギルティンが目的地としている場所であり、リーダー『ロロ』はトランプの捜査対象ともなっており、混戦の可能性あり？

## キーワード

### ■魔薬”免罪符”

魔薬テロ犯ギルティンがばらまく危険な薬。

### ■魔薬テロ

魔導師を装おって「すべての罪を赦される薬」として魔薬”免罪符”をばら蒔き、巡礼地で神使教徒にまで蔓延させることで魔法圏と神使教とを対立させることを目的としたギルティンのテロ計画。

### ■カーニバル

ブレームンの面々やクリスが口になっている。何のことは明らかになっていない。

### ■音楽家

5、6年前にゾンビパウダーをばら蒔いていた音楽家を名乗る謎の人物。

■ファンディアス国

巡礼船が出航するファリアス港がある国。

■ファリアス港

巡礼船が出航する港町。

■巡礼船

巡礼のため年に一回鎖国を解くジパング国へ入国するための船。

■ジパング国

よしのの記憶の手がかりがあるかもしれない国。

一行は旅路で魔薬に侵された様々な事例を見してきました。これから  
は”悪魔の薬編”後半戦です。それぞれの勢力がどのように絡み、  
ぶつかっていくのか、一行は無事巡礼船に乗り込むことは出来るの  
か、激戦、必至です。たぶん。

22・2・A―魔導師暴漢被害事件1―（前書き）

お久しぶりです。作者です。

復活しました。まずは番外編A・（エーピリオド）の更新です。

穏やかな昼下がり。

その日は待ちに待った特別な日。  
娘の帰省の日。

初老の妻はいつものコーヒーをいつもの時間に夫の書斎に持ってきた。  
た。

だが、その日はいつもと違っていた。ノックをすると聞こえるいつもの返事がない。妻は首を傾げ、書斎の扉を開けた。

目の前に広がる光景に、持っていたカップは滑り落ちた。

ウランド「ヨトルヤ」

ヨトルヤ「……」

ウランド「あの……ヨトルヤさん」

ヨトルヤ「どちら様？」

ウランドに向けられた冷たい笑み。今日は他国の案件解決のための遠征の日。少し早めの出勤を予定していたが、シャツのボタンが外れかけており、取り付けてもらおうと慌ててまだベッドの中だったヨトルヤを起こした。だがどうにも婚約者の機嫌が悪い。その理由にウランドは心当たりがあった。

ウランド「早い時間にごめん、ボタン付けてほしいんだけど」

ヨトルヤはゴロリと寝返り、ウランドに背を向けた。

ヨトルヤ「彼女」につけてもらえば、色黒の」

元カノである”グウエン”にお節介を焼いたことで、何かを疑っているらしい。

ウランド「俺の彼女は今日の前で布団にくるまってる人ですけど」

ヨトルヤ「何番目の、かしらね」

ウランドはぽりぽりと頭を掻いた。

ウランド「ええと、他のシャツが見当たらないんだけど」

ヨトルヤ「クリーニングに出してるんじゃないかしらねー………なんか枚数減ってるみたいですけど、彼女の家置いてきたの使えば？」

枚数が減っているのは戦いで血まみれになったり無惨に裂かれたりしたもので、ヨトルヤに心配かけぬよう廃棄したためだった。だがそれでは怪しまれるため廃棄した分は新しいものを買ひ、着て帰っていた。そのうちたまたま一枚すり替え忘れたようだが、それがいつのタイミングの話かなど、多忙なウランドには分からなかった。

ウランド「……俺の彼女の家はここだけなんだけど」

ヨトルヤ「うそつき」

ウランド「ほんとだよ」

そうこうしているうちに時間は差し迫っていく。ウランドは諦めて玄関へ向かった。靴を履き、ドアノブに手をかけた時だった。

「しょうがないわね」

振り向くと裁縫道具を手にしたヨトルヤ。徐にウランドのシャツに手をかけ、針を通した。  
ヨトルヤ「動かないですよ？」

ウランド「……」

ウランドはヨトルヤの顎を持ち上げた。

ヨトルヤ「ちよっと！ 動かないでって言ったでしょ」

ウランド「むり」

そのまま顔を近づけ…… かけたその時

ガンガンガン

乱暴になる呼び鈴。朝っぱらから、新聞の勧誘が何かだろうか？ ウランドは顔をしかめ、玄関を開けた。

ウランド「今何時だと思っ」

開いた先には褐色の肌に美しいカールがかった黒髪——クラブ軍中佐グウェンだった。ウランドはキョトンとグウェンを見つめた。

昨日（21・X話）の今日だ、やはり出勤しづらいのか？ といった内容の声をかけようとしたが、先に口を開いたのはグウェンだった。グウェン「重大事件発生よ、すぐ本部に出て」

ウランドは心の中でため息をついた。出勤しづらいなんて、そんな繊細な女ではない。むしろ一番早く出て迷惑をかけた分を挽回する、そんな女だ。ウランドの心のため息は安堵のため息だった。自然と

口の端は上がった。

ウランド「……わかった」

そうして家の中を振り返った。

ウランド「急ぎみたいだから、ボタンは帰ってからでいいや」

ヨトルヤの視線は冷ややかだった。

ウランド「!?」

（今度はなんで!?)

グウェン「ほら早く!」

硬直するウランドの腕を引っ張り、グウェンは走った。ヨトルヤはポツリとつぶやいた。

ヨトルヤ「……嬉しそうに鼻の下伸ばしちゃって」

まだ大半が出勤前のトランプ本部　ハートのキング執務室――

ウランド「ミカエル元少将宅に強盗……」

にわかに信じがたい話だった。豪傑と知られ、引退をかなり惜しまれた実力者だった。そのミカエル元少将は瀕死の重症。ただの強盗でないことは明らかだった。しかもその盗んだ品がさらに事件をやっかいなものにしていた。

グウェン「アーティファクト”ダグダの魔釜”」

毒物を撒き散らす非常に危険なアーティファクトである。悪用されぬよう、実力あるマドウシに危険なアーティファクトの管理を任せ、  
することはよくある話でこのアーティファクトもそのうちのひとつであった。

さらに、諜報であるグウェンがここまで出てきていることに、ウランドは思い当たる節があった。

グウェンが追っている事件、”マドウシ連続失踪事件”の被害者はマドウシ界の実力者やアーティファクト持ちのマドウシばかりであった。

ウランド「ミカエル元少将は」

グウェン「重体だけど意識はあるらしい。話を聞きにいかなくてはならないわ。ハートのキング！」

グウェンはデスクで深く椅子に腰掛け、眉間に皺を寄せて固く目を瞑っているカグヤに目を向けた。

カグヤは静かに目を開くと、まっすぐにウランドを見据えた。

カグヤ「サポートにグウェン中佐をつける、3日以内にアーティファクトを回収しろ」

ウランドはいつもの低くボソボソとした口調で短く答えた。

ウランド「了解」

ミカエル元少将が入院する病院は朝から診察待ちの人々でこった返していた。

面会時間は決められており重症患者ということで例外は認められなかった。案内をまつ間、待合室の壁際で待っていたとき、グウェンは気付いた。

グウェン「あら、ボタンとれかけてるわよ」

落ち着きなくキョロキョロと辺りを見回していたウランドはとれかけたボタンの辺りを擦った。

ウランド「ああ、気にしないでいいよ」

グウェン「だらしないわね、つけてあげるわ」

ウランドは笑った。

ウランド「このままにしておいて、楽しみだから」

グウェン「？」

看護師から声がかかった。

二人は病室へと向かった。

22・2・A―魔導師暴漢被害事件1―（後書き）

さてさて、またまたグウエンと仕事をする事になったウランド。  
本件、いったいどんな事件なのか！？

22・3・A―魔導師暴漢被害事件2―（前書き）

重傷を負ったミカエル元少将を見舞いに訪れたウランドとグウェン  
は…

## 22・3・A―魔導師暴漢被害事件2―

「がっはっはっは！　ちょっと見ないうちに立派になったのう！」  
「恐縮です」

陽当たりのよい真っ白な病室――

真っ白なベッドに全身真っ白な包帯、どれもその豪快な壮年の男性には不釣り合いだった。

ミカエル元少将――強盗に遭い、重症だと聞いていたのだが……

ミカエルは笑った。

ミカエル「敬語の一つも出来なかった若造が」

ウランド「そんなことないですよ」

ミカエル「生意気さは相変わらずじゃな」

ウランドは目配せした。

グウエン「早速ですが元少将」

ミカエルは目を輝かせた。

ミカエル「おお！　グウエン！　相変わらずでなによりだ！　お前が諜報に行った時は悲しかったぞ！」

グウエンは苦笑した。

グウエン「仕事を進めても？」

ミカエルはアゴヒゲをジヨリジヨリと擦った。

ミカエル「うーむ、相変わらずいいのう、そのツレない感じ」

グウェンは腕を組んだ。ミカエルは窓の外を見た。  
グウェン「犯人の人数は？」

ミカエル「とつさでわからなんだ」

グウェン「顔も？」

ミカエル「当然」

グウェンはミカエルのほぼ全身の包帯に目を向けた。

グウェン「何でやられたの」

ミカエル「刃物だとか、鈍器だとか、色々じゃ」

グウェン「犯人は複数なのね」

ミカエル「たぶんな」

ウランド「ミカエル少将」

ミカエルとグウェンは同時にウランドを見た。

ミカエル「……」元”少将じゃ」

ウランド「ええ、貴方は元トランプであって今はただの隠居魔導師です」

ミカエル「何が言いたい」

ウランド「よもやご自分で解決するとは思ってありませんよね？」

ミカエルは笑った。

ミカエル「なんじゃ、ワシがわざと情報を出しとらんように聞こえるか」

一切の迷いなく、ウランドは答えた。

ウランド「はい」

ミカエルはしばらく黙っていた。

ミカエル「……まったく、こんな性格の悪い男、さっさと別れたらどうだ、グウェン」

グウェン「話をそらさないの」

ミカエルは再び押し黙った。その時、ノックの音が室内に響いた。ミカエルの妻がウランドたちが持参したフルーツの籠盛りのいくつかを剥いて現れた。妻はニコリと微笑んだ。

妻「みなさんよろしければ」

ウランドは思い出した風を装おってカマをかけることにした。それは、この男がこのような状態であるのに、いるべき人間がいないことに疑問を抱いていたためだった。

ウランド「……お嬢さんはお元気ですか」

ミカエル夫妻の顔がひきつった。ミカエルはわざとらしい笑顔を浮かべた。

ミカエル「はっはっ！ 娘のように可愛がっていたグウェンの次は本当の娘に手を出すつも、」

妻「ううう」

ミカエルの妻は突然泣き崩れた。ミカエルは苦虫を噛むように顔をしかめた。

ミカエル「相変わらずどうでもいい勘は鋭いやつだ」

グウェン「本当は何があったの？」

ミカエル「……言えん」

グウェン「事件現場は自宅だったわよね、伺っても？」

ミカエル「わしに了解をとる必要もないだろう」

ウランド「……」警護”として隊員を数名こちらに配置します。有無は言わせません」

ミカエルは乾いた笑みを浮かべた。

ミカエル「”監視”の間違いだろう？」

ウランドは無表情に切り返した。

ウランド「情報を持っているかもしれない貴方を、犯人はみすみす生かしてはおかないと考えています」

”これほどまで”の重症を負わせたのだ、当時犯人は殺すつもりでミカエルへ暴行を働いたに違いない。

ウランド「グウェン、本部に連絡してくる」

ウランドは足早に病室を後にした。

グウェンはミカエルにニコリと笑いかけた。

グウェン「ついでに、何度もいうけど、私とウランドが付き合っていたのはトランプに入る前だから」

ミカエルはウランドとグウェンが入隊し、ミカエルの部下であった頃から、二人を冷やかしていた。それがいつもの挨拶がわりだった。ミカエルは豪快に一笑いすると、突然険しい顔になった。

ミカエル「……この件からは手を引け」

グウェンは腕を組み、首をかしげた。

グウェン「なぜ？」

ミカエル「……お前たちのためじゃ、頼む」

ミカエルの妻は泣きながらミカエルの肩を揺すった。

妻「あなた……助けてもらいましょうよ……」

ミカエルは険しい顔つきで首を横に振った。

ミカエル「グウェン、ウランドにも伝えろ」

グウェンはクスリと笑った。

グウェン「伝えておくわ、だけどね少将」

グウェンは涙を流すミカエルの妻にハンカチを差し出した。

グウェン「トランプは世界の”切り札”、手を引くなんてことは何があってもあり得ないわ」

ミカエルは顔をしかめ、ガシガシと頭を掻いた。

ミカエル「忘れておった、トランプは世界の”バカの寄せ集め”だと」

グウェンはニヤリと笑った。

グウェン「思い出してくれた？」

## 22・3・A―魔導師暴漢被害事件2―（後書き）

ミカエルはいつたい何を隠しているのでしょうか？

ミカエルの娘の行方は！？

ウランドは奪われたアーティファクトを取り返すことができるのか！？

次回は6／17更新予定です。

## 22・4・A―魔導師暴漢被害事件3―（前書き）

暴行事件被害者ミカエル宅を訪れたウランドたち。手がかりを見つけてすることはできるのか！？

綺麗に整えられた庭。

落ち着いたら雰囲気の良い壁紙。

穏やかな空気を湛えた調度品。

豊かな家庭であることが窺えた。

その奥に進んだ一室を見るまでは。

グウェン「ヒドイ有り様ね」

割れた窓ガラス、バラバラと散らかった本、部屋中に飛び散り乾燥して黒くなった血痕。黙ったままのウランドに、グウェンはクスリと笑いかけた。

グウェン「残してくれているわね、現場」

ウランド「……手がかりまで残してくれているといいけど」

グウェンは水晶玉と繊細な装飾の施された台座を取り出した。台座を部屋の中央の床に置き、その上に水晶玉をセットした。すると台座が仄かに輝き出し、水晶玉にぼんやりと映像が浮かび上がった。映像にはまだ何事もなく、整頓されたこの書斎でニュースペーパーに目を通してしているミカエルが写っていた。

――メモリアリスタルに地の精霊を取り込む特殊な台座をセットすることで、“その場”や“物”の記憶をメモリアリスタルに映し出すことができるサイコメトリー装置の魔導師専用道具である。

トランプでは人的情報、物的証拠の他に精霊から得た情報を手がか

りに捜査を行う。魔導師であるからこそその捜査方法である。

水晶玉には、しばらく何事もないゆったりとした時間が映し出されていた。小鳥が囀り、柔らかな陽光が窓から差し込む穏やかな一時だが、その場は突然に一変する。

窓ガラスが割れ、目出し帽に黒づくめの4、5人の男が部屋へ侵入。椅子から立ち上がったミカエルはそのうちの一人を見、固まった。

グウェン「どうしたのかしら？」

ウランド「知り合いでもいたんじゃない」

グウェン「縁起でもない憶測ね」

男たちに暴行を振るわれている間、ミカエルは一切抵抗しなかった。ミカエルが動かなくなっただことを確認すると、男たちは書斎を漁り出した。

グウェン「見つからないみたいね」

ウランド「あそこにあるけどあれじゃあね……」

グウェン「どれなの？」

ウランドは映像に映るこの書斎の窓際を指差した。

グウェン「……花瓶にしてるの……」

ウランド「あ、気付いた」

男たちはさしてあった花を捨て、花瓶を手に書斎を後にした。ウランドは頬杖をついた。

ウランド「ふーん」

グウェン「ここまでね」

チラリと隣のクロブチメガネに目をやり、グウェンは提案した。

グウェン「娘さんを訪ねてみましょう」

ウランド「場所わかるの？」

グウェンはニコリと笑った。

グウェンはリビングに足を進め、戸棚という戸棚を漁り出した。  
ウランド「……家捜し」

グウェン「諜報活動よ、……あつた！」

引き出しから取り出したのは手紙。

グウェン「……住所は隣町ね」

手にした拍子にスルリと封筒から落ちた綺麗な装飾の紙。グウェンはそれを拾い上げ、眉を寄せた。

グウェン「結婚式の招待状……」

ウランド「娘さん結婚したんだ」

グウェン「……いえ、日付がまだよ」

グウェンは招待状を封筒に戻した。

ウランド「なに」

封筒を引き出しに戻し、住所が書かれた別の封筒を取り出した。

グウェン「どうして戸棚にしまっていたのかしらね」

ウランド「？」

――隣町

同じ形の一軒家が隙間なく連なる長屋のような住宅地。封筒にあった住所を訪ねると留守のようであった。

ウランド「……まあそうだろうね」

グウェンは人差し指立てて唇に当てた。

ウランド「ん？」

「あら？ アンジェラさんのお友達？」

快活な声をかけてきたのは隣家から出てきた初老のふくよかな女性。  
ウランドとグウェンは同時にニコリと笑みを向け同時に答えた。  
ウランド&グウェン「ええ」

「そういえば最近見ないわねえ」

グウェン「最近というのはいつ頃ですか？」

「つい先週くらいからかしら、なかなか親御さんに結婚を認めてもらえないみたいでねえ、思い詰めていたみたいだけど、あんたらその相談？」

グウェン「ええ、思い詰めていたとはどのような風に？」

女性は聞いて聞いてと言わんばかりに目を輝かせ身を乗り出した。

「彼氏がさ、ヒモなのよ！」

ウランド「……はあ」

グウェン「彼氏さんが定職についてないことが原因？」

「そうみたいなのよ、なんでも稼がないで家事ばかりしている男は認めないって」

グウェン「……ミカエルも意外と古風ね」

ウランド「……というか、ヒモじゃなくて主夫っていうんじゃない？ 娘さんが仕事していらっしゃるのですか？」

女性は鼻息荒く答えた。

「ええ！ 凄腕のモンスターハンターよ！」

ウランドとグウェンは同時に「わお」と驚いてみせた。女性はまるで自分の事のように鼻高々と続けた。

「お父様もご高名な魔導師先生らしくってね」

グウェン「彼氏さんはどこに？」

女性は小首を傾げた。

「先週くらいからパツタリ……はっ！ まさか駆け落ち！？」

グウェン「こちらの家賃は今月はいつ支払いなの？」

「いえ、今月はまだ……」

グウェン「もし本当に駆け落ちだったら夜逃げってことよね」

「大変！」

グウェン「部屋に入って確かめる必要があるわ」

女性は「わかった、大家を呼んでくる」と走り去った。グウェンはニコリと笑った。

グウェン「これならトランプに変な手続きも発生しないわ」

ウランド「諜報って結構頭使うんだ」

グウェン「脳ミソまで筋肉なアナタと違ってね」

ウランド「……確かに」 ↑カーミラの一件でかなりの事務処理が発生した。

暫くしてさきほどの女性と、大家とおぼしき腰の曲がった丸メガネの老人がやってきた。老人はマスターキーを取り出し、ミカエルの娘宅の扉を開けた。

薄暗い室内はまるで何事もないように鍋が、箒が、カーテンが、ランプが、家主の帰りを待つ、日常がそこにあった。女性はカーテンを開けた。昼間の日の光が室内に明るさをもたらした。シンクに溜まった食器、部屋の隅に溜まった埃、クモの巣が張ったカーテンレール、日の光がもたらしたのは、そこに暫く人の出入りがないであろう事実であった。

女性はシンクやカーテンレールを見、呟いた。

「彼氏さんが居たらこんなになってないはずなんだけど……」  
グウェン「キレイ好きなのね」

グウェンは窓から見える、綺麗に手入れされた花壇を眺めた。花の種類ごとに小さな木札を立てて花の名前が記してある。花壇の主は几帳面であることが窺えた。

グウェン「あの花壇は彼氏の？」

「ええ、そうよ、いつつも丁寧に手入れしててね、よく挨拶してくれる穏やかそうね、そうね、丁度、」

女性と大家は同時にウランドを見た。

「アナタみたいな感じの優しそうなメガネの人よ」

グウェン「こっちは見かけだけね」

ウランド「ちよっと」

グウェン「その彼氏さん、最近何か変わったことは？」  
女性と大家は顔を見合わせた。

「アンジェラちゃんのお父さんに結婚を認めてもらえないことで大分思い詰めていたことくらいかしらね」

グウェン「そう……」

グウェンは辺りを見回した。ウランドが見当たらない。グウェンはため息をついた。

グウェン「……相変わらず落ち着きないんだから……」

大家が鍵を揺らせて見せた。

「もう出ても？」

グウェン「もう少し居させてもらってもいい？ 手がかりがあるかもしれない」

大家と女性は苦笑した。

「アンジェラちゃんはいいい友人をもっているのね」

自分たちはアンジェラとその相手との行く末を心配する友人として映っているようだ。実際はそのように装っているだけだのだが。大家に後で鍵を返しにいくよう約束し、女性と大家を玄関まで見送り、グウェンはウランドを探し始めた。  
グウェン「いた」

柔らかそうなダブルベッドにいくつかの本棚、寝室のようである。そしてその本棚の前にいつものライトブラウンのクセツ毛。

グウエン「アナタが読書だなんて」

ウランド「あれだけ几帳面な方だから、日記でも付けているんじゃないかと思っただけ」

グウエン「あった？」

ウランドは分厚い日記帳の真ん中あたりを開いた状態でグウエンに差し出し、ベッドに腰掛け足を組んだ。グウエンも日記に目を落としながらウランドの隣に腰かけた。渡された日記の開かれた部分は数ページに渡り乱暴に破かれていた。

ウランド「よっぽど慌てていたか」

グウエン「別の誰かがちぎったか……！」

千切られた数ページは筆圧によって後ろのページに痕跡が残ることを加味していたようだった。グウエンはミカエルの書斎で使用した水晶玉と台座を日記帳の上に置いた。

グウエンが魔力を込めると、ぼんやりと水晶玉に映像が浮かび上がった。映像には日記帳から見上げた男の顔が映されていた。楕円の眼鏡の柔らかそうな雰囲気をした男だった。男は泣いていた。ウランドは腕を組み、加えて組み換えた足をブラブラとさせた。

ウランド「話からするとこの方がアンジェラさんの恋人みたいだね」映像の中の男はこちらに向けてペンを握り、仕切りに何かを書いていた。日記をつけているようにも見えたが、その表情からはどこか

緊急的な、焦燥感のようなものが感じられた。少しして、男の背後から黒い腕が伸び、複数のページを乱暴に掴み取ると、そのまま引きちぎった。

男は呆然と日記帳に目を落としていた。

グウェンは水晶玉を翳した。

グウェン「背後にいるのは誰かしら？ 男の手に見えたけど」

ウランド「……もういいよグウェン、わかったから」

グウェンは「どういうこと？」とウランドを見つめた。

ウランド「アンジェラさんの恋人には大変失礼だけど、ちぎった瞬間ページの中身が見えた」

グウェンはため息をついた。

グウェン「相変わらず化け物並の動体視力ね、というか、勝手に寝室入って人の日記帳開いてる方がよっぽど失礼だけど」

ウランドはニヤリと笑った。

ウランド「”諜報活動”だよ」

## 22・4・A―魔導師暴漢被害事件3―（後書き）

ウランドはいつたい何が見えたのか？

アンジェラの行方は！？アンジェラの恋人はなぜ泣いていたのか？

ページを引きちぎったのは？

次回更新は6/25予定！

22・5・A―魔導師暴漢被害事件4―（前書き）

アンジェラの恋人の日記から得られた情報をもとに、ウランドとグウェンが訪れたのは…？

楽器の音色が優雅に響き渡る。

日は暮れ、輝き出した星々。

沢山のランプの灯りが緑の芝生を照らし、色とりどりのドレスやシワ一つないスーツの人々を彩った。

人々の背後には豪華な装飾が施された広い平屋の建物。武道の道場のようである。

門の外から一人、その建物を眺めるクロブチメガネ。

「お待たせ、ウランド」

声をかけられ目をやると、紺色の深いスリットの艶かしいドレスに身を纏った褐色の肌の美女。あまりの美しさに、その場の誰もが目を惹かれた。

ウランド「ちょっと派手すぎない、グウェン？」

褐色の細く長い指がウランドの胸元に伸びた。

グウェン「ネクタイ、曲がっているわ」

ネクタイを正し、胸元をポンと叩くとグウェンはニコリと笑った。

グウェン「このくらいが”丁度いい”のよ、似合ってるくらい言えないの？」

門の奥に目をやり、ウランドはボソリと呟くように言った。

ウランド「……うん」

グウェンはクスリと笑い、スルリとウランドの腕に褐色の美しい腕を通した。

グウェン「行きましょう」

Mt・ニードル流——門下生数百人を抱える近年台頭してきた武術道場である。タイミングが良いことに、その本家道場を立ててから数周年かの記念パーティーが道場前の庭で行われており、会場は関係者でこった返していた。

会場に入ると、グウエンはウランドを見上げニコリと笑った。

グウエン「じゃあ、別行動で」

ウランド「……<sup>クラブ</sup> 諜報にお任せします」

グウエン「あら、あなたおとなしくできるの？」

グウエンはクスリと笑い、軽やかに人混みに消えた。

ウランド（さて、）

キョロキョロと辺りを見回し近くで歓談している中年の男性グループに近づいた。

ウランド「晴れてよかったですね」

集まっていた中年の男たちは少し酒に酔っているようで、近くのグラスになみなみと酒を注ぎ、ウランドに差し出した。

「ありがとうございます」とグラスを受け取り、だが、口はつけず、ウランドはそのまま話を続けた。

ウランド「おめでたいですね」

男性たちは笑った。

「ああ、なんせ門下数百！　でかい道場！　めでてえわ！　けどよ、なんでも今日は、道場破りがやってくるんだとよ」

ウランドはキョトンとした。

ウランド「道場破り？」

「まあ、記念パーティーの余興だ余興！　大師範に敵うやつがいるもんか」

「お前みたいな若い門下、大師範が戦うところなんて、見たことな

いだろ？」

「すげえぞ〜！」

ウランド「ご挨拶に伺いたいたのですが、どちらにいらっしゃいますか？」

男たちは辺りを見回し、ごった返している会場内で更に人が集まる場所を指差した。

「あそこ、お前みたいのが大勢居やがる」

ウランド「ありがとうございます」

持っていたグラスを近くのテーブルに置き、ウランドはその場を去った。

「どなたかお探しですか？」

声をかけられ振り向くと、シルクハットに骨のような白い肌、真っ黒な唇の燕尾服を着た背の高い男。グウエンはニコリと笑い腕を組んだ。

グウエン「ええ、残念ながら、ここの門下の方？」

燕尾服の男は笑った。

「いいえ、スポンサーというか、出資をしております」

シルクハットを取り、白い手袋をつけたまま右手を差し出した。

フォビアリ「フォビアリと申します」

グウエン「グウエンよ」

握手を交わし、その場を去ろうとするグウエンを、フォビアリは呼び止めた。

フォビアリ「門下の方とは幾らか交流があります。お目当ての方をお探していると思います」

グウエンはクスリと笑った。

グウェン「ゼラヴィという人なんだけど」

にこやかにだった男の顔色が変わり、人差し指を立ててグウェンを会場の端に誘導した。

フォビアリ「その人にはもう関わらないほうがいい」

グウェンは首をかしげた。

グウェン「何故？」

フォビアリ「彼はもはやただの門下生ではありません」

グウェン「どういうこと？」

フォビアリは悲しげにただ首を振ると、踵を返した。グウェンは黙って燕尾服の背中を見つめた。その視線を背中に、男は黒い唇をつり上げた。

ウランドが近づく度、大師範を取り囲んでいるらしい人だかりは大きくなっているような気がした。一周して人だかりの薄いところを探そうとした時だった。

ドカァン！

突然、道場を取り囲んでいた石造りの塀が壊れた。長く赤い髪をポニーテールに結び、タンクトップにデニムのショートパンツ、粉塵とともに会場内に飛び込んだ若い女と、偶々塀の前に居合わせたウランドは視線がかち合った。……というより、ウランドの真上に女が飛び込んできた。

「うわあ！」

ウランドは後頭部を地面で打った。

ウランド（痛い……）

「大丈夫ですか？」

丁度ウランドにのし掛かる形で、だが、怪我をしないよう受け止めてくれたウランドなど気にする様子もなく、女は前を見据えていた。そうして、そのまま立ち上がり、ずかずかと大師範を取り囲んでいた人だかりに歩を進めた。ウランドは一人起き上がり、うつ向いたまま、ぽりぽりと頭を掻いた。

ウランド（……いくらショートパンツでも人の顔を跨がないでくださいよ……女性だったよな？）

女「M t・ニードル流大師範ニードル！ お前は間違っている！」

そう言いながら女性が指した指先に沿って、人だかりが真つ二つに道を開けた。開けたその先に、細身の長身で胸元まで伸ばした長いあごひげを蓄えたキツネ目の老人が杖に両手を置き、ニッコリと微笑んでいた。

大師範「どなたか存ぜぬが、」

女「予告を出したろう！ 私がその道場破りだ！」

ざわめいていた会場内がより一層ざわめいた。女は槍を構え、大師範に飛びかかった。大師範は軽々とそれをよけ、女と距離を取った。女は大師範から目をそらさず続けた。

女「みんな！ この男は自分の門下を利用してとんでもないことをしているんだぞ」

大師範はため息をついた。

大師範「道場が大きくなれば、それを妬み、ナンクセつけて来る者もいるじやろっ」

その一言を合図に会場内の門下生たちが一斉に女に飛びかかった。

女は槍を構えた。ところが女の背後から音もなく伸びた太い腕が女の構える槍を掴むとそのまま引き寄せ、女は腕の主と自分の槍との間に挟まれる形となった。

女（いつの間に背後に！ 気づかなかった）

見上げた斜め上のクロブチメガネの顔に、女は見覚えがあった。

女「ウラ兄！？」

ウランド「静かに、アンジエラ」

ぽそりと周囲に聞こえぬよう囁くと、ウランドは大師範にニコリと笑いかけた。

ウランド「お怪我はありませんか」

大師範は蓄えたアゴヒゲを撫でた。

大師範（まさかこれほどの”逸材”がいたとはな、どこの支部の門下だ？）

大師範はニヤリと笑い、踵を返した。

大師範「来い、道場破りを見事捕らえたお前に”褒美”をやるっ」

ウランド「それはありがとうございます」

アンジエラ「……」



22・5・A―魔導師暴漢被害事件4―（後書き）

現れたアンジェラ。大師範の褒美とは？そしてなぜか会場に居合わせているフォビアリ。話はいつたいどの方向へ転がっていくのか！

！！？  
次回は7/2更新予定！

22・6・A―魔導師暴漢被害事件5―（前書き）

道場破りをとらえたウランドは大師範から”褒美”をもらうことに。  
一方グウェンは…？

グウエン「特別コース？」

パーティー会場の賑やかさを背中に、薄暗い道場裏で褐色の肌の美女と酒の臭いを漂わせた中年の男。

男は我慢出来ずグウエンの背後から抱きついた。グウエンはクスリと笑った。

グウエン「せっかちな、もう少しお話してくれる？」

男「ジラすなよ」

グウエン「じゃあお預けね、”せっかち”な男はつまらないの」

男は慌ててグウエンから手を離れた。グウエンは男の顎をスルリと撫でた。

グウエン「いい子ね」

鼻の下を伸ばした男は酒の勢いもあって饒舌だった。

男「噂によると大師範の目に”特別”止まった門下生たちのコースがあるらしい。大会にも出ないし、何やってるか、分かんないけどな」

もういいだろ、といまにも飛びかからん男の鳩尾にグウエンの拳がめり込んだ。男は泡を吹いて崩れ落ちた。白目を向いて気絶する男に、グウエンは投げキスを落とした。

グウエン「ありがと？」

会場内に戻ると、先ほどまでの賑やかな空気とは違って変わって、どこか会場全体が興奮した、まるで試合後の闘技場の観覧席のような雰囲気包まれていた。

”噂の道場破り”でも現れたのかと、グウエンは近くにいた青年に声をかけた。

グウエン「何かあったの？」

青年は興奮ぎみに答えた。

「道場破りが現れて……」

グウエン（ヤッパリね）

「それをクロブチメガネの優男が軽々と捕らえたんだ！」

グウエン（……ん？　クロブチメガネ？）

青年は独り言の様に続けた。

「大師範から褒美をやるからって奥に連れてかれたけど、きつと”特別コース”への招待だよ！　すごいな、僕なんて足がすくんじゃって……」

グウエン「……ねえ、そのクロブチメガネってどんな人？」

青年は目撃者として自慢げに答えた。

「背はちよつと高めだったかな？　ライトブラウンの、あれ天然パーマかな？　あと……」

グウエンは眉間を押さえ、手のひらを向けて青年を制止した。

グウエン「いいわ、ありがとう」

そうしてカツカツとヒールを鳴らし、再び道場の裏へ回った。

グウエン（まったくもう！　せつかく人が”あなたの仕事減らそう（ ）”としてるのに！）

事務処理やら報告書やら

鏡のように磨かれた木製の床、等間隔に並んだ大きな窓、締め切られたカーテンの隙間から差し込む月明かり、木と汗のにおいの立ち込めるシンとした空気に自然と背筋が伸びる。

前を歩いていた大師範の声が響いた。

大師範「とりあえずその道場破りを離してやりなさい」

もはや演技だけだった、捻りあげたふりの手を放し、ウランドは道場破り——ミカエルの娘であるアンジェラを解放した。

アンジェラは一瞬、様子を伺うようにウランドを見上げたが、すぐに大師範に向かい、再び槍を構えた。

アンジェラ「いいのか、離して」

大師範はにこやかに後ろに手を組んだ。

大師範「どこまで」知っている”のかね」

アンジェラ「どこまでも何も！ ふざけるなよ”人さらい”！」

ウランド（誘拐？）

腹の底からの、大きな笑い声が道場に響いた。

大師範「人さらいとな！ 皆ワシが声をかけると喜んで参加したぞ、

”特別コース”にな！」

アンジェラ「ゼラヴィはその”特別コース”に行ったまま、戻ってこない！ 何をさせてんだよ！」

大師範は胸元まで垂れ下がったアゴヒゲを撫でた。

大師範「ゼラヴィの女か」

アンジェラ「答える！」

ウランドは大師範の後ろに目をやった。

アンジェラ「！ なに？」

道場の奥は完全にカーテンが閉めきれ、暗く、全く何も見えないが、その奥から聞こえてきた声にアンジェラは心臓が跳び跳ねた。

「アンジェラ……」

アンジェラ「ゼラヴィ！？」

久しく聞く愛しい人の声に、アンジェラはさすがのように暗がりを目を凝らした。

ゼラヴィ「帰ってくれ」

その声は震えていた。

アンジェラ「どうしてもだよ！」

大師範は笑った。

大師範「どうしてもこうしても、それが彼の”答え”だ」

アンジェラ「なん、」

ウランド「では不正解ですね」

アンジェラは潤んだ瞳でウランドを見上げた。

大師範「何がじゃ？」

ウランド「その”答え”がです」

ゼラヴィの言葉は偽りだ、という意味だった。言い当てられたゼラヴィの、ガタガタと震える息づかいが聞こえた。大師範はため息混じりの乾いた笑みを浮かべ、子どもをあやすような声で語りかけた。大師範「お前はもう帰っていいぞ」

暗がりから大師範に手を引かれ、カーテンの隙間から漏れる月明かりに照らされたゼラヴィの姿に、アンジェラは無心でその胸に飛び込んだ。だが、ゼラヴィによってアンジェラは直ぐ様引き離された。ゼラヴィは怯えたように涙と鼻水でグショグショになった顔を仕切りに横に振っていた。

ゼラヴィ「アン……ごめん……僕は君のお父さんを……」  
アンジェラ「え……」

ウランド「それが”特別コース”ですか？」

大師範は声高に笑い声をあげた。

大師範「道場運営のための”裏稼業”だ！ 魔導師相手に自分の腕が試せる、おまけに道場を運営するための莫大な報酬も手に入る！

門下にとつて、これほど使命感溢れる仕事もないぞ！」

ウランド「興味深いですね」

大師範「ハハハ！ 話のわかるヤツじゃ！ 後で詳しく教えてやろう。まずは、」

杖の先が立ち尽くすアンジェラと俯くゼラヴィを捉えた。

大師範「奴らを殺せ、それがコースへ入れてやるための試験だ」

ゼラヴィ「な……大師範！」

大師範は汚いものを見るような目付きでゼラヴィを見た。

大師範「お前の価値はトランプ元少将と知り合いだったことだけだ、それがコースにお前程度を入れてやった理由」

ゼラヴィ「そんな……」

ミカエルにアンジェラとの結婚を認めてもらいたかった。ミカエルに頼りなさ気に映っているのであらう自分を変えるため、道場に通い始めた。特別コースに招待された時、今度こそ認めて貰えると自信がついた。その矢先であった。”あの仕事”についたのは。はじめは抵抗したが、他の門下たちは家にまで押し掛け、脅し、強要し

た。自分より、アンジェラが傷つけられることを何より恐れた。そうして立ったその現場で、黒装束を纏ってはいたが、ミカエルは自分に気付いた。そして、彼は一切抵抗しなかった。

ゼラヴィは力なく膝から崩れ落ちた。柳のように項垂れるゼラヴィを抱きしめ、アンジェラは大師範を睨み付けた。  
アンジェラ「残念ね！ 父は無事よ！」

大師範「元少将の娘だったか」

大師範は興味ないと踵を返した。それは明らかにウランドに対しての”二人を殺れ”という合図だった。

ウランド「あー、別に結構です」

大師範は足を止めた。

大師範「怖じ気づいたか」

ウランド「いえ、そうではなく、」

そうしてニヤリと笑うとスーツの上着を脱ぎ捨てた。シャツの胸ポケットと袖には有名な”あの”紋章――

大師範は薄い目を真ん丸と見開いた。

ゼラヴィ「と……トランプ」

アンジェラ「ウラ兄はハートのエースなんだ」

ゼラヴィ「う、ウラ兄？」

大師範「ハートのエース……ウランド・ヴァン・ウィンクルか」  
ウランド「ご存知なのですか、光栄ですね」

ウランドの声には全く感情が込もっていなかった。

ウランド「特別コースの詳細はもう結構です。少将への暴行の証言もいただきましたので」

そしてニヤリと笑い、ボキボキと拳を鳴らした。

ウランド「後は力づくで伺います」

22・6・A―魔導師暴漢被害事件5―（後書き）

魔導師相手に余裕を見せる大師範。その理由は…？  
次回はバトルです。7／8更新予定！

## 22・7・A―魔導師暴漢被害事件6―（前書き）

大師範と対峙するウランド。なぜか魔導師相手に余裕の大師範。その理由は？

心が静まる凜とした木の香り

鏡のように磨かれた床

真つ暗に閉めきられたカーテンから所々漏れる月明かり

Mt・ニードル流本家道場

門下が何十人も横一列で雑巾がけできそうな空間に、大師範の笑い声が響いた。

大師範「生憎だが」

大師範の背後の暗がりから、何かが蠢いているを感じる。

大師範「特別コース」の門下たちは皆”やる気”のある奴らばかりでな」

ウランドも笑った。

ウランド「やる気があるのはいいことですね」

音もなく、暗がりから飛び出した影は瞬く間にウランドとの間合いを詰め、その拳がウランドの鳩尾に伸びた。ウランドはそれを軽々と避け、その避け際に手刀を黒装束の首元へ打ち込んだ。そのまま背後から伸びたナイフを持つ腕を脇に捕らえ、クルリと半身を回して足をかけ、投げ飛ばし、ズダン、という床が割れんばかりの音と振動が道場に響いた。

そのウランドの軸足をかけてバランスを崩そうと、ウランドの足元に黒装束の足がかかった。そしてウランドの軸足をガツチリと捕らえたが、どうしたことが押しても引いてもビクともしない。軸足でないほうの足をプラプラとさせ、ウランドは笑った。

ウランド「どうされました？」

そしてそのまま、その黒装束の頭部にウランドの足が炸裂した。

アンジェラが気づいて近くのカーテンを開けるまでの、ほんの十数秒の間の出来事であった。ウランドの足元に横たわる三人の黒装束。大師範は髭を撫で、ニヤリと笑った。

大師範「ほう、槍の名手だと聞いていたが」

ウランド「生憎ですが、魔導師以外の”人間”相手に武器を使用したことはありません」

大師範「お前に槍を振るわすほどの者がいないということか」

ゼラヴィはアンジェラを突き飛ばした。

アンジェラ「ゼラヴィ!？」

ゼラヴィは叫んだ。

ゼラヴィ「ハートのエース! アンジェラを連れて逃げて!」

大師範は横たわる黒装束らを満足げに見下ろすと、パチリと指を鳴らした。

途端に黒装束の男らはムクリと起き上がり、その体はボコボコと隆起し、みるみるうちに人間のシルエットからかけ離れていった。

アンジェラ「な……なに……」

ウランド「これは……」

黒装束を突き破り、岩のようにゴツゴツと突起した肌色は、所々の割れ目から青緑色の光を発し、筋肉のような岩が隆起した腕は倍に伸び、手長ザルのような姿に変貌した。

アンジェラ「ゼラヴィ！」

ゼラヴィの最早肌色の岩に埋まった瞳から一筋の涙が零れた。アンジェラは涙に濡れる瞳で大師範を睨み付けた。アンジェラ「何をした！」

大師範はただただニヤニヤとするだけだった。ウランド「……精霊障害の一種みたいですね、生体ゴーレムというやつですか」

精霊障害——体内の精霊のバランスが崩れ様々な身体症状が現れる障害

「うがあああ」

ウランドを取り囲んでいた三人の門下生たちは一斉にウランドに襲いかかった。

複雑に絡み合う長い手足をスルスルと木の葉のように避け、握った拳が一人の鳩尾に命中した。

ガン、という鈍く硬い音を立て、肌色の岩は宙に浮いた。

横たわったその鳩尾には僅かに掠れた血の跡。残り二人の門下生の追撃を避けながら、ウランドは血に染まった右手をブラブラと振った。

ウランド（思ったより痛かった……）

ウランドに殴り飛ばされた一人は何事もなかったかのようにムクリと起き上がった。

三人の門下生たちと距離を取り、ウランドは両手を腰に当て首を鳴らすとニヤリと笑った。

アンジェラ「ゼラヴィ！」

ゼラヴィ「僕はもう人じゃない……人じゃないんだ……」

ゴツゴツとした岩のような両手でアンジェラの視線から逃れるように顔を覆い、ゼラヴィはその場で膝をついた。

震える肩にふわりと掛かる温もり。アンジェラはゼラヴィの頭を被うように優しく抱きしめた。

アンジェラ「……あなたがあなたであれば、私はそれでいい」

ゼラヴィは首を振った。

ゼラヴィ「僕は君のお父さんを……」

抱きしめるアンジェラの腕に力がこもった。

アンジェラ「無事よ、二人で謝りに行きましょう、……これが終わったら」

アンジェラは槍を手にとった。

ウランド「……ん？」

門下生たちの壁の後ろで対峙する大師範とアンジェラ。アンジェラの手には槍。

ウランド（あの勢いは参考人を殺しかねない！）

「アンジェラさん、待ってください！」

アンジェラの元へ駆けつけることを阻止せんと、門下生たちが一斉に飛びかかった。

ウランド「すみませんが、急ぎなので」

うち一人の眉間にウランドの掌底がめり込んだ。視界がまわる。その門下生は白目を向いて膝から崩れ落ちた。それをヒョイと飛び越え、大師範とアンジェラの槍の切っ先に割って入った。

ウランド「アンジェラさん、落ち着いてください、治癒魔法使いの仲間が来ています、ゼラヴィさんを診てもらいましょう」

アンジェラは大師範から視線を外さなかった。

アンジェラ「私たちの幸せを、こいつがメチャクチャにしたんだ！

私はこいつを許すことは出来ない！」

ウランド「許せとは一言も申し上げていません、私に任せて頂きたいだけです」

アンジェラ「イヤだ！」

ウランドはため息をついた。

ウランド「父親に似て頑固なところは変わりませんね……」

そうしてクルリと半身を返し、後ろから音もなく襲いかかってきた門下生の腹に強烈な蹴りを打ち込んだ。ズン、という振動音とともに門下生は仰向けに倒れた。

大師範「随分軽々と倒してくれるな」

ウランド「表面がダメであれば”中身”にダメージを与える、表層の分厚い”魔物”に対する個人的なセオリーです」

大師範「ハッハッハ！ 力づくということか」

ウランド「が……人間にも有効だとは思いませんでした」

大師範は込み上げる笑いを噛み殺し、笑みで歪む顔を押さえこむようにニヤリと笑った。

大師範「人間とな、この化け物のような姿でか？」

ゼラヴィの嗚咽が聞こえた。

アンジェラ「ゼラヴィは人間だ！ 姿など関係ない！ 人間の皮を被った化け物は貴様だ！」

アンジェラは槍を構え大師範に飛びかかった。

ウランド「ああっ！ 待つてくださいアンジェラさん！」

止めに入ろうとしたウランドを背後から岩のような長い腕が羽交い締めにした。

ウランド「ちょうどいいところに」

羽交い絞めにしてきた門下生の足を蹴り上げ、バランスを崩したところでその門下生の体は宙に浮いた。

アンジェラの目の前で、あとほんの数センチまで迫っていた大師範は肌色の岩に押し潰されるように吹き飛ばされた。

アンジェラ「ウラ兄！ 邪魔しないでよ！」

ウランド「無茶言わないでください」

そして、ゼラヴィに視線を向けた。

ウランド「ゼラヴィさん、貴方のオテンバ姫を少し大人しくさせていただけますか」

アンジェラ「オテンバってなんだよ！ いつまでたっても子ども扱いして！」

ウランド「心外ですね、私がいつそのような失礼な扱いをいたしましたか？」

アンジェラ「今だよ今！ たった今！」

ゼラヴィ「あ、アンジェラ、ハートのエースと知り合いなの？」

アンジェラ「ああ、あのね、」

ドガン！

バラバラと音を立てて道場の壁に穴が開き、外気が道場内に流れ込

んだ。道場を囲む塀にめり込んでいるのは、さきほどウランドが大  
師範に向け投げ飛ばした門下生。――道場の奥、暗がりに光る青緑  
の瞳。

ゼラヴィ「アンジェラ！」

アンジェラを守るように覆い被さった肌色の岩に、人間の腕ほどの  
長さの鋭い鉤爪が襲った。

ガン！

鈍い音とともに飛び散る赤い飛沫。

ゼラヴィ「……？ 痛くな、」

大師範「なるほど魔導師の鑑だな」

頭上を見上げたゼラヴィの頬に、一筋の血が滴った。

アンジェラ「ウラ兄！」

十字に重ねた腕で、頭上から降ってきた鉤爪を受け止めたが、肌色  
の岩の巨体を壁を突き破るほど投げ飛ばす怪力を、そのまま頭上か  
ら受け止めたウランドの両足は木製の床を割っていた。

ウランド（……これはさすがにちよつと痛い）

そのままその鉤爪を捉えようとクルリと半身を返したが、鉤爪は直  
ぐ様道場奥の暗がりに引っ込められた。その一瞬、チラリと見えた  
鉤爪の伸びる長い腕は桃色がかった白っぽい灰色の体毛で覆われて  
いた。

それを捉えようと伸ばした手の中から、ボタボタと真っ赤な血が溢  
れた。

幾つかむしりとったその竹串のような体毛は鋼のように固く、針のように鋭利だった。

ウランドは掌のそれを引き抜きながらため息をついた。

ウランド「私がまだ若ければ前言撤回していたところですが、歳をとると本当、頑固になるものですね」

暗がりの奥から囁れた、だが愉快そうな声が道場に響いた。

大師範「頑固とな？」

手に刺さった針を全て抜き、その場に放り捨てると、指をボキボキと鳴らした。

ウランド「証明して差し上げると申し上げたのです、化け物ではなくあなたはただの人であるということを」

大師範は豪快に笑い、そしてゼラヴィに視線を向けた。

大師範「そいつらは化け物だがな、私は違う」

ゼラヴィ「何がどう違うっていうんだ！」

暗がりから、月明かりの差し込む壊された壁の前に、ゆっくりと現れたその姿にゼラヴィは息が止まった。

桃色がかった灰色の針のような体毛、胴体の倍はあろうかという長い腕、その先についた人間の腕ほどの長さの鋭利な鉤爪、天井までつく肩、前につき出した頭とさらにつき出した鼻に、犬のように大きく裂けた口、猿のように長い尾――

大師範「人を超越した最強の、”超人”だ」

青緑の瞳に、口に手を当て、笑いを堪えるウランドの姿が映った。

大師範「……何が可笑しい」

ウランド「では前言撤回です」

ウランドは拳を構えた。

ウランド「どんな”超人”<sup>ばけもの</sup>も、魔導師の前ではただの人であること  
を証明して差し上げましょう」  
大師範「おもしろい、やってみろ」

22・7・A―魔導師暴漢被害事件6―（後書き）

全身針に覆われた大師範。対して人相手に武器は使わないと豪語したウランド。また、大師範に一矢報いたいアンジェラ。絶望するゼラヴィ。暗躍するグウェンは…？

そんなもろもろの続きは次週7/15更新予定！

22・8・A―魔導師暴漢被害事件7―（前書き）

ハリネズミの化け物と化した大師範v・s・アンジェラ&amp;ウランド。

一方、本格捜査を開始し始めたグウェンは…？

グウェン「何……！？」

道場から爆発音、パーティー会場内は騒然となった。

そして、煙の中から現れたものを見て、人々は恐怖にかられ逃げ惑った。

「魔物だ！」

――違う、お前らより優秀な特別コースの門下生だ

「化け物！」

――違う、人間だ

「退治しろ！」

――違う、やめてくれ！

パーティー会場の一般門下生たちが武器を構え、肌色の岩の化け物を取り囲んだ。

「ち、違う、俺だよ、マークスだ……！」

「ふざけるな！ マークスは特別コースに迎えられた、我々の誇りだ！ お前のような化け物が何を……！」

両者の間に、紺色のドレスに身を包んだ褐色の肌の美女が立ちはだかった。美女はニコリと微笑んだ。

グウェン「ダメよ、そんな言い方しちゃ」

そうして肌色の岩の隙間から覗く青い瞳に目を合わせた。

久しぶりの、人間として見られている感覚だった。

グウエン「重度の精霊障害だわ、でも治る。彼は人間よ」

「あんた、医者か」

グウエンはクスリと笑った。

グウエン「魔導師よ」

アンジェラは槍を構えた。

アンジェラ「魔物討伐”はあたしの本業だよ”

ウランド「こらこら、人を見かけで判断してはいけませんよ」

アンジェラ「ウラ兄はさっきから邪魔してばかり！」

ウランド「お言葉を返すようですが、先ほどから私の邪魔をしているのは貴女ですよ」

アンジェラ「なんだよー!!」

ウランド「ハア……相変わらず聞き分けのない子ですねえ」

アンジェラ「だーかーらっ！ 子ども扱いすんなって！」

ガン！

巨大な鉤爪が二人の頭上に降ってきた。ウランドとアンジェラはそれぞれ左右に避け、アンジェラは着地と同時に床にめり込む鉤爪に飛び乗り、そのまま大師範の腕を駆け上った。

ウランド「あっ！ こらっ！」

針の体毛をジャリジャリと踏み分け、あっという間に肩に乗ると、槍の切っ先を大師範のこめかみに突きつけた。

アンジェラ「打ち取っ……」

笑う青緑の瞳、飛び散る真紅の鮮血

アンジェラは大師範の背後——自分の側面から音もなく迫ってきた”蛇”に気がつき、とっさに槍で遮ろうとしたが、”蛇”のほうが一瞬速かった。矢のごとく、槍の間を縫ってアンジェラの目前に鋭い牙が迫った。アンジェラが「しまった」と思いかけた瞬間、視界は何かに覆われた。

ゼラヴィ「ハートのエース！」

ゼラヴィの視線の先には、アンジェラを守るように抱きしめる形で蛇との間に立つクロブチメガネ。

アンジェラ「あ……」

ウランド「……貴女が”魔導師顔負け”の優秀なモンスターハンターであることは伝え聞いています」

アンジェラはウランドが伸ばす手の先に目をやった。

大師範「ぎゃああー！」

そこにはウランドの手に握り潰された大蛇の頭、それは、大師範の尾に繋がっていた。

ウランド「ですが、今の貴女は頭に血が昇りすぎています、お願いですから、どうかここは私にお任せいただけませんか」

アンジェラの返事を聞く前に、ウランドの大きな手がアンジェラの背面のベルトをふん掴むと、そのままアンジェラを放り投げた。

アンジェラ「おわーっ！っ！」

ゼラヴィ「アンジェラ！」

ドサリと音を立て、アンジェラはゼラヴィの腕の中に納まった。アンジェラはすぐさまゼラヴィを押し退け、ウランドに向かい怒鳴り付けた。

アンジェラ「バカ！ 危ないじゃんか」

ウランドはニヤリと笑い、ゼラヴィを指差した。

ウランド「危なくないです、計算済みですよ」

アンジェラ「あんた物事の計算とか出来ないでしょーがっ！」

ウランドと大師範の目がかち合った。

ウランド「よく言われます」

大師範「いつまで肩に乗っているつも、」

バキッ

ウランドの拳が大師範のこめかみにめり込んだ。大師範の針山の巨体は道場の壁を破壊し、外の塀をなぎ倒して仰向けに倒れた。その場に着地したウランドの拳は針と血にまみれていた。

ウランド「痛たた……」

アンジェラは慌てて駆け寄った。

アンジェラ「ホラ見ろ！」

駆け寄りかけたアンジェラを、ウランドの手のひらが制止した。

ウランドは仰向けに倒れた大師範から視線をはずさないまま答えた。

ウランド「性分です。貴女のお父上にはよく早死にするタイプだと言われたものです」

そして静かに拳を構えた。

破壊された壁から差し込む月明かりが、暗く遮られた。月明かりを遮る影はよたよたとふらついていた。

大師範「ワシのこの体に躊躇なく拳を入れるとはな」

ウランド「その姿では連行に困ります。頭のでっぺんから生皮剥がれたいければ元の姿にお戻りください」

牙をむき出し、大師範は高らかに笑った。そして、全身の”針”が

逆立った。

ウランドはニヤリと笑った。

ウランド「では仕方がない」

大師範「ゼラヴィ」

ゼラヴィはビクリと肩を震わせ、カタカタと震える瞳を大師範に向けた。

大師範「何をしている」

ゼラヴィは小刻みに乱れる息をそのままに、ワナワナと笑う膝のま  
ま、ウランドに視線を向けた。

アンジェラ「ゼラヴィ！ もういいって！」

ゼラヴィは無言で首を横に振った。

ウランド「……たとえ貴女の許しを得ても、ご自身を許せないの  
でしょう」

アンジェラ「~~~~~！」

アンジェラの瞳から涙が次々と零れ出した。

アンジェラ「もうやめようよ……ゼラヴィ……」

ゼラヴィは固く目を閉じ拳を握りしめた。

ウランド「……これ以上、アンジェラさんを悲しませないために、  
あなたができることは本当にそれですか？」

ゼラヴィの目から鼻から水が溢れた。

ゼラヴィ「……もう、ダメだ、……殺してくれ」

アンジェラ「ゼラヴィ、やめてよ……」

ウランド「……ゼラヴィさん、お言葉ですが、あなたはご自分のことしか考えていらっしやらない」

ゼラヴィ「え……」

拳に刺さった針を抜きながら、ウランドは続けた。

ウランド「アンジェラさんがなぜ泣いているか、わかりますか？

ミカエルが、なぜ無抵抗にただ襲われていたか、わかりますか？」

ゼラヴィは力なく膝をついた。

ゼラヴィ「……ぼくのためだ……！　それが、耐えられないんだよ、こんなになってしまつて」

ウランド「甘つたれるな！」

初めて聞くウランドの大声に、アンジェラはキョトンとした。

ウランド「ゲホ……失礼、つい声を荒げてしまいました」

いつものボソボソとした低い声で、ウランドは続けた。

ウランド「貴方はそれに耐えられるようになっていただかなくては、アンジェラさんのために」

ゼラヴィ「……アンジェラのため……」

ようやくわかった気がする、お義父さんが、ぼくを認めなかった理由――

ウランド「正面から向き合つて、戦つて、それからですよ、耐えられるかどうかなどというのは」

ゼラヴィは頷いた。

大師範「……役立たずが」

ゼラヴィはまっすぐと大師範を見た。

ゼラヴィ「あなたにとっては何」

けど、アンジェラとお義父さんにとっては違う、そうやってみせる

ウランド「……いい男じゃないですか、アン」

アンジェラは笑った。

アンジェラ「誰かさんとは真逆で男臭くないところがよかったのに」

ウランドは肩を竦めた。

ウランド「それは失礼」

大師範「何をグダグダと」

「そこまでよ」

道場の扉が開き、褐色の肌の美女、その手元には――

アンジェラ「親父の花瓶……？」

グウエン「魔導師への暴行および危険アーティファクト無許可所持、重罪よ」

大師範は毛を逆立てたまま押し黙っていた。

グウエンはクスリと笑った。

グウエン「セイラムにかけるに十二分に値するわ」

グウエンの背後から現れた屈強な男、その男をゼラヴィは知っていた。

ゼラヴィ「マーカス！」

マーカス「魔法さえあればこの通りだ！俺たちは一生あのままじゃなかったんだ！」

大師範「許さぬ」

ゼラヴィが大師範の声に振り向きかけた瞬間だった。眼前には真っ

黒な鉤爪――  
ゼラヴィ「あ……」

ドチャツ

大師範「ぎゃあああ」  
まるで矢に射ぬかれたように、深々と壁と共に大師範の手は串刺された。グウエンとアンジェラの槍によって。

グウエンはニヤリと笑った。

グウエン「人相手に武器は使わないんじゃないかなかったかしら？」  
ウランドは無実をアピールするように両手をヒラヒラとさせた。  
ウランド「何を言ってるのかな、あれは俺のじゃない」  
グウエン「……槍の持ち主の話じゃないけど」

アンジェラ「ゼラヴィ！」

アンジェラとゼラヴィは互いに固く抱き締めた。  
アンジェラ「バカゼラヴィ！」  
ゼラヴィ「ごめんよ、アン」

野次馬として会場のすべての人々が道場を取り囲む中、楽器を黙々と片付ける男が一人。そして、その男に近づく燕尾服の男。  
音楽家は言った。

「残念だったな、もうここのアーティファクトはすべてトランプに

持ち帰られる」

フォビアリ「あれ以外はすべて移動させました」

音楽家は首をかしげた。

「なぜあれだけ残した」

フォビアリ「あの大師範、最近仕事の単価を上げてきてましてね、切  
つてしまおうかと。モノはいつでも”取り返せます”」

音楽家は笑った。

フォビアリ「ところで”パーヴァー”」

音楽家は顔を上げた。

フォビアリ「いいのですか？ ハートのエースですよ？」

音楽家はニヤリと笑った。

「直にトランプを辞めるらしい、それからだ」

フォビアリは興味なさ気にステッキで肩を叩き、踵を返した。

フォビアリ「さて、”発つ鳥跡を濁さず”といきますか」

## 22・8・A―魔導師暴漢被害事件7―（後書き）

一件落着と思いきや、怪しい影がちらほら。

「音楽家」という単語と「パーヴァー」という単語は一度それぞれ別のタイミングで本編に出てきています。

22・Xシリーズはあと二話続きます。

次回更新は7/22予定です。

22・9・A―魔導師暴漢被害事件8―（前書き）

急転直下。転がりだしたら次々と。

ミカエル「おお！ グウエン！ どうした、捜査に行き詰まったか」

小鳥囀ずる穏やかな朝だった。

真っ白な病室の真っ白なベッドのうえで、茶色のニースペーパーを広げ、取り替えたばかりであろう真新しい包帯に身を包み、ミカエルはいつもの冗談めいた、だが受容的な安心感を与える笑みを向けた。

笑みを向けられた元部下は静かに背中にあつた手をミカエルに見えるよう肩の高さにもつてきた。その手中にはミカエルにとって見慣れた花瓶。

ミカエルの顔が僅かに曇った。

ミカエル「取り戻したか、さすがは”切り札”だな」

グウエン「犯人はクラブで取り調べ中よ」

ミカエル「……その中にゼラヴィという若造はおらんだか？」

グウエン「あら、知り合いなの？」

ミカエル「ちよつとな……」

――ノックの音

ドアから現れたのは久しぶりに会う愛娘、だが、それは余計にミカエルの表情を曇らせた。

ミカエル「久しぶりだな」

アンジェラはいつもの屈託のない笑顔を向けた。

アンジェラ「いい加減結婚認めてほしいんだけど」

ミカエルは表情を隠すように窓の外に顔を向けた。

ミカエル「アン、お前に話さなくてはならないことがある」  
アンジェラ「あたし”たち”もだよ」

ドアが静かに開き、現れたのは、”あの朝”、暴漢どもの後ろで一人震えて泣いていた、あの若造――

ミカエル「ゼラ、」

ゼラヴィ「申し訳ありませんでした!」

ミカエルと目があうなり、ゼラヴィは鼻を床に押し付けた。その肩は震え、床からは鼻をすすする音が聞こえた。

ミカエル「やめろ、床が汚れる」

ゼラヴィは「はい」と返事をし、涙と鼻水にまみれた顔をミカエルに向けた。

アンジェラ「親父……お父さん、彼は暴行を認めたわ、今日、セイラムにかけられる」

ミカエルは驚いたように目を見開きゼラヴィを見た。

アンジェラ「どんな呪いをかけられるかもわからないけれど、私、この人と生きたい」

ゼラヴィ「お義父さん」

ゼラヴィはゴクリと喉を鳴らした。

ゼラヴィ「たとえどんな呪いをかけられたとしても、必ず僕は僕のまま、帰ってきます、約束します、だから、」

そのまっすぐな瞳には、これまでの、オドオドビクビクとミカエルの顔色を伺っていたあの若造の面影は少しもなかった。

ミカエル「ハア……」

ゼラヴィの次の言葉を遮るように、ミカエルはわざとらしい大きなため息をついた。

ミカエル「……アン」

アンジェラ「はい」

ミカエル「確かにウランドのような男でなければ認めんと言ったが」  
ウランド「は？」

グウェン「あら」

アンジェラは気まずそうに頬を掻いた。

アンジェラ「……何年前の話だよ……」

ミカエル「見かけだけじゃないか」

ウランドとゼラヴィは互いに見合わせた。

メガネに癖ツ毛、”一見”穏やかな雰囲気――

アンジェラ「ゼラヴィは一見じゃなくてホントに優しいから」

ウランド「どういう意味ですか」

アンジェラは追求するようにミカエルを指差した。

アンジェラ「親父こそなんだよ！ あたしとウラ兄くっつけようと  
家庭教師頼んじやったりしてさ！ でも結局グウェンさんとくっつ  
けようと画策してたじゃん」

ウランドは新人時代、ミカエルから魔導師になりたがっている自分  
の娘への家庭教師を頼まれ、数週間相手をしていた頃を思い出した。  
ウランド「……あれにあんな意図が……」

グウェンはクスリと笑った。

グウェン「でもあなたの”生意気さ”がわかってからアンジェラち  
やんの”悪いムシ”にならないよう私との関係をからかいだしたの  
よね」

確かに、ミカエルは会ったたびにまだ付き合っていないのかだとか、  
グウェンこんな男はやめとけなどと言ってからかっていたが、  
ウランド「……それにそんな意図が？」

グウェンはウランドを見上げ、ピタリと笑うのをやめた。

グウェン「鈍感」

ウランド「……よく言われる」

ゼラヴィ「そんなあ」

アンジェラは慌ててバシバシとゼラヴィの肩を叩いた。

アンジェラ「今は違うつて！ ウラ兄なんかよりゼラのが魅力的！」  
ウランド「……私にコメント求めていないですよ？」

ミカエル「そうじゃな！ こんな見かけ倒しのエセインテリなどと比べれば！」

ウランド「……ちょっと」

病室は一人を除いた笑い声に包まれた。

笑い声が収まり、ミカエルは床に膝をついたままのゼラヴィを見下ろした。

ミカエル「必ず帰ってこい、そうすれば、……認めてやる」

ゼラヴィ「……はい」

アンジェラ「もー！ すぐ泣く！」

グウェンは三人の様子を眺めながら微笑んだ。そして、グウェンとウランドは気づかれぬよう静かに病室を出た。

グウェン「……まだミカエルの警護は解かないの？ 人材のリソース厳しいんだけど」

ウランド「……芋の根っこの先までキレイにしたらね、それまでは、いつどこに仲間がいるとも限らない」

グウェン「抜かりないわね」

ウランド「当然。ところでさ、例の薬の件、何か分かった？」

グウェン「”特別コース”の門下生たちが投与されていた、人為的に精霊障害を引き起こす薬ね……残念だけど、今のところ何も取り調べと並行して調査するわ」

ウランド「……薬ねえ」

ウランドの頭に、トウジロウとリケが追うあの案件がよぎった。

ウランド（まさかとは思っけど……）

——なんか嫌な予感がするな

ウランド「え？ ボタン……」

考え事をしながら帰宅したウランドは、すっかり忘れていた。後先考えずに結局血にまみれたシャツをまったく後先考えずいつものように新しいものにすり替え、そして何事もなく帰って来たのだ。つい前日の朝の出来事など、まんま頭から抜け落ちていたことに、帰宅してからようやく気がついた。

ウランド「ええと、ごめん、任務で汚したから捨ててきた」

ヨトルヤはジロリとクロブチメガネの奥を見つめた。

ヨトルヤ「……汚したのは本当に任務でかしらね」

ヨトルヤの言いたいことが、わからない。

ウランド「ごめん、ということ？」

ヨトルヤは下駄箱の上に置いていた裁縫箱を手に、部屋の奥へと戻っていった。ウランドは慌ててその後を追いかけて、待つてとヨトルヤの手を取った。

ヨトルヤ「触らないでよ！」

ウランド「すいません」

ウランドは反射的に両手を上げた。だがそれが余計にヨトルヤの怒りに火をつけたことが見てとれた。

ヨトルヤ「ごめんごめんって、その場しのぎのごめんがイラつくの！」

ウランド「……？ 本当に悪いって思ったから謝ってるんだけど」

ヨトルヤ「意味わかんない！」

ヨトルヤはそこいら中のクッションやら何やらをウランドに投げつけた。

ウランドは軽々とそれらを受けとめ、近くに丁寧に置いていった。  
ウランド「俺の何で怒らせたのか、本当にわからないんだ、教えて？」

ヨトルヤ「わかんない？ あなたのそういう無神経なところも嫌い！」

ウランド「ごめ、……えーと、うん」

ヨトルヤ「……何でうちに帰ってきたの」

ウランドはぼかんとヨトルヤを見つめた。

ヨトルヤ「二日も元カノと出張、おまけに服まで新しいものに着替えてきて」

そういうことか、とウランドは心の中でため息をついた。

ウランド「……まだ疑ってるの……どうしたら信じてくれる？」

ヨトルヤの投げたクッションがボカリとウランドの顔面に直撃した。

ヨトルヤ「……職場でもうあの人に関わらないで」

ウランド「……無理だよ、仕事なもの」

ヨトルヤはウランドを睨み付けた。

ヨトルヤ「あなたトラップで偉い人なんですよ！ 左遷だとか辞めさせるとか、なんだって出来るじゃない」

ウランドの声がワントーン低くなった。

ウランド「……ヨトルヤ、ちよつと意地悪だよ」

ヨトルヤは顔をゆがませ、見下すように鼻で笑った。

ヨトルヤ「……庇うのね」

イライラが増すヨトルヤの顔。ヨトルヤをたしなめたつもりが、どうもおかしな方向に解釈されたいらしい。ウランドは困り果てた。

ウランド「違うって、どうしたの」

ヨトルヤは金切り声混じりに叫んだ。

ヨトルヤ「もう大嫌い！ 出ていって！」

ウランド「……やだ、だって俺はヨトルヤが、」

ヨトルヤはズカズカとウランドの脇をすり抜け、寝室に入るとベッ

ドの上に大きなカバンをとりだした。ウランドはギョツとした。

ウランド「ちょっとヨトルヤ！」

荷物をつめるのを遮らんとヨトルヤの両手を掴もうとしたが、先ほど触るなど言われたことを思い出し、ただ隣で荷物が詰め込まれる様子を見ていることしかできなかった。

ウランド「……どうしたらいいのかわからないよ」

ヨトルヤ「私もよ」

目も合わせず、ヨトルヤは玄関へ向かった。

ウランド「……」

静まり返った部屋。家には延期された遠征用の荷物を取りに立ち寄っただけだった。すぐに、職場に戻らなければならなかった。

太陽は頂点に登りかけ、午前中までにこなさなければならぬ仕事のため、デスクに向かうものの、ペンが一向に進まない。仕事に集中出来なかったことなど、これまでなかった。それがウランドを余計に混乱させていた。

ウランド（……この状態で遠征は結構しんどい）

執務室にノックが響いた。現れたのはグウェン。グウェンはいつものようにニコリと微笑み、デスクの前まで歩を進めた。

グウェン「あなたこれから遠征でしょ？ 私これから昨日の報告書をキングに出すところだからついでに……」

そうして除き込んだ、まるで時間の止まったかのようなデスクの上に、グウェンは目を丸くした。いつも仕事の早いこの男が珍しい。

グウェン「あなたに限ってないとは思っけど、調子悪い？」

ウランドは窓の外を見た。

ウランド「そんなことないよ」

グウェン「そんなことあるじゃない、どうするの、これじゃ午後から遠征行けないんじゃないの」

それもそうだ、とウランドは今朝の出来事をポツポツと語った。もちろん、ヨトルヤの”暴言”を除いて。

グウェンは「ふーん」と腕を組んだ。ウランドはデスクに突っ伏した。

ウランド「どうしたらいいのかわかんない」

グウェン「そうね、少なくとも、」

ウランド「グウェン」

グウェンは机に突っ伏したままのライトブラウンのクセツ毛に目を落とした。

グウェン「なあに」

ウランド「……………この間さ、」

グウェン「うん」

ウランド「……………誘ってくれたよね」

グウェンは先日の単独行動（21・X話）の際にウランドを誘惑して断られたことを思い出した。そうして思わずクスリと思い出し笑いだ。

グウェン「ええ、そうだったわね」

しばらくの沈黙。グウェンはただウランドの次の言葉を待った。

ウランド「……………今度、俺から誘っていい？」

グウェン「今度って」

ウランドは机に突っ伏したまま顔を横に傾け、すぐ隣に立つグウェンを見上げた。

ウランド「今」

グウェンとウランドの視線がかち合った。少しの間沈黙が続いた。

そしてグウェンはクスリと笑うと、美しい黒髪を耳にかけ、ウランドに顔を近づけた。

グウェン「私はいいけどあなた、火に油注ぐことになるわよ」

ウランドは体を起こし、両手で顔を覆いながら、深く長いため息をついた。

ウランド「……その通りだ」

グウェン「もう、昔っからそう、すぐそうやって女に依存するんだから」

ウランド「……そうだね、ごめん」

そして背もたれに身を預け、ボンヤリと中空を見つめた。

ウランド「多分、実家だから、謝ってくる」

グウェン「思ったんだけど、どうしてあなたが謝るの」

ウランドはキョトンとした。

ウランド「彼女に嫌な思いをさせているのは俺だから」

グウェンはヤレヤレとため息をついた。

グウェン「……それがその場しのぎってことよ、もう」

ウランド「え？」

グウェンは腕を組み替えニコリと笑った。

グウェン「あなたは彼女に謝”られなければならない”の、でなき

や、彼女消化不良よ……もう積もりに積もってそうだけど」

ウランド「……そんなの待って、戻ってこなかったら……」

グウェンは声を上げて笑った。

グウェン「その時はその時よ！　あなた大事にし過ぎて見失っているわ、彼女を信じることを」

なるほど、と思った。彼女はいろいろな要求や理不尽な怒りをぶつけてくるが、なぜかはわからないがそうさせているのは自分のせいなのだからと謝って、仲を取り持っていたと思っていた。だが、それが逆にヨトルヤにストレスをため込ませていたのか。どんなに打つても響かずただ吸収するだけのスポンジ。これまで元カノたちにはそんな遠慮はしたことなかったが、ヨトルヤが大切過ぎて、いろいろ見失っていることが多そうだ。

ウランドは再びグウェンを見上げ、微笑んだ。

ウランド「……人から言われて気づくことってあるもんだね」

グウェンも微笑み返すと、書類をひらひらと揺らした。

グウェン「じゃあ、自分のは自分で出してね、正午まで時間がないわよ」

ウランド「ありがとう」

ハートのキング執務室前、ノックをしようと手を伸ばした瞬間、扉が開いた。

現れたのは急いだ様子のカグヤ。

カグヤはウランドの手元に一瞬目をやった。

カグヤ「昨日の件か、デスクに置いておいてくれ、あとで目を通す、お前はそのまま遠征に行け」

カグヤの手元には、滅多にみるものがあった。

ウランド「アーティファクトなど持ち出されて、如何されました」

カグヤはまっすぐとウランドを見上げ、答えた。

カグヤ「ミカエル元少将が殺害された」

22・9・A―魔導師暴漢被害事件8―（後書き）

次回は22・X話最終話。

いったいミカエルに何が起こったのか！？

次回は7/29更新予定！

22・10・A―魔導師暴漢被害事件9―（前書き）

ミカエル元少将殺害。

ついさっきまで笑い合っていたのに、あまりにも唐突な出来事、現場に急行したカグヤは…

ミカエル元少将殺害――ウランドの敷いた羽虫一匹入らない嚴重な警備を掻い潜つての犯行だった。

遺体は残っていないかったが、致死量の流血の跡が見られ、臓器の一部が忘れられたかのように捨てられていた。魔物に襲われた後のような、凄惨な現場だった。

カグヤ「……お前は遠征に行けと言っただろう」

上司の睨みに対し、睨まれた先のクロブチメガネは真っ赤に染まった病室を眺めながら平然と答えた。

ウランド「予定は午後です。それまでまだ時間があります。この現場の責任者は私です」

発見者はミカエルの妻だった。今朝、ウランドとグウェンが病室を出た後、アンジェラとゼラヴィを見送りに病室を出たほんの十数分の間であつた。その間警備には何ら問題もなかった。

今朝の今ということと共に駆けつけたグウェンはただ血まみれのベッドを見つめていた。

カグヤ「……<sup>クラブ</sup>諜報から見てどうだ」

グウェン「……魔導師連続失踪事件」

グウェンはポツリと呟いた。

カグヤ「……あれはこれまで何ら手かがりが残されていない」

グウェン「これだけあつて精霊の手がかりが一切ないのがその証拠です」

精霊が意図的に操作されているようで、メモリアリスタルは、何事

もなく今もベッドでニユースパーに目を通すミカエルの姿を映すだけだった。

カグヤ「……本件は後回しにする」

廊下から聞こえるミカエルの妻の、娘アンジェラの、嗚咽が、耳を痛め付けた。

これまで一切の手がかりがない魔導師連続失踪事件は現在の特別体制に対して非効率的だとされ、捜査の優先度は最低だった。事が起こったとて、それを变えるわけにはいかない。

カグヤ「ご家族や病院へは私が説明する、お前たちは仕事に戻れ」

口を開きかけたウランドを遮るようにカグヤは続けた。

カグヤ「異論は許さん、ここの責任者はお前であろうが、軍の責任者はこの私だ」

案件はこの後もつまっている、しかもこの件で2日も延期された遠征を、これ以上先のぼしにするわけにはいかなかった。

ウランド「……わかりました、よろしくお願いします」

病室を出ると、アンジェラがウランドの腕をつかみ、慟哭交じりに叫んだ。

アンジェラ「ウラ兄、絶対に犯人を捕まえて！！絶対に捕まえてえ……！」

そのまま足元に泣き崩れるアンジェラを支えようとしたその手をカグヤが遮った。

そして真っ直ぐウランドを見据え、首を横に振ると、アンジェラとミカエルの妻を別室へ誘導した。

ウランドはただ黙って3人の背中を見つめていた。

帰路、ウランドはポツリとグウェンに声をかけた。

ウランド「大丈夫ですか」

グウェンは口元を押さえ、押し黙っていたが、少し深呼吸をして、いつものように、だどこか悲しげに、笑ってみせた。

グウェン「ミカエルにはすごく世話になったわ」

ウランド「ミカエルもそうだけど」

グウェンは足を止めた。長くため息をついて、細い手で頬を擦っていた。再び長いため息をつき、口を開いた。

グウェン「なんとなく、想像はついてたけどね」

その声は今にも崩れんばかりに震えていた。思いがけない自分のその声に驚き、口を覆った手の甲に、一筋の涙が伝った。

ウランド「グウェン」

グウェンは「ごめんなさい」と声を絞り出すとそのまま両手で顔を覆い、うつ向いた。

震える小さな肩にゴツゴツとした大きな手を乗せ、ウランドはただ擦っていた。

グウェン「……ごめん、胸貸して」

ウランド「……うん」

この件により、同様に魔導師連続失踪事件捜査中に失踪したグウェンの恋人への、ほんのわずかだけ抱いていた希望が潰えた。

3日後、母親に諭され、大荷物を抱えて玄関の前に立っていたヨトルヤは、意を決して鍵を回した。家の中は真っ暗だった。

ヨトルヤ（まだ帰ってないのかな）

いつもであれば実家まで押し掛けて帰ってきてと懇願しそうであるのに、ヨトルヤが家を出て3日まるで音沙汰なし。さすがのヨトルヤも不安になった。

部屋の奥にすすみ、パチリと灯りを点すと、ソファに見慣れたライトブラウンのクセツ毛。

ヨトルヤ「わ！ びっくりした！ 灯りも点けずに何してんのよ」  
ウランドはソファに腰かけたまま、項垂れたように膝に腕をつき、うつ向いていた。

ヨトルヤ（待ちすぎてミイラになっちゃった？）

そんなわけではないよなと恐る恐るウランドの隣へ回り込んだ。控えめに隣へ座り、ウランドの膝の上に手を添えようとしたときだった。  
ウランド「ヨトルヤ」

ヨトルヤ（うわ！ 生きてた！）

「あ、あのね、ウランドくん、今回は私が……」

ウランド「今の特別体制が解けたら、トランプを辞めようと思う」

ヨトルヤは胸の奥底から喜びが沸き起こるのを感じた。二人の間の約束。それはつまり

ヨトルヤ「結婚！ やつとしてくれる気になった!？」

ウランド「…… すぐにはできない、これは本当にごめん」

ヨトルヤの顔から笑顔が消えた。

ヨトルヤ「……ど、どういうこと！？　なんで……？」

顔をうつむかせたままのウランドの肩を何度も揺すった。だが、ウランドは何一つ反応を示さなかった。俯いたままであるため、その表情はうかがえなかった。

ウランド「結婚はする、約束する、でも、時間をちょうだい」

ヨトルヤはしばらくライトブラウンのクセツ毛を見つめていた。そうして、そつとそれを撫でてみるが、何故だかとても遠くに感じた。

ヨトルヤはうつすら目に涙を浮かべ、だが気づかれないような声色を落着かせて、普段とは明らかに様子の違う婚約者に声をかけた。

ヨトルヤ「……あなたが約束を守らなかったことは……」

ヨトルヤは「ん？」と一瞬言いとどめた。

ヨトルヤ「……まあ、山ほどあるけど、だけど、うん、わかった……」

……信じて、待ってるからね……」

ウランドは顔を上げなかった。

ただ、その瞳は鋭く中空を捉えたまま。

犯人は、高名な魔導師、あるいはアーティファクト持ちの魔導師ばかりを狙っている。だが、単独行動であるクラブ隊員を除き、トランプ隊員はまったく言っていないほど被害に遭っていない。

トランプという牙城に留まっている限り、出くわすことはない。

……俺はどちらの条件にも当てはまるぞ、泳いでやるから、釣りに来い。

ギターの音がメロディを奏で、音楽家は謳う。

もうじき、もうじき、始まるよ。

たのしい、たのしい、カーニバル。

飛んで、火に入る、夏の虫。

ハートの、エースは、夏の虫。

22・10・A―魔導師暴漢被害事件9―（後書き）

ウランドvs音楽家フラグが立ちましたー！

音楽家って？パーヴァーって？という方は8話と18話をごー読んでください。

ついにトランプ辞職を決意したウランド。

ただそれは音楽家の術中で…！？

はたしてどうなるのかー！？

次回はひさびさの本編更新。リハビリということでちょいと短めですが、

読んでいただければ幸いです。8/6更新予定！

## 23・unfair trade（前書き）

3周年目初の本編。

新しい冒険に向けての導入的な話です。

「フォビアリ様！ ギルティン様！」

壁際を這う小さな蛭のような影。

その影からの問いかけに、誰も座っていないロッキングチェアがゆらゆらと揺れ始めた。

そうしてぼんやりとにじみ出すように、揺れるロッキングチェアに悠然とくつろぐ燕尾服の男は姿を現した。

「おや、エスカーダではありませんか、エリドウの富豪を乗っ取ることに成功したと聞いていましたか？」

燕尾服の男は骨のように白い肌とは対照的にくつきりと浮き上がる真っ黒い唇を吊り上げ、持っていた繊細な装飾のティーカップに口をつけた。

「ガッハッハ！ その成功は誰のおかげだと思ってるんだ、フォビアリよ」

突然の豪快な笑い声。

部屋の奥の古ぼけたソファが沈み、フェルトのようなモジャモジャとしたひげ面の、力士のような大男がいつの間にか腰かけていた。燕尾服の男——フォビアリはクスリと笑った。

フォビアリ「あなたの”魔薬”のおかげ、とでも言わせたいのですか、ギルティン」

髭をつまみ、クルクルと捻りながらギルティンは再び豪快に笑った。

ギルティン「そうじゃあないか、なあ、エスカードよ」  
壁際の小さな蛭は「ええそうです」と急ぐように適当な相づちを打ち、そして会話を間に挟まれぬよう間髪入れずに続けた。  
エスカード「ノッシユナイド様です！ ノッシユナイド様を……ついに発見いたしました」

—— u n f a i r   t r a d e (各々の思惑) ——

燕尾服の男と力士のような大男の顔色が変わった。

フォビアリ「……また偽者なんてことは」

壁際の蛭は興奮を押さえられないといった様子で続けた。

エスカード「ごさいません！ 紛れもなく！！ このエスカードの目の前に姿をお見せになったのです！」

フォビアリ「どういうことですか、この9000年影すら見せなかったというのに」

一呼吸置き、壁際の蛭はゆっくり噛み締めるように語り始めた。

「私の屋敷に魔導師の旅人がやって来ましたが、その魔導師に”免罪符”の運び屋を依頼したところ断られました」

ギルティンは笑った。

ギルティン「ガハハ！ 仕事熱心なこつた！」

エスカードは気にする様子もなく続けた。

エスカード「口封じに襲いかかったところ、魔導師の契約悪魔としてお見えになったのです！」

フォビアリは鼻で笑った。

フオビアリ「ただか魔導師の契約悪魔として成り下がる理由がない」

エスカーダ「あの絶対的な魔力……見間違えるはずがございません」

口ひげを撫で、ティーカップに視線を落とし、ロッキングチェアに揺られて暫くして、フオビアリは口を開いた。

フオビアリ「念のため調べて見ますか」

ギルティンは至極興味なさそうに欠伸をした。

ギルティン「勝手にやってくれ」

フオビアリ「……エスカーダその魔導師の名は？」

「あの魔導師を出せ！」

「だから、意味がないと言っているでしょう」

## トランプ本部、第2取調室

捕らえたギルティンと名乗る男の取り調べを開始して数日。ずっとこの”妹を殺した魔導師を出せ”の一点張りで、話は一向に進む気配がなかった。取り調べを担当していたリケは目の前のこの頑なな男に対して、アプローチの仕方を変えることにした。

リケ「話してくれたら、その魔導師を連れてくるわ」

男は伸び放題の無精髭と生気のない瞳を、くたびれたハンチング帽に落としたまま、項垂れた口調で口を開いた。

「アイツはトランプじゃねえ、そんぐれえ知ってる、どうやって連れてくるってんだ」

リケはほぼ白紙の調書の上でクルクルとペンを回しながら答えた。  
リケ「ソイツ」は犯罪魔導師なの、トランプでも追っている最中よ」

男は視線を落としたままだった。

「なんだ、捕まえられてねえんじゃねえか」

リケ「捕まえるわ」

そのあまりにハッキリした即答に、男は思わず顔を上げた。リケはまっすぐ男を見据えた。

リケ「捕まえる、必ず」

取調室にノックの音が響いた。ドアが開き、リケの部下が慌てた様子で現れた。

「エース！ 大変です！」

リケ「どうしたの」

「別々の場所で、同じ時間帯に、”ギルティン”の目撃情報が！」

リケは男に視線を向けた。

男はうつ向き、その口の端を吊り上げた。

「あーあ、そうきたかア」

リケ「どういうこと、あなたはギルティンではないの？」

男は声を押し殺すように笑った。

「この世にギルティンなんてヤツはいねえ、俺みてえなデブのクスリ売りのことをギルティンと言うのさ」

リケ「なぜギルティンと言うの？」

それは、元ネタとなる人物がいるのではという意味での問いだった。  
「さあな」

リケ「……」ギルティン”は魔導師を語って魔薬を売っている、その”ギルティン”という”集団”の中には、少なくとも首謀者がいるはずよ」

「知らねえ、あんたのただの憶測じゃねえか」

リケ「あなた”たち”がそう見えるからよ、そうでないなら弁明してみせて」

男は沈黙した。

リケ「……その沈黙が答えね」

「違う、……アンタのオツムにもわかるような”弁明”を考えてんだ」

リケ「そう、じゃあ待っててあげる」

男は追い詰められたように落ち着きなくソワソワとし始めた。リケが焦って「早く早く」とヒステリックになることを期待していたが、そうならなかったためだった。追い詰められた。逃げ道が、ない。

トランプ総統執務室。

ジョーカーのデスクの前に横一列に並ぶ形で、カグヤ、ウランド、トウジロウ、そしてリケ。

ジョーカーは神妙な面持ちで顎を撫でながら椅子にもたれかかった。

ジョーカー「……偽者じゃったか」

カグヤ「影武者とは随分周到だな」

ウランド「しかもこのタイミングで影武者を増やしておまけにアピール、完全にケンカ売られてますね」

ウランドはからかうようにトウジロウに視線を向けた。トウジロウは額に青筋立ててウランドに食ってかかった。

トウジロウ「やかましいわアホンダラ！ ひつとり残らず捕まえろええだけやるが！」

カグヤが口を開きかけたのを、トウジロウに見えぬようジョーカーが制止した。ウランドは「やっぱりな」とため息をついた。

ウランド「落ち着け、向こうが一枚上手だったただけだ。クラブのエースとキチンと立て直せ」

トウジロウ「俺は冷静や！」

ウランドは鼻で笑った。

ウランド「ああ、なるほど、つまり”それ”がお前の冷静な状態だと」

トウジロウ「どういう意味や！」

ウランド「そういう意味だ、俺の戯言にいちいち耳貸してるうちは出せない、体制の立て直しは俺とクラブのエースでやる」

トウジロウはウランドの胸ぐらを掴んだ。

トウジロウ「ほざくなドアホ！ なんでお前が出しゃばんねん！」

ウランドは特に抵抗することなく、胸ぐらを掴まれたまま無表情で答えた。

ウランド「俺を出しゃばらせているのはお前だ」

トウジロウ「ぐっ」

トウジロウはばつの悪そうにウランドの胸ぐらを放した。

現在の特別体制で、トウジロウとリケの隊の直属の上司はウランドである。そのウランドに「お前には任せられない」と言わせているのは紛れもなくトウジロウ自身であった。

ウランドは微笑んだ。

ウランド「大丈夫だな？」

トウジロウは手をはたきながら、そつぽを向いた。  
トウジロウ「やかましいわ」

リケは安堵のため息をついた。

リケ「話を続けます、目撃情報はいずれもパンゲア大陸各地です、併せてその周辺から”免罪符”が蔓延している模様です」

トウジロウ「作戦変更ということか」

これまではパンゲア大陸の南に位置する、ムー大陸の南部から北上する形で魔薬”免罪符”がギルティンにより広められていた。

だが今回はパンゲア大陸各地に”ギルティン”が現れ、”免罪符”を広めている。これまでとは明らかにやり口が違う。リケはトウジロウを見上げた。

リケ「我々が捕らえた”ギルティン”は魔導師への不信感から非常に非協力的です、取り調べから得られる情報には注意が必要です」

トウジロウ「ほー、”得られる情報”」

リケはうなづいた。

リケ「その中で得られた情報ですが、やはりその”ギルティン”の集団の中には首謀者である本物の”ギルティン”がいるそうです」

トウジロウ「ホンモノなア」

トウジロウはニヤリと笑った。

トウジロウ「急がば回れや」

リケ「どういうことです」

全員がトウジロウに視線を向けた。

トウジロウ「俺らの目的は」

リケ「魔薬テロを食い止めること」

トウジロウ「それは犯人が魔導師やった場合や、それでなければあ最悪魔導師側の潔癖を神使教側にアピール出来ればええんやろ」

リケ「……確かに魔薬テロを食い止める目的は神使教との摩擦を生じさせないため」

トウジロウ「それには影武者一匹一匹叩いて回るんは効率悪い」

リケ「でも本物がどれなのか、わからないわ、捕まえた男からの情報も不確か」

トウジロウは両手をポケットに突っ込み壁に寄りかかった。

トウジロウ「ムー大陸までは単独やった、……どこから入れ替わってん、ソイツと、ホンモノ」

リケは考え込むように顎に手を当てた。

リケ「え……そうね……彼は元々マーフ国のキーテジの町の人間だった、キーテジの町からかしら？ でもそこで入れ替わったなんて憶測よ」

トウジロウ「……一時期、ギルティンがあるヤツらとグルやいう情報があつたな」

リケ「……W・B・アライランス……！」

トウジロウ「捕らえたヤツはソイツらに怨み持ってんねんやろ、ツルむいう話、出るはずない」

リケ「……彼らは本物の”ギルティン”に出会っている可能性がある……！」

トウジロウ「捜査の拠点はファンディアスの港町に置く。最悪ここでニセやろがなんやろが”ギルティン”食い止めら、神使教サマにクレームつけられることもない」

巡礼船が出る時期に神使教徒が集まるため

ウランド「特別体制の本末転倒じゃないのか」

一般隊員は全員諜報、事件解決はウランド一人、例外として緊急性のあるギルティン逮捕をトウジロウとリケに、現在のこの特別体制は対W・B・アライランスのためのものである。

トウジロウは鼻で笑った。

トウジロウ「なんでやねん、とつととアイツら捕まえええだけの

話やんけ」

ジョーカー「そのためには、」

カグヤ「スペードのキング……！」

「へつくしっ！」

「やだ、シエン汚い」

「悪い悪い」

顔を斜めに縦断する大きな傷、ツンツンとした頭頂部に長い襟足、目にかかる前髪、重ね付けられたピアスにネックレスに腕輪、いかにも今時の若者といった風体の小柄な男——リ・シエン  
目の前でフワフワと舞う、手のひらほどの大きさの金の髪妖精の少女——リンリンに、シエンは鼻をすすりながら屈託のない笑顔を向けた。

シエン「誰かウワサしてんのかもな」

リンリンは心配そうにシエンの通った鼻筋を撫でた。

リンリン「風邪じゃない？ 大丈夫？」

シエンはニコリと笑った。

シエン「平気だよ、さてと」

腰に手を当て、見据えたその目の前に聳えるのは、端が見えぬほど

の堀と壁に囲われた、巨大な城。

アトランティス大陸中北部シュリンガヴァッド王国首都ホッドミ  
ル——人口数千万の巨大な城下町

リンリンが自分の肩に乗ったことを確認すると、シエンはツカツカ  
と城の入り口へ歩を進めた。

当然のごとく、衛兵たちがその歩みを止めた。

「ご用件は？」

シエン「こういうモンなんだけど」

隊服の袖に刺繍されているトランプの隊章を指差して見せると、衛  
兵たちの態度は一変した。

「トランプ様でございましたか！ 失礼いたしました！ ご案内い  
たします」

シエン「サンキュウ？」

シエンは屈託の無い笑顔を向けた。

——謁見の間

決して飾り立てられてはいないが、その古い建築様式の凝った装飾  
が荘厳な雰囲気醸し出している。

シックな色合いのレッドカーペットを暫く進むと、衛兵に待つよう  
に言われた。その目の前には古めかしい、だが、どこか気品のある、  
金銀財宝の取り付けられていない控えめな木造装飾の玉座。玉座の  
ワイン色のシートは所々毛羽立ち、剥けている。

少しして、泥だらけのワイシャツを身にまとい、鷹のような鋭い目  
をした、ガツシリとした老齢の男がキビキビと玉座にかけ、足を組  
んだ。その立ち振舞いや雰囲気から一目でこの国の王であることが  
分かった。

王「ようこそ、トランプ殿、して用件は」

大抵は世間話や魔導師の普段の様子など、めずらしがられて話が弾

むものだが、結論を急ぐ人だな、とシェンは思った。

権力に胡座をかかず、国政に注力し忙しい人物であることが窺えた。シェン「実はお宅の宮廷魔導師殿に用がありました」

周囲の家臣らがざわめいた。

シェン「あ！ 別に逮捕とかじゃないよ？ 捜査協力の要請に来ただんだ」

王は笑った。そして、部屋の隅に目配せした。

「トランプ殿、悪いがそちらに構うヒマはない」

謁見の間に響く、凜とした、だがどこか少年ぽさを感じる声。シェンは後ろを振り返り、謁見の間の隅に目をやった。

シャンと伸びた背筋、深い森のようなグリーンの凜とした瞳に灰色のカールがかった髪、通った鼻筋に整った顔立ちの16、7ほどの少年——グランドセブン最年少の天才 アレッサム・エルファーリンリン（あれ？）

シェン（誰かに似てるような……）

王「まあ、そうツンケンするな、アレス」

アレスは腕を組み、王をジロリと見た。

アレス「無駄話をするヒマはありません」

アレスは踵を返し、謁見の間を出ようとした。

シェン「シャンドラ・スウェフィードの件なんだけど！」

出口に向かうその足が止まった。そして、クルリと振り返り、無表情のまま口を開いた。

アレス「もし出くわしたら捕まえてやる」

そして再び前を向くと、そのままスタスタと謁見の間から姿を消した。シェンはポリポリと頭を掻いた。

シェン「えーと、じゃあ招集かった時に直ぐに出てこられるようお願いしたいんすけど」

王は笑った。そして玉座の背もたれに身を預けた。

王「それは難しい」

シエンもまた笑った。

シエン「どうして？ 戦争やるのに魔導師は必要ないでしょ？」

王はニヤリと笑うと、ひじ掛けに頬杖をついた。

王「有事に魔法でこの城下町全体に結界を張ってもらうようになっている」

シエンは白い歯を見せながらすぐさま切り返した。

シエン「お話からするに、まだその”有事”ではないようですが、もし本当にそれで魔法を使えば彼、戦犯魔導師ですよ」

王は笑いながら顔の前で手を振った。

王「これは失言！ 冗談だ。彼には国の空の交通を担ってもらっている、彼がいなくなると国の機能がマヒすることになるのだ、招集は勘弁願いたい」

シエンは両腕を組んで困ったように笑った。

シエン「国の有事に必要と申されましたけど、彼は”世界の有事”にも必要なんです、ご理解願いたい」

王の鷹のような目がシエンの瞳を捉えた。シエンは臆する様子もなく視線に応えた。暫くの間、にらみ合いが続いた。沈黙を破ったのは王の短いため息だった。

王「世界の有事であれば致し方ない、我が国だけでグランドセブンを独占する訳にもゆかぬしな」

シエンはニコリと屈託なく笑った。

シエン「サンキュー！ 王様！」

王「折角だ、泊まって行かれぬか、色々話を聞いてみたい」

シエン（んん？）

「ハハ！ 悪いけど、ちょっと急ぎなんだ、ありがたいですけど、またの機会に」

王は笑った。

王「それは残念、出口までお通ししろ」

レッドカーペットを歩くシエンは足早だった。

リンリン「どうしたの」

シエンは小声で答えた。

シエン「シッ！ 後でね」

そうしてリンリンの羽を掴むと自分の服の中に押し込んだ。

リンリン「ムギユ！ 何だよ！？」

準備は万端と言わんばかりに、シエンはレッドカーペットを走り出した。

シエンの服越しに、ガチャガチャと物々しい音が聞こえる。

リンリン「んん？」

リンリンはシエンの服から顔を出し、自分達の背後に目をやった。

リンリン「ギャーッ！！」

押し寄せる甲冑、槍、剣。城中の衛兵たちに、追われていた。

リンリン「なんでなんでなんでーっ！？ そんなに王さま、シエンとお食事したかったの！？」

シエン「アハハハ！ たぶん、戦犯魔導師のくだりだろ！」

いずれ、使うつもりなのにトランプに目をつけられてはわざわざ城に仕えさせている意味がない。

リンリン「口封じってこと！？ 信じらんない！！」

螺旋階段を飛び降り、クルリと振り返ればそこには出口。

リンリン「あーっ！」

ジャリジャリと鎖が音を立て、城の重厚な扉が閉じられ、外に通じる跳ね橋があげられ、出口を塞ぎ始めていた。

シエン「うつひゃーっ！ 間に合えっ！」

更に加速を始める、その時だった。

場内に風が巡る。

シエンは急ブレーキをかけた。螺旋階段の天辺から一閃、シエンの頭上目掛け、降ってきたのは黒い刃の巨大な曲刀。

あと半歩、ブレーキのタイミングが遅ければ、シエンは真つ二つだった。シエンの服に必死でしがみついていたリンリンは刀の主を睨み付けた。

リンリン「あぶないなっ！」

リンリンの怒りを気にする様子もなく、刀の主、アレスは小声で囁いた。

アレス「見逃してやる、ただし今回の件は不問にしろ」

螺旋階段をかけ降りる多数の足音。

シエン「そいつは難しいね、だってまだ未遂だけど、やるんでしょ？ いつか」

アレス「我が国が勝てばそのいつかは訪れん」

衛兵たちが次々とたどり着き、シエンを囲った。シエンは両手を上げ、だがアレスをまつすぐと見つめニヤリと笑った。

シエン「困ったね……」

衛兵の一人が言った。

「捕らえる！」

衛兵たちはシエン目掛け飛びかかった。アレスは刀を鞘の入り口にかけた。

シェン「まっ！ 悪いけど、マークはさせてもらうから」

アレスの刀を収める手が止まった。見開いた深いグリーンの瞳に、グレイのつり目はニヤリと笑った。

シェン「<sup>ミ・グレイ</sup>時空走”」

ユラリ、とシェンの身体は吹き消したロウソクの火のように消えた。アレスの手には再び黒い円月刀があった。

シェン「ひーっ！ あつぶねえ！」

城の屋根の上で、シェンは緊張が解けたように笑いながら、袖を擦った。そこには刃物で裂かれた跡があった。だが裂かれたのは袖だけで、シェン自体に怪我はなかった。

リンリンはニヤリと意地悪な笑みを浮かべた。

リンリン「これが”見逃してくれる”ってことかなあ？」

——その通りだ

どこからともなく響く少年の声。

リンリンは慌ててシェンの服の中に隠れた。シェンは笑った。

シェン「風魔法だよ」

——本部に報告すれば、僕からの協力はない。

シェンはわざとらしく笑った。

シェン「ええっ！ 何それ！？」

——その妖精に魔法をかけた。

シェン「ん？」

リンリン「へっ！？」

シェンはリンリンの羽を摘まみ、目の前に持ってきた。見かけに変わりはないが——

シェンの灰色の瞳がまじまじとリンリンの小さな腹辺りを見つめている。リンリンは顔を真っ赤にした。

リンリン「きゃーっナニナニ恥ずかしいっ」

——五月蠅いな

アレスの声は、リンリンの腹から響いていた。ここから、会話が筒抜けの仕組みらしい。

リンリン「やだーっ！ 何これえっ！」

シェン「あっはははははは！」

シェンは指を指して大爆笑した。

リンリン「わらいごとじゃなあーいつ！」

シェンは涙を擦り、笑いを押さえた。

シェン「わーかったよ、アレス、だからリンリンをいじめないでやっつて」

リンリンはシェンの鼻に抱きついた。

リンリン「うわーんっ！」

——では魔法は解こう

シェン「ただし、」

シェンは中空を見つめ、ニヤリと不敵な笑みを浮かべながら、腕を

組んだ。

シェン「本当にやったら、即逮捕！ 忘れないでね」

アレスからの応答はなかった。

シェン「あれっ！？ おーい」

リンリン「お腹のムズムズなくなったあ」

シェンはリンリンの腹部を見つめた。

シェン「精霊消えたな、魔法解除キャンセルされてるよ」

リンリンは腹を擦った。

リンリン「よかったあ！」

シェンはため息をついてポリポリと頭を掻いた。

シェン「……ま、忠告はしたってことで、一人目しゅーりょー！」

リンリン「次はどうするのー？」

シェンは困ったように笑った。

シェン「アテがない」

寄せては返す波の音。女たちが網の手入れをし、魚の開きの薫りが漂い、子どもたちが浜辺で遊ぶ声が響き、いつもの穏やかな日常がそこにあった。

子どもの一人が言った。

「あれなんだろう？」

沖に見えるはドクロの帆。

「海賊だ！」

フィード「あっちい〜！」

エオル「黒づくめだからじゃないの、てか、その服クーラー完備じやなかった？」

これまでのカラツとした暑さとはうって替わり、湿度が高くムワツとする。蒸し暑い。そのような中、黒いコートをスッポリ被り、さらにフードを目深に被ってフィードは船室の椅子を並べた上に横たわっていた。

フィード「砂漠越え分くらいしかもたなかった」

エオル「バカだ……」

フィード「うつせー、……よしのは？」

エオル「航海が物珍しいらしいよ、ずっと海見てテンション高い」  
フィードはがばりと起き上がった。

フィード「テンション高いよしの！ 見てえ！」

エオルは笑った。

エオル「あつはは！ 何その食いつき！」

フィード「……うつせー」

フィードは再び並べた椅子の上に横たわった。

少ししてジャラジャラと鎖が擦れる音が聞こえてきた。

フィード「んあ？ 錨下ろしてんのか？」

エオルは窓の外の様子を窺った。

一面のエメラルドグリーン。少し視線を進行方向に向けるとエメラルドグリーンとクリーム色の斑模様。エオルは納得した。

エオル「遠浅みたい」

フィード「お！ 足つくのか！ よっしゃー！」

フィードは船室を飛び出した。

「なに、海賊船!？」

村の屈強な男たちがわらわらと浜辺に集まってきた。

「遠浅だ、あの船じゃあの辺りまでしか来れねえよ」

「ほら、小舟を出した」

「あの規模の船じゃ（船員は）バラバラじゃねえと陸には上がれねえ」

「小舟を叩くぞ!」

男たちはオールやバールなどを持ち出し、構えた。

海賊船の縁に小柄な黒づくめがよじ登っているのが見える。

「来るぞ」

ばしゃーん!

ところが黒づくめは小舟には乗らず、その脇の浅瀬に着地した。

「えっ!？」

フィード「ギャーッ! 顔に水がかかった! 死ぬっ!」

よしの「フィードさまーっ!」

エオル「バカでしょ」

クリス「バカだな」

そしてゴシゴシと顔を拭くと、目を輝かせて走り出した。

フィード「岸まで競争しようぜー」

エオル「どんだけフライング!?」

よしの「あわわわ!」

よしのはおいて行かれまいと慌てて船の縁から身を乗り出した。エオルは眉間を抑えながらよしのの肩に手を置いた。

エオル「よしのさん……相手にしなくていいから」

「やつら、浅瀬をそのまま来る気だ!」

「応戦するぞ!!」

よしの「まあ、浜辺に沢山人がおいでですね」

エオル「……ん?」

エオルは自分達の乗るこの船の帆を見上げた。黒地にドクロの帆――エオルは再び眉間を摘まみ、ため息をついた。

エオル「……そりゃそうだ……」

浜辺から男たちが向かってくる。

フィード「あん?」

フィードは小首を傾げながらも、走るスピードを更に速めた。

「今だ！ 網を投げろ！」

フィード「ぬおっ！」

さきほどまで女たちが手入れしていた漁業用の網。伸縮性があり、絡まりやすく、フィードは忽ちミノムシのようになった。

村の男たちはキョトンとした。

（勝手に絡まったーーーーっ！！）

「あの～……」

ミノムシの背後から恐る恐る現れたエルフの青年と黒髪の少女。青年は剣を背負っていたが両手を上げていた。

エオル「怪しい者ではないです、事情を話させてください」

沖に目を向けると海賊船はＵターンしているところであつた。エオルはニコリと笑ってみせた。

エオル「あ、ちなみに俺とそのミノムシは魔導師です」

男たちは慌てて武器を降ろした。

——パンゲア大陸南部 ツーレ半島西南部 その漁村は波の音の心地よい穏やかな村だった。

白い歯の眩しい真っ黒に焼けた村人たちは色鮮やかで涼しげな巻き

衣装に素足。

木造の高床、植物の葉で作られた簾を潜り、案内されたのは村長の家らしい。

真っ黒な肌と真っ白なヒゲのコントラストを、木造の床の上で正座をしながら、よしのは不思議そうに見つめていた。

村長は骨と皮だけの細長い腕を延ばし、よしのに手を差し出した。

よしのは促されるままに握手した。

村長「可愛らしいお嬢さんだ」

よしの「あわわわ……滅相もございません」

村長「あなた方はどちらから」

よしのの隣で胡坐をかき、少し船旅に疲れた様子のエオルは答えた。  
エオル「ムー大陸の丁度対岸から……その、タイミングよく暴れてた海賊を捕らえて」

村長は手を叩いて笑った。

村長「さすがは魔導師先生！ やることが違う！」

エオルは頭を掻きながら釣られて苦笑いした。

村長「どちらに向かわれるおつもりか」

エオルは背筋をのばした。

エオル「それについてお伺いしたいことがあります……よしのさん」

よしのは瞼を閉じ、深呼吸をした。周囲に風がそよぎ、ボンヤリと球状の光が浮かび上がると、光はやがて青、黄緑、黒、茶、深緑の5つの宝珠へと姿を変えた。

村長「おお！ これが魔法か」

エオル「まあ、それに近いものです。で、この玉は不思議な力を持っているのですが、これに似たものを探しています」

村長はフカフカの綿のような髭を撫でながら、宝珠をまじまじと見つめた。

村長「見覚えがないのう……」

エオルは窺うように笑った。

エオル「近くで暴れてる魔薬業者とか、ご存知ないですか」

一見突拍子のない話に、村長はキョトンとした。

エオルは慌てて付け足した。

エオル「あ、その……どこかの魔薬業者がこの玉を持っているらしいという噂を聞きつけまして」

「ほほう」と村長は髭を撫でながら、今度はエオルをまじまじと見つめた。

村長「あんたら、ランプじゃないんだね？」

念を押すような村長の問いかけに、今度はエオルがキョトンとした。

エオル「ええ、そうですけど……どういことですか？」

村長はため息をついた。

村長「魔薬はこの村の貴重な財源じゃ」

エオル「……は？」

よその集落からかなり離れた場所に位置する陸の孤島。海辺に面し漁業は盛んであるものの、他所への輸送手段もなく、漁といっても食べる分だけ。集落として国に納める税金もこのままではどうにも賄えない状態だった。そんなとき、話を持ち込んできたのが魔薬業者だった。

村長「この村の”立地”を利用してな、ムー大陸（ ）のほうから魔薬を運ぶ秘密の港となっているのだ」

フィードたちがやってきた大陸

エオル（そ、それって……どう考えても密輸）

フィード「港って、遠浅じゃねーか」

村長は笑った。

村長「それが逆に裏をかいているのだよ、輸送用の船舶がこんなところに来るはずがないとね」

エオル「海上パトロールの目が行き届かないということですか」

フィード「逆に見つかったら怪しすぎて即お縄だな」

村長「……我々をお縄にしますか？ 魔導師先生」

エオルはドキリとした。魔導師にはそのような権利はない。だが、品行方正に努めるのが義務だ。この場合、義務に従うのであれば、国へ通報しなければならぬ。彼らから見ても、自分たちはそのような存在なのだ。

フィードは腕を組んで悪巧みの笑顔を浮かべた。

フィード「ここは一つ、ギブアンドテイクでいこうじゃねえか」

エオル「？」（わ、悪い顔……）

よしの「？」（ギブアンドテイクとはどのような意味でしょう？）

村長「ギブアンドテイク？」

フィード「俺様らは魔業者とのパイプがほしい、てめえらは通報されたくねえ、つまりはそういうことだ」

村長は笑った。

村長「なるほど」

エオル「……え？ あれ？」

フィードはエオルをチラリと見やり、ニヤリと笑った。

エオル（なんかすごく黒い会話じゃないーっ！？）

開きかけたエオルの口を無理矢理塞ぎ、フィードは続けた。

フィード「悪くねえ話だろ」

村長は回答しかねている様子だった。

フィード「安心しな、実は俺様たちもオタズネ者だからよ」

村を離れた途端に通報されることを懸念していた様子の村長は決心がついたようだった。

村長「ご鼻屑にいただいている取引先を紹介しよう」

フィード「jeeさん話わかるなー！」

エオル「……いろいろ言いたいけど、ひとまずこれだけ言わせて？」

エオルはフィードのこめかみに拳を当てた。そして、グリグリと力を込めた。

エオル「あ・り・が・と・う・ご・ざ・い・ま・す」でしょうがっ！！」

フィード「んぎゃああああー！」

フィードの断末魔が響いた。

――翌日――

エオル「お世話になりました」

現在地や近辺の地形、集落の情報などを聞き、いくらかの携帯食料や水をもらい、おまけに一泊までさせてもらった。お尋ね者だということを明かしたのに、認めたくはないが同じ穴のムジナだから、至れり尽くせりだ、とエオルは思った。

フィード「さて、んじゃあ例の魔薬業者んところに行ってみつか！」  
よしの「はい！」

「村長、どうします？」

村長はにこやかに笑った。

村長「どうするも何も」

フカフカの髭を撫で、茶を一口すすると、こっ続けた。

村長「決まっているだろう、目撃情報でも、魔導師がらみならかなりの金が手に入る」

村人は笑った。

「では、さうそへてランプに通報しましょう。」

## 23・unfair trade（後書き）

新大陸に上陸したW・B一行。

はたして彼らを待ち受けるのは？

次回は8/13　・xシリーズでtrick beatシリーズ連載予定です。

## 23・i・trick beat―そもさん―（前書き）

trick beatシリーズとは！

スピードのキング シェンとその自称愛人（！）妖精の少女 リンとの

グランドセブン（最強の7人の魔導師）召集のためのお話です。

「さてと」

とある安宿の一室。簡素な木製のテーブルの上に広げた世界地図。男がポケットから無造作に取り出したのはピアノ線のような紐の先に尖ったクリスタルがついたもの——失せ物捜し用の魔導師専用道具”タリスマン”

手のひらほどの大きさの、翅の生えた少女”リンリン”は不思議そうにタリスマンと地図を交互に見やっただ。

リンリン「残り二人のグランドセブンはそれで探せるの？ タリスマンの人探して会ったことないとダメなんじゃないっけ」

リンリンはすぐ隣でタリスマンを投げ縄のようにグルグルと回し、簡素な木製の椅子の上で片足だけ胡座を掻き、静かに地図を眺める男の様子を伺うようチラリと見た。赤茶色の髪、灰色の瞳に顔の真ん中を斜めに縦断する大きな傷の男——”スペードのキング”リ・シェン

シェンはニヤリと不敵な笑みを浮かべた。

シェン「ああ」

リンリンは翅を羽ばたかせ、シェンの顔の前まで来ると両手を腰に置いた。

リンリン「一人は”クラブのキング”でしょ！？ もうひとりは何だったことないじゃん！」

シェンは苦笑した。

シェン「もしかしたら”クラブのキング”もダメかもしれない」

シエンは紐の先を持ち、クリスタルの先をだらりと地図の上にぶら下げた。だが、クリスタルはピタリと止まったまま動かない。リンリンは怪訝そうにシエンの顔を覗き込んだ。

リンリン「クラブのキング」の顔、忘れちゃったの？」

シエンは違う違うと笑った。

シエン「いいや、多分あいつの”セイラムの呪い”のせいだろ」

そうしてそのままポイとタリスマンを地図の上に放ると、両手を後頭部に、そのまま延びをするように椅子にもたれ掛かった。

シエン「ま、こんなんで見つかりゃあ、とつくに連れ戻せるか」

シエンはいずれも手がかりのないどちらから先に探すのが効率がよいか考えた。

リンリン「もう一人は？　どういう人なの？」

シエン「もう一人は犯罪魔導師だ」

”共食い”グレイ

吸血鬼でありながら同族を殺害して回る殺人魔導師。反面吸血鬼排他主義集団”ヴァンピール”からカリスマ的支持を集めている。

その絶対的な強さはハンターズに白旗を挙げさせ、SSS級の、最<sup>ク</sup>早賞金首魔物としてトランプに討伐依頼が出されているほどであった。だが神出鬼没で期間が空いたかと思えば連続して各地で事件を起こすなど犯行のタイミングも一貫性がなく、トランプの搜索も難航している。

シエン「まー、魔物の討伐なんでスピード（ウチ）の管轄じゃないけど、お手伝いでもしてみますか」

リンリン「お手伝い……？ 何から始めればいいかわかんないよ？」  
シェン「捜査が行き詰まっているのは情報が裏ギルドにもほとんど出回ってないからだ」

リンリン「クラブ軍の主な情報源は裏ギルドだろうけどさ、それ以外に情報なんて」

シェンは笑った。

シェン「クラブの捜査記録だけど、どういうわけか肝心なところの記録がない」

リンリン「もーっ！ 勿体ぶらないでよっ」

テーブルに広げた地図をたたみ、椅子から立ち上がってポケットにしまうと、シェンは魔導師バッチを外した。

シェン「ヴァンピール」に行ってみよう！」

「たのもー」

ある住宅地の一角。レンガ造りのどこにでもあるような一軒家。

ガンガンとドアノッカーを鳴らし、ドアの前で腕組みしながら家主の応答を待つ。リンリンは赤い中華服の肩に腰かけると足をブラブラと振った。

リンリン「留守かなあ」

シェンはニヤリと笑ってドアを見つめた。

シェン「いや、人の気配がする」

「あまりにもしつこく鳴らされるノッカーに参ったのか、ドアが少しか開いた。隙間から様子を窺うように、クリーム色のローブに身を包んだ無愛想な男が睨むようにして見つめていた。シェンは

ニカリといつもの屈託ない笑顔を向けた。

シエン「ごめんください、ちょっと話いいつすか？」

男はシエンの頭の天辺から爪先までジロジロと観察し、それからそのままドアを閉じかけた。その閉じかけたドアに、シエンは足をねじ込んだ。そして、周囲の住宅に響くようなわざとらしい大きな声で話始めた。

シエン「いやゝ実はですね、ぜひとも”ヴァンピール”の皆様にし上げたいものがございました」

”ヴァンピール”という単語に、男は慌てたようだった。ボソリと「うちは違います」と呟くと挟み込んだシエンの足を蹴って、ドアを閉めようとした。だが、シエンは再び足を挟み込んだ。

シエン「またまたゝ！ 本当にいいものなんですって、なんだと思います？」

男は観念したようにシエンを家の中に引っぱりドアを閉めた。シエンはニヤリと笑って続けた。

シエン「実はトランプの極秘情報を掴んだんですよ、ついに”共食い”の逮捕に乗りきったそうなんス」

男の顔色は、あつという間に動揺に染まった。

「それは本当か！」

シエン「詳しくお話したいので代表に案内をお願いしたいんスけど」

家屋の中はカーテンが閉めきられ薄暗く、ポツポツと蠟燭の灯りが揺れる幻想的な空間であった。

蠟燭の並びに沿って廊下を進み、奥に通されると、建物の構造的にリビングとおぼしき広い部屋に出た。中央には黒いダイニングテーブルが置かれ、その上には年代物の燭台に幾つもの蠟燭が灯されて

いる。

それぞれの椅子にはリラックスした様子で頬杖をついて本を読んだり談笑したりとクリーム色のローブに身を包んだ何人かが座っていた。

一番手前の空き椅子に掛けるよう促され、シエンは深く腰かけると、ニコリと笑って自分を注視する一同を見渡した。

シエン「どうも！　ここが一番偉い人って誰？」

何人かが怪訝そうにシエンとシエンを案内した男を交互に見やる中、一番奥の椅子に座っていた中年の男が口を開いた。

「私だが、君は？」

その男は中肉中背で真っ白な髪とモミアゲから続く真っ白な顎髭をたくわえ、鋭く燃えたぎるようなそれでいてどこか混沌とした深い闇を感じさせる瞳を宿していた。シエンは重苦しく警戒されている空気を敢えて読まず、いつものように屈託なく笑った。

シエン「実は大変な情報を仕入れまして、ぜひ聞いていただきたいと」

リーダーの男は腕組みして背もたれに寄りかかった。

「なぜ聞いてほしいと？　金目当ての押し付けがましい情報屋崩れか？」

シエンは声をあげて笑った。

シエン「いやいや、実は俺も吸血鬼に恨みを持ってましてね、ミスター・グレイはヒーローなんすよ、その人の”ピンチ”にいてもたってもいらなくなってるね」

リーダーの男の顔色が変わった。

「グレイ氏に関する情報か」

シエン「トランプが本格的に討伐に乗り出しました、彼を守る必要があります」

リーダーの男は小さく首を横に振り、眉間を押さえた。シエンは続けた。

シエン「俺も」ヴァンピール」に」

その場の一同が瞬時にざわめいた。リーダーの男はそれを制止し、ゆっくりと口を開いた。

「ヴァンピール」は半吸血鬼か吸血鬼排他派神使教徒、もしくはそれ以外で吸血鬼を殺す力のあるもので構成されている、そんなに「ヒーロー」を助けたければ」

リーダーの男は挑戦的な笑みを浮かべ、長机に肘をついた。

「吸血鬼の首を持ってこい、それが入団の条件だ」

23・1・trick beat—そもさん—（後書き）

なんと物騒な条件でしょうね!?

魔導師は当然人殺しなんてできません。

どうするシェン!?

次回は8/19 23・2話更新予定です。

23・2・trick beat―くびとりリーシェ―（前書き）

吸血鬼の首を持ってこい、と言われたシェン。

首なんて持ってきたら殺人犯だし、  
そもそも吸血鬼の知り合いなんていない。

どうするシェン！？

## 23・2・trick beat―くびとりリーシェ―

トランプ本部　ハートのエース執務室。

静かな部屋に、響くノックの音。

「エース」

顔を出したのはハート軍の秘書官。事務処理に追われデスクとにらめっこをしていたウランドは顔を上げた。  
ウランド「はい」

「外線です、スペードのキングから」

ウランドはきょとんと秘書官を見つめた。

ウランド「はあ……？」

リンリン「もーっ！　なんであんなやつに協力してもらわなきゃなんないのさっ！」

目の前でプリプリと怒る小さな相棒の様子に、シェンはさも面白いものを見るように笑った。

シェン「なに怒ってんの？」

リンリン「あたしアイツ嫌い！　シェンのこと苛めるんだもんっ！」

シエンは少し沈黙し、考え込んだ。

シエン「え……俺苛められたっけ？」

リンリン「もう！ 何でもかんでも良い方にしか捉えないんだからっ！」

シエンは腹を抱えて笑った。

シエン「アハハハ！ お前の妄想は毎回面白れえな！」

リンリン「妄想じゃなあーいっ！」

シエンは笑いすぎて出てきた涙を拭き、「さてと」と目の前の建物を見据えた。建物の入り口には次のような看板が掲げられていた。

――刑務所――

全く緊張感のない様子に、刺さる周囲の警備員の白い視線を背中に受け、だが全く気にする様子もなくシエンとリンリンは建物の中に歩を進めた。

出迎えたのは所長だった。

所長「これはこれはスピードのキング、このようなしがない地方の刑務所によっこそいらっしやいました」

シエンは口を開きかけたが、目の前の有名な魔導師に興奮した様子の所長は遮るように言葉を続けた。

所長「ハートのエースよりお話は伺っております」

シエンは軽く口笛を吹いた。

シエン「さすが」

所長に案内されたどり着いたのは、数十メートルはある巨大な巻き貝を改装し、内側の壁に取り付けられた螺旋階段に沿って、家畜の小屋のような牢獄が並ぶ収容施設。巻き貝の天辺は太陽の光を透かし、仄かな舞台照明のように巻き貝の底にいるシェンたちを照らした。シェンはリンリンを服の中に入れた。

シェン「いい子だから静かにね」

リンリンはシェンの服越しに小声で返事をした。

リンリン「はぁーい」

所長「最上階になります、少々長い階段ですが、ご足労願います」  
シェン「オッケー」

螺旋階段を歩く、警備員以外の人間。数年ぶりに目にするその姿に、囚人たちは思い思い一斉に騒ぎ始めた。ちよっかいをだそうと牢屋から腕を伸ばす者、唾を吐く者、罵倒する者、意味不明な奇声をあげる者。囚人たちの騒ぎに、巻き貝は振動した。リンリンは鼓膜が破れるかと思った。

リンリン「シェン、大丈夫？」

シェンは服の上から「大丈夫だよ」と返事を返すように、軽くポンポンとリンリンを撫でてみせた。

リンリン「ムギユツ！」

所長「着きました」

シェンが足を止めたため、リンリンはシェンの首もとから顔を出した。

所長「女王蜂」です」

巻き貝の最上階。天井から降る仄かな光に照らされ、こちらに背を向けて光を見上げ、淡く反射するアッシュがかつた金髪に細い身体は聖女像を彷彿とさせた。

所長は鞭を檻めがけ打った。

所長「おい、”女王蜂”！ てめえにお客様だ」

”女王蜂”は背を向け、天井を見上げたまま微動だにしなかった。

所長「聞け！ この……」

更に振りかざした腕を、シエンの手が掴んだ。

シエン「いーよ、案内ご苦労さん」

所長は落ち着きなくハンカチで汗を拭き、恐縮した。シエンは牢獄の中に目をやった。

シエン「頼みがあるんだ、”女王蜂”」

牢獄の主から反応はなかった。

リンリン「シエンを無視とか、あんた何様なのよっ」

シエンは吹き出しそうな笑いをこらえた。

シエン「それ寧ろ俺が何様なんだよ」

リンリン「シエンは黙ってて！ 女同士の戦いなものっ」

シエンはさらに笑いをこらえた。

シエン「はいはい、どーぞ」

リンリンは本物の聖女像のようにピクリとも動かない牢獄の主を睨み付けた。

リンリン「あんた話聞いてんのっ」

貝殻の底の、施設の出入口から緩やかな風が吹き上げた。それは”聖女像”の細かい金の髪を僅かになびかせた。だが、”聖女像”が本物の石像でないことがわかるのはそれだけだった。リンリンは頬

を膨らませ、腕を組んだ。

リンリン「捕まえた魔導師があんなら捕まったやつもこうだわっ！」  
シェン「いや、ウランドは逮捕はしてないぞ」

女王蜂「ウランド？」

アッシュがかった金の髪をなびかせ、さすがのように白く細い指が檻に絡み付いた。深い空色のどんぐり眼が、求めるように視線を向けた。犯罪者、とするには余りに幼すぎるような印象の16、7ほどの少女だった。か細い、鈴を転がすような声が牢獄に響いた。

女王蜂「ウランドがきているのか」

シェンは違う違うと笑った。

シェン「大丈夫大丈夫、お前をこんなところにぶちこんだ張本人なんて、連れて来ちゃあいないよ」

女王蜂の表情は一瞬にして暗く曇り、その場に崩れ落ちてしまった。  
シェン「あれ？」

リンリンは目の前の少女の様子をまじまじと見つめた。

リンリン「ウランドに会いたかったの？」

悲しみに沈んだ青い瞳がリンリンを捉えた。

女王蜂「……ウランド殿に会ったことがあるのか？ 最近か？ 怪我の経過はいかなものか？ ……私のことを、何か言っておったか？」

シェンは女王蜂と視線を合わせるようしやがみこんだ。

シェン「ピンピンしてるよ、お前のことは確かー……、”素直でいい子だから苛めるな”って言われて来た」

空色のどんぐり眼が輝いた。

女王蜂「お主、ウランド殿に言われて来たのか？ 如何なる用だ」

リンリンはシェンのえりぐちで頬杖をついた。

リンリン「別にあんたを釈放とかじゃないから」

女王蜂はきょとんとリンリンを見つめた。

女王蜂「釈放？ ハハ、そのようなことは考えもしていない、罪を償うと約束したからな、ウランド殿と」

女王蜂はその”約束”した時のことを思い出したのか、どこか嬉しそうだった。リンリンは眉根を寄せた。

リンリン「……残念だけどさ、あいつには」

女王蜂「わかつている」

女王蜂は再び光差す天井を見上げた。

女王蜂「指輪をしていた、わかつている、だが、日増しに想いは募るばかりだ、それが、今、私の生きる希望でもあるのだ、……わかつては、いるのだ」

リンリンはシェンの頬をつねった。

シェン「いてっ！」

そうしてシェンの服の中から飛び出すと檻の前までふわりと飛び、小さな右手を差し出した。

リンリン「わかる、決して一番にはなれないの！ ”二番目”なのっ！」

シェン「なにがわかるんだ？」

リンリンはツンとそっぽを向いた。

リンリン「男の子は黙っててくださいーい！」

差し出したリンリンの小さな手のひらに、”リンリンにとっては巨大な”女王蜂の人差し指が重ねられた。女王蜂はニコリと笑った。リンリン「あんたとはいい友達になりそうねっ！ ライバル 恋敵にもなりえ

なさそうだしっ！」

シェン「仲良くなったところで、そろそろ本題いいか？」

女王蜂はシェンに顔をあげ、微笑んだ。

女王蜂「聞こう、お主の頼みを聞くことが、ウランド殿の頼みとあらば」

シェン「共食い」を知ってる？」

女王蜂「吸血鬼とあれば見境なく殺して回っている同胞だな、幸い出くわしたことはないが」

シェン「俺はそいつを捕まえなくちゃいけないんだ、近づくために”ヴァンピール”に入りたい」

女王蜂はクスリと笑った。

女王蜂「私の首を取ってこいとも言われたか」

シェン「察しがいいな」

静かに目を閉じ、女王蜂は俯いた。

女王蜂「……ウランド殿の役に立てるなら、喜んで差し出そう」

シェンは慌てて顔の前でヒラヒラと手を振った。

シェン「違う違う！ そんなことしたら俺が殺人魔導師になっちゃうよ！ こっからホントの本題！」

ではどうするのと女王蜂は不思議そうにシェンを見つめた。シェンは楽しいイタズラを思い付いたら子どものように笑った。

シェン「別に首を取ってこいとは言われてない、”持ってこい”と言われたんだ」



## 23・2・trick beat―くびとりリーシェル―（後書き）

女王蜂がだれかわからない方は20・X話をご覧ください！  
さてさて、シエンの秘策とは！？

次回は8／27更新予定です！

23・3・t r i c k b e a t くびとりリーシェル2ー（前書き）

シェンの考えた秘策とは…？

### 23・3・trick beat―くびとりリーシェル2―

「あの人、首持ってくるかな？」

「桃花源の服は来ていたが神使教徒には見えなかったな、ヴァンピール半吸血でもなさそうだし、……無理だろう」

「賭けるか」

「ハハハ、誰が”持ってくる”ほうに賭けるっていうんだ」

玄関のノッカーの音が響き、応対に出た男は苦笑いしながらリビングに戻ってきた。

「全員負けだ」

そう発言する男の背後から顔をだしたのは賭けの対象となっていたあの桃花源人。

その桃花源人――シエンはいつものように屈託なく笑った。

シエン「負けってなに？ 賭けでもしてた？ ちよつとちよつと」

！ 誰か一人ぐらい俺が戻ってくるほうに賭けてよ――！

陰気なリビングは、暗闇に蝋燭が灯された幻想的な雰囲気を一蹴する、不釣り合いな明るさに無理矢理独占されたようだった。

黒いダイニングテーブルの奥に腰掛け、これまでのやり取りを静観していた白髪ひげ面のリーダーの男はシエンの手元に目をやった。

白い、少し大きめのケーキボックスのような箱。シエンはニヤリと笑い、白い箱をテーブルに置いた。

シエン「持ってきたよ」

——とある地方の刑務所。数十メートルはある超巨大巻き貝を改装して作られた収容所の最上階。

いつものように巡回にやって来た警備員は、この刑務所一番の大物が収容された牢獄の様子を見、目を剥いた。

牢獄の真ん中で、床にあぐらをかき、珍しくこちらを向いているかと思つたところだったが、どういふわけか牢獄の主の、首から上がすっぽりと”ない”。

「あーっ」

警備員は慌てて螺旋階段を逃げ降りた。

女王蜂（ウルサイのう……まだか、シェン殿）

女王蜂は心の中でため息をついた。そうして  
” 暇つぶし ” に、シエ  
ンが牢獄に来たときのことを思い返した。

シェン「首を取ってこいとは言われてない、持ってこいと言われた」

んだ』

女王蜂は首を傾げた。

女王蜂『どういうことだ？』

シエンはニヤリと笑った。

シエン『俺、”補助魔法”使いなんだ、補助魔法ってどんなかってあんまり知られてないんだけど、』

女王蜂『瞬間移動したり、眠らせたりさせるやつだろう、私を狩りに来た魔導師がそのようなことをぬかしていた』

平然と言ったのける目の前の囚人に、シエンは「やられた！」と苦笑いのような、それでいてやはり屈託のない笑顔を向けた。

リンリン（その魔導師は返り討ちに仕たってことだよ……怖っ！）

シエン『ハハ！　じゃあ話が早い、ようはその”瞬間移動”だよ』

シエンは呪文を唱え始めた。

シエン『マジックワープ  
時空扉』

すると、シエンの目の前と牢獄の中の女王蜂の背後に、帽子の穴程の大きさの、渦を巻いた黒い煙のようなものが現れた。

そして、シエンの目の前の渦に、これまた帽子をかぶるように、シエンは頭を突っ込んだ。

シエン『つつちつつち』

女王蜂が振り返ると、自分のすぐ後ろの黒い渦から目の前にいるはずのシェンの首だけひよっこりと飛び出していた。

女王蜂 「首が斬れたりしないのか？」

シェンは屈託なく笑った。

シエン「やろうと思えばできるけど、そんなことしないよ、そして俺がウランドのやつに首ちょん切られるからさっ」

女王蜂はクスクスと笑った。

シェン「これと同じことを、」

牢獄越しのシェンの体が、持っていた白い箱を指差した。

シエン『この牢屋とこの箱でやる、お前はただこの“穴”に顔突っ込んで、目エ瞑ってたらいいわけ、あ、血糊はまぶすからよろしく』

女王蜂 なるほどな

リーダーの男はその美しい首に絶句した。

「こいつは……女王蜂！」

他の団員がざわめき始めた。

「賞金ランクBの大物じゃないか」

「自首したって聞いたぞ」

「刑務所に収容されているんじゃないのか？」

リーダーの男の鋭い瞳がシエンを映した。シエンはニッコリと笑った。

シエン「わざわざこんな”凝った”獲物差し出すくらい本気ってこと！」

白い箱の蓋を閉じ、団員が持ってきた神使教の護符を何枚も貼り、――蓋を閉じられた時点で既に”空”となっている箱は団員によって慎重に部屋の奥に持っていかれた。

その団員の背中をしばらく見送り、一つため息をつく、リーダーの男はニヤリと笑い、シエンに向けてこう言った。

「入団を歓迎しよう」

収容所一番の大物の異変とあって、刑務所の上層部全員が慌てて女王蜂の牢獄へ集まった。  
確かに首がない。

その時だった。

女王蜂「ふう」

”黒い渦”から、スポリとフルヘッドのヘルメットを脱ぐように頭を出した牢獄の主は、目の前に集まる刑務所の上層部たちと目が合った。

「ぎゃーっ」

檻の前の上層部たちはいつせいに卒倒した。

目の前の光景に、訳が分らないと呆ける女王蜂のその顔は血糊まみれだった。

女王蜂は苦笑した。

女王蜂「関係者に話くらい通しておいてくれ、シェン殿……」

## 23・3・trick beat―くびとりリーシェル2―（後書き）

こうしてうまく潜入したシエン。

ここからどのようにグレイに近づいていくのか？

次回はひさびさ本編。9 / 3 更新予定です。

24・stir the blaze (前書き)

今月の本編です。  
新キャラ登場！

## 24・stir the blaze

パチパチと、火が跳ねる。

男たちの下品な笑い声。

その様子を満足そうに眺める一人の男。

笑う男たちのうちの一人が言った。

「ウーさん、”清掃”完了しました！」

ウーと呼ばれた男は生気のない薄ら笑いを浮かべ人差し指と親指で輪を作って見せた。

「ごくろ〜」

山中の拓けた土地。

燃え盛る館。

崩れ落ちた表札に記されていたのは”紫の人々”

stir the blaze（巻き起こる炎恨）

フィールドで、そのパーピーなんとかつてのは何処にあんだよ」

エオル「紫の人々（パープルパープル）」！ 結構距離あるよ、

ほら、あの山の中」

エオルの指差した先にはうっすら霞掛かった7、800メートル以上はあるであろう緑の山。

疎らなヤシの木、サラサラとした白砂がどこまでも続く道、海から大分離れたはずだが、未だに蟹が横切っている――パンゲア大陸南部ツレ半島西部

サンサンと太陽が降り注ぎ、それでいて湿度が高く、蒸し暑い。

フィードは項垂れた。

フィード「暑い、腹減った、疲れた歩きたくない」

エオル「はいはい、ていうか、それ脱げば」

エオルの呆れ返った視線の先には真っ黒なコートを着込み、更にそのフードも目深に被った頭のでっぺんから爪先まで黒づくめのフィードの姿。

フィード「……いやだ！ これは俺様のトレードマークなのだ」

エオルはフィードの頭のフードを引っ張った。すかさずフィードも抵抗した。

エオル「うざい！ ムサイ！ 暑っ苦しい！」

フィード「ぬをを！ やめんかつ！」

その様子を見、慌てて仲裁に入ろうとしたよしのは進行方向を見、気がついた。

よしの「あら？」

よしのの声に、二人の魔導師も目の前に改めて視線を向けた。

周囲に生えているヤシの木とは違う、黒に近い茶色の、ゴツゴツとした、ヤシの木数本分はあるつかという幹。一行が見上げるとそれはヤシの木より遙か高くまで伸び、前方の空を覆っている。さらに並んで数メートルおきに、三本、四本と同じ幹が立っている。

よしのはポカンと見上げながら呟いた。

よしの「大きなヤシの木ですわね」

フィード「ヤシの木かあ？」

エオル「なんかイボイボしてて気持ち悪いね……」

ブツブツと、呪文を唱える声が聞こえる。エオルはすぐとなりの黒づくめに目をやった。

エオル「何し、  
グランド・デ  
フィード「小爆炎！」

ドカァン！

ズシンと内臓に響く振動、鼓膜を揺らす爆発音、遅れて、辺りに真っ白な煙が立ち込めた。

エオル「ちよっとー！ 新大陸上陸直後に目立つ行動止めてくんない！？」

フィードは満足そうにふんぞり返った。

フィード「ギャーッハッハ！ 俺様の行く先を邪魔するやつはこうだ！」

風が流れ、煙が晴れ、現れたのは傷一つついていない焦げ茶色の幹。フィード「ぬおっ！？」

エオル「無傷……？」

エオルはもう一度上空を見上げた。

幹の上に広がる――

エオル「……蟹の腹……」

天辺からひょっこりと触覚のようなものが生え、こちらを見つめている。

エオル「カニーーーーっ！」

どうやらこのあたりの主のようである。フィードが魔法をぶつけたのは蟹の足だったようだ。

フィード「カニって目エ三つあったっけか」

よくよく見ると、真ん中に小さな”触覚”がもう一つある。それはこちらに手を降り、何か叫んでいるようだった。

エオル「目じゃなくて、」

よしの「おばあさん？」

巨大蟹のまるで触覚のように飛び出した蟹の目と目の間に、紫色の

髪に紫陽花柄の派手なワンピースを着た老婆が立っている。さらに、耳をすましてみると――

「助けてくれえい」

エオル「ええええ!?!」

よしの「あんなに高いところに……大変です!」

フィード「そもそもなんであんなとこにいやがんだ?」

焦げ茶色の巨大な幹――巨大蟹の足が持ち上がった。ズシンと音を立て白砂の大地を抉ると鈍い摩擦音と共に巨体は前方へ移動した。フィード「カニなのに前歩き!」

エオル「そんなことより、あのお婆さん助けないと!」

勢いをつけるエオルをフィードの白い手がひっ掴んだ。

エオル「なに!?!」

フィード「あの婆さん降ろしたら、ドでかい魔法一発ぶちこむから離れるよ」

エオル「は? 倒す必要ないでしょ」

フィード「カニミソ食いた、」

ゴン

フィードは頭を押さえてしゃがみこんだ。

エオル「生態系が崩れるから!」

そして次々と大地を挟りながら上下運動を繰り返す焦げ茶色の幹を見上げた。

エオル（イボイボ気持ち悪い……）

そしてよしのに目を向け、フィードを指差した。

エオル「よしのさん、アホなことしないように見張つていて！」

エオルは魔導師の超人的な跳躍力で、蟹の足の表面にある”イボイボ”を踏み台に、あっという間にヤシの木の遙か上空の、蟹の甲羅に飛び乗った。

蟹の甲羅は太陽の照り返しが強く、卵の一つでも落とせば目玉焼きが焼けそうなくらいだった。エオルの顎から汗が滴った。

”触覚” 目指して甲羅の”丘”を登っていくと二本の”触覚”の間にへたり込む、先ほどの老婆を発見した。この焼けるような蒸し暑さだ、脱水症状を起こしかけているようだった。

エオルは老婆の元へ駆け寄った。

エオル「大丈夫ですか!？」

老婆はエオルをみるなりこれまでの元気のなさが嘘のように嬉々として飛び付いた。

老婆「待つてたよお！ 早く降ろしとくれ！」

エオル「はあ……」

よしの「降りていらつしやいましたよ」

よしのはすぐとなりでしゃがみこんで頬杖つきながらふてくされてる銀髪に目を向けた。フィードは口を尖らせた。

フィード「興味ねー」

蟹の背中からよしののもとへ着地したエオルの顔は渋かった。着地した途端、エオルにおんぶされていた老婆は足をバタバタと降り、

エオルの頭をポカポカと叩いた。

老婆「お姫様抱っこがいいって言っただろうがっ！」

エオル「痛っ！　高いところから降りるのにそれは危ないって言ったでしょっ！」

老婆は吼えた。

老婆「けちんぼめ！」

エオル「はいはい、降ろしますよ」

エオルは身を屈めた。だが老婆は地に足をつけようとしなかった。

老婆「暑くて疲れた、立てない」

エオル「水飲みます？」

「くれ」と手を差し出し、奪い取るように乱暴に水筒を手にとるとがばがばと水を飲み始めた。

フィード「てめえババア全部飲むなよ」

よしの「いきなりそんなに召し上がってはお体に障ります」

老婆「なんだい若いのにケチ臭いね」

エオル「いや、少なくとも女の子のほうは本当に心配してますよ」

フィード「どういう意味だコラ」

背中を感じる体温はやはり少し高めに感じた。

エオル「ちよつと木陰で休もつか」

だが、木陰といっても丈の高いヤシの木ばかりで全員が入れるほどの木陰はない。ふと、少し前方に移動しただけで再び木のように動けなくなった巨大蟹に目が向かった。

――蟹の影。

座っているだけで地面からの蒸せるような熱気に襲われたが、直射日光が当たらないだけましか、とエオルは思った。

老婆「あちい」

フィード「あちい」

よしの「ボウイサナにお願いしましょうか」

フィード「やめとけババアの口から魂飛び出んぞ」

老婆「誰がババアだ」

エオル「……老婆さん、名前は？」

老婆はポシエットから葉巻を取り出した。

老婆「エリスだ」

そうして手慣れたように葉巻を口に加え、マツチを擦ると煙を吐いた。

エリス「お前たちは」

お婆さんと呼ぶと怒るので名前を聞いただけで、エオルはとりわけ交流を持つという気はさらさらなかった。

エオル「俺はエオルといいます、女の子がよしのさん、黒づくめがフィード」

エリスはよしのを見た。

エリス「男二人抱え込んでウハウハだろうね、羨ましいっいたらありやしないよ」

よしの「うはうは??」

エオル「そんなんじゃないですから」

そうしてフィードに目配せすると二人の魔導師は同時に立ち上がった。

フィード「じゃあなババア」

エリス「だから、誰がババアだ!!」

エオル「もうあんな危ないところに登っちゃだめだよ」

エリス「お、おい……」

よしの「こんな周りに何もなくて一人で危ないですわ」

二人の魔導師はギクリと固まった。

よしのはエオルを見上げた。

よしの「どうか次に人が集まるところまで」

エオルは頬を掻いて答えを渋った。ただでさえ自分たちはお尋ね者であるのに、その上体力のない老人と行動を共にするにはお互い危険だと感じていた。それよりなにより、

エオル（この人……お尋ね者とわかったら絶対通報する）

二人の魔導師の共通の考えがこれだった。

エリス「女のほうがよっぽどわかってるじゃないか」

エオルはため息をついて地面に地図を広げた。

エオル「エリスさん、目的地は？」

エリスは煙を吐き、左隣にいたフィードの、更に背後に目を向けた。

エリス「あの山の天辺だ」

一行が向けた視線の先のその山は、先ほど一行が目的地に据えていた、あの山だった。エリスの、紫に染められた白髪混じりの髪を風が撫でた。

エオル「……こんな僻地で、しかも一人で登山ですか」

キナ臭い、と疑いの目を向けるエオルを、エリスは鼻で笑った。

エリス「妹がいんのさ、あの山に」

よしの「まあ、妹さんにお会いに？ 素敵ですね」

フィード「墓参りか？」

エオル「フィード」

エリス「健在だよ、バカにすんな」

エリスは再び葉巻をくわえ、煙を吐いた。

エリス「楽しようとあのカニに乗った方がいいが、ちつとも動きやしくなくってね。あんたらは？」

エオル「えーと……」

エオルの頭に、ふとあることが思い付いた。地図で見る限りしばらくは集落の一つもない。これから向かうところは犯罪組織の真っ只中。その前にエリスの妹のところで、一服休ませてもらえたなら助かることこの上ない。

だが、そんなまるでエリスを利用するような、自分はいつからそんな意地汚い人間になったのか、エオルは心の中で頭を抱えた。

フィード「おいババア、妹んとこ連れてってやるから一泊させる」

エオル（こいつのせいかー！）

エリスはポリポリと眉間を掻いた。

エリス「図々しいガキだね」

そうしてニヤリと笑みを浮かべた。

エリス「いいだろう、妹ん家は広いからね、泊めてやるよ」

エオル「え！ 本当ですか！ 助かります！」

フィード「頼んでみるもんだな」

エオルはジトリと横目でフィードを見た。

エオル「……人に物を頼む態度じゃなかったよね？」

エリス「さてと」

エオルの鍛えられた太い腕にエリスの皺だらけの細い腕が絡まった。  
エオル（えっ）  
エリス「じゃあ行くか」

フィード「ヒューヒュー」

エオル「……エリスさん、余計暑いですし、ね？」

しばらくエリスとエオルの攻防が続いたが、結局エオルが折れる形となった。腕に絡みつくエリスをそのままに、とぼとぼと歩く疲れきった金髪の背中をフィードはニヤニヤと眺めていた。

フィード「面白え絵面だな」

よしのは前を歩くエオルとエリスをただ見つめて黙っていた。

フィード「なんだよ」

よしの「……なんだか、よくわからないのですが、モヤモヤします

……」

フィードはカラカラと声をあげて笑った。

フィード「んじゃあ、お前もやってくれば」

よしのは顔を真っ赤にして何度も首を降った。

フィード「しょうがねえな」

フィードはよしのの手を引いて走り出した。

エオル「うわっ」

突然勢いよく背後から腕に絡まってきた黒い袖。エオルは両腕をそれぞれエリスとフィードに組まれる形となった。そのフィードのとなりには手を引かれる形でよしの。

フィード「仲間外れにすんなよー！ よしのがすねてんぞー」

エリス「生意気な小娘だね、彼女面かい」

よしのは顔を真っ赤にしてパタパタと顔の前で手のひらを振った。  
よしの「めめめ滅相ありません」

エオル「あの、ほんとに暑いから……」

山に近づくにつれ、木の根や岩が足場を悪くし、エリスの足もあり、山の麓にたどり着くまで丸二日と半日かった。

エオル「この山って山道みたいな正規のルートってあるんですか」

エリスは近くの岩に腰を下ろし、葉巻をふかした。

エリス「馬車が出入りするからね、ただ、多分ここの真裏だ」

エオルはそりやそうだ、と思った。なんせ自分たちは僻地側から来たからだ。そんなところにわざわざ道など作るはずが……

フィード「んなわけねえ、あるはずだろ」

エリスは訝しげにフィードを見つめた。

フィード「海沿いの村の連中が、この山のやつと荷物の運搬の取引してる、一般に知られてねえ秘密の道かなんかがあるはずだ」

エオル「確かに」

エリスは舌打ちをして、まだ火をつけたばかりの葉巻を腰掛けていた岩に揉み消した。

エリス「なんで知ってんだい、そんなこと」

エオルは一瞬空を見上げそれからニコリと作り笑顔を向けた。

エオル「ちよつと」

エリスはエオルの胸ぐらを掴んだ。

エリス「紫の人々（パープルピープル）」を捕まえに来たのかい？」

そのあまりの凄みに、エオルは思わず両手を上げた。

エオル「いいえ、そうではないですが……なぜ魔薬業者なんてご存知なんですか？」

エリス「そうじゃないなら何なんだい！？」

よしのはさらに強くエオルの胸ぐらを締め上げるエリスの手に自らの手を重ねた。

よしの「お離しになつて」

エリス「なんだい偉そうに……」

黒く真つ直ぐな、毅然とした瞳。自然と、溶かされるように、エオルの胸ぐらからエリスの手が離れた。

エリス「はん、良いとこのオジヨウサマかい」

エリスは一人歩き出した。

エオル「どこに……」

エリスは振り向くことなく手を振った。

エリス「別行動だ、じゃあな」

エオル「え、ちょっと」

草木の中を分けいったエリスは突然姿を消した。

エオル「エリスさん！？」

駆け寄ったエオルもまた、姿を消した。

よしの「エオル様！ エリス様！」

同じく駆け寄りかけたよしのの襟首をフィードの白い手が捕まえた。そうして両手をポケットに突っ込みのしのと二人が消えた地点に向かった。よしのも慌ててフィードの袖をつかみ、後を追った。

ギィィィ……ボタン

二人がいなくなった場所の地面には円形の鉄の蓋があり、丁度閉じたところだった。外側から取っ手のようなものはなく、地面にもピツタリ隙間なくはまっているため、こじ開けようにも槌子さえ使えない。フィードはボキボキと指をならした。

フィード「んじゃあ壊すか」

クリス「よく見るバカ」

フィードはよしのの肩に乘る丸々とした黒猫を睨み付けた。

フィード「誰がバカだと？」

クリス「お前だお前」

フィード「なにおう!？」

クリスににじりよるフィードの両頬を、よしのの小さな手が覆った。そして

ゲキッ

フィード「いつてえ!」

フィードの首は再び、そして無理矢理”鉄の蓋”へ向けられた。

よしの「ケンカされている場合ではございません!」

フィード「わーったよ!」

クリス「よしのちゃん、かつこいい?」

フィードはブツブツと文句を言いながら、”鉄の蓋”の上に被さる葉や土を足で避けた。

フィード「うわ、アブねえ、魔法返しの魔法陣<sup>サークル</sup>じゃねえか!」

クリスはよしのの肩の上であくびした。

クリス「ちつ、そのままてめえの腕吹き飛ばしやよかつたのによ」  
フィード「なんだとこらあ」

よしの「おふたりとも！」

フィードはばつが悪そうに顔をしかめ、三度”鉄の蓋”に目をやった。よく見ると、”D14”と番号のようなものがふられている。  
フィード「他にも似たようなのがありそうだな」

クリス「果たしてどこにつながっているか」

エオル「イテテ……」

エリス「あらやだねえ、お前そんなにアタシに気があんのかい」

エオル「へっ!？」

穴に落ちると滑り台のように地下まで降りており、何一つ抗う術なく滑り降り、そのまま滑り台から放り出された。その放り出された先は丁度同じように放り出され仰向けに倒れ込んだエリスの真上だった。

エオル「わー！ ごめんなさい！」

エオルは慌てて飛び退いた。エリスは頭を擦りながらムクリと上体を起こした。

エリス「こんなとこまで追ってきちまってよ」

言われて初めてエオルは辺りを見回した。人の手で掘られた坑道の

ようである。ならされた地面はかなりの横幅があり、それこそ運搬用の馬車が方向転換も加えて十二分に行き来できる程であった。壁に等間隔に並んだランタンがずっと奥まで続いている。

エオル「エリスさん、ここが何か、知っているんですか？」

エリスは葉巻を取り出した。そして坑道の奥へと歩き始めた。エオルは後を追った。

エリス「何だと思うんだい？」

エオル「坑道のように見えますけど、地図上ではたしか坑山ではなかったですよ……」

エリス「さあねえ、地図に載っていないだけかも知れないよ」

エオルはチラリとエリスの横顔を見た。一見何事も無かったように涼しげな顔をしているが……

エオル「紫の人々」

エリスの眉がピクリと動いた。

エオル「ご存知なんですね？」

エリス「何の用なんだい」

エオル「あるお宝を探して旅しています。それを魔薬業者が持っていると聞きました、その手がかりがないかとしらみ潰しに業者を当たろうとしているところです」

決して捕まえに来たというわけではありません、と付け加え、エオルはエリスの反応を待った。エリスは葉巻を加えたまま、口の隙間から煙混じりのため息をついた。

エリス「……妹だよ」

エオル「え？」

エリス「紫の人々」はアタシの妹が頭カミやつてんのさ」

エオルは訳がわからないと口をパクパクとさせた。

エリス「アタシは町なかで薬局やっててさ、副業で魔薬の仲介もや

ってるわけ」

エオル「はあ……？」

エリス「ところがさ、先日発注したものの物が来なくてね、先払いだからクレームつけてやろうと思ってさ」

エオル（クレームつけにわざわざこんなところまで！？）

エリスは笑った。

エリス「おかしいだろ、姉が薬剤師で妹が魔薬業者だなんて」

若い頃、同じ薬剤師になる夢を抱き、必死に勉強した。悔しいことに成績は姉よりも妹のほうが優秀だった。姉もなんとか勉強し、薬剤師の学校に入学することができた。翌年が妹の受験のはずだった。エリス「父親が流行り病に倒れてね、妹の分の学費までは払えなくなっちゃったんだよ」

エオル「……妹さん、さぞ悔しかったでしょうに」

エリス「そのせいかグレちまってね、今じゃ立派な魔薬チームのリーダーさ」

エオルはうかがうようにエリスをちらりと見た。

エオル「極端な気もしますが……魔薬の仲介をしているのは、罪滅ぼしというか、その、妹さんに悪いと思ってる？」

葉巻をふかしながら、エリスはぼんやりと前を見つめた。

エリス「さあねえ、ところで、なんか焦げ臭くないかい？」

フィード「あーっ！ チキショウ面倒くせえ！」

よしのを抱え、魔導師の超人的な脚力で道無き山の斜面を駆け登る。生い茂る木々や蔭がよしのに当たたらぬよう細心の注意を払いながらの登山だった。

よしのの腕の中で気持ち良さそうに丸まるクリスがポツリと呟いた。クリス「お前から登山となると途端にはぐれるな」

フィード「うつせーバカネコ」

よしの「フィード様！ あれ……」

よしのの指差す方角は丁度生い茂る木々がパツクリと割れ、山頂あたりがよく見えた。その頂の少し下あたりに、うつすらと白い煙が上がっている。

フィード「おっ！ あのババアの妹がいるとかいう村か？」

フィードは速度を上げた。

エリス「なんだい、これ……」

”坑道”は進むにつれ焦げ臭さが増し、さらに進むとそこには何人もの男たちが倒れていた。その誰もが激しく暴行を加えられた跡があり、体を引きずりながらなんとか坑道へ逃げ込んだものの力尽きたようだった。エオルは思わず顔をしかめ、口を覆った。

エオル「……ひどい怪我ですね……」紫の人々”の構成員？」

壁で葉巻を揉み消し、エリスは腕を組んだ。

エリス「さあねえ、人数多いから覚えちゃいないよ」

一見、平静を装っている風であつたその表情は歪み、脂汗をかき、明らかに動揺しているようだった。

エオル「急ぎましょう」

エオルはエリスを抱え、地を蹴った。

白い煙の方角に近づくとつれ焦げ臭さに混じって、なんとも耐え難い腐臭と人工物の焦げるような臭いが混じり始めた。

よしのは思わず鼻と口を覆った。

よしの「なんでしょう、この臭い……」

しばらく進むと、突然フィードは足を止めた。よしのは震える手で口を覆った。

よしの「……なんという、ことでしょう……」

生い茂る草木の間に、まるで一風景かのように転がる焼け爛れた男たち。

よしの「フィード様！ 降ろしてくださいまし！」

フィードの背中から降りると、よしのはヤサカニを発動した。よしの足元から風が渦巻き、光とともに色とりどりの宝珠が姿を現した。

よしの「せんゆー！」

宝珠たちが回り、ライム色の宝珠がよしのの正面にくると輝きだし、光の中からライム色に輝く狛犬が飛び出した。

フィード「よしの」

よしのは振り向かなかった。

フィード「よしの、ムダだ、」

よしの「せんゆー！」

フィードの言葉を遮るように、上げたよしのの声は震えていた。狛犬は戸惑いながらよしのを見上げた。

せんゆ「クウーン……」

よしのはぺたりとその場にへたり込んだ。狛犬は慰めるようによしのの頬を舐めた。フィードは眉を寄せ、言葉を探しているようだった。そして、絞り出すように言った。

フィード「無理も無エ……こんな数の死体」

フィードの足元で、クリスは尻尾を器用に使って背中をボリボリと掻いた。

クリス「珍しいな」

フィード「うっせー、俺様も初めて見たんだよ」

クリス「おびただしい数の死体”ねえ……まア、お前らの柵に囲われた平和なんて一步外に出れば単なるマヤカシだってことを、知るべきだな」

クリスはゆっくりとよしのに歩み寄った。

クリス「神使教ではどのように考えるか教えてあげよっか」

よしのは涙に濡れた漆黒の瞳で、狒犬を押し退け自分の膝の上に乗る黒猫を見つめた。

クリス「こいつらが何で動かないか、それは魂は天使のエサになり、体は土に還るのを待っているから。魂を食べた天使は新しい命に宿り、土に還った体は大地の糧となる、ここにあるすべては次の命に繋がるためなんだよ」

よしのは再び目の前に広がる惨状を見渡した。

フィード「だーから神使教は夢見がちだって言われてんだよ」

クリス「水差すなアホ」

フィードはよしのの目の前にしゃがみこんでクリスの尻尾を掴みポイと投げ捨てるとジロリとよしのの泣き顔を見つめた。

フィード「てめえは何で泣いてやがんだよ」

よしのは何度かしゃっくりを上げてしばらく落ち着くのを待ってから口を開いた。

よしの「悲しかったからです」

フィード「なんで悲しいんだよ」

よしのは涙を拭った。

よしの「ここにいる方々にはご家族がいて、お友達がいて、それぞ

れの人生があつて、それをこんな形で奪われて……」

フィードはよしのを指差した。

フィード「あくまで魔法圏の意見だが」

クリスが投げられた先から駆け戻ってきた。

クリス「やめとけアホタレ」

フィードはクリスの耳をふん掴み、再び遠くへ投げ捨てた。

フィードは立ち上がり、よしのを見下ろした。

フィード「お前のそういう気持ちを、神使教のやつらはああいう考えで誤魔化してんだよ！ 悲しいもんは悲しいんだ！ どうしようもねえじゃねえかよ！」

よしのはきょとんとフィードを見つめた。それはいつもであれば”言いそうにない”ような言葉であつたためだった。

フィードは頬を掻いた。

フィード「だからその、なんだ、」

よしの（……慰めてくださっている？）

フィード「あーっもーっ！ エオルのヤローがいねえせいだ！」

フィードは頭をかきむしった。クリスはフィードの足元で呆れたようにため息をついた。

クリス「お前、いつもあのエルフのフォロー期待して好き勝手やってっからいざというときにちゃんと出来な、」

クリスは再び首根っこを掴まれ遠くに放り投げられた。

フィード「おら」

差し伸べられた白い手を掴むと、そのまま引き寄せられ、よしのは立ち上がった。

フィード「”感じること”は”学び”だ、俺様も今この光景を見て思ったことは忘れねえ」

よしのは再び辺りの惨状を目に焼き付け、口を固く結び、深く頷いた。

その様子を見、クリスはため息をついた。

クリス（魔法圏の思想なんか植え付けて、よしのちゃんが神使教に

戻った時に思想犯だと後ろ指さされたらどうするつもりだ、あのバカ)

クリスはよしを見つめた。

——まあ、”戻る時”なんざ二度と来ねえだろうがな

その瞳にはよしではなく、よしのの周囲に浮かぶ宝珠たちが映っていた。

再びよしのを背負い、フィードは山を駆け登った。道しるべのように点々と目に入る遺体を通りすぎる度に、よしのは固く目を閉じ、手を合わせた。

そうしてたどり着いた煙の出所。フィードの背中から降り、よしのはその場にヘナヘナとへたり込んだ。

坑道に立ち込める”煤臭さ”に耐え兼ね、エオルとエリスはたまたま発見した梯子を昇り鉄の蓋を開け、地上に出た。

エリス「鼻ん中まで真っ黒だよ！」

エオル「これは……」

二人が”鉄の蓋”から頭を出した、その目の前に広がったのは、強烈な焦げ臭さと真っ黒に跡形もなく崩れ落ちた木造建造物の跡。エリスは言葉を失っているようだった。ただただポカンと口を開け

たまま辺りを何度も見渡していた。

「エオル」

後ろを振り向くと、10メートルほど先に、しゃがみこんでただただ手を合わせているよしのと、眉間に皺を寄せ、いつになく神妙な面持ちのフィード。フィードは「あれを見る」と顎でジェスチャーした。顎で指し示された先に目をやると、「影がない」ため全く気づかなかったが、まるでムカデのように無数の人間の手足が並び、焦げた辺りを必死に何か探しているように、鼻や目のない平らな顔を地面に近づけ「嗅ぎ回っている」、数メートルはある不可思議な生物。その背中には四対の真っ白な羽。

エオル（う……気持ち悪い）

エリス「天使かい……！？」

エリスはその「肌色」のムカデに駆け寄った。

エリス「妹は！ まさかあたしの妹まで喰っちゃいないだろうね！」

エリスの言葉など、全く気に留める様子もなく、「肌色のムカデ」は高級キノコ探しの豚のように地面を嗅ぎ回り続けていた。

ふと、目に留まった「ムカデの足」の部分には、見覚えのある腕がついていた。

エリス「この、あざ……」

触れようと伸ばした指先は震えていた。触れるのを止め、両手を腰に当て、俯き、深く長いため息をついた。

エオル「エリスさん……」

「ムカデ」は白い羽を羽ばたかせ、空の彼方へと消えていった。

エリス「誰がこんなこと……」

この真っ黒に焦げきった瓦礫の中からは、人間の形すら見つけ出すのは困難だった。エオルはただエリスの肩を擦った。

よしの「フィード様……」

フィード「あん？」

組んだ手を固く握り、よしのはまっすぐとエリスを見つめた。

よしの「無理を承知でお願いします、私、お墓を立てて差し上げたいです」

フィード「じゃあ無茶言うな」

よしの「無茶も承知です、お願いします」

フィードはガクンと頂垂れた。

よしのはその場で両手を使い、土を掻き分け始めた。だがその地面は固く、少しも掘り進めることができない。

フィード「あーもー、しょうがねえな」

「下がってな」とよしのを立たせるとフィードは地面に向かい、手をかざした。

クリスは欠伸した。

フィード「小爆炎！<sup>グラン・デ</sup>」

翳した手からは何も起こることなく、フィードの声だけがただ響いた。

フィード「あん？」

足元の砂を片足で軽くよけると、そこにはくすんだ白い塗料で描かれた見覚えのある印があった。フィードは顔をしかめた。

フィード「また魔法封じかよ」

クリス「鉄の蓋」にあれだけの細工があったんだ、当然ここも何かしら細工してんだろ」

フィード「うつせー、ブサネコ」

エリス「犯人は！」

エリスの低い声がこだました。

エリス「一体誰がこんなこと！」

瓦礫の中を掻き分け、少しでも手がかりを探そうとするエリスの肩を、エオルは引き留めた。

エオル「危ないですから！」

肩にかかるエオルの手をエリスはイライラしながら振り払った。

エリス「ふん、魔導師の仕業じゃなけりや関係ないってか！」

エオル「そうじゃありません！　いつ残った柱とかが崩れてもおかしくない！　危ないんですよ！」

エリス「離せよ！　手がかりを見つけるんだ！　アタシは復讐するんだ！」

”復讐”。エオルは初めて人の口から聞くその単語に背筋が凍り付いた。

エオル「と、とにかく落ち着いてください」

エリス「外野はすつこんでな！」

フィード「なんだこりゃ？」

フィードが見つめているのは崩れかけた外壁。

エリス「なんだい」

エリスとエオルは瓦礫の中を掻き分けながらフィードの視線の先へ向かった。そうしてたどり着いたその外壁を見、エリスは葉巻を取り出すと、ニヤリと笑った。

エリス「なんだ、魔導師じゃなけりやあ、僧侶かい」

エオル「え……？」

エリスの皺だらけのたるんだ臉から覗く鋭い瞳に映るのは、色とりどりの塗料で、まるで町の不良たちの壁の落書きのように描かれた文字。

——『B・MOON』——

エリス「黒い三日月」、魔薬業界じゃあ知らないやつはいない」

エオル「なんなんですか、その黒い三日月」って」

フィード「パンゲア大陸の魔薬業界、南半分をほぼ牛耳ってるって

話だな」

葉巻をふかし、エリスはニヤリと笑った。

エリス「よく知ってんじゃないか」

エオル（寧ろフィード（あなた）は何で知ってるんでしたっけー  
?!）

よしの「僧侶」というのは……？」

エリス「リーダーが桃花源の神使教の元・坊さんだって話だ」

エオルは呆れたようにため息をついた。

エオル「破戒僧ってやつですか」

エリスは勢いよく手を叩いた。

エリス「そうと決まれば、行くよ！」

わずかの沈黙

エオルは眉を寄せて聞き返した。

エオル「はい？」

エリスは何言っただ、と顔をしかめた。

エリス「黒い三日月の所だよ！ 復讐に行くんだ」

エオル（ええと、どこから突っ込めばいいんだ？）

言葉につまるエオルの様子に、エリスはイライラしているようだった。

エリス「なんだい、か弱い女見捨ててオサラバかい、魔導師のくせに人でなしだねえ」

エオル「……いえ、その、そうではなく……」

エリスは唐突に声を荒げた。

エリス「こっちは唯一の肉親殺られてんだよ！」

少し困ったように頭を掻き、エオルは口を開いた。

エオル「魔導師として、品行方正である義務があります、他人の復讐に加担するわけにはいきません」

クリス「よく言うぜ」

エオル「うるさいタヌキ」

フィード「まあその婆さんの言うことも一理ある」

一同がフィードに注目した。

その顔には悪巧みの笑みが浮かべられていた。

エオル（嫌な予感……）

フィード「まあ、南半分牛耳ってたんだ、そいつに傘下探させりゃ俺様たちはしらみ潰しによしのの宝珠を探さなくてもいい」

ポカンとフィードの話を聞いていたエオルはふと我に返った。

エオル「……」そいつに探させる”……”ってどういうことでしょうか社長さん？」

フィードは”何で聞き返すんだ”と眉を潜め、平然と答えた。

フィード「そのまんまだよ、抵抗すんなら力づくでやらせる」

エリスは葉巻をふかしながら苦虫を潰したように顔をしかめた。

エリス「一理あるつつたじゃないか、それじゃ”黒い三日月”を潰したいってアタシの目的とは相反するよ」

フィード「一理あるつつたのは、ババア一人置いてくのはおかわいそうだってとこだけだ、そつから先は別の話だ、おら、わかつたらとつとその黒のなんたらに案内しやがれ」

エリスは呆れたようにため息をついた。

エリス「結局案内が目的かい、まあ良しさ、エルフのアンチャンが言うのもこつともだ」

エリスはフィードに右手を差し出した。

エリス「黒い三日月まではお互い協力関係だ、よろしくな」

フィードはパシンと勢いよくエリスの手を握った。

フィード「俺様の足引っ張んじゃねえぞ、エオルのは別にいいけど」  
エオル「おーい」

よしの「フィードさま……」

おずおずと焼け跡を見たりフィードをみたりと、よしのは落ち着きがなかった。

フィードはガクリと肩を落とした。

フィード「そうだった」

エオル「何？」

よしの「埋葬をしたいと……」

エリスは白い煙を吐きながらむせ込んだ。

エリス「何言ってるんだい、あれだけの数なんだよ」

よしのは躊躇うことなく頷いた。

エリス「バカ言ってるじゃないよ、日が暮れちまう！ そりゃああの炭の中にはアタシの妹が埋まってるだろうけどさ、夜になって魔物にでも襲われたら、元も子もないだろ！」

よしの「その時は私がお守りします！」

エリス「何言ってるんだい、魔法が使えない上にこの固い土、現実見な、クソガキ」

よしのは言葉に詰まった。

エオル（うーん、エリスさんの言うことはもつともだな……）

フィードは腕捲りした。

フィード「ようし！ こうなりやイクセスブレイク悪魔合体で、」

バチンと、クリスのモチモチとした尻尾がフィードの頬に炸裂した。

フィード「いつてえな！」

クリス「エリスちゃんがびっくりしちゃうだろうがカス！ こんなときはよしのちゃん、土をちよつと耕せばいいんだよ」

よしのはきょとんとクリスを見つめた。

フィード「ハア？ 何言っ」

クリス「うるせえ」

再びクリスの尻尾がフィードに炸裂した。

フィード「いてえよバカ！」

クリス「茶色の宝珠を使うんだ」

よしのはふたたびきよとした。

フィード「茶色のつて、てめえの口からでてきたアレ（ ）かよ」

## 第6話

クリス「土宝珠」チュウリユウ、土を操り全てを”飲み込む”

エオル「飲み込む？」

エリス「……ん！？ タヌキがしゃべった！？」

クリスの円らな瞳がエリスを捉えた。

クリス「ところでエリスちゃん、埋葬でいいんだよね？」

葉巻からポロリと灰が落ちた。

エリス「あ、ああ、それでいいよ」

クリスはよしのを見つめ、かわいく尻尾を振った。

クリス「ヤサカニを発動させて、名前を喚んでみて」

よしのは何度も短く頷くと、ヤサカニを発動させた。よしのの周囲に円形に並ぶ5つの宝珠。よしのは恐る恐る口を開いた。

よしの「ちゅ、ちゅうりゅう……？」

すると、宝珠の円はくるくると回り、よしのの正面に茶色の宝珠が現れた。宝珠の中には”土”という文字が埋め込まれている。

宝珠はまばゆい光を放ち始めた。同時に地鳴りが始まった。

よしの「あわわわわ」

エリスはエオルにしがみついた。

エオル「何だ！？」

ズズズ……

突然一面の土がまるで卵と小麦粉を混ぜるようになぐると回り始めた。岩のように固かったはずの地面に、みるみる足が埋まってく。

エオル「うわわわ！」

エリス「ひいつ」

フィード「よしのバカ止めろ！」

よしのは慌ててヤサカニをしまい込んだ。宝珠たちはゆらりと空間を歪め、消えていった。

一行はくるぶしまで地面に埋まっていた。フィードは埋まった足を蹴りあげた。土はポロポロと空気に舞った。

フィード「……たしかに耕されたな」

エリス「一体なんだったの？」

よしのは呆然と辺りを見回していた。そしてクリスに視線を向けた。クリス「あとはヤローども、出番だぞ」

フィード「なにーっ」

エリスは目元を抑え、声を絞り出すように言った。

エリス「スコップなら地下道にあるよ……妹を弔えるなら、弔いたい……」

エオル「……やりましょうか」

よしのはふと我に返った。

よしの「わ、私も！」

ひとつひとつ、墓標を作り、そのひとつひとつに手を合わせるよしのの横顔を、クリスは木の枝の上に丸まり遠巻きに見つめていた。

泥だらけでスコップを担いだフィードがその木に寄りかかった。

フィード「てめえも手伝え」

クリス「やなこった」

フィードは手についた土を指で擦りながら口を開いた。

フィード「前回の黒トカゲ（ ）といい、なぜ手を貸す？」 第

13話

クリス「ヤサカニを再び集めている理由は知らない、だが、戦力としては必要だ…… どうかのデグ魔導師よりな」

フィード「んだところ」

遠くからエオルの大声が聞こえた。

エオル「フィード！ サボるな！」

エオルに呼ばれ舌打ちをしながら向かうその背中を見つめ、クリスは独り言のように呟いた。

クリス「……」カーニバル”を阻止するためにはな」

## 24・stir the blaze（後書き）

定まった目的と新たな仲間。

はたしてどんな珍道中が待ち受けるのかっ！

次回は9/10 24・1話でtrick beatシリーズを更  
新予定っ！

24・i・trick beat―しんせつなやまごや1―（前書き）

反吸血鬼団体”ヴァンピール”への潜入に成功したシェン。これで  
グレイへ一歩近づいた、と思いきや？

## 24・i・trick beat―しんせつなやまじや1―

「さつそくだが、君は勘違いしているようだ」  
シェン「どゆこと？」

そつくりな家屋がいくつも並ぶ住宅街の一角。他と同じ家屋だが、一歩足を踏み入れると、カーテンで遮られた暗闇に蠟燭の灯りが浮かぶ陰気な、それでいて幻想的な空間が広がる――吸血鬼排他主義団体「ヴァンピール」

リビングに置かれた黒いダイニングテーブル、その中央に配置された燭台の蠟燭の、炎が揺れた。

「ヴァンピールの本部は別にある」

「最強の七人の魔導師」のうちの一人、<sup>グラントセブン</sup>「共食い」 그레이を探すため、彼をヒーローと崇めるこの「ヴァンピール」に潜入したシェンとリンリン。 그레이の居場所を突き止めるため、上層部に接触する必要があるのだが……

シェン「じゃあ、ミスター・ 그레이がトランプに狙われてるってこと、そこに伝えに行かなきゃならない」

ダイニングテーブルの奥に悠然と腰かける壮年の白髪ひげ面の男はその鷹のような鋭い瞳をシェンの隣に座っている男に向けた。

「ジェフ」

「えー……僕っすか……」

明らかにやる気のない返事。

ジェフと呼ばれた男はシェンより10個は上だろつか、不健康そうな青白い顔に、不揃いに延び放題の無精ひげに根元から色の抜けきった白髪、顔に深く刻まれた皺は若いであろうにどこかたびれた印象を与えた。

シェンはリーダーの男とジェフを交互に見た。ジェフはやれやれと口を開いた。

ジェフ「あんたを案内しろだつてさ、あゝメンドクセエ……」

シェンにはつこりと、まるで空気の読めていない満面の笑顔で右手を差し出した。

シェン「よろしくな、ジェフ！」

ジェフは感じの悪いため息をついた。

リンリン（あつ！ あたしこいつキライ）

ジェフに玄関の前で待つように言われ、数十分。リンリンのイライラは頂点に達していた。

リンリン「遅い！」

シェンは「なになに」と面白いものを見つけたようにリンリンを見つめた。

シェン「え？ 今度は何怒ってんの？」

リンリン「あのジェフとか言うヤツ！ 一体何時間外で待たせるつもりっ！」

シェンは笑った。

シェン「アハハハ！ 本部に行くんだ、きつとそれなりの支度がい

るんだよ」

リンリンは口を尖らせた。

リンリン「髪の毛もヒゲもボーボーだったしね！　だとしても外に出さなくてよくない!?」

シエンは一瞬固まって苦笑いした。

シエン「悪い、あの中暗くて暖かいから眠くなると思って」

あくまで上層部に接触する道筋を作ることだけが目的で、下手に気に入られて留まるように言われても困ると、敢えて場の整った空気を壊すよう無駄に明るく振る舞い、追い出されるよう仕向けたのだった。無駄な明るさ、といってもシエンはただ単に普段通りに接しただけだったが。

リンリンはこれまでのブスクレ顔が嘘のように満面の笑みでシエンの鼻筋に抱きついた。

リンリン「シエン頭いい！　あたしもあの部屋眠くなっちゃいそうだったとこー!」

シエンは声を上げて笑った。

シエン「アハハハハ！　やっぱりリンリンは面白えなあ!」

玄関のドアが開いた。

ジェフ「お前らうるせえ……」

出てきたジェフの格好は厚手のパンツにしっかりとしたブーツ、そして大きなリュックサック、明らかに長期の旅の格好だった。

シエンは笑った。

シエン「そんな遠いの?」

ジェフは目も合わせずシエンの前を横切った。

ジェフ「山奥だ……精々そんな軽装で虫や植物の毒にやられないようにな、助けねえから」

シエン「おっ！　忠告サンキュー！　気をつけるよ!」

リンリンは舌を突き出した。

リンリン「ふーんだっ！　シエンは山育ちっ！　あたしは森育ちで

すうーだっ！」

シェン「アハハ！ 今度は何に怒ってんの？」

リンリン「も～～！ シェンのばかっ！」

町を出て、森に入り、少しずつ傾斜になり、やがて登山口までたどり着いた時には大分日が傾いていた。

ジェフ「いくぞ」

シェンはちよつと待つてと拳手をした。

シェン「こんな時間から山に入るの？ 結構危なくない？」

ジェフはニヤリと笑って前を見据えた。

ジェフ「吸血鬼にでも出くわしたらラッキーじゃねえか」

リンリン「ラッキー？」

ジェフは登山道を歩き出した。

ジェフ「数を減らせる」

リンリンは一瞬背筋が凍り付いた。それは、あの男の狂気にも似た執念を感じ取ったためだった。リンリンは不安そうにシェンの頬に寄り添った。

リンリン「あいつ、こわい」

シェンはクスリと小さく笑った。

シェン「誰にでもある、ただそれがむき出しなだけ、まあちよつと”注意”が必要かもな」

リンリンはシェンの服の中に潜り込んだ。

日も暮れ、辺りは目を塞がれたように真っ暗であった。

シエン「お前見えてんの？」

ジェフは首筋を擦った。

ジェフ「……」<sup>ヴァンピール</sup>半吸血”だからな」

そうして、チラリとシエンを見た。

ジェフ「お前も見えてんじゃないか」

シエンはニコリと笑った。

シエン「いや、カン」

本当は風の精霊を読んで障害物を避けている

ジェフは呆れたようにため息をついた。

ジェフ「ウソつけ……」

やがて月は高く上がり、山は深くなった。

シエンはため息をついた。

シエン「夜通し歩くつもり？ 俺結構眠いんだけど」

ジェフはきょとんとシエンを見た。

ジェフ「あー……じゃあ次山小屋見つけたら休もうぜ……」

シエン「おっ！ サンキュー！」

リンリンはシエンの襟から顔を出し、頬を膨らませた。

リンリン「なによっ！ ”俺はまだ体力有り余ってるけどな”って

言いたい訳！？」

シエンは人差し指でリンリンの頭を押し、無理矢理服の中に押し込んだ。

リンリン「ムギユツ！」

シエン「多分違うよ、普通の人間の感覚がわかんなくなってるんだ、

そのせいで”<sup>ヴァンピール</sup>半吸血”は社会に溶け込めない人が多い、ちよっと社会問題になってるんだよ」

リンリンは「ふーん」と頬杖をついた。

リンリン「アイツも結構大変なんだ……でもあの態度は気に入らないっ！」

シエンはクスリと笑った。

シェン「ハイハイ」

さらにしばらく山を進むとやがて木々が開け、目の前には僅かに谷になっている地形が広がった。そしてその谷底に小さな小屋が見えた。

ジェフ「あー、それじゃ……あそこで休もうぜ」

シェン「やりい！」

リンリン「ちよつとー！ 本部への道だったら山小屋の位置くらい覚えときなさいよ」

ジェフ「あー、いつもは山小屋なんて使わねえし……」

リンリン「ムキーンッ」

山小屋の中は何一つないまっさらな空き家だった。シェンはごろりと寝転んだ。

シェン「あー！ 疲れた！」

リンリンはまったく何も無い部屋を見渡した。リンリン「えー、マツトもないの？」

シェン「布団欲しいのか？」

リンリン「シェンの体が痛くなっちゃう」

シェンは笑った。シェン「アハハ！ 気にすんな！」

ジェフ「あるじゃねえか、マット」

ジェフが指を差した、部屋の隅の暗がりには、確かにマットが二組あ

る。

ジェフ「あー……じゃあちょうどいいな、お前、そのウルサイ妖精と寝ろよ」

リンリン「ウルサイだってえ！？」

ジェフはリンリンを無視し、ボンヤリと月明かりを見つめた。

ジェフ「灯りがあればな」

リンリン「寝るだけなの？」

ジェフ「寝るとき明るくないと寝られねえんだよ」

リンリン「ぷぷっ！ お子ちゃまつ！ あ、なんだ灯りあるじゃん」

リンリンが指を差した部屋の角にランタンと蠟燭、マッチが置いてあった。

ジェフ「おー……ナイス、妖精」

リンリンは腕を組んでふんぞり返った。

リンリン「ふふーん！ 感謝したまえっ」

二人の様子を、シエンは苦笑いしながらただただ眺めていた。

シエン（マツト？ 灯り？ なんのことだ？）

二人がまるでそこにあるように振る舞っているものが、シエンには全く見えない。だが、どうやら心に望むものが”見える”らしい。

シエン「ちよつと外見てくんな」

小屋の外は虫たちや梟たちの穏やかなハーモニーが鳴り響いていた。だが、シエンには穏やかさは感じられなかった。

シエン「……なんかいるな」

シエンは小屋のドアを開いた。見ると部屋の真ん中でジェフがぐすかと寝息を立てていた。小屋へ入り、念のためドアを閉め、ジェフのもとへ歩み寄り、シエンはジェフの肩を揺すった。

シエン「ジェフ、起きて、ここ多分マズイ」

その時だった、ポツポツと天井から水が降ってきた。

シエン「雨漏り？」

そしてそれはすぐさま、外の雨音にあわせて同じだけの雨が天井から降り注いだ。

シエン「……なるほどね、この小屋も幻覚か」

確かに、山小屋の存在はシエンの”望んでいたもの”だった。

ジェフ「うわあああ」

ジェフの叫び声、と同時に声の主はサーベルを引き抜き、シエンの頭上に振りかざした。

シエン「い！？」

シエンはスレスレのところではそれを避け、ジェフと距離を取った。

シエン「どうしたんだよ、ジェフ！」

ジェフは黙ったままシエンに向かい剣を構えた。シエンは「困った」と雨でびしょ濡れの頭をポリポリと掻いた。

シエン「えーっと？」

24・i・trick beat―しんせつなやまじや1―（後書き）

ジェフにいったい何が起こったのか？

まったく見えない状況を、シエンはどのように分析するのか？

次回24・2話は9/17更新予定です。

24・2・trick beat―しんせつなやまごや2―（前書き）

突然襲い掛かってきたジェフ！？いったい何が起こったのか！？

## 24・2・trick beat―しんせつなやまごや2―

突然降り出した雨、山深い谷あいの山小屋、赤い中華服、対峙するサーベルの切っ先。

シエン「おはよう、ジェフ、お前ずいぶんな寝起きだなあ」

語りかけた先の、息巻く男の瞳は赤く光り、肩は大きく上下し、サーベルを握る拳は僅かに震えていた。

ジェフ「まさか、こんなところで会えるとはな」

シエンは訳がわからなかった。

シエン「寝ぼけてんの？」

ジェフ「殺す」

ジェフは地面を蹴った。同時に自らの手首をサーベルで切り裂き、サーベルは真っ赤に染まった。

ジェフ「血刀術」

シエン「ん？」

ジェフ「螺鈿」！

まだシエンと距離があるところから、思いきり振りきられたサーベル。その勢いでサーベルについていたジェフの血は、シエンに向け弾丸のように飛び散った。それは針のように姿を変え、シエンに襲いかかった。シエンは横に大きく飛び、ごろりと肩から一回転すると、砂ぼこりを上げて着地した。シエンが立っていた場所に深々と刺さるは”血の針”。

シエン「ひえっ！なにすんだよっ！」

ジェフは赤く光る瞳をシエンに向けた。

サーベルの切っ先に残る”血の針”に手を伸ばすと刀身全体に薄く伸ばした。

ジェフ「血刀術”鼈甲”」

サーベルを構えると同時に、刀身全体に伸ばされた血は刃とみね、それぞれの方向に広がり、サーベルは刀身が三倍以上に広がった深紅の両刃の剣となった。

ジェフ「……この90年、お前を殺す夢を見なかった日はない」

通り雨だったのか、雨は止み、雲は流れが早く、辺りは雲の影絵と月明かりの斑。

シエン「ジェフ、それ多分勘違い、お前寝ぼけてんだよ」

ジェフ「あー、寝ぼけている？ ふざけんな！」

ジェフは剣を構え、再びシエンに襲いかかった。

シエン「ちよいちよい、」

「待つて待つて」と言いながら後ずさった足はばしやりと音をたてた。雨水の水溜まりに足が入ったようだ。雲間から月が顔をだし、水面に光が照らされた。水面にはシエンが映るはずだった。だが、その水面に映ったのは、——長い髪の陰気な女

シエンはなるほどねとため息をついた。

シェン「ジェフ、俺はお前を”<sup>ヴァンピール</sup>半吸血”にした吸血鬼じゃない、術にかかってんだって、俺はシェンだよ！」

ジェフは足を止めた。

ジェフ「なぜそいつの名を知っている」

シェン「落ちて着けジェフ、これは幻術だ！」

ジェフは剣を構えた。

ジェフ「そんな手にのるか」

シェン「ほんとだって！ 多分」<sup>テリトリ</sup>小屋に入って次に目にした生き物が、最も憎んでいるものに見える」

ジェフは一度寝て次に目にしたシェンの姿が、シェンは一度小屋から出て戻ってきたとき、ドア（小屋の外）から見た、部屋の中央に寝ていたジェフに対して幻術はかからなかったが、次に小屋の中で見た生き物——水溜まりに映る自分の姿が、それぞれ”最も憎んでいるもの”に見えている、というのがシェンの見解だった。

ジェフ「ばかげてる」

シェン「お前の獲物がこんなところにいるほうが”ばかげてる”、違うか？」

ジェフはサーベルを下ろした。

ジェフ「お前、本当にあの桃花源人か……？」

白目をむき、鼻を豚のように突き上げ、舌を思いつきり突き出し、シェンは笑った。

シェン「お前の獲物はこんな顔すんのかよ」

ジェフは声を上げて笑った。

ジェフ「ばかやめろって……っ！ つか、この気持ち悪い幻術を解きてえ……」

シェン「どっかに幻術の本体が術使ってるやつがいるはずだ」

だが、辺りは真つ暗で、頼りの月明かりは雲から覗いたり隠れたりを繰り返している。

ジェフ「半吸血<sup>ヴァンピール</sup>」なめんな！ 暗闇に隠れてようが、丸見えだよ」

シェン「え、ちよつと」

ジェフはなんだよとシェンに目を向けた。シェンはあたりをきよろきよろと見渡した。

シェン「リンリンがない」

24・2・trick beat―しんせつなやまごや2―（後書き）

リンリンがいなくなつたー！なんというベタな展開！

そんなこんなで次回は9/24 24・3話更新予定です！

24・3・t r i c k b e a t—しんせつなやまごや3—（前書き）

いなくなったリンリン、姿の见えない魔物。さて、どうするシェン？

## 24・3・trick beat―しんせつなやまじや3―

シエン「おーい、リンリン、返事しろー」

山深い山中の浅い谷底。雨上がりの深夜、雲の流れは早く、月が見え隠れし、辺りは虫たちの大合唱。

ジェフはばつが悪そうに頭をポリポリと掻いた。

ジェフ「……やべえ……」螺鈿”の巻き添え食らったか……？」

シエン「それは大丈夫だって、つーか、幻術かかって怯えてるかも早く見つけてやんなきゃ」

ジェフはため息をついてサーベルを肩に乗せた。

ジェフ「多分、幻術解いたほうが早い、なんせ声まで別人に感じるからな」

シエン「わかった！俺ちよつと探してくる！幻術解いといて！」

ジェフが返事をする間もなく、シエンは繁みの中に消えていった。

ジェフ「おいおい……、わかってねえよ……」

既に塞がりかけている手首の傷に再びサーベルの刃があてられた。

ポタポタと赤い斑点がジェフの足元に落ちて行った。ジェフはニヤリと笑って辺りを見回した。

ジェフ「<sup>ヴァンピール</sup>半吸血”の穢れた血だぞ、呪われたくなけりゃあ消えやがれ」

普通であれば血の臭いを嗅ぎ付け魔物たちが集まってくるものだが、その気配はみるみるうちに遠ざかって行った。ジェフは自嘲ぎみに鼻で笑った。

ジェフ「お利口だ」

その時だった。背後でカサカサと繁みの擦れる音。

ジェフ「そこか」

ジェフはサーベルを握り直し、飛びかかった。振り下ろしたサーベルが捉えたのは、

ジェフ「げっ」

ジェフはギリギリのところでサーベルの刃を止めた。刃の直ぐ下には――ミニマムサイズの、自分の憎むべき吸血鬼。そんなはずはない、とジェフは一度深呼吸をした。恐らく、これはリンリンだろう。ジェフ「なんだよ、まぎらわしいやつだな」

リンリンは涙をポロポロと溢しながらジェフを睨み付けた。ジェフは慌ててサーベルを退いた。

ジェフ「わ、わわ悪かったって……」

リンリンはジェフに向かい両手をかざした。

ジェフ「ん？」

リンリン「キラキラキャンディー」！

リンリンの小さな両手からビー玉ほどの大きさの光の玉が飛び出した。ジェフは思わずキャッチした。そしてキャッチした手のひらを開くと光の玉は割れ、ネバネバとした光の系の固まりとしてこびりついていった。その光の系の一部は束となってリンリンの手まで繋がっていた。

リンリン「えーいつ！」

光の束を手にも、リンリンはジェフの回りを何度も飛び回った。

ジェフ「おいおい」

光の束にぐるぐる巻きにされ、ジェフは尻餅をついた。光の束を引きちぎろうと力を込めるが、ゴムのように弾力があり、びくともしない。

ジェフ「妖精、何すんだ……」

涙に濡れた青い瞳は怯えていた。

リンリン「よくも私たちの森を！」

ジェフ「あ？」

ざわざわと、草木が揺れる。リンリンは両手を上げた。

シェン「やめろ、リンリン」

茂みを割って飛び出した真つ赤な中華服——ジェフには憎き吸血鬼にしか見えないが。リンリンはシェンに怒りに震える瞳を向けた。  
リンリン「おまえは、こいつの仲間だったやつ……！」

ジェフ「あー、まだ幻術にかかってんのか、っーかこの”キラキラした縄”なんとかしてくれ」

シェンはリンリンから視線を外さず答えた。

シェン「妖精の”いたづら魔法”だ、ナイフでも切れないよ、本人に解いてもらわないと」

ジェフ「あー、幻術が効いてるってことは、まだ本体は近くに居やがるな」

リンリンは再び両手を上げた。シェンはジェフのそばに落ちていたサーベルを拾い上げた。

シェン「落ち着け、リンリン、お前の森を壊したやつらはみんな”妖精の呪い”で死んだ、”お前の見ている俺たち”はこの世に存在しないはずだ」

リンリン「うわああ！」

リンリンの慟哭に呼応するかのように、木々がざわめき、緑が重なり、それは巨大なドラゴンに姿を変えた。

ジェフ「げっ」

緑のドラゴンはその巨大な口を開けた。

シエン「しかたない」

ジェフ「お、おいおい」

シエンはサーベルを構えた。

シエン「妖精が翅を震わせているときは怒り狂ってるときだ、話じやもう止めらんねえ、こっちが殺られる」

ジェフはシエンの頭のとっぺんから爪先まで見回した。

ジェフ「……翅？ お前、なんで幻術に掛かっていない？」

そういえば、小屋のあった地点からは大分距離がある、先のシエンの推測であれば、テリトリーの外なのだから幻術などとうに解けているはず。だが、ジェフもリンリンも解けていない。

ジェフ（本体が移動した……それも”近く”に……？）

ジェフは光の縄で両腕が不自由なまま、よろよと立ち上がった。

シエンがパチンと指を鳴らした瞬間、ジェフの目の前の二匹の憎き吸血鬼の姿はそれぞれシエンとリンリンの姿へと変わった。

リンリン「え……シエン！？」

シエン「リンリン！ 止める！」

リンリンは慌てて緑のドラゴンの頭を撫でた。緑のドラゴンはたちまち無数の木の葉に姿を変えた。飛び散る木の葉のあまりの数に、視界は塞がれた。

リンリン「わーん！ シエン！ ごめんねえ」

ジェフ（木の葉で前が見えねえ！）

木の葉の滝の奥で響く甲高い声。チャキ、とサーベルを構える僅かな金属音。ジェフは叫んだ。

ジェフ「妖精！ そいつはちげえ！ 偽物だ！」

「あつたり」

同じ声が、二つ、重なって聞こえた。

やがてすべての木の葉が地面に積もり、現れたのはサーベルを構えたまま固まるシェンと、そのシェンの首もとに赤い棍をかざす、これまたシェンだった。

リンリン「シェンがふたり？」

サーベルを持つシェンは視線だけ、自分に棍を突きつける、自分と同じ姿の男を睨み付けた。

シェン「みんな、こいつが偽物だ」

棍を構えるシェンはニヤリと不敵な笑みを浮かべた。

シェン「俺がリンリンに武器なんて構えつかよ」

そうしてくるりと回転した棍の先はバシンと音をたててサーベルを叩き落とした。武器を失ったシェンは腫れた手を押さえながら後ずさった。

シェン「リンリン、お前だけでも逃げろ」

リンリン「……シェン！」

二人のシェンの間にリンリンは立ちはだかった。だが、そのまま言葉を探すように黙りこんでいた。棍を肩に担ぎ、シェンは腰に手を当てた。

シエン「頭のいい魔物だなあ、人の記憶引つ張り出して、オマケに解釈して演じる、賞金首魔物でもおかしくねえわ」

クリミナルモンスター

ジェフ「……この山に賞金首魔物なんていねえはずだ」

シエンはニヤニヤと笑いながら「ふーん」と相づちをうった。そしてリンリンに視線を向けた。

シエン「リンリン、ちょっと危ないからジェフと避けてて、あとジェフの魔法解いてやってよ」

リンリンは目を見開いた。手を腫らしたシエンはすかさず口を開いた。

シエン「リンリン、そいつは偽物だ、アーティファクトを盗られた、危ないからにげ、」

リンリン「偽物はお前だっ！　べーっだ！」

リンリンは舌を突き出すとジェフのもとへ飛んだ。

リンリン「そのまんまでもイイ気味だけど、シエンが解けて言うから解いてあげる」

ジェフはやれやれとため息をついた。

ジェフ「……なんで分かった？」

リンリンは胸を張った。

リンリン「本当のシエンなら、”ついでにあんたも”心配するものさきほど偽物のシエンはリンリンに「お前だけでも逃げる」と言った。近くにジェフがいるのに。本物のシエンであれば例え両腕を塞がれ不自由なジェフも見捨てたりはしない。リンリンは微笑んだ。リンリン「だから、あっちがホントのシエン」

シエンは赤い棍をクルクルと回した。

シエン「もう二度とこんなことすんな、エサは別の方法で取れ、であれば見逃してやる」

ジェフ「オイオイ……魔物にそんなに通じるかよ」

偽物のシエンはみるみるその姿を崩し、疎らに黒く長い体毛が生え、鼻は前に突きだし、口は避け、目は飛び出し、細長い何節もの手足に巨大な腹。

その額に乗せていた深緑の木の葉はあつという間に茶色く風化した。

『人間、我、捨テタ、暖カイ、部屋、美味シイ、ゴハン、無クナツタ、腹減ツタ、寒イ、人間、憎イ』

ジェフ「……人話を話せるのか、確かに頭はよさそうだが、……これをペットにしていたのか？」

リンリン「……た、確かにペットにするほど可愛くはないよね」

シエンは魔物の体が傷だらけであることに気付いた。そしてそれらの傷は人為的に縫合された痕があった。

ジェフ「何かの実験材料か……？」

シエン「……お前を捨てた人間ってのは？」

『ヴァンピール』

ジェフはきょとんと目の前の魔物を見つめた。

ジェフ「は……？」

魔物を見つめながら、シエンはぽつりと呟いた。

シエン「本部はこの山の中って言うてたよな？ お偉い方は何やってんだ？」

ジェフは頭をポリポリと掻いた。

ジェフ「まあ、聞いてみるしかないだろ、つつても、はぐらかされるだけだろうがな」

シエンは笑った。

シエン「大丈夫だろ、”証拠”を持って行くから」

一同は目の前で震える魔物を見つめた。

## 24・3・trick beat―しんせつなやまごや3―（後書き）

今回は久々の本編更新。25話です。またまたバトルはありません。裸のおじさんができます。なんだこのファンタジー小説（笑）

次回は10/1更新予定です。

## 25・finding wish（前書き）

新たな仲間、エリスとともにヤシの木の林を歩く一行は……？

## 25・finding wish

エリス「エオルう、あたしゃ水浴びしたいよ」

エオル「俺もですよ……おかげさまで」

エリスのシワシワの細腕にがっしり掴まれたエオルの腕は、汗だくだった。

土と煤にまみれた一行の姿は、白砂と疎らなヤシの木が続く南国の平地にはあまりに不釣り合いだった。

### finding wish（望みのありか）

じりじりと照りつける太陽。白砂の照り返し。息をするのもつらくなるような湿気。フィードは滝のようにあふれ出る汗をそのままにうなだれた。

フィード「あち……素っ裸になりて……」

よしの「ええっ!？」

エオル「やめたげて、セクハラだから」

そうして改めて、一同はフィードの格好をまじまじと見た。長袖の真っ黒な分厚いロングコートに、深々と被ったフード、まるで減量中の格闘家だった。

エオル「そんな格好してるからでしょーがっ!」

フィード「あ? そんなってどんなだよ」

エオルはフィードの頭をすっぱりと覆っているフードを引っ張った。エオル「こーれーだーよっ」

フィード「ぬおあ！ やめんかつ」

二人のじゃれ合いにエリスは軽く笑った。

エリス「ガキンちよめ」

そうして、よしのの視線に気が付き、笑みを隠すように葉巻を吸った。

エリス「なんだい、人の顔をジロジロと」

よしの「……本当に復讐をお考えなのですか？」

何を改まっていますら、とエリスは呆れたため息をついた。

エリス「そうだったってんだろ、復讐はよくないから止めるって？

いい子ちゃんぶって、嫌な娘だね」

よしの「いえ、そうではなく、」

エリスはよしのとはもう話したくない、と歩を早めた。よしのはおどおどとエリスの背中を見つめた。よしのの肩に乗っていたクリスが口を開いた。

クリス「よしののちゃんは、何を聞こうと思ったの？」

よしのは俯いた。

よしの「復讐をして、そうしたらどうなるのか、よくわかりませんでしたので……」

クリスは一瞬空を見上げた。

クリス「ま、そこまで考えてはいないんじゃない、復讐者って。ただ気を晴らすためだとか、被害者のためだとか、自分の感情だけでそれ以外に余裕はないんだよ」

よしのは不思議そうに肩の上のまん丸とした黒猫を見つめた。黒猫はニヤリと笑った。

クリス「怨み、憎しみ、悲しみ、怒り、悔しさ、どれもちょっとしたことで簡単に湧いてくる感情で、それらは人を突き動かそうと理性や冷静さを揺るがしてくる」

よしの「それが今のエリス様……？ さぞお苦しいでしょうに……」  
クリス「それに流されるか、はたまた耐えるか、その人とさらされる環境によってくるのかなって思うんだ」

よしの「さらされる環境……」

よしのは前を歩くエリスの背中を見つめた。

クリス「他人は変えられない、けど変わろうと思う環境があれば、また違った結論を産むかもしれない、……ってどっかのバ力魔導師が言ってた」

よしのは両手に握りこぶしを作った。

よしの「私、頑張ります」

クリス「手伝うよ」

クリスは遠足に行く子どものように楽しそうに笑った。

——希望を持てば、それを失ったときの落胆は、何よりの娯楽だ——

フィード「ええい、だったらエオル、てめえが脱ぎやがれ！」

フィードはエオルの服を引っ張り上げた。

エオル「ちよつ、やめて」

エリス「おほっイイ腹筋じゃないか、あたしも手伝ってやるよ」

エオル「ひいひいっ！」

「こらーっ！」

フィード「あ？」

エリス「ん？」

見ると、疎らなヤシの林の奥から男が一人走ってくる。

「追い剥きさん！ その人から物を取るのなら、私から取りなさい」

男はどう見ても素っ裸で荷物の一つも持っていなかった。クリスはもちもちとした尻尾をよしのの目の上に被せた。

よしの「クリスちゃん？ 前が見えませんか？」

クリス「ううん、見なくていいよ（俺の以外）」

エオルは慌てて手を振った。

エオル「違いま、」

フィード「ようし！ それなら早速金目のモノを出して貰おうか」  
裸の男は困ったように自分の一糸纏わぬ体を、ぽっこりと出っ張った腹で見えない足元まで見回した。直ぐ様エオルの鉄拳がフィードの脳天に降り注いだ。裸の男は済まなそうに頭を掻いた。

「……すみません、先ほど別の追い剥ぎに全て渡してしまいました、あげられるものが何一つありません」

エオルは慌てて弁解した。

エオル「違うんです、仲間内でじゃれ合っていただけなんです」

裸の男はほっとしたように笑顔になった。

「そうでしたか、いやはやとんだ勘違いを」

フィード「ちつ、折角の獲物を」

エオルは拳に息を吐きかけた。

クリス「とりあえずおっさん、とっとと消えろ、よしのちゃんとエリスちゃんの眼球が腐る」

男はしまったと慌てて近くに落ちていたヤシの落ち葉をひつつかみ、体を隠した。

「すすすすみません、しゃべるタヌキさん」  
クリス「タヌキじえねえ」

男は真っ白なバーコード頭にぼってりとした大きな腹、真ん丸の赤っ鼻、気の弱そうだということが一目でわかるように、ぷっくりとした指を忙しなく動かしておどとしていた。

エオル「フィード、コート貸してあげて」

フィードは項垂れて木陰に入りコートを脱いだ。

フィード「まあ、た汚え裸のオヤジに貸すのかよ」

クリス「テメー、誰のこと言ってるやがる」

フィードは脱いだコートを裸の男の頭に投げた。

「あああありがとうございます」

男は手で汗を拭いながらコートの前を閉めた。

「……暑っ！」

エオルは申し訳なさそうに言った。

エオル「熱帯ですからね……」

エリスは葉巻を吸い込み、そしてゆっくり吐いた。

エリス「で、あんたこんな辺鄙なところで一人何やってんだい」

男は落ち着き無くペコペコと頭を下げながら申し訳なさそうに笑った。

「じじ実は私は宣教師でして」

エオル（げ！ 神使教！）

エリスはチラリと一瞬エオルの様子を見た。

「この先の海辺に村があると聞き布教に伺う途中なのです」

フィード「で、途中で追い剥ぎに身ぐるみ残らず剥がされたと」

宣教師は申し訳なさそうに頭を掻いた。

エリスは葉巻を揉み消し、フィードは男に貸したコートに手をかけ、同時に口を開いた。

フィード& a m p ;エリス「そうかい、じゃあな」

フィードにコートを剥がされ再び素っ裸になった男は慌てて近くにあった落ち葉で体を隠した。そうしてフィードとエリスはスタスタと歩き出した。エオルはさっさと立ち去ろうとする二人の背中と、よしのに叫ばれないよう慌てて白砂を体にかけて続けている宣教師の男を交互に見やり、弱ったため息をついた。

「ギヤアアア！」

宣教師は突然のたうち回った。その声にフィードとエリス足を止め振り返り、エオルとよしのは慌てて駆け寄った。

エオル「どうしました！？」

宣教師「」 大事なムスコ」が蟹にー！」

砂の中にいたにいた蟹を驚かせたらしい。エオルはブルブルと体を震わせて驚愕した。

エオル「ギヤーツ！ それ痛いー！」

よしのは訳もわからず慌てふためいた。

よしの「いいいい今すぐせんゆを……」

エオル「それはなんとなくやめて……」

フィードとエリスはヤレヤレとため息をついた。

――間――

フィード「おい、おっさん、身ぐるみ剥がされたのはどの辺だ」

よくよくみるとヒルや虫さされだらけの体中をフィードから再び借りたコートの間からかきむしりながら、宣教師はグスグスと涙ぐんだ。

宣教師「おお、旅のお方、お気遣いありがとうございます、」

フィードは宣教師の頭のバーコードをひっ掴んだ。

フィード「いいからとつと話を進めやがれ」

宣教師「ひいー！」

エオルはフィードの首根っこを引っ掴んだ。

宣教師は慌てて歩き出した。

宣教師「き、きき来た道をたどれば……」

よしの「宣教師様、お履き物を……」

宣教師は笑った。

宣教師「はっはっは！ 何のこれしき！」

そうして見せた足の裏は傷だらけだった。エオルとフィードは同時に顔を見合わせた。

『ジャンケンポン！』

フィード「あーちきしょー」

フィードの背中の上に揺られる宣教師は申し訳なさそうに眉を寄せた。

宣教師「すすすみませ、」

フィード「オドオドすんな！ うつとおしい！」

宣教師「ひいっ！」

エオルはフィードの耳を引っ張った。

エオル「フィード」

フィードはさも煩わしいと言わんばかりに舌打ちした。

フィード「だから、潔くおんぶしてやってんだろ」

エオル「小言の多さが潔さを感じない」

フィード「うつせー、説教マンめ」

エリス「エオルう、アタシもおんぶしとくれよ」

エオル「足場が悪くないうちは健康のために歩いて下さい」

よしのと宣教師はクスリと笑った。

宣教師「みみみ皆さんは、ご家族が何かですか？」

エリスは直ぐ様憤慨した。

エリス「んなわけないだろ！ アタシが母親にでも見えんのかい！」

宣教師は「しまった、違ったか」と慌てた。

宣教師「いいいいえ……！」

フィード「母親にしちゃあババアすぎんだろ、せめて祖母くらいに遠慮しとけよ」

エリス「ふざけんな！ 女はいくつになっても女だよ！ アタシはね、この金髪エルフの恋人さ！」

エオル「何言ってるの、エリスさん……」

宣教師はにっこりと笑った。

宣教師「そうでしたか」

エオル「ちがいます」

エリスは葉巻に火をつけた。

エリス「アンタは、家族は？」

宣教師は「ハハ」と小さく笑った。

宣教師「いません、随分前に亡くなりました」

エリス「ヘエ」

宣教師はエリスを見つめた。

宣教師「……追い剥ぎさんに遭った場所はまだちょっと先です。せっかくなので、私の昔話に付き合ってくださいませんか」

突拍子のない話の切り出しだったが、エリスは何故だか自分に話しかけられているように感じた。

エリス「まア、暇潰しにはなるんじゃない」

—— 20 数年も前の話です。 当時は妻と小さな娘と三人、片田舎で穏やかに暮らしていました。

エリスは退屈そうに黙ったまま葉巻の煙を吐いた。

——ある時家に強盗が押し入ってきて、金品と、私の家族の命を奪っていきました。

退屈な話だと思い込んでいたエリスは胃の奥が突き上がるような感覚を覚えた。それは、この宣教師が自分の何を見抜き、何を言わんとしているのかを、はっきりとはわからなかったが心のどこかで感づいたためだった。エリスはあからさまに不快感を表すように舌打ちをした。

エリス「何が言いたいんだい」

宣教師はエリスの迫力に気圧されながら、ガタガタと震える口の端を吊り上げ、笑顔を作ってみせた。

宣教師「たたたたたの、その、む昔話ですよ、暇つぶしです……」

蛇に睨まれた蛙、まさにその言葉の通りだった。よしのは慌てて止めに入ろうとしたが、エオルは人差し指を口の前に立て、制止した。宣教師は深呼吸した。

宣教師「……ところで皆さんは大切な人の命を他人の手によって、奪われたことはありませんか？」

フィード「ねえ」

よしの「覚えが……」 ↑ 記憶喪失

エオル「……」

エオルはエリスを見つめた。

エリス「あるよ、つい最近」

宣教師は悲しげに眉を下げた。

宣教師「そうですか、お気の毒に……ではこれから先の話も少しは共感頂けるかもしれません」

エリスの眉がぴくりと動いた。

——ショックの先にあったのは、悲しみと悔しさと怒りと……それらの感情とは一線を架すこれまでに経験したことのない気持ち……”憎しみ”でした。私の家族の未来を奪っておいて、のうのうと生きている犯人が、……なんというか、簡単な言葉ですが、とにかく許せませんでした。

エリスの葉巻の先端から灰が落ちた。

エリス「で？ アンタはどうしたんだい」

穏やかな宣教師のその優しそうな雰囲気からは、想像もつかない言葉が出た。

宣教師「犯人は複数でした、十数年かけて探しだし、一人残らず命を奪いました」

よしのは口を押さえた。エリスはニヤリと笑った。

エリス「見かけによらずやるじゃあないか」

宣教師は無表情のままだった。

宣教師「……十数年を費やしました、何を振り返ることもなく、ただひたすら」

エリスは首を傾げた。宣教師の言わんとすることが解らなかった。

宣教師は続けた。

宣教師「最後の犯人は貧困層で、家はとても貧しく、母親は病気でした。薬代を稼ぐため、息子は様々なところで強盗を繰り返していたのです。自分が捕まれば母は生きていけなくなる、捕まらないために、手段は選んでいませんでした。私はよりによって、その母の目の前で、自分の復讐を遂げてしまったのです」

——はつきり言つて、その時は他人のことなんて” どうでもよかつた”のです。泣き崩れる母親の叫びに似た慟哭で、そんな私は我に返りました。いや、むしろ、復讐を達成させた充実感と、目標が無くなったことによる虚無感が、そうさせたのかもしれない。

気に入くわない、とエリスは顔をしかめた。

エリス「我に返る」？ 復讐するやつはみんな正気じゃないとも言つのかい」

宣教師は慌てて「違います違います」と手を振った。

宣教師「いいいいいえ！ す少なくとも私がそうだったというだけですよ」

エオル「それで、その後一体どうされたんですか？」

宣教師は「助かった」とエオルに小さく会釈した。

——その母親には、散々呪いの言葉を吐かれました。そこで、私は気づいてしまったのです。

よしの「何に、ですか……？」

宣教師は何処ともなく、ただ遠くを眺めた。

宣教師「その母親の姿は、家族を奪われ、犯人たちに復讐を誓ったあの時の、……私そのものでした」

フィードは鼻で笑った。

フィード「今度はためえが復讐される番ってか」

宣教師は頷いた。

宣教師「負の感情を振りかざせば、それは伝搬し、連鎖します、誰かがやめる”ではなく、”自分で”止めなければ、繋がります”」

エリスは直ぐ様反論した。

エリス「だからって、泣き寝入りしろってのかい！」

宣教師「そうではありません。そのために、人は司法を作りました。……その司法に頼らず、自らの手で復讐を達成した時、その後どうなるか、想像されたことはありませんか」

その場の全員の視線が、宣教師に集まった。宣教師は記憶を辿るように視線を落とした。

”こんなことするんじゃないかった”

”でも、だとしたら私の妻と娘の人生はなんだったのだ”

”私は悪くない、私をこうさせたのは奴らだ”

”お前の息子が悪いんだ”

”私はこの十数年、このためだけに生きてきたのだ”

”これで妻と娘も浮かばれる”

宣教師「自分を正当化し、達成感と家族への思いでいっぱいでした、数日の間は」

エリス「数日の間？ その後は違うのかい」

真つ青な空からさんと照りつける太陽を、宣教師は目を閉じ、仰いだ。

宣教師「太陽はいつも通り昇っては沈みます、世の中は私の復讐劇など気にも止めず回ります、家族が戻ってくるでもない、残ったの

は生きる目標を無くした私と、被害者家族からの憎悪のみでした、つまり達成したところで、これから家族のいなくなった人生を歩まなくてはならない私にとって、何一つ現実に実になるものは残らなかった、復讐をしているときの私の鬼のような形相を見れば、娘は怖いと泣いたことでしょう」

エリスは乾いた笑みを浮かべ、葉巻を吸った。

エリス「だから復讐なんてするもんじゃないって？」

宣教師はエリスの瞳を見つめた。

宣教師「……復讐を終えたからこそ、私はそう思えたのです、今でも、赦すことはできません、ですが、同じ目に遭わせてやろう、というのは、違ったのかなと」

エリスは葉巻を投げ捨てた。それをエオルは慌てて踏み消した。

エリス「だからってやり返すなつてのかい！？ アタシはそこまで出来た人間じゃないよ！」

エリスの剣幕に、辺りにいた鳥たちは一斉に飛び立った。

宣教師「……貴女の目が、当時の私と似ていたので、話をさせていただけました。あくまで私個人が感じたことで、実際何が正解で何が不正解か、わかりません」

フィードはあくびした。

フィード「で、サトリがなんちゃらのために神使教に入信か」

宣教師は笑った。

宣教師「そうかもしれませんし、ただ単に罪から逃れたかったのかもしれません」

フィードはよくわからない、と眉を寄せた。

「おい」

茂みがガサガサと揺れ、武器を手にした男が数人、一行を囲むように姿を現した。

「じいさん、また会うなんてツイてねえなあ」

宣教師は慌てた。

宣教師「きゃああ！　おおお追い剥ぎさんたちっ」

ドサリと重い音を立て、宣教師は尻餅をついた。おぶっていたフィードが手を離れたためだった。

フィード「おらあ！　てめえらとつとこのハゲから盗ったもん帰せ」

追い剥ぎたちは目を光らせた。

「おおっ！　若い娘が二人もいるぞ！」

フィードはエオルを見た。

フィード「おめえ、その長ったらしい髪切ってやれよ、可愛いそうだろ」

エオル「間違えられてんのは君だよ君！」

エリス「お前ら二人ともいい加減にしな、どう見たってアタシのこただろが」

追い剥ぎたちは武器を構えた。

「てめえら女と持ち物残らず置いてきな」

フィードはニヤリと笑ってボキボキと指を鳴らした。

フィード「何を言っていやがんだ、それはコツチのセリフだぞ？」

追い剥ぎたちの叫び声が辺りに響き渡った。

エオルはよしのを目隠しした。

エオル「見ないフリ見ないフリ」

ボロボロの姿で一ヶ所に集められ正座をさせられた追い剥ぎたちは、目の前で仁王立ちする赤い瞳に震え上がった。宣教師は慌てた。

宣教師「お追い剥ぎさんたちも、追い剥ぎするほど困窮している事情があるのでしょし、服さえ返してもらえれば……」

フィードは呆れたため息をついた。

フィード「事情があんのはこつちだっておんなじだろが」

宣教師「そそそれはそうですが、」

フィード「じゃあ何か？ テメエは金無くて飢え死にしてみいいつのか？ 他人はテメエのシカバネなんか見向きもしねえで踏み潰していくぞ？ ただのテメエ一人の自己満（足）じゃねえか」

フィードの脳天にエオルの手刀が降り注いだ。

エオル「言い過ぎ」

宣教師は気恥ずかしそうに笑った。

宣教師（確かにその通りですね、そしてこの方は）

「私のこんな生き方を、心配してくださっているのですね」

フィードは慌てた。

フィード「ち、違いデブハゲ！ 俺様はテメエのやり口が気に入らないから批判してるだけだ！」

エリスはニヤリと笑った。

エリス「要するに心配してるんだろ？」

フィード「違いつつってんだろクソババア！」

エオル「フィード、口悪いよー！」

ついにはフィードの怒りの矛先は追い剥ぎたちに向いた。

フィード「テメエら笑ったろ」

（笑ってねえー！）

フィードが再びボキボキと指を鳴らし始めると、追い剥ぎたちは同時にこう言った。

「盗ったものはお返しします」

――間――

綺麗に畳まれた黒のコートを両手で差し出し、法衣を身にまとった宣教師は深々と頭を下げた。

宣教師「色々ありがとうございます、おかげさまで旅が続けられます」

差し出されたコートを無造作に掴み、ふわりと羽織ると、フィードはフードを目深に被った。

フィード「コートを返してもらいたかったただ、礼言われる筋合いなんかねー」

エオルはヤレヤレと呆れた視線をフィードに向けた。

エオル「そこは素直に受け取っておきなさいよ……」

宣教師はフィードをジッと見つめ、右手を差し出した。

宣教師「貴方がたにお会いできてよかった」

フィードは握手ではなく、バシリと宣教師の手のひらを叩いてそっぽを向いた。

フィード「せいぜい野垂れ死なねようにな」

エオル「フィード！……すみません、普通人から誉められることなんてないもんだから照れてるみたいで」

宣教師は微笑んだ。そして最後にエリスを見た。

宣教師「私の話はあくまで私を感じたことです、あなたが今感じていることは私とは別かもしれない」

エリスは黙って宣教師の次の言葉を待った。

宣教師「どうか取り返しのつく道を選択できますことを」

エリスはニヤリと笑って葉巻を吸った。

エリス「えらそうに」

宣教師はポケットから何かを取りだし、丸めた拳をエリスに差し出した。エリスが受け取ったそれは、薄い紙に包まれた、ラムネ菓子。

エリスは怪訝そうに眉を寄せた。

宣教師「飲めばすべての罪から逃れられる薬だそうです、もし後悔したとしても貴女が苦しむことはありませんように」

そうして別れ、宣教師が見えなくなると、フィードはエリスの手のひらを覗き込んだ。

フィード「俺様ら、ラムネ菓子にはとことん”運がなくってな”」

エリスはラムネ菓子が包まれたままの紙をポトリと落とし、ヒールで踏み潰した。フィードはエリスの顔を覗きこんだ。

エリス「こいつは”免罪符”、最近南から入ってきた新手の魔薬さ、”触れ込み”のせいで神使教にまで流れてるらしいね」

エオル「触れ込みってさっきの……？」

フィードはまるで汚いものを見た後のように顔をしかめた。

フィード「”すべての罪が許される”」

葉巻の煙がふわりと舞った。

エリス「薬剤師から言わせれば、なんてことはない、ただの魔薬さ。どうにもならない現実から逃れたいやつが使うもんだ。……あたしは背負うけど、たとえどんな現実だろうと」

——パンゲア大陸 南東部 ファンディアス国 第一位の港町ファリアス

海から山が近く、丸い石畳が敷き詰められた坂の多い、潮風の香る町。古くから交易の中心地で、町は様々な文化の入り交じった歴史ある建物が並び、様々な国の船乗りたちが入り交じり活気がある。

子どもたちが駆け回り、主婦たちの井戸端会議が盛り上がり、オーブンテラスでコーヒー片手に新聞に目を通す老紳士の姿があり、豊かな町であることが見てとれた。だが町を一步二歩と薄暗い路地へ進むと、たちまち様々な国からやって来た”裏の世界”が顔を覗かせる――

「さてと」

落書きだらけの壁を背に、白と紺のボーダーのワンピースにツバの広い麦わら帽子の隙間から、まるで市場に並ぶトマトのような赤毛を靡かせ、深緑の瞳は目の前で自分を取り囲む屈強な男たちを捉えた。麦わら帽子から覗くその顔を見て、男たちは顔を見合わせ、ため息をついた。

「なんだ、ブスじゃん」

「ま、体は女なだけまだいいだろ」

「それもそうだ」

そうして再び視線を向けたワンピースの女は、ボキボキと指を鳴らしていた。そうしてニコリと微笑むと、口を開いた。

「一回ヤッ（殺っ）たら魔薬について教えてくれるんじゃないよね」

その女の雰囲気はただの素人ではないことが、町のチンピラとして日々悪行を重ねている男たちでも見てとれた。

路地裏の袋小路、その唯一の出口である路地に、男たちが目を向けたと同時に、袋小路に差す大きな影。影だけで、大男であることがわかった。

「リケはぐん、そろっそろええんちゃう？」

大男の低く厳つい声が袋小路にこだました。リケは麦わら帽子を脱

ぐと、クルクルと回した。

リケ「そうね、お願いするわ、トウジロウさん」

路地から現れたのは、想像以上に筋骨隆々とした大男であった。チンピラたちは身の危険を本能的に悟った。トウジロウはニヤリと邪悪な笑みを浮かべ、指を鳴らした。

――間――

トウジロウ「まさかツツモタセする側になるとはな」

リケ「それ、いつも引つ掛かる側だって言ってる？」

無抵抗であったため、赤毛の女の裁量で殴られることはなかったが、チンピラたちは袋小路の壁一列に肩をつけるよう指示された。チンピラの一人が言った。

「目的はなんだ！ 金か？ 魔薬か！？」

リケ「どちらでもないわ、あなたたちにはお願いがあるの」

予想外の返答に、チンピラたちはキョトンとリケを見つめた。

リケ「“免罪符”は知っている？」

「知ってるが、ウチは取り扱ってねえ」

リケ「であれば尚更丁度いいわ」

チンピラたちはますますリケたちの目的に予想がつかなくった。リケはトランプの魔導師バツチを取り出して見せた。

リケ「私たちはトランプから派遣されてきたの。”免罪符”の広まりを断ちたい、そのために、この町の魔薬業者たちに協力をお願いしたいの」

チンピラの一人が隙を見計らって逃げようとしたが、間髪入れずに

トウジロウの大きな手が頭を壁に押し付けた。そのチンピラは泣き声混じりに叫んだ。

「無茶言うな！ そんなことをして、うちのチームが”黒い三日月”に何されるか」

リケ「そんなことって？」

別のチンピラが、もう勘弁してくれという目でリケを見た。

「目立った行動”は目をつけられる、それだけだ。どのチームもあんたらの問いに対する答えは同じだぜ」

リケ「目立った行動？」 今流行りの魔薬”が流入してくることも目立った行動だと思うけど？ それを阻止しようと言っている私たちはその”黒い三日月”と利害が一致していると思わない？」

チンピラたちは首を振った。

「違う、”目立った行動”ってのはそういうことじゃあない」

リケは肩をすくめた。

リケ「わからないわ、どういうこと？」

「とにかく他を当たってくれ」

トウジロウは大きな欠伸をしながら背伸びをした。

トウジロウ「なにみすみす見逃してんねん、リケはぐん」

リケ「彼らの”日常”を無理矢理壊す権限はトランプにはないわ」

トウジロウ「俺やウランドのアホは手段なんぞ選ばへんけどな」

リケは呆れた、とため息をついた。

リケ「あなたたちは責任者の自覚をもちなさい！」

トウジロウはからかうように鼻で笑った。

トウジロウ「で？ お次はどないしはんのん、責任者様？」

リケは辺りを見回した。

リケ「まずは他を当たります、この町に魔薬業者はごまんというわ、数打てば当たる、そこから切り込む」

トウジロウは退屈そうに煙草に火をつけた。

トウジロウ「完っ全、諜報<sup>クラブ</sup>の仕事やんけ……」

リケはにっこりと笑ってトウジロウの鼻先に指先を突きつけた。

リケ「リーダー命令」

トウジロウはウンザリだと溜め息をついた。

ところが、何件、何十件と回っても、どの業者の答えは同じだった。

トウジロウはニヤリと笑って新しい煙草に火をつけた。

トウジロウ「姐さん姐さん、一個わかったことがあるなあ」

リケは皺の寄った眉間を摘まんだ。

リケ「黒い三日月」の存在が邪魔ね……」

ゴキゴキとトウジロウの指が鳴った。

トウジロウ「丁度後輩の仇やねん、その黒い三日月のアタマ」

リケ「ダメよ、私たちの職務外」

トウジロウ「なんでやねん、賞金ランクS以上やで」

ランクS以上からはトランプの検挙対象になる。

リケは真っ直ぐと、たしなめるようにトウジロウを見上げた。

リケ「今その職務に唯一就けるのは？」

トウジロウは舌打ちした。

トウジロウ「頭固いババアやの」

リケは肩をすくめた。

リケ「どうぞなんとでも」

トランプ本部 ハートのエース執務室

少し早めのノックの後、秘書は急いだ様子で執務室の扉を開いた。  
秘書「エース！ 外線で…… あ！」

デスクの椅子に深く腰掛け、肘掛けに頬杖をつくライトブラウンの  
癖っ毛にクロブチメガネの優男と、そのデスクの前で腕を組みた  
ずむウエーブがかった長い黒髪に褐色の肌の美女。

クロブチメガネは途中で話を止めた秘書に微笑んだ。

「話は終わったからいいよ、誰からの外線？」

褐色の肌の美女は秘書にニコリと微笑むと執務室を去った。

秘書「……クラブのエースからです」

秘書が指を鳴らすと、部屋の中にリケの声だけが響き渡った。

リケ『ハートのエース、お願いがあるのだけど』

いきなり話を切り出すリケ、急いでいる様子が伝わった。だがその  
急いだ様子に、まったく気に止める様子もなく、ハートのエース、  
ウランドは口を開いた。

ウランド「お疲れさまです、クラブのエース、聴けるお願いであ  
れば対応いたしますが」

リケ『ファリアスの魔薬業者の案件、残っていたわよね？』

ウランドは腕組みし、足を組み替えた。

ウランド「黒い三日月のリーダーの件ですか？ ええ、まあ……別  
案件が立て込んでいて、まだ手をつけていません……それがそちら  
と何の関係が？」

トウジロウ『グダグダぬかしてないでとつとやれや』

突然、雷のような厳つい声が降ってきた。秘書は飛び上がったが、ウランドは慣れたように平然としていた。

ウランド「お前とこうして無駄話してる間に案件一つは潰せてるよ」

トウジロウ「なんやとコラア！」

リケ「ケ・ン・カ・は・あ・と・に・し・て！」

組んだ手足を忙しくブラブラと動かしながら、ウランドは窓の外を見た。

ウランド「そちらの案件とどのように関わるか教えていただけますか？ それによってプライオリティの変更を検討します」

トウジロウ「お前なー」

リケ「“免罪符”の動きを把握する必要があるわ、そのために町の魔薬業者たちに協力を仰ぎたいの、けれども誰も彼もが“黒い三日月”を恐れて協力を拒むのよ」

デスクに頬杖をつき、パラパラと机に積み重なった書類をめくりながら、ウランドはニヤリと笑った。

ウランド「なるほどつまり」

トウジロウ「ジャマや、その黒のなんたらが」

リケ「黒い三日月だってば……」

ウランド「……一案件としてはプライオリティは低いですが、そちらの緊急性もあくまで意図した捜査方法の障壁になっているというだけですね」

トウジロウ「ハアア!?!」

リケ『……まあ、そうね』

再び背もたれに背中を預けると、そのままギコギコと椅子の足の半分を浮かせて椅子を前後に揺らした。そうしてそのまま、遠くの町の音を伝えようと天井付近を舞っている風の精霊を見つめた。

ウランド「けれど、今回の”特別体制”の観点からは、早々に退けるべき障害物ですね」

確かに一案件としては優先度は低い、他に優先すべき凶悪事件は山ほどある。だが、今のこの体制は対W・B・アライランスのもの。

”本物のギルティン”を知る彼らの情報を得るために、逆に彼らに接触した可能性のある”本物のギルティン”を捕えることも有効だ、とウランドは考えた。本物のギルティンと、W・B・アライランス、どちらを先に捕えても、どちらかにつながる可能性は大いにある。どちらも、特別体制で他案件とは外だしにされている特別な案件である。それがウランドの発言の意図だった。

トウジロウ『おっ！』

ウランド「プライオリティは変更します」

トウジロウのイライラとしたわざとらしい溜め息が聞こえた。

トウジロウ『せやから、いつやんねん』

ウランド「わかったから少し待ってろ」

リケ『悪いけどなる早でお願い』

ウランドの返事を聞く前に、風の向こうの音は途絶えた。

ウランドは肩をグルグルと回し、立ち上がった。

ウランド「キングに報告してくる、取り次ぎありがとう」

秘書はジトリとウランドを見つめたままだった。

ウランド「何？」

秘書「最近、多いですよね」

ウランド「何が？」

秘書は冷ややかな視線を向けた。

秘書「グウェン中佐と一緒のところ」

ウランドは一瞬ぎよつとした顔をした後、ヤレヤレとため息をつきながら頭を掻いた。

ウランド「厄介な案件がらみで一緒に仕事したからその後処理で機会が多いだけだよ……今は別の案件の指示を出していたところ。全然おかしいことなんてないよ？」

秘書「別の案件……ですか？」

ウランドは執務室のドアノブに手をかけた。

ウランド「W・B・アライランスの居所に関するタレコミがあった。

彼女にはその調査を担当してもらおう」

## 25・finding wish（後書き）

さて、徐々にファリアスの街に役者がそろいつつあります。  
リケ&トウジロウ、ウランド、次に町にたどり着く役者は……？

次回は10/8に25・1話、trick beatシリーズを更  
新予定です。

## 25・i・t r i c k b e a t―びょうきになったかげ1―（前書き）

グランドゼン  
”最強の七人の魔導師”召集の命に就いたシェン。

そのうちの一人、”共食い”グレンに接近するために、吸血鬼排他主義団体”ヴァンピール”の本部に向かう、シェンたちは……？

## 25・i・t r i c k b e a t―びょうきになったかげ1―

リンリン「モリンジ、お手！」

リンリンの差し出した妖精サイズの小さな手のひらに、大きな狸の鼻先が触れた。

リンリン「違うってばあ！」

一人騒いでいるリンリンを横目で見ながら、白髪に蒼白い顔の草臥れた男、ジェフは欠伸をした。

ジェフ「あー、名前つけたのか？ もうお前のペットにしちまえよ、妖精」

リンリンは目の前の狸の化け物に目を向けた。疎らに生えた黒い体毛の、大人の男ほどの体長にぼてっと出っ張った白い腹、飛び出したまんまるの目に、突き出した鼻と大きく裂けた口。

リンリン「……よく見たらかわいいかも？ ねえー、シェン」

前を歩く真っ赤な中華服に赤茶色のツンツン頭は振り返えろうとしなかった。

シェン「ダーメツ！ そんなデカイペットは飼えないよ」

リンリン「見てみてよー！ かわいいよー」

シェン「……みない」

ジェフは眉根をよせ、小声でシェンに尋ねた。

ジェフ「どうしたんだー？ 急に愛想悪くして」

シェン「だって……、”もりんじ”なんて名前、ちょー可愛いじゃん」

ジェフ「は？」

シェンは顔を覆った。

シェン「ダメだ、誘惑に負ける、俺だってホントはモリンジのやつ

を飼いたいさ！ 助けて、ジェフ」

ジェフはため息をついた。

ジェフ「知らねえよ……」

二人の会話など聞こえないリンリンは頬を膨らませた。

リンリン「シェンのけちゃんぽ」

山深い山中。鬱蒼と生い茂る木々。太陽は大分高く上っていたが、薄曇りで、木々の下は少し暗かった。ひんやりとした緑と土の匂いが心地よい。

黙々と歩みを進め、暫くすると、樹齢何百年だろうか、一際大きな木が見えた。

リンリン「わあ！ おじいちゃん木だ！ こんにちはわ！」

ジェフは笑った。

ジェフ「不思議ちゃんってやつ？ 初めて見た」

リンリンはジェフの頭をぽかぽかと殴った。

リンリン「ちーがーうーわっ！ 妖精はあんたみたいなデカイだけのボンクラと違って木霊と話が出来るのよっ！」

ジョリジョリと顎を擦り、ジェフはニヤニヤと笑った。

ジェフ「へえ、木霊って、樹木の魂みたいなやつだろ？ お前、生意気だけど結構不思議な存在だな……ようはやっぱり不思議ちゃん」  
リンリン「ばーかばかー！」

シェンは突然二人の話題にしていた大木に向けて走り出した。

リンリン「もーっ！ あんたがしつこく話しかけるからシェンがヤキモチ焼きちゃったでしょっ」

ジェフ「……ちげえ」

ジェフも走り出した。

リンリン「えっ！？ 何々っ！」

ジェフ「誰か倒れてやがる」

——遠目では見えづらいが、あのクリーム色のローブは、ヴァンピールの団服！

一番に駆け寄ったシエンは目を細めた。クリーム色のローブから覗く血色の悪い白い肌、殆ど白に近いブロンド、その少女はまるで刑務所で出会った女吸血鬼”女王蜂”を彷彿とさせた。

少し遅れて駆け寄ったジェフの声は少し上ずっていた。

ジェフ「エミリー！？」

シエンは空を見上げた。

シエン「知り合い？」

ジェフ「ああ、最近入団した娘だよ、”半吸血”に”なったばかり”で、まだ本部で療養中のはずだ」

エミリーを抱き上げようとしたジェフの手はピタリと止まった。エミリーの体はまるで蜃気楼のように、”そこに確かにあるのに触れられなかった”。

ジェフは自分の手とエミリーを交互に見た。

ジェフ「あ？」

シエンは空を見上げたまま、口を開いた。

シエン「……”魂体”だよ、生身じゃ触れられない」

ジェフ「なんだそりゃあ」

シエンはリンリンに大きな目の葉を取ってくるように指示し、自身の赤い中華服を脱ぐとエミリーに被せた。

シエン「魂だけの状態、このままだと天使に喰われちゃう」

ジェフは空を見上げた。なるほど、”白い羽の化け物”が上空を旋回している。

シエンはエミリーに被せた中華服を少し捲るとエミリーの顔を見つめた。まだあどけなさの残る少女だった。

シエン「オマケに”魂”がない、それも探して肉体に戻さないと」  
ジェフ「ハク？　なんだそりゃ」

シエン「生き物って、精神体である”魂”と、魂と肉体を仲介する”魄”、そしてそれを入れる器である”肉体”で構成されてるんだ、どれも不可欠。”魂”って、さっきリンリンと木霊の話してたら？

あれと同じ」

ジェフはエミリーに目を落とした。

ジェフ「木霊は見えねえのに人間のは見えんのか？　つーかお前の服はなんでエミリーに触れられる」

シエン「俺はもともと見える体質だけど、多分ジェフにも見えるのはこの老木の霊気のせいだろ。あと、この服は道士のモンだからさ」  
ジェフは頭を掻いた。

ジェフ「……なんか急にオカルトだな」

シエン「魔法圈だとそう感じるかもなあ、神使教からすれば、オカルトでもなんでもない、実際に起こってる”現象”だけだね」

ジェフ「……お前、やっぱ道士なんだ？」

シエンは笑った。

シエン「違うよ、知り合いに道士はいるけど、にわか知識だよ」

遠くでリンリンの甲高い声と、リンリンの後を追いかけるモリンジの足音がした。

リンリン「シエン！　葉っぱ取ってきた！　これなら十分じゃない

？」

リンリンは自分の背丈より高い縦長の葉を抱え、よろよろとシェンの肩に着地した。

シェン「ナイス！ リンリン」

シェンは指先を噛み血を出すと葉に模様を書き始めた。——その時だった。

リンリン「わーっ！ こら、モリンジ！」

モリンジは以前シェンに変身して見せた変身能力でエミリーと瓜二つの姿となった。モリンジが読み取ったエミリーの姿はどこか内気そうな、それでいて神経質そうな印象の少女であった。

エミリーの姿であるモリンジはエミリーを見つめた。

ジェフ「そっか、こいつは記憶も読み取るんだっただな……おい、化け狸、エミリーに何があつた？」

リンリンはジェフの頬を引っ張った。

リンリン「モリンジだって言ってるだろーっ！」

ジェフ「いてて……わかったからちよつと待てって……」

突然、モリンジの肩が震えた。

ジェフ「おい？」

シェン「おい、エミリー、わかるか？」

振り返ると、魂体のエミリーがムクリと起き上がっていた。目を擦り、目の前の自分と瓜二つの姿をしたモリンジを見つめた。魂体のエミリーは見た目の印象からは想像もつかない邪悪な笑みを浮かべた。

エミリー「こんなところにいたの？」 エミリー「」

シェン「ん？」

すると、エミリーはモリンジ目掛け走り出した。

シェン「待て、エミリー、それはお前の肉体じゃない！」

エミリーの魂体はエミリーの姿をしたモリンジを抱き締めるようにスウと消えた。その途端、モリンジはエミリーと同じ金の髪を振り乱し天を仰いだ。

モリンジ「アハハハハ！ アハハ！ やつと肉体を手に入れた！」  
響く少女の笑い声。

ジェフ「なん、」

シェンはまずい、と頭を掻きながら中華服を羽織った。

シェン「やべえ！ エミリーの魂体がモリンジの肉体を乗っ取っちゃった」

ジェフはもう訳がわからないと頭を押さえた。

ジェフ「乗っ取ったとか、悪魔じゃあるまいし」

モリンジは指を差して更に笑った。

モリンジ「エミリーって、誰だよバァーカ」

シェンは子どもをあやすようににこりと笑った。

シェン「ん？ じゃあお前、モリンジか……？」

モリンジの目は青く光り、広げた白い細腕は、みるみる、病的な蒼白さを増していった。そして、背中から広げられた蝙蝠の羽。

ジェフはサーベルを取り出した。

リンリン「ちよっと！？ モリンジ傷つけないでよ！」

ジェフの瞳も赤く光り出した。

ジェフ「……ありやあダメだ、”吸血鬼化”してやがる」

モリンジは金の髪をかきあげた。

モリンジ「アタシは”アズ”、エミリーはもうこの世に存在しない」  
ジェフ「アズだかなんだか知らねえが、吸血鬼は殺す」

## 25・i・t r i c k b e a t―びょうきになったかげ―（後書き）

なんだかごちゃごちゃですが、

モリンジ（24・X話の狸の魔物）がエミリーに変身。

魂体のエミリーがエミリーに変身したモリンジを乗っ取り、

「アズ」と名乗っている、

というややこしい状況です。

はたしてアズは何者で、本物のエミリーはどうなっているのか？

次回は10/14、25・2話更新予定です。

25・2・trick beat―びょうきになったかげ?―（前書き）

24・x話であつた狸の魔物”モリンジ”

道中であつた”魂だけの”少女、”エミリー”は、変身能力でエミリーの姿に変身したモリンジを自分の肉体と勘違いし乗っ取つてしまった。

そしてエミリーは自らをアズと名乗り、その体はみるみる吸血鬼と化していった。

有無を言わさず件を構えるジェフに、シェンは……！？

## 25・2・trick beat―びょうきになったかげ2―

薄曇り。山深い山中。年月を重ねた大樹の木陰。揺れる疎らの木漏れ日。響く少女の声。

ジェフは少女に向け、サーベルを構えた。リンリンはシェンの髪を引っ張った。

リンリン「シェン、止めて！」

シェン「……ジェフ！ モリンジはエミリーの記憶から姿を真似てるだけだ！ エミリーの魂体は然るべき場所に戻さないと、」

ジェフは地面を蹴った。同時に、シェンは赤い棍を取り出した。少女はシェンを睨んだ。

少女「アタシはアズだって、言ってるでしょう？」

サーベルが、ジェフの手首を切り裂いた。

ジェフ「血刀術」

ガキーン……！

拮抗する金属の摩擦音。ジェフの前に立ちほだかり、サーベルを受け止める赤い棍。

ジェフ「何しやがる」

シェン「落ち着けて！ 話を、」

ジェフ「吸血鬼は根絶やす」

ジェフは一步前へ踏み込んだ。体重のかかったサーベルにのし掛かれた棍は僅かにバランスを崩した。ジェフはそれを見逃さなかった。

ジェフ「ヴァンピール」の掟だ、覚えとけ、新入り」

振り払われたサーベルにいなされ、シェンは横に倒された。

リンリン「シェン！」

モリンジの体を乗っ取った”アズ”は蝙蝠の羽を羽ばたかせた。  
ジェフ「逃がさねえ、”螺鈿”！」

”半吸血”であるジェフの血にまみれたサーベルから振り払われた血液は、針となって上空を羽ばたきかけたアズに襲いかかった。

アズの思い通りに体が動けば、避けられるはずだった。だが、襲い来る赤黒い針に、モリンジの体が恐怖した。アズの意味に反して、体が震え、硬直し、動かない。

シェン「マジックワープ  
”時空扉”」

身構えるアズの目の前に黒い煙が渦を巻き、血の針はそのまま吸い込まれた。だが、黒い渦の範囲からはみ出して位置した蝙蝠の羽は幾つか血の針が貫通し、アズはバランスを崩して転落した。

砂煙をあげ、スライディングしたシェンによって間一髪アズは受け止められた。蝙蝠の羽の穴の空いた部分は、みるみる灰になって広がってゆく。

リンリン「モリンジ！」

ジェフ「畜生、なんだ今の黒い渦は！」

駆け寄ったジェフはサーベルを構えた。シェンはアズを跨ぐように

地面に両手をついた。

ジェフ「何のつもりだ」

落ち着かせるように、だがわざとらしくならないよう、シエンは低く落ち着いた声でゆっくりと喋った。

シエン「肉体はモリンジのだよ、殺せば本部にモリンジの件を”問いただす”証拠がなくなる、けど、今ちょうどエミリーの魂体の器になってくれている、このまま本部まで運んで、魂体はエミリーの肉体に戻そう、すべてはそれからだ」

ジェフは舌打ちをして構えていたサーベルを肩に担いだ。リンリンの泣きそうな声が響いた。

リンリン「シエン！ モリンジがあ！」

蝙蝠の羽に開いた穴はみるみる灰となつて広がっていく、なんの装備もない今の状況では、穴の広がりを止めるには、羽を切り落とすしかなかった。

リンリン「そのアズとかいう子の魂体取り出せば、止まるんじゃないの！？」

ジェフ「じゃあどうやって持つて行く？ その”コンタイ”のまま暴れたり逃げられたら、触れねえからどうにもしきれねえぞ」

リンリン「シエン！ さっき何か葉っぱに文字を書いていたよね！」

シエン「魂体に触れられるようにする道術だよ、けど、魂体ってデリケートだし天使たちも集まり始めてる、できればそんな道術使うよりもキッチンと”器”に入れたほうが安全だ、モリンジには痛い思いをさせちゃうけど、このまま行く」

リンリンは泣き叫んだ。

リンリン「そんな女よりモリンジ！」

シエン「だーめ、ここは俺の言うこと聞いて」

降り下ろされるサーベル、切り落とされた羽。

ジェフ「グダグダうつせえ……こうすりやあいんだろ」

出血はあまり無かったが少しずつ赤い染みがクリーム色のローブに広がっていった。ジェフはサーベルを鞘に納め、頭を掻きながら歩き出した。

リンリン「モリンジ！　うわあぁん！」

泣きじゃくるリンリンを頬に寄せ、ぐつたりと意識の戻らないモリンジを背負うと、シエンはジェフの後を追った。

数時間歩くと、目の前に巨大な岩壁が広がった。上を向くと霧に隠れて天辺は見えない。

ジェフ「せいぜい、その化け狸の”器”、落とさねえことだな」  
そう一言だけ言うと、ジェフはほぼ垂直の絶壁を登り始めた。

リンリン「なにあの言い方！」

シエン「え？　言い方？　なんかおかしかったか？　モリンジ気遣ってくれるなんて、いいヤツじゃないか」

リンリンは頭を押さえてため息をついた。

リンリン「シエンのばか……」

シエンはほどいた腰布でモリンジの体を固定すると、ジェフに続いて岩壁を登り始めた。数十分は登っているだろうか、やがて辺りは濃い霧に包まれ、視界は一メートル前もままなくなかった。

どのくらい登ったのかわからないまま、ようやく手をついた地面に、ゆっくりと少女の姿のままのモリンジを横たえた。

絶壁の頂上かと見上げた空は陰っていた。どうやら、絶壁の途中の洞穴のようだ。洞穴といっても、天井まで四、五十メートルはある、かなり巨大な穴だった。

少し離れたところで、絶壁に足を投げ出し、腰かけていたジェフが言った。

ジェフ「ようこそ、”ヴァンピール”本部へ」

振り向くと、洞窟の天井には白い繭のような、巨大なかまぐらのような、ドーム状の建物がいくつもぶら下がり、窓のような穴がポツポツと開けられ、中には人影が見える。

まるでそこは、上下が逆さまの町だった。

25・2・trick beat―びょうきになったかげ?―(後書き)

ついに到着。”ヴァンピール”本部。

シェンはアズ、エミリー、モリンジを救うことはできるのか!?

次回は10/21 25・3話更新予定です。

25・3・trick beat―びょうきになったかげろ―（前書き）

ついに吸血鬼排他主義団体”ヴァンピール”本部に到着したシェン  
たち。そこに待ち受けるのは……？

## 25.3・trick beat―びょうきになったかげ3―

濃霧に包まれた岩壁の中腹。巨大な洞穴。天井にぶら下がるいくつものかまぐらのような真っ白い建造物――吸血鬼排他主義団体”ヴァンピール”本部。

ジェフの存在を確認出来たためか、”かまぐら”の一つから縄梯子が降ろされた。ジェフはニヤリと笑った。  
ジェフ「まだ下ろすには早かったな」

シェンは自分の脇に横たわるエミリーの姿のままのモリンジに目を落とした。背負って岩壁を登るために、おんぶ紐のように結んでモリンジの体を固定していた腰布を、たった今、ほどいたばかりだった。シェンは腹を抱えて笑った。

シェン「アハハ！ ホントだ！」

リンリンはため息をついた。

リンリン「いじわる言われてるんだってば……」

”かまぐら”の中はシンプルな外観とは打って代わり、アンティークの調度品やソファなどが並べられた、まるで洋館の応接間を思わせる内装だった。そして、そのような内装に不釣り合いな、クリーム色のローブに身を包んだ男たちが、シェンたちを迎えた。シェンはニカリと屈託なく笑った。

シェン「どうも」

シェンの背中に背負われている少女の、そのエミリーと瓜二つの姿にクリーム色のローブの男たちは心底驚いた様子だった。

「エミリー!?」

「なぜ、さつきまで、」

「いや、これがドッペルゲンガーだろう」

”ドッペルゲンガー”という単語に、シエンはピンと来るものがあつた。

シエンの故郷、桃花源国では”離魂病”という。

”魂”はストレス等で分離（例えば多重人格）しやすく、また統合を繰り返す不安定なものだが、通常”魂”は”肉体”との繋ぎ目である”魄”にぶら下がったまま、離れることはない。それが何らかの拍子に”魄”から剥がれ、肉体の外に飛び出した状態になることがある。飛び出した”魂”を取り戻そうと”魄”が繋ぎ目を肉体外に伸ばし続けると今度は”魄”と”肉体”との繋ぎ目が剥がれてゆき、やがて肉体・魄・魂がバラバラになる。徐々に魄が肉体から剥がれていくことから、ドッペルゲンガーを見ると衰弱して死ぬと言い伝えられている。

”魂体”だけ飛び出ている状態、というのはそれだけではなくいくつか原因は考えられるが、つまりは、今回エミリーが”魂体”だけだったのは、そういうことなのだろう、それがシエンの”ピンと来た”の意味だった。そしてこの”魂体”が自らをエミリーではなくアズと名乗っているということは、エミリーは少なくとも二つに魂が分離している二重人格者で、エミリーでないほうの魂が魂魄剥離を起こしているということが推測できた。

同時に、シエンはマズイとも思った。桃花源国では”離魂病”の治療は道士が行う。逆に魔法圏では魔法で治療不可能の不治の病とされている。道術のにわか知識があるとはいえ、シエンには魄を肉体に戻す正式なすべは持ち合わせていなかった。魄が肉体から剥がれる前に、アズを戻す必要があつた。いや、もしくは、もうすでに”魄”もはがれてしまっている状態かもしれない。一刻も早く、エミリーの容体を確認しなければならない。

シェン「エミリーの本体はどこすか？ 元に戻さないと……」

クリーム色のローブの一人が何を言っているんだ、といった風に反論した。

「ばかいえ、ドッペルゲンガーを見た本人は死ぬんだぞ」

シェン「それは違います、死ぬ前に戻せば……」

まさか、自分の所属している組織までもが、ドッペルゲンガーなどという”オカルトな”話をしていることに、ジェフはついていけないと眉間を押さえた。とにかく、話を順序立てるべく、今のこの展開をぶった切ろう、と考えた。

ジェフ「あー……紹介が遅れてすみません」

その場の一同がジェフに注目した。ジェフの視線は、丁度部屋の奥のドアから出てきたスーツの男に向いていた。5、60代くらいのその男は、切り揃えられたチョコレート色の口髭に、濃いクマの刻まれた窪んだ瞳、後退した広い額の蒼白さはどこか不気味ささえ感じられた。男はニコリとも笑わずシェンの背中のエミリーをチラリと見た。

ジェフ「すでに”伝書蝙蝠”で報告してますけど……あー、例の、グレイ氏の重要情報を持っている新入りです」

ジェフは不器用に手のひらでシェンを指し示した。シェンは「どうも」急かすように、短くニコリと愛想笑いをした。口髭の男は部屋の中央にあるソファに促した。

シェンは一番長いソファに、エミリーの姿のモリンジを横たえ、自分はソファの縁に腰かけた。口髭の男は対面のソファに腰掛け、

右手を差し出した。

「代表のリチャードだ、ようこそ、”ヴァンピール”へ」

シエンは握手に応じた。

シエン「シエンです、お役にたてたら光栄です、ところで」

シエンはソファに横たえたモリンジに目を向け、肩をすくめて首を振って見せた。

シエン「グレイ氏についてお話しする前に、いろいろ聞きたいことがあります、順を追って質問させてください」

リチャードは背もたれに身を預け、肘掛けに頬杖をついた。短く「そうだな」とだけ返すリチャードの様子に、シエンは違和感を感じた。

”二人目”のエミリーが目の前にいるのに、あまり驚いた様子が見られなかったからだ。その様子はまるで、”何か”をわかっていう風であった。

シエン「ここに来る途中、人の記憶を読み取って応用し、幻術や変身能力を駆使して人を騙す魔物に会いました。その魔物は”ヴァンピールにいた」と訴えていました、ご存知だったりしますか？」

ここではぐらかすようであれば、ソファに横たわるモリンジを証拠として突きつけるつもりだった。だが、リチャードの回答はそんなシエンの想定をあっさりとひっくり返した。

リチャード「狸の化け物のことか？ ああ、確かに研究に使っていたが、用済みになったので山に放した」

全く悪びれる様子もない、それはまるで生態系を壊すようなペットを、手に負えなくなったという理由で捨てる無責任な飼い主そのものだっただけだ。

シエン「研究……？」

リチャードはシエンの腰かけるソファの脇に立っていたジェフを見上げた。

リチャード「喜べ、ジェフ、もうじき”人化の術”が完成する」

ジェフは目の前のソファの背もたれに手をかけ、前のめった。

ジェフ「本当ですか！ あとどれくらいです！？」

シエン「人化の術？」

単語から、ジェフたちの今の”半吸血状態”を、もとの人間の状態に戻す予定であることが推測できた。リチャードはジェフに意味深に笑むと再びシエンに視線を向けた。

リチャード「我々は吸血鬼を狩る者だ、だがそれに”半吸血の悲劇”は付き物……」

シエンはすぐ後ろに立つジェフに目を向けた。

シエン「半吸血の悲劇って？」

ジェフ「……半吸血ってのは人間だった部分と、吸血鬼になった部分が混在している状態らしい、半吸血が死んだらどうなるか知ってるか？」

シエン「死んだら？ なんかなんの？」

ジェフは自分の行く末を見ているかのような、そこにはない別のものを見ているように中空を見据えた。

ジェフ「吸血鬼になるんだよ、”ヴァンピール”に狩られる側にな」

シエンは少しの間固まり、よくわからないと顔をしかめて聞き返した。

シエン「自分たちで自分たちを狩るって言ってるよね？」

リチャード「それが”半吸血の悲劇”、そしてそれを食い止めるため、私は何百年も”人間に戻るすべ”を研究してきた」

シエン「……その研究が人化の術……」

シエンは何かを考えながら返答しているようだ、とリンリンは感じた。

リチャード「完成すれば、吸血鬼の増加もいずれは打ち止めになる、そうすれば、数を減らしてくれているグレイ氏も不要だ」

シエンは考え事をしながらふんふんと聞いていたが一瞬はたと停止した。考え事をしていて危うく聞き逃すところだった。

シエン「……いま、なんて？」

リチャードは無表情に足を組み替え、腹の上で手を組むと、見下ろすように顎を上げた。

リチャード「グレイ氏は不要だ、人化の術が完成すれば」

シエンはあちゃーと頭を押さえた気分だった。

シエン（……マジですかい……）

ジェフ「完成はいつです？」

リチャードは遅れて出されたコーヒーを一口含んだ。

リチャード「いろいろな魔物の特殊能力を組み合わせ、被験者エミリーくんの体から、吸血鬼部分を魂体として取り出すことに成功した」

ジェフとシエンは同時にソファに横たわる”アズ”に視線を向け

た。

リチャード「だが管理の不備で”使用済み”の魔物だけでなく、その魂体まで逃げ出してしまつてな」

リンリン「しつ使用済み！？　なんてこと言うんだよっ」

リチャードは噛み殺すように笑った。

その時だった。リンリンに伸びる白く小さな手。

リンリン「むぎゅっ！」

”アズ”の蒼白い手がリンリンを驚掴みにし、そのまま壁際に逃げるようにかけ寄った。

リチャードの蒼白い人差し指が”アズ”を捉えた。

リチャード「エミリーの”吸血鬼部分”を殺せば人化の術は完成だ」

アズは金切り声混じりに叫んだ。

アズ「あたしは死にたくない！」

25・3・trick beat―びょうきになったかげ3―（後書き）

人間が半吸血になる契機は次回！

人間に戻りたい半吸血たちの夢、人化。その夢をかなえるためには、アズが殺されなければならない！？ どうするシェン！

次回は25・4話！ 来週10/28更新予定です。

25・4・trick beat―びょうきになったたかげ4―（前書き）

リンリンを人質にとったアズ。

アズを殺し、人化の術を完成させたいリチャード。

人間に戻りたいジェフ。

はたしてシェンはどうするのか？

## 25・4・trick beat―びょうきになったかげ4―

吸血鬼排他主義団体”ヴァンピール”本部 応接間

部屋の中央に配置されたアンティークのソファ。足を組み悠然と座するスーツの男、ヴァンピール代表のリチャード。対面のソファにはシェン、その後ろにはジェフ。それを取り囲むようにソファの周りに立つ複数のヴァンピール幹部。一同の視線を集める壁際の”アズ”、そしてその手には――

リンリン「握りしめないでよっ！潰れちゃうでしょっ！」

アズは人質として掴んだ妖精を、リチャードに翳した。

アズ「このまま逃げさせて貰う」

リチャードは笑った。

リチャード「人質をとったつもりか？」

シェン「いやいや、人質でしょ！」

ジェフはサーベルを抜いた。リチャードは手のひらを向けてジェフを制止した。

リチャード「お前はすべての”半吸血”の夢を背負い、死ぬために生まれてきたのだ」

アズは首を何度も横に振った。その頬を涙が伝った。

アズ「いやだ……いやだ……」

シェン「ちよっとタンマ！」

場の一同がシェンに注目した。

シェン「アズを殺しても、エミリーの”魄”は欠けた部分を探し続ける、魄が肉体から剥がれれば、結局エミリーも死ぬ、意味がない」

クリーム色のローブの男たちはザワザワとざわめき始めた。リチャードの声は低かった。

リチャード「私の理論をお前の訳のわからない”推論”で貶すつもりか」

シェンは呆れたように笑った。

シェン「いやいや、推論はそっちでしょ？」

リチャードもまた笑った。

リチャード「確かにその通りだ、”まだ”証明できてはいないな

……ジェフ！」

ジェフ「あー、はい」

リチャードの蒼白い指がジェフの手にしていたサーベルを指した。リチャード「その剣で私の理論を証明しろ」

シェン「ダメだ、ジェフ、エミリーが死んじゃう」

困った、とジェフは頭を掻いた。

ジェフ「しかし代表、本当にその桃花源人の言うように、エミリーも死んでしまうかも知れませんよ」

リチャード「エミリーくんはほんの少しの可能性でも賭けたいと自ら被験者に志願した、お前はその可能性を潰すつもりか？」

シェンは一呼吸も入れずに反論した。

シエン「その理論に人化の可能性なんてないよ」

リチャードは鼻で笑った。

リチャード「お前はファンであるグレイ氏を用済みにされるのが困るからそんなことを言っているだけだろう」

ここに来て、取り入るための”グレイのファンである”という発言が裏目に出てしまった。よくよく考えれば”ヴァンピール”は吸血鬼に恨みを持ち、狩る団体だ。いずれはグレイも狩る対象になるということは十分想定できたはずだ。もう少し考えればもっと良い方法があつたはずだった。シエンは自分のやり方を少し後悔した。

当然、人間に戻って、吸血鬼を根絶やしにしたい”半吸血”たちにとって、リチャードの発言はシエンの意見を疑わせるのに十分であつた。

ジェフはエミリーにサーベルを構えた。

シエン「ジェフ！ やめろ！」

ジェフはシエンに見向きもしなかった。

ジェフ「……お前にはわかんねえよ、人間」

リンリン「やめて！ モリンジを殺さないで！」

その時だった。ゴキゴキと骨がこすれる音を鳴らし、金の髪の少女の姿は、元の狸の化け物の姿に戻った。

ジェフ「は？」

シエンは窓の縁に飛び付き、外を見た。

シエン「”アズ”が乗っ取りを解除したんだ！」

リチャードはため息をついた。  
リチャード「また逃げられたか」

窓の外——霧に包まれた岩壁の洞穴は薄暗く湿っており、天井には無数の蝙蝠が、床には多くの昆虫や爬虫類が生息していた。アズの姿が見えないのは薄暗さのためか、それとも、

シエン「……もし他の生き物を”乗っ取”ってたら、もう見分けがつかない」

ジェフも窓の縁に手をかけた。

ジェフ「野放しはマズイ、誰かを”吸血”なんてしたら……」  
リチャード「新たな”<sup>なかま</sup>半吸血”の出来上がりだな」

何呑気なことを言っているんだ、とジェフは心の中でため息をついた。

ジェフ「代表、”アズ”を探し出す方法、何か無いんですか！」  
リチャードは口髭を撫でながら黙り込んでしまった。  
ジェフ（おいおい……）

シエン「……すごく危険だけど一か八か方法がある」

ジェフ「なんだ？」

シエンは腰に手を当てた。

シエン「魂体の居場所がわかるのは”魄”だけだ」

ジェフ「……まさか」

自らの手のひらを見つめながら、シエンは答えた。

シエン「エミリーの”魄”に探させる」

リンリン「エミリーって子から”魄”を剥がすって言うてる！？  
そ、そんなことしたら死んじゃうよ！」

ジェフ「お前が恐れている事態じゃねえのか？」

シエンは苦笑した。

シエン「死”ってのは肉体が致命傷を負い、魄魂との結合部分がなくなることだ。けど……平均3分、魄と肉体は剥離状態を継続できるって言われてる。それまでにアズを探す」

あきらかに無茶な制限時間だった。それは、発言したシエン自身十分わかっていた。だが、これしか方法はない。シエンは汗に濡れた拳を握りしめた。

シエン（考える……3分以内で、アズを探す方法……）

リンリンは額から汗が伝うシエンの横顔を黙って見つめていた。

リチャードはさも興味がなさそうにソファにもたれかかり、足を組み替えた。

リチャード「探して、当然殺すのだろうな？」

シエン「だーから！ ダメだって言うてるでしょ！」

リチャードとシエンの間にバチバチと火花が散っているようだった。

ジェフはガシガシと頭を掻き毟った。

ジェフ「ああもう、とにかくエミリーのところへ行くぞ！」



25・4・trick beat―びょうきになったかげ4―（後書き）

シエンはどうするのか？

シエンを見つめるリンリンは何を思っているのか？

リチャードとシエンの意見に板挟みのジェフの選択は？

リチャードの願いはかなってしまふのか？

そして、エミリーとアズの運命は？

次回は11/4 25・5話更新予定です。

25・5・trick beat―びょうきになったかげ5―（前書き）

半吸血の少女エミリーから分裂し、逃げた吸血鬼”アズ”を追うため、エミリー本人に会いに来たシェンたちは……

## 25・5・trick beat―びょうきになったかげ5―

まるで何事もないような、安らかな寝顔だった。

霧に包まれた岩壁の中腹にぽっかりと空いた洞穴。洞穴の天井に張り付くように、いくつもの”かまくらのような”白いドーム状の建物が並ぶ――吸血鬼排他主義団体”ヴァンピール”本部。

いくつかの”かまくら”を経由してたどり着いたその部屋は、子ども用の可愛い壁紙に大量のおもちゃやヌイグルミが散乱し、その奥の天涯付きの子ども用の小さなベッドには、最早サイズの合わない体を猫のように丸くして寝息をたてる少女の姿があった。

おそらく14、15歳程であろうその少女の年齢と部屋の印象はあまりに不釣り合いだった。そのアンマッチな雰囲気、リンリンは思わず呟いた。

リンリン「なに、この赤ちゃんみたいな部屋……？」

ジェフは心底面倒臭そうに盛大なため息をついて、苦いものを食べたかのように顔をしかめた。

ジェフ「親が過保護過ぎなんだよ……」

「うちの娘に何か用ですか」

低い女の声。エミリーの眠るベッドの前に立ち塞がるように、30、40代ほどの女が姿を現した。女には、どこかエミリーの面影が垣間見えた。

リンリン「もしかして、エミリーのお母さん？」

女はリンリンを睨み付けた。

「娘をどうするつもり、何しに来たのよ!」

ジェフ「落ち着いて、お母さん」

「あんたにお義母さんと呼ばれる筋合い無いわ! この悪虫め!」  
すべてを娘に関連付ける被害妄想に、ジェフは以前から辟易していた。だがここで細かい問答は時間の無駄である。気を取り直すように、ジェフはポリポリと頭を掻いた。

ジェフ「あー、じゃあおばさん、エミ……娘さんの体調について相談が」

女は怒鳴った。

「リチャード呼びなさいよ! あんた経由じゃ話なんかしたくない!」

シエンはこつそりと聞こえないような声でジェフに問うた。

シエン「なんかしたの?」

ジェフ「ばかいえ、入団直後の研修を担当しただけだ……」

「ほら! さつさと……、リチャード!」

遅れて部屋に入ってきたリチャードに、エミリーの母親は助けを求めるように駆け寄った。そしてジェフを指差した。

「あいつをエミリーに近づけないでって言ったでしょう!?」

リチャードは宥めるように母親の肩に蒼白い手を置いた。

リチャード「ジェフの話は聞かなくていい、それより、その桃花源人と私の話を聞きなさい」

母親はリチャードに返答することなく、小さなベッドに腰掛け、すやすやと眠りにつく娘の頭を撫でた。

シエンは会釈した。

シエン「どうも、リ・シエンといいます、先日娘さんは人化の術を受けられましたね」

母親は娘に目を落としたまま、何一つ反応を返さなかった。

シエン「そのあとから、娘さんに体調の変化はありませんでしたか」

母親は娘の頭を撫で続けたままだった。

シエン「例えば、すぐ疲れる、元気がない、眠る時間が多くなつた」

娘の頭を撫でる母親の手が止まった。そうしてようやく、シエンと目を合わせた。シエンはニコリと笑った。

シエン「みせてもらっても？」

母親はベッドから立ち上がった。

シエン「ありがとう」

ベッドを覗くと、シエンは少しの間沈黙した。リンリンもシエンの肩からベッドの中を覗き込んだ。

他の人間には見えていないであろうが、エミリーの体の左半分は、半透明の雲のような白く光る煙がまとわりついていて、魄だった。通常は体にぴったりと収まって、外に出てくることなどない代物である。今のこの状態が意味するところは、魄が肉体から剥がれかけているということだった。

シエンは少しホッとした。まだ、完全に剥がれ落ちていなかったからだ。

シェンがホツとしたその様子は直ぐ様リンリンに伝わった。  
リンリン「……シェン、本当に助けたいんだね、この子」

シェン「うん」

リンリンはため息をついた。

リンリン「針ある？ 縫い針」

シェン「ん？」

――間――

リンリン「キラキラキャンディ」！

リンリンの小さな手のひらから飛び出した光の玉は、シェンがぶら下げた縫い針の針穴にピシヤリと命中した。

以前ぐるぐる巻きにされ、身動きが取れなくなったこの光の玉に、ジェフは顔をしかめた。

ジェフ「あの汚えネバネバの糸か」

リンリン「何が汚いだよ！ もっかいぐるぐる巻きにするよっ」

シェン「で、どうすんだ、これ？」

針穴で線香花火のようにプルプルと揺れる光の玉にリンリンは両手を添えた。

リンリン「これね、影を縫ったり、魂を捕まえたりもできるんだよ」

シェンはパチリと指を鳴らした。

シェン「魄も”縫える”！？」

リンリンはシェンに耳打ちした。

リンリン「これなら、エミリーのお母さんもぎゃあぎゃあ言わないよっ」

シェンはニカリと笑った。そうしてエミリーの母親に目を向けた。

直ぐ様母親の心配そうな瞳と重なった。

母親「悪い部分は取り除いたんじゃないの？　これ以上何が必要だっていうのよ？」

シエン「その”悪い部分”がいなくなってしまうって、探すのに娘さんの力が必要なんです」

母親「なによそれ？　悪い部分がいなくなるって意味がわからない」

母親は助けを求めるようにリチャードに視線を向けた。

リチャード「エミリーの吸血鬼部分が逃げ出したのだ、人質をとったり、他人に乗り移ったり、非常に凶悪だ、一刻も早く見つけ出す必要がある」

それはお前から逃れ生きたいがためだろ、シエンはそう口を開きかけたが、一刻を争う今の状況では母親へ影響力のあるリチャードに任せるしかなかった。

シエン（争うのは、”アズ”を見つけてからだ）

”悪い部分”を探すために一度”魄”を剥がす必要があること、妖精の糸で縫うから心配ないことを説明し、さらには本当に問題ないことを約束させられ、ようやく許可が降りた。

それを合図にリンリンは縫い針を手にとった。そしてクルクルといくつも円を描くように細かく回りながらエミリーの爪先から頭为天辺まで、煙のような形をした魄と肉体との”繋ぎ目”に針を通していった。少し遅れてキラキラと金色に輝く光の糸が通されていた。

全て光の糸が通ると、リンリンはシエンにウィンクした。シエンは赤い棍を手にとった。

ジェフ「どうすんだよ」

赤い棍の先端がキラキラと光る縫い目の間を指した。

シエン「こいつで魄と肉体の繋ぎ目を切る。代わりにリンリンの糸が繋ぎ止めてくれるから問題ない」

ジェフはこの光の糸がゴムのような伸縮性を持っていたことを思い出した。

ジェフ「切っても切れねえわけだ、けどその魄とかいうの、その棒つきれでどうやって切るんだよ」

シエン「こいつ、アーティファクトだから、触れないもんが触れたりするんだよ」

そうして棍を一度クルリと回すと、糸と魄の繋ぎ目の間に器用に挿入し、思いきり振り上げた。繋ぎ目は音もなく千切れ、また再生しようとするところを、シエンはすかさず棍で遮った。その繋ぎ目と反対側の繋ぎ目——魄と魂との繋ぎ目に引っ張られるように、魄は本物のエミリーの魂体をのせ、フワフワと動き出した。

リンリン「あとはこいつがアズとかいう子を探してくれる！」  
シエン「よし、追っぞ！」

リチャードは静かに口を開いた。

リチャード「必ず仕留めろ」  
ジェフはサーベルを握りしめた。

25・5・trick beat―びょうきになったかげ5―（後書き）

次回はシェンVSジエフ！？ アズは助かるのか！？

ところが話は以外の方向に……。

次回は次週11/11更新予定です。 あ、ポツキーの日だ！

25・6・trick beat―びょうきになったかげ―（前書き）

アズを探す二つの勢力。

アズを助けたいシェン、アズを殺したいジェフ。

一人の少女をめぐる争いはどのように着地するのか？

「あ、ママだ」

ふわふわと、雲のように宙に浮かぶ煙の絨毯は、触れているのかわからないのか、”乗っている”というよりは、まるで”自分がその一部であるかのように”、すべてのものが下にある、不思議な景色だった。

「こんにちは！ エミリー」

少し下から自分を見上げる男の子。顔を斜めに縦断する大きな傷、赤茶色のツンツン頭にジャラジャラとつけられたピアスやネックレスにブレスレット、ツンとつり上がった目は不良みたいで怖かったが、次に向けられた屈託のない笑顔はどこかホッとさせられるものがあった。

「どうして私の名前を知ってるの？ あなたはだあれ？」

「俺はシェン、今度新しく”ヴァンピール”に……って、あれ？」

エミリーは目を閉じた。眠い。何もかもがどうでもいいくらいに。

パパは役場で働いていて、とっても頭がいいの、わたしの自慢。ママはお料理が上手でとってもやさしくて、大好き。

パパは役人だから頭がよくなくちゃいけなくて、学校ではいつ

も100点取ってたんだって。”もちろん”わたしも頭がよくないといけなかったんだけど、勉強も運動もできなくて、みんなはできるのに、わたしだけできない、わたしは、できない子。

そのせいで、きっとパパは役場のお友だちにイジメられているんだわ。だから悔しくって、ママをイジめるのよ。」「エミリーが勉強できないのはお前のせいだ」って言って、ママを殴ってるところ、見ちゃった。それ以外にも何かいろいろ言っていたと思うけど、わたし、バカだから忘れちゃった。バカだから。だからパパは怒るしママは殴られるの。

わたしが吸血鬼にかまれて、半吸血になって、これからどうするかって話になったときに、パパとママ、いっぱいケンカしてた。

ママはいつも以上にすごく怒って、とっても泣いていたっけ。もし私の半吸血が治れば、パパとママ、また仲直りできるかな。けど、パパがまたママを殴ったらイヤだな。ママが可哀想。学校の子、他の大人、パパ、みんなからいつも私を守ってくれて、きっとママはとっても疲れてる。

でもね、わたし、半吸血になったとき、本当は心の中でやったあ！　って思ったのよ、ママ……。

薄いエメラルド色の翅を羽ばたかせ、リンリンは両手に腰を当てて、エミリーの寝顔にため息をついた。  
リンリン「呑気な子！」

シエン「魂欠損”状態だからな、ダルくてしかたないんだよ……  
魂は欠けた魂を探してまともに機能しないし、魂自体も不揃い。  
アズをエミリーに戻さないと、エミリーはこのまま”魂欠損”障害  
だ、一生。……それは絶対にさせない」

リンリンは頬を膨らませた。

リンリン「もう、そうやってみんなに優しいんだから」

シエン「ん？　なんて？」

リンリン「なんでもなあーい！」

エミリーの魂はフワフワと、窓から”かまくら”を抜け、洞穴へと出ていった。

シエンたちを追うように後ろから着いてきていたジェフは静かに  
サーベルの柄に手をかけた。

シエン「ジェフ、今の俺の話聞いてたっしょ、リチャードの理論  
に人化の道はない、エミリーを助けることを考えよう？」

ジェフは目を合わせなかった。

ジェフ「……もしその通りにして、本当はお前のその話が”間違  
い”だったら、俺は絶対に後悔する」

シエンは首を横に振った。

シエン「……俺は、半吸血の苦しみを身を持って知っているわけ  
じゃないから他人事になっちゃうかもしれないけど、でもさ、それ  
は本当にエミリーを犠牲にしてまでするほどのことか？」

ジェフ「嫌な言い方するなあ」

シエン「事実だよ」

ジェフはサーベルの柄を撫でたり握ったりを繰り返していた。

ジェフ「人間のお前にはわからない、俺からはそれだけだ」

シエン「そっか」

シエンは赤い棍を持つ手を握り締めた。

どんどんと洞穴の奥へと進んで行きしばらくして、外の光も届かない暗がりの壁際、親指と人差し指で作った輪ほどの大きさの穴の前で、エミリーの魄はピタリと止まった。

雲のような、煙の集合体のような魄は、まるで雨雲から突き出る竜巻のように、煙の一部を穴の中に伸ばした。

すると、穴から小さなトカゲが追い出されるように飛び出した。トカゲはシエンの足の間をくぐり、ジェフの脇を通り過ぎた。それを追うように、エミリーの魄から複数の煙の”竜巻”が飛び出し、その小さなトカゲを絡めとった。

”竜巻”はトカゲの身体をすり抜け、網で濾すように、中からエミリーと瓜二つの姿の少女を引きずり出した。

エミリーと瓜二つの少女——アズは自身に巻き付いて離れない”煙”を、引きちぎらんと手足をバタバタと動かし抵抗した。だが、煙の本体からは次々と”竜巻”が伸び、アズを静かに包んでゆく。何が目の前で起こっているのか、まったくその眼には見えやしなかったが、シエンとリンリンの視線から、どこに”いる”かは把握できる——ジェフはサーベルを引き抜き、地面を蹴った。

鼓膜を突き刺すような、鋭い金属音。ギチギチと音を立て、赤い棍とサーベルが拮抗する。

ジェフ「邪魔すんな！」  
シエン「やだねっ！」

シエンとジェフは互いに後ろに飛び、距離を取った。そして直ぐに武器を構えた。シエンの背後にはエミリーの魄と、魄から必死に逃げようと抵抗するアズ。アズは必死に憑代であるトカゲにしがみついていたが、その”動きのおかしなトカゲ”に、ジェフはアズの存在を確信した。憑代であるトカゲを殺せば、取りついているアズを殺すことができる。そして、サーベルの刃に自らの手首を這わせた。静かに、刃に赤黒い鮮血が広がった。

ジェフ「血刀術」

同時にシエンも呪文を唱え始めた。

ジェフ「螺鈿！」

マシクワフ  
シエン「時空扉！」

振り下ろしたサーベルから飛び散った鮮血は無数の針に姿を替え、シエンと、そしてアズに襲いかかった。だが、針はアズの前に現れた黒い煙に音もなく吸収され、シエンに襲いかかった針は赤い棍にすべて叩き落された。

ジェフ「お前魔導師だったのか！」

シエン「まあね」

”魔導師”というこの世の最強の存在に、ジェフは一瞬怖気づいたようだった。シエンはそんなジェフの様子を見逃さず、胸を張り、棍を構え直した。ジェフは片足を後ろに下げた。

ジェフ「魔導師が一般人に、アーティファクトなんて向けていいのかあ？」

シエン「そんな脅しに屈して、エミリーとアズを救えなかったら、俺は絶対後悔する」

先ほどの自分の発言に被せたのか、とジェフは鼻で笑った。

ジェフ「つまんねえよ」

シエンも同じように笑った。

シエン「そりゃ残念」

再び、洞窟内に武器と武器とがぶつかり合う音がこだました。

ジェフ「魔導師だろうがなんだろうが！ 邪魔すんならぶった切る！」半吸血の悲劇”を食い止めるのは俺たち”ヴァンピール”の使命なんだ！」

シェン「さつきも思ったけど、その”半吸血の悲劇”って、お前から”ヴァンピール”が勝手に作り出した”悲劇”じゃんか！」

ジェフの額に青筋が立った。

ジェフ「なんだと！」

シェン「吸血鬼に咬まれたら”半吸血”になる！」半吸血”のまま死んだら吸血鬼になる！ それはこの世の摂理だ！ 吸血鬼は根絶やすんだって、勝手にルール付けてるから道が塞がるんだろ！ 世の中の吸血鬼すべてが無差別に人を襲ってるのか？ 違うだろ！ お前たちのやり方は、単なる差別と迫害だ！」

いよいよサーベルに本気の力が込められたようだった。

ジェフ「じゃあ”半吸血”はどうすりゃいい？ お前がエミリーを助けることで、俺たち”半吸血”を救えるのか？ んなわけねえじゃねえか！ お前みたいなのを無責任つつーんだよ！」

ジェフの怒りを棍越しに感じながら、シェンは続けた。

シェン「吸血鬼との共存ルールは各地域で独自に設けられている！ ルールを破れば司法の裁きが下る！ 何もお前たちが自分の手を汚してまで復讐しなくていいんだよ」

ジェフ「復讐しなくていい？ 何様だよ、奴らのせいで俺たちは半吸血になった！ 半吸血だから、差別され、社会から弾き出された！ このまま大人しく指くわえてろってか」

シェンは首を横に振った。

シェン「戦う相手が間違っているだけだ、お前が戦うべきは吸血

鬼なんかじゃない、お前たちまで差別する、社会なんじゃないか？」  
サーベルからみるみるうちに力が抜けていった。

たしかに、半吸血の人権を主張して、国と争う団体はいくつもある。そういった団体に目もくれなかったのは、ただ単に、自分を”こんな風にした”吸血鬼が憎くて憎くて仕方なかったからだ。ジェフは抛り所としていた壁を粉々に打ち崩されたような喪失感に襲われた。自分たちが信じて今までやってきたことを、否定したくない。シエン「人々がお前たちを差別するのは理由がある、年は取らないし、体力は無限だし、力も強い、どのタイミングで吸血鬼になるかもわかんない、怖いんだ、お前たちのことが。だから人化の術の研究はこれからも続けていく必要があると思うよ。ただ、今回は明らかに間違っていることが明白だ、だから見過ごすわけにはいかない、それだけのことだよ」

ジェフは頭を掻いた。

ジェフ「……ちょっと今、どうすべきか、わかんねえ」

シエンは微笑んだ。

シエン「これから考えていけばいいさ、まずは、エミリーを助けてよう？」

魄に引き込まれんとするのを必死に抵抗していたアズは、目の端に、魄に揺られてスヤスヤと気持ち良さそうに眠っているエミリーの魂体が目に入った。

——この子さえ、いなければ！

アズの手が、エミリーに伸びた、その瞬間だった。

意識が飛ぶかと思う、首筋の、突然の激痛。

直ぐに、全身の力が抜けていくのがアズには分かった。

自分をガツシリと掴む大きな手。自分の背後に音もなく忍び寄った”その男”の常軌を逸した瞳に体は恐怖で凍りつき、そうしてそのまま、視界は白く塗りつぶされた。

——生きたい……

鋭く振るわれた赤い棍を軽々と避け、巨大な蝙蝠の羽を羽ばたかせ、”その男”は洞窟の天井にヒラリと”着地した”。

シェン「アズ！ アズ！ しつかりしろ！」

ぐったりとしたままピクリともしないアズの魂体は、なすがままにエミリーの魄へと取り込まれていった。シェンには”魂の死”が見てとれた。エミリーの”魂欠損障害”が、確実のものとなった。

シェンは何処からともなく現れ、アズに噛みつき、そして今、天井にぶら下がる”その男”を見上げた。洞窟内のこの薄暗さでは、姿ははっきりとは見てとれない。

シェン「……吸血鬼が”こんなところ”に何の用だ」

ジェフ「いや、違え」

ジェフはサーベルをしまった。

ジェフ「あれが”共食い”グレイだよ」



25・6・trick beat―びょうきになったかげ―（後書き）

次回は25・X話最終回です。

次回は11/18更新予定です。

25・7・trick beat―びょうきになったかげろ―（前書き）

ついに”共食い” 그레이に遭遇。だがアズは……そしてエミリーは？

## 25・7・trick beat―びょうきになったかげろ―

ジェフ「あれが、”共食い”グレイだ」

洞穴の天井に立つその男は、どこか理性に欠けた、あきらかに人間ではない、といった印象を与えた。

グレイ「なぜ吸血鬼を助けた」

青い瞳が、シェンに向けられた。

シェン「半吸血の吸血鬼部分が魂体化しただけだ、殺す必要なんか一切無かった！」

青い瞳が三日月のように歪んだ。暗くてその表示は窺えなかったが、どうやら笑っているようだった。

ジェフ「ミスター・グレイ、リチャードの元へ案内しましょう」

天井に張り付く”かまくら”の中に消えてゆくジェフとグレイの背中を見送ると、シェンは直ぐにエミリーの魄の元へと駆け寄った。ブカブカと浮かぶ煙の中には、同じ姿をした二人の少女。エミリーはスヤスヤと穏やかな寝息を立てていた。だが、もう一人、アズのほうはというと、ダラリと力無くただ”煙”に揺られているだけだった。

シェンは黙ったまま顔を歪めた。その顔は、心底悔しそうな、今にも泣き出しそうな顔だった。

リンリン「シェン……」

シェン「助けられなかった……」

アズは魄に戻したため、魄の機能（運動機能）障害にはならないが、魂（精神）が半分死んでいる状態のため、倦怠感、疲れやすさ、無気力な状態は後遺症として残る。

リンリン「…… 그레이に会わないと、すぐどこかに行っちゃうかもよ？」

그레이に会うために、ここまで来た。もちろん、シエンはその目的を忘れてはいなかった。

リンリン「エミリーの魂魄はあたしに任せて、シエンは仕事して」  
シエンは首を振った。

シエン「お母さんとエミリーに謝んなきゃいけない」

リンリンは少しの間沈黙して、微笑んだ。

リンリン「じゃあ、あたし、그레이を引き留めとく」

シエンはキョトンと目の前で羽ばたく小さな相棒を見つめた。リンリンは胸をドンと叩いた。

リンリン「任せて！ シエンの仕事はあたしの仕事だもの！」

シエンはクスリと笑い、拳を差し出した。

シエン「頼むぜ、相棒！」

リンリンも、その小さな拳をコツンとシエンの拳に当て、笑った。

空を飛んでいるような雲柄の壁紙、積み上げられたヌイグルミ、子供用のベッドに体を丸め、こんこんと眠りにつく少女を目の前にすると、魄は当然のように少女の体の中に吸い込まれていった。

その様子を確認と見届けると、シエンは側にいた母親の目の前で深々と頭を下げた。丁度ジェフも部屋へ入ってきたところだった。

シエン「すみません、娘さんの吸血鬼部分を、守ることが出来ま

せんでした」

母親は訳がわからない、とシェンの後頭部を見下ろした。

「どういうこと？ 悪い部分は無くなったってことじゃない、リチャードの人化の術は完成じゃないの」

シェンは頭を垂れたまま首を横に振った。

シェン「後遺症が残ります、魂欠損障害です」

母親は口を覆った。

「そんな、魂欠損障害だなんて……冗談でしょう！？」

週刊紙でたまに取り上げられる程度の珍しい病気、自分たちには無縁の話、別世界、今までそう思っていた。まさか、自分達の現実のものとなるなんて、思ってもみなかった。

シェンは頭を垂れたまま、拳を握り締めた。母親はシェンの胸ぐらを掴んだ。

「嘘だと言いなさい！ 嘘って言いなさいよ！ イヤよ！」

シェンは一切抵抗せず、怒りと不安と恐怖にまみれる母親の目を真っ直ぐ見つめた。ジェフが慌てて割って入った。母親はジェフの胸をドンドンと音になるほど力一杯叩いた。

ジェフ「まず落ち着けって」

母親は泣き叫んだ。

「落ち着けるものですか！ この嘘つき！ 嘘つき共めえ！ 治るって、言っただじゃない！ この子はどうなるのよ！ 馬鹿ああ！」  
シェンが口を開きかけた時だった。

「まま……」

ベッドの上から、蚊の鳴くような、微かな声。

「エミリー！」

母親はベッドに飛び付いた。

エミリー「どうして泣いているの？　またパパにいじめられたの？　わたし、パパに怒ってあげる」

母親は何度か首を横に振り、ベッドに顔を埋めた。

シエンはベッドの前に腰を落とした。

シエン「ママを苛めたのは俺だ、ごめん」

エミリーはぼんやりとする目をシエンに向けた。

エミリー「あなたも泣きそうな顔をしているわ、ママとケンカしたの？　ママ、強いでしょ、パパともケンカしちゃうんだから」

母親はエミリーの頭を優しく何度も撫でた。

「ごめんね、ごめんね、エミリー、ママがこんなところに連れてきたから……ごめんね……」

エミリーは母親を見つめた。

エミリー「どうして？　わたしね、半吸血になって、ここに来られて、やったあつて、思ってたのよ」

「どうして？」

エミリー「だって、丸一日ママとずっと一緒にいられるもの」

「エミリー……」

ベッドに顔を埋め、肩を震わす母の頭を撫でながら、エミリーはゆっくりと体を起こした。

エミリー「それにね、ここに来てよかったってこと、もうひとつあるの」

顔を上げた母の涙を拭いながら、エミリーは気恥ずかしそうに、母から目をそらすように、顔を上げた。丁度その視界に入ったその草臥れた男に、エミリーは急激に身体中から汗が吹き出すように頭が熱くなった。

エミリー「じえ、ジェフさん！」

エミリーは慌てて金の柔らかな髪を撫で付けた。

ジェフ「おいおい……じつとしとけよ、相変わらず落ち着きねえな……」

エミリー「うっ！」

エミリーは全身の力が抜けたようにベッドに倒れ込んだ。

エミリー「なんだか体がすごく疲れた……」

ジェフ「ほれみる、言わんこっちゃ、」

近づきかけたジェフは背筋が凍りついた。

まるで人を殺めんばかりの眼光。母親はジェフを指差し怒鳴り付けた。

「あんたエミリーの視界に入るなって言っただでしょーがっ！」

ジェフ「そ、そこまで言われてねえよ、たしか」

「うるさああい！」

エミリー「ま、ママ、やめてってば」

シェン「ハハ……」

エミリーは自分の頭のすぐ横で、力無く笑う”不良みたいな男の子”に目を向けた。シェンも、エミリーの視線に気がつき顔を向けた。

エミリー「あなた……夢で見た気がする」

シェン「……うん、それ、夢じゃなくてさ、」

エミリー「一生懸命呼んでくれてた」

本当に夢の話か、とシェンは思った。何故ならグレイによりアズが倒れた際、アズを呼びはしたが、エミリーを”一生懸命呼んだ”ということとはしていないからだだった。だが、次のエミリーの言葉に、シェンは一瞬耳を疑った。

エミリー「でもね、わたしの名前、アズじゃなくて、エミリーだよ」

シェンは目をパチクリとさせ、エミリーを見つめた。

エミリー「あなたはとっても悲しそうな顔でわたしを見つめてくれるけど、わたし、楽しいよ、ママもいる、ジェフさんもいる、あと、

何かはわからないけど、無くしたはずのものが戻ってきて、今とつても愛しい気分なの」

シエンは暫くエミリーを見つめ、そしていつものように屈託なく笑った。それから、立ち上がり、懷から名刺を差し出した。

シエン「何かあれば連絡して、支援は惜しまない」

そうして部屋を後にした。その口角は自然と上がっていた。

——人間って、やっぱりすごい——

コーヒークップがソーサーに置かれる音が響いた。

リチャード「いやあ、助かりましたよ、 그레이氏」

応接間のソファに腰かけるリチャードの対面で、ズシリとソファに身を預けるその男は、疲れきって生気のない、脱け殻のようだった。白髪混じりのダークブラウンの髪は伸ばし放題に、顔中に刻まれた深い皺と無数の傷、真っ白の肌に閉じられた瞳、背は高いが細身でピクリとも動かないその姿は、まるで死した樹木——<sup>グリン</sup>最強の7<sup>ドセブン</sup>人の魔導師・”共食い” 그레이  
그레이はゆっくりと、青い瞳を開いた。

그레이「……死体臭い」

リチャード「ハッハッ！　今回は一体どれだけ吸血鬼どもを”減らして”くれたのですかな」

グレイはリチャードに返事を返さず、奥の部屋へと続く扉に目をやった。

グレイ「おいで、お菓子をあげよう」

すると、ドアと床の隙間から、小さな妖精が抜け出てきた。

リチャードは呆れたようにため息をついた。

リチャード「あの桃花源人の……」

リンリン「べ、別におやつが欲しいわけじゃないんだからっ」

グレイは微笑み、ソーサーの端に添えられていたクッキーを差し出した。リンリンは満面の笑みで嬉しそうにクッキーを受け取ったが、直ぐ様、クッキーで嬉しそうにしている自分の顔を隠し、グレイから距離をとった。グレイは自分を警戒しているがクッキーは食べたくて仕方ない様子のリンリンにクスリと笑った。

グレイ「赤い棍をもっていた子のお友達？ ……あのアーティファクトを持っているということは、彼が最近トウジロウ・イチマツの代わりに新しく就任した”スピードのキング”だね……」

リチャード「す、スピードのキング！？ あの男、トランプなのですか！」

グレイは伏し目がちに、静かに立ち上がった。

グレイ「……まだ、捕まるわけにはいかない」

リンリン「ま、待って！ シェンは捕まえに来たんじゃなくって

……」

グレイはリンリンに指差した。

グレイ「じゃあ、そのシェンって子に伝えて……」

シェン「あ、待って、聞く聞く！」

部屋の奥のドアが開き、現れたシェンに青い瞳が向けられた。シ

エンはニヤリと不敵な笑みを浮かべた。

シエン「挨拶遅れたけど、初めまして、 그레이」

그레이は無表情に踵を返した。

シエン「あんたを捕まえに来たんじゃない、協会から”グランドセブン”召集令だ」

그레이はシエンを振り返った。だがそれは、シエンの話を聞くという姿勢ではなかった。그레이の目は冷徹だった。

그레이「トウジロウ・イチマツに伝えとけ」

あまりに藪から棒な発言に、シエンは素っ頓狂な声を上げた。

シエン「へっ!? モモ?」

그레이「マリアに近づいたら殺すとな、それと、僕と話をしたければマリアに会わせると協会に伝える」

シエンはキョトンと、蝙蝠の羽を広げ窓の縁に足をかける 그레이の背中を見つめた。

シエン「マリアって……マスター・マリア!？」

그레이は無言のまま飛び去った。

シエン「あ! ちよっと、」

慌てて窓から頭を出したが既に 그레이の姿は無かった。

シエン「……どうということ?」

ジェフ「あー、お前がトランプのキング様だったとはな、もつと  
厳ついヤツかと思ってたぜ」

”かまくら”から縄梯子で下に降り、洞穴の出入口。腕組みしながら肩で壁にもたれかかり、ジェフは参ったと後頭部を擦った。

シェン「アハハ！ 悪いな、騙してて！ 潜入捜査になんないからな！」

ジェフは呆れたように笑った。

ジェフ「悪気の欠片もねえのかよ、タチが悪い」

そうして、リンリンがべったりと抱きついていてるタヌキの化け物に目をやった。

ジェフ「……そいつも本当にペットにすんのかよ……」

リンリンは自慢げににやりと笑った。

リンリン「いいでしょー？」

シェン「あ！ まだわかんないかね！ 一応宿舎の責任者に聞いてからだよ！」

リンリン「もー！ 変なところで真面目なんだから！」

ジェフはクスリと笑った。

シェン「元いた支部にはまだ戻らないの？」

天井に張り付く”かまくら”を見上げ、ジェフは目を細めた。

ジェフ「……エミリーには悪いことをした、経過をもう少し見守りてえし、あとはこの団体の”在り方”も、代表に相談するつもりだ」

シェンは一瞬、目を見開き、それからいつものように屈託なく笑った。

シェン「お前、素直でいいやつだなー！」

ジェフ「お前はもつと考えて発言したほうがいいぜ」

シェン「おっ！ アドバイスありがとー！」

リンリンは眉間を押さえてため息をついた。

リンリン「K（空気）Y（読めない）って言われてるんだって……」

わかっているのか、いないのか、シェンの笑い声が洞穴内に響いた。そうして笑い声が止むと、ジェフに向け、ニカリと笑った。

シェン「じゃあな！」  
ジェフ「おー」

洞穴を降り、”<sup>マジックワープ</sup>時空扉”を開こうというときに、シェンはたと止まった。

リンリン「なに？ マスター・マリアのところに行くんじゃないの？」

シェンは小声で楽しそうに囁いた。

シェン「やっぱ、人間ってスゴいな！」

リンリンも笑った。

リンリン「あのジェフとかいうやつは散々お前は半吸血じゃないからわかんないって言ってたけど、シェンも人間のことよく分かってないから、そう思うだけよ。人間って、シェンが思ってるより、ずっとずっと、その”スゴい”が当たり前なんだから」

シェンは心底嬉しそうに笑った。

シェン「そっか」

25・7・trick beat―びょうきになったかげ―（後書き）

ヴァンピールは今後どのように変わっていくのでしょうね。そのカギはジエフ。でもそれはまた別のお話。

ところでシェンはまるで人間ではないものいいですね。はたして？そしてグレイとマリアとの関係は！？

次週は久しぶりの本編です。11/25更新予定です。

26・good grace man(前書き)

ひさしぶりの本編は25・X話からの続きです。

## 26・good grace man

低く垂れ込めた黒雲。絶え間なく降り続ける雨。

ヴァルハラ帝国 グラブ・ダブ・ドリッブ魔導師協会管轄地区  
魔導師協会本部”バベルの塔”最上階――

シェン「いよっ！　じっちゃん！」

地面に打ち付ける雨音だけが響く陰鬱な空気を切り裂く明るい声。窓際でロッキングチェアに揺られていた小さな老人は外の景色に向いていた顔を、ノックもなく開いたドアへと向けた。

会長「おお、リーシエル、こんにちは」

シェンは少し気まずそうに、まるで後ろめたいようなことがあるかのように、苦々しく笑った。

シェン「あのさー、宿舎でペット飼っていい？」

会長「自由じゃろう？　それとも儂の許可が必要な”大物”か？」  
シェンは訂正するように慌てて顔の前で手を振った。

シェン「ぜんっぜん危くないし！　寧ろカワイイよっ！」

そうして広げられたドアの、シェンの後ろにいたのは、シェンより少し背の高い、疎らな黒い体毛に、ボテッと出っ張った腹が特徴的な狸の化け物だった。

会長「デカッ」

シェン「ねっ！　か、カワイイでしょ！？」

結局変身能力等、人に迷惑をかける可能性があることと、珍しさから、魔導師養成学校の飼育小屋で飼われることとなった。シエンは「サンキュー！」といったもののように屈託なく笑うと、軽くため息をついた。

シエン「……とまあ、平和な話はこちらまでなんだけどさ」

会長はロッキングチェアの向かいの、アンティークの凝った飾りの椅子にシエンを促した。シエンが腰かけるとリンリンもシエンの頭の上に座った。

シエン「W・B・アライランスの件でトランプが特別体制敷いてるのは知ってるよね！」

会長はパイプをふかした。

会長「お前はたしか、”グランドセブン”召集の任に就いていたな……」

シエン「そ！でさ、」

会長「グレイの件じゃろう」

声色から、何か”いざこざ”があるのだな、ということが感じられた。

会長「何がなんでも、ヤツは必要か？」

シエン「まあ、相手は魔王級の大悪魔だからね、グランドセブン全員でかかってダメなら、人類は諦めるしかない、そんなレベルの話だし、後から”もし全員揃っていれば”なんて、思いたくないっしょ？」

老人の手の中にあるパイプの煙がゆらゆらと、この部屋の中で唯一、時間が止まっていなかったことを示していた。次に時を動かしたのは会長だった。

会長「ヤツは何か条件を出したな？」

シエンは肘掛けに頬杖をついた。

シェン「予想はついてるんじゃないの？」

背もたれに身を預け、会長は再びため息をついた。

会長「マリアについてじゃろう？」

シェン「うん、モモのヤツにマスター・マリアに近づくなとか、話をしたければマスター・マリアに会わせるとか、よくわかんないんだけど、マスターを出さないと話が進まないよ」

少しの沈黙と小さなため息の後、会長は重い口を開いた。

会長「トウジロウ云々はよくわからんが……あまり会わせたくはないのう、マリアには」

シェン「……じゃあ！ モモを使おうか！」

会長はフムと顎を擦った。

会長「どういつ関連かはわからんが、マリア以外に影響力があるのは、トウジロウだけのようじゃな。悪いが、その方向で頼む」

トウジロウ「ハア？ 誰やソイツ」

シェン『だから、”共食い”グレイ！ お前と同じグランドセブンの！』

——パンゲア大陸東海岸中部 ファンディアス国 ファリアスの港街

風魔法の通信技術での、久しぶりの上司からの連絡は、トウジロウにとって全く身に覚えの無い内容だった。

トウジロウ「会ったことないわ」

シエン『よくわかんないけど、肝心のマスター・マリアには会わせられないみたい？ だから、ちよっと手を貸してくれよ』

トウジロウ「無茶言いはんなや」こちとら任務中やねんで」  
そして沈黙。シエンはただ、トウジロウの次の言葉を待った。相変わらずの、他人を馬鹿にしたような物言い。”上”に対しては概ねこのような態度の男だが、ものを考えていないわけではない。一瞬話が途切れた後、答えは直ぐに返ってきた。

トウジロウ「リケはんに交渉するわ、”上司命令で泣く泣く一瞬持ち場離れなあかんわ”て」

シエン『リケにはお前が戻るまで”諜報活動”だけにしといてって伝えておいてね』

トウジロウは軽く鼻で笑った。

トウジロウ「いざとなれば、”アイツ”がおるさかい、大丈夫やろ」

シエン『”アイツ”？』

香る潮風がライトブラウンのクセっ毛を揺らす。石畳の美しいこの港街に、ウランドはまたいつもの如く、このように考えていた。

ウランド（次引越すときは、こういう街もいいな）

仕事で遠征した際には必ずといっていいほど、退職後の婚約者との新生活を妄想するのがクセとなっていた。

長閑さと活気が入り交じる平和な街。表通りを歩いての第一印象だった。

一先ず声をかけてやろうとリケとトウジロウが拠点としている宿を目指し、通りの角を曲がったところだった。

「わっ！」

勢いよく走り込んできたその女は、ガタイのいいウランドの胸にぶつかった拍子に尻餅をついた。”壁”にぶつかり、跳ね返された形となった女の前に、ウランドは慌てて膝をついた。

ウランド「大丈夫ですか」

豹柄のパーカーのジッパーを半分あたりまで閉め、際どいホットパンツに胸を強調する下着のようなトップス、メンズライクなゴツイスニーカー、胸下辺りまでの長く美しいストレートヘアから覗く小さな顔は鋭く気品があり、まるで鶴のようだった。豹柄パーカーから細い腕が伸び、ウランドのワイシャツを握り締めた。

「助けてください！ 追われているんです！」

女の指し示した遙か後方から、数人の男たちが大声をあげて、こちらに向かい、走ってきていた。ウランドは再び、自分にすがり付く女の顔を見た。目に涙をため、不安そうな、恐怖に駆られた表情だが、追われて走って来たにしては、息一つ切れていない。ウランドは明らかな違和感を感じた。

ウランド「……貴女は何故追われているのですか？ 今の情報ではどちらに否があるのかわかりませんので、双方の言い分を聞かないと」

ブチン、と音が聞こえた気がした。女はスクリと立ち上がるとしやがんだままのウランドを見下ろし、指差した。

「使えねーオッサン！」

そう吐き捨てると、女は走り去った。ウランドはキョトンと女の背中を見つめ、それから溜め息をついた。

ウランド（最近の若い子は口が悪いなア……）

女を追ってきていた男たちがウランドと女がぶつかった場所まで追いついた。てっきり、そのまま女を追うためにウランドの目の前を通り過ぎるものと思っていたが、どういいうわけか、ウランドの周りを取り囲み始めた。

ウランド「何か？」

男の一人が自らの襟につけられたバッヂを示した。

「警察に決まってんだろ？」

ウランド「はあ？」

まだ状況が飲み込めないウランドに、警官は呆れたとため息をついた。

「惚けてんじゃねえよ」

そうして指し示されたのはウランドのワイシャツのポケット。ウランドが中を漁ると出てきたのは小さな麻袋。その中には小さなラムネ菓子。

「多いんだよな最近、”免罪符”の運び屋ってやつが。……魔薬所持の現行犯だ、署まで来てもらおうか」

ウランドは女の走り去った方角へ目を向け、ため息をついた。

ウランド「……やられた」

警察署の取調室。

経緯を話す前に、まずは身分を明かした途端、警官たちの態度は胡麻を揺る方向へと一変した。その後にした話した経緯の説明は取って付けたオマケのようだった。

「いやゝしかし、まさか捜査中のハートのエース様だったとは！  
本当に、誠に申し訳ない！」

一体何度同じ話を繰り返すつもりだろうか。いくら魔導師とはいえ、魔薬所持の現行犯だ。まるで形骸化している警察の権威に、ウランドは少し残念に思った。

ウランド「……構いません、むしろ丁度いい。」黒い三日月”のリーダー、ロロ・ウーの逮捕を目的に参りました。ただしアジトには多くの部下たちがいるようなので、警察のみなさんの協力をお願いしたいのですが」

にこやかだった警官の顔が一瞬にして凍りついた。

「ロロ・ウーを、ですか……」

渋る様子の警官に、ウランドは何かあるのかと首を傾げた。

「今のこの街の平和は、ロロ・ウーによって成り立っています」  
テーブルに頬杖をつき、ウランドは興味深そうに警官を見つめた。  
ウランド「ほう？」

警官はウランドと目を合わせようとはせず、視線をテーブルの中央あたりに落とした。

「”黒い三日月”が来るまで、この街は犯罪組織の温床でした」  
ウランド「……今は違うと？」

警官は首を振った。

「違いはありません、ただ、多くの魔薬組織が淘汰され、”黒い三日月”の配下につくことで統率され、そして巨大になった組織を恐れて、他の”畑”の犯罪者たちも滅多な行動は取れなくなりました。以前に比べたら平和になった……」と言うとおかしな話だとは思いいなくなるでしょうが……その、」

あることを進言したいが、なかなか切り出せないでいる警官の言葉をウランドはただ待った。ウランドとしてはのんきに待っていたつもりだったが、組んだ足をブラブラとさせ、キョロキョロと落着きの無いウランドの”いつもの様子”に、警官は急かされていると受け取ったようだった。どうにでもなれ、と遂に口を開いた。

「え、S級の賞金首だからと言って、有無を言わず捕まえるのは、はたして正しいのでしょうか」

キョロキョロと辺りを見回していたウランドは視線を警官に戻した。目があった警官はあわてふためいた。

「そ！ その！ 勿論正しいのでしょうけど、あの……」

出されたコーヒーを一口含み、ウランドは再び警官を見た。

ウランド「ロロ・ウーのこの街での悪事はこちらでも調査済みです。誘拐して魔薬漬けにし、強制的に顧客を作り、売り上げをあげています。それは町民の一部でしょうが、確実に街を蝕んでいます。貴方の言うその平和は本物だと、胸を張って言えますか？ 私には単にあなた方の職務怠慢にしか聞こえません」

警官は俯いた。テーブルの下その拳は、膝の上で硬く握られていた。

ウランド「これまで対抗する力が無かったのであれば、魔導師が介入する今この時は、絶好の機会だとは思いませんか」

俯いたままの警官はさらに下を向き、最早その表情は窺えなかった。

「お…… 思いません……」

警官は、俯いたままだった。ウランドは溜め息をついて立ち上がり、免罪符の入った小袋を手にとった。

ウランド「これは捜査に使用させていただきます、時間も限られておりますので、失礼します」

ドアの閉じる音が室内に響いた。警官は見送ることなく制帽をただ見つめていた。

「ハートのエース、あんた、わかつちやいないよ……」

警察署を出て暫く歩くと、行く手を遮るようにウランドの目の前に先ほどぶつかった女がひよっこりと姿を現した。

「オットメご苦労さん！」

ウランド「…… 何か？」

女は手のひらを差し出した。

「何って、さっきあんたの胸ポケに仕込んだやつだよ」

ウランドは無表情に平然と答えた。

ウランド「ああ、あれなら警察の人にお渡ししましたよ」

女はウランドの胸ぐらを掴んだ。

「ハア！？ バツカじゃないの！？ ちゃんと隠しとけよ！」

ウランド「それはこちらのセリフです、警官はすぐに胸ポケットにあることを見抜きましたよ。あのままあなたが警察に捕まっても無所持を主張でき、私が捕まっても所持していることに気づかないまま釈放されるとお考えだったようですが、ツメが甘いですね」

女は苦虫を噛んだような渋い表情を浮かべた。ウランドはクスリ

と笑った。

ウランド「……と、見せかけて、ホラ」

ワイシャツの胸ポケットから取り出されたのは、あの”免罪符”入りの小袋だった。

ウランド「ご所望のものです」

女は顔をしかめ、ウランドを睨み付けた。

「何、嘘だったの？」

女のその質問には答えず、ウランドは続けた。

ウランド「これはどちらで入手されたのですか」

「……そんなこと聞いてどうする？ サツにタレ込んで儲けようってか？」

違いますとウランドは笑った。

ウランド「いえいえ、ぜひ私も手に入れたと思いますして」

あきらかに真面目そうで、どこからどう見ても堅気にしか見えな  
いクロブチメガネのこの冴えない男の、思いもよらぬ回答に、女は  
キョトンと固まった。ウランドは微笑んだ。

ウランド「教えていただけますか」

「知らない」

ウランド「ではこちらと貴女は警察に突き出しますかね」

ウランドの回答にムツとしたのか女の口調は更に乱暴になった。

「……よその町だよ！ こっから結構遠いけど！」

ウランドは手元の小袋に目をやった。

ウランド「では、こちらをいただきます。あ、勿論代金は支払いますよ（経費で）」

それまで怒りに猛っていた女の表情は一瞬にして曇った。

「……………それは売り物じゃない、悪いけどあんたにも警察にも渡す訳にはいかないんだ」

てっきりただの密売人だと思っていた女の想定外の回答に、今度はウランドがキョトンとした。女は明らかに魔薬の常習者には見え

ない。それとも単なる運び屋で、依頼主に届ける必要があるということか。それならそれで、依頼主から買い上げればいいと考えたが、先ずは話を聞くことにした。

ウランド「事情如何に寄ってはお譲りしますけど」

「なんでもうお前のものになってんだよ!」

――間――

女の先導で場所を移したのはハンターズの裏ギルド。併設のバーで席について、女はヤレヤレと溜め息をついた。

「やっぱココはいいねえ、昼間っから酒が飲める」

ウランド「……どうでもいいですけど、どうして貴女のような若い女性がこんな所をご存知なんですか……?」

女はウランドの質問には答えず、グラスに赤ワインを並々と注ぎ、それを一気に飲み干した。

ウランド「……一応伺いますけど、成人されていますよね……?」

女は迷惑そうに顔をしかめた。

「ぐだぐだうっせーオッサンだなア、」

女はパーカーのジッパーをゆっくりと下ろしウインクしてみせた。

「なんなら、確かめてみる?」

一瞬その場に間が空いた。

ウランド「……子どもに興味はありません、」

「んだとコラア！」

女はイライラしながらワインを煽った。

（このオッサン、絶っつ対！ オトしてやる！）

ウランドはコーヒーを一口含み、軽いため息をつく、腕と足を組み、背もたれに寄りかかった。

ウランド「で？」

女は舌打ちした。

「アタシから話すのかよ」

ウランドは微笑んだ。

ウランド「ええ、もちろんです」

女はガシガシと頭を掻き、椅子に片足を乗せると、グラスにボトルを傾けた。かきむしってくしゃくしゃになった長い髪は、重力に逆らうことなく直ぐ様ツルンと柳のように垂れた。なかなか話し出そうとしない女に、ウランドは助け船を出してやるつもりで話を切り出した。

ウランド「売ることができないとおっしゃっているのは、すでにどなたかに売約済みだからということですか」

女は迷惑そうに溜め息をついてグラスを揺らした。

「いいや、人を探してる。」 免罪符<sup>ソイッ</sup>を使つて誘き出せるんじゃないかと思つてね」

ウランド「おや、奇遇ですね、丁度私も探し人に会うのに」 免罪符<sup>レ</sup>が利用出来るのではと考えておりまして」

二人は互いに探り合うように目を合わせて沈黙した。先に口を開いたのは女だった。その口から出てきたのは思いがけない名前だった。

「免罪符で探し人つてのは、……ギルティンかい？」  
ウランド「ご存知なのですか？」

女は椅子の上で片膝を抱えながら平然と答えた。

「ああ、知ってるよ。でもあたしが探してるのはソイツじゃない、ロロ・ウーって男だ」

ウランドは顎をさすりながらニヤリと笑った。

ウランド「私が捜しているのもロロ・ウーです。彼を、」

『捕まえに』

二人の声が重なった。女は興味深げにウランドの頭の先からゆっくりと見回した。

「ロロ・ウーの賞金目当てかい？」

ウランドはコーヒを一口含み、カップをソーサーにゆっくりと置いた。そうしてテーブルの上で両手を組んだ。

ウランド「あなたもですか」

女は乾いた笑みを浮かべた。

「まあ、そんなようなものさ」

ウランド「……目的が一致していて、お互いスタートラインは同じ位置のようですね。ここは一つ、協力しませんか？ ついでにギルティン氏の話も興味深い」

女はニヤリと笑い、ワインを煽った。

「ギルティンはヤメときな、アイツはやバい。協力の話は受けたげる、オッサン情報持ってそうだし」

どうか、と言いながら微笑み、ウランドは右手を差し出した。

ウランド「ウランドといいます」

女も握手に応じた。

フリー「フリーだよ、よろしくなオッサン」

ウランドは一瞬キョトンとした。

ウランド「<sup>だれ</sup>who」？ 珍しいお名前ですね」

フリーは腹を抱えて笑った。

フリー「あんたのお国ではそんな意味があんの？ いいね、」その

「うちわかるよ」

建物と建物の隙間、壁と壁の谷底のような薄暗い路地裏。お天道様からその姿を隠すように、そこには先ほど”ハートのエース”を誤って拘束した警官と、すぐ隣には派手な格好の若い男。若者はクチャクチャとガムを噛みながらポケットに両手をつ込み、ダルそうに壁に寄り掛かった。

警官は恐る恐る口を開いた。

「ぜひ、う、ウーさんにお伝えください」

若者はさっさとしろと言わんばかりにわざとらしく欠伸びしてみせた。

「ランプがウーさんの逮捕に踏み切ったみたいです。すでに街に入って、ウーさんを捜しています」

若者は地面にガムを捨て、警官を睨み付けた。

「だから気をつけろって？ オッサン馬鹿じゃねえの？」

そうして警官の肩を馴れ馴れしく叩いた。

「わざわざ”黒い三日月”おれらが出なくても、警察そっちでなんとかやってくれていいんだぜ」

フィード「あーっーいー」

エオル「無いから、涼しいとこなんて」

パンゲア大陸南部。太陽の光の照り返しがまぶしい真つ白な砂浜。寄せては返すエメラルド色の波。一体何度この光景を見ただろうか、この美しいビーチにも、いつまでも続く白砂の大地にも、代わり映えの無い疎らなヤシの木たちにも、燦々と照りつける太陽と湿度のある蒸し暑さも相まって、フィードはいい加減飽き飽きとしていた。北に進んでいれば陸続きのはずだが、なぜだか暫く進めど海辺に出る。エオルに背負われ、エオルの長いサラサラの金髪を編んで遊んでいたエリスは、ふと思いついたようにポツリと言った。

エリス「そっういや聞いたことあるよ、迷いの森ならぬ」迷いの浜辺”。ツーレ半島の伝説だと”

エオルは思わず背中の上の老婆を見上げた。エリスのシワシワの手からエオルの金の髪はスルリとすり抜け、綺麗に編まれた三つ編みはパラパラとほどけた。

エオル「ま、迷いの浜辺！？ なんなんですか、それ」

エリス「北に行こうが南に行こうが、西も東も、何処に行っても結局ビーチに出る、いわゆる魔のビーチさ」

フィード「いわゆるって、聞いたことねえよ」

よしの「困りましたね」

フィードは横目でよしのの手元を見た。ちいさな手のひらの中にはたくさんの貝殻。

フィード「ちゃっかり楽しんでるんじゃないか」

見せてみ、と覗いたよしのの手のひらの貝殻たち。その内の一つに目が止まると、フィードはたと固まった。

エオル「ん？ なに？」

エオルも貝殻の山を覗き込んだが、慌てて、フィードが見つめたまま固まっている、よしのの”貝殻”をつまみ上げた。そうしてにこりとよしのに愛想笑いをした。

エオル「こ、これだけ戻しとこっか」

よしのはよくわからず首を傾げたが、そのまま頷いた。

エオルがつまみ上げたそれは、人骨だった。それは二人の魔導師に”いよいよこの状況はまずいのではないか”という意識を芽生えさせた。状況の深刻さを、ようやく理解した。

エオル「まず、本当に同じところをグルグル回っているだけなのか、確認しようか」

エリス「目印がいるね」

フィードは暑苦しい黒のコートの袖を捲った。

フィード「ようし、俺様が魔法で」

エオル「めーだーっでーしょ！」

よしの「ではこれを」

そう言つと、よしのはガラガラと貝殻を地面に置いた。

エオル「あ、いいの？」

よしのはにっこりと笑った。

よしの「また海に来たときに、拾います」

フィードはニヤリと笑った。

フィード「安心しな、何べんでも連れてってやるよ」

一行がその場を去って少しすると、よしのの置いた貝殻の山に人影がかかった。

褐色の艶やかな肌に、パーマがかかった黒く美しいロングヘア。翠

の瞳は貝殻の山を捉えるのではなく、その場に残された足跡に向いていた。足跡のサイズをメジャーで測り確信を得たのか、女は満足げに腕を組んだ。

（シャンドラ・スウェフィールド、エオル・ラーセン、そしてジパング人、間違いなくW・B・アライランスね）

そうして汗に濡れる黒髪をかきあげた女――トランプ クラブ軍中佐 グウエン・スレッジは一行が去った方角へ視線を向けクスリと笑った。

グウエン（どうするつもりかしら？）

ザクザクと砂を踏みしめ、一行はひたすら”北に向けて”歩いていくはずだった。だが暫く歩くとまたもや浜辺に出てしまう。コンパスは北に真つ直ぐ向いていた。エオルは周囲を見渡した。

エオル「さっきの貝殻の山は……見当たらないね？」

フィールド「そのコンパス壊れてんじゃねえの」

エオル「いや、そうは思えな、」

再び覗き込んだコンパスの針は、徐々に向きを変えていた。

フィールド「ホレ見ろ」

エオル「いや、違う」

エオルは空を見上げた。方角の参考にしていた太陽の位置も、目に見えて移動しつつある。

ピシヤリと自らの頬を叩き、フィールドは顔をしかめた。

フィールド「幻覚かなんかか？」

エオル「わかんない、なんだろう？」

エオルの背に負われていたエリスがポツリと言った。

エリス「高いところから見てみたらどうだい」

高いところなんていくらでもあるんだし、と指し示したのは空高く聳えるヤシの木。フィールドは靴を脱ぎ、慣れた様子で軽々と一番上まで登っていった。エリスはその様子を見、笑った。

エリス「サルだね、ありゃあ」

エオル「フィードー！ 何か見えるー？」

ヤシの木の天辺から見える景色は、なんの変哲もない、青い空と白い雲、深緑のヤシの木の頭と真っ白の砂の大地。ただその光景が続いている。フィードはすぐさま違和感を感じた。

フィード「……山がねえ」

見渡す限り同じ景色、これだけ平坦続きの土地であれば、ここからだってエリスの妹のいた山が見えてもいいはず、一行が歩いてきた道のりはそのような距離のはずであった。

フィード「……もつと上から見てえ」

ヤシの木の頭で返答の無いままの相棒の様子に、エオルは何かに気づき、反射的によしのの手を引いて距離を取った。エオルの背中の揺れで喋りづらそうにエリスは尋ねた。

エリス「一体何だってんだい！？」

エオル「よくわかりませんが、魔法を使う気みたいです」

エリス「おほっ！」

魔導師だということはわかっていたが、実際に使うところはまだ見たことはない、エリスはエオルの背中にいることを忘れ、フィードを振り返った。

エオル「エーリースーさんっ！ 大人しくしてて」

エリス「おっ！ 使うぞっ！」

エオルとよしのは同時に耳を塞ぎ、身を屈めた。

大地と空気を揺らす轟音。遅れて爆風とともに煽られ、ビシバシと細かな砂が体に叩きつける。暫くして”砂が止む”と、エオルの咄嗟の判断でエオルに覆い被さられ、爆”砂”を免れたエリスは、エオルを押し退けむくりと体を起こし、意気揚々とフィードのいた場所を見た。カラスのような黒ずくめは爆風を利用し、その遙か高くまで飛び上がっていることを直ぐ様発見できた。

飛び上がった数秒間で辺りを見回し、何かに気付いた様子で、フィードは地面に着地した。着地点には既にエオルもよしのもエリスも駆け寄ってきていた。直ぐ様エオルの拳がフィードの頭をグリと抉った。

フィード「いつててて！」

エオル「いきなり爆炎魔法とか、危ないでしょうがっ！」

わかったわかったと、フィードは慌ててエオルと距離を取った。そして地面を指差した。フィードの魔法によって抉られた砂浜の底には幾つもの細かい溝で模様付けられた真っ黒いプレートのようなもの。よしのは首をかしげた。

よしの「何ですか？」

フィードはお手上げだと肩を竦めた。

フィード「ここはでっけえ」亀の甲羅の上”だ、ついでに周りは水平線、陸なんざ何処にも続いてねえ」

魔の浜辺の正体、それはたまたま”接岸”していた巨大亀の甲羅の上。運悪く、一行は甲羅の上に足を踏み入れてしまったようだ。

エオルは一瞬息をするのも忘れるくらい固まった。そうして気づいたようにみるみる顔を真っ青にした。

エオル「え？ ごめん、もう一度」

フィードはさも面倒臭そうに耳をほじった。

フィード「何べん聞こうが同じだよ、俺様たちやあ海のと真ん中だ」

潮風香る石畳。”情報通り”豊かな街だ、盗みにはもってこいの。

——ファリアスの港町。

ミルクティー色のベリーショートに、同じ色の猫の尻尾、平たい

胸を包む星柄の水着にデニムのショートパンツ、それだけ見ればただの活発そうな獣人の若い娘だが、腰から下げた少々大振りの短剣でただの若い娘でないことが見てとれた――”どら猫”ラプリー。金持ちばかりを狙う一匹狼のやり手新人盗賊、それが今の裏社会のラプリーに対する評価であった。

地下にある裏ギルドに続く薄暗い階段は、人が並んで通るには少し窮屈に感じる幅だった。向かいから階段を上がってくるカップルに、ラプリーは顔をしかめた。インテリ風のクロブチメガネの優男と派手な豹柄のパーカーのギャル、男の左手にはキラリと光る指輪、ラプリーは心の中で舌打ちした。

ラプリー（不倫の密会に裏ギルドなんて使っちゃって！ 関係も薄汚ければデート場所のチョイスも薄汚い！）

ラプリーの冷たい眼差しと男視線がかち合った。男はガタイのいい自分の体がラプリーを通りづらくしたと思ったらしい。ニコリと柔らかな微笑みを向けると立ち止まって壁際に避けた。

ウランド「失礼」

ラプリーは会釈すらすることなくツカツカとカップルの真横を通り過ぎた。

豹柄のパーカーのフードを被り、女はラプリーの背中を見下ろした。

フー「こんなところ出入りしてるだけあって、礼儀のなつてねえ女だな」

ウランド「……それはご自身のことですか？」

フー「んだとコラ！」

裏ギルドに着くと、併設のバーのカウンターでホットミルクを注文し、バーテンダーが準備をしている間に、大量の手配書が何層にも重ね貼られた掲示板の前に立った。裏ギルドに着くと、いつもの

流れだった。そうして、決まって探す三枚の手配書。

ラプリー（フィードさんとエオルさんのはある……ヘズのは、）  
結果は何処の街でも同じだった。ミルクの香りに呼ばれ、ラプリーはカウンターへ向かった。

いつもであればそのまま街の金持ちに関する情報を”買いに動く”のだが、どういうわけか、あのカップルの様子が頭から離れない。特に、あの男に向けられた笑顔。

ラプリー（尻尾、見えなかったんだろうな、獣人だってわかっていたら、あんな笑顔、向けるはずなんてないもの）

自分にも、いつか獣人とわかっててもあんな笑顔を向けてくれる人が現れるのだろうか？ 一瞬ヤクトミの顔が過ったが、直ぐ様ラプリーは首を振った。

ラプリー（ありえない、あんなガキ、魔導師だけど、結局獣人だし）

どこかで獣人同士では”逃げ”だという気持ちがあった。そう思い、溜め息を付きかけたときだった。わざとらしい大きな音をたてて、ミルクの入ったマグカップの直ぐ横に叩くように置かれたピアジョッキ。持ち主に目を向けると、こちらに体を向け、ニヤニヤと下品な笑いを浮かべながらこちらを見る、見るからにガラの悪い男が視界に入った。さらにその後ろには、同じくガラの悪い数人の男。ラプリーはマグカップに視線を戻し、そのまま無視を決め込むことにした。だが男たちはそれを許さなかった。

「獣人がこんな密室に何の用だ、病原菌でもばら蒔きに來たっつか？」

ラプリーはミルクを啜って、退屈そうに頼杖をついた。その態度が余計に男たちをイラつかせたようだ。ラプリーの肩を掴み、無理矢理自分達の方へ向けさせた。

ラプリー「ちよっと！ 触らないでよ！」 無関心”がルールでしょ！？」

「病原菌ばら蒔かれてたら、そういうわけにはいかねえだろう？」  
そうして間髪入れずにゴツゴツとした大きな拳が目の端から飛び込んだ。ラプリーはあまりの痛みに呻き声を上げながら頬を被い、踞った。

更に男たちはラプリーの髪を掴み、薄暗いバーの角に引き摺っていった。

「ギャハハ！ 病原菌は死ね死ね！ 死滅しろ」

「人間様が滅菌してやるよ」

「うわあ！ 尻尾だ！ 本当に生えてやがる！ 気持ち悪い！」  
暴行はひたすら続いた。その間、店員も他の客も何事も起こっていないかのように過ごしていた。ルールは一つ、”無関心”。裏ギルドでの、いや、裏社会で生き抜くための、決まり事。ああ、やっぱりこんなところで荒稼ぎしているようなやつらだ、薄汚い、こんなやつらに、助けを求めようなどという気は完全に消え失せた。ヘズの教えから、まだ一度も人に向けたことの無かった短剣に手をかけた。

その時だった。階段から、カツカツと人が降りてくる音。

「なあんか、うるさあーい」

子どもに話しかけるようなわざとらしい声色。店員も、店の客も一斉に下を向いた。ラプリーに暴行を加えていた男たちは、声の方に振り向くと、息をするのも忘れていないかと思うほど石のように固まった。

そんな男たちにゆつくりと歩み寄るのは、サイズを間違っているのではないかと思うくらいのだボダボのワークパンツを腰まで下げ、同じくだボダボのＴシャツ、いくつものネックレスを首から下げ、斜めに被ったキャップにジャラジャラのピアス、陶器のような浅黒い肌に光る鼻ピアス、慢性的な寝不足であろう真っ黒なクマに空のような真っ青な瞳。その男はニコリと微笑みながら、首を傾けた。

「なあーにしてえんのっ？」

暴行を加えていた男たちはガタガタと震えだした。言い訳をしようにも、声が出ないほどに。

他の客がテーブルから、まるでひまわりのように垂直に起立し、声を張り上げた。

「この街の滅菌だそうです！ その女、獣人です！」

青い目の男はラプリイを見下ろした。そうして次に暴行を加えていた男たちに目を向けニコリと笑った。

「この街のために滅菌？ ありがと。でも、獣人だからっていうのはちょっと”ちがう”」

男たちのうちの一人が声を絞り出した。その声は恐怖のあまり掠れていた。

「す、すみませんでした……」

「はあゝい、じゃあー、もう、行っていいよ」

その言葉に石化を解かれたように、男たちは一目散に逃げ出した。その姿は”尻尾をまいて”という表現がよく似合っていた。

青い目の男はラプリイの前に腰を下ろし、眉を寄せた。

「平気？ たいへんだったね？」

ラプリイは目を細め、冷たく沈んだ瞳を男に向けた。

ラプリイ「助けたつもり？ あんたもどうせ、獣人なんかって心の底で思ってるクセに」

男はアハハと子どものような笑顔を向けた。そして、埃にまみれたラプリイの頭をポンポンと撫でた。

「そーんなこーとなあいいよっ」

この、腹から全く出ていない力の無い声、子どもに話しかけるような猫なで声を、ラプリーは始終気に入らなかったが、次の一言でそんな気持ちは瞬時に払拭された。

「だって、フツーにかわいいじゃん？」

全身が勝手に跳び跳ねるかと思った。体をかけ巡る強い衝撃。ラプリーは言葉が出てこなかった。

男は膝の上に頬杖をついて、続けた。

「怪我痛そうだね、手当てするよ、うちおいで？」

そう言っ、ラプリーの手を引く男の大きな手は優しくかった。

ラプリー「あの、名前……」

男は笑った。

「おれ？　　口口だよ」

ラプリー「あ、あたしラプリー」

口口「そっか、名前もかわいい」

前を歩く口口の表情は窺えなかったが、きっと先ほどのように微笑んでいるに違いない、なぜだか不思議とラプリーはそう思えた。

口口が去った裏ギルドは一瞬にして張りつめていた空気が安堵へと変わった。

常連客の一人が呟いた。

「……」　「どら猫」も「イカれ帽子屋」の餌食か……」

## 26・good grace man(後書き)

さてさて、グレイと交渉するためにスペード軍の2トップであるシエンとトウジロウが、

”免罪符” 捜査のためにクラブのエース・リケが、

口口捜査のためにハートのエース・ウランドと新キャラ・フーが、

W・B・アライランス一行は巨大亀の背に乗り海の真上、

それを監視しつづけるグウエン、

W・B・アライランスを追うラプリイは口口と出会い……

と何やら複雑になってきましたが、はたしてキーマンであるギルティンはどう動くのか……？

次回はまたまた12/2に小話シリーズ26・xです。閑話休題、まる一年出ていないあの一行のお話。ちなみに本編は12月末あたり更新予定です。

26・1・Hope Delivery? (前書き)

26・xシリーズは約1年ぶりのあの一行！  
なんの話だったわけ？という方は18話をご覧ください。

## 26・1・Hope Delivery?

「いやはや、酷い湿気ですなあ」

「大丈夫？」

色とりどりの昆虫や鳥が行き交う熱帯雨林。

むせ返るような緑の湿気。湿った地面を這う蔓や根に足をとられながら、馬を引く中年の男女、13、14歳くらいの少年、黒のキヤソックに制帽を目深にかぶった仮面の男。少年は、前を歩く黒づくめの仮面の男が引く馬にまたがる、頭の前からすっぽりと姿を隠すようにマントを被る”死体”に目を向けた。

”死体”はいつものように陽気に笑っていたが、声色や息づかいから身体的に辛いであろうことが伝わってきた。ただでさえ腐敗の進んでいる体に、このジメジメとした蒸し暑さだ。心なしか、向かい風に流れてくる死臭がきつい。

少年の後ろを歩く父親が手綱を引く馬にまたがる母親は、明るい声で提案した。

「次の町、遊園地があるって！」

少年は目を輝かせた。

「ゆうえんち！」

父親は呆れたと溜め息をついた。

「観光旅行じゃないんだぞ」

少年は口を尖らせた。

「いいじゃん、ちよつとした息抜きくらい、ねえ！ ハイジも遊びたいよね！」

先頭を歩く仮面の男は自身が引く馬上の”死体”を見上げた。だが、見上げたまま、何も言わない。見つめられた当の死体は、この仮面の男とのコミュニケーションには毎回悩まされていた。一言も

発しないので、何を伝えたいかわからないのである。こんなときは決まって、”通訳”である少年に助けを求めるのだった。

「……ハニアくん、ハイジさんはなんと言いたいのかなあ？」

ハニアと呼ばれた少年は「そっか」とぼつの悪そうに”死体”を見上げた。

「ごめん、おじさんのことちゃんと考えてなかったよ、息抜きよ、この蒸し暑さから早く抜け出したいよね、やっぱり先に進もう」

”死体”は成る程と、歩みを進める仮面の男の背中を見つめた。そして、いつものように陽気に笑った。

「はっはっは！ 私も息抜きがしたいですぞ！ あ、私の場合は

”生き抜き”か！ ハッハッハ！」

「おじさん、おもしろくない」

それから一日半、蔓や草木をかき分け、ようやく辿り着いたその町では、さすがに遊園地があるだけあって人の手が加えられた通りや、市場など、”久しぶりに”多くの人が行き交っている光景を目にすることができた。特に親子連れの旅行者が目につく。

ボロの安宿でハニア親子と用心棒ハイジ、そして”死体”の五人分ベッドを確保した。さっそく町に繰り出そうというときに、宿の店主から呼び止められ、こう言われた。

「あんた、クサすぎだよ、戻ってくるまでに、シャワー浴びてもらわないと、泊められないからね」

死体は申し訳なさそうにフードを目深に被り直した。

「すみません」

シャワーなど、浴びようものなら、腐りきった肉などあつという間に流されてしまう。物理的に、店主の要求は不可能だった。

街を歩きながら、母親はある店の前で立ち止まった。

「魔法圈の人たちは”香水”というものをつけて、体をいい香りにするそうよ」

そう言つて、旅の財布を握る父親と母親は香水屋のショーウィンドウを覗き込んだ。ほどなくして父親は伸び放題の髭を擦りながら、渋い顔をした。

「けっこうするな……」

死体は慌てた。

「いいですよ！ いざとなれば表で寝ます！ その、部屋の中より風通しがよいでしょうから、寧ろそのほうが良いですわ！ ハッハッハ！」

ハニアは眉間にシワを寄せて、腕を組んだ。

「なんとかなんないかなあ」

そうして見上げた仮面の男は全く興味がないと、完全に余所見をしていた。

「ハイジ」

仮面の男は名を呼ばれ、頬を膨らませて自分を見上げる少年に顔を向けた。次に自分たちが立っている店の看板を見上げた。

少年はため息をついた。

「ま、ハイジに言つてもしょうがないよね、いいよ、もう」

そうしてたどり着いた遊園地。入場チケット売り場の前で父親は再び渋い顔を浮かべた。

「けっこうするな……」

もともと信仰中心の生活で、このような娯楽になど手を出したことはない。というより、娯楽のあるような大きな町になど来たことがなく、今回のこの巡礼の旅でもほとんどが戸惑うことばかりで、そもそも遊園地というものも噂に聞いていただけであり、ましてや入場料の相場など知りもしなかった。慣れない旅の疲れから、かねてより耳にしていた娯楽というものでリフレッシュできればと考えていたが、どうやらそのような考えはこの貧乏旅では甘かったようだ。

母親はニコリと笑った。

「だったら香水を買ったほうが、いいわね」

死体は再び慌てた。

「いえいえ、みなさんで遊園地に行きましょう！ 私も遊園地というところに行ったことがないので、行ってみたいですし！」

自分一人のために金を使うのであれば、全員のために使ってほしかった。

その時だった。遊園地の中から、門を抜け、制服姿の従業員とおぼしき女が駆け寄って来た。

「ダメですって！ ”そのまま出てきちゃ”！ ホラッ」

死体は辺りをキョロキョロと見渡し、自分に話しかけているのか？ と自らを指差した。

「当たり前ですっ！」

従業員の女は死体の手を引き、遊園地の中に戻っていった。

きょとんと従業員と死体の背中を眺め、ハニアはようやく気がついたように叫んだ。

「おじさんが誘拐された！」

慌てて入場券を買い、園内へと入ったが、大勢の親子連れで溢れかえるそこで、最早従業員と死体の姿をとらえることは不可能だっ

た。

「ど、どうしょ、」

困ったと見上げた先の仮面の男は、目の前でヒラヒラと舞っている蝶を見つめていた。今にも追いかけて、それこそフラフラとどこかへ行ってしまうそうだった。少年はため息をついて、仮面の男の袖を掴まえた。父親と母親は互いを見合わせ、頷いた。

「とにかく、探そう」

そんな彼らの隣を無精髭の小柄な男が横切った。一人で遊園地へと入場するその男は、ズボンのポケットの中で小さなダガーを握っていた。

## 26・1・Hope Delivery? (後書き)

遊園地にナイフを持った男なんて。平穩にいかないのがこの小説です。

次回は12/9更新予定です。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6210g/>

---

W・B・Arriance

2011年12月2日19時54分発行